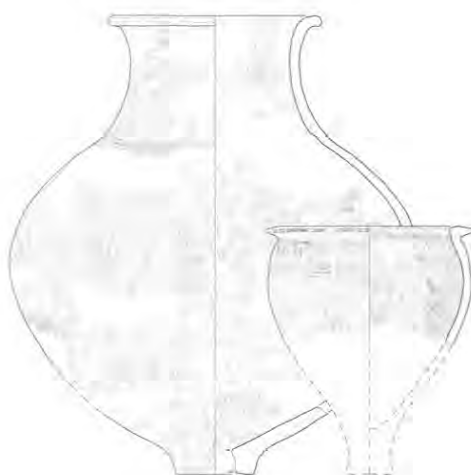


は ん ざ ん ぼ る
平安山原B遺跡

— 桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業 (平成20・21・23年度) —

- 〈付篇1〉伊礼原D遺跡出土のタイ産鉄絵合子及び木製漆器
- 〈付篇2〉伊礼原遺跡の年代測定結果
- 〈付篇3〉キャンプ桑江北側地区出土の貝集積



2015 (平成27) 年3月

沖縄県 北谷町教育委員会

は ん ざ ん ば る
平安山原B遺跡

— 桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成20・21・23年度） —

- 〈付篇1〉伊礼原D遺跡出土のタイ産鉄絵合子及び木製漆器
- 〈付篇2〉伊礼原遺跡の年代測定結果
- 〈付篇3〉キャンプ桑江北側地区出土の貝集積

2015（平成27）年3月

沖縄県 北谷町教育委員会

はじめに

平安山原B遺跡は、平成15年3月に返還されたキャンプ桑江北側地区に位置する約2,300年前から70年前に亘る集落遺跡です。本遺跡は、基地返還前に実施した文化財調査で発見されました。

文化財調査以前のキャンプ桑江北側地区では、平安山原B遺跡を含む多くの遺跡は確認されていませんでした。町教育委員会では、基地返還後の跡地利用における文化財の取扱いについて開発事業と円滑な調整が図れるよう、平成7～9年度に遺跡の有無を確認する試掘調査を行い、平安山原B遺跡のほか8つの遺跡を確認しました。

キャンプ桑江北側跡地は国道58号に隣接する平坦地で、基地返還前から町役場が建設されるなど、その立地条件の良さから新たなまちづくりが期待されている場所です。文化財調査で確認された遺跡は開発か現状保存か問われ、結果、その多くは開発と共にやむなく失われてしまいました。平安山原B遺跡もその1つに挙げられます。

本報告書は、町教育委員会が開発行為に先立って平成20・21・23年度に実施した記録保存目的の発掘調査成果を、文字や図、写真等でまとめたものです。平安山原で暮らしていた人々の生活址を未来へ伝える遺跡の「証」であります。

発掘調査の結果、約2,300年前は遺跡一帯に砂浜が広がり、人々は限られた空間で生活していた様相が分かりました。その様子は、丘陵麓に幾層にも重なった炉跡や出土品の分布状況から窺うことができます。その後、遺跡付近の流路が次第に埋まり、グスク時代以降には平坦地に集落が形成されるようになります。集落址からは、中国や日本との交易でもたらされた陶磁器や貨銭等が出土するなど、海外との活発なやりとりが想起されます。近代期、集落はさらに広がり、サターヤ（製糖小屋）や井戸等も見られるようになります。出土品の中には製作者印が刻印された大形の甕や、手描きの文様が施されたマカイ（碗）が出土するなど、モノづくりに携わった人たちの息遣いが聞こえてくるようです。戦前まで存続した集落は戦後、基地に接収され、基地建設時の造成、削平を受け、現在、その面影は微塵も残っておりません。

本書が先人の歩みを思量し、未来を見据え、文化財保護へのご理解を深める一助となれば、これほど喜ばしいことはありません。

末尾になりましたが、本報告書を刊行するにあたりご指導・ご協力を賜りました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成27年3月

北谷町教育委員会
教育長 川上 啓一

例 言

1. 本報告書は、北谷町教育委員会が桑江伊平土地区画整理事業に伴い、平成20年度、21年度、23年度に実施した「平安山B遺跡」発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/2,500地形図(昭和54年測量)を元に北谷町役場都市計画課が作成したものである。本書に掲載した緯度、経度の平面直角座標はすべて世界測地系にもとづくものである。

3. 遺物の同定等については、下記の方にご協力をいただいた。(敬称略)記して感謝申し上げます。

脊椎動物遺体	樋泉 岳二 (早稲田大学教育学部)
貝類遺体	黒住 耐二 (千葉県立中央博物館)
人骨	土肥 直美 (琉球大学医学部)
石質	大城 逸朗 (おきなわ石の会)
堆積学	松田順一郎 (史跡鴻池新田会管理事務所)
土器	新里 貴之 (鹿児島大学埋蔵文化財調査センター)

4. 樋泉岳二氏・黒住耐二氏・土肥直美氏には玉稿を賜った。記して謝意を表します。
5. 放射性炭素年代測定は、パリノ・サーヴェイ(株)に依頼した。
6. 本報告書の編集は、島袋春美が行い執筆分担は下記のとおりである。

第I章 第II章 第III章 第1節	松原 哲志
第III章 第2節 第4節1 第5節1 第V章	山城 安生
第III章 第3節1・2(3・4) 第4節2(11~15) 第5節2(1・2・6・7) 第V章 付篇3	島袋 春美
第III章 第3節2(1) 第4節2(1)	呉屋 広江
第III章 第3節2(2・5) 第4節2(16~18) 第5節2(5・8・9)	上地千賀子
第III章 第4節2(2~7)	比嘉 優子
第III章 第4節2(8~10) 第5節2(3・4・10)	北條 真子
付篇1・2	東門 研治

7. 本遺跡の遺物の注記及び、遺構、取上の凡例は次のとおりである。

・注記 HB①地区(平安山原B遺跡 H20年度調査)

台帳(取上)番号	グリッド	遺構番号	層位	取上日
台 484	P・Q8・9	358SK		090121

→ ⑦平B台 484.P・Q8・9
358SK,090121

・注記 HB②イ・ロ地区(平安山原B遺跡 H21年度調査)

地区	台帳(Dot)番号	グリッド	遺構名	層位	取上日
イ	3149	K10		貝層②	H21.1106

→ ⑨平Bイ台 3149. K10
貝層②.H21.1106

・注記 HB④イ・ロ地区(平安山原B遺跡 H23年度調査)

台帳番号	地区	グリッド	遺構	層位	日付
109	ロ	S13		VII-II	H23.12.06

→ ⑮平B109.ロ S13.VII-II
H23.12.06

・遺構記号

性格	溝・河川	土壌	柱穴	石列	貝集積	攪乱	その他
遺構記号	SD	SK	P	SL	SS	SZ	SX

8. 本報告の編年表記は沖縄編年を基本とするが、出土遺物には時代幅があり、その種類によって時代表記が異なる。(伊礼原D遺跡(2013)例言(沖縄・九州時代区分対象表)参考)
9. 本書に掲載した発掘調査に関する写真、実測図などの記録および出土遺物全ては北谷町教育委員会が保管している。



平安山原 B 遺跡周辺航空写真



HB①地区 近世・現代完掘状況 (北西より)



HB①・②イ・ロ地区 調査区完掘状況 (南西より)



HB④イ地区 近世完掘状況 (南より)



HB④イ地区 V層検出面 (南西より)



HB①地区 東壁 K12・J13



HB①地区 東壁 J13・I14



HB①地区 中央ベルト K12 (南西より)



HB①地区 中央ベルト L12 (南西より)



HB①地区 南壁



HB①地区 西壁



HB①地区 西壁 Q15



HB①地区 西壁 Q13



HB①地区 中央ベルトL14 (南西より)



HB①地区 中央ベルトK19・20 (南西より)



HB①地区 下層確認トレンチ1 東壁 P9



HB①地区 下層確認トレンチ2 東壁 P12



HB①地区 下層確認トレンチ3 南壁 N19・0P18



HB②イ地区 中央ベルト（東より）



HB②イ地区 中央ベルト下層確認トレンチ（南東より）



HB②イ地区 VI層検出面（西より）



HB②口地区 南壁



HB②口地区 西壁



HB②口地区 R・S12 北西壁



HB②口地区 下層確認トレンチ Q・R13



HB④イ地区 ベルトⅢ(奥)、Ⅰ(手前) (南より)



HB④地区 ベルトⅠ 壁面Ⅰ・Ⅱ(西より)



HB④イ地区 壁面Ⅲ(南より)



HB④ロ地区 壁面Ⅳ、ベルトⅣ(南西より)



HB④ロ地区 下層確認前検出状況（北西より）



HB④ロ地区 下層確認トレンチ4（北より）



HB④ロ地区 下層確認トレンチ4 樹根検出状況（北西より）



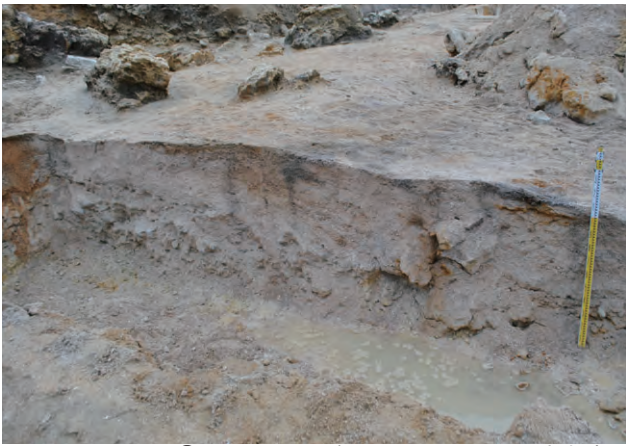
HB④イ地区 下層確認トレンチ3南東壁面



HB④イ地区 下層確認トレンチ1南東壁面



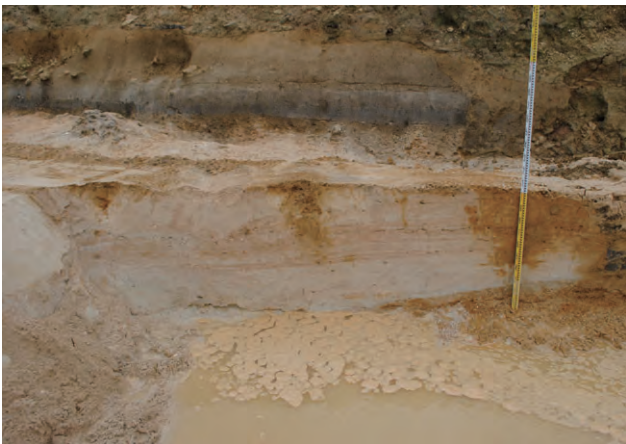
HB④イ地区 完掘状況 (北西より)



HB④イ地区 下層確認トレンチ3 K・L2 南東壁面



HB④イ地区 下層確認トレンチ2 L4・5 南西壁面



HB④イ地区 下層確認トレンチ2 L5 北東壁面



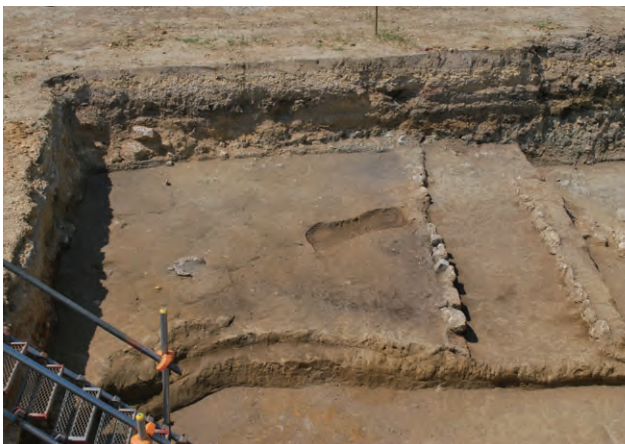
HB④イ地区 下層確認トレンチ2 L6 北東壁



HB①地区 377SE (南西より)



HB②イ地区 1006SK (北西より)



HB②ロ地区 2004SX・2005SX (南東より)



HB②ロ地区 2002・2003・2073SX (北西より)



H9 試掘確認調査時 窯跡 1・2 検出状況 (北西より)



HB④イ地区 試掘 17-1 北壁 (南東より)



HB④イ地区 試掘 17-1 東壁 窯跡 1・2



HB①地区 建物址1 235SB (南東より)



HB①地区 建物址2 310SB (南より)



HB②口地区 2049SD (南西より)



HB①地区 275SL 検出状況 (南西より)

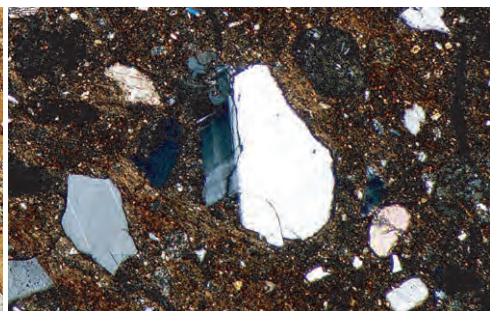
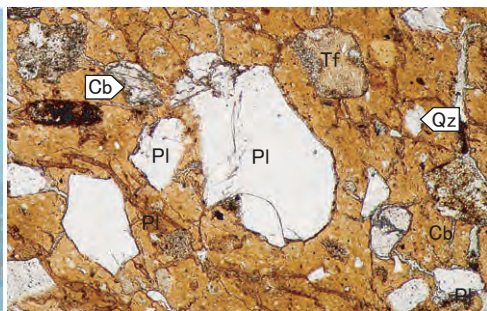


HB①地区 石列1 378SL (南より)



HB④イ地区 石列2 SL1 (南東より)

巻首図版 12 グスク時代・近世遺構



試料番号1 (Qz:石英. PI:斜長石. Cb:炭酸塩鉱物. Tf:凝灰岩.)
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下

0.5mm

巻首図版 13 第IV章第3節 (2) 胎土分析試料薄片



卷首图版 14 復元土器

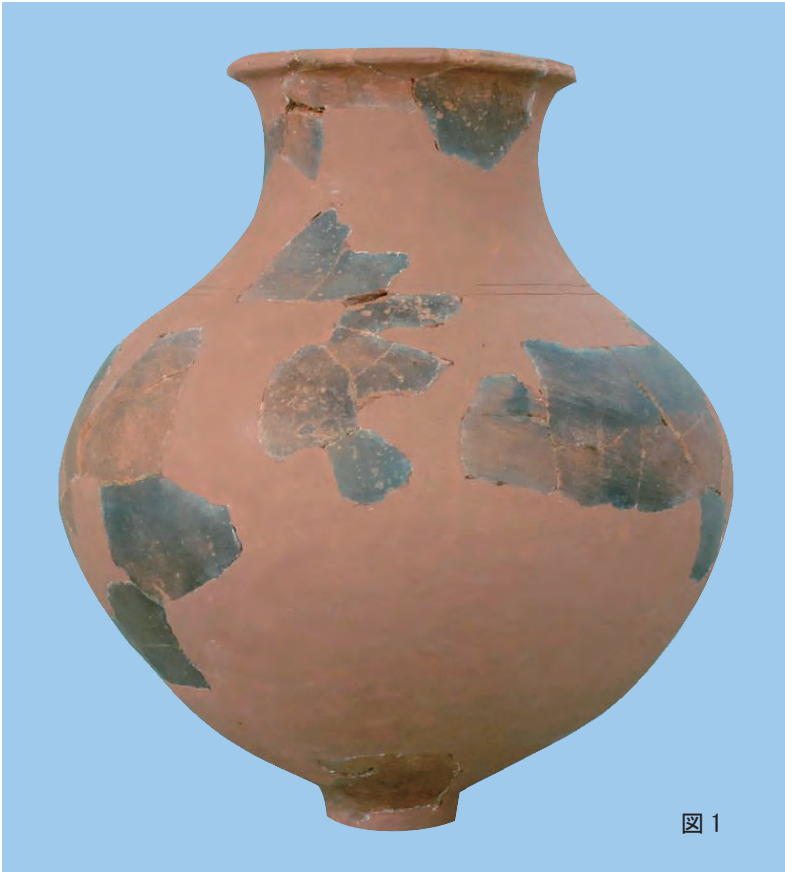


图 1



图 13



图 36



图 48

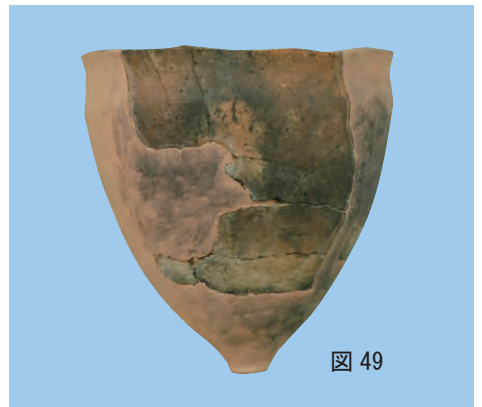


图 49



图 29



图 37



图 57



図 91



図 154



図 137



図 3

図 4

図 1

図 2

骨製品



図 12

図 16

図 17

図 19

図 20

図 18

図 1

図 4

図 5

図 7

図 8

図 22

図 26

図 23

図 43

図 38

図 10

図 9

図 28

貝製品



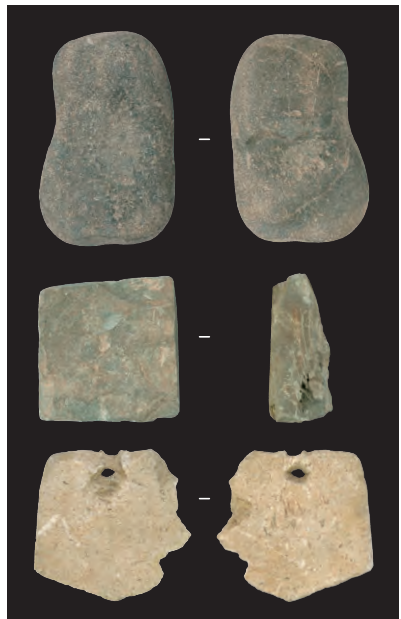
石斧



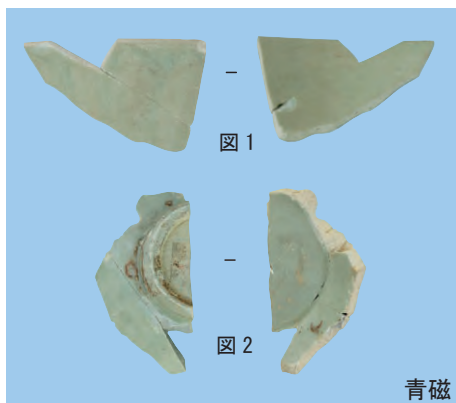
敲打器類・石皿



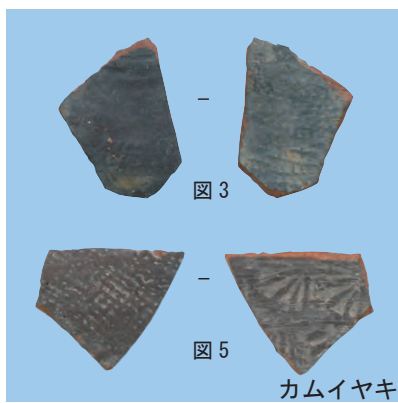
砥石



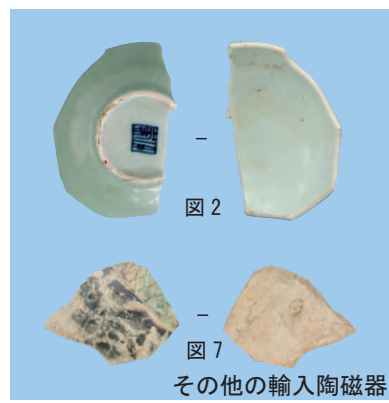
グスク砥石



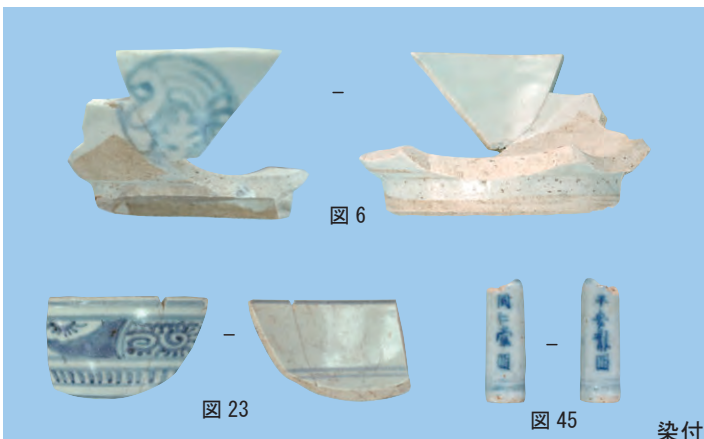
青磁



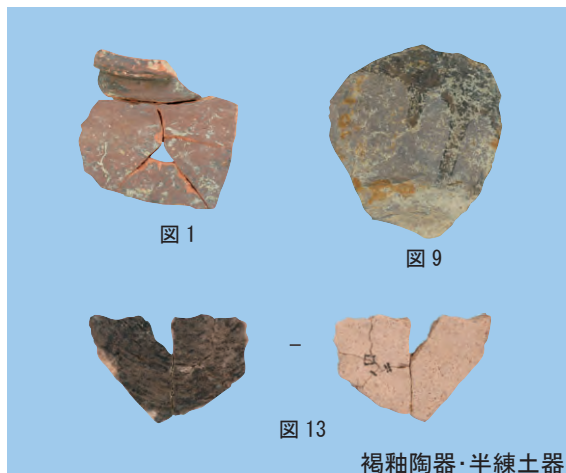
カムイヤキ



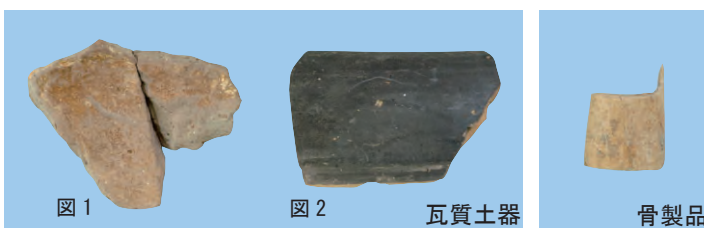
その他の輸入陶磁器



染付

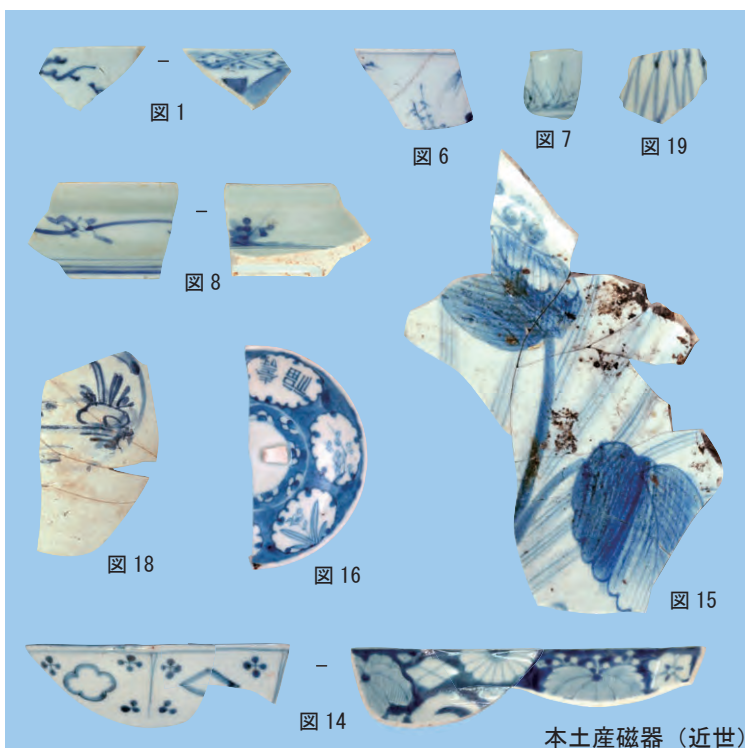


褐釉陶器・半練土器

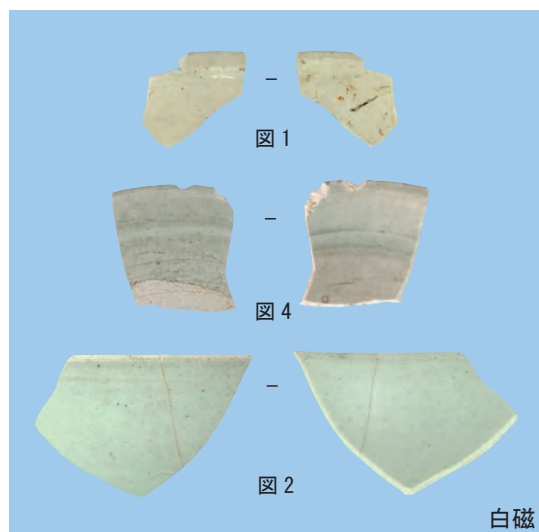


瓦質土器

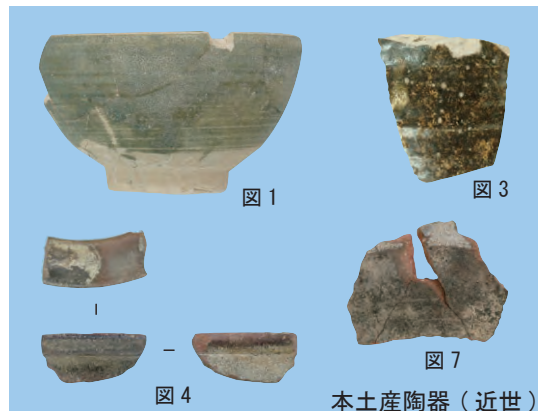
骨製品



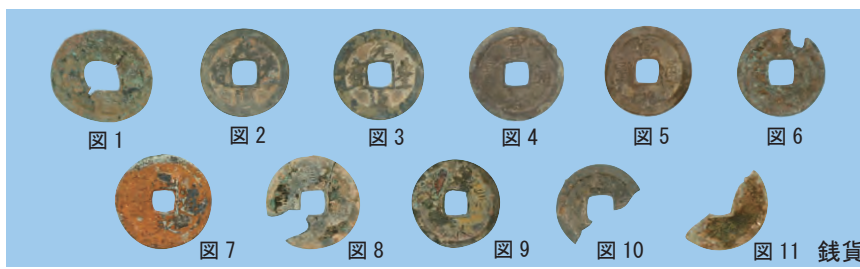
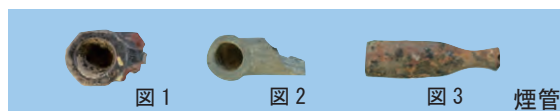
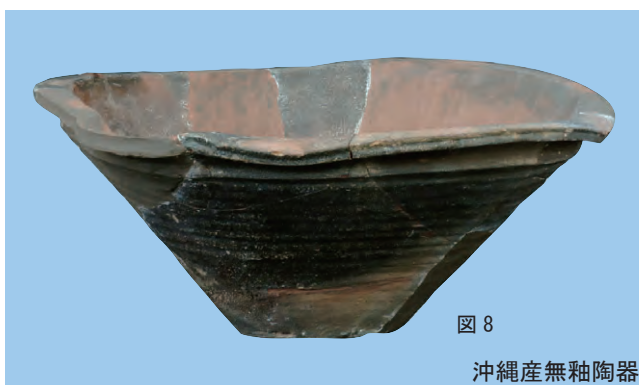
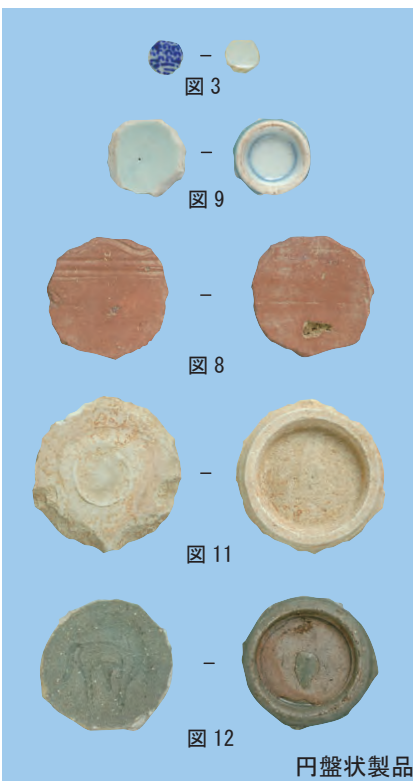
本土産磁器 (近世)



白磁



本土産陶器 (近世)



本文目次

はじめに 例言 巻首図版

第Ⅰ章 調査経緯・経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査経過	4
第Ⅱ章 位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	8
第Ⅲ章 調査の方法と成果	12
第1節 調査の方法	12
第2節 層序	14
第3節 貝塚時代後期	37
第4節 グスク時代・近世	198
第5節 近・現代	275
第Ⅳ章 科学的分析	361
第1節 平安山原B遺跡から採集された脊椎動物遺体	361
第2節 平安山原B遺跡の調査で得られた貝類遺体	388
第3節 平安山原B遺跡の自然科学分析	405
第4節 平安山原B遺跡出土の人骨	413
第Ⅴ章 総括	414
付篇1 伊礼原D遺跡出土のタイ産鉄絵合子及び木製漆器	420
付篇2 伊礼原遺跡の年代測定結果	421
付篇3 キャンプ桑江北側地区出土の貝集積	426
報告書抄録	428
CD収録 ・平安山原B遺跡遺物台帳 ・平安山原B遺跡貝類出土量	

図版目次

巻首図版1	全景写真1
巻首図版2	全景写真2
巻首図版3	層序1
巻首図版4	層序2
巻首図版5	層序3
巻首図版6	層序4
巻首図版7	層序5
巻首図版8	層序6
巻首図版9	下層確認トレンチ1
巻首図版10	下層確認トレンチ2

巻首図版11	近世・戦前遺構
巻首図版12	グスク時代・近世遺構
巻首図版13	第Ⅳ章第3節(2)胎土分析試料薄片
巻首図版14	復元土器
巻首図版15	土器
巻首図版16	土器・骨製品・貝製品
巻首図版17	石器
巻首図版18	陶磁器類・他1
巻首図版19	陶磁器類・他2

図版1	燃焼遺構(1028SX)	39
図版2	土器1	77
図版3	土器2	79
図版4	土器3	81
図版5	土器4	83
図版6	土器5	85
図版7	土器6	87
図版8	土器7	89
図版9	土器8	91
図版10	土器9	93
図版11	土器10	95
図版12	土器11	97
図版13	土器12	99
図版14	土器13	101
図版15	土器14	103
図版16	土器15	105
図版17	土器16	107
図版18	土器17	109
図版19	土器18	111
図版20	土器19	113
図版21	土器20	115
図版22	土器21	117
図版23	土器22	119
図版24	土器23	121

図版25	土器24	123
図版26	土器25	125
図版27	砥石	131
図版28	サンゴ塊製品	133
図版29	石器1	141
図版30	石器2	143
図版31	石器3	145
図版32	石器4	147
図版33	石器5	149
図版34	石器6	151
図版35	石器7	153
図版36	石器8	155
図版37	石器9	157
図版38	石器10	159
図版39	大型イモガイ	166
図版40	ゴホウラ	168
図版41	貝製品1	177
図版42	貝製品2	179
図版43	貝製品3	181
図版44	貝製品4	186
図版45	貝製品5	185
図版46	貝製品6	187
図版47	貝製品7	189
図版48	貝製品8	191

図版49	貝製品 9	193	図版100	SK1・SK2検出状況(北西より)	284
図版50	ヤコウガイ	194	図版101	SX1・SK1・SK2(西より)	284
図版51	骨製品	195	図版102	SX1・SK1・SK2(北より)	284
図版52	土製品	196	図版103	煙道部完掘(南より)	285
図版53	建物址 1(南より)	201	図版104	焚口	285
図版54	建物址 2(南東より)	202	図版105	1018SX検出状況(南より)	285
図版55	271SD溝状遺構 1(北西より)	204	図版106	井戸(377SE)検出状況(南より)	286
図版56	275SL+352SD(南より)	205	図版107	窯跡 1(北より)	288
図版57	2049SD(南西より)	205	図版108	窯跡 1 焚口	288
図版58	275SL完掘状況(南西より)	205	図版109	窯跡 2(南より)	288
図版59	2049SD完掘状況(南より)	205	図版110	窯跡 1・2(南西より)	288
図版60	337SD検出状況(西より)	206	図版111	窯跡 1(西より)	289
図版61	SD1検出層(壁IV:南西より)	206	図版112	窯跡 1 内部の鉄製棒検出(南西より)	289
図版62	SD1検出状況(北西より)	206	図版113	窯跡 2 被熱部と前庭部(北西より)	289
図版63	溝状遺構 4 検出状況(北西より)	207	図版114	沖縄産施釉陶器 1	309
図版64	378SL石列 1 検出状況(南より)	209	図版115	沖縄産施釉陶器 2	311
図版65	石列 2 検出状況(南東より)	209	図版116	沖縄産施釉陶器 3	313
図版66	グスク土器	225	図版117	沖縄産施釉陶器 4	315
図版67	カムイヤキ	229	図版118	沖縄産施釉陶器 5	317
図版68	白磁	235	図版119	沖縄産施釉陶器 6	319
図版69	青磁 1	241	図版120	沖縄産無釉陶器 1	327
図版70	青磁 2	243	図版121	沖縄産無釉陶器 2	329
図版71	染付 1	249	図版122	沖縄産無釉陶器 3	331
図版72	染付 2	251	図版123	沖縄産無釉陶器 4	333
図版73	褐釉陶器・半練土器	255	図版124	沖縄産無釉陶器 5	335
図版74	その他の輸入陶磁器	258	図版125	沖縄産無釉陶器 6	337
図版75	瓦質土器	259	図版126	陶質土器 1	343
図版76	本土産陶器(近世)	261	図版127	陶質土器 2	345
図版77	本土産磁器(近世) 1	264	図版128	染色体文	348
図版78	本土産磁器(近世) 2	265	図版129	本土産磁器(近代) 1	349
図版79	タカラガイ製品	266	図版130	本土産磁器(近代) 2	350
図版80	骨製品	267	図版131	円盤状製品	353
図版81	羽口	267	図版132	鉄製品	356
図版82	銭貨	269	図版133	瓦・瓦二次製品	358
図版83	簪	270	図版134	石製容器	359
図版84	石製品	270	図版135	現代遺物	360
図版85	砥石	271	図版136	ガラス製品・他	360
図版86	煙管	272	図版137	脊椎動物遺体 1(上面:魚類、ウミガメ類、リクガメ類、クジラ、ヤギ・下面:ウマ、ウシ)	385
図版87	調査区と旧平安山	273	図版138	脊椎動物遺体 2(イノシシ)	386
図版88	276SL(南より)	276	図版139	脊椎動物遺体 3(上面:ブタ・下面:オオコウモリ科)	387
図版89	257SD・276SL(南西より)	276	図版140	貝類遺体 1(巻貝)	399
図版90	379SL(西より)	277	図版141	貝類遺体 2(巻貝)	400
図版91	355SD(南より)	277	図版142	貝類遺体 3(巻貝)	401
図版92	380SL(南より)	277	図版143	貝類遺体 4(上:陸産貝・下:二枚貝)	402
図版93	2005SX(北東より)	278	図版144	貝類遺体 5(二枚貝)	403
図版94	2004SX・2005SX(東より)	278	図版145	貝類遺体 6(二枚貝)	404
図版95	2003SZ・2002SZ(南西より)	280	図版146	炭化種実	412
図版96	2054SX・2073SZ・2002SZ(南西より)	280	図版147	人骨出土部位	413
図版97	2002SZ・2003SZ・2073SZ・2054SX(北西より)	280	図版148	タイ産鉄絵合子・木製漆器	420
図版98	1006SK検出状況(西より)	283	図版149	ゴホウラ・イモガイ	427
図版99	1006SK完掘状況(西より)	283			

挿図目次

第 1 図	北谷町の位置	6
第 2 図	北谷町周辺の地形分類	7
第 3 図	北谷町周辺の表層地質分類	7
第 4 図	北谷町の位置と遺跡分布	10
第 5 図	グリッド設定	13
第 6 図	平安山原B遺跡の位置	13
第 7 図	IV層の範囲	15
第 8 図	東西ライン層模式	18
第 9 図	南北ライン層模式	18
第10図	層序 1	19
第11図	HB②イ地区V層(細分)平面分布	19
第12図	層序 2	21
第13図	層序 3	23
第14図	層序 4	25
第15図	層序 5	27

第16図	HB②イ地区遺構配置	37
第17図	1042SXの検出順序	38
第18図	燃焼遺構(1028SX)	39
第19図	貝塚時代後期遺構配置と一括土器出土分布	41
第20図	土器平面・垂直分布(土器接合・遺物取り上げ)	43
第21図	軽石出土平面分布	45
第22図	土器重量平面分布	46
第23図	搬入土器出土平面分布	49
第24図	土器口縁部(I類・II類・III類)出土平面分布	57
第25図	土器口縁部(IV類・V類・VI類・VII類)出土平面分布	58
第26図	土器胴部(I類・II類・III類・IV類)出土平面分布	60
第27図	土器胴部(V類・VI類・VII類)と不明土器出土平面分布	61
第28図	底部器種別出土量	68
第29図	土器底部出土平面分布	71
第30図	土器 1	76

第31図	土器 2	78
第32図	土器 3	80
第33図	土器 4	82
第34図	土器 5	84
第35図	土器 6	86
第36図	土器 7	88
第37図	土器 8	90
第38図	土器 9	92
第39図	土器10	94
第40図	土器11	96
第41図	土器12	98
第42図	土器13	100
第43図	土器14	102
第44図	土器15	104
第45図	土器16	106
第46図	土器17	108
第47図	土器18	110
第48図	土器19	112
第49図	土器20	114
第50図	土器21	116
第51図	土器22	118
第52図	土器23	120
第53図	土器24	122
第54図	土器25	124
第55図	石斧（完形）長さ×幅と形態の相関	128
第56図	主要石斧及び出土量と南九州系弥生遺物	129
第57図	敲打器類（完形）長さ×幅と形態の相関	130
第58図	器種別出土平面分布	132
第59図	石器石質重量比（%）	137
第60図	器種別石質組成	138
第61図	石器 1	140
第62図	石器 2	142
第63図	石器 3	144
第64図	石器 4	146
第65図	石器 5	148
第66図	石器 6	150
第67図	石器 7	152
第68図	石器 8	154
第69図	石器 9	156
第70図	石器10	158
第71図	ゴウホウラ・イモガイ貝輪と自然貝出土平面分布	165
第72図	ホラガイ有孔製品出土平面分布	170
第73図	二枚貝有孔製品出土平面分布	171
第74図	二枚貝有孔製品遺跡別比較	172
第75図	スィジガイ突起番号	174
第76図	ヤコウガイの蓋刃分布	174
第77図	貝製品 1	176
第78図	貝製品 2	178
第79図	貝製品 3	180
第80図	貝製品 4	182
第81図	貝製品 5	184
第82図	貝製品 6	186
第83図	貝製品 7	188
第84図	貝製品 8	190
第85図	貝製品 9	192
第86図	ヤコウガイの部位の分類	194
第87図	骨製品	195
第88図	土製品	196
第89図	遺構全体（グスク時代・近世）	199
第90図	建物址 1（235SB）	201
第91図	建物址 2（310SB）	202
第92図	溝状遺構 1（271SD）	204
第93図	溝状遺構 2（275SL・352SD・2049SD）	205
第94図	溝状遺構 3（337SD）平面・断面	206
第95図	溝状遺構 5（SD1）平面・断面	206
第96図	溝状遺構 4（2073SZ）平面	207
第97図	石列 1（378SL）平面	209
第98図	石列 2 平面・断面	209
第99図	ピット群の径と深さ比較	210

第100図	ピット群①・単独ピット（グスク時代・近世）	211
第101図	ピット群②-1・2（グスク時代・近世）	212
第102図	ピット群③（グスク時代・近世）	213
第103図	グスク土器	224
第104図	グスク土器と関連遺物の出土平面分布	226
第105図	カムイヤキ	228
第106図	白磁出土平面分布	233
第107図	青磁出土平面分布	233
第108図	白磁	234
第109図	青磁 1	240
第110図	青磁 2	242
第111図	染付 1	248
第112図	染付 2	250
第113図	染付出土平面分布	253
第114図	褐釉陶器出土平面分布	253
第115図	褐釉陶器・半練土器	254
第116図	その他の輸入陶磁器	258
第117図	瓦質土器	259
第118図	本土産陶器（近世）	261
第119図	本土産磁器（近世） 1	264
第120図	本土産磁器（近世） 2	265
第121図	タカラガイ製品出土平面分布	266
第122図	タカラガイ製品	266
第123図	骨製品	267
第124図	羽口	267
第125図	銭貨	268
第126図	簪	270
第127図	石製品	270
第128図	砥石	271
第129図	煙管	272
第130図	遺構全体（近・現代）	273
第131図	257SD・276SL・359SK平面・断面	276
第132図	379SL平面・断面	277
第133図	380SL平面・断面	277
第134図	2004SX・2005SX平面・断面	278
第135図	305SD・281SD・2002SZ・358SK平面・断面	281
第136図	1006SK平面・断面	283
第137図	SK1・SK2平面・断面	284
第138図	1018SX平面・断面	285
第139図	井戸（377SE）平面・断面	286
第140図	窯跡 1・2 遺構平面・断面	288
第141図	ピット群 1・2・3	291
第142図	沖縄産施釉陶器遺跡（キャンプ桑江北側）別比較	302
第143図	器種別釉色使用割合比較	307
第144図	沖縄産施釉陶器 1	308
第145図	沖縄産施釉陶器 2	310
第146図	沖縄産施釉陶器 3	312
第147図	沖縄産施釉陶器 4	314
第148図	沖縄産施釉陶器 5	316
第149図	沖縄産施釉陶器 6	318
第150図	沖縄産施釉陶器出土平面分布	324
第151図	沖縄産無釉陶器出土平面分布	324
第152図	沖縄産無釉陶器 1	326
第153図	沖縄産無釉陶器 2	328
第154図	沖縄産無釉陶器 3	330
第155図	沖縄産無釉陶器 4	332
第156図	沖縄産無釉陶器 5	334
第157図	沖縄産無釉陶器 6	336
第158図	陶質土器 1	342
第159図	陶質土器 2	344
第160図	染色体文	348
第161図	本土産磁器（近代） 1	349
第162図	本土産磁器（近代） 2	350
第163図	円盤状製品	352
第164図	鉄斧装着例	354
第165図	鉄製品	355
第166図	瓦出土平面分布	357
第167図	瓦・瓦二次製品	358
第168図	現代遺物	360

第169図	平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集された脊椎動物遺体の組成(1):NISP比	367
第170図	平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集された脊椎動物遺体の組成(2):MNI比	367
第171図	平安山原B遺跡HB①・②・④地区V層から採集された魚類遺体の組成	367
第172図	平安山原B遺跡貝類遺体分析地区名	390
第173図	平安山原B遺跡における優占種(左)と生息場所類型(右)の変遷	397
第174図	暦年校正結果	408
第175図	胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成	408

第176図	砕屑物・基質・孔隙の割合	408
第177図	出土部位	413
第178図	時代別出土遺物変遷	417
第179図	伊礼原遺跡とその周辺の地形分類	419
第180図	伊礼原D遺跡の位置	420
第181図	タイ産鉄絵合子・木製漆器	420
第182図	伊礼原遺跡年代測定資料採取場所	422
第183図	キャンプ桑江北側地区の貝集積遺構	426
第184図	ゴホウラ	427

表目次

第1表	北谷町遺跡一覧	11
第2表	取上遺物一覧	29
第3表	土層観察一覧	33
第4表	土器分類	46
第5表	搬入土器(弥生・奄美系)出土量	47
第6表	土器観察一覧(搬入)	50
第7表	在地土器(口縁部)出土量	52
第8表	在地土器(胴部)出土量	59
第9表	土器観察一覧(在地)	62
第10表	土器(底部)出土量	68
第11表	土器観察一覧(底部)	73
第12表	石器出土量	126
第13表	石皿使用面	131
第14表	石器観察一覧	134
第15表	貝製品出土量	160
第16表	一枚貝製品観察一覧	161
第17表	イモガイ製品観察一覧	162
第18表	大形イモガイ計測一覧	163
第19表	大形イモガイ大きさ(殻径)別出土量	165
第20表	ゴホウラ・アツソデガイ製品観察一覧	167
第21表	ゴホウラ・アツソデガイ計測一覧	168
第22表	ホシダカラ匙状製品観察一覧	169
第23表	ホラガイ有孔製品観察一覧	170
第24表	二枚貝有孔製品・地区別出土量	171
第25表	二枚貝有孔製品・重さ別出土量	171
第26表	二枚貝有孔製品観察一覧	172
第27表	スイジガイ製利器観察一覧	174
第28表	螺蓋製貝斧観察一覧	174
第29表	ヤコウガイ観察一覧	175
第30表	骨製品観察一覧	196
第31表	平安山原B遺跡遺物出土量	197
第32表	ピット・土坑観察一覧	214
第33表	III層遺構別遺物出土量(グスク時代・近世)	220
第34表	グスク時代・近世遺物の時期別出土量	221
第35表	グスク土器出土量	222
第36表	グスク土器観察一覧	223
第37表	カムイヤキ出土量	227
第38表	カムイヤキ観察一覧	227
第39表	白磁観察一覧	232
第40表	白磁出土量	233
第41表	青磁観察一覧	238
第42表	青磁出土量	239
第43表	染付椀(口縁部)出土量	245
第44表	染付椀(底部・胴部)出土量	245
第45表	染付(皿・杯・瓶・不明)出土量	245
第46表	染付観察一覧	246
第47表	褐釉陶器・半練土器出土量	253
第48表	褐釉陶器・半練土器観察一覧	254
第49表	その他の輸入陶磁器出土量	257
第50表	その他の輸入陶磁器観察一覧	257
第51表	瓦質土器観察一覧	259
第52表	本土産陶器(近世)出土量	260
第53表	本土産陶器(近世)観察一覧	260
第54表	本土産磁器(近世)出土量	262
第55表	本土産磁器(近世)観察一覧	263
第56表	タカラガイ製品観察一覧	266
第57表	焼土出土量	267
第58表	銭貨観察一覧	269
第59表	簪観察一覧	270

第60表	砥石観察一覧	271
第61表	煙管観察一覧	272
第62表	近・現代ピット群一覧	290
第63表	ピット観察一覧	292
第64表	II層遺構遺物出土量(グスク時代・近・現代)	295
第65表	沖縄産施釉陶器遺跡別比較	302
第66表	沖縄産施釉陶器出土量	303
第67表	沖縄産施釉陶器(碗)出土量	303
第68表	沖縄産施釉陶器観察一覧	304
第69表	器種別釉色使用比較	307
第70表	挿鉢分類別出土量	321
第71表	鉢分類別出土量	322
第72表	沖縄産無釉陶器出土量	324
第73表	沖縄産無釉陶器観察一覧	325
第74表	器厚別出土量	339
第75表	陶質土器出土量	340
第76表	陶質土器観察一覧	341
第77表	本土産磁器(近代)技法別出土一覧	347
第78表	本土産磁器(近代)観察一覧	348
第79表	器種別出土量	348
第80表	円盤状製品出土量	351
第81表	円盤状製品観察一覧	351
第82表	鉄製品観察一覧	355
第83表	瓦・レンガ出土量	357
第84表	現代遺物出土量	360
第85表	ガラス瓶観察一覧	360
第86表	平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集された脊椎動物遺体の種名一覧	368
第87表	平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集された魚類遺体の同定結果	368
第88表	平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集された爬虫類・鳥類遺体の同定結果	370
第89表	平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集されたコウモリ類遺体の同定結果	370
第90表	平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集されたイノシシ類(イノシシ/ブタ)遺体の同定結果	371
第91表	平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集されたイノシシ類(イノシシ/ブタ)遺体の上顎骨・上顎遊離歯の詳細	377
第92表	平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集されたイノシシ類遺体の下顎骨・下顎遊離歯の詳細	378
第93表	平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集されたウシ・ウマ遺体の同定結果	382
第94表	平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集されたその他の哺乳類の同定結果および同定不可資料	383
第95表	平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集された脊椎動物遺体の組成	384
第96表	平安山原B遺跡の貝類遺体分析地区名	388
第97表	平安山原B遺跡における同定標本数(NISP)と最小個体数(MNI)の関係例	390
第98表	平安山原B遺跡出土貝類遺体の分類学的位置と生息場所類型	391
第99表	平安山原B遺跡出土貝類遺体の地区別同定標本数(NISP)	393
第100表	試料一覧	405
第101表	放射性炭素年代測定結果	407
第102表	暦年校正結果	407
第103表	薄片観察結果	408
第104表	平安山原B遺跡種実同定結果(HB②イ地区1042SX)	411
第105表	タイ産鉄絵合子・木製漆器観察一覧	420
第106表	貝集積遺構出土一覧	426
第107表	ゴホウラ・イモガイ観察一覧	427

第 I 章 調査経緯・経過

第 1 節 調査に至る経緯

平安山原 B 遺跡は、平成 15 年 3 月に返還された在沖米海軍基地（キャンプ桑江北側地区）内に位置し、基地返還に先立つ予備調査で発見された「周知の埋蔵文化財包蔵地」である。本報告書は、桑江伊平土地区画整理事業に係る記録保存目的の緊急発掘調査成果をまとめたものである。

キャンプ桑江北側地区には、上記予備調査の結果、9 遺跡 6 遺物散布地（延べ 13 ヘクタール）が確認され、平安山原 B 遺跡が位置する字伊平小字平安山原 140 番地一帯には、沖縄貝塚時代後期（以下、本章で「貝塚時代後期」）、グスク時代の遺物包含層と、戦前の遺構が確認された^{※1}。その後の範囲確認調査では、近世から戦前までの遺構・遺物が全面で確認されたが、グスク時代の明確な遺構は確認されなかった^{※2}。以下に本遺跡の緊急発掘調査に至る経緯を記述する。

キャンプ桑江北側地区は返還後の跡地利用促進が重要な課題となっており、課題の整理と解決に向け、北谷町内の関係部署間で定期的に会議の場を設けた。埋蔵文化財については、事業調整の段階でほとんどの遺跡が開発行為の影響を受ける事が判明した。その理由として、事業地内のほぼ全域で盛土による造成工事が施工されるためであった。国道 58 号に東接するキャンプ桑江北側地区は、国道よりも地盤面が低く、大雨時に度々冠水を引き起こしていたことから、返還跡地一帯を盛土造成し上記現象を解消する必要があった。同地域は、本町でも数少ない平坦地であり、かつ、地理的に本町の中心部であることから、返還後は町の中核ゾーンとして、職住近接型の都市環境の創出及び地域活性化を図る計画がなされていた^{※3}。返還跡地を有効かつ効率的に利用するためには、国道との段差を解消する盛土造成工事は避けられないものであり、その土厚は、地下の埋蔵文化財に悪影響を及ぼす可能性が十分に考えられる規模も認められた。ただし、盛土の高さが一様ではないことから、盛土の高さや恒久的工作物の範囲を割り出すことにより、緊急発掘調査の対象地及び対象外範囲の抽出作業を進めたが、同作業は困難を極めた。

また、連絡会議と並行して、沖縄県内の政府関係機関、沖縄県並びに北谷町で「キャンプ桑江北側地区跡地利用支援関係機関連絡会議（以下「連絡会議」という。）」が、平成 11 年 9 月 14 日から平成 12 年 10 月 27 日にかけて延べ 10 回開かれた。連絡会議では、返還跡地で確認された遺跡の取扱等について、調査費用・調査期間・文化財保護・地権者への負担等の総合的観点から、今後の方針を導き出すため検討が行われた。連絡会議では、遺跡の取扱いについて以下の 2 案が持ち上がった。

- 1、区画整理事業期間中に対象遺跡の全てを全面調査する。
- 2、区画整理事業期間中には事業に係る範囲（遺跡の一部）のみを調査し（第 1 段階）、その他の一般宅地等範囲については、事業完了後に土地所有者が建築行為を計画した時点において、原因者負担や文化庁補助を受けて発掘調査を実施する。

1 案のメリット（2 案のデメリット）として、

- ①従前地から埋蔵文化財包蔵地へ換地されないため、この点において地権者へ不利益が生じない。
- ②第 1 段階で全ての発掘調査を行うため、2 案に比べ調査期間の短縮が考えられる。

が想定され、デメリット（2 案のメリット）としては、

- ①発掘調査を実施した箇所その後開発行為が行われない場合、不必要な調査となってしまう。
- ②遺跡の一部のみの調査に比べ調査費用が増大し（減歩率の上昇）、地権者への負担が大きくなる。

③事業完了後に宅地建設の殺到が予想されることから、第2段階の発掘調査の対応が困難となり、地権者に不利益を与える。

が挙げられた。幾多の会議を重ねた結果、最終的には地権者への負担軽減を考慮し、1案を採用する事となった。同時に、現地保存すべき遺跡に伊礼原C遺跡（当時の名称）が挙げられ、今後は保存範囲を確定させるべく範囲確認調査を継続して取り組む事となった^{註4}。

平成15年3月15日には「桑江伊平土地区画整理事業（施行者 北谷町）」が事業認可され、伊礼原遺跡を除く他の遺跡は、現状保存が図れないことから次善の策として記録保存調査を行うこととなった。平成16年10月27日、北谷町教育委員会は、桑江伊平土地区画整理事業施行区域における埋蔵文化財の取扱について北谷町と協定を締結した。町教育委員会においては、他事業との関係による専門員の事務負担量が著しく増大していたため、発掘調査に係る諸作業の軽減を図る目的で、現地調査の測量、発掘作業員の手配及び安全管理を民間業者に業務委託する事とした。

発掘調査は、遺跡面積や調査員の体制、その他の事業を鑑みて4回に分けて行った。調査初年度は平成20年9月1日に着手し、平成21年2月20日に業務を完了。調査面積は2,460㎡。2期目は平成21年8月28日に着手し、同年12月18日に業務完了。調査面積は730㎡。3期目は平成21年10月14日に着手し、翌年2月19日に業務完了。調査面積は2,720㎡。4期目は平成23年9月2日に着手し、同年12月16日に業務完了。調査面積は1,200㎡。総調査面積は7,110㎡で、本報告書では、1, 2, 4期分（4,390㎡）の調査報告を行う。3期目の調査内容は、本遺跡に隣接する平安山原C遺跡の本報告に合わせて報告する。

〈註文献〉

註1 北谷町教育委員会 2005『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査』北谷町文化財調査報告書 第23集

註2 北谷町教育委員会 2008『平安山原B遺跡』北谷町文化財調査報告書 第29集

註3 返還に先立つ平成10年3月には、共同使用という形態で北谷町役場新庁舎がキャンプ桑江北側地区内に建設されている。

註4 同遺跡はその後『伊礼原遺跡』と名称が改められ、平成22年2月22日に約17,000㎡が国史跡に指定されるに至った。

第2節 調査体制

調査体制は以下のとおりである。

事業主体	教育長	比嘉 秀夫（平成20・21・23年度）
	同	川上 啓一（平成25・26年度）
事業総括	教育次長	謝花 良継（平成20・21年度）
	同	大城 操（平成23年度）
	同	比嘉 良典（平成25・26年度）
	社会教育課長	大城 操（平成20・21年度）
	同	知念 喜忠（平成23年度）
調査総括	同	比嘉 敬文（平成25・26年度）
	文化係長	嘉陽田 朝栄（平成20・21・23年度）
	同	米 須 健（平成25・26年度）

調査担当	主任主事	山城	安生（平成20・21・23・25・26年度）
	同	東門	研治（平成20・21・23・25・26年度）
	同	松原	哲志（平成23・25・26年度）
	同	島袋	春美（平成25・26年度）
	主事	松原	哲志（平成20・21年度）

資料整理作業員

（平成25年度）

嘱託 上地千賀子・上間真寿美・大城 光・呉屋広江・佐久間クリエ・曾木菊枝・知念栄子
照屋元子・富平砂綾子・豊里初江・西原美草・東順子・北條真子・山城小百合
臨時 稲嶺律子・大城明香・金城綾乃・城間志津香・田中英子・徳本加代子・仲栄真麻美
宮里美也子

（平成26年度）

嘱託 上地千賀子・上間真寿美・大城 光・金城綾乃・呉屋広江・佐久間クリエ・曾木菊枝
知念栄子・照屋元子・豊里初江・西原美草・東順子・比嘉優子・山城小百合
臨時 泉恵子・伊波弘子・大城明香・折坂一美・玉那覇寛子・徳本加代子・仲宗根円華
又吉朋子・饒辺和歌子・湧稲國里絵

発掘調査及び自然科学分析に係る業務委託

（平成20年度）

平安山原B遺跡埋蔵文化財発掘調査委託業務委託 国際航業株式会社沖縄営業所

（平成21年度）

平安山原B遺跡埋蔵文化財発掘調査委託業務委託（その2） 国際航業株式会社沖縄営業所

（平成23年度）

平安山原B遺跡埋蔵文化財発掘調査委託業務委託（その4） 株式会社島田組沖縄支店

（平成25年度）

平安山原B遺跡出土遺物の年代測定業務委託 パリノ・サーヴェイ株式会社

（平成26年度）

平安山原B遺跡出土遺物の年代測定業務委託 パリノ・サーヴェイ株式会社

平安山原B遺跡出土遺物の年代測定業務委託2 パリノ・サーヴェイ株式会社

調査指導及び助言（敬称略、所属五十音順）

おきなわ石の会	大城 逸朗
鹿児島大学埋蔵文化財調査センター	新里 貴之
史跡鴻池新田会所管理事務所	松田 順一郎
千葉県立中央博物館	黒住 耐二
北谷町文化財調査審議委員	知念 勇
琉球大学医学部	土肥 直美
早稲田大学教育学部	樋泉 岳二

第3節 調査経過

発掘作業

HB①地区（平成20年度：9月1日～2月20日）

平成20年度は9月3日から草刈り作業を開始し調査区設定に取りかかった。9日からは磁気探査及び重機による表土（米軍基地造成土）掘削を行ったが、大量の鉄屑やコンクリートガラが反応・確認された。現状を沖縄防衛局及び本町区画整理課、企画課に報告し現地確認を依頼した。その後関係者で調整した結果、沖縄防衛局が原状回復をする方向となったため当該地における発掘調査は中止し、本遺跡の別ブロックを調査することとなった。19日からは変更箇所での草刈り作業を行い、26日から磁気探査及び表土掘削を開始。磁気探査中には度々不発弾が確認され、適宜沖縄警察署及び陸上自衛隊と調整を図りその回収を依頼した。10月7日からは、重機掘削と並行して戦前～近世包含層の人力掘削を開始。調査区東側では地表直下に上部が平坦な石灰岩盤が広がっていた。これは、戦後米軍により旧地形が削平されたものと思われた。また、付近からは、平成9年度の範囲確認調査時に確認された遺構（サターヤー）を覆ったブルーシートが検出された。調査区西側では、道の境と考えられる石列や性格不明の石敷き遺構を検出。12月12日には近世完掘状況の俯瞰写真を撮影し、次層の掘削に着手した。グスク期の層は主に調査区西側に堆積し、遺構及び遺物の出土は僅かであった。同層は粘質土で構成され、砂層のマウンド間に堆積していたことから、後背湿地または流路等にあたると推察した。調査区東側では明確なグスク時代の包含層は見られず、先の石灰岩段丘下に貝塚時代後期層が堆積していた。出土遺物にはくびれ平底土器や乳房状尖底土器、石器、貝製品が認められ、特に土器は同一個体がまとまって出土する傾向が見られた。1月30日には完掘状況の俯瞰写真を撮影。その後、土層観察用ベルトの掘削を行った。2月10日から下層確認調査を実施したが遺構・遺物が確認されなかったため、同月20日をもって20年度の調査は終了した。

HB②地区（平成21年度：8月28日～12月18日）

平成20年度の調査で遺跡の広がりや丘陵側にも伸びていた結果を受け、21年度は丘陵麓にも調査区を設定し調査にあたった。8月28日から草刈り作業を開始し、翌日から磁気探査及び表土掘削を行った。イ地区では米軍造成土が厚く堆積し、ロ地区では比較的浅いレベルから近世・近代の遺物や溝状遺構が検出された。同遺構は平安山ノロ屋敷との関連性が想定されたため、機械掘削から人力掘削に切り替え、写真撮影、記録作業を行った。イ地区の戦前～近世包含層からは貝塚時代後期の遺物が目立って出土した。その理由として、集落形成時に直下の貝塚時代後期層まで掘り込んだ結果と考えられる。9月25日にはイ地区近世面を完掘し、次層の掘削に取り掛かった。褐色シルト層を掘り進めると黒色混貝層が検出され、乳房状尖底土器や磨製石斧、貝輪等の出土が目立った。ロ地区では10月8日に近世面を完掘し、グスク層の掘削に移行した。同層からは、青磁、白磁、カムイヤキが少量出土した。ロ地区ではグスク期の遺構が確認されなかったため、11月2日から下層調査を開始。11月4日には当地区の調査を終了し、9日にイ地区と併せて完掘状況の写真撮影を行った。11日からはイ地区の下層調査を実施し、人工遺物や遺構の可能性のある黒色砂のまとまりを検出した。この時点で既定の委託内容に達したが、変更契約にて調査を継続することとした。追加調査の結果、部分的に行った下層調査では判然としなかった黒色砂が広範囲に広がっていることが確認され、特に丘陵麓の黒色砂下部からは被熱した礫や獣骨が出土するなど、炉跡と考えられる遺構が検出された。黒色砂の広がりや壁面の奥に伸びていたため、壁面を掘り進めてその範囲を確認

することとした。その結果、明瞭な燃焼部を持つ遺構が確認された。同遺構は数基が折り重なった状態で検出され、明らかな時期差が認められた。建物の存在が想定されたが、柱穴は認められなかった。12月18日には遺構の調査を終え、21年度の調査は終了した。

HB④地区（平成23年度：9月2日～12月16日）

平成23年度は9月20日から調査区の設定と磁気探査に取りかかった。27日から重機掘削を実施したところ、イ地区東側でサーターヤーを覆ったブルーシートの一部が検出された。10月3日から作業員を投入し上記遺構の精査を行ったが、石積みの一部が欠落しているなど過去調査時の現況を保っていないことが確認された。18日には検出状況の写真測量を実施。イ地区南側では近世～近代の遺物包含層から人力掘削を開始し、不定形な土坑（SK001, 002）を確認したが、人為性の低いものと判断した。散発的に遺物が出土する包含層を掘り進めると石列とピット数基が検出されたが、石列は調査範囲内で途切れ、ピットのプランも組めず性格は判然としなかった。11月8日からはロ地区の表土掘削を開始。イ地区の近世～近代層では遺構・遺物が極少だったことから、ロ地区では重機を用いてグスク層上面まで慎重に掘り進めることとした。イ地区のグスク層の堆積状況を確認するため数ヶ所サブトレンチを設けたところ、次層にあたる貝塚時代後期層に至るまで50～90cmの厚みが認められた。グスク層からは遺物がほとんど出土せず、人力掘削を行うには土量が多すぎることから、同層を間層と位置づけ重機掘削を行った。16日からはサーターヤーの掘削に着手、21日には完掘状況の写真撮影を行った。イ・ロ両地区で貝塚時代後期層上面を検出すると、砂層が西に傾斜しつつロ地区でマウンドを呈し、マウンド周囲には砂質粘土層が見られた。同層は、全体的に淡水産の巻貝を含む灰色粘質土が複数枚水平堆積しており、周辺でも確認されている後背湿地または流路等の一部と判断した。同湿地と砂層の境からは、くびれ平底や尖底土器、貝がまとまって出土したが、掘り進めると平底土器は見られなくなった。本湿地は貝塚時代後期以降に形成されたものと考えられる。12月14日には調査区完掘状況の空撮を実施し、16日から下層確認のための重機掘削を行ったところ、砂利層からはほぼ完形の尖底土器が出土した。下層調査の範囲を広げつつ土砂の篩掛けを行ったがその他遺物は確認できず、また、湧水により壁面が崩落するなど危険な状態であったことから、17日に下層調査を終了した。これにより23年度の調査及び平安山原B遺跡の全ての現地調査は終了した。

整理作業

平成25・26年度

本発掘調査から出土した総遺物量は、標準的な遺物コンテナ（60cm×40cm×10cm）で236箱であった。整理作業は現場作業の雨天時を利用して遺物の洗浄・乾燥及び脆弱遺物の強化を行い、本格的な作業は現地調査終了後の平成25年度から開始した。乾燥後の出土遺物はナンバリングや接合作業等を行い主な資料を実測した。実測後は全てスキャンし、デジタルトレースを行った。現場作業時にトータルステーションや写真測量で作図した遺構図等は、CADデータからイラストレーターデータに変換後デジタルトレースを行った。報告書掲載写真はデジタルカメラ（1200万画素）で撮影したものを、35mmフィルムカメラの資料はアルバムにて整理・保管した。現場作業中に採取した炭化物やサンプル試料及び土器や石器、人骨等の同定については、専門機関へ業務委託・調査依頼を行った。

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

(1) 北谷町の位置と概要

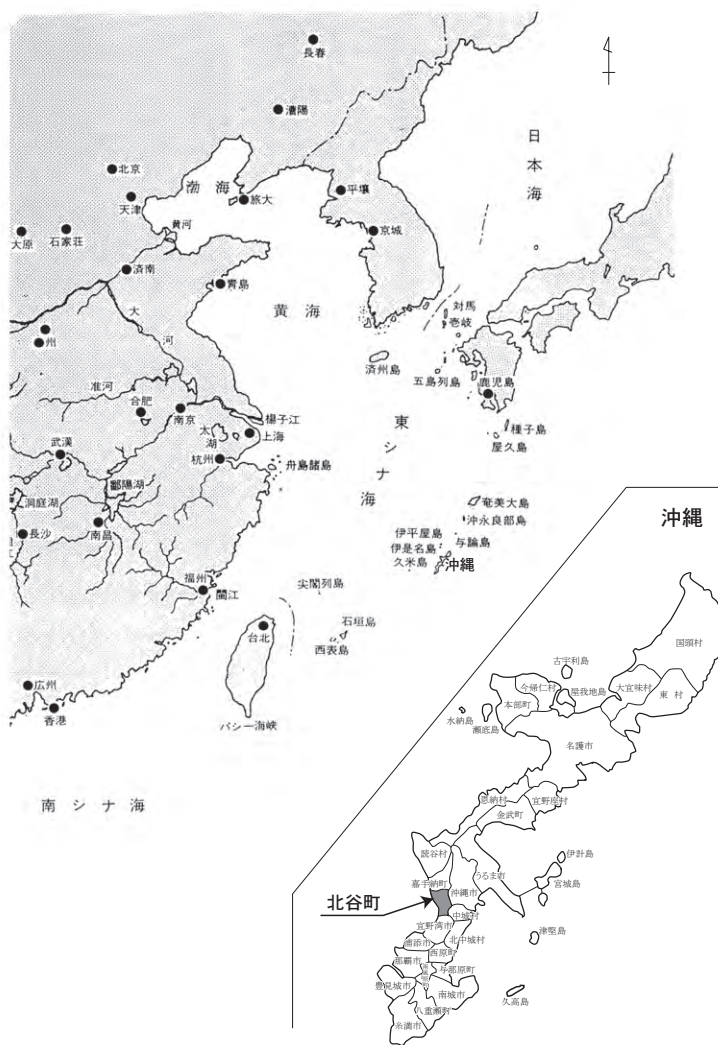
北谷町は沖縄島中部の西海岸、県都那覇市から北東約16kmに位置している。北に嘉手納町、東に沖縄市と北中城村、南に宜野湾市と接し、西は全域が東シナ海に面し彼方に慶良間諸島が眺望される。町の総面積は13.78㎢で、南北約6km、東西約4.3kmの長方形をなし、ほぼ中心（北緯26度18分58秒、東経127度45分55秒）に町役場は位置する。

2014（平成26）年12月末現在の人口は約28,862人で、現在進められている桑江伊平土地区画整理事業開始前（平成15年12月末）の26,358人 に比べ2,504人、率にして1.09%増となっている。今後も公有水面埋立地の利用や返還軍用地の跡地利用に伴って、一層の人口増加が見込まれている。

本町は、米軍基地の多い沖縄県内においても基地占有率が3番目に高い自治体で（町総面積における軍用地の比率は53.5%）、基地の殆どは利便性に富む国道58号沿いの平地に集中している。そのため土地利用上大きな制約があり、丘陵台地からなる東部地域と海岸低地や埋立地の広がる西海岸地域の狭小な町土で、まちづくりや生活環境整備が行われている。

産業は、西海岸地域を中心に第三次産業の割合が大きく今後の伸びも予測されている一方、第一次、第二次産業は減少傾向にある。現在は、都市との共生・交流を目指したフィッシャリーナ整備事業や自然海製塩事業など、地域特性を生かした新しい地場産業の創出に取り組んでいる。

交通網は、那覇市から本島北部へ延びる主要幹線道路の国道58号が西海岸側を縦断し、町域北側より県道23号線、24号線、130号線がそれぞれ国道58号以東へ延び、概して交通の便に恵まれている。近年では、国道58号渋滞緩和のための道路拡幅や県道24号線のバイパス整備が進められている。



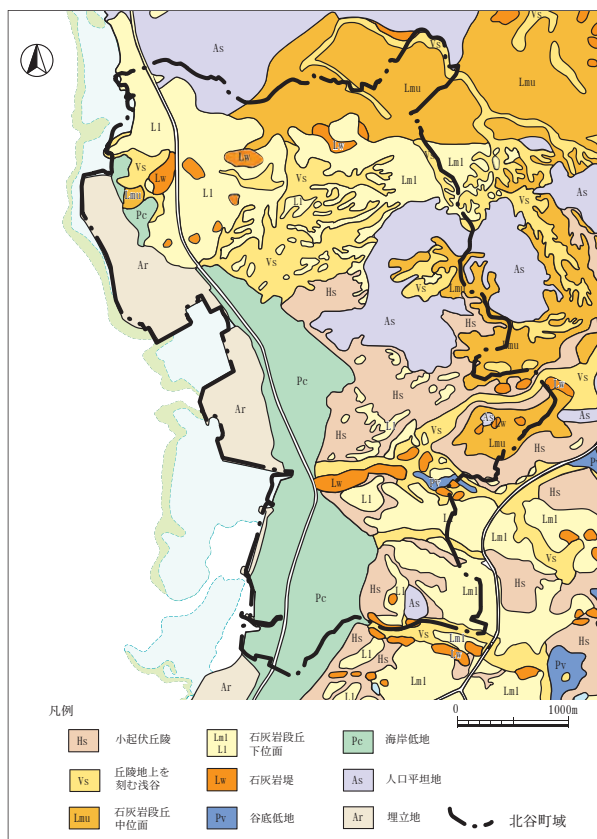
第1図 北谷町の位置

(2) 自然的環境

本町の気候は亜熱帯海洋性に属し四季を通して温暖である。年平均気温は22度程度、年平均湿度は77%前後で、冬の期間が極めて短い。年降水量は2,000から3,000ミリメートルと多雨で、特に5月中旬から6月下旬の梅雨期と8～10月の台風期に集中する。

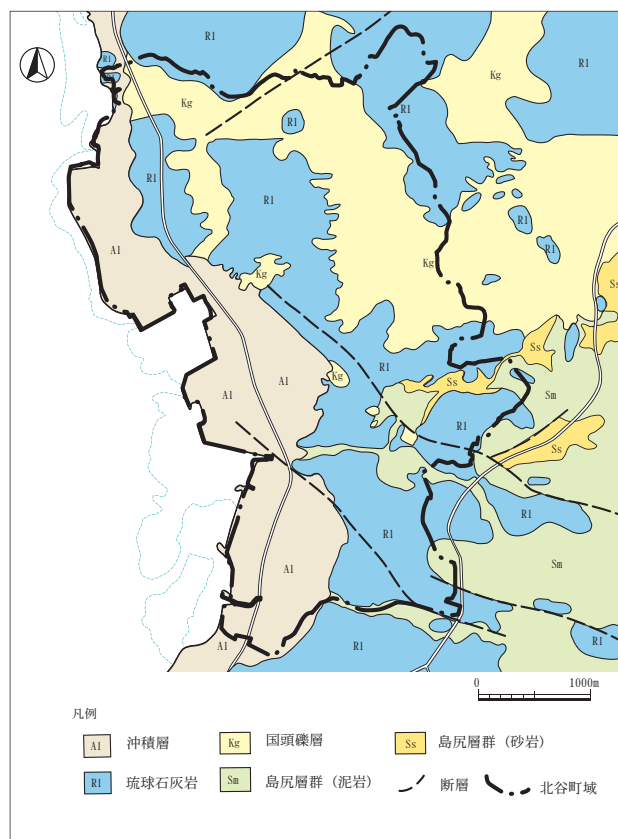
本町の地形を概観すると、町の北西-南東方向に走る桑江断層を大きな境とし、東高西低の様相を呈している。東・南部では標高100m以上、100～50m、50～30mの段丘地形が見られ、侵食が進んだ台地は起伏に富んだ地形を成し、北部では、洞穴やドリーネ、石灰岩堤、石灰岩丘等のカルスト地形が発達している。西部には低地及び海浜が見られ、海岸低地のほとんどは埋立地や人工ビーチとなっており僅かに自然海浜が残る。主な河川には、白比川、しらひがわ 普天間川、ふてんまがわ の二級河川があり、東シナ海へ向け西流している。

表層地質は、基盤の第三期中新世末から鮮新世の島尻層群を第四期更新世の琉球層群が不整合に覆い、低地では琉球層群を沖積層が不整合に覆っている。琉球層群は非石灰質の^{くにがみ}国頭礫層と石灰質の琉球石灰岩層からなり、前者は沖縄本島北部、後者は中・南部に分布する。本町は国頭礫層の南限となり、基盤の影響を受けて酸性化した土壌（国頭マージ）が確認される。水理地質は、基盤のシルト質粘土層が不透水層となり、これを不整合で覆う琉球石灰岩層中の砂質石灰岩が本町一帯に分布している。石灰岩層は多孔質で透水性がよく、帯水層となり不整合部の各所で湧出している。



第2図 北谷町周辺の地形分類

上図は『土地分類基本調査 沖縄本島北部 5万分の1』を一部抜粋し、改変・トレース



第3図 北谷町周辺の表層地質分類

上図は『土地分類基本調査 沖縄本島中南部地域 5万分の1』を一部抜粋し、改変・トレース

植生は、沖縄島北部に生育するイタジイ・イジュ・ヤマモモ等と、中南部に生息するアカギ・オオバギ・ヤブニッケイ等が混生し、学術的にも貴重な地域となっている。森林は、嘉手納基地内やその

周辺、庁舎北側の丘陵地、北谷城周辺、河川流域に比較的良好に残るも、その割合は町土の7%と決して高くない（2006年4月現在）。動物相は、良好な植生が残っている場所を中心に、鳥類4目9科14種、爬虫類1目4科6種、両生類1目3科3種、大型土壤動物14目1,411種の個体が確認されている。また、2000（平成12）年に行われた動物調査では、希少性の高い哺乳類のオリオオコウモリ、鳥類のミフウズラ、昆虫類のクロイワゼミ等を含む陸棲動物や、海域、汽水域、河川域で多様な水棲動物が確認されている（北谷町教育委員会，2005）。

第2節 歴史的環境

本町では、平成27年1月現在で54遺跡が確認されている。以下に各時代の歴史的環境を概観する。

（1）先史時代

先史時代に属する遺跡は主に西海岸に集中している。町内最古の遺跡（旧石器時代）である鹿化石出土地と桃原洞穴遺跡は町東側の台地上に位置している。桃原洞穴遺跡からは化石人骨（約16,000年前）が発見されたとされているが、近年の研究では中世または近世初めの可能性が指摘されている。

貝塚時代前Ⅰ～Ⅴ期（縄文時代相当期）の主な遺跡には伊礼原遺跡、伊礼原E遺跡、砂辺貝塚、クマヤー洞穴遺跡が挙げられる。伊礼原遺跡は本町のほぼ中心に位置し、ウーチヌカーと呼ばれる湧水を源とする低湿地区と砂丘区からなる縄文時代前期から戦前に至るまでの複合遺跡である。低湿地区では古環境の復元が可能な程の植物遺体や、県内最古となる筧を伴う貯蔵穴が発見された。砂丘区では高波によって砂丘と居住地が侵食され、その後砂丘の回復と共に居住域が拡大していく様子が確認された。出土遺物は、約7,000～6,000年前の爪形文土器から戦前までの長期に亘り、なかには九州の曾畑式土器や糸魚川産のヒスイ等、海を渡ってもたらされた遺物も確認された。この様に重要な発見が相次いだことから、本遺跡は2010（平成22）年に国史跡に指定されている。伊礼原E遺跡は伊礼原遺跡の南に位置し、縄文時代後期頃に遺跡の西側が津波により侵食され、伊礼原遺跡同様、自然災害に見舞われていたことが判明した。砂辺貝塚とクマヤー洞穴遺跡は本町の北西に位置し、前者からは前Ⅳ期の方形住居址が、後者からは前Ⅴ期の改葬人骨が検出されている。

貝塚時代後期（弥生～平安並行期）の代表遺跡には小堀原遺跡と後兼久原遺跡が挙げられる。前者は町役場の北西100mに位置し、県内最古の年代値（10～12世紀）を示す大麦・稲・アワが発見された。後者は町役場建設の際に緊急発掘調査が行われ、12世紀初頭の住居と高倉がセットで検出されたほか、同時期の畠址や埋葬人骨が発見された。両遺跡は、狩猟採集社会（貝塚時代）から農耕社会（グスク時代）への移行期に当たり、グスク時代の成り立ちを考える上で重要な遺跡である。

（2）グスク時代・古琉球

本町におけるグスク時代の代表的な遺跡には北谷城が挙げられる。町役場から南へ約1.3kmの石灰岩丘陵上に立地する北谷城は本町で唯一残存するグスクで、発掘調査成果から12世紀に始まり、14世紀後半から15世紀中頃に石垣が構築され、15世紀後半に終焉を迎えたと考えられている。北谷城に関しての明確な記録はなく、金満按司や大川按司、谷茶按司の3系統の興亡があったと伝えられているが伝承の域を出ない。その他の言い伝えとしては、1609年の薩摩侵攻時に薩摩豊佐敷興道ようちようほうが北谷城に守備隊として配されたが、首里陥落の報を聞き自刃したという話が残っている。

「北谷」とは、いつからそう呼ばれるようになったか定かではないが、嘉靖年間（1522～1566年）の兪姓大宗家家譜中に「北谷間切平安山地頭職」の文字が見られることから、古琉球には北谷という地名が存在していたようである。また、1577年に琉球国王が地方役人に給した辞令書に「きたたんま

きり」と見られることから、当時は北谷を「きたたん」と読んでいたようである。その後「きたたん」は「きちゃたん」から「ちちゃたん」へと少しずつ言語上変化し、現在の「ちゃたん」となっている。

(3) 近世

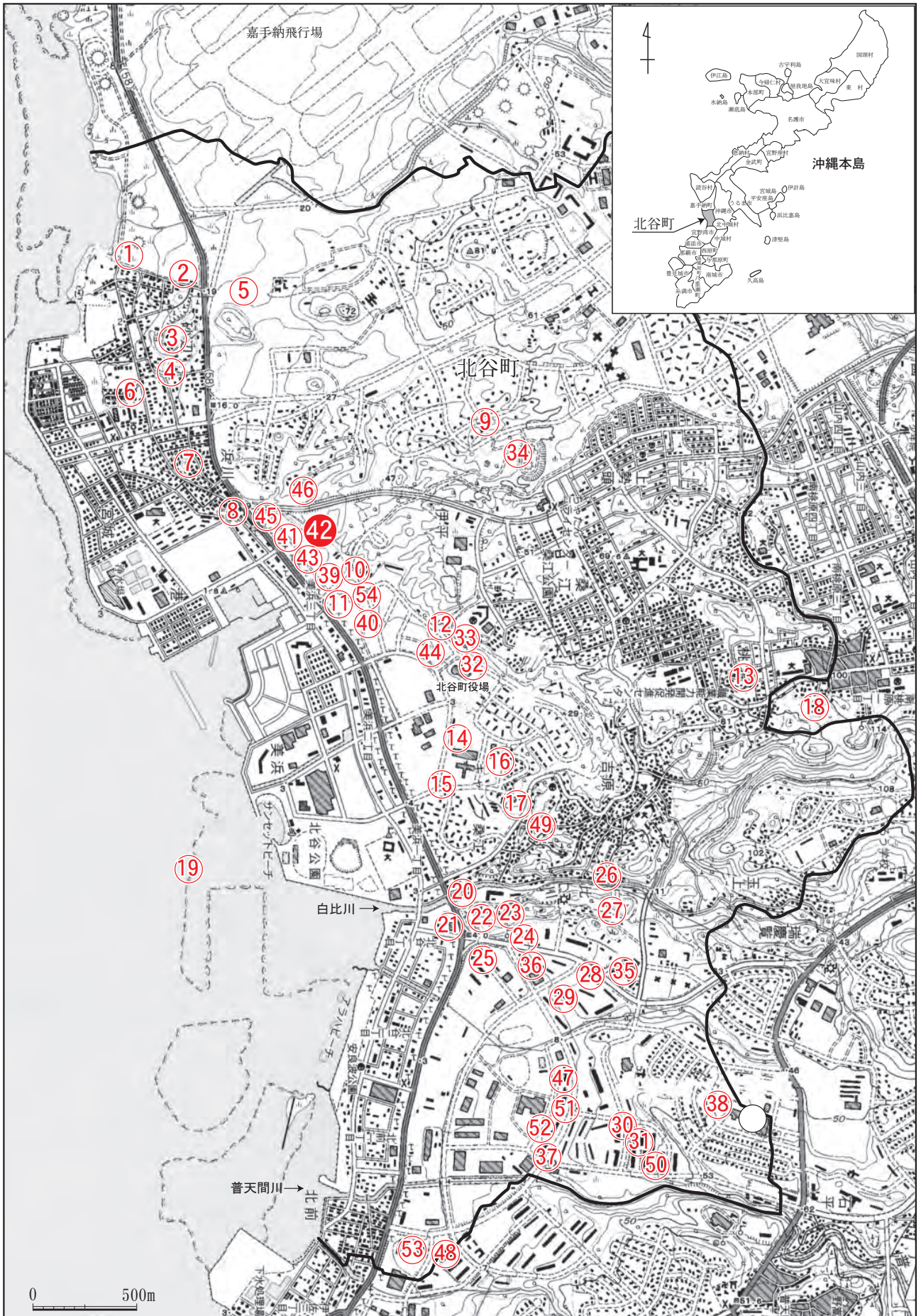
1649年に作成された『絵図郷村帳』をみると、近世の北谷間切には、北谷、くわい（現在の桑江）、平安山、すなへ（砂辺）、野国、屋郎（屋良）、賀手納（嘉手納）、山内、あきな（安仁屋）の9つの村があったことが分かる。1660～1670年代には、間切の分割・新設に伴って山内が越来間切に、あきなが宜野湾間切に割かれ、新たに玉代勢、伝道、伊礼、浜川、野里が誕生し、計12村となって近代まで引き継がれた。1700年代前半になると首里の士族層が地方へ下り、屋取として生活し始める。北谷は屋取が多い地域で、上勢頭古墓群や大作原古墓群は屋取集落の人々によって作られたものである。近世末期の1840年には、北谷沖にイギリス商船のインディアン・オーク号が座礁する事件が起こる。北谷間切の人々は同船の乗組員全員を救助・保護したほか、ジャンク船を建造・提供するなど、当時異国船打払令が発令されていた日本において異例の対応を取った。この事件後、英国では琉球人のことを「善きサマリア人」と称すようになった。余談ではあるが、インディアン・オーク号事件のやりとりは、ドラマ「テンペスト」にも取り上げられている。また、この事件をきっかけに2000年の沖縄サミットでは英国のブレア首相（当時）が北谷町を訪問し、その後、北谷・英国間での語学留学が開催されるに至った。インディアン・オーク号座礁地では、当時の積み荷の一部が今も海底に残され、海底遺跡として位置付けられている。

(4) 近代・現代

1908（明治41）年に施行された島嶼町村制以後、北谷間切は北谷村^{ムラ}となった。戦前は水田の広がる農村として栄えていたが先の大戦で焦土と化し、沖縄戦や戦後の米軍基地建設により地形は大きく改変された。米軍上陸直前に守備隊が建設した特攻艇秘匿壕は、北谷城が立地する丘陵北側に現在も残されている。戦後は村全域が米軍の軍事占領下に置かれ、中でも嘉手納基地の存在は村を南北に二分し行政執行に支障をきたす要因となった。これらを受け、1948（昭和23）年には北谷村と嘉手納村に分村し、1980（昭和55）年には北谷村から北谷町へと町制移行している。

<引用・参考文献>

- 北谷村役場 1961 『北谷村史』
- 地域創造研究所 1973 『コザ市総合開発計画調査報告書』
- 北谷町役場 1986 『北谷町史 第2巻 資料編1 前近代・近代文献資料』
- 北谷町教育委員会 1994 『北谷町の遺跡—詳細分布調査報告書—』
- 北谷町役場 1994 『北谷町史 第3巻 資料編2 民俗下』
- 沖縄県立博物館 2002 『沖縄県立博物館復帰30周年記念特別展 港川人展～元祖ウチナーンチュ～』
- 北谷町教育委員会 2005 『北谷町史 第1巻 通史編』
- 北谷町教育委員会 2005 『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査』 北谷町文化財調査報告書 第23集
- 北谷町教育委員会 2006 『北谷町の地名—戦前の北谷の姿—』 北谷町文化財調査報告書 第24集
- 北谷町教育委員会 2007 『伊礼原遺跡』 北谷町文化財調査報告書 第26集
- 北谷町総務部企画財政課 2009 『沖縄県北谷町・町勢要覧』
- 北谷町教育委員会 2010 『伊礼原E遺跡』 北谷町文化財調査報告書 第31集
- 北谷町 2010 『北谷町緑の基本計画基礎調査〈報告書〉』



第4図 北谷町の位置と遺跡分布

第1表 北谷町遺跡一覧

2015年現在

No.	遺跡名	時期	所在地
1	砂辺(すなべ)サーク原貝塚	貝塚後期	字砂辺差久原
2	砂辺サーク原遺跡	貝塚前IV期～近世	字砂辺加志原
3	砂辺貝塚	貝塚前IV期～グスク	字砂辺村内原
4	砂辺ウガン遺跡	貝塚後期	字砂辺加志原
5	カーシーノボントン遺物散布地	貝塚前V期	字砂辺加志原
6	クマヤー洞穴遺跡	貝塚前II期～戦前	字砂辺村内原
7	浜川千原岩山(はまがわせんばるいわやま)遺物散布地	貝塚前V期	字浜川浜川千原
8	浜川ウガン遺跡	貝塚後期	字浜川浜川
9	上・下勢頭区古墓群(かみ・しもせどくこぼぐん)	近世	字上勢頭平安山伊森原・伊礼伊森原・下勢頭平安山下勢頭原
10	伊礼原(いれいばる)遺跡	貝塚前I期～戦前	字伊平伊礼原
11	伊礼原B遺跡	貝塚前I～V期・近世・戦前	字伊平伊礼原
12	桑江ノ殿(くわえのとうん)遺物散布地	グスク～近世	字桑江小堀原
13	鹿化石出土地	旧石器	字吉原栄口原・桃原
14	前原古島(めーばるふるじま)A遺跡	近世	字桑江桑江原・前原
15	前原古島B遺跡	近世	字桑江前原
16	伊地差久原(いじさくばる)古墓	近世	字桑江伊地差久原
17	前原古墓群	近世	字桑江前原
18	桃原(とうばる)洞穴遺跡	旧石器	字吉原東新川原
19	インディアン・オーク号の座礁地	近世	字北谷地先
20	池(いち)グスク	グスク	字吉原東宇地原・西宇地原
21	白比川(しらひがわ)河口遺物散布地	貝塚前II期	字北谷西表原
22	北谷城(ちゃたんぐすく)遺跡群	貝塚後期末～グスク	字大村城原
23	北谷城	貝塚後期末～近世	字大村城原
24	北谷城第7遺跡	貝塚後期～グスク	字大村城原
25	北谷番所址	近世	字北谷北谷原
26	吉原東角双原(よしはらあがりちぬまたばる)遺物散布地	グスク	字吉原東角双原・西角双原
27	山川原(やまがーばる)古墓群	近世	字大村山川原
28	玉代勢原(たまよせばる)遺跡	貝塚後期末～グスク	字大村玉代勢原
29	長老山(ちょうろうやま)遺物散布地	グスク～近世	字大村玉代勢原
30	大道原(うふどうばる)A遺跡	グスク	字北谷大道原
31	大道原B遺跡	貝塚前V期	字北谷大道原
32	後兼久原(くしかにくばる)遺跡	グスク	字桑江後兼久原・字桑江小堀原
33	ジョーミーチャー古墓	グスク	字桑江小堀原
34	伊礼伊森原(いりーいーむいばる)遺跡	グスク	字上勢頭伊礼伊森原
35	後原(くしばる)遺跡	グスク～近世	字大村玉代勢原
36	塩川原(すーがーばる)遺跡	グスク	字北谷塩川原
37	稲干原(んにふしばる)遺跡	貝塚後期	字北前稲干原
38	横嵩原(よこたけばる)遺跡	グスク	字北前横嵩原
39	伊礼原D遺跡	貝塚後期～近世	字伊平伊礼原
40	伊礼原E遺跡	貝塚前II期～近世	字伊平伊礼原
41	平安山原(はんざんばる)A遺跡	グスク～近世	字伊平平安山原
42	平安山原B遺跡	貝塚後期～近世・戦前	字伊平平安山原
43	平安山原C遺跡	貝塚後期～近世	字伊平平安山原
44	小堀原(くむいばる)遺跡	貝塚後期～近世	字桑江小堀原
45	千原(せんばる)遺跡	グスク	字伊平千原
46	大作原(うふさくばる)古墓群	貝塚後期・近世	字伊平大作原
47	東表原(あがりうむていばる)遺跡	貝塚前V期	字北谷東表原
48	新城下原(あらぐすくしちやばる)第2遺跡	貝塚前I期～近世	字北谷安仁屋原
49	東宇地原(あがりうじばる)古墓群	近世	字伝道原東宇地原
50	大道原C遺跡	近世	字北谷大道原
51	大道原D遺跡	グスク	字北谷大当原
52	高畔原(たかぶしばる)水田跡	近世～戦前	字北谷高畔原
53	安仁屋原(あにやばる)遺跡	グスク～近世	字北前安仁屋原
54	伊礼原A遺跡	貝塚前III期～貝塚後期	字伊平伊礼原

註：時代表記は概ね「グスク」→「10～17世紀前半」、「近世」→「17世紀後半～明治以前」、「戦前」→「1945年以前」 *番号は第1図と一致
(参考文献)

中村 恵・田場 勝也・他 1994『北谷町の遺跡—詳細分布調査報告書—』北谷町文化財調査報告書 第14集
中村 恵・東門 研治・島袋 春美 2005『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査—伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業—』北谷町文化財調査報告書 第23集
中村 恵・東門 研治・松原 哲志・島袋 春美・他 2008『伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡』北谷町文化財調査報告書 第27集

第Ⅲ章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査区及びグリッド設定

調査地は、確認調査の結果を踏まえ平安山原 140 番地一帯の標高 4.0~5.0mの平坦地に定めた。グリッド設定は、平成 18 年度に発掘調査を行った伊礼原 D 遺跡の設定方法を用いた。具体的には、1 辺 100mの大グリッドで区画整理事業地を覆い、大グリッドの中には1 辺 5 mの小グリッドを設けるものである。事業地の形状に合わせて任意に設定したグリッドであるため、グリッドラインと東西南北の軸は重ならない。グリッド名称は、大小ともグリッドの北東隅を基準に、南東へ 01~20、南西へ A~T とした (第 5 図)。本書での調査区は、大グリッド A3 と A4 の範囲内に位置している。

表土掘削

調査区の設定後、磁気探査を実施し機械力を用いて表土掘削を行った。磁気探査では、砲弾薬莖や鉄屑等、米軍に帰属する金属類が認められた。これら金属類を除去しつつ、バケット容量 0.8 m³のバックホウと 10 t ダンプにて米軍基地建設時の造成土及び確認調査時の埋土を掘削・運搬した。

包含層掘削及び遺構検出

遺物包含層は、遺物量や出土状況に応じて小形のスコップや手鍬、ねじり鎌を用いて掘削した。出土遺物は層位・グリッド毎に取り上げ、特徴的な遺物や一括遺物については実測図作成と写真撮影を行った。遺構検出作業は基本的にジョレンを用いたが、より精査が必要な箇所についてはねじり鎌を用いた。排土はベルトコンベアを使用して場外搬出し、バケット容量 0.3 m³級のバックホウと 4 t ダンプを用いて残土置き場へ運搬した。

遺構掘削

土坑や柱穴は基本的に長軸で半截し、溝は規模に応じて数箇所の土層観察用畦を残し掘削した。掘削には移植ごてやスプーン等を用いつつ、遺構内遺物を傷つけないよう必要に応じて竹串や竹べら等を用いた。一部の遺構埋土については、今後の分析資料用サンプルとして採取した。

記録作業

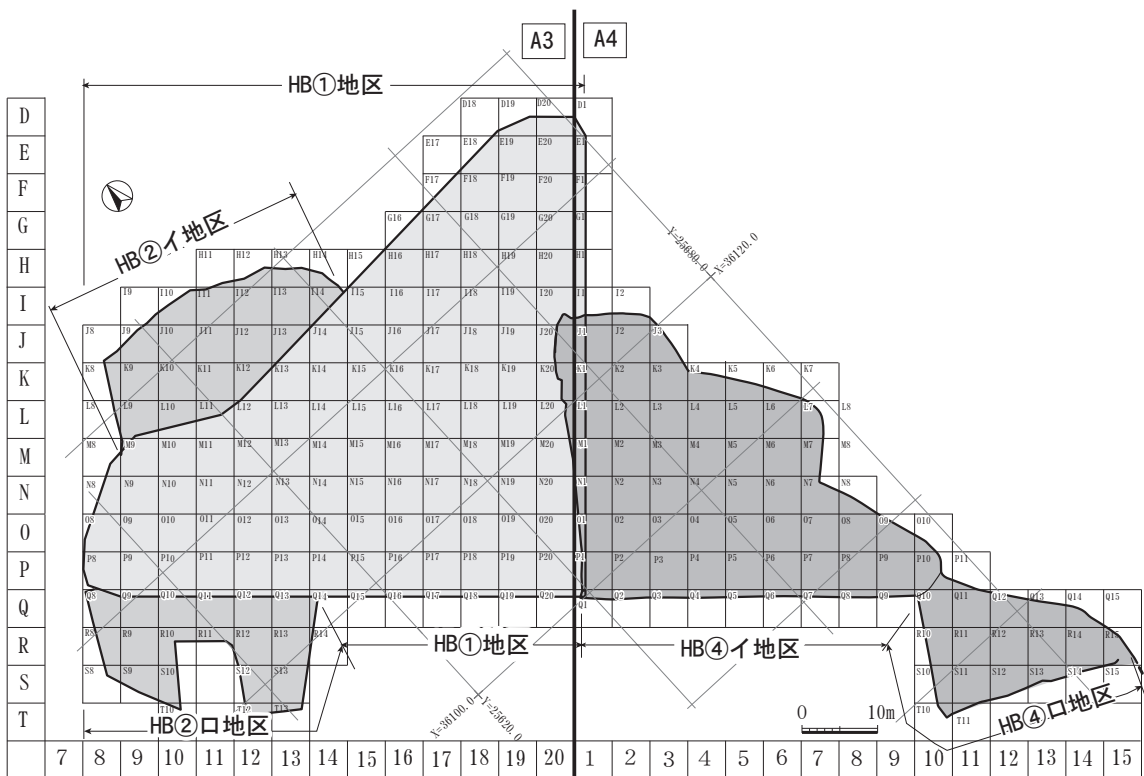
実測は主に平面図をトータルステーションで、壁面図を手実測で行った。写真撮影は、35mm (カラーリバーサル) 及び 6×7 のフィルムカメラ (カラーリバーサル・モノクロネガ) と、500~1000 万画素のデジタルカメラを使用した。遺構検出時と完掘時にはブーム式の高所作業車 12m と 24m を適宜使用し、全景撮影を行った。

自然科学分析

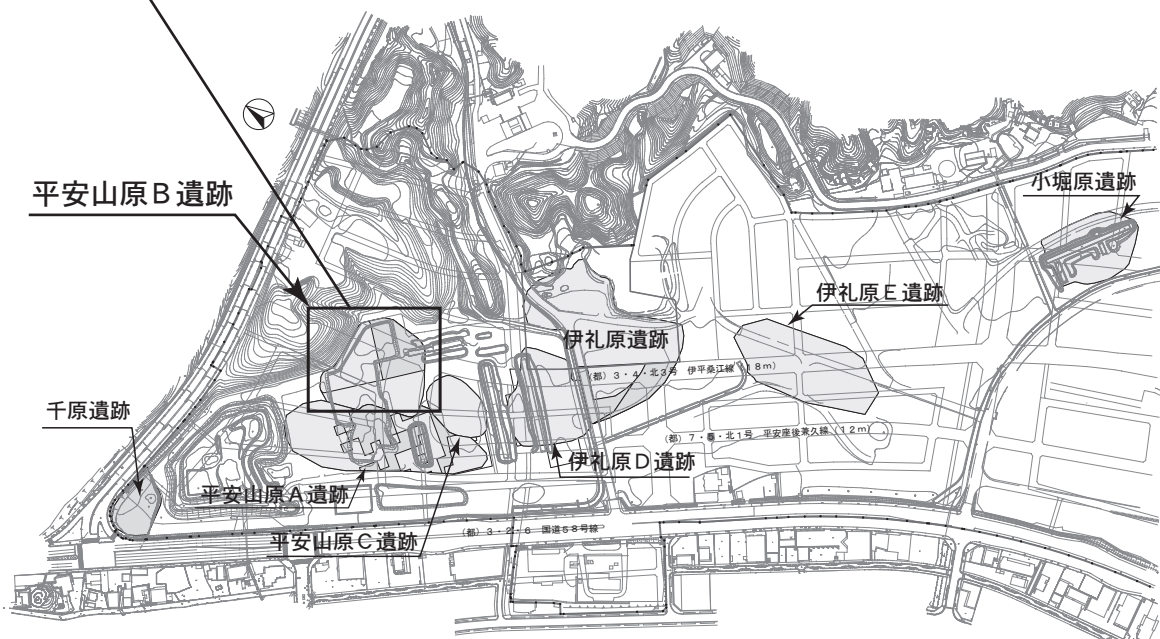
自然科学分析では、HB② (イ・ロ地区)、HB④ (イ・ロ地区) から採取した炭化物、土器片の放射性炭素年代測定 (7 点)、胎土分析 (1 点) を専門機関に委託した。分析結果は第 IV 章第 3 節を参照。

整理作業

洗浄済み遺物の注記後は、分類、接合を行い、復元可能な資料については焼石膏を用いて復元を行った。復元した資料は土器 10 点、沖縄産無釉陶器 1 点の計 11 点である。接合後の資料は特徴的な遺物を抽出し、実測、デジタルトレース (Illustrator CS) を行った。写真撮影では 1200 万画素のデジタルカメラを用い、Photoshop CS を使用して背景処理等を行った。



第5図 グリッド設定



第6図 平安山原B遺跡の位置

第2節 層序

平成20年度（HB①地区）、平成21年度（HB②イ・ロ地区）、平成23年度（HB④イ・ロ地区）の3調査区（図面5）の層序は6枚に大別される。Ⅰ層は戦後、Ⅱ層は戦前、Ⅲ層は近世、Ⅳ層はグスク時代、Ⅴ層は貝塚時代後期、Ⅵ層は海浜堆積層である。

第10・12～15図に層序、第11図にHB②イ地区の層平面分布、巻首図版3～11、第3表に土層観察表、第9図に層模式図を示す。

第Ⅰ層：戦後

米軍基地接収による造成と返還後の工事に伴う盛土である。本遺跡が所在する伊平地域は、1945年4月の米軍上陸後（この上陸以降を戦後とする。）から基地利用が始まり、丘陵は部分的に削平され沖積低地の造成が行われている。

基地整備による盛土の層厚は、東側（丘陵側）が厚さ約0.2～0.4m、西側（海側）で約0.5～1.4mと厚くなる。現地面の標高は、HB②ロ地区は約4m、HB②イ地区は約5mである。

HB①地区北東側の岩盤地帯では米軍埋設管の溝やフェンス支柱の基礎穴などが掘られて攪乱されており、HB①地区の中央部から北西側にかけて幅約7～15mの廃棄物投棄穴によって大きく破壊されていた。遺物は各時期のものが混在する。

HB②ロ地区の南・西壁のⅡ層（1層）では、炭化物・赤色・黄色土粒を多量に含む層や赤瓦層が見られる（第13図）。『北谷町の地名』を基にした図版87と比較すると、旧字平安山の祝女殿内小（ヌンドゥルチグラー）と呼称された屋敷に重なることから米軍基地接収の際に破壊されたものと思われる。

第Ⅱ層：戦前

戦前の旧字平安山集落北東側の屋敷や道路、耕作地に関連する黄褐色～暗褐色を呈するシルト質土。カワニナ、炭化物、小礫、軽石などを含む。層厚は0.2～0.9m、戦後の造成によって失われた部分や不明瞭な様相も窺える。

標高はHB①地区東側で約4.6m、南側のHB④ロ地区で約4m、HB①地区Q16の北西側やHB②ロ地区では約3～3.3mとなり、背後の丘陵から北西側に向かって傾斜する地形が窺える。

HB②ロ地区南壁の東側でⅢ層は途切れ、HB①地区西壁Q13～16ではⅢ層の堆積が見られないことから、傾斜地に生じた自然浸食、もしくは、人為的な削平の可能性のあるものと思われる。

遺構は、石組、溝、土坑、燃焼施設、井戸、窯跡、ピットが検出された。遺物は、沖縄産施釉・無釉陶器、陶質土器、本土産陶磁器、円盤状製品、瓦、鉄製品、銭貨などであるが、下位層の遺物も混在する。

第Ⅲ層：近世

明黄褐色～暗灰黄色を呈し、カワニナ、マンガンを含み、固く締まる。層厚はHB①地区東壁で0.1～0.3m、西壁で約0.1～0.2m、Q13～15ではⅡ層によって失われている。HB①地区南壁では約0.8～1mと厚く堆積する。

標高はHB②イ地区で約4.5m、ロ地区で約4.1m、HB①地区東側で約4.3m、南壁で約3.5m、西壁で約3m、HB④イ地区で約3.3～3.5m、ロ地区で約3.2mである。

HB①地区南側の厚い堆積は、耕作土の性格を有すると考えられる。近世耕作土と見られる厚い堆積は伊礼原B遺跡^{註1}にも見られる。

遺構は、建物址、溝状、石組、石列、ピット群が検出された。遺物は、沖縄産施釉・無釉陶器、

本土産陶磁器などと共にグスク時代の遺物が出土し、貝塚時代後期の遺物も混在する。Ⅲ層期の遺構の深度が下位層に達しており、遺構出土に下位層の遺物を含む。

第Ⅳ層：グスク時代

本遺跡西側の砂丘との間に形成された自然流路に堆積する粘質シルト層。本層は、グスク時代の遺物が出土する上部と無遺物層の下部に大別される。

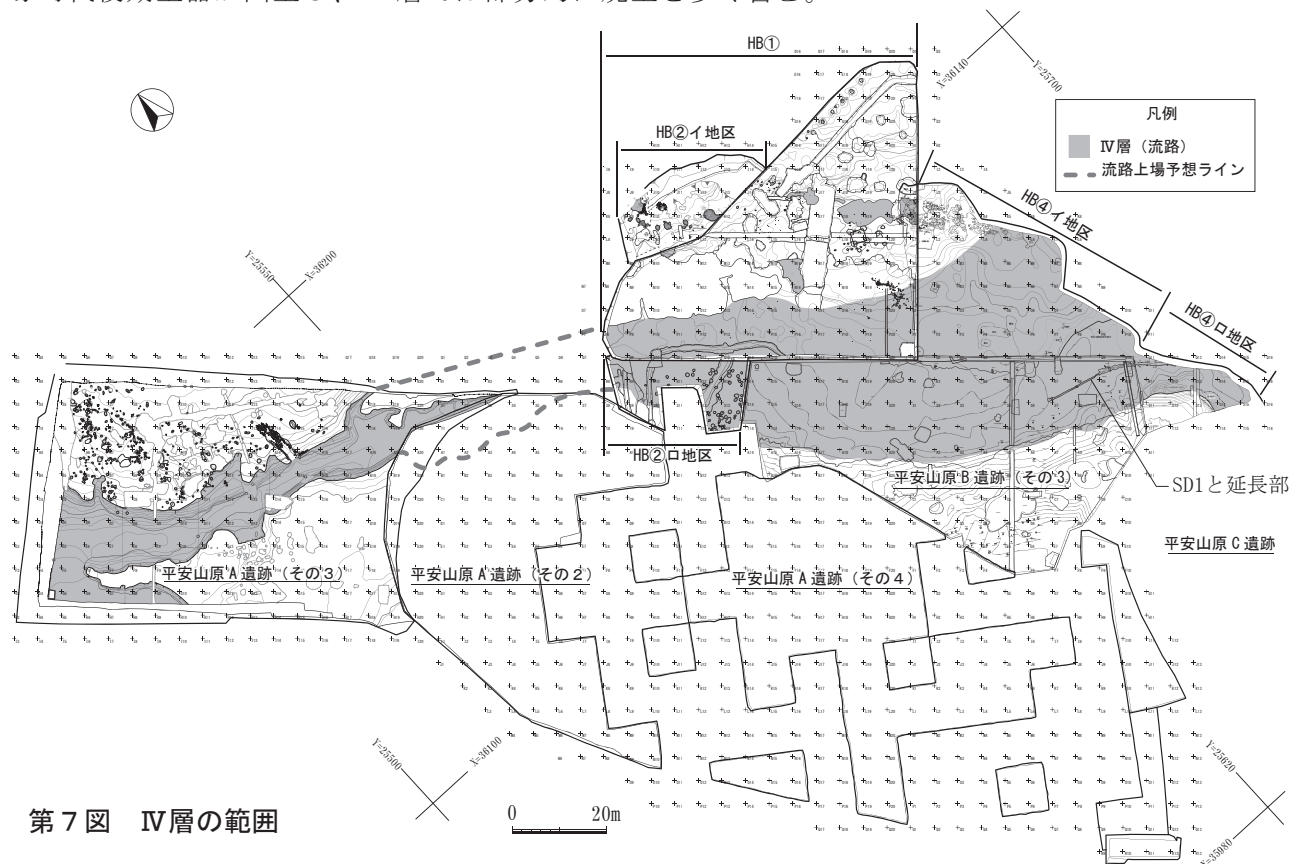
層上部は、グスク時代の遺物包含層である。丘陵側（東側）のHB①地区Lライン、HB④イ地区L1・2、K3 付近から西側（海側）に堆積し、この流路状の窪みは北西—南東方向に広がる（第7図）。3～4枚に細分され、青灰色～暗青灰色を基本とするが、HB②ロ地区では黄褐色系、HB④イ・ロ地区では灰黄色系を呈し箇所によって差異がある。水平堆積の様相を呈し、層厚は約0.2～0.6m、本層上面はHB④イ・ロ地区で標高約3m、HB②ロ地区で約2.8mである。

遺構は、HB②ロ地区で2071SK、2068SK、HB①地区で石列1、HB④イ地区で石列2が検出された。

層上部の遺物は、貝塚時代後期土器、石器、貝製品、グスク土器、カムイヤキ、白磁、青磁、染付、褐釉陶器、半練土器などが出土する。

層下部は、HB④ロ地区08・9、P7 付近から南側の流路が深さを増す砂丘の窪みに堆積し、6枚に細分される。基本的には無遺物層であるが、HB④ロ地区のQ・R10～14、S11～14では、砂丘の縁辺部に形成されたⅤ層期の貝層群を覆う。レンズ状に堆積し層厚は約0.9mである。

遺構は、HB④ロ地区（壁面Ⅳ）の15層上面（オリーブ黒色粘質土）でSD1が検出された。遺物は貝塚時代後期土器が出土し、13層では部分的に焼土を多く含む。



第7図 IV層の範囲

第Ⅴ層 貝塚時代後期

本層は、段丘崖下から前面の砂丘とその上位に形成された遺物包含層。

HB②イ地区では、中央ベルトの8枚（4・4'～6、7、9～11層）、層厚は0.3～0.9m。HB①地区では14枚に細分され、層厚約0.3～1.0m、HB④イ地区では試掘1北・東壁の2枚（9・20層）、層厚は

0.35m、HB④ロ地区では貝層群が堆積する（第19図）。

貝塚時代後期の遺構は、燃焼遺構、土器集中、貝集中部が検出され、遺物は土器、石器、貝製品、土製品などが出土した。

V層は堆積状況や出土遺物から、A、Bの範囲に大別した。

A：段丘崖下から前面の砂丘に形成された遺物包含層（HB②イ地区、HB①地区）

B：HB④ロ地区で砂丘上と砂丘縁辺部に形成された貝層群遺物包含層。

AのV層〔HB②イ地区中央ベルト：暗褐色シルト（4・4'層）、貝層①（5層）、貝層②（6層）、赤砂層、貝層③、黄砂層（9層）、黒砂層（10層）、灰色砂層、HB①地区東壁：5～18層、中央ベルト：7～14層）は、HB②イ地区からHB①地区15ライン付近までとなる。

同ライン付近で、HB①地区中央ベルト7層（暗褐色シルト）が上位となる堆積は、範囲確認調査トレンチ（2005）の貝塚時代後期の遺物包含層のⅢa層、HB①地区中央ベルト10・14・19層は、範囲確認調査のⅢb・Ⅳ層に対応するものと判断される。

HB①地区中央ベルトや範囲確認調査トレンチで確認される東側への広がり、HB④イ地区でJ～Kに堆積し、K・L1の範囲確認調査壁面では、Ⅱ層によって失われた様子が見られる（第15図）。

HB④イ地区J～K1～3の帯は岩盤地帯で、Ⅱ層期の窯跡構築によって壊されている。この帯からの堆積は、崩落礫を含みながら西・南側へ薄くなる。

K4～L6まで薄く延びるV層は、その西・南側ではⅣ層堆積による途切れが見られ、流路状の窪みが深さを増すO8・9、P7付近までとなる。このV層堆積範囲は砂丘の範囲でもある。

Aでは、HB②イ地区からHB①地区15ライン付近で阿波連浦下層式土器、浜屋原式土器が主体で、同ラインより南東側は大当原式土器が多くなる傾向となり、Bでは大当原式土器・くびれ平底土器が多い傾向が窺えた。本遺跡出土の土器形式の単純層は確認されていない。

段丘崖下であるHB②イ地区のV層は、中央部から西・南側に広がっており東側には堆積せず、北西側のK・L9・10では戦後の攪乱によってほとんど失われている。

HB②イ地区ではAは橙色シルト、貝層、赤砂層、黄砂層、黒砂層などで構成される複数の平面分布が検出されたことから①～⑧に分けて掘り下げた。

①では、崩落小礫を含む暗褐色シルト層（4・4'）は中央部のみ、背後の丘陵から流れ込みと見られる橙色シルト②の一部が、貝層①（5層）と貝層②（6層）の間に堆積する。

貝層②除去後の③面では、黄砂層（9層）と赤砂層、貝層③の一部が検出され、赤砂層とJ・K8・9の近・現代の燃焼施設除去後の④面で燃焼遺構（1039SX）が検出された。

黄砂層、黒砂層（10層）除去後の⑦面（白砂層）で1024SX、1028SXなどが検出された。1042SXの一部は、背後の丘陵から流れ込む山土層に重なる。白砂層除去後の⑧面^{註2}では、1042SX周辺から西側に同遺構に伴うと考えられる灰色砂層が堆積する。

これらの層のうち、貝層②出土炭化材（ヤマグワ）による¹⁴C分析結果は2,390±30BP、白砂層出土の土器付着煤による¹⁴C分析結果は2,350±30BP、燃焼遺構（1042SX）出土の炭化材による¹⁴C分析結果は2,290±20BP、黒砂層出土の阿波連浦下層式土器の¹⁴C分析結果は2,220±23BP、範囲確認トレンチ3出土の土器（第50図154）による¹⁴C分析結果は1,890±30BPである（第Ⅳ章3節）。

Bは、流路状の窪みに迫り出した砂丘の縁辺部と砂丘上に形成された貝層群である。

HB④ロ地区中央部より南側のQ・R10～14、S11～14の範囲に形成された貝層群のうち、貝層群Ⅰは砂丘縁辺部のⅣ層下部〔HB④ロ地区（16層）〕に覆われ、貝層群Ⅲは砂丘上で検出された。

隣接する平安山原C遺跡でも、貝層群が検出されていることからその延長と思われる。

第Ⅵ層：海浜堆積層

段丘崖下から西・南側へ傾斜する海浜堆積層。粗い白砂、砂礫や互層堆積も見られる。

HB②イ地区では、中央ベルトの12～15層、灰色砂層壁面の4層、1042SX下位に中砂の白砂層②(E層)、砂礫の海砂層(F層)、山斜面トレンチ(第10図)では磨滅したサンゴ礫を含む海砂層(4層)が堆積する。HB①地区では、南壁8層、西壁13層、HB④イ・ロ地区24層である。

砂丘の緩斜面付近にあたる、HB①下層トレンチ3では、粗砂・細砂、砂礫の互層堆積が見られ緩斜面に生じた窪みが埋没したと様相を呈する(巻首図版5)。

範囲確認調査壁面(第15図)の黄白色砂層〔同図V層〕は、HB①地区下層確認トレンチ3よりやや内陸側で砂質石灰岩礫を覆い、平坦面を有しながら西側(海側)に傾斜する堆積である。

この砂層は「上部の白砂にサンゴ枝や礫を密に含み、その下部は粗砂と細砂の互層堆積」(「平安山原B遺跡 北谷町文化財調査報告書第29集」2008)である。

この砂層の堆積は、HB④イ地区においても類似する様相が見られ、同地区の砂層の堆積は、南側への傾斜も見られる(巻首図版10)。下層確認トレンチ4では、この砂層の下位に砂質石灰岩の堆積が見られ、河川堆積に関係するものと見られる灰色を呈している^{註3}(巻首図版10)。

HB④ロ地区壁面Ⅳには、同壁南端に堆積する粗い砂層〔25層(枝サンゴや自然貝を僅かに含む)〕が堆積しており、南東側に広がるものと思われる。同地区下層確認トレンチ4下部には、暗茶褐色の腐植土層と見られる堆積があり、更に下位には砂礫層が堆積する(巻首図版9)。腐蝕土層出土の樹木片の¹⁴C分析結果は $2,130 \pm 30BP$ である。

HB②ロ地区では、当初8層以下を海浜堆積層と考え、下層確認トレンチ調査を実施した(第13図:HB②ロ南壁)。しかし、8層にはカワニナが多く含まれており、貝塚時代後期の土器胴部片も出土している。また、粘質シルト層である13層には、表面が炭化した木や炭化物が含まれており、湿地堆積の様相を呈している。炭化材(広葉樹)による¹⁴C分析結果は $1,600 \pm 20BP$ である。これらの状況に加え、隣接する調査区におけるその後の調査成果などから、8～13層は流路堆積、すなわち第Ⅳ層の範疇に含まれるものと判断するに至った。

なお、13層直下には固結の弱い海性の砂礫層(14層)が堆積する。HB②ロ地区においては、この14層以下を第Ⅵ層(海浜堆積層)にあてるのが妥当である。

小結

平安山原B遺跡は、伊礼原・平安山原地区で確認されたビーチロック^{註4}より内陸側に堆積する海浜堆積のⅥ層を基盤に、遺跡背後の丘陵の段丘崖下から前面に形成された砂丘に貝塚時代後期の遺跡が立地する。

阿波連浦下層式土器、浜屋原式土器が主体となる頃の砂丘がHB②イ、HB①地区15ライン付近、その後さらに砂丘が拡大するHB④イ地区では大当原式土器が主体となる。また、HB④ロ地区の砂丘上と縁辺の貝層群では大当原式土器・くびれ平底土器が出土し、同砂丘には平安山原C遺跡が立地する。

この砂丘の形成と土器形式の年代を示す¹⁴C分析による成果は、Aで細分されたHB②イ地区のV層堆積の累重の数値を示しているが、貝層②出土資料による¹⁴C分析結果は、HB②イ地区出土資料で最も古い数値を示す結果であった。このことは、不安定な砂の堆積や砂丘の起伏、人の活動によって生じた可能性が考えられ各層の出土土器が接合されたことの要因となったものと思われる。

HB②ロ地区下層確認トレンチの堆積は、海浜の環境がⅣ層堆積の頃まで続いていたことを示して

いるものと考えられる。

IV層は、この拡大した砂丘間の流路の窪みにカワニナを含む水成堆積の様相を示していることから、淡水域の環境であったことが考えられる。この淡水域は、IV層が堆積する自然流路の南側で、沖積低地を蛇行しながら海へ西流するナガサ川に起因するものと考えられる。戦前のナガサ川は、これまでの調査の成果から、平安山原C遺跡と伊礼原D遺跡の間で河川と考えられる痕跡が確認されていることから、HB④口地区はナガサ川の流域に接していたものと思われる。

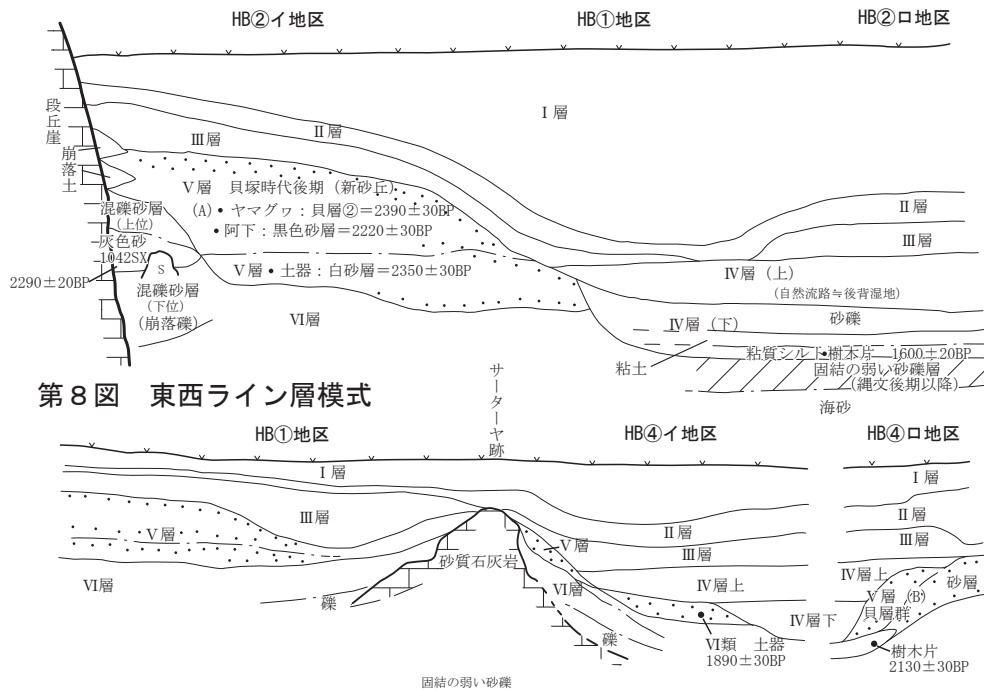
この砂丘間に形成された流路状の窪みは自然流路と考えられ、HB②口地区下層確認トレンチ 13層の年代が $1,600 \pm 20BP$ （紀元5世紀前半から6世紀中葉）の測定値を示し、IV層・III層出土遺物から、湿地堆積が11・12世紀の頃には陸地化していたことを示しているものと推察される。

自然流路に堆積する、IV層上部に遺構が構築されているが、遺構出土の遺物からは、グスク時代の遺構を特定する結果には至らず、グスク時代から近世の遺構として捉えているが、一定程度のグスク時代の遺物出土量や分布からIII層下部は、グスク時代の生活面の存在を物語るものとする。

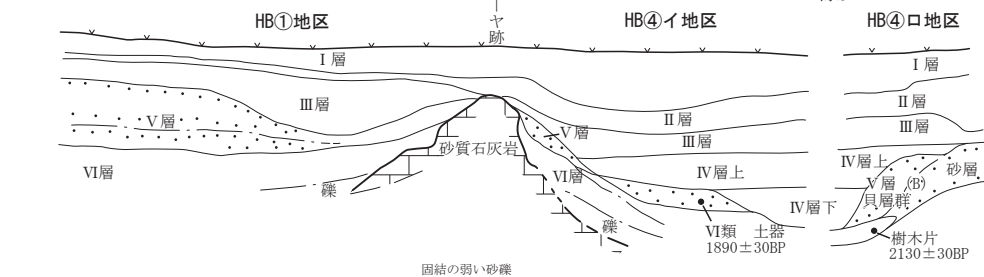
砂丘間の流路状の窪みが、湿地の様相を示すIV層堆積によって、陸地化しその後集落が形成される様子は、小堀原遺跡^{註5}でグスク時代の集落遺跡が立地したことと同様なことが平安山原B遺跡にも内包されているものと考えられる。

III層は、HB②口地区南壁の東側で同地区西側から延びるII層によって途切れ、HB①地区西壁 Q13～16に堆積は見られず、それより北西側では堆積していることから、傾斜地による自然浸食、もしくは、人為的な削平の可能性があるものと思われる。

III層の近世遺構には、切り合い関係が見られ、さらに、戦前の遺構にも新旧が見られることはグスク時代、近世、近・現代にかけて集落が立地したことが明らかとなった。



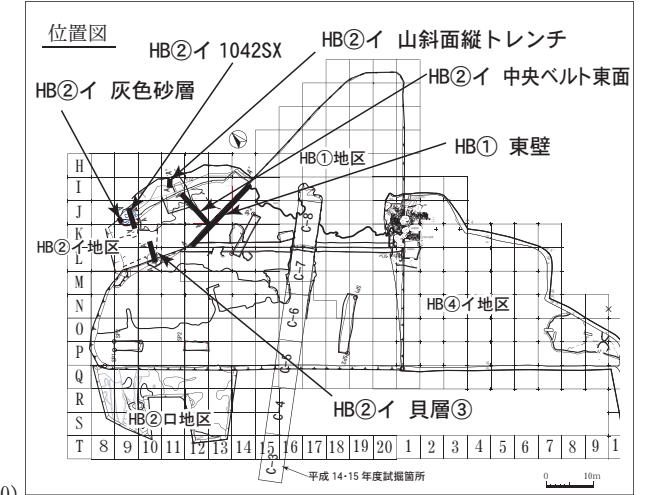
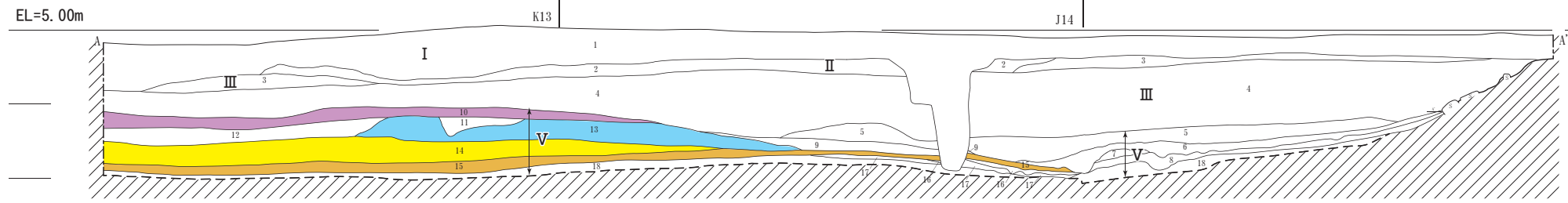
第8図 東西ライン層模式



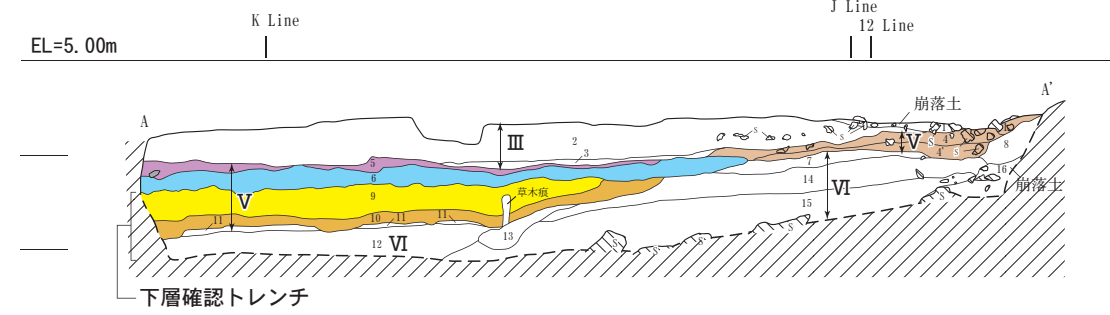
第9図 南北ライン層模式

註1 北谷町教育委員会 1989「伊礼原B遺跡」北谷町文化財調査報告書 第8集
註2 HB②イ地区⑦面は第三章3節に示し、HB②イ地区⑧面は紙面の都合上割愛した。
註3 大城逸朗氏の教示による。
註4 北谷町教育委員会 2005「キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査」北谷町文化財調査報告書 第23集
註5 北谷町教育委員会 2012「小堀原遺跡」北谷町文化財調査報告書 第34集

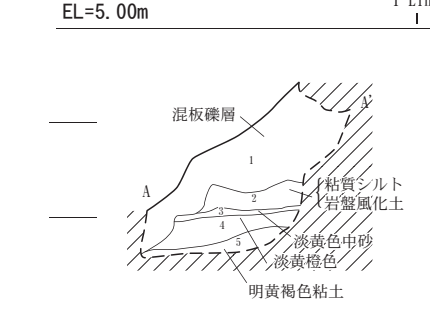
〈HB① 東壁〉



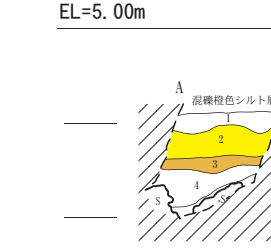
〈HB②イ 中央ベルト東面〉



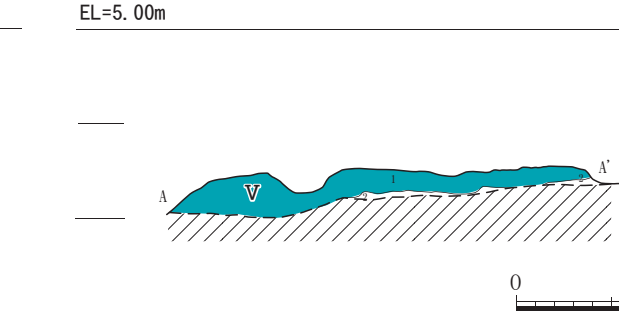
〈HB②イ 山斜面縦トレンチ西壁〉



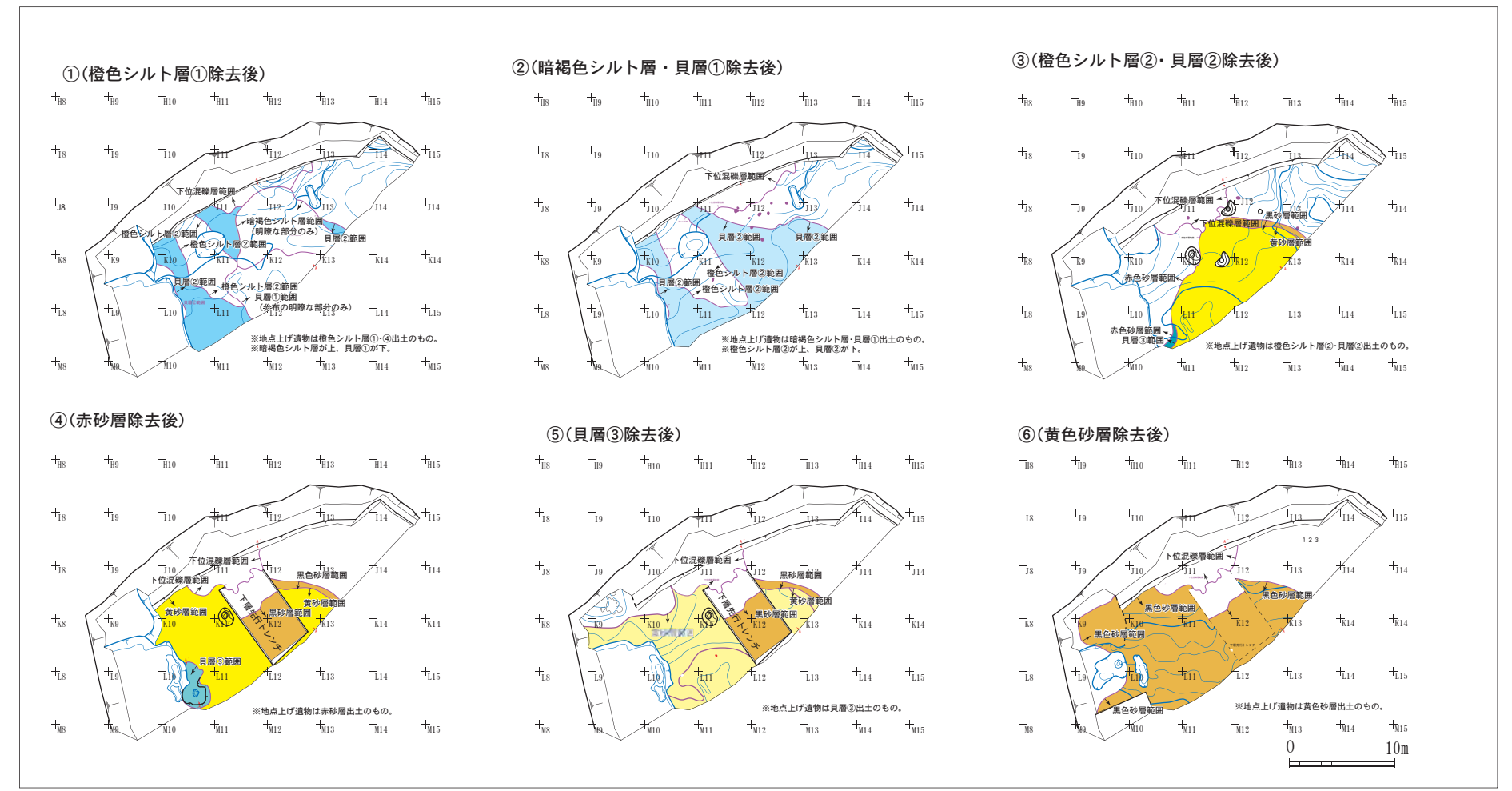
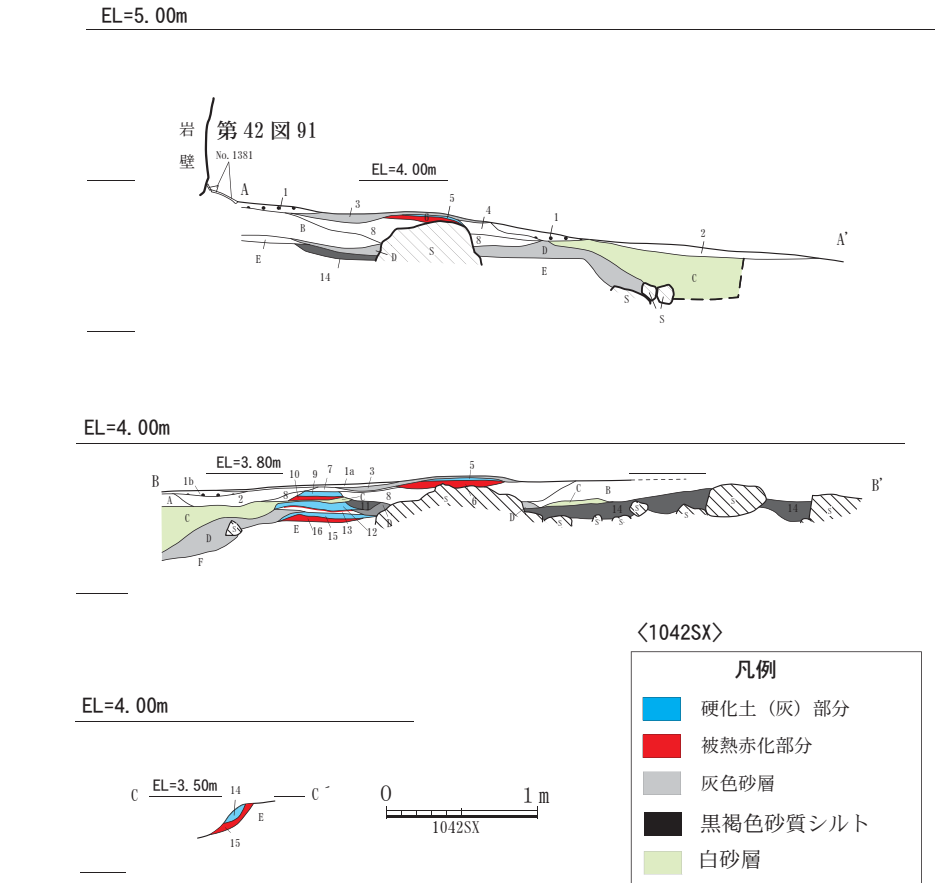
〈HB②イ 灰色砂層〉



〈HB②イ 貝層③〉 (K・L10)



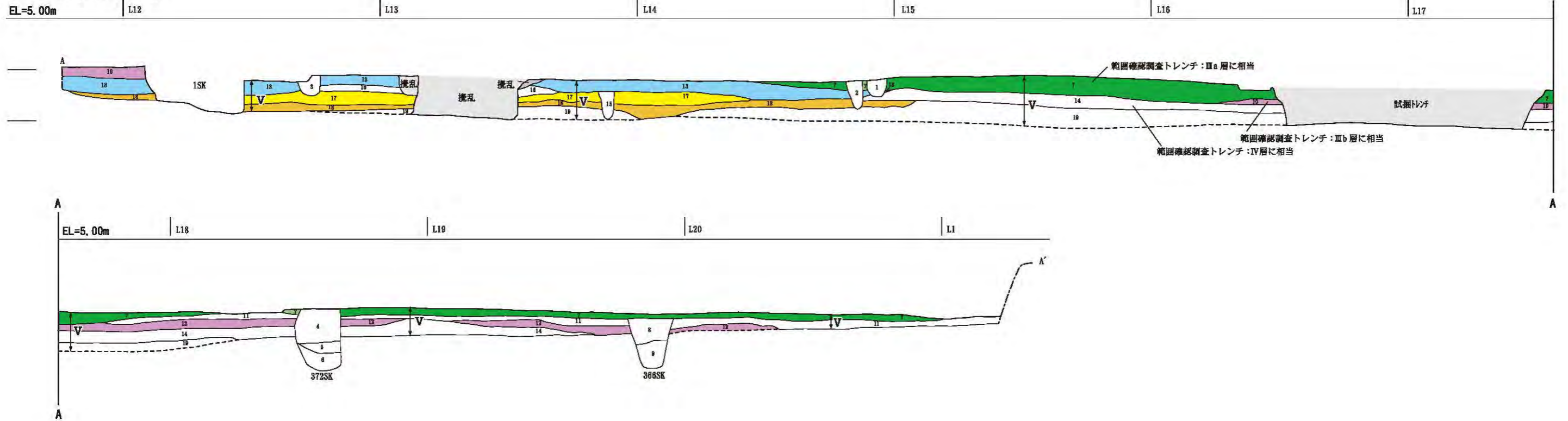
〈HB②イ 1042SX〉



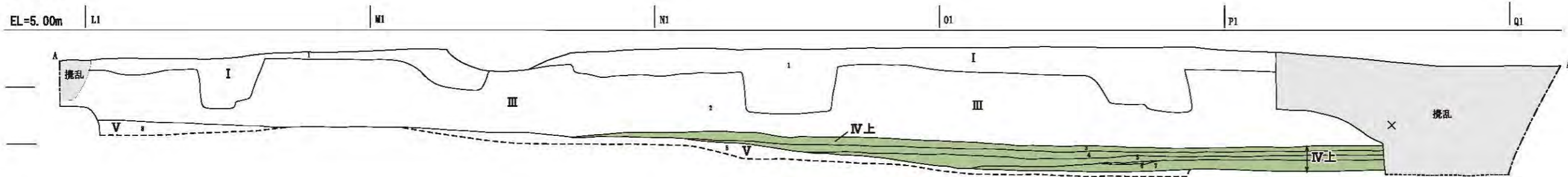
第 10 図 層序 1

第 11 図 HB②イ地区 V層 (細分) 平面分布

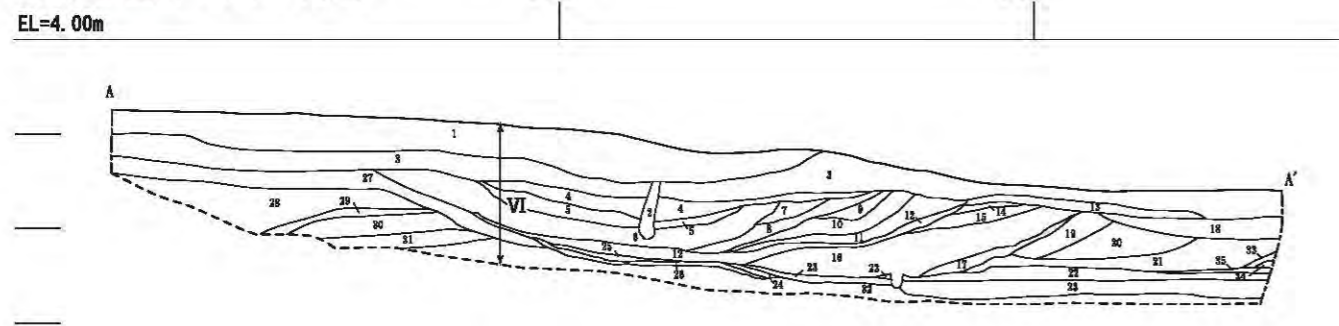
〈HB① 中央ベルト西面〉



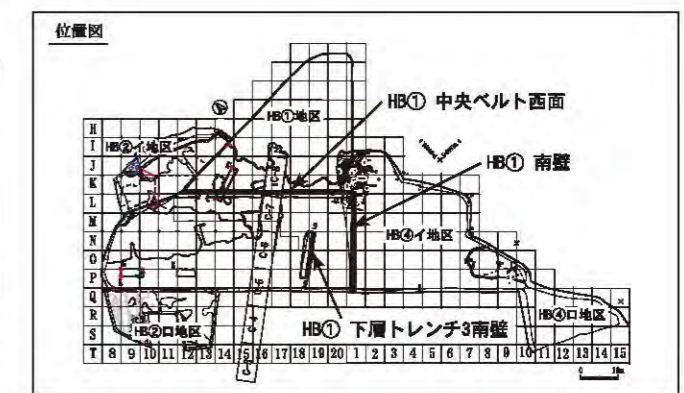
〈HB① 南壁〉



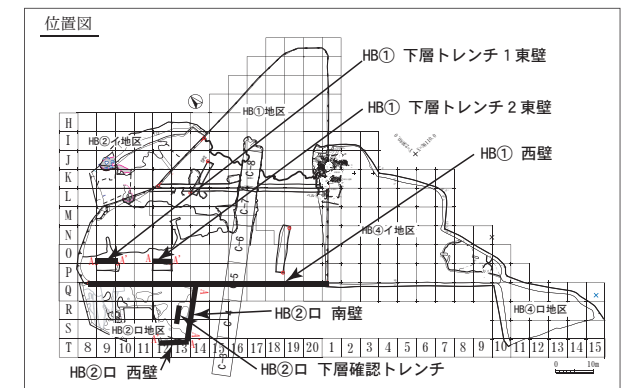
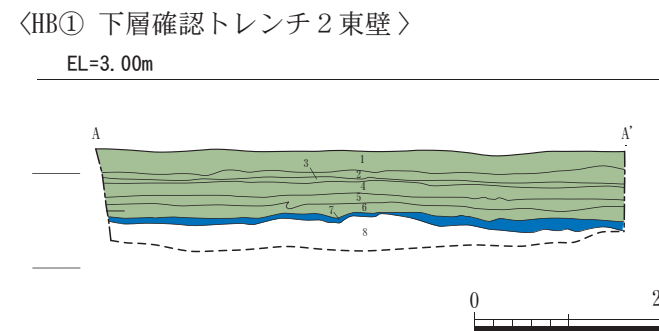
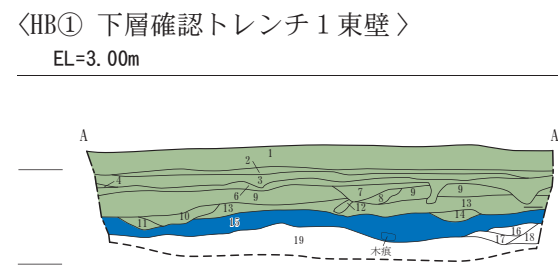
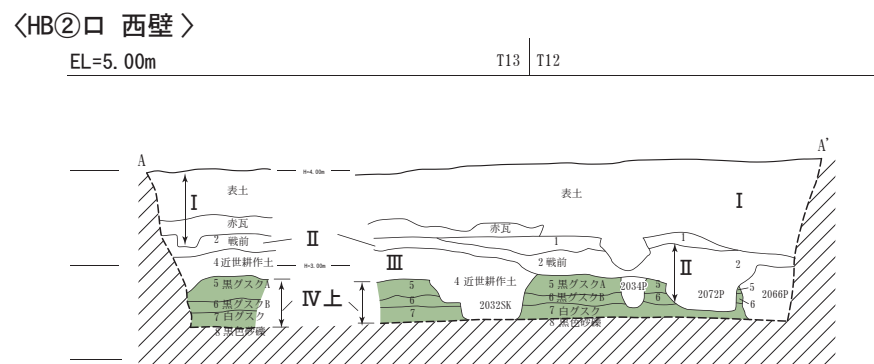
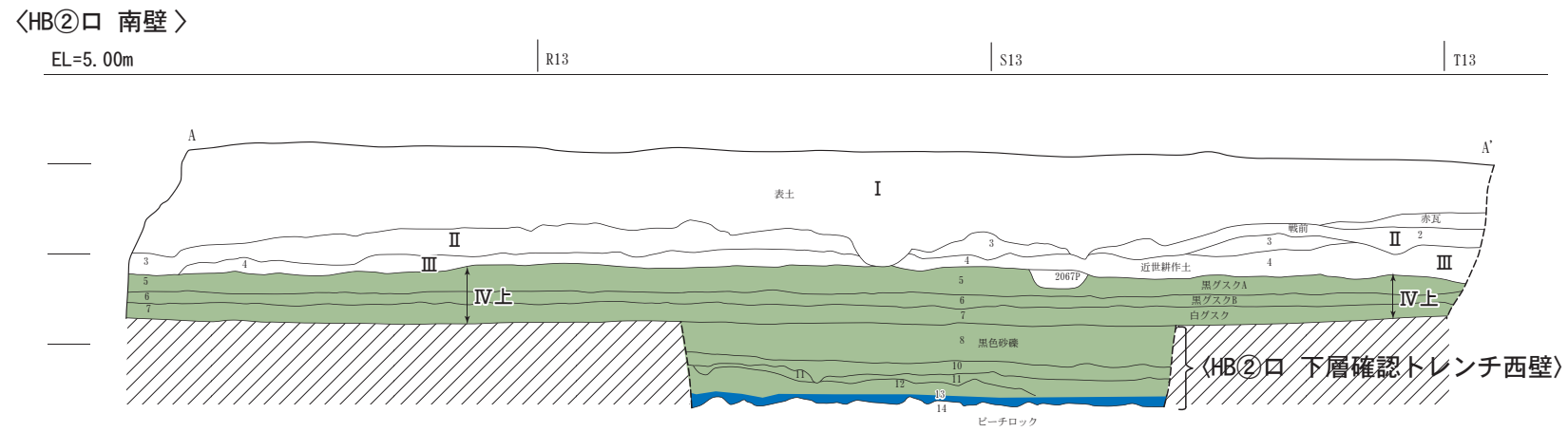
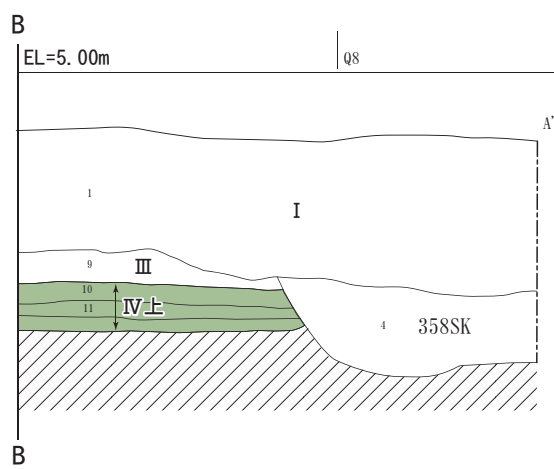
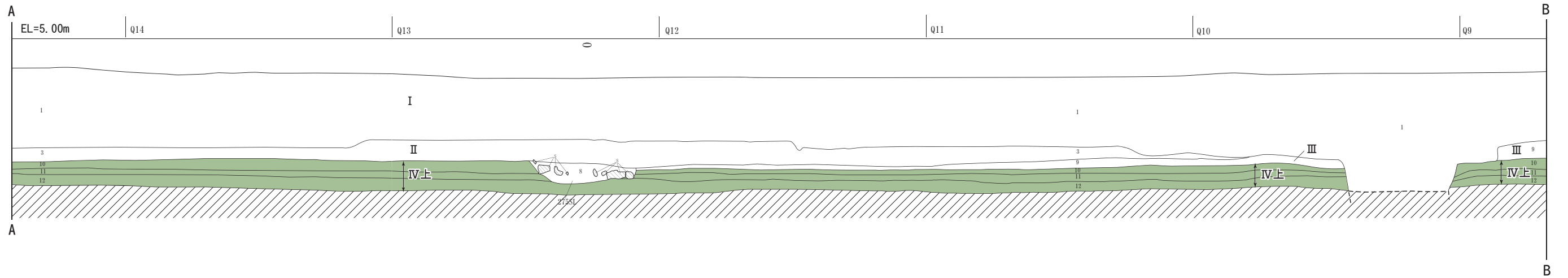
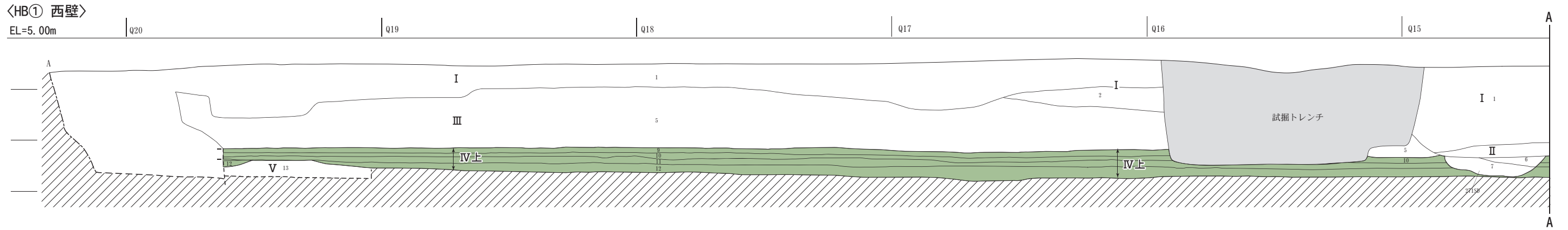
〈HB① 下層確認トレンチ3南壁〉



- 凡例
- IV上
 - 暗褐色シルト
 - 貝層① 5層
 - 貝層② 6層
 - 黄砂層 9層
 - 黒砂層 10層
 - 攪乱

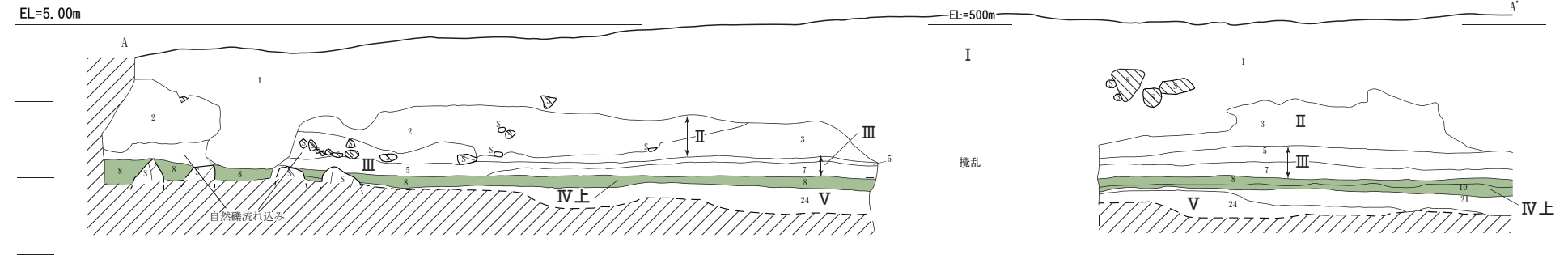


第12図 層序2

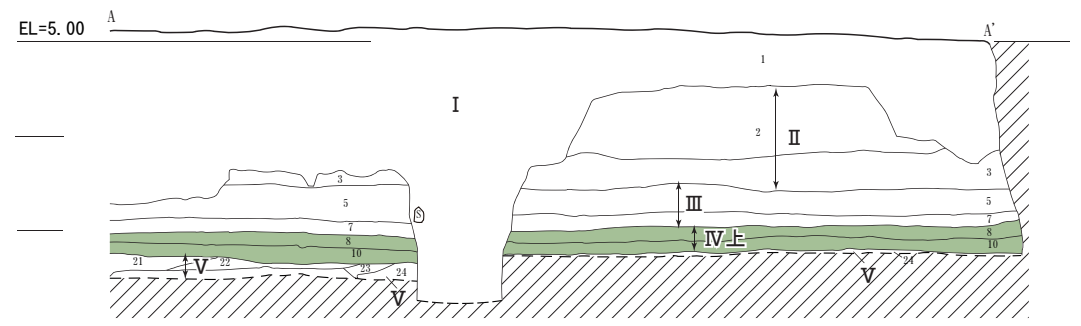


第13図 層序3

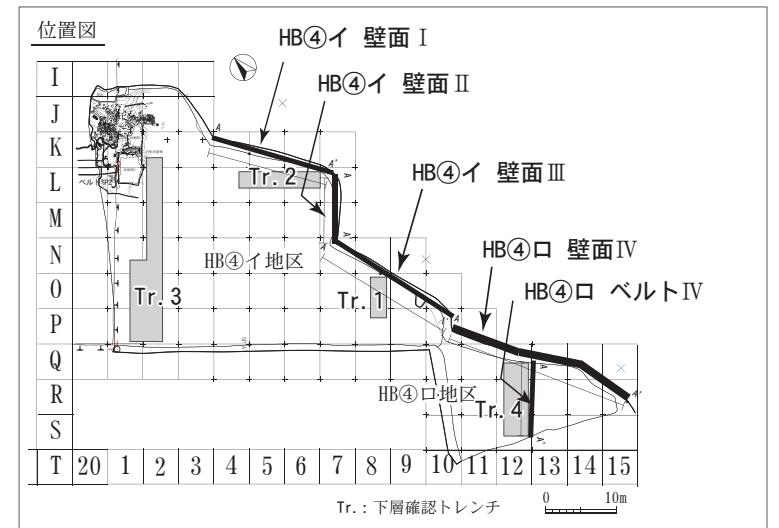
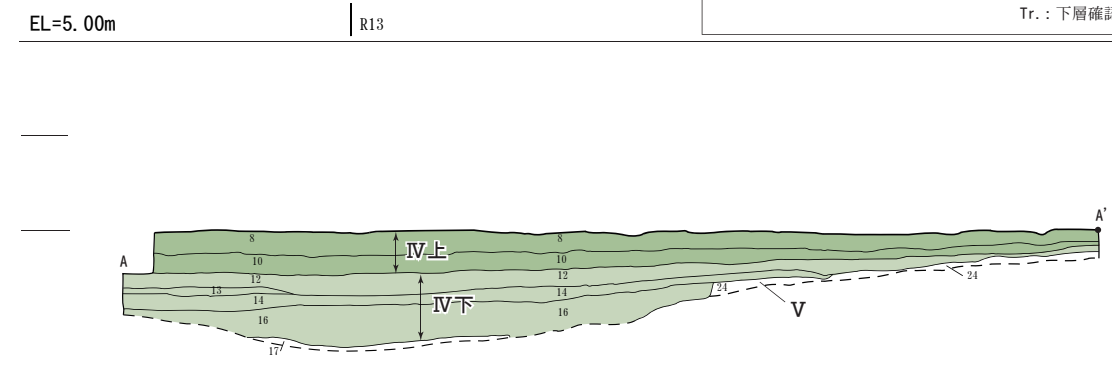
〈HB④イ 壁面 I〉



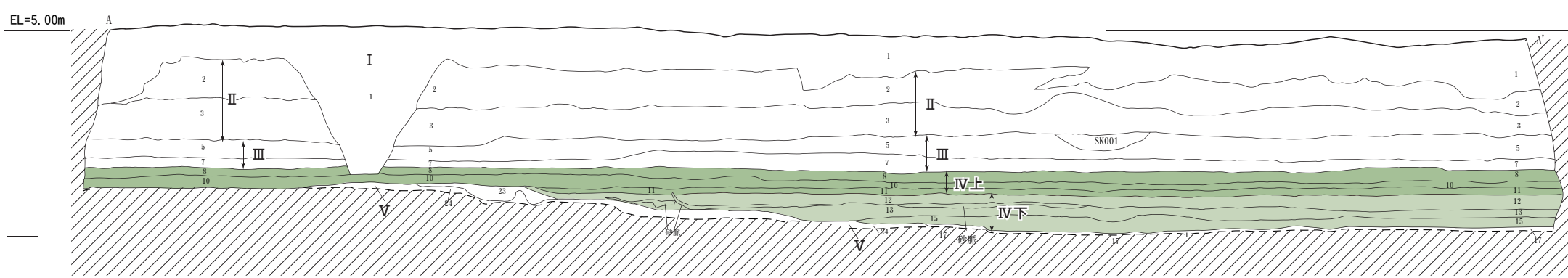
〈HB④イ 壁面 II〉



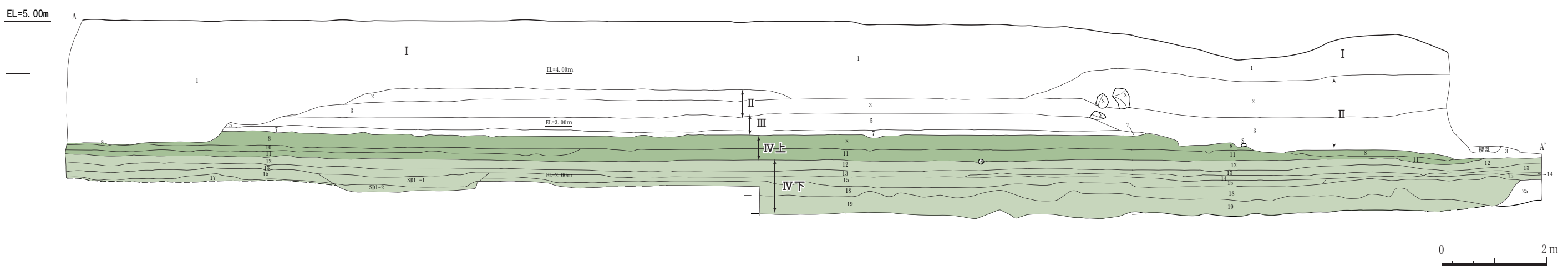
〈HB④ロ ベルトIV〉



〈HB④イ 壁面 III〉

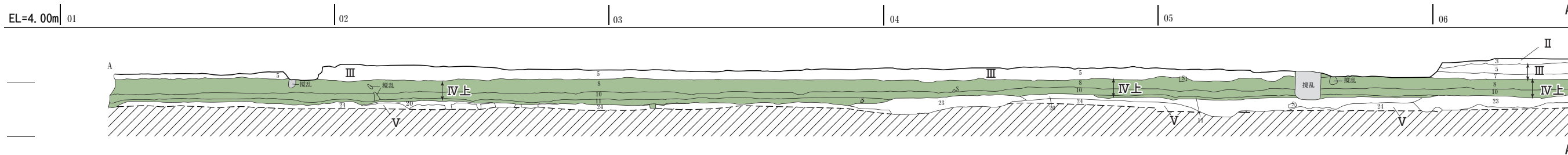


〈HB④ロ 壁面IV〉

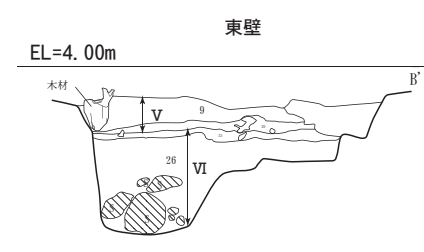
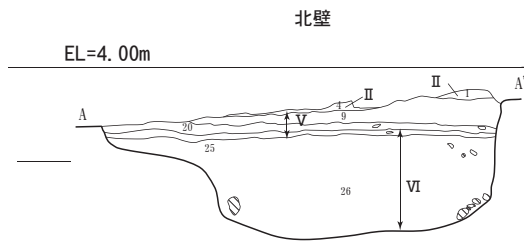
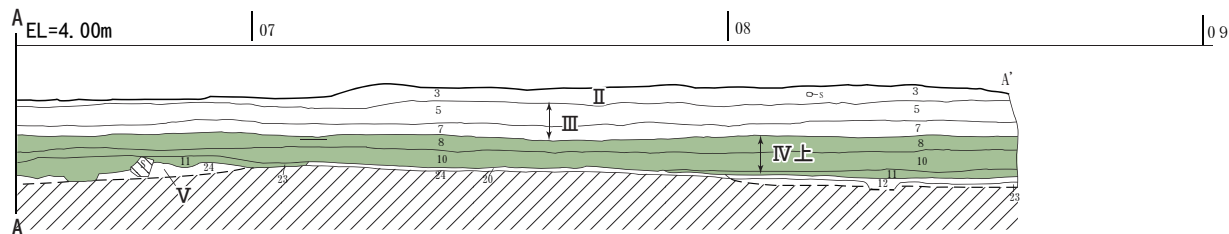


第14図 層序4

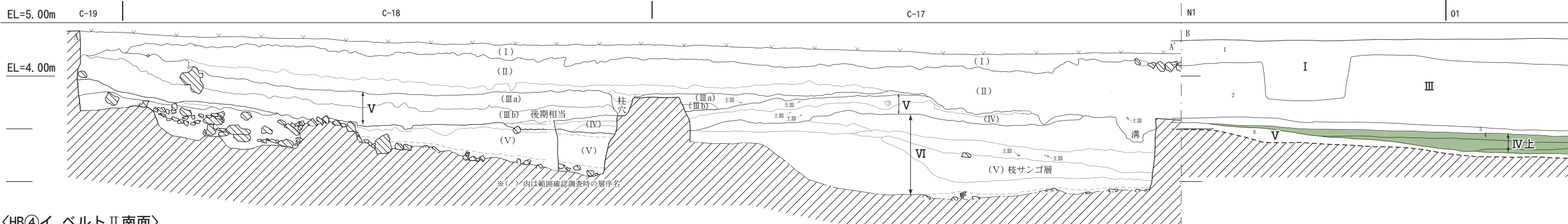
〈HB④イ ベルト I 東面〉



〈HB④イ 試掘跡 1 北・東壁〉

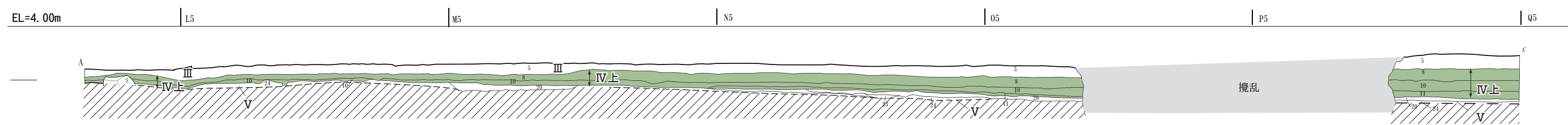


〈HB① 範囲確認トレンチ南壁〉

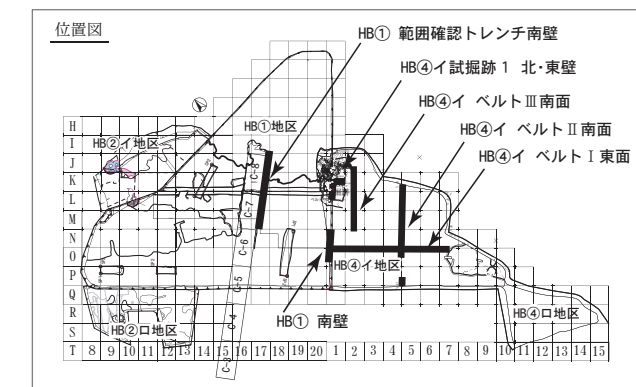
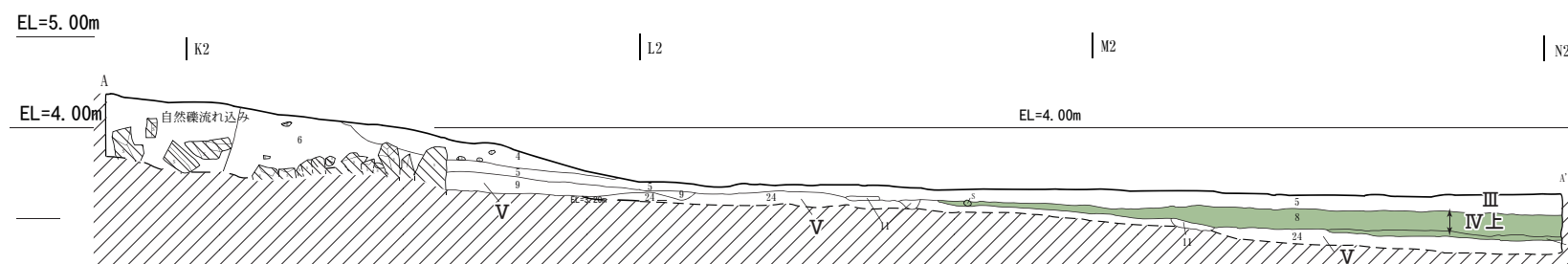


〈HB① 南壁〉

〈HB④イ ベルト II 南面〉



〈HB④イ ベルト III 南面〉



第 15 図 層序 5

第3表-2 HB① 東壁 (第10図 層序1)

層	新	細分	色・土質	特徴	備考 (旧層序)
I	1	暗褐色粘質土 10YR3/3			
		II	2	灰黄褐色粘質土 10YR4/2 橙色シルト 10YR6/6	シルトがブロック状に混じる
III	3	暗褐色シルト 10YR3/4			
		4	橙色シルト 7.5YR6/6		橙色シルト 4層
V	5	明褐色シルト 7.5YR5/8			〃
	6	橙色砂質土 7.5YR6/8			〃
	7	明黄褐色粘質土 10YR7/6			〃
	8	明黄褐色砂質土 10YR6/8	貝片少量混じる		〃
	9	にぶい褐色砂質土 10YR5/4			〃
	10	にぶい黄褐色質土 10YR4/3	貝片大量混じる	混貝層 4層	
	11	にぶい黄褐色質土 10YR4/3	貝片大量混じる		〃
	12	灰黄褐色砂 10YR4/2		5層	
	13	褐色細砂質土 10YR4/4			〃
	14	黄色砂 5Y8/8			〃
	15	黒褐色砂質土 2.5Y3/1			〃
	16	明褐色砂質土 7.5YR5/6			
	17	灰黄褐色砂質土 10YR6/2			
	18	灰白色砂 5Y8/1			白砂 5層

第3表-3 HB① 中央ベルト西面 (第12図 層序2)

層	新	細分	色・土質	特徴	備考 (旧層序)
III	1	暗褐色シルト 10YR3/3		炭化物少量混じる	近世遺構
		2	褐色シルト 10YR4/4	炭化物少量混じる	〃
		3	褐色シルト 7.5YR4/3	貝片少量混じる	〃
372 SK	4	にぶい黄褐色砂質土 10YR5/3		Φ1mm程度の貝片大量混じる	グスク372SK
		5	褐色砂質土 10YR4/4	Φ50mm~100mmの礫多量混じる	〃
		6	暗褐色粘質土 10YR3/3		〃
V	7	暗褐色シルト 10YR3/4			グスク包含層
366 SK	8	にぶい黄褐色砂質土 10YR4/3		Φ1mm~30mmの貝片大量混じる	グスク366SK
		9	暗褐色粘質土 10YR3/3		〃
V	10	橙色シルト 7.5YR6/6			弥生包含層
	11	暗褐色砂質土 10YR3/4	貝片大量混じる	混貝層	
	12	暗褐色砂質土 10YR3/3	Φ1mm程度の貝片多量混じる		〃
	13	にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3	貝片大量混じる		〃
	14	褐色細砂質土 10YR4/4	Φ1mm程度の貝片少量混じる	5層	
	15	褐灰色砂 10YR4/1			〃
	16	灰黄褐色砂 10YR4/2			〃
	17	黄色砂 5Y8/8			〃
	18	黒褐色砂質土 2.5Y3/1			〃
	19	灰白色砂 5Y8/1			〃

第3表-4 HB②イ 灰色砂層 (第10図 層序1)

層	新	細分	色・土質	特徴	備考 (旧層序)
V	1	橙色砂 7.5YR6/6		炭化物・木根多く、固くしまる。	赤砂層
		2	明黄褐色砂 10YR7/6	砂粒は粗い。	黄砂層
		3	にぶい黄褐色砂 10YR6/3	炭化物含む。	黒砂層
		4	浅黄褐色砂 10YR8/4	粗砂が帯状に見られる。遺物は殆ど無し。	白砂層
		5	にぶい黄褐色砂 10YR6/3	拳大以下の礫含む。低標高部分では砂礫化する。	灰砂層

第3表-5 HB②イ 中央ベルト東面 (第10図 層序1)

層	新	細分	色・土質	特徴	備考 (旧層序)
III	1	明黄褐色礫シルト 10YR6/6		径5~10cm大の礫を多量に含む。	崩落土
		2	明黄褐色シルト 10YR6/6	固くしまる。下層に遺物が集中。	橙色シルト①
		3	にぶい黄褐シルト 10YR5/4	炭化物、小礫、遺物を含む。	
V	4	黄褐色シルト 10YR5/6		貝、径径5~10cm大の礫を多量、遺物を含む。	暗褐色シルト
		4'	黄褐色シルト 10YR5/6	土質は4層と同じだが貝、礫、遺物は少ない。	暗褐色シルト
	5	褐色砂 10YR4/4	黒砂粒、貝、遺物を多量に含む。	貝層①(混貝層)	
	6	明黄褐色砂 10YR6/6	5層に比べると貝は少ない。炭化物多量、遺物を含む。	貝層②	
	7	明黄褐色シルト 10YR6/6	炭化物、礫を含む。	橙色シルト③	
	8	褐色シルト 7.5YR6/8	遺物は含まず、固くしまる。	崩落土	
	9	明黄褐色砂 10YR7/6	貝はイソハマグリ・ホラガイが目立つが、全体として少ない。黒砂層ブロックが不整に混じる。	黄砂層	
	10	にぶい黄褐色砂 10YR5/3	炭化物、硬化土(灰)含む。イノシシ顎骨が目立つ。	黒砂層	
VI	11	黄褐色砂 10YR8/6			白砂層
		12	浅黄褐色砂 10YR8/4	中砂と粗砂の互層をなす。	
		13	明褐色砂質シルト 7.5YR5/6		
		14	浅黄褐色砂 10YR8/4	砂粒は粗い。	
		15	浅黄褐色砂礫 10YR8/4	互層をなす。	
崩落土	16	明褐色シルト 7.5YR5/8	大型の礫を含む。	崩落土	

第3表-6 HB① 西壁 (第13図 層序3)

層	新	細分	色・土質	特徴	備考 (旧層序)
I	1	褐色礫 10YR4/4		礫やブロック片など多量混じる	表土
		2	褐色砂質土 10YR4/3	礫やブロック片など多量混じる	
II	3	オリーブ褐色粘質土 2.5Y4/6			
358 SK	4	黄褐色粘質土 2.5Y5/3			358SK
III	5	黄褐色粘質土 2.5Y7/6		鉄分による侵食が多く見られる	近世・耕作土
		6	黒褐色粘質土 2.5Y7/6		
271 SD	7	黒褐色粘質土 2.5Y7/6			
275 SL	8	黒褐色粘質土 2.5Y7/6			275SL
III	9	黒褐色粘質土 2.5Y7/6		カワニナ層少量混じる	3層 青灰色粘質土
		10	黒褐色粘質土 2.5Y7/6	カワニナ層少量混じる	
IV上	11	黒褐色粘質土 2.5Y7/6		カワニナ層少量混じる	3層 青灰色シルト
		12	黒褐色粘質土 2.5Y7/6	カワニナ層少量混じる	
V	13	黒褐色粘質土 2.5Y7/6		カワニナ層少量混じる	

第3表-7 HB②イ貝層③ (第10図 層序1)

層	色・土質	特徴	備考 (旧層序)
V	1 明黄褐色砂 10YR6/6	炭化物、貝(シャコガイ、アラスジケマンガイ、イソハマグリが多い)、獣骨、パイプウニ、拳大の礫含む。下位では軽石が目立つ。	貝層③
	2 明黄褐色砂 10YR7/6		黄砂層

第3表-8 HB①下層確認トレンチ1東壁 (第13図 層序3)

層	色・土質	特徴
VI	1 灰黄褐中砂 10YR5/2	貝片(陸棲含む)・軽石・サンゴ片を含む(いずれも小片)土器をわずかに出土
	2 黒褐中砂 2.5Y3/2	混入物は1層に同じ、粘土と中砂の混合土(中砂主体)、色調に明暗あり
	3 暗灰黄中砂 2.5Y5/2	貝片、サンゴ片含む、2層類似土が帯状にみられる箇所あり
	4 暗灰黄中砂 2.5Y4/2	性質は2層に同じだが、サンゴ片は大きいものもみられる
	5 オリーブ褐粘土 5Y4/3	炭・風化石灰岩、(軽石?)を含む
	6 灰色粘土 7.5Y5/1	風化石灰岩をわずかに含む、完全な粘土に近い。北壁では砂が多量に混じる
	7 黒褐粘質土 2.5Y3/2	有機質の物(木?)を多量に含む
	8	風化岩盤、還元色を呈する

第3表-9 HB①下層確認トレンチ2東壁 (第13図 層序3)

層	色・土質	特徴
VI	1 灰黄砂中砂 10YR5/2	貝片(陸棲含む)・軽石・サンゴ片を含む(いずれも小片)土器をわずかに出土
	2 暗灰黄中砂 2.5Y5/2	貝片・サンゴ片(いずれも小片)を含む
	3 黒褐中砂 2.5Y3/2	混入物は1層に同じ、粘土と中砂の混合土(中砂主体)色調に明暗あり
	4 暗灰黄中砂 2.5Y4/2	貝片・サンゴ片を含む、2層類似土が帯状にみられる箇所あり
	6 黒褐粘土 2.5Y3/2	炭・風化石灰岩、(軽石?)を含む
	7 暗灰黄粘質シルト 2.5Y4/2	炭・風化石灰岩、(軽石?)をわずかに含む
	8 暗灰黄粘質シルト 2.5Y4/2	7層と9層の混合土、7層土主体
	9 灰オリーブ細砂 5Y5/3	軽石?を多量含む
	10 黒褐粘質土 2.5Y3/2	15層土を主体とするが、粗砂や13層土が不整に混入、流水か草木痕?
	11 灰細砂 5Y4/1	粗砂を部分的に含む
	12 黒褐色砂 2.5Y3/2	粗砂混じりの砂、カニ穴?
	13 灰オリーブ細砂 5Y6/2	9層に似るが軽石?が少ない
	14 黒褐粘質土 2.5Y3/2	15層土を主体とするが、粗砂や13層土が不整に混入、流水か草木痕?
	15 黒褐粘質土 2.5Y3/2	有機質の物(木?)を多量含む
	16 黒褐中砂 10YR4/1	10層同様粗砂がみられる
	17 黒褐中砂 10YR4/1	16層より粗砂が多い
	18 暗緑灰中砂 0GY4/1	
	19	風化岩盤、還元色を呈するが直上に貝を含む砂礫層
	20 灰白細砂 5Y7/1	主体は砂と細かい貝片

第3表-10 HB②イ山斜面縦トレンチ (第10図 層序1)

層	色・土質	特徴	備考 (旧層序)
VI	1 橙色砂質シルト 7.5YR6/8	浅黄橙色の板状風化礫含む。二次堆積	混板礫層
	2 明黄褐色粘質シルト 2.5Y7/6		岩盤風化土層
	3 淡黄色中砂 2.5Y8/4	上位が明黄褐色を呈する。	
	4 浅黄橙色粗砂 10YR8/4	摩滅したサンゴ礫を含む海性堆積。	海砂層
	5 明黄褐色粘土 10YR7/6	2層土を多量に含む。直下は岩盤か。	

第3表-11 HB①下層確認トレンチ3南壁 (第12図 層序2)

層	色・土質	特徴	備考 (旧層序)
VI	1 灰白色砂 5Y7/2	貝片多量含む	
	2 灰黄色砂 2.5Y7/2	枝サンゴ多量含む	
	3 にぶい黄色砂 .5Y6/3	枝サンゴ多量、貝片少量含む	
	4 にぶい黄橙色砂 10YR7/3	枝サンゴ多量含む	3層よりもサンゴ片が多量 粒が大きい
	5 灰白色シルト .5Y8/1		
	6 浅黄橙色砂 10YR8/3	貝片少量混じる	
	7 灰白色砂 10YR8/1	小さなサンゴ、貝片多量混じる	
	8 にぶい黄橙色砂 10YR7/4	サンゴ片少量混じる	
	9 浅黄色砂 10YR8/4	サンゴ片・貝片多量混じる	
	10 淡黄色砂 2.5Y8/4		
	11 黄色砂 2.5Y8/6	サンゴ片・貝片少量混じる	
	12 浅黄色砂 2.5Y7/4		
	13 浅黄橙色砂 10YR8/3	サンゴ片・貝片少量混じる	
	14 淡黄色砂 2.5Y7/3		
	15 にぶい黄橙色砂 10YR7/2		硬くしまる
	16 明黄褐色砂 10YR7/6		
	17 明褐色枝サンゴ 7.5YR5/6		
	18 浅黄色砂 5Y8/3	サンゴ片・貝片多量混じる	
	19 灰白色砂 10YR8/2		
	20 浅黄橙色砂 10YR8/3		
	21 灰黄色砂 2.5Y7/2		
	22 浅黄色砂 5Y7/4		
	23 灰色砂 5Y5/2	砂と腐食木が混じる	
	24 オリーブ黄色砂 5Y6/3		
	25 黄橙色砂 10YR8/6	サンゴ片・貝片多量混じる	
	26 明黄褐色粘土 10YR6/6		
	27 灰白色砂 10YR8/2	サンゴ片・貝片少量混じる	
	28 淡黄色砂 2.5Y8/3	サンゴ片・貝片多量混じる	
	29 淡黄色砂 2.5Y7/3		
	30 灰白色砂 10YR8/2		
	31 明黄褐色砂 10YR6/8		
	32 淡黄色砂 2.5Y7/4		
	33 明黄褐色枝サンゴ 7.5YR7/6		
	34 淡黄色砂 2.5Y7/4		
	35 にぶい黄色砂 2.5Y6/4		

第3表-12 HB①南壁 (第12図 層序2)

層	色・土質		特徴	備考 (旧層序)
	新	細分		
I	1	褐色礫 10YR4/4	礫やブロック片など多量に混じる	表土
III	2	黄褐色粘質土 2.5Y7/6	鉄分による侵食が多く見られる	近世・耕作土
IV上	3	青灰色粘質土 5BG6/1	カワニナ層少量混じる	3層 青灰色粘質土
	4	暗青灰色粘質土 10BG4/1	カワニナ層少量混じる	
	5	青灰色シルト 10BG6/1	カワニナ層少量混じる	3層 青灰色シルト
	6	にぶい黄褐色砂 2.5Y6/4		
	7	青灰色砂質土 5BG6/1	カワニナ層少量混じる	
V	8	にぶい黄褐色砂 2.5Y6/3		

第3表-13 HB②口西・南壁 (第13図 層序3)

層	色・土質		特徴	備考 (旧層序)
	新	細分		
I	1	黄褐色シルト 2.5Y5/4	炭化物・赤色土・黄色土を多量に含み、各々比率の違いで層状をなす。戦前祝女殿内小邸宅に関連する土層と思われ、古銭も出土。	戦前層
II	2	オリーブ褐色粘質シルト 2.5Y4/3	カワニナ・黒色土・10mm以下の軽石をランダムに含む。	
	3	オリーブ褐色粘質シルト 2.5Y4/4	カワニナ・炭化物・小礫含む。	
III	4	オリーブ褐色粘質シルト 2.5Y4/6	カワニナ含む。	近世耕作土
IV上	5	灰色粘質シルト 5Y4/1	カワニナの他、ごく微量の炭化物含む。	黒グスクA (黒色粘質土)
	6	オリーブ褐色粘質シルト 2.5Y4/4	5層と7層が混じり合っているように見えるが、上下層離面は整然とする。	黒グスクB (黒色粘質土)
	7	黄褐色シルト 2.5Y5/3	上層よりもカワニナが多く、海生貝も増える。	白グスク (灰色シルト)
VI	8	オリーブ褐色砂礫 2.5Y4/3	カワニナ・海生貝含む。礫は摩滅している。	
	9	にぶい黄色砂 2.5Y6/4	調査区北西側で検出された海性砂。	
	10	黒褐色粘土 2.5Y3/2	炭化物粒・石英含む。	
	11	灰黄色粘土 2.5Y6/2	炭化物粒・石英含む。	
	12	オリーブ黄色砂質シルト 5Y6/4	炭化物粒・石英含む。下面は乱れる。	
	13	オリーブ黒色粘質シルト 7.5Y2/2	表面が炭化した木・炭化物・石英含む。湿地堆積。10YR6/6明黄褐色粗砂が局所的に互層なす。	
	14	砂礫	下位は海砂。混入する摩滅礫は青つばい。マガキガイ・イソハマグリが認められた。	未固結の砂礫層

第3表-14 HB④土層 (第14図 層序4・第15図 層序5)

層	色・土質		特徴
	新	細分	
I	1	造成土	表土、造成土
II	2	黄褐色シルト 10YR5/6	マンガンは多く含むが、カワニナはごく僅かにしか含まない。縮まり強い。戦前の耕作土。
	3	黄褐色砂質土 2.5Y5/4	カワニナ・マンガン層全体を含む。縮まりは弱い。
	4	黄褐色シルト 2.5Y7/6	縮まり強い。カワニナの混入はごく僅か。イ地区サーターヤ跡周辺に展開する石灰岩区域の斜面に堆積。
III	5	オリーブ色シルト 2.5Y4/4	カワニナ・マンガン層全体を含む。縮まりはIII層より強くなる。
V	6	褐色シルト 10YR4/4	1mm以下の白色粒を含みカワニナは殆んど含まれない。縮まりはやや強い。試掘跡1からサーターヤ周辺に堆積
III	7	暗灰黄色シルト 2.5Y5/2	カワニナ・マンガン層全体を含む。
IV上	8	暗灰黄色シルト 2.5Y4/2	カワニナ・マンガンを含むが他の層よりも少ない。Va層よりも縮まりが強い。
V	9	暗褐色シルト 10YR3/3	縮まりが強く、カワニナは殆んど含まない。黄褐色のシルトがブロック状に混入。サーターヤ周辺に堆積
IV上	10	黄灰色シルト 2.5Y6/2	カワニナ・少量マンガンを含む。1mm以下の白色粒を含む。
	11	オリーブ褐色シルト 2.5Y4/3	カワニナ・マンガンを含む。1mm以下の白色粒をVIa層より多く含む。5mm大の礫を含む。
IV下	12	黒褐色シルト 2.5Y3/2	5mm以下の礫・粗砂を多く含む。縮まりやや弱い。砂丘窪み流路に堆積
	13	オリーブ黒色シルト 5Y3/2	1mm～5mmの礫含む。部分的に焼土が多く含む。12層より縮まりは弱い。粘性はやや強くなる。帯状に細砂～粗砂が入りこむ。砂丘窪み流路に堆積
	14	灰色シルト 5Y4/1	1mm～5mmの白色礫をごく僅かにしか含まない。縮まり・粘性共に弱い。砂丘窪み流路に堆積
	15	オリーブ黒色粘質土 5Y3/1	縮まり・粘性ともに非常に強い。砂丘窪み流路に堆積
	16	オリーブ褐色シルト 2.5Y4/6	1mm以下の白色粒。自然貝を多く含む。縮まり弱い。砂丘窪み流路に堆積
	17	灰オリーブ色シルト 5Y5/2	カワニナ・マンガンを含む。1mm以下の白色粒。1mm～5mmの礫を含む。縮まりは弱い。砂丘窪み流路に堆積
	18	オリーブ黄色粘質土 5Y6/4	粗粒砂を多く含む。1mm以下の白色粒・黄色粒・マンガンが多く含む。縮まり弱いが粘性は強い。砂丘窪み流路に堆積
	19	オリーブ灰色シルト 2.5GY6/1	粗粒砂を多く含む。5cm以上の白色礫を多く含む。砂丘窪み流路に堆積
V	20	暗オリーブ褐色砂質土 2.5Y3/3	カワニナ・マンガンを含む。1mm以下の白色粒を多く含む。縮まりは弱い。砂丘地直上に堆積する
	21	黄褐色砂質土	1mm～5mmの白色粒を僅かに含む。明褐色のシルトがブロック状に混入。壁面2から3に掛けての落ち込みに堆積。壁面2・3の落ち込みに堆積
	22	黄褐色砂質土 2.5Y5/4	1mm～5mmの白色粒を僅かに含む。上層よりやや砂質が粗い。壁面2に掛けての落ち込みに堆積。壁面2・3の落ち込みに堆積
	23	灰黄褐色砂質土 10YR5/2	様々な色の砂・土が一気に流れ込んで堆積したものと考えられる。やや粘性強い。
	24	にぶい黄色砂 7.5YR7/4	枝サンゴ・自然貝を多く含む。所々で鉄分を多く含み硬質化する。砂丘を形成する層。
VI	25	にぶい黄色砂 2.5Y6/4	枝サンゴ・自然貝が点在するやや粗い砂層。
	26	浅黄色砂 2.5Y7/4	1mm以下の白色粒、1mm～3cm大の礫を含む。

第3節 貝塚時代後期

1. 遺構

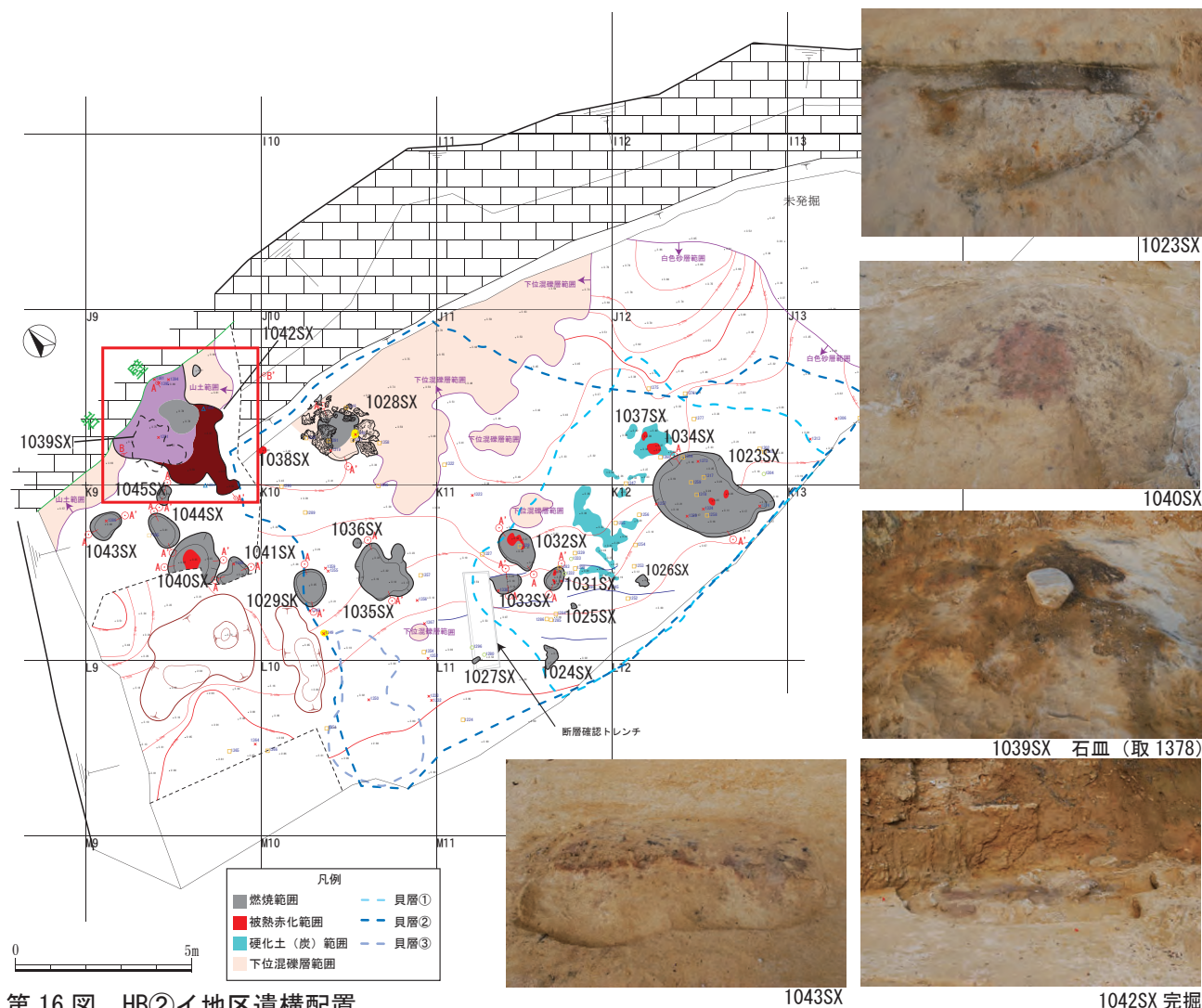
貝塚時代後期の遺構としては HB②イ地区の燃焼遺構、土器集中、貝集中部。HB①地区で試掘時(2008)のピット群、土抗、貝集中部が確認された。また、キャンプ桑江北側地区で継続的に行っている軽石の出土平面分布についても略述する。なお、これらの遺構は調査時に⑤面(1039SXと1026SS)と⑦面(それ以外)で検出(第11図)されていたが、明瞭な時期差はみられないため、種類ごとにまとめて報告する。

(1) 燃焼遺構

燃焼遺構は燃焼範囲(7ヶ所)と被熱赤化範囲(3ヶ所)、炭・焼土範囲(12ヶ所)に分けられるがこれらは一連のものと考えられる。主なものについては以下に略述する。

・燃焼範囲は1023SX(J・K12)、1028SX(J10)、1031SX・1032SX・1033SX(K11)、1040SX(K9)、1039SX・1042SX(J9)の8ヶ所で、以下、グリッド別に略述する。

1023SX: J・K12で検出され、大きさは2.98m×2.13mの不定形で、深さ0.32mを測る。燃焼遺構の中では最も大きく、本グリッドは土器の重量分布でも最も多く(第22図)、I類工器の口縁、オオベッコウガサ貝輪の破片も得られている。



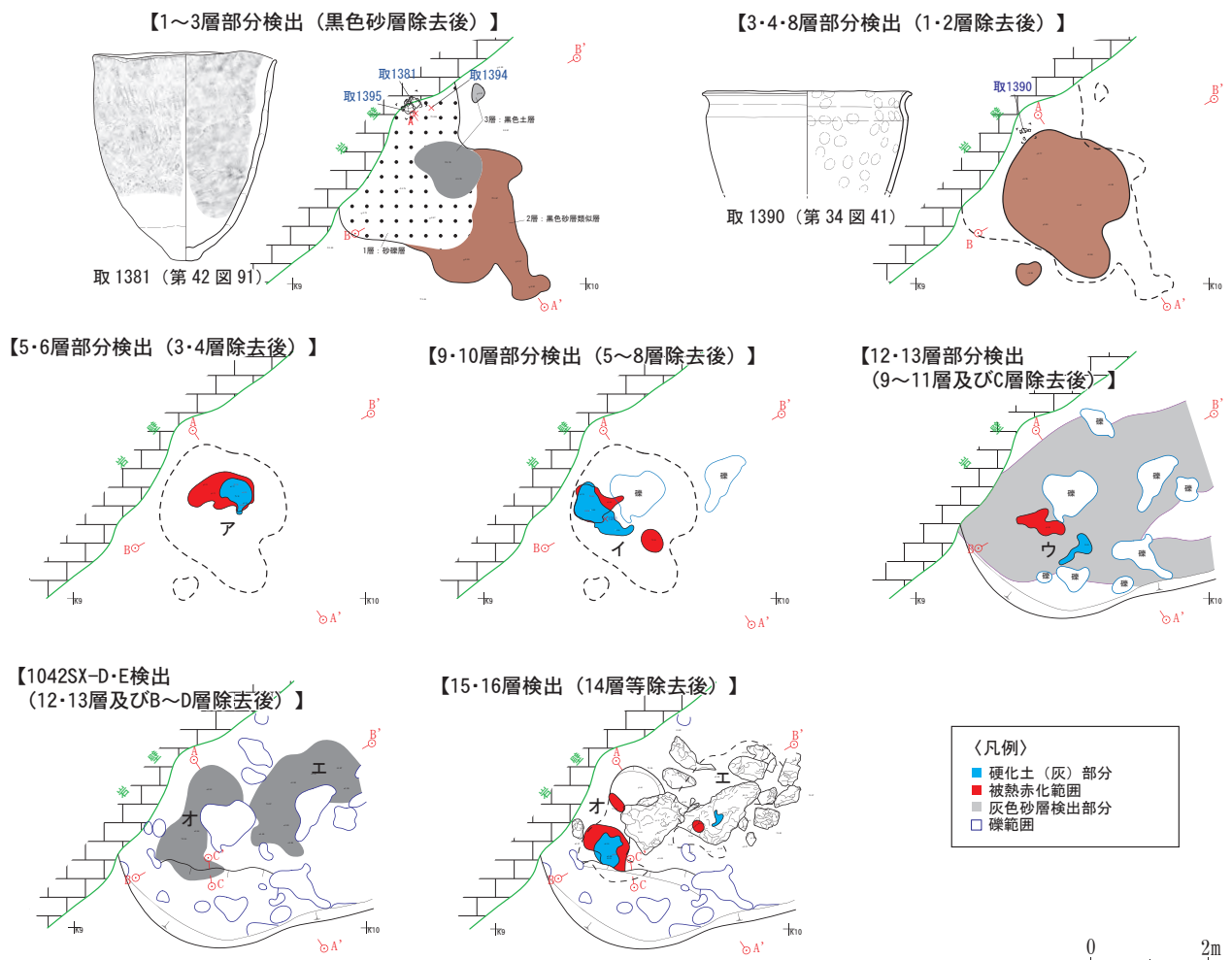
第16図 HB②イ地区遺構配置

1028SX : J10 礫層上に検出されたもので、その北側には下位混礫層が露出する。大きさは 1.37m×0.92m の不定形、深さ 0.34m を呈し、15~80cm 大の板状の礫を周縁に配する。礫の大きさは第18図に示したように 75 cm×58cm の大きいサイズが 3 個、30cm 前後の中サイズが 5 個、20cm 以下のサイズが 10 数個である。礫の上面に厚さ 8 cm 前後の炭を覆うが、その底面に砂が被熱した部分を確認でき、その周縁の礫も焼けている。

1031SX・1032SX・1033SX : いずれも K11 で近接して検出された。大きさをみると 1031SX が 0.7m×0.5m の楕円形、深さ 0.31m の有段状で、1032SX が 1.21m×0.9m の楕円形、深さ 0.32m の有段状で、黒化した砂礫を含み、土器が 1 個出土した。1033SX が 0.8m×0.54m の不定形、深さ 0.31m の不定形を呈し、前者と同様、黒化した砂礫を含む。

1040SX : K9 の検出で大きさが 1.33m×1.3m の不定形、深さ 0.33cm で有段状をなすが、II 層の 1018SX によって切られる。焼けた骨が 1018SX で数個検出されているが、本遺構に属する可能性が高い。

1039SX・1042SX : J9 の検出で、1039SX は 1042SX のほぼ上面 (⑤面) で検出された燃焼遺構で大きさが 1.68m×1.02m の不定形で深さ 0.42m の有段状をなすもので標高は 4.3m で検出された。遺構直上で石皿 (第 70 図 67) がほぼ水平に検出され (図 16) 遺構内での使用を示唆するものである。⑤面の検出されたものには貝集中 1020SS がある。1042SX は第 17 図に調査の経過を示した。ア (5・6 層)、イ (9・10 層)、ウ (12・13 層)、エ・オ (15・16 層) で被熱した部分や硬化土 (灰) が検出された。5 面の火の使用が想定される。最下層面では礫が検出され、その状況は 1028SX (第 18 図) に類似する。



第 17 図 1042SX の検出順序

本遺構からはほぼ完形のⅡ類土器(図91)が標高3.918m(取1381)の壁側で検出された。C面の炭化材から2290±24BPの結果(第四章第3節)がある。その下位でⅠ類土器(図41 取1390～1392)が検出されている。他にD面で殻径7.4cmの大きめのアンボンクロザメが出土している。

・**被熱赤化部分**は1034SX・1037SX(J12)、1038SX(J9・10)の3ヶ所と前述の燃焼範囲の1023SX、1032SX、1040SX、1031SXでも赤化部分が確認されている。

1034SX・1037SX: J12で検出され、1034SXは大きさが0.4m×0.35m、1037SXは大きさが0.26m×0.16mの硬化土のあとに確認された。隣接する1023SXの燃焼遺構に関連するものと思われる。近くからはⅡ類土器(図98 取1089)(図84 取1024)の一括土器が検出されている。

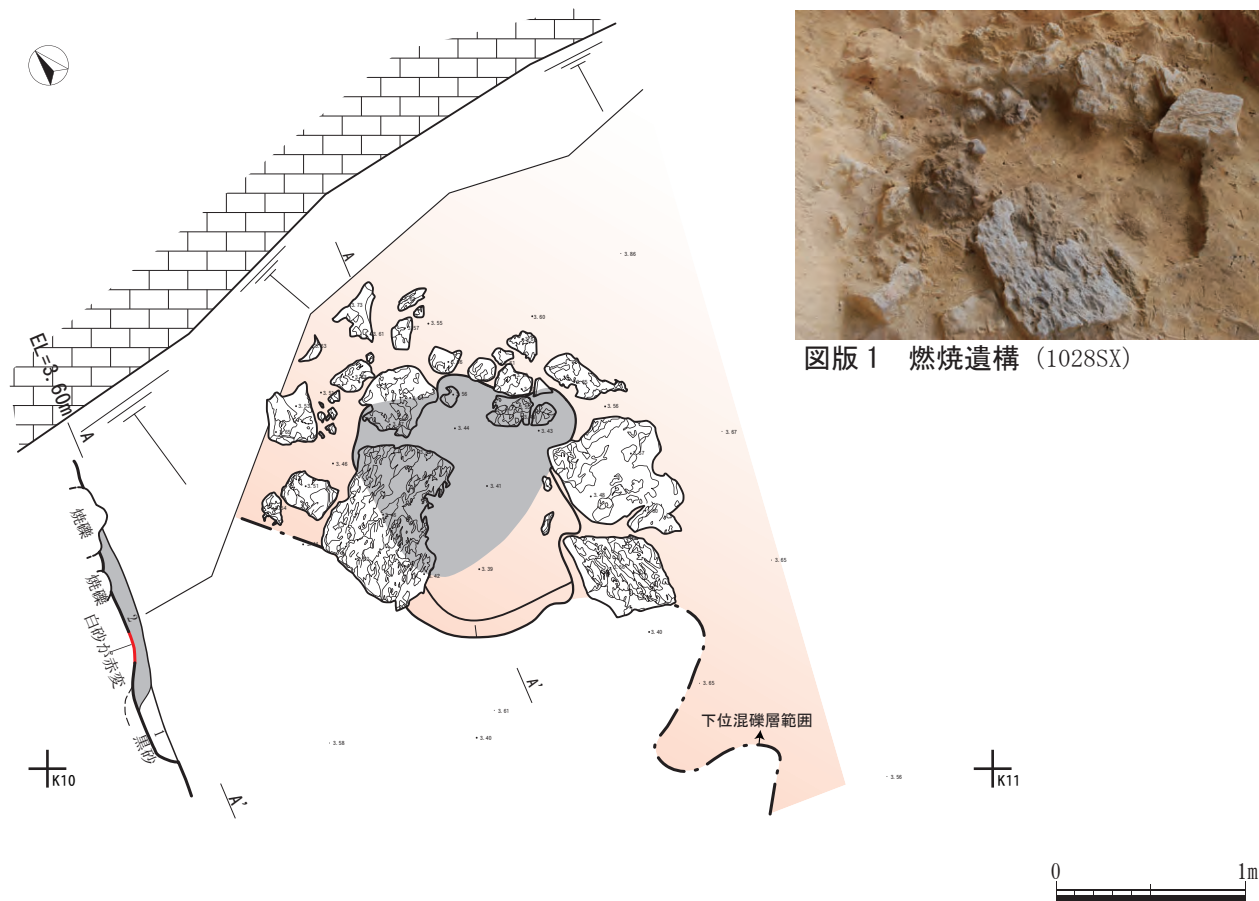
1038SX: J9・10の調査区の壁で1042SXと1028SXの燃焼遺構の間で検出され、0.2m×0.2m不定形、深さ0.34cmを測る。

・**炭焼土範囲**は1041SX・1043SX・1044SX・1045SX(K9)、1035SX・1036SX(K10)、1024SX(K・L11)、1025SX・1027SX(K11)、1026SX(K12)の10ヶ所である。

1041SX・1043SX・1044SX・1045SX: K9で検出され、1041SXの大きさが0.95m×0.59mの不定形で、深さ0.33の皿状、1043SXの大きさが0.93m×0.62mの楕円状、深さ0.34mの皿状、1044SXの大きさは1.08m×0.66mの楕円状、深さ0.34mの有段状、1045SXの大きさは0.56m×0.33mの楕円状、深さ3.4mのすり鉢を呈する。いずれも1042SXに近いことから関連する可能性が高い。

1035SX・1036SX: K10で検出され、1035SXは1.73m×1.39mの不定形、深さ0.32m皿状を呈する。1036SXは0.26m×0.25mの円形で小さいことから1035SXに近く、一連のものと思われる。

1024SX・1027SX: K・L11で検出され、1024SXの大きさは0.63m×0.30mの不定形、深さは不明である。1027SXが0.24m×0.11mの小範囲である。



第18図 燃焼遺構(1028SX)

1025SX : K11 の検出で大きさは 0.16m×0.14m、近接する燃焼遺構（1031・1032SX）に関連するものと思われる。

1026SX : K12 の検出で、0.34m×0.29m の大きさである。

以上、遺構の種類ごとに個別に略述したが、燃焼範囲、被熱赤化範囲、炭・焼土範囲は燃焼に関連した遺構と考えられ、HB②イ地区の地形に合わせて扇状に点在する。

前述したように燃焼範囲が主となり、それに伴う被熱赤化範囲及び炭焼土範囲がこれに付随するもので、燃焼範囲は炉が想定される。

（2）土器集中

V層面で検出された一括土器はHB①地区で5ヶ所、HB②イ地区で9ヶ所、HB④イ地区で1ヶ所の計15ヶ所で、第19図に出土状況と出土箇所を示した。さらに出土遺物(1)土器の項ではこれらの一括土器に加えて、接合作業で復元できたものを、第20図に接合の平面とその垂直分布を示した。

以下、各地区の土器集中について略述し、取り上げについては第2表に示す。

①～⑤はHB①地区の出土である。そのほとんどはHB②イ地区との境界で検出され、**土器集中①**②はいずれもI類に属するもの(図48・59)で標高4.2mの岩盤に乗るように検出された。**土器集中③**はII類に属するもの(図73・77・175)で橙色シルト面の標高3.9mで検出された。**土器集中④**はK13の出土でII類に属するもの(図71)で、標高3.8mで検出された。**土器集中⑤**は奄美系土器に属するもの(図30)でやや南よりのJ16の標高3.4mで検出されている。ここは岩盤と砂丘の境界である。

⑥～⑭はHB②イ地区の出土である。第22図の土器の重量分布と検討すると4000g～31000gの範囲と重なる。

土器集中⑥はⅢ類土器の有肩の壺(図134)で、I12で内面を上にして検出された。J12の貝層①、I11・12の橙色シルト出土の土器と接合できた。

土器集中⑦はII類(図91)に属するものでJ9の1042SX内(標高3.9m)の出土で、ほぼ完形で、岩盤側で出土。

土器集中⑧はI類土器(図66)でJ11の橙色シルト②(標高3.9m)で内面を上にして検出された。この付近では、ほかに弥生土器、諸岡型貝輪が出土している。

土器集中⑨はⅢ類土器(図122)の短頸壺でJ11・12は標高3.9mで検出された。外面を上にして、口縁部と肩部が割れた状態で出土した。近くからは骨や石斧が出土した。

土器集中⑩はII類土器(図98)でJ12の貝層①上面(標高3.9m)で内面を上にして検出された。

土器集中⑪はI類土器(図67)でJ13の黒砂層上面(標高3.3m)で外面を上にして検出された。

土器集中⑫はI類土器(図39)でK10の黒砂層(標高3.2m)で内面を上にして検出された。

土器集中⑬はII類土器(図95)でK11の貝層①上面(第11図)の標高4.05mで外面を上にして検出された。

土器集中⑭はII類土器(図84)でJ11の貝層①(標高4.0m)で外面を上にして検出されている。

土器集中⑮はVI類土器(図154)でHB④イ地区02で、標高1.702mの水が湧き出る所からほぼ完形のまま検出された。白砂層の出土。伴出遺物はなく、土器に付着していた炭化物から**1890±30BP**の結果が出ている。

（3）貝集中部

HB①地区の364SS、HB②イ地区の1020SSの2基が確認されたが、貝の集中した部分で遺構とは考えにくい。



⑥取 1152 (第 48 图 134)



⑫取 1349 (第 34 图 39)



⑬取 1022 (右)・取 1023 (左) (第 43 图 95)



⑭取 1024 (第 41 图 84)



①取 100 (第 35 图 48)



②取 92 (第 37 图 59)



⑦取 1381 (第 42 图 91)



⑧取 1155 (第 38 图 66)



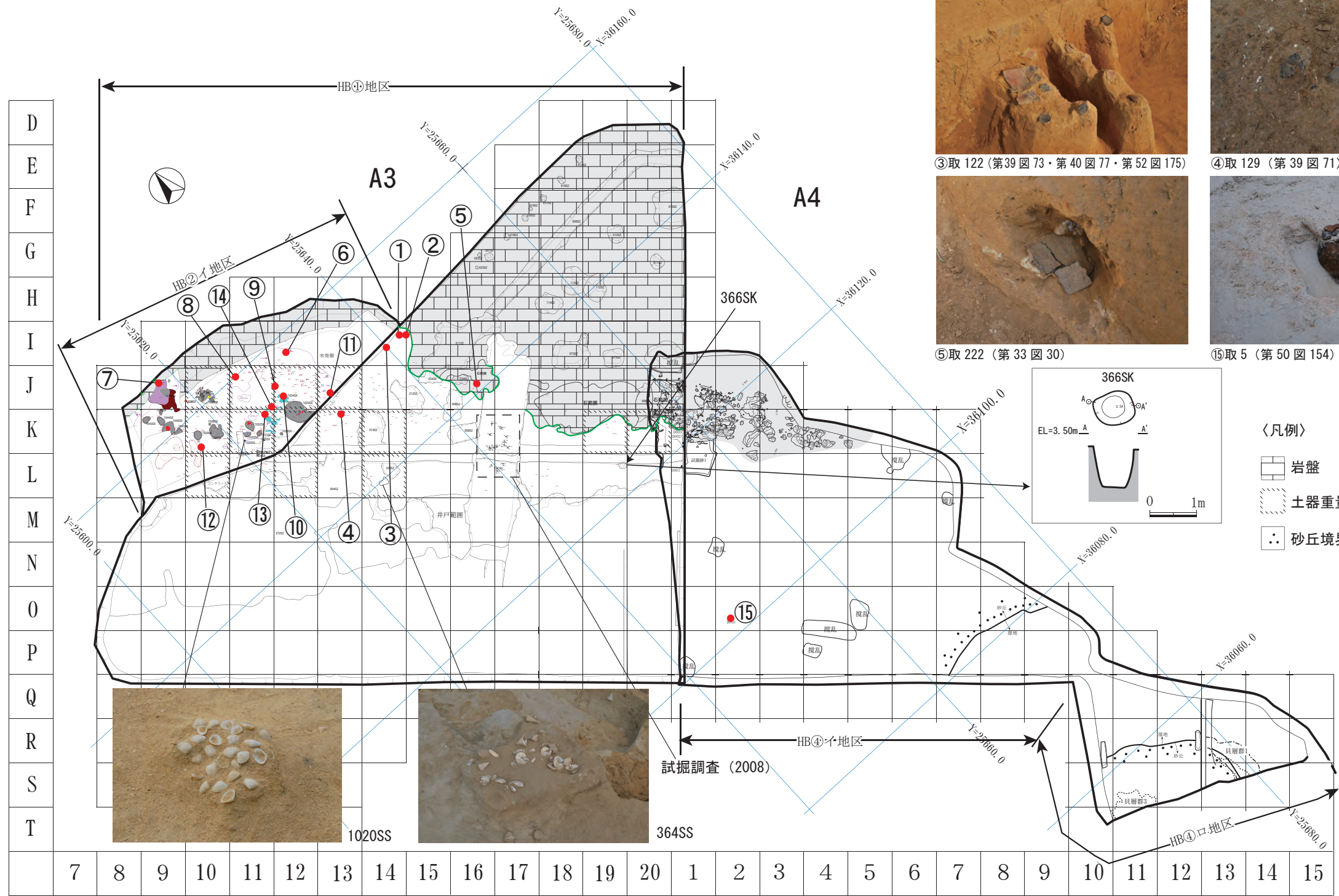
⑨取 1095 (第 46 图 122)



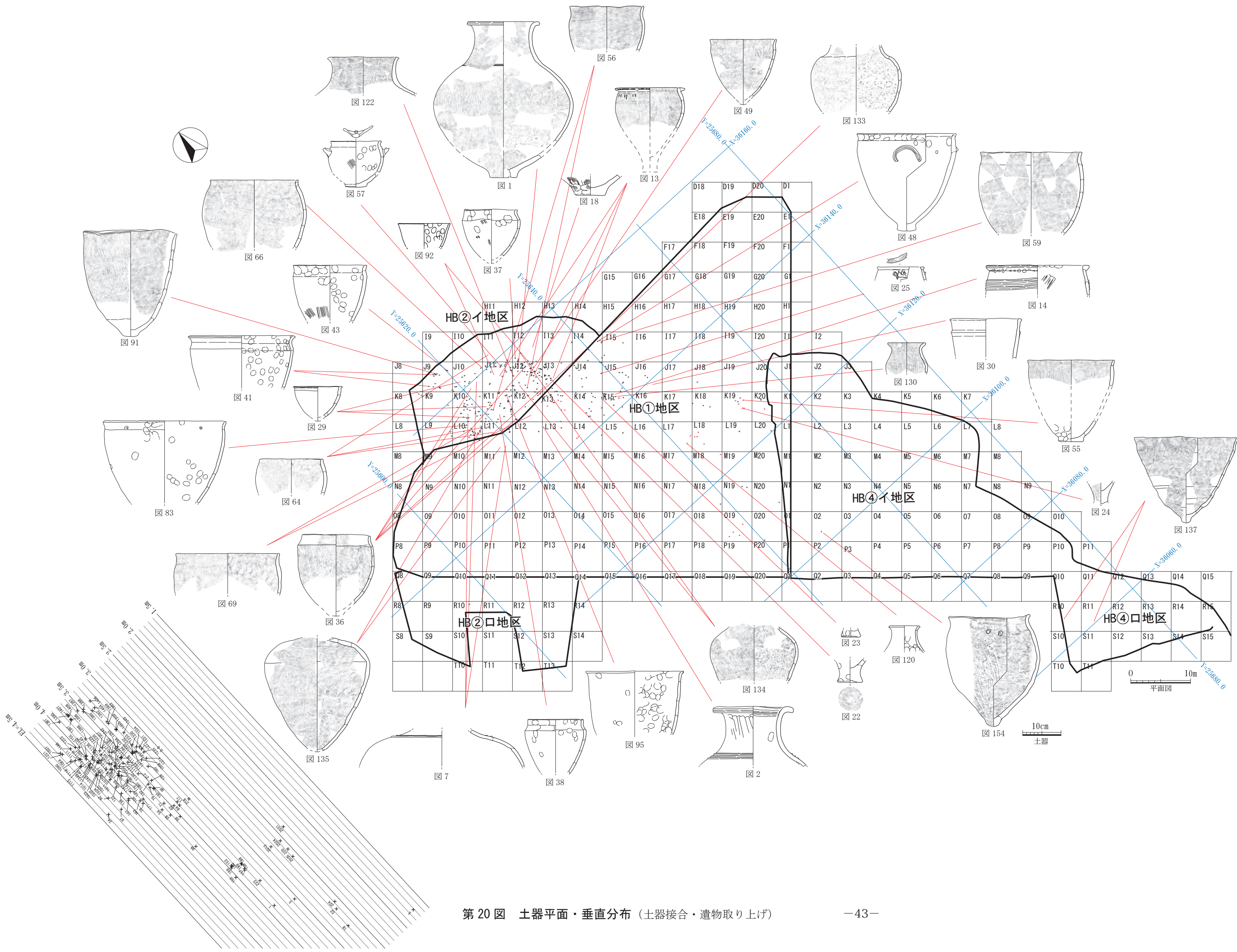
⑩取 1089 (第 43 图 98)



⑪取 1306 (第 38 图 67)



第 19 图 貝塚時代後期遺構配置と一括土器出土分布



第20图 土器平面・垂直分布（土器接合・遺物取り上げ）

364SS : L14 で検出された。サラサバティラ（6点）、マガキガイ（18点）、クモガイ（3点）、カンギク、ヒメジャコ、イソハマグリ、カワラガイなどが出土した（第19図）。

1022SS : HB②イ地区 K11 で検出された。大きさは0.24mの楕円でマウンド状を呈する。イソハマグリの完形が17点検出され、一括投棄されたものと思われる。1039SXの遺構と同じく、ほかよりは上面の検出（貝塚時代後期⑤面）である。

（4）土坑

366SKの土坑（第19図）がHB①地区L19で検出された。近くにはK19・20の土器が多く出土するところと近接する。大きさは直径87cm、平面は方形を呈し、深さは85cmを測る。土層観察のための中央ベルトに近接するため、面的な広がり確認できない。柱穴の中からはⅡ類に分類される土器の胴部が2点出土した。

（5）柱穴

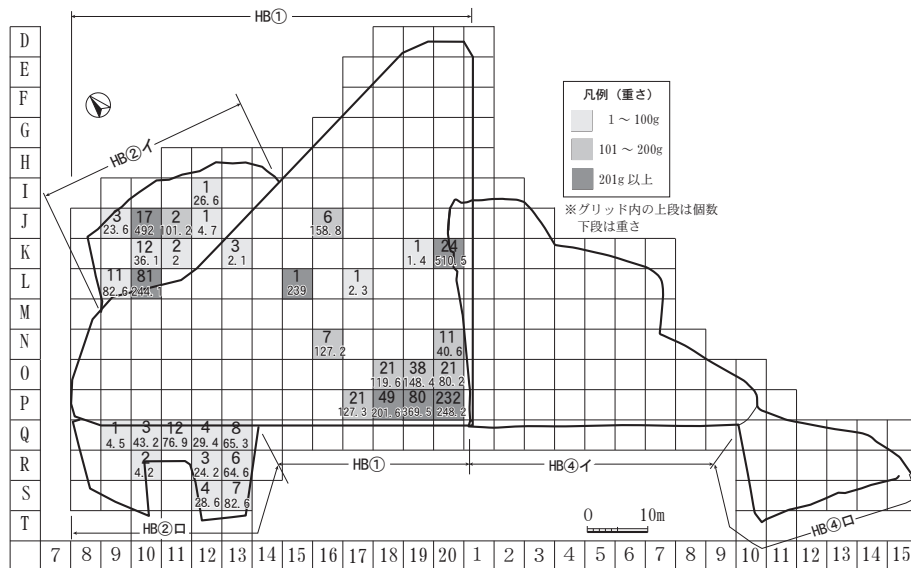
他に試掘調査（2008）でもK・L16・17で、大きさが15.9～22.8cm、深坑0cmの柱穴が16本確認されているがプランは確認できなかった。

（6）軽石

遺構とするものではないが、これまで継続的に報告してきた軽石の出土分布を示す。

HB②イ地区ではJ10（1028SX）、K10（1029SX、1035SX）、L10（1021SX）、HB①地区ではV層のK20、K19、L17、L15、J16に点在し、当時、HB②イ地区まで軽石が入り込んでいることから、貝塚時代後期に砂丘の形成があったことがわかる。

IV層面ではHB①地区のP17～20、HB②ロ地区Q9～13、R10、R12・13、S12・13で得られているが、この付近から土器や貝製品などが出土しており、逆に砂丘形成後HB①・HB②イ地区から土砂の流出を裏付けるものである。



第21図 軽石出土平面分布

以上、遺構及び土器集中、軽石の分布範囲について略述した、これらのことから貝塚時代後期の時期は第16図に示したHB②イ地区の混礫層の露出を取り囲むように扇状に燃焼遺構、およびそれに伴う赤化、炭の範囲が配置し、土器集中や土器の重量平面分布からもHB②イ地区を中心に生活面があったと想定される。これまでの貝塚時代後期遺構と違い、岩山を背に利用してその周辺で火をもやし、調理や貝製品の加工（イモガイ貝輪）や生活を営んでいた様子がうかがえる。

2. 出土遺物

貝塚時代後期の出土遺物には人工遺物と自然遺物がある。人工遺物は土器、石器、貝製品、骨製品、土製品が出土した。出土量は土器 51 コンテナ、石器 22 コンテナ、貝製品 8 コンテナ、骨製品 1 コンテナで、土器が最も多い。自然遺物の出土量は貝類88コンテナ、骨類 4 コンテナである。以下、人工遺物を中心にそれぞれ特徴的なものについて記述する。

(1) 土器

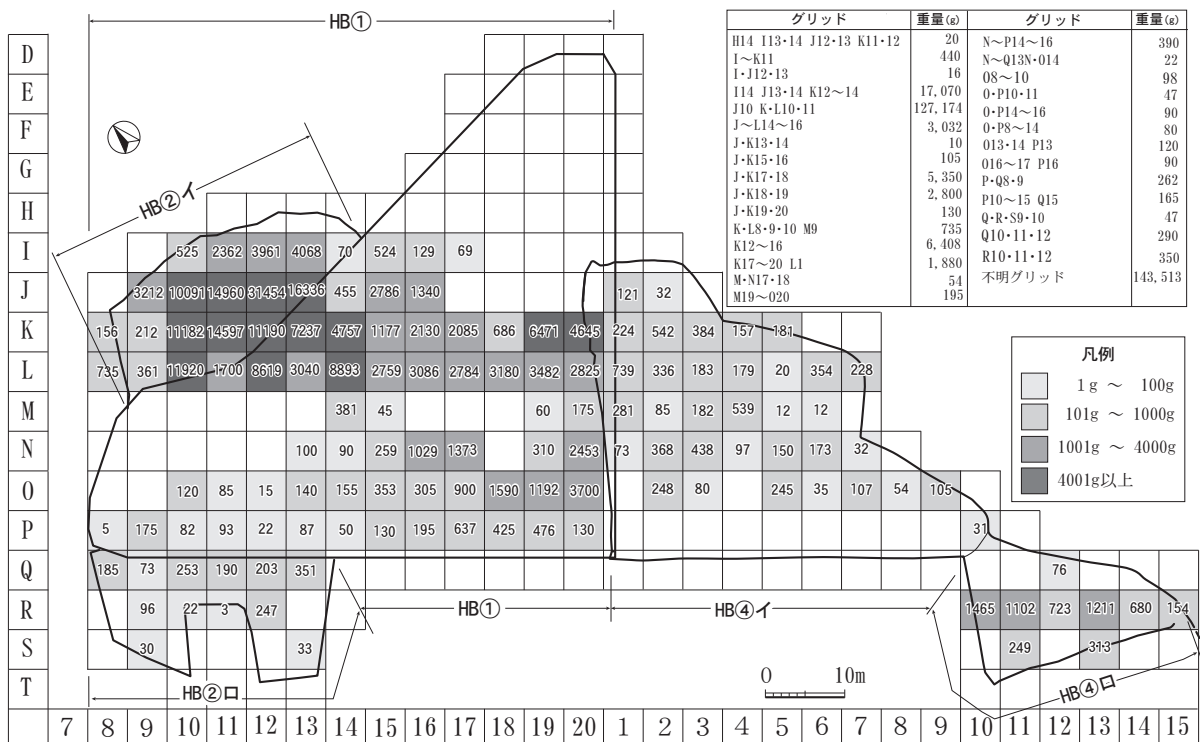
土器は注記時の重量が約204.4kgと多量に出土した。貝塚時代後期の在地土器が最も多く、次に搬入土器と続く。搬入土器は新里貴之氏（鹿児島大学）に確認をお願いした。また、貝塚時代前・中期の土器も僅かに得られた。注記時の重量を範囲確認調査（2008）も加えて第22図の平面分布に示し、遺物整理の指標とした。第20図には調査時に点上げた土器の平面分布と垂直分布を図示した。遺構出土の土器はHB②イ地区にある燃焼遺構（1042SX）の上部から図91、中間層を挟んでV層（下部の山土層）から図41が出土し、後者は同層内（灰砂層）出土の土器片とも接合が出来た。接合関係によって11個体が復元出来、その他に形状の分かるものが多数得られた。搬入土器、在地土器別に集計し、2.5cm 以下は集計から外した。以下、1) 搬入土器、2) 在地土器の順に略述する。

第4表 土器分類

<搬入土器>	
南九州系弥生土器	
奄美系土器	
<在地土器>	
I類：阿波連浦下層式土器	
II類：浜屋原式土器	
III類：I類・II類土器	
IV類：大当原式土器	
V類：有文土器	
VI類：不明土器（厚手）	
VII類：不明土器（薄手）	
その他：貝塚時代前・中期の土器	

1) 搬入土器

搬入土器は 363 点が得られ、**弥生土器**、**奄美系土器**に分類した。前者は胎土、形状などが在地土器からはずれるもので南九州系の弥生土器、後者は在地土器にも類似するが、形状や胎土がより前者に近いことから奄美系土器とした。弥生時代中期の前～中頃に相当するものと思われる、貝塚時代



第22図 土器重量平面分布

後期の在出土器の出土数13,820点に対して僅か363点である。第5表に搬入土器の出土量を示し、層位別に見ると94%がV層出土である。発掘時の分層で見るとHB②イ地区の貝層②、HB①地区中央部の橙色シルトからの出土が多い。今回、貝集積は見られないが、石器の項において第◇図に搬入土器との関係が窺える遺物（諸岡型のゴホウラ製貝輪、その他の貝製品、扁平片刃石斧や柱状石斧等）との平面分布を示した。それによると、HB②イ地区と隣接するHB①地区中央部の北側（L11～15・K12～15・J13～15、以下、「中央部北側」と記す）でまとまって出土している。また、在出土器との関係では平面分布、層位ともⅠ・Ⅱ類（阿波連浦下層式土器・浜屋原式土器に相当）とほぼ同じ出土状況を示すが、遺構出土の搬入土器、共伴する在出土器は得られず、どちらの土器型式に伴うのかは不明である。ただ、詳細に見ると、Ⅱ類はⅠ～Ⅲ層の遺構出土やⅣ層からの出土（図81・88・89）が目立つが、Ⅰ類と搬入土器はV層出土が多く、ほぼ同じ出土状況を見せる。搬入土器と在出土器の割合を見ると、本町の伊礼原D遺跡（2013）、伊礼原遺跡（2014）などは在出土器の1%以下であったが、本遺跡は2.6%と多い。同一個体と思われる復元可能な土器も得られた（図1）。搬入土器は口～底部をまとめて集計し、観察一覧は第6表に載せた。以下、弥生土器、奄美系土器の順で記述し、それぞれ器種別に記述する。

< 弥生土器 >

南九州系の弥生土器は総数331点の出土で、搬入土器の91.2%の割合を占める。1点のみ模倣土器（図17）と思われるものも含まれる。浦添市の嘉門貝塚B（1993）出土の弥生土器に類似するものが多い。第23図に示した平面分布を見ると、HB②イ地区と隣接するHB①地区中央部北側での出土が多い。胎土や器形等からほとんどが南九州系の入来Ⅰ・Ⅱ式土器と思われる。模倣土器である鉢形の1点を除いては壺形、甕形が得られた。壺形が234点、甕形が64点と前者が多い。図1～24、図版2～4に主なものを示し、個々の遺物の詳細は第6表に観察一覧を載せた。以下、壺形、甕形（鉢形も含める）の順に記述する。

① 壺形

壺形は口縁部30点、胴部197点、底部7点の計234点が得られた。そのうち図1～12に口縁部・頸部・胴部を図示した。図1は口縁部・胴部破片が1/2、底部は1/3程度の破片がそろっていることから復元したもので、口径約19cm、器高約41cmと大型の壺である。胴部付近では7mmの厚さを

第5表 搬入土器（弥生・奄美系）出土量

地区	分類器種	弥生土器									奄美系土器			合計
		壺			甕			鉢	不明		甕		鉢	
層位		口	胴	底	口	胴	底	口	口	胴	口	胴	口	
HB①	Ⅰ		1											1
	Ⅱ		1			1								2
	Ⅳ					1								1
	V	14	68	3	11	28	3		1	24	4	18	1	175
	不明		7											7
	小計		14	77	3	13	28	3		1	24	4	18	1
HB②イ	Ⅰ		4	1			1				1			7
	V	15	112	3	5	13	1		1	6	2	4		162
	不明		1								1			2
	小計		15	117	4	5	13	2		1	6	4	4	
HB②	不明		1											1
HB④イ	V	1						※1				1		3
不明	不明		2											2
合計		30	197	7	18	41	5	1	2	30	8	23	1	
器種別計		234			64			1	32		31		1	363
分類別計					331						32			

※模倣土器（胎土は在地）

呈するが、底部付近は10mmと厚くなる。外面にはハケ目痕が僅かに残るが、丁寧なミガキが顕著に施される。入来Ⅰ式と思われ、肩部には2条の沈線文が施される。口唇部の中央には僅かに凹線文が見られる。口縁部の上端は外反、肩部から胴部にかけて大きく張り出し、底部は朝顔状に開く。図2も口径21cmと大きく、厚手(8~11mm)で図1と同様の形状を呈する。口縁部内面の上部に2条の細い三角状凸帯文(4mm)を貼付する。口唇部の中央部には僅かな凹線文が見られる。肩部には内面と同様な三角状凸帯文が3条貼付される。図3は口唇部が玉縁を呈し、逆「L」字状となる厚手(8mm)の壺である。図4は6mmと薄手の壺で、口唇部は若干丸みを呈する。図3・4は頸部以下の形状が不明である。図5も入来Ⅰ式に近く、小型で口径が12.8cmを測る。形状は肩部の張り出しなどから大型の壺に類似する。肩部には3条の沈線文が施されるが、3本目は途中で途切れる。図6~12は口縁部が破損し、肩部のみである。図6~9は三角状凸帯文が貼付され、図6は1条、図7は2条、図8は3条、図9は残存で1条の凸帯文が見られる。図10は薄手で、2条の沈線文を施している。図11は混和材が粗く、胎土が雑で在地土器のようにも思われるが、8mmと厚手であること、頸部の文様等から搬入土器に含めた。文様は規格的な沈線文を縦位や横位に格子状に施し、混和材や胎土は奄美系土器にも類似する。図12は6mmと薄手で、外面に円形状の薄い粘土を貼付している。外面はナデが丁寧である。

底部は図18~21の4点を図示した。図18は底径7.8cmを測り、朝顔状に開く。復元した図1と同じ器形の壺が想定される。図19・20は底径が4.7cm、4.0cmと小さく、やや小型の壺の底部が想定される。図21は底径が8cmを呈することから、大型の壺の底部と思われる。内面は剥落している。

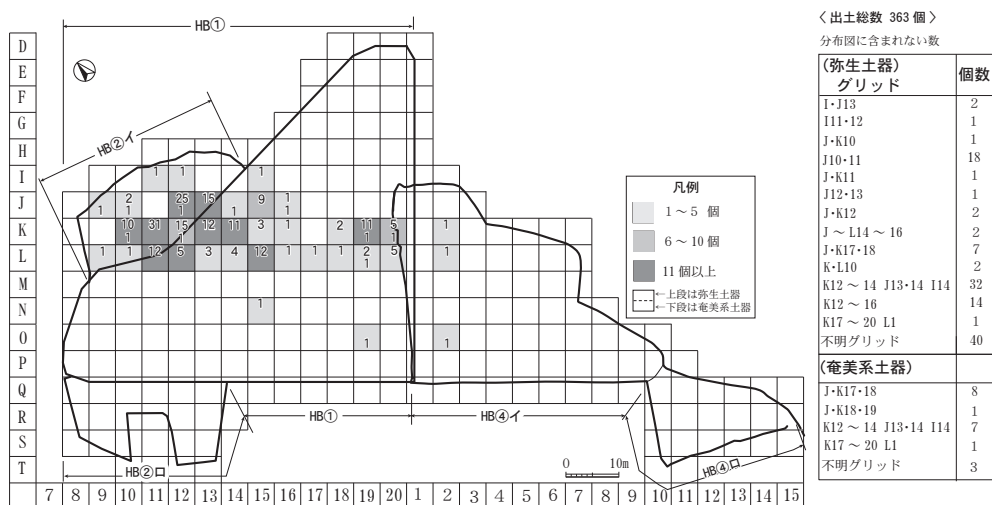
②甕形

甕形は口縁部18点、胴部41点、底部5点の計64点が出土した。図13~17に5点の口縁部を図示した。図13は口唇部に粘土を貼付し、約2cm幅の平らな面を呈する。口縁部はやや内彎し、胴部は張り出す。口唇部の僅かな側面に細い刻目文が施される。胴上部の外面には沈線文が2条圍繞している。口縁部は1/2程の破片で、底部は出土していないが、本遺跡で出土した弥生土器の底部を参考に全体の形状を復元した。胎土や文様等の特徴から、入来Ⅰ式土器と考えられる。類似のものが浦添市の嘉門貝塚B(第28図4・5)で出土しているが、本遺跡のものは胴部の膨らみがやや強い。図14も内彎の口縁部で、入来Ⅱ式土器と思われる。口唇部を幅広く貼付し、側面には微弱的な凹線文が施されている。外面の口唇部直下には楕円状の浅い刺突文を施し、約2cm以下の箇所三角状凸帯文を横位に4条貼付している。図13に比べると胴部の膨らみは弱い。嘉門貝塚B(第28図7・8)でも類似の甕形が出土しており、壺形と同じく同時代の搬入土器がもたらされている。図15は内彎の口縁部で、口唇部が幅広く貼付される。端部には微弱的な凹線が施されていると思われるが、破損がひどく不明瞭である。類似した資料が同遺跡の範囲確認調査(2008第23図43)で出土している。図16は口唇部とその下に凸帯文が貼付され、口唇部以下の形状は不明である。図17は口縁部形態や文様などの特徴から弥生土器を模倣したものと思われる。鉢形でやや逆「ハ」字状を呈し、口径が13.6cmと小型である。口唇部は1.5cmと幅広く平らに整形され、その端部に細かい刻目文を施す。胎土や混和材は在地土器の特徴を持つが、搬入土器で扱った。

底部は図22~24の3点を図示した。図22は中実脚台でかなりの重量感である。外底の中央部はやや凹み、上げ底状を呈する。小堀原遺跡(2012第28図12)で出土した底部に類似する。図23は内底が破損しているが、中実脚台と思われる。本資料も外底は上げ底状を呈する。図24は内底、外面とも丁寧なナデ調整を行っている。底厚や調整などから本資料も搬入土器とした。

<奄美系土器>

奄美系土器は32点が出土し、その内訳は口縁部9点、胴部23点である。第23図の平面分布を見ると、弥生土器とほぼ同じである。口縁部の形状から甕形と鉢形が得られ、図25～30に6点を図示した。口径が計測出来るものから形状を推測すると、弥生土器に比べて小型のものが多い。図25～29は口径が12～15cm程度と小型で、幅広の平らな口唇部を持つ。図25～27の3点は胎土がかなり精製されているが、図28～30は混和材が粗粒で多量に含まれており、特に内面は手触りがざらつく。文様が施されているものは図25～28の4点である。図25は口唇部と外面に文様を施す。口唇部には細沈線文が斜位と横位に施され、外面には横位の細沈線文の間に同様な文様を鋸歯状に施す。さらに、半分程破損しているが、弧状の耳が貼付されていたと思われる。図26は外面が無文で、口唇部のみ鋸歯状の細沈線文が施されている。図27は口唇部に刺突文が縦位に3列、外面には横位に凸帯文、その間に緩やかな鋸歯状沈線文が施されている。図28は口縁部上端が僅かに反り出し、胴部は若干張る。口唇部には混和材が抜けたのか、あるいは文様？（刺突文？）が見られ、外面には鋸歯状沈線文と弧状の耳が貼付されている。上記3点に比べて厚手（8～11mm）の土器で、胎土は本遺跡出土のⅠ類（阿波連浦下層式土器相当）にもやや類似する。図29は無文の土器で、底部近くまで得られたことから復元した。口縁部上端が僅かに張り出し、胴部は膨らむ。口縁部直下はナデにより僅かに屈曲部を持ち、胎土や形状が在地土器のⅠ類にも類似する。図30は胎土や器面調整等から在地の土器の特徴も見られるが、外面に三角状凸帯文を呈することから奄美系土器に含めたものである。口唇部は平らに整形され、外面に若干張り出す。図31～35は胴部である。図31は厚手の頸部で、外面には斜位の沈線文が施されている。図32も図31と胎土は同じで、外面には斜位の沈線文と丸みを呈する幅5mmの凸帯文が貼付されている。接合は出来ないが、図31と同一個体の可能性が考えられる。図33・34は外面に凸帯文を貼付するもので、前者は幅が3mm程の凸帯文を2条、後者は幅5mm程の低めの凸帯文が1条貼付されている。図35は外面に横位と半弧状の沈線文が明瞭に施される。2条の沈線文間が均一であること等から、二叉状工具によって施された可能性も考えられる。内面には器面調整による条痕が明瞭に残り、胎土からは在地土器とも思われる。



第23図 搬入土器出土平面分布

第6表-1 土器観察一覧(搬入)

(質量単位: cm, g)

第図版	図番号	分類	部位	形態	口径器高底径	器厚底厚重量	粒度含量	石英	赤色粒	角閃石	砂粒	その他	胎土焼成	器色(外面内面)	器面調整(外面内面)	地区・グリップ・層位遺構・台帳・(取上)番号		
第30図・図版2	1	口底		壺形・口唇-丸(凹線文) 口縁-外反・肩~胴部-張る 文様-肩部に2条の沈線を圍繞 底部-平底(朝顔状に開く)	18.9 40.8 7.0	0.7~1.0 1.9 721.0	粗粒多量	○	△	○	○	砂泥質良好	砂泥質良好	両面:赤褐色	両面:ミガキ	HB②イベルト V(橙色シルト①)台3103 HB②イJ12-ベルト V(暗褐色シルト)取1243 HB②イベルト V(橙色シルト③)台3145 HB②イJ12 V(黄砂層上面)台3303 HB②イJ12 V(貝層①)台3055 HB②イベルト V(貝層②)台3136(接合)		
	2			壺形・口唇-丸(凹線文) 口縁-逆「L」字状 文様-外面:肩部に3条の凸帯文 内面は2条の凸帯文(4mm)	21.0 — —	0.8~1.1 — 369.0	粗粒多量	◎	△	○	○	砂質良好	砂質良好	両面:茶褐色	両面:ミガキ	HB①L13 V(4層混貝層)取171 HB①K12~16トレンチ内 V(3層暗褐色シルト)台227(接合)		
第31図・図版3	3	口		壺形・口唇-玉縁・口縁-逆「L」字状 無文	19.8 — —	0.8 — 61.5	粗粒多量	◎	△	○	○	砂質良好	砂質良好	両面:赤褐色	外:ミガキ 内:器面剥落	HB②イL10 V(赤砂層)取1173 HB②イL10 V(黄砂層)取1235(接合)		
	4			壺形・口唇-丸・口縁-外反 やや薄手・無文	21.4 — —	0.6 — 13.3	粗粒多量	◎	△	△	○	砂質良好	砂質良好	外:橙褐色 内:淡黄褐色	外:ミガキ 内:器面剥落	HB②イベルト V(黄砂層)台3305		
	5			壺形・口唇-丸・口縁-逆「L」字状 文様-肩部に3条の沈線文	12.8 — —	0.8~1.1 — 138.2	粗粒多量	◎	○	○	○	砂質やや良好	砂質やや良好	両面:淡橙褐色	両面:ミガキ (内面下部は器面剥落)	HB②イベルト V(貝層②)台3136		
	6			壺形・頸部-窄まる・胴部-膨らむ 文様-肩部に1条の三角凸帯文	— — —	0.8~1.1 — 142.5	粗粒多量	◎	○	△	○	砂質良好	砂質良好	両面:赤褐色	両面:ミガキ	HB②イJ12 V(貝層②)取1192		
	7			壺形・頸部-窄まる・胴部-膨らむ 最大胴径-42.8cm 文様-肩部に2条の三角凸帯文	— — —	0.8(現存) — 238.5	粗粒多量	◎	○	○	○	砂質やや悪 雲母	砂質やや悪 雲母	外:赤褐色 内:淡灰褐色	外:ミガキ 内:器面剥落	HB②イK10 V(赤砂層)取1230 HB②イJ10 V(貝層②)台3139 HB②イK10 V(貝層②)台3149 HB②イL11 V(黒砂層)台3313(接合)		
	8			壺形・胴部-張る 文様-肩部に3条の三角凸帯文	— — —	1.0 — 124.4	粗粒多量	◎	○	△	○	○ 火山ガラス	砂質良好	外:橙褐色 内:淡橙白色	両面:ミガキ	HB②イJ13 V(橙色シルト④)取1164		
	9			壺形・胴部-張る 文様-現存で1条の三角凸帯文	— — —	0.6(現存) — 54.7	粗粒多量	◎	○	△	△	○	砂質良好	外:赤褐色 内:茶褐色	外:ミガキ 内:器面剥落	HB②イK10 V(貝層②)台3149		
	10			壺形・胴部-張る 文様-外面に2条の沈線文	— — —	0.5(現存) — 18.5	中粒多量	◎	○	○	○	○	砂質やや良好	外:暗茶褐色 内:橙褐色	外:ミガキ 内:器面剥落	HB①L18 V(5層白砂)台544		
	11			弥生土器	胴	壺形・胴部-張る 文様-外面に規格的な沈線文 (横2条+その間に縦・斜位)	— — —	8 — 54.4	粗粒多量	○	△	○	○	○	砂質良好	外:赤褐色 内:灰茶褐色	外:ナデ丁寧 内:器面剥落	HB④イK2 V(Ⅷ)台114
	12					壺形・口縁部形状不明 文様-外面に円形状の浮き文	— — —	0.6 — 14.8	細粒少量	△	△	△	△	△	砂質良好	外:茶褐色 内:黒褐色	両面:ナデ丁寧	HB②イL9 V(赤砂層)台3153
第32図・図版4	13	口	甕形・口縁-やや内彎 口唇-幅広く平ら・胴部-膨らむ 文様-口唇側面に刻目文 外面に2条の沈線文	18.2 21.7 (推定) —	0.7 — 180.1	細粒少量	○	△	△	△	△	△ 火山ガラス 雲母	砂質良好	両面:暗茶褐色	外:ミガキ 内:ナデ丁寧	HB②イJ12 V(暗褐色シルト)取1104		
	14			甕形・口唇-平ら(三角状に貼付)・胴部-やや膨らむ 文様-口唇部外端に凹線文・外面に4条の凸帯文と刺突文(浅め)	26.9 — —	0.6 — 78.9	粗粒多量	◎	△	△	○	△ 火山ガラス	砂質良好	外:暗茶褐色 内:茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB①K15 V(3層暗褐色シルト)台649		
	15			甕形・口唇-平ら(三角状に貼付) 文様-口唇部外端に凹線文を圍繞	28.8 — —	0.7 — 32.5	中粒多量	◎	△	△	△	△	砂質良好	外:灰褐色 内:淡橙褐色	外:ナデ 内:ナデ・指頭痕	HB①N15 IV(3層青灰色シルト)台511		
	16			甕形・口唇-平ら(三角状に貼付) 文様-凸帯文(口縁から2.5cm以下)	31.4 — —	0.6 — 25.1	粗粒多量	○	◎	△	△	△ 火山ガラス	砂質良好	両面:橙褐色	両面:ナデ	HB①K12~14 J13.14~114 V(4層橙褐色シルト)台573		
	17			鉢形・口唇-平ら(幅15mm・三角状) 文様-口唇の外端に刻目文・胎土は在在? 模倣土器?	13.6 — —	0.6 — 26.0	細粒少量	△	△	△	△	△	砂泥質良好	両面:黄茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ハケ目	HB④イL2 V(Ⅷ)台72		
	18			平底-朝顔状に外反	— 7.8	1.0 2.1 542.0	粗粒多量	○	○	△	△	△	砂質良好	外:灰橙褐色 内:灰褐色	外:ミガキ 内:器面剥落	HB②イH12 V(橙色シルト①)台3095		
	19			平底-外底の立ち上がり角は若干丸み・くびれ(壺)	— 4.7	0.6 2.0 96.8	中粒多量	◎	△	○	△	△	砂質やや悪	外:灰橙褐色 内:灰褐色	外:ナデ丁寧 内:器面剥落	HB②イJ+K10 V(貝層①上面)台3112 HB②イK11 V(橙色シルト②)台3135(接合)		
	20			平底-若干くびれ・外反強(壺)	— 4.0	0.7 1.4 27.8	中粒中量	○	△	△	△	△	砂質良好	両面:淡橙褐色	両面:ナデ丁寧	HB①K20 V(4層混貝層)台569		
21	底		平底-外底は平ら・若干くびれ	— 8.0	1.2 60.3	中粒中量	○	△	△	△	△	砂質良好	外:橙褐色 内:暗褐色	外:ナデ 内:器面剥落	HB②イI(排土)台3083			
22			脚台-外底上げ底 底厚-厚い(甕)	— 6.6	2.8 214.0	中粒多量	◎	△	△	△	◎ 雲母	砂質良好	両面:茶褐色	外:ナデ丁寧 内:雑仕上げ	HB②イJ13 V(橙色シルト④)取1143			
23			脚台-外底上げ底 内底破損(甕)	— 5.0	— 5.0	中粒中量	○	△	△	△	△	砂質良好	両面:茶褐色	外:ナデ丁寧 内:器面剥落	HB①K14 V(4層橙褐色シルト)取71			
24			脚台-外底・内底とも破損(甕)	— —	— 74.6	中粒少量	△	△	△	△	△ 火山ガラス	砂泥質良好	両面:赤褐色	両面:ナデ丁寧	HB①K19 V(4層混貝層)取158			

凡例 (◎=非常に多い ○=多い △=少ない ▽=僅少)

第6表-2 土器観察一覧(搬入)

(法量単位:cm, g)

第図 図版	図 番号	分類	部位	形態	口径 器高 底径	器厚 底厚 重量	粒度 含量	石英	赤色 粒	角閃 石	砂 粒	その他	胎土 焼成	器色 (外面 内面)	器面調整 (外面 内面)	地区・グリッド・層位 遺構・台帳・(取上)番号		
第33 図版 5	25	口		甕形・小型・口唇-平ら(幅10mm)・外側に張り出し強調・内傾・胴部-やや張る・文様-口唇に細沈線文(横+斜位)・外面に耳(弧状)・細沈線文(横+鋸歯状)	12.2 — —	0.6 — 16.2	細粒 中量	○	○	△	△		砂質 良好	外:暗褐色 内:茶褐色	両面:ナデ	HB① J14 V (4層橙色シルト)取90		
				甕形・小型・口唇-平ら(幅10mm)・外側に張り出し強調・内傾・胴部-膨らむ・文様-口唇に細沈線文(鋸歯状)・外面-無文	14.4 — —	0.6 — 6.0	細粒 中量		△	△	△	△			砂質 良好	両面:茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB②イ I (排土)台3083
				甕形・小型・口唇-平ら(幅14mm)・外側に張り出し強調・胴部-直状・文様-口唇に刺突文3列・外面に曲沈線文+三角状凸帯文(上に刺突文)	15.6 — —	0.6 — 16.2	細粒 少量		△	△	△		△	雲母	砂質 良好	両面:暗茶褐色	両面:ナデ	HB②イ K10 V (貝層②)取1047
				甕形・小型・口唇-平ら(幅10mm)・外側に張り出し強調・胴部-やや張る・文様-口唇に刺突文?混和材抜け?・外面に耳(弧状)+鋸歯状沈線文	— — —	0.8~1.1 — 60.4	粗粒 多量	◎					○	チャート	砂質 良好	外:暗褐色 内:茶褐色	両面:ナデ	HB②イ 不明
				甕形・小型・口唇-中央から両側に平らな面(外側へ張り出す)・鉢・胴部-張る・無文・口唇直下-ナデにより稜有り	12.8 9.1 (推定) —	0.7 — 77.7	細粒 中量	○	△				○		砂質 良好	外:暗褐色 内:茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB②イ J10.11 V (暗褐色シルト)台3098 HB②イ J10 V (暗褐色シルト)台3106 HB②イ J・K11 V (貝層①上面)台3118 HB②イ K11 V (橙色シルト②)台3135 HB②イ K10 V (貝層②)台3149 (接合)
				鉢形・口唇-平ら(やや強調)・文様-外面に角状凸帯文1条貼付(幅約13mm)	18.8 — —	1.0 — 111.4	粗粒 多量	○	△	◎			○	チャート	砂質 良好	両面:暗茶褐色	両面:ナデ	HB① J16 V (4層橙色シルト)取222
	29	口		頸部-僅かに外反・厚手 文様-外面に沈線文(斜位)	— — —	1.0 — 24.9	粗粒 多量	◎		△	○		砂質 良好	両面:赤褐色	外:ナデ 内:ナデ・指頭痕	HB① J・K17.18 V (4層橙色シルト)台549		
				胴部-膨らむ・厚手 文様-外面に斜位の沈線文+横位の凸帯文2条	— — —	1.0 — 94.2	粗粒 多量	◎		△	○			砂質 良好	両面:赤褐色	両面:ナデ	HB① K19 V (4層混貝層)取188 HB① J・K18.19 V (3層落岩間)台245 HB① J・K17.18 V (4層橙色シルト)台549 (接合)	
	30	胴		胴部-やや張る・やや薄手 文様-外面に横位の細凸帯文2条	— — —	0.6 — —	細粒 少量		△	△	△		砂泥 質 良好	外:暗褐色 内:灰茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ヘラナデ	HB②イ J9 V (混雑砂層)取1408		
				形状不明・薄手 文様-外面に幅7mmの凸帯文(丸)	— — —	0.55 — 9.3	細粒 少量		△		△			砂質 良好	外:赤褐色 内:茶褐色	両面:ナデ	HB④イ O2 V (Ⅷ)台61	
				形状不明・厚手 文様-外面に弧状の沈線文2条(半弧or円弧)+横位の沈線文2条	— — —	0.8 — 57.1	細粒 少量		△	△	△	△	△	火山 ガラス	砂泥 質 良好	両面:黄茶褐色	外:ナデ丁寧 内:条痕明瞭	HB① O19 V (3層青灰色砂)取224

凡例 (◎=非常に多い ○=多い △=少ない ▽=僅少)

2) 在地土器

貝塚時代後期の在地土器は口縁部、胴部、底部を合わせて総数 13820 点が得られた。出土数が多いことから部位別に集計を行い、それぞれの出土量を示した。

なお、貝塚時代前・中期の土器も 7 点程得られたので、口縁部の最後に報告する。以下、口縁部、胴部、底部の順に記述する。

1. 口縁部

口縁部は復元土器も合わせて 1386 点が出土した。本遺跡出土の土器を型式が分かるものを中心に I～VII 類に分類し、第 7 表に出土量を示した。鉢形と壺形に分け、甕形は鉢形の中に含めた。分類別に見ると I～III 類が 92.0% と高い頻度で出土し、中でも II 類は 56.9% と本遺跡の主体を占める。IV～VII 類は僅か 8.0% の出土である。地区別には HB②イ地区と HB①地区での出土が多く、93.8% と高い割合を占める。I～III 類は大半が両地区からの出土である。その他、HB④口地区では IV・VII 類の出土が見られるなど、本遺跡でも貝塚時代後期の土器がそれぞれまともに見せた。

層位的には V 層出土が 89.0%、IV 層出土は僅か 4.5%、I～III 層出土も 5.3% と低い割合を示す。V 層は発掘時に分層をしているが、多数出土した II 類と I 類の出土状況は層位的、平面的にもほぼ同じである。本遺跡では多量の土器が検出されたにもかかわらず、貝塚時代後期の遺構と遺構出土の土器は僅かであった。下記に在地土器の分類を示し、その順で記述する。

I類：口縁上部が「く」字状に屈曲するもの（阿波連浦下層式土器相当）

II類：胎土がきめ細かく、角閃石を多量に含むもの（浜屋原式土器相当）

III類：I類とII類の中間タイプと胎土がII類に近いもの（I・II類と思われる壺も含める）

IV類：粘土積み痕が隆起し、器面調整も雑なもの（大当原式土器相当）

V類：有文土器

VI類：厚手の土器で型式不明のもの

VII類：薄手の土器で型式不明のもの

< I類 >

I類の口縁部は238点が得られた。全体の約17.2%の割合で、V層出土が95.4%を占める。第24図に示した平面分布を見ると、HB②イ地区での出土が最も多く、次に隣接するHB①地区の中央部北側と続く。本遺跡においては本来のI類とした形状の他に、緩やかな屈曲部を持つものや胎土が若干泥質気味で薄手も見られ、全体的な形状から今回はI類に含めたものもあり、今後の課題である。以下、形状のわかるものをa～eに分類した。

- a：屈曲が明瞭で胴部が膨らみを持つもの・口径<胴径
- b：屈曲が明瞭で胴部が直線的なもの・口径>胴径
- c：屈曲がやや明瞭で胴部がやや膨らみを持つもの・口径>胴径
- d：屈曲が弱く、胴部はより膨らむもの・口径≧胴径
- e：屈曲がより不明瞭で間隔も狭く、胴部はより膨らむもの・口径≦胴径

aは図36～40の5点を図示した。ほとんどが砂質で粗めの胎土を呈し、混和材は白色粒主体と石英主体のものがある。中には砂泥質で器厚が6mm弱と薄く、赤色粒を含むなど他のI類と胎土に若干の違いが見られるものもあるが、屈曲が明瞭であるなどの形状から、今回はI類に含めた。図36・37は底部近くまであり、復元を行った。大きさは若干異なるが、胎土や形状はほぼ同じである。図38は前者らと同じ形状を呈するが、胎土は砂泥質で赤色粒も含まれる。ただ、口縁部の内面は屈曲のために膨らみを持つなどI類の特徴を示す。図39は外面上部に煤が付着している。図40は口縁上部に有孔が見られ、孔の径は約6mmで外→内へ穿たれる。

bは図41～47の7点を図示した。図41は屈曲のくびれが強く、胴部はあまり張らずに直線的である。遺構の1042SX直下出土で、V層内の山土層と灰砂層出土の破片が接合出来た。両面とも丁寧なナゲ調整を行なっている。図42～45は口縁部の屈曲が明瞭で、図45の口唇部には鞍状凸帯文が貼付され、内面側がやや長い。図46は屈曲部がやや長く、胎土はキメ細かな砂質でII類に類似する。図47は両面に文様を有するもので、外面にはやや斜位の沈線文、内面には縦位の沈線文が施される。外面に比べ、内面の文様はやや浅く施されるが、施文具は同じである。有文土器はVI類にま

第7表 在地土器（口縁部）出土量

地区	分類	層位	遺構	I類		II類		III類		IV類		V類		VI類	VII類	合計
				壺	鉢	壺	鉢	壺	鉢	壺	鉢					
HB①	I			1	9			3								13
	II					3		4	2							9
	II	遺構		2	9			3			1				1	16
	III	遺構				5		1	1		1					8
	IV					12		8	11	2	9	5	1			48
	V			95	308	35	68		11		1	3	5			526
	V	364SS				1										1
VI							1								1	
	小計			98	347	35	88	25	2	12	8	7			622	
HB②イ	I					4		2							2	8
	II		遺構			3	7		1							11
	III									1					1	2
	V			127	401	59	60					1				648
	V	1023SX		1	2											3
	V	1041SX						1								1
	V	1042SX		1	2											3
V	1043SX		1												1	
不明			1												1	
	小計			134	416	59	64	1		1				3	678	
HB②ロ	III		遺構										1		1	1
	IV											1			1	
		小計										2			1	3
HB④イ	IV			1	4	1			1		1	1	1		3	12
	V			2	9				1		1	1	1		3	17
		小計			3	13	1			2		2	2		6	29
HB④ロ	I					2									1	3
	IV		遺構												1	1
	V							1	22		1		11		35	
		小計					2	1	22		1		13		39	
	不明			3	10		1	1							15	
	合計			238	788	95	154	51	2	18	10	30			1386	

遺構:HB① (I層)98SZ (II層)83.229.240SZ 1SK 305SD (III層)197.221P 189.237.299SK 275SL
 遺構:HB②イ (II層) 1005SZ 1006SK 1018SX HB②ロ (III層) 2049SD HB④ロ (IV層) SD001

とめたが、本資料はⅥ類の有文土器と形状、胎土、文様等に違いが見られ、Ⅰ類の特徴を呈することからここに含めた。

cは図48～55の8点を図示した。cの中には口唇部が舌状を呈するものや胎土がやや泥質に近いものが見られた。図48は指ナデによって幅の狭い屈曲部が見られる。器厚は10mmと他に比べて厚く、外面には弧状の三角状凸帯文の耳を貼付している。口唇部はやや舌状気味で、僅かに外反する。図49はⅠ類ではあまり見られない薄手(5mm)でやや泥質の胎土を呈するが、屈曲部が明瞭であることからⅠ類に分類した。口唇部は舌状を呈し、粘土積み痕も明瞭である。粘土帯は約2.5cmと一定で、ナデにより器面は平滑である。図50・51・54はやや泥砂質の堅致な土器で、図52は指ナデによる僅かな屈曲が見られ、器厚が厚い。図53も6mmと薄手でキメ細かい胎土を呈し、外面のヘラナデ痕が明瞭に残る。図55は胴部を欠くが、口縁部と底部が得られたことから、図上で復元した。底部は平底で、立ち上がりはややくびれる。頸部が指ナデにより若干屈曲部を形成し、胎土に角閃石や石英などを含むことからⅠ類とした。

dは図56～62の7点を図示した。図56は薄手で口縁部の屈曲がやや弱く、胴部は若干張りが強い。口唇部は舌状を呈し、波状口縁となる。本資料に煤が付着しており、年代測定を行ったところ、 $2220 \pm 20BP$ の値が得られた。詳細は第Ⅳ章第3節で述べる。

図57は口～底部まで出土し、復元が出来たものである。本資料も底部が平底で、胴部がより張る器形を呈する。外面には有孔を持った半円状の耳を貼付し、やや泥質に近い胎土を呈する。図58・61は5mmと薄手で、いずれも砂質の胎土を呈し、手触りがざらつく。図59・62は7mmとやや厚く、しっかりした胎土を呈する。前者は胴下半部まであり、胴部の膨らみが強い。図60は石英を主体とし、口径が14.6cmと小型の土器で、胎土はaに類似する。

eは図63～69の7点を図示した。屈曲は不明瞭で胴部の張りが強く、ナデにより僅かな屈曲部が見られる。Ⅰ類本来の器形とは若干異なるが、今回はⅠ類に含めた。胎土は砂質、砂泥質が見られ、前者は図63～67、後者は図68・69である。図64～66は指ナデによって幅の狭い屈曲部を呈し、胴部はより膨らむ。図63・67～69は屈曲部がより緩やかで長く、胴部の張りも若干弱い。

<Ⅱ類>

Ⅱ類は口縁部788点と本遺跡で最も多く得られた。口縁部の割合では56.9%と半数を占める。Ⅰ類と同じくⅤ層出土が最も多く、91.8%の割合を占める。第24図に示した平面分布を見ると、最も多く出土する場所はⅠ類とほぼ同じである。他に、Ⅱ・Ⅲ層の遺構出土のものも見られ、HB①地区とHB④イ地区のNライン以下で出土するものはⅣ層出土である。胎土はⅠ類に比べてキメ細かく締まり、より砂質になるものが多いが、中にはⅠ類に近い胎土も見られる。器面調整を見ると、外面は丁寧なナデ、内面は雑な指頭痕が目立つ。混和材は角閃石を主体とするものと石英主体のものに分かれる。Ⅱ類も形状の分かるものを下記のようにa～eに分類した。

- a：口縁部は直状を呈し、胴部がやや張るもの（やや内彎気味のものも含む）
- b：口縁部は直状を呈し、頸部はややしまりながら胴部が張るもの
- c：口縁部は外反し、胴部がやや張るもの
- d：口縁部は逆「ハ」字状に開くもので、胴部が直線的なもの
- e：dとほぼ同じ形状だが、口縁部上端の外反が強いもの

aは図70～77の8点を図示した。図70・71は胴中央部辺りから急に窄まって底部へ移行する。やや泥質に近い胎土を呈し、石英と白色砂主体である。前者の外面はナデ調整が丁寧であるが、内面はかなり雑である。図72は口縁部のみで、全体的な形状は不明で、口唇部はやや波状を呈する。

図 73・75 は口径が 16.8 cm、14.4 cm と小型の土器で、器厚は 8 mm と厚手である。胎土は砂質でキメ細かく、角閃石を多量に含む。図 74 は口径が 11.6 cm とより小型で、碗形にも近く堅致でしっかりしている。図 76 は口縁部と胴部が出土、胎土とも同じであることから、図上で復元したものである。両面とも丁寧なナデを施す。図 77 は口唇部が玉縁を呈し、割としっかりした土器である。

b は図 78～82 の 5 点を図示した。胎土や器面調整などからⅡ類としたもので、a と同じく直状タイプであるが、口縁部は頸部が若干しまり、胴部で張るのが特徴である。外面の調整は全て丁寧、内面は指頭痕が明瞭に残るなど雑である。図 81 は HB④イ地区 N2 IV 層出土で、器色が黄茶褐色を呈する。図 82 は口径が 12 cm と小型の土器で、両面とも煤が付着している。

c は図 83～91 の 9 点を図示した。図 83 は底部近くまで得られた。外面は丁寧なナデ調整、内面は指頭痕が残り雑な仕上げである。角閃石は僅かで、石英主体のキメ細かな胎土を呈する。図 84 は砂質が強く、石英・角閃石を多量に含む。図 85・86・90 はきめ細やかな砂質を呈し、図 83 と類似する。図 86 は煤が付着しており、年代測定を行ったところ 2350±30BP の値が得られた。図 87・88 は外面に横耳状の把手を持つもので、胎土は図 84 と同様である。前者は横耳状の把手に 2 個の有孔、後者は 1 個の有孔を持つ。Ⅰ類の図 57 にも類似するが、器形や胎土、器面調整などから本資料はⅡ類とした。図 89 も胎土や形状からⅡ類に分類したもので、HB④イ地区出土である。本地区出土のⅡ類はほとんどが同様の胎土で器色も黄茶褐色を呈するものが多い。図 91 は燃焼遺構である 1042SX 出土で、口～底部まで出土し、復元が出来たものである。粘土積み痕は隆起せず、粘土帯が約 4 cm 幅と一定で、混和材は石英を主体とする。口縁は波状を呈し、左右で形状が異なる。詳細は遺構の項にて記述する。

d は図 92・93 の 2 点を図示した。両者とも胎土は砂質で、石英を主体とする。前者は口径が 13.6 cm と小型で、後者は大きい。器厚はいずれも 5 mm と薄手である。

e は図 94～99 に図示した 6 点で、5～6 mm と薄手が多い傾向が見られた。図 95・96 は砂質が強く、手触りもざらつく。他は、前者 2 点に比べるとしっかりした胎土である。図 97～99 は他と異なり両面とも丁寧なナデが施されている。

<Ⅲ類>

Ⅲ類はⅠ類・Ⅱ類の要素を併せ持ち、胎土等が類似するものと壺形をまとめた。中にはⅠ・Ⅱ類の形状と若干の違いが見られるものやⅣ類の要素を持つものもある。壺形の大半はⅡ類と思われるが、中にはⅠ・Ⅳ類もあり、胎土が類似するものも多いため、まとめてⅢ類で報告する。層位的にはⅠ・Ⅱ類と同じⅤ層出土が多く、平面分布もほぼ同じ状況を示すことから、大半はⅠ・Ⅱ類に属するものと思われる。鉢形は 154 点、壺形は 95 点が出土し、図 100～136 に図示した。鉢形を A、壺形を B に分けて記述する。鉢形の中に甕形も含めた。

①：鉢形

鉢形は形状により a～c に分類した。

a：直状・外反タイプ

b：やや内彎・「く」字状湾曲タイプ

c：その他

a は図 100～104 の 5 点を図示した。外面は丁寧なナデ、内面は雑な指頭痕が見られるなどⅡ類に近い。図 100 はナデによる湾曲が僅かに見られ、胴部が若干張ることからⅠ類の可能性もある。図 101～103 もナデによる湾曲が僅かに見られるが、胴部は張らずに直線的に底部へ移行する。図 104 もナデによる湾曲が見られるが、粘土積み痕が明瞭で、器厚も胴部にいくにつれて厚くなるなど不

揃いになり、Ⅳ類の要素も持つ。ただ、胎土はキメ細かい砂質を呈し、ややⅡ類に近い。

bは口縁部がやや内彎し、「く」字状に湾曲する。図105・106は胴下部が窄まり、胎土はキメ細かい砂質でⅡ類に近い。図107・108は胴部の湾曲が強く、特に図108は顕著である。口唇部は粘土を貼付し、外反がやや強い。aに比べると胎土は砂泥質でしっかりしている。

cはa・bに分類出来ないものをまとめた。図109は胴部で、胎土が砂質を呈し、器面調整などの特徴からⅡ類に近い。図110は口縁部の上部が外反し、頸部でしまりながら胴部は膨らむ。両面ともナデ調整が丁寧である。図111は口縁部の外反が強く、胴部は直状を呈する。Ⅱ類eと形状が類似するが、胎土が異なるためにⅢ類に含めた。外面のナデは丁寧で、内面は雑仕上げでハケ目痕が明瞭である。図112～114の3点は口唇部を強調させるもので、前者は外反し、後者2点は口唇部に粘土を貼付し、平らで幅広な口唇部を持つのが特徴である。

②：壺形

壺は図115～136に22点を図示した。中にはⅠ・Ⅱ類と異なる胎土を呈するものもあるが、有文以外はここでまとめた。形状により以下のように分類した。

- a：無頸壺で口縁部から「ハ」字状に開くもの
- b：短頸壺で肩部まで緩やかなナデ肩状を呈するもの
- c：短頸壺で口縁部は外反・肩部は張り出すもの
- d：短頸壺で口縁部は直状・肩部は張り出すもの
- e：長頸壺でやや外反するもの
- f：長頸壺で直状するもの
- g：口縁部は外反・頸部は屈曲・胴部はやや張るもの
- h：壺の胴部

aは図115～117の3点である。3点とも8～11mmと厚手で「ハ」字状に開く。胎土は砂質で、石英・角閃石を含むなどⅡ類に分類出来そうである。図117は他の2点に比べて内面がやや雑であるが、外面のナデは丁寧である。

bは図118～120の3点で、肩部は緩やかなナデ肩を呈する。図120は外面のナデが丁寧なことからここに含めたが、他の2点に比べて薄手で石灰質の白色粒を多量に含む。

cは図121・122の2点で、肩部から胴部にかけて急に張り出す。前者は口径が12.4cmと小型、後者の口径は18.7cmとやや大型で、両者とも外面は丁寧なナデが施されている。

dは図123～126の4点で、いずれも口径が6～8.2cmと小型である。肩部から胴部にかけて急に張り出す形状が主体である。図123は内面の肩部が張り出す部分に明瞭な調整痕の起点が見られ、削りあるいは押さえの調整痕と思われる。図124はcと同様な胎土を呈し、図125・126は類似の胎土で肩部から胴部にかけて急に張り出す。両者は胎土等がⅣ類に近い。

eは図127・128の2点を図示した。2点とも10mmと厚手で、前者はかなり長頸である。胎土や器厚等が類似し、器面調整や胎土、混和材などもⅡ類の特徴を持つ。前者はHB①地区L19 V層（褐色細砂質土）出土の口縁部とM18 V層（青灰色砂質土）出土の頸部（取223）が接合した。後者はHB④イ地区L1 V層（Ⅷ層）出土（取1）である。

fは図129の1点で、両面ともハケ目痕が縦位に見られるが、外面は丁寧なナデが行われて不明瞭である。胎土に含まれる混和材は僅かで、器色は赤褐色が強い。内面はナデ調整が弱く、粘土積み痕が明瞭である。本資料はⅠ・Ⅱ類以外の壺と思われる。

gは図130の1点で、口径が10cmと小型である。口縁部は外反が強く、頸部から緩やかに胴部に

移行し、胴中央部付近で湾曲部を持つ。火山ガラスと思われる混和材も含まれていることから搬入土器の可能性もあるが、今回は在地壺の中に含めた。

hは図131～136の6点である。図131・132は薄手で、角閃石を多量に含む。外面は丁寧なナデ、内面は雑仕上げである。形状などからⅠ類に近いものと思われる。図133・134は同じ胎土を呈し、前者の胴部形状は丸みを呈するが、後者は肩部で張り出した後に底部まで直線的に移行する。また、前者の外面頸部には横位の沈線文が施される。図135は肩部から底部まで出土した資料で、肩部は大きく張り出しながら底部へ直線的に窄まる。口縁部は得られていないが、復元図からすると口径は小さく、窄まるものと想定される。図136は薄手で両面とも丁寧な仕上げである。本資料は形状や胎土、混和材、器厚などからⅠ・Ⅱ類より新しい可能性が考えられる。

<Ⅳ類>

Ⅳ類は51点の出土で、全体の僅か3.7%の割合である。図137～144に8点を図示し、出土量が少ないことからまとめて記述する。主に、HB④口地区とHB①地区で出土し、Ⅰ・Ⅱ類とは平面分布の状況が異なることから、隣接する平安山原C遺跡との関係が考えられる。粘土積み痕が隆起するものがほとんどで、図137・139・140は薄手(4～8mm)、図138・141～144は厚手(8～17mm)である。図137は口縁部から底部まで接合が出来、復元したものである。粘土積み痕が明瞭で、外面には不規則な曲沈線文を施している。他の口縁部も粘土積み痕が隆起し、不揃いである。図143の胴部は9～17mmとかなり厚手で、類例として小堀原遺跡(2012第46図134)があげられる。

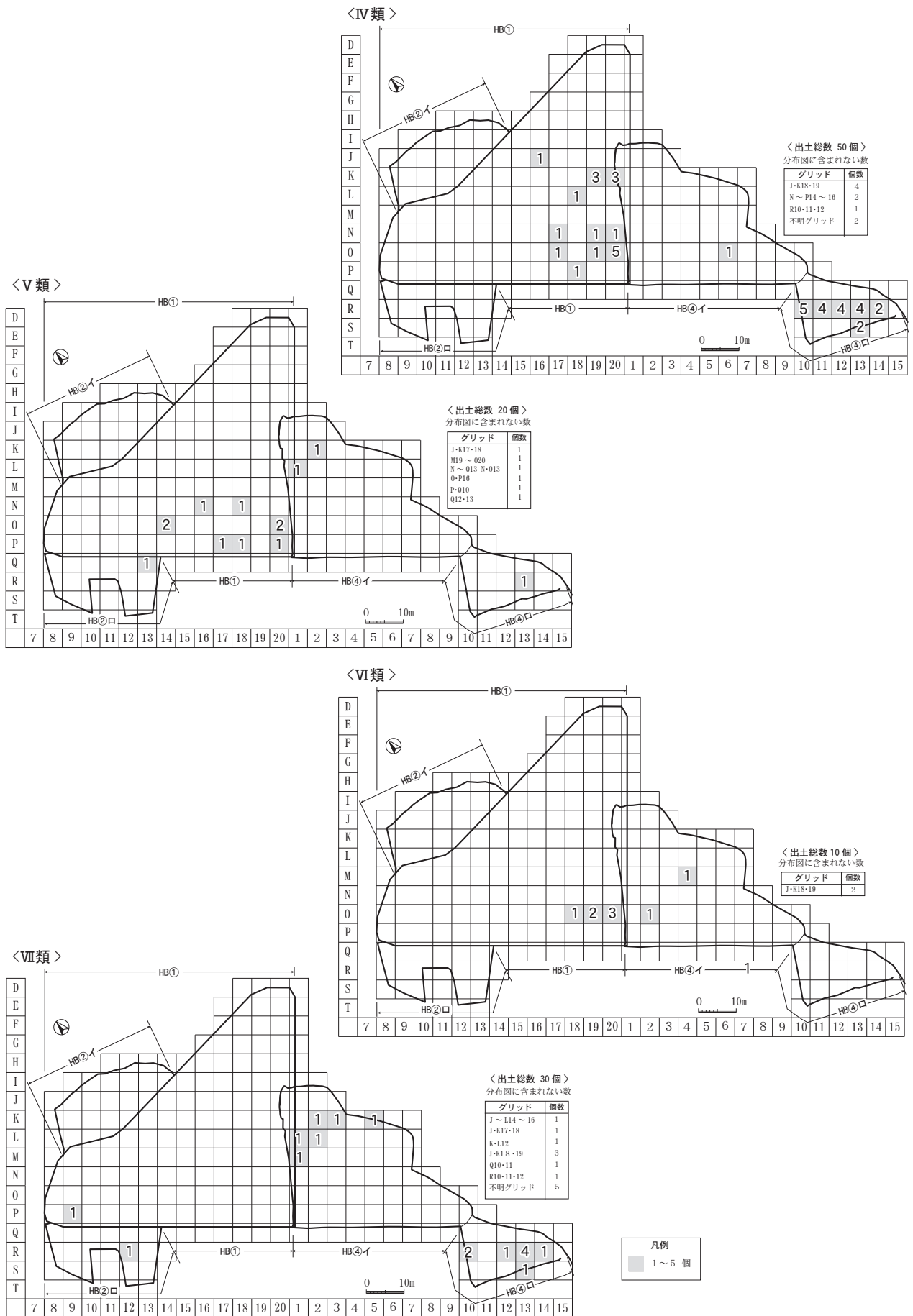
<Ⅴ類>

Ⅴ類は有文の土器をまとめたもので、鉢18点、壺2点の計20点が得られた。壺の2点は有文で、Ⅲ類でまとめた無文の壺と胎土も異なることから、ここに含めた。Ⅴ類は僅か1.4%の割合である。

最も多く出土した地区はHB①地区西側のⅣ層からで、他の地区からの出土は僅かである。図145と図146は文様が類似しているが、若干の違いが見られる。前者はキメ細かい胎土で丁寧なナデ調整を行い、外面には規格的な鋸歯状沈線文が施される。Ⅱ類あるいはⅣ類との中間タイプの可能性が考えられ、口縁部の外面上部には煤が付着している。後者は胎土が粗く調整も雑である。文様もラフで、Ⅳ類に相当すると思われる。図147・148は口唇部に文様が有り、前者は明瞭な刺突文、後者は浅く長めの指頭圧文が施される。前者のような明瞭な文様は本町の伊礼原D遺跡(2013)、伊礼原遺跡(2014)でも出土している。図149・150の2点は両面に文様を有するもので、両者とも曲沈線文を施している。図149は口縁部が外反し、砂泥質のしっかりした胎土を持つ。灰白色を呈し、あまり見られない器色である。HB②口地区Ⅳ層(グスク層黒色粘質土)から出土した。図150の口縁部は強く外反し、胴部でやや張る形状と思われる。内面にハケ目痕が明瞭に残り、戦前の攪乱であるHB①地区1016SZとHB②イ地区Ⅴ層(橙色シルト①)出土のものが接合出来た。形状や胎土等から奄美系土器やアカジャンガー式土器が考えられるが、出土数が少なくはっきりしない。両面に文様を有する土器は名護市の部瀬名貝塚(1996)、うるま市の平敷屋トウバル遺跡(1996)等でも出土している。図151・152は壺で、2点とも外面に明瞭な横位・弧状の沈線を施す。両者の沈線文は前者が太く、後者は細い。いずれもⅣ層(青灰色粘質土・青灰色シルト)出土である。

<Ⅵ類>

Ⅵ類は既存の型式から外れる厚手(8～10mm)のものをまとめた。僅か10点の出土で、Ⅳ層、Ⅴ層から半々の出土である。018～02グリッド付近で出土し、図153～156に4点を図示した。図154はHB④イ地区の下層確認調査において、02グリッドのⅤ層(白砂層)から出土した完形土器である。土器に付着した煤の年代測定は1890±30BPの値が得られ、詳細は第Ⅳ章第3節で述べる。



第 25 図 土器口縁部 (IV類・V類・VI類・VII類) 出土平面分布

面は丁寧なナデ、内面にはハケ目痕などが見られる。図 170 は泥質で、器色や器面調整などの特徴からフェンサ下層式土器と思われる。口径が測れるものは4点で、図 161・162 は 20.0 cm、24.8 cm と大きく、図 166・167 は 17.6 cm、15.6 cm でやや小さくなる。

＜その他＞

その他、貝塚時代後期以前の口縁部、胴部が7点得られたので、最後に記述する。図 171～174 に4点を図示し、残り3点は小破片のため省略した。出土数が少なく、紛れ込みと思われることから、出土量は省略した。図示した個々の遺物の詳細は貝塚時代後期土器の観察表に示した。図171は文様と胎土、器厚から室川下層式土器と思われ、HB①地区L16V層（中央ベルト5層白砂層）から出土した。図 172 は口唇部に幅 1 cm 程の凸帯文を貼付し、その上に細沈線を横位に施すもので、面縄前庭式土器あるいは仲泊式土器の中間タイプと思われる。類似の土器は伊礼原E遺跡（2010）で出土している。HB④イ地区 M 3 IV層（V）出土である。図 173 は口唇部、その直下の外面に同様の押し引き文を施している。HB②イ地区 L11V層（黄砂層）出土である。図 174 は胴部で無文であるが、胎土等からここに含めた。HB①地区出土で、グリッド・層位とも不明である。未報告の3点は胴部で、1点はHB①地区 K12～14・J13・14・I14V層（4層橙色シルト）、2点はHB①イ地区 I12V層（貝層①）出土である。

2. 胴部

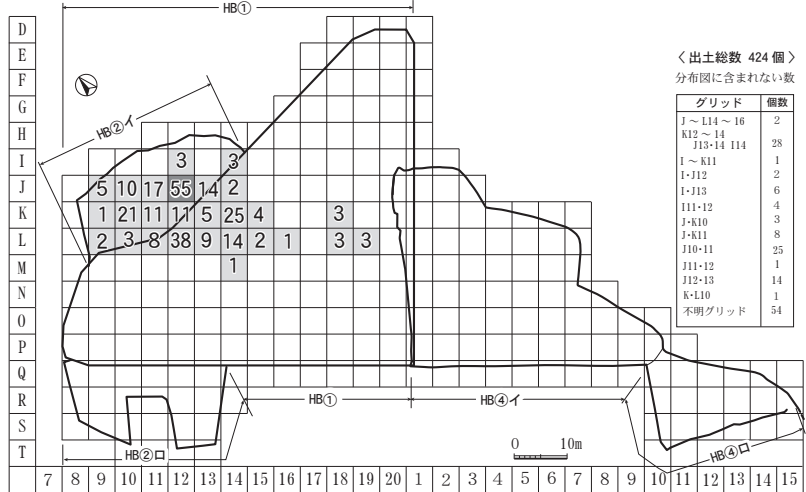
胴部は 12015 点と多数出土した。口縁部に比べて形状不明なものが多く、口縁部の混和材や胎土、器厚等を参考に分類した。中には胎土や混和材などが類似し、判別出来ないものは不明として扱った。第 8 表に胴部の出土量を示した。最も多く出土したものは口縁部と同じく II 類で、67.5%を占める。I 類は口縁部の出土量に比べると胴部は少なく、IV 類は逆に胴部が多くなる傾向が見られた。地区別にはHB①・HB②イ地区からの出土が多く、93.6%を占める。層位的にはV層出土が 87.2%と最も多く、I～IV層出土も少量見られる。IV層からHB①地区 524 点、HB④イ地区 120 点、HB②口地区 96 点が出土している。第 26・27 図に分類別に胴部の平面分布を図示し、口縁部と比べて見た。I 類は口縁部と同じ出土状況を示し、HB②イ地区とそれに隣接する HB①地区中央部北側に集中している。II 類も多数出土した地区

第 8 表 在地土器（胴部）出土量

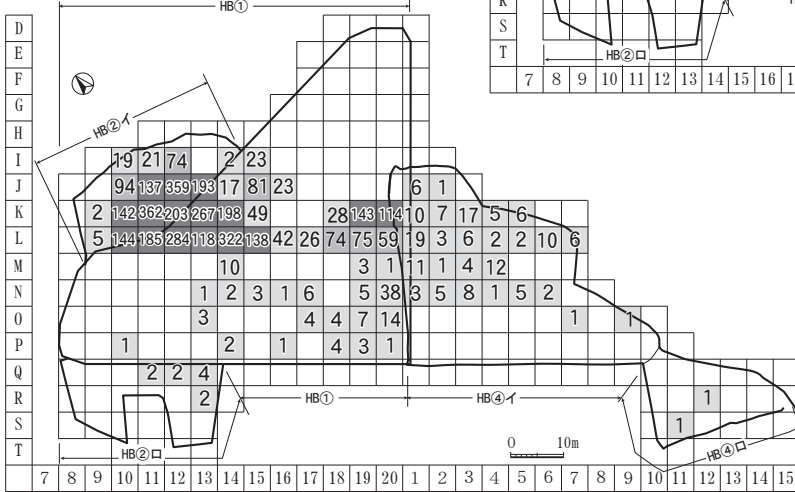
地区	層位	遺構	分類							合計			
			I類	II類	III類	IV類	V類	VI類	VII類		不明		
HB①	I			74	1	3	2			6	3	89	
	II	遺構		93		5	26	1		8	19	152	
	III	遺構		62		5	1			8	30	106	
	IV			36		8	17	1		7	16	85	
	V			102		6	330		20	38	28	524	
	V	364SS		146	4086	38	675	299	3	4	26	130	5407
	VI				2			3				5	
	不明				3		1	4				6	14
小計				7		1	1				2	11	
小計			146	4465	39	704	683	5	24	93	234	6393	
HB②イ	I			5	104	1	5	5		6	5	131	
	II	遺構			59	1	4	2		2	2	70	
	III				7			1		14	3	25	
	V			253	3267	73	937	1	1	5	22	4559	
	V	1021SZ			3							3	
	V	1023SX					21					21	
	V	1029SK					1					1	
	V	1042SX		5			11					16	
V	1042SX-D					1					1		
V	1044SX					1					1		
不明			3	13		4						20	
小計			266	3453	75	985	9	1		27	32	4848	
HB②口	I						1					1	
	II	遺構					4			2	1	7	
	III	遺構					5				7	12	
	IV						1	16		4	5	10	
	V			9						50	21	96	
	V			1						1	4	6	
小計				10			27			57	38	132	
HB②	不明		12	2		5						20	
HB④イ	I			1								1	
	III			3		1	1	1				6	
	IV			80		4	25			8	3	120	
	V			78	1	7	26			5	11	128	
	小計			162	1	12	52	1		13	14	255	
HB④口	IV	SD001					6					6	
	V			2		5	321			4	1	333	
	小計			2		5	327			4	1	339	
HB④	不明		1								1		
不明			12			5					10	27	
合計			424	8107	115	1716	1098	7	24	194	330	12015	

遺構：HB①(II層)8.83.229SZ 1.62.358SK 102STY 72.79.120.133.138375P (III層)225SK.234SZ 163.189.198.226.236.237.299.343.372.381SK 154.221.232P 271SD 275SL
HB②イ(II層)1002.1003.1005.1016SZ 1006SK 1018SX HB②口(II層)2003SZ 2054SX 2049SD 2071SK

< I 類 >



< II 類 >

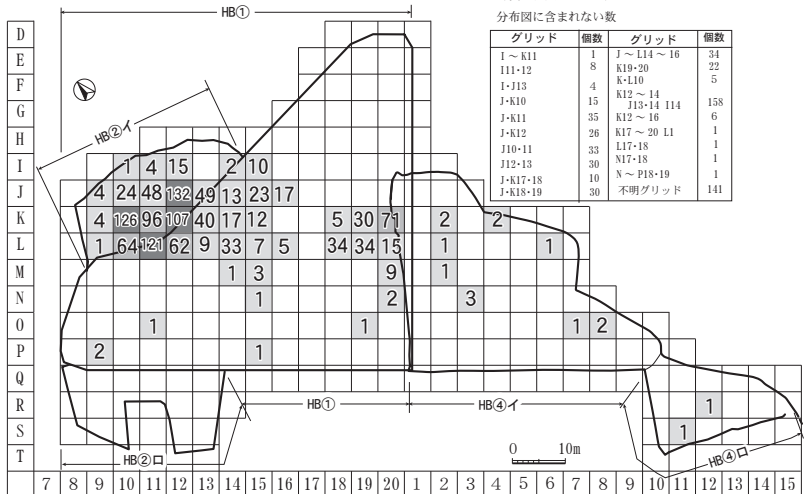


< 出土総数 8108 個 >

分布図に含まれない数

グリッド	個数	グリッド	個数	グリッド	個数
I-J12	5	J14-15	3	0-P8~14	1
I-J13	100	K-L12	30	0-P14~16	3
111-12	13	K-L15	1	0-P15	4
113-14	8	K12~14	0	0-P16	5
J-K10	121	J13-14 114	1306	0-P17	4
J-K11	181	K12~16	225	016~17 P16	2
J-K12	193	K17~20 L1	53	P10~15 Q15	2
J10-11	211	J-K19-20	64	I~K11	18
J12-13	241	L17-18	17	I-J11	4
J~L14~16	100	N~P14~16	7	不明グリッド	640
J-K15-16	3	N~P18-19	3		
J-K17-18	160	N~Q13N-013	1		
J-K18-19	62	M17-18	3		
J-K19-20	2	08~10	3		

< III 類 >

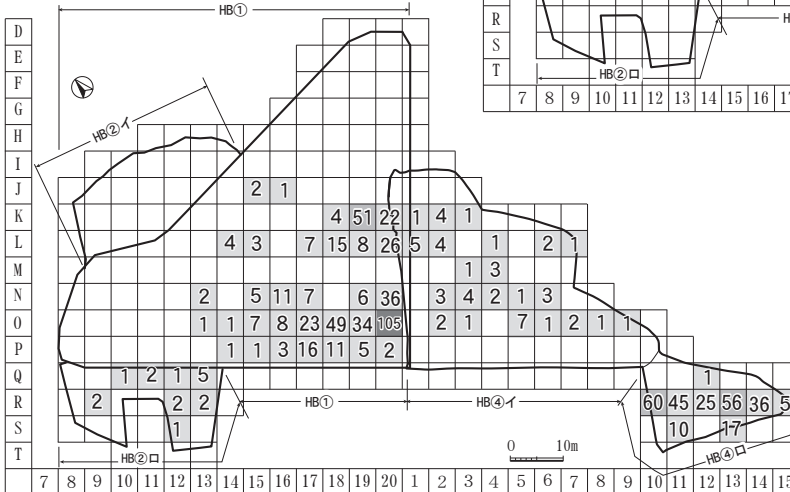


< 出土総数 1833 個 >

分布図に含まれない数

グリッド	個数	グリッド	個数
I~K11	1	J~L14~16	34
111-12	8	K19-20	22
I-J13	4	K-L10	5
J-K10	15	K12~14	158
J-K11	35	J13-14 114	6
J-K12	26	K17~20 L1	1
J10-11	33	L17-18	1
J12-13	30	M17-18	1
J-K17-18	10	N~P18-19	1
J-K18-19	30	不明グリッド	141

< IV 類 >



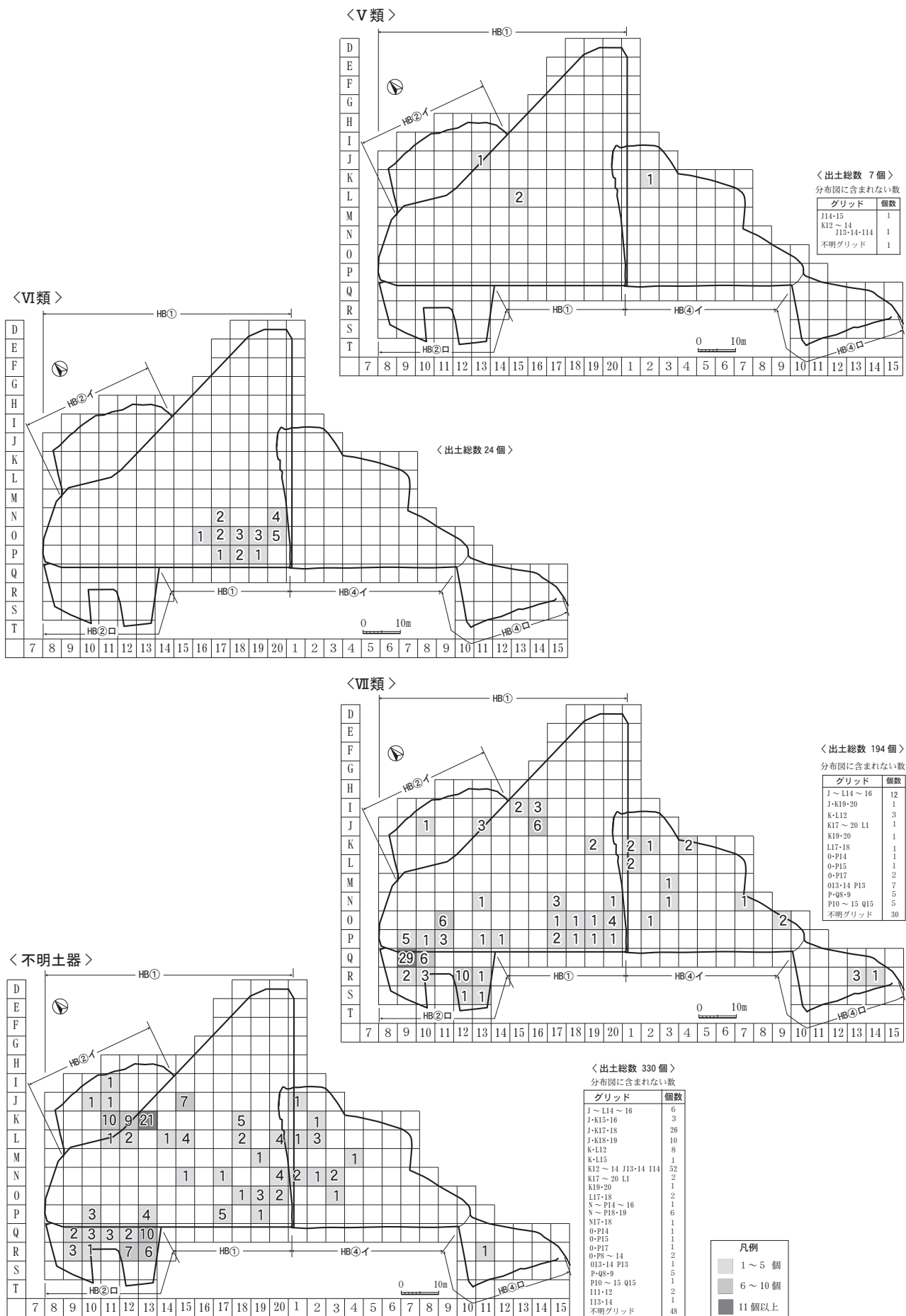
< 出土総数 1095 個 >

分布図に含まれない数

グリッド	個数	グリッド	個数
J-K10	1	08~10	1
J-K17-18	35	0-P14	10
J-K18-19	37	0-P14~16	10
J14-15	1	0-P16	3
K12~14	11	0-P17	6
J13-14-114	28	013-14 P13	1
K17~20 L1	28	016-17 P16	5
K19-20	10	010~15 Q15	2
L17-18	23	Q10-11	2
M19~020	6	Q10-11-12	13
N~P14~16	10	R10-11	9
N~P18-19	4	R10-11-12	19
M17-18	6	不明グリッド	53

凡例	
□ (light gray)	1 ~ 50 個
□ (medium gray)	51 ~ 100 個
□ (dark gray)	101 個以上

第 26 図 土器胴部 (I 類・II 類・III 類・IV 類) 出土平面分布



第 27 図 土器胴部 (V類・VI類・VII類) と不明土器出土平面分布

第9表-1 土器観察一覧 (在地)

(質量単位: cm、g)

第図版	図番号	分類	部位	形態	口径器高底径	器厚底厚重量	粒度含量	石英	赤色粒	角閃石	砂粒	その他	胎土焼成	器色(外面内面)	器面調整(外面内面)	地区・グリッド・層位・遺構台帳(取上)番号		
第34図・図版6	36	I a	口底	口唇-丸・口縁-「く」字状屈曲明瞭 内面上部-膨らむ・胸部-やや膨らむ 口径<胴径	17.6 21.2 (推定) -	0.6 -	638.5	細粒多量	◎			◎ 白	石灰質	砂質良好	両面:茶赤褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB②イ K12 V (貝層①)取1085 HB②イ J12 V (暗褐色シルト)取1124 HB②イ J12 V (暗褐色シルト)取1125 HB②イ J12 V (暗褐色シルト)取1126 HB②イ J12 V (貝層①)取3055 HB②イ J10.11 V (暗褐色シルト)台3098 HB②イ J13 V (橙色シルト①)台3104 HB②イ K10 V (黒砂層)台3324(接合)	
				口唇-平ら・口縁-「く」字状屈曲明瞭 内面上部-膨らむ・胸部-やや膨らむ 口径<胴径	13.9 14.0 (推定) -	0.7 -	298.5	粗粒多量	◎			◎ 白	石灰質	砂質良好	両面茶赤褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB②イ I12 V (暗褐色シルト)取1145 HB②イ I11.12 V (橙色シルト①)台3096 (接合)	
				口唇-丸・口縁-「く」字状屈曲明瞭 内面上部-膨らむ・胸部-やや膨らむ 口径<胴径	14.4 -	0.6 -	76.3	細粒中量		○	△	△			砂泥質良好	外:暗灰褐色 内:茶灰褐色	外:ナデ・指頭痕 内:ナデ	HB②イ K11 V (黒砂層)取1331
				口唇-丸・口縁-「く」字状屈曲明瞭 内面上部-膨らむ・胸部-やや膨らむ 口径<胴径	26.0 -	0.7 -	116.0	粗粒多量	◎	△	△	○			砂質良好	外:暗茶褐色 内:茶褐色 (両面煤付着)	両面:ヘラナデ	HB②イ K10 V (黒砂層)取1349
				口唇-平ら・口縁-「く」字状屈曲明瞭 口唇より1cm下に有孔(径6mm) 内面上部-膨らむ・口径<胴径	- -	0.6 -	26.6	細粒中量		○	△	○			砂泥質良好	外:暗茶褐色 内:橙茶褐色	両面: ナデ・指頭痕	HB① K15 V (5層黄色砂)取218
				口唇-平ら・口縁-「く」字状屈曲明瞭 内面上部-膨らむ・胸部-直線的 口径>胴径	27.9 -	0.7 -	292.5	中粒多量		○			◎ 白		砂質良好	外:橙茶褐色 内:灰茶褐色	両面:ヘラナデ	HB②イ J9 V (山土層)1042SX直下取1390 HB②イ J9 V (灰砂層)取1392 HB②イ J9 V (山土層)取1401 HB②イ J9 V (灰砂層)取1406(接合)
第35図・図版7	41	I b	口底	口唇-丸・口縁-「く」字状屈曲明瞭 内面上部-膨らむ	- -	0.8 -	25.7	中粒中量	○	○	△	△		砂質良好	外:茶褐色 内:赤褐色	外:ナデ 内:ヘラナデ	HB① L19 V (5層褐色細砂質土)取220	
				口唇-やや舌状 口縁-「く」字状屈曲明瞭 内面上部-膨らむ・胸部-やや直線的 口径>胴径	19.0 -	0.8 -	143.5	粗粒多量	◎	△	△	○			砂質良好	両面:黒茶褐色	両面:ヘラナデ	HB②イ J9 V (灰砂層上面)取1397 HB②イ J9 V (灰砂層上)取1398 HB②イ V (混雑砂層)台3188 HB②イ J10 V (黒砂層)台3317(接合)
				口唇-丸・口縁-「く」字状屈曲明瞭 内面上部-膨らむ	- -	0.7 -	23.7	細粒少量		△	△	△			砂質良好	両面:茶褐色	両面: ヘラナデ	HB① L16 V (5層褐色細砂質土)台522
				口唇-平ら・鞍状凸帯文 口縁-「く」字状屈曲 内面上部-膨らむ	- -	0.7 -	10.6	細粒少量		△	△	△			砂質良好	両面:赤褐色	両面: ヘラナデ・指頭痕	HB②イ V トンチ(黄砂層)台3279
				口唇-平ら・口縁-「く」字状屈曲明瞭 胸部-やや直線的	- -	0.5 -	57.5	細粒多量	◎		◎	△			砂質強良好	外:橙褐色 内:暗褐色	外:ヘラナデ 内:ナデ 指頭痕(明瞭)	HB②イ V J13(橙色シルト①)取1015
				口唇-平ら・頸部-「く」字状屈曲 文様-外面に沈線文(縦位) 内面に沈線文(縦位)	- -	0.7 -	16.0	中粒多量	◎	△	△	△			砂質良好	両面:赤褐色	両面:ナデ	HB②イ J12.13 V (貝層①上面)台3131
				口唇-舌状 口縁-「く」字状屈曲(幅狭) 胸部-直線的・口径>胴径 文様-外面に耳(三角状・弧状)貼付	26.0 25.5 4.6	1.0 19.0 414.5	粗粒多量	◎			◎				砂質良好	両面:赤褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB① I14 V (4層橙色シルト)取100
				口唇-平ら・口縁-「く」字状屈曲(弱) 胸部-やや膨らむ 口径>胴径	17.3 17.0 (推定) -	0.5 -	195.1	細粒少量		○	△	△			泥質良好	両面:茶赤褐色	両面:ナデ	HB②イ J11 V (貝層②)台3138 HB②イ J12 V (貝層①)台3055 HB②イ J13 V (橙色シルト①)台3104 HB②イ J12 V (黒砂層)台3314(接合)
				口唇-平ら・口縁-「く」字状屈曲(弱) 胸部-やや膨らむ	26.5 -	0.7 -	218.0	細粒中粒		○	○	△			泥砂質良好	両面:黄茶褐色	外:ナデ 内:ナデ・指頭痕	HB②イ J12 V ヘルト(暗褐色シルト)取1243 HB②イ V ヘルト(貝層②)台3136 (接合)
				口唇-平ら・口縁-「く」字状屈曲(弱) 胸部-やや膨らむ 口径>胴径	34.4 -	0.6 -	173.0	細粒中量		○	△	○			泥砂質良好	両面:茶褐色	両面:ナデ	HB① K15 V (4層橙色シルト)取84 HB① I14 V (4層橙色シルト)取93 (接合)
第36図・図版8	51	I c	口底	口唇-平ら・口縁-「く」字状屈曲(弱) 内面上部-膨らむ・口径>胴径	21.8 -	0.9 -	57.0	中粒中量	○			○		砂質良好	外:黒褐色 内:灰茶褐色	両面:ヘラナデ	HB②イ K10 V (黒砂層)取1355 HB②イ K10 V (黒砂層)取1359 HB②イ K10 V (黒砂層)台3324(接合)	
				口唇-平ら・口縁-「く」字状屈曲(弱) 胸部-やや膨らむ 口径>胴径	17.4 -	0.6 -	121.7	細粒多量	○	◎	○			砂質良好	両面:橙褐色 (両面煤付着)	外:ヘラナデ 内:ナデ	HB②イ K10 V (赤砂層)取1229 HB②イ K11 V (貝層②)台3146 HB②イ K10 V (貝層②)台3149(接合)	
				口唇-平ら・口縁-「く」字状屈曲(弱) 内面上部-やや膨らむ・胸部-やや張る 口径>胴径	18.4 -	0.6 -	222.0	細粒+粗粒少量	△	○	△	△			泥砂質良好	外:橙褐色 内:暗褐色	両面:ナデ	HB②イ J11 V (暗褐色シルト)取1127
				口唇-平ら・口縁-「く」字状屈曲(弱) 内面上部-膨らむ・胸部-不明 口径>胴径 底-平底	23.8 22.0 (推定) 6.6	0.8 0.9 128.6	細粒少量		△		△	△	白		砂質良好	両面:灰褐色	両面:ナデ	HB① K19 V (4層混貝層)取189
				口唇-舌状・口縁-「く」字状屈曲(弱) 緩やかな波状・胸部-膨らむ 口径<胴径	19.3 -	0.7 -	257.0	細粒中量	○		○	△			砂質良好	両面:茶褐色 (煤付着)	両面:ヘラナデ	HB②イ K11 V (黒砂層)取1330 HB②イ J12 V (黒砂層)取1373(接合)
				2220±20BP														

凡例 (◎=非常に多い ○=多い △=少ない △=僅少)

第9表-2 土器観察一覧 (在地)

(質量単位:cm、g)

第図版	図番号	分類	部位	形態	口径 器高 底径	器厚 底厚 重量	粒度 含量	石英	赤色 粒	角閃 石	砂粒	その他	胎土 焼成	器色 (外面 内面)	器面調整 (外面 内面)	地区・グリッド・層位・遺構 台帳(取上)番号
第36 図版 8	57	I d	口	口唇-丸・口縁-「く」字状屈曲(弱) 胴部-より膨らむ・口径≦胴径 文様-外面に把手貼付(有孔) 底部-平底	13.0 12.1 5.6	0.7 0.9 138.7	細粒 少量	○			△		泥砂質 良好	両面:灰褐色	両面:ナデ	HB②イ J11 V (暗褐色シルト) 取1037・1041 HB②イ J12 V (貝層①上面) 台3110 (接合)
	58		口	口唇-丸・口縁-「く」字状屈曲(弱)	— — —	0.5 — 28.7	細粒 中量	○	△	△	○		砂質強 良好	外:黒・赤褐色 内:暗茶褐色	両面:ナデ	HB②イ J11 V (貝層②) 台3138
	59		口	口唇-平ら・口縁-「く」字状屈曲(弱) 内面上部-やや膨らむ・胴部-より膨らむ 口径≦胴径	26.5 — —	0.7 — 303.0	細粒 多量	◎		○	○		砂質強 良好	外:赤褐色 内:暗茶褐色	両面:ナデ	HB① I14 V (4層橙色シルト) 取92
	60		口	口唇-平ら・口縁-「く」字状屈曲(弱) 内面上部-やや膨らむ・胴部-膨らむ 口径≦胴径	14.6 — —	0.6 — 40.4	細粒 中量	○		△	○		砂質 良好	外:暗褐色 内:灰褐色	両面: ナデ・指頭痕	HB① L12 V (5層黄色砂)台295 HB① L12 中央・ベルト V (5層黄色砂) 台422 (接合)
	61		口	口唇-丸・口縁-「く」字状屈曲(弱) 内面上部-膨らむ・胴部-やや膨らむ	— — —	0.5 — 29.7	細粒 多量	○		◎	△		砂質強 良好	両面:橙茶褐色	両面: ナデ・指頭痕	HB④イ M4 IV (V) 台45
	62		口	口唇-平ら・口縁-「く」字状屈曲(弱)	— — —	0.7 — 39.4	細粒 多量	○		◎	△		砂質強 良好	外:茶黄褐色 内:橙茶褐色	両面:ナデ	HB④イ L2 V (Ⅷ) 台72
第37 図版 9	63	I d	口	口唇-丸+平ら 口縁-「く」字状屈曲不明瞭 内面上部-やや膨らむ・胴部-膨らむ 口径≦胴径	22.6 — —	0.8 — 189.0	細粒 中量	○		○	△		砂質 良好	外:橙褐色 (上部は煤付着) 内:暗茶褐色	両面:ナデ	HB②イ J11 V (暗褐色シルト) 取1110
	64		口	口唇-平ら・口縁-「く」字状屈曲不明瞭(幅狭) 胴部-膨らむ・口径<胴径	16.0 — —	0.7 — 133.5	中粒 多量	○	△	△	○		砂質 良好	外:暗茶褐色 (煤付着) 内:暗茶褐色	両面:ナデ	HB②イ L10 V (黒砂層)取1233 HB②イ I11 V (混雑層)台3143 HB②イ L11 V (黒砂層)台3313(接合)
	65		口	口唇-平ら・口縁-「く」字状屈曲不明瞭(幅狭) 胴部-より膨らむ・口径<胴径	28.4 — —	6.5 — 139.9	細粒 少量	○		△	△		砂質 良好	両面:茶褐色	両面:ナデ丁寧	HB②イ J11 V (暗褐色シルト)取1111 HB②イ J・K10 V (橙色シルト①) 台3102 (接合)
	66		口	口唇-平ら・口縁-「く」字状屈曲不明瞭(幅狭) 胴部-より膨らむ 口径<胴径	23.0 — —	0.7 — 447.5	細粒 少量	○		△	△		砂質 良好	外:暗茶褐色 内:暗褐色	両面:ナデ	HB②イ J10 V (橙色シルト②)取1148 HB②イ J11 V (橙色シルト②)取1155 HB②イ J10.11 V (暗褐色シルト) 台3098 (接合)
	67		口	口唇-平ら・口縁-「く」字状屈曲不明瞭(幅狭) 胴部-膨らむ・口径<胴径	24.8 — —	0.8 — 473.5	細粒 少量	○		○	△		砂質 良好	外:暗茶褐色 内:茶褐色	両面:ナデ	HB①K14 V (4層橙色シルト)取24 HB②イ J13 V (黒砂層上面)取1306 (接合)
第38 図版 10	68	I e	口	口唇-平ら 口縁-「く」字状屈曲不明瞭(幅狭) 内面上部-やや膨らみ・胴部-膨らむ 口径≦胴径	23.2 — —	0.75 — 63.2	細粒 少量	△		△	△		泥砂質 良好	外:橙褐色 内:茶褐色	外:ヘラナデ 内:ナデ・指頭痕	HB②イ L10 V (赤砂層)取1177 HB②イ L10 V (赤砂層)取1178 HB②イ L10 V (黄砂層)台3312(接合)
	69		口	口唇-平ら 口縁-「く」字状屈曲不明瞭(幅狭) 内面上部-やや膨らみ・胴部-膨らむ 口径≦胴径	26.4 — —	0.7 — 214.5	細粒 少量	△		△	△		泥砂質 良好	外:橙暗褐色 内:橙褐色	外:ナデ 内:ナデ・指頭痕	HB②イ L10 V (貝層③)取1334 HB②イ L10 V (黄砂層)台3312 HB②イ K12 V (貝層②)台3137(接合)
	70		口	口唇-平ら 口縁-直状・やや丸みを持つ 胴部-途中から窄まる	23.8 — —	0.55 — 93.2	細粒 多量	○			◎	白	泥砂質 良好	両面:茶褐色	外:ナデ丁寧 内:雑仕上げ 指頭痕	HB②イ L12 V (貝層①上面) 台3101
	71		口	口唇-平ら 口縁-直状(玉縁状)・やや丸 胴部-途中から窄まる	21.8 — —	0.6 — 174.3	細粒 少量	△	△	△	△		泥砂質 良好	外:橙褐色 内:黄茶褐色	両面:ナデ丁寧	HB① K13 V (4層混貝層) 取129
第39 図版 11	72	II a	口	口唇-舌状・口縁-直状 胴部-不明	— — —	0.8 — 18.6	細粒 多量	◎		◎	△		砂質強 良好	外:茶褐色 内:赤褐色	外:ナデ丁寧 内:雑仕上げ 指頭痕	HB④イ O2 V (Ⅷ) 台61
	73		口	口唇-丸・口縁-直状・小型	16.8 — —	0.8 — 111.2	細粒 多量	◎		◎	△		砂質強 良好	外:暗褐色 内:赤褐色	両面:ナデ丁寧	HB① I14 V (4層橙色シルト)取122 HB②イ J10 V (貝層②)取1221(接合)
	74		口	小型・口唇-丸・口縁-直状	11.6 — —	0.7 — 18.0	細粒 少量	△	△		△		砂質 良好	外:暗褐色 内:茶褐色	両面:ナデ丁寧	HB②イ K10 V (黄砂層)台3307 HB②イ K10 V (赤砂層)台3160(接合)
	75		口	小型・口唇-丸・口縁-直状 胴部-直線的	14.4 — —	0.8 — 81.0	細粒 中量	○		○	△		砂質強 良好	外:黒茶褐色 内:黒褐色	両面:ナデ丁寧	HB②イ J10 V (貝層①上面)取1007 HB②イ J10 V (貝層②)取1221(接合)
	76		口	口唇-舌状・口縁-直状 胴部-直線的	32.8 — —	0.6 — 194.6	細粒 少量	△		△	△		砂質 良好	両面:黄茶褐色	両面:ナデ丁寧	HB④イ K3 V (Ⅷ) 台52
	77		口	口唇-玉縁・口縁-直状 胴部-やや張る	20.0 — —	0.6 — 177.7	細粒 少量	△		△	△		砂質 良好	両面:赤褐色	両面:ナデ	HB① I14 V (4層橙色シルト)取122
第40 図版 12	78	II b	口	口唇-丸・口縁-直状 頸部-ややしまる・胴部-張る	19.6 — —	0.5 — 258.0	細粒 中量	○		○	△		砂質 良好	両面:橙茶褐色	外:ナデ丁寧 内:雑仕上げ 指頭痕	HB②イ K10 V (赤砂層)取1187
	79		口	口唇-やや舌状・口縁-直状 頸部-ややしまる・胴部-張る 胴部中央に最大径	26.6 — —	0.6 — 211.5	細粒 少量	△			△		砂質強 良好	両面:茶褐色	両面:ヘラナデ	HB②イ K11 V (貝層①上面)取1020
	80		口	口唇-平ら・口縁-直状 頸部-しまる・胴部-張る 胴部中央に最大径	24.2 — —	0.8 — 151.9	細粒 中量	○		○	△		砂質強 良好	外:黄茶褐色 内:暗褐色	外:ナデ 内:ナデ・指頭痕	HB②イ J12 V (貝層①) 台3055

凡例 (◎=非常に多い ○=多い △=少ない ㇿ=僅少)

第9表-3 土器観察一覧 (在地)

(法量単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	分類 部位	形態	口径 器高 底径	器厚 底厚 重量	粒度 含量	石英	赤 色 粒	角 閃 石	砂 粒	そ の 他	胎土 焼成	器色 (外面 内面)	器面調整 (外面 内面)	地区・グリッド・層位・遺構 台帳(取上)番号	
第40 図・ 図版 12	81	IIb	口唇-平ら・口縁-直状 頭部-ややしまる・胴部-張る 胴部中央に最大径	27.1 — —	0.7 — 139.1	細粒 中量	○	○	△			砂質 強 良好	両面:黄茶褐色	外:ナデ丁寧 内:雑仕上げ 指頭痕	HB④イN2 IV(V) 台46	
	82		小型・口唇-舌状・口縁-直状 頭部-ややしまる・胴部-張る	12.0 — —	0.5 — 10.7	細粒 少量	△		△	△			砂質 強 良好	両面:暗茶褐色 煤有り(外面)	両面:ナデ丁寧	HB②イI ¹ K11 V(橙色シルト①) 台3091
第41 図・ 図版 13	83	IIc	口唇-平ら・口縁-外反 頭部-しまる・胴部-張る 文様-有孔・口径>胴径	32.0 — —	0.6 — 313.5	細粒 中量	○		△	○		砂質 強 良好	両面:橙茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ・指頭痕	HB②イL10 V(赤砂層)取1184 HB②イL10 V(貝層③)台3309 HB②イL10 V(貝層②)台3140(接合)	
	84		口唇-平ら・口縁-外反・波状(弱) 口径>胴径 頭部-しまる・胴部-張る 文様-有孔(径8mm)	25.2 — —	0.6 — 269.5	細粒 多量	◎	◎	△			砂質 強 良好	両面:茶褐色	外:ヘラナデ 内:雑仕上げ 指頭痕	HB②イJ11 V(貝層①上面) 取1024	
	85		口唇-平ら・口縁-外反 胴部-僅かに張る 口径>胴径	21.8 — —	0.6 — 298.5	細粒 少量	△			△			砂質 強 良好	外:橙茶褐色 (煤付着) 内:暗褐色	外:ナデ丁寧 内:雑仕上げ 指頭痕	HB②イK10 V(赤砂層)取1197 HB②イK10 V(赤砂層)取1207(接合)
	86		口唇-玉縁・口縁-外反 胴部-若干張る 2360±30BP	— — —	0.6 — 53.3	細粒 多量	○		◎	△			砂質 強 良好	外:黒褐色(煤付着) 内:淡茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ・指頭痕	HB②イJ10 V(白砂層) 取1369
第42 図・ 図版 14	87	IIc	口唇-丸(強調)口縁-外反 頭部-しまる・口径>胴径 文様-有孔把手(孔は2個・孔径6mm)	18.0 — —	0.55 — 66.4	細粒 中量	○		△	○			砂質 強 良好	外:茶褐色 内:暗黒褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ・指頭痕	HB①J15 V(4層橙色シルト) 取117
	88		形状不明 文様-有孔把手(現存で孔は1個)	— — —	0.6 — 22.5	細粒 中量	○		○	△			砂質 強 良好	外:暗黒褐色 内:橙茶褐色	両面:ナデ	HB①O18 IV(3層青灰色シルト) 台664
	89		口唇-平ら・口縁-外反 頭部-若干しまる	— — —	0.6 — 25.4	細粒 中量	△			○	△		砂質 強 良好	両面:黄茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ・指頭痕	HB④イM2 IV(V) 台66
	90		口唇丸・口縁-外反(緩やかな波状) 胴部-やや張る	19.4 — —	0.5 — 68.6	細粒 多量	○		◎	△			砂質 強 良好	両面:暗茶褐色 煤有り(外面)	外:ナデ丁寧 内:ナデ・指頭痕	HB②イI12 V(暗褐色シルト)取1116 HB②イI11 V(暗褐色シルト)台3105 HB②イI11 V(混雑層)台3143(接合)
	91		口唇-丸・口縁-やや外反+直状(緩 やかな波状) 底-乳房状尖底 胴部-やや張る+直線的	24.5 27.5 3.6	0.7~0.9 1.8 2010.0	細粒 少量	△				△			砂質 強 良好	両面:淡茶褐色	外:ナデ・ハケ目 内:ナデ
第43 図・ 図版 15	92	II d	小型・口唇-平ら 口縁-逆「ハ」字状に開く	13.6 — —	0.5 — 53.4	細粒 少量	△		△	△			砂質 強 良好	両面:暗褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ・指頭痕	HB②イI12 V(暗褐色シルト)取1014 HB②イJ11 V(貝層①上面) 台3117 (接合)
	93		口唇-平ら 口縁-逆「ハ」字状に開く	28.2 — —	0.5 — 83.9	細粒 多量	○			◎	白		砂質 強 良好	両面:茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ・指頭痕	HB②イJ10 K10・11・L10.11 II 1005SZ 攪乱 戦前 台3081
第43 図・ 図版 15	94	II e	口唇-平ら 口縁-上端外反(強) 胴部-張らない(直線的)	25.0 — —	5 — 125.1	細粒 少量	△		△	△			砂質 強 良好	外:赤褐色 内:灰赤褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ 下部は削り?	HB①L14 V 中央へルト(4層混貝層) 台397
	95		口唇-平ら 口縁-上端外反(強) 胴部-張らない(直線的)	25.4 — —	5 — 120.2	細粒 少量	△		△	△			砂質 強 良好	両面:明褐色	外:ナデ丁寧 内:雑仕上げ 指頭痕	HB②イK11 V(貝層①上面)取1022 HB②イK11 V(貝層①上面)取1023 (接合)
	96		口唇-平ら 口縁-上端外反(強) 胴部-張らない(直線的)	— — —	0.6 — 94.1	細粒 中量	△			○	△		砂質 強 良好	外:明褐色 内:淡橙褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ・指頭痕	HB②イJ13 V(橙色シルト④) 取1069
	97		口唇-平ら 口縁-上端外反(強) 胴部-張らない(直線的)	22.2 — —	0.5 — 127.2	細粒 少量	△			△	△	光白	砂質 強 良好	外:暗茶褐色 内:茶褐色	両面:ヘラナデ	HB②イJ12 V(暗褐色シルト)取1108 HB②イJ12 V(暗褐色シルト)取1140 (接合)
	98		口唇-平ら 口縁-上端外反(強) 胴部-張らない(直線的)	28.2 — —	0.6 — 229.0	細粒 中量	○			○	白		砂質 強 良好	両面:暗褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ・指頭痕	HB②イJ12 V(貝層①上面) 取1089
	99		口唇-平ら 口縁-上端外反(強) 胴部-張らない(直線的)	26.0 — —	0.6 — 112.1	細粒 少量	△			△	△		砂質 強 良好	両面:灰茶褐色	両面: ナデ・指頭痕	HB①L12 V(5層黄色砂) 取193
第44 図・ 図版 16	100	III Aa	口唇-丸・僅かに波状 口縁-直状(上端外反) 頭部-指ナデによる湾曲 粘土積み痕僅かに隆起	23.8 — —	0.6 — 89.5	細粒 中量	○		○	△		砂質 強 良好	外:暗茶褐色 内:茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ・指頭痕	HB①J14 V(4層橙色シルト) 取128	
	101		口唇-丸・僅かに波状 口縁-逆「ハ」字状外反(上端外反) 頭部-指ナデによる湾曲	20.4 — —	0.6 — 202.0	細粒 多量	○		◎	△			砂質 強 良好	外:暗褐色 内:橙褐色	外:ヘラナデ 内:ナデ・指頭痕	HB②イJ10 V(黒砂層上面) 取1288
	102		口唇-丸・僅かに波状 口縁-逆「ハ」字状外反 頭部-指ナデによる湾曲	23.6 — —	0.6 — 120.4	細粒 中量	○		○	△			砂質 強 良好	外:灰茶褐色 内:橙茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ヘラナデ 指頭痕	HB②イK10 V(貝層②)取1217 HB②イK10 V(貝層②)台3149 (接合)
第45 図 17	103	III Aa	口唇-丸・僅かに波状 口縁-逆「ハ」字状外反 頭部-指ナデによる湾曲 粘土積み痕僅かに隆起 文様-有孔(径8mm)	27.0 — —	0.5 — 194.6	細粒 多量	○		◎	白		砂質 強 良好	両面:暗茶褐色	両面:ヘラナデ	HB②イJ11 V トンチ(黄砂層)取1242 HB②イK11 V(黄砂層)取1293 (接合)	
	104		口唇-平ら・僅かに波状 口縁-やや直状 頭部-指ナデによる湾曲 胴部-厚い・粘土積み痕隆起	30.0 — —	0.9 — 166.1	細粒 少量	△		△	△			砂質 強 良好	外:暗灰褐色 内:淡茶褐色	外:ナデ丁寧 内:雑仕上げ 指頭痕	HB②イJ12 V(暗褐色シルト)取1074 HB②イV ヘルト(貝層②)台3136 (接合)

凡例 (◎=非常に多い ○=多い △=少ない ▽=僅少)

第9表-4 土器観察一覧 (在地)

(法量単位:cm, g)

第4図版	図番号	分類	部位	形態	口径 器高 底径	器厚 底厚 重量	粒度 含量	石英	赤色 粒	角閃 石	その他	胎土 焼成	器色 (外面 内面)	器面調整 (外面 内面)	地区・グリッド・層位・遺構 台帳(取上)番号	
第45図 図版17	105	IIIAb	口	口唇-丸+平ら・若干波状 口縁-緩やかな「く」字状湾曲 (最大径は湾曲部)	31.4 — —	0.6 — 155.7	細粒 中量	○	○	△		砂質 良好	外:黒茶褐色 内:橙褐色	外:ナデ 内:ナデ・指頭痕	HB① J13 V (4層橙色シルト) 取160	
	106		口	口唇-平ら 口縁-緩やかな「く」字状湾曲 (最大径は湾曲部) 粘土積み痕目立つ	22.0 — —	0.6 — 131.1	細粒 中量	○	○	△		砂質 良好	外:灰茶褐色 内:橙茶褐色	ナデ・指頭痕 粘土積み痕目立つ	HB① L15 V 中央ベルト(5層褐色細砂質土) 台400	
	107		口	口唇-平ら(強調) 口縁-緩やかな「く」字状湾曲 (最大径は湾曲部)・厚手	— — —	0.9 — 65.3	細粒 中量	○	○	△		砂質 強 良好	両面:黄茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ・指頭痕	HB④イ M1 V (VII) 台58	
	108		口	口唇-平ら(粘土貼付で強調) 口縁-緩やかな「く」字状湾曲 (最大径は湾曲部)	23.4 — —	0.7 — 285.5	粗粒 中量	△	○	△	△		砂泥質 良好	両面:黒褐色	両面: ナデ・指頭痕	HB②イ L10 V (黒砂層) 取1223
第46図 図版18	109	IIIAc	胴	形状不明・無文・厚手	— — —	1.1 — 88.1	細粒 中量	○	△	△	△	△ 火山 ガラス? 砂質 良好	外:茶褐色 内:淡茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ雑 指頭痕	HB④イ L6 V (VII) 台56	
	110		口	口唇-舌状・口縁-上部外反強・緩や かな「く」字状湾曲 口径≒胴径	22.4 — —	0.6 — 105.9	細粒 中量	○		○			砂質 良好	両面:赤褐色	両面:ナデ丁寧	HB① K15 V (4層橙色シルト) 取56
	111		口	口唇-平ら 口縁-直状(上部は外反強)	23.2 — —	0.8 — 63.2	細・粗 多量	○	◎	○			砂質 良好	外:茶褐色 内:赤褐色	外:ナデ丁寧 内:ハケ目顕著	HB① J18 V (4層橙色シルト) 取98
	112		口	口唇-やや丸(外に張り出し強・幅9 mm) 口縁-直状	— — —	0.6 — 33.0	細粒 中量	△	○	△			砂泥質 良好	外:暗茶褐色 内:橙褐色	両面:ナデ	HB②イ I12 V (貝層①) 取1115
	113		口	口唇-平ら(強調(内外に張り出し・幅 12~15mm)) 口縁-直状	— — —	0.7 — 16.5	細粒 少量	△		△	△		砂質 強 良好	外:橙茶褐色 内:暗茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ・指頭痕	HB②イ L12 V (貝層①上面) 台3120
	114		口	口唇-平ら(内外に張り出し・粘土で 貼付・幅11mm) 口縁-直状	— — —	0.6 — 14.0	細粒 少量	△	○	△			砂泥質 良好	両面:茶褐色	両面:ナデ	HB④ロ V (VI) 台48
	115		口	無頸壺・口唇-平ら 口縁-「ハ」字状 口径大・厚手	18.4 — —	0.8 — 82.7	細粒 少量	△	△	△	△		砂質 良好	両面:淡橙褐色	外:ナデ丁寧 内:雑仕上げ 指頭痕	HB②イ K11 V (貝層①) 取1130 HB②イ J・K11 V (貝層①上面) 台311 (接合)
	116		口	無頸壺・口唇-平ら 口縁-「ハ」字状(上部外反) 口径大・胴部・厚手	17.0 — —	0.8 — 85.3	細粒 多量	◎		◎	△		砂質 強 良好	両面:茶黄褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ・指頭痕	HB②イ J12 V (貝層①上面) 取1011
	117		口	無頸壺・口唇-玉縁状(粘土貼付)・厚 手 口縁-「ハ」字状(上部外反)	— — —	1.1 — 87.6	細粒 中量	○		△	○	白	砂質 良好	両面:赤褐色	外:ナデ 内:ナデ・指頭痕	HB① L18 V (4層混貝層) 取169 HB① L18 V (4層混貝層) 台552 (接合)
	118		口	無頸壺・肩部-張る 口唇-丸+やや玉縁状 口縁-「ハ」字状・口径小	7.6 — —	0.7 — 147.0	細粒 中量	○	△	○	○		砂質 良好	両面:橙褐色	外:ナデ丁寧 内:雑仕上げ 指頭痕	HB① L14 V 中央ベルト (3層暗褐色シルト) 台326 HB① III (2層) 台488 HB① K12'14 J13.14-I14 V (4層橙色シルト) 台572 (接合)
	119		口	無頸壺・肩部-張る 口縁-「ハ」字状・口径小 口唇-玉縁状(粘土貼付)	5.8 — —	0.8 — 29.0	細粒 中粒	○		○	○		砂質 強 良好	両面:茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ・粘土積 み 痕 明瞭	HB②イ J・K11 V (貝層①上面) 台3118
第47図 図版19	120	IIIBb	口	短頸壺・口唇-平ら(強調) 口縁-上端外反(強調) 頸部-くびれ・肩部-張る 口径小	8.1 — —	0.5 — —	細粒 中量	△	△	△	○	白	砂質 良好	両面:橙茶褐色	外:ナデ丁寧 内:雑仕上げ 指頭痕・下部は ヘラナデ? 削 り?	HB① L17 V (4層混貝層) 取153 HB① J・K18.19 V (3層落岩間) 台245 HB① L18 V (4層混貝層) 台552 (接合)
	121		口	短頸壺・口唇-平ら(強調) 口縁-上端外反(強調) 頸部-くびれ・口径小	12.4 — —	0.7 — 36.3	細粒 少量	△	△	△	△		砂質 良好	両面:橙褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB②イ L10 V (貝層③) 取1310
	122		口	短頸壺・口唇-平ら(強調) 口縁-上端外反(強調) 頸部-くびれ・肩部-張る 口径大	18.7 — —	0.6 — 537.0	細粒 少量	△	△	△	△	白	砂質 良好	外:橙茶褐色 内:橙茶褐色	外:ナデ丁寧 内:雑仕上げ	HB②イ J11.12 V (貝層①) 取1095 HB②イ K11 V (貝層①) 台3121 (接合)
	123		口	短頸壺・口唇-丸・口径小 口縁-直状・肩部-張る	6.2 — —	0.7 — 55.3	細粒 少量	△		△	△		砂質 良好	外:淡橙褐色 内:淡茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ・下部は 削り?	HB②イ L11 V (貝層②) 取1172
	124		口	短頸壺・口唇-平ら(強調) 口縁-直状・口径小	8.2 — —	0.7 — 50.2	細粒 少量	△	△		△		砂質 良好	両面:橙褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB②イ K10 V (貝層②) 台3149
	125		口	短頸壺・口唇-丸 口縁-直状・口径小	6.0 — —	0.8 — 17.7	細粒 少量	△	△		△		砂泥質 良好	両面:赤褐色	両面:ナデ	HB① J16 V (4層橙シルト) 台280
	126		頸	短頸壺・口径小 口縁-直状・肩部-張る	— — —	0.6 — 3.8	細粒 少量	△		△	△		砂泥質 良好	両面:橙褐色	両面:ナデ	HB④イ M4 IV (V) 台45
	127		口	長頸壺・口唇-やや平ら 口縁-やや外反・肩部張る	— — —	1.0 — 214.0	細粒 少量	△		△	△		砂質 良好	両面:淡桃褐色	外:ナデ丁寧 内:雑仕上げ 指頭痕	HB① M18 V (3層青灰色砂) 取223 HB① L19 V (5層褐色細砂質土) 台520 (接合)
	128		口	長頸壺・口唇-やや平ら 口縁-やや外反・肩部張る	— — —	1.0 — 29.7	細粒 少量	△		△	△		砂質 良好	外:茶褐色 内:黄茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB④イ L1 V 台485(取001)

凡例 (◎=非常に多い ○=多い △=少ない △=僅少)

第9表-5 土器観察一覧 (在地)

(法量単位:cm, g)

第図 図版	図 番号	分 類	部 位	形 態	口 径 器 高 底 径	器 厚 底 厚 重 量	粒 度 含 量	石 英	赤 色 粒	角 閃 石	砂 粒	そ の 他	胎 土 焼 成	器 色 (外 面 内 面)	器 面 調 整 (外 面 内 面)	地 区・ク リッ ド・層 位・遺 構 台帳(取上)番号	
第47 図・ 図版 19	129	III Bf	口	長頸壺・口唇-舌状 口縁-直状	6.0 —	0.7 — 92.3	細粒 少量	△			△		砂泥質 良好	両面:赤褐色強 (外:ツナ有り)	外:ナデ丁寧 内:ハケ目	HB① J15 V (4層橙色シルト) 取54	
	130	III Bg	口	壺・口唇-丸・口縁-外反強 頸部-くびれ長い 胴部-膨らむ	10.0 —	0.6 — 39.6	粗粒 少量	△	△		△	△ 火山 ガラス	砂質 やや 悪	両面:橙褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB① K15 V (4層橙色シルト) 取62	
	131	肩 胴	肩	壺・肩~胴部-丸く膨らむ・薄手 最大胴径27.0cm	— —	0.5 — 162.4	細粒 中量	△		○	△		砂質 良好	外:茶褐色 内:橙褐色	外:ナデ丁寧 内:雑仕上げ	HB① L14 V (5層黄色砂) 台301 HB① L14 V (4層混貝層) 台554 HB① M14 V (5層a) 台290 (接合)	
	132		胴	壺・胴部-球状・薄手 最大胴径13.2cm	— —	0.5 — 51.2	細粒 中量	△		○	△		砂質 良好	外:暗茶褐色 内:黄褐色	外:ナデ丁寧 内:雑仕上げ	HB②イ K11 V (黒砂層) 台3325	
	133	頸 胴	頸	壺・頸部-直状・窄まる 肩部~胴部-膨らむ 文様-頸部に横位の沈線 最大胴径23.6cm	— —	0.7 — 262.5	粗粒 多量	△	◎		△		砂泥質 良好	両面:橙褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB②イ K12 V (黒砂層上面) 取1374 HB②イ K12 V (黄砂層) 台3274 (接合) HB②イ I12 V (橙色シルト④) 取1083	
第48 図・ 図版 20	134	III Bh	胴	壺・肩~胴部-逆「J」字状屈曲 薄手・最大胴径23.0cm	— —	0.6 — 312.0	粗粒 多量	△	◎		△		砂泥質 良好	外:橙茶褐色 内:灰褐色(ハカリ)	外:ナデ丁寧 内:器面剥落	HB②イ I12 V (暗褐色シルト) 取1152 HB②イ J12 V (貝層①) 台3055 HB②イ I11.12 V (橙色シルト①) 台3096 (接合)	
	135	頸 底	底	壺・頸部-急に窄まる・肩部-張る 最大径-肩部(27.4cm) 底部-推定(丸底の尖底?)	— —	0.9 — 542.5	中粒 少量	△	△		△		砂泥質 良好	外:茶褐色 内:灰茶褐色	両面:ナデ	HB②イ L10 V (黒砂層) 取1232 HB②イ L10 V (黒砂層) 取1233 HB②イ L10 V (貝層③) 台3309 HB②イ L11 V (黒砂層) 台3313 HB②イ I (排土) 台3083 (接合)	
	136	頸 胴	胴	壺・胴部-球状・頸部-窄まる 薄手・最大胴径18.6cm	— —	0.5 — 105.1	細粒 少量	△	△		△		砂質 良好	両面:茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB① J14 V (4層橙色シルト) 取76	
	137	IV 類	口 底	鉢形-逆「ハ」字状・口唇-舌状 粘土積痕明瞭 文様-外面にワな曲沈線文	26.8 22.3 2.7	0.4~0.6 2.1 743.0	粗粒 多量	○	◎			○		砂泥質 良好	両面:暗茶褐色	外:ナデ 内:ナデ・指頭痕	HB④ロ R10 V (VII-IV) 一括 台117 HB④ロ R11 V (VII-IV) 一括 台119 (接合)
138	口		口唇-丸・口縁-直or外反 粘土積痕明瞭	— —	0.6~0.9 — 24.4	粗粒 多量	○	◎			○		砂泥質 良好	両面:茶褐色	両面: ナデ・指頭痕	HB④ロ R13 V (VII- I) 台101	
139	口		口唇-丸・口縁-直or外反 粘土積痕明瞭	— —	0.6~0.8 — 20.7	細粒 少量	△	△			△		砂泥質 良好	両面:淡茶褐色	両面: ナデ・指頭痕	HB④ロ R13 貝層群 I V (VII-III) 台111	
140	口		口唇-舌状 口縁-直or外反 粘土積痕明瞭	— —	0.6~0.8 — 26.1	細粒 少量	△	△			△		砂泥質 良好	両面:茶褐色	両面: ナデ・指頭痕	HB④ロ R13 V (VII- II) 台106	
141	口		口唇-舌状 口縁-やや内彎 粘土積痕明瞭	— —	0.8~1.5 — 22.6	細粒 少量	△				△		砂泥質 良好	外:茶褐色 内:灰褐色	両面: ナデ・指頭痕	HB④ロ R14 V (VII- I) 台102	
142	口		口唇-舌状 口縁-やや内彎 粘土積痕明瞭	— —	0.9~1.3 — 43.1	中粒 中量	△	○			△		砂泥質 良好	両面:淡赤褐色	両面: ナデ・指頭痕	HB④ロ R11 V (VII-III) 台118	
143	胴		粘土積痕明瞭 厚手・胴径30.4cm	— —	0.9~1.7 — 166.4	粗粒 中量	○	○			△		砂泥質 良好	両面:茶褐色	外:ナデ・指頭痕 内:ナデ明瞭(横)	HB④ロ R11 V (VII-IV) 台119	
144	胴		粘土積痕明瞭	— —	0.6~1.1 — 19.4	中粒 中量	○	○			△		砂泥質 良好	両面:茶褐色	外:ナデ雑 内:ナデ・指頭痕	HB④ロ R13 V (VII- I)	
145	V 類(有 文)		口	口唇-丸・口縁-直状・厚手 文様-外面に鋸歯状沈線文(明瞭)	— —	0.9 — 59.5	細粒 少量	△				△		砂泥質 良好	両面:茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ・指頭痕	HB④ロ K2 V (VIII) 台114
146			口	口唇-丸(粘土貼付による) 口縁-直状(粘土積み痕明瞭) 文様-外面に曲沈線文	— —	1.0 — 80.4	中粒 中量	○	○			△		砂泥質 良好	両面:黄茶褐色	外:ナデ 内:雑仕上げ	HB① N18 IV (3層青灰色粘質) 取5
147			口	口唇-平ら・口縁-直状 文様-外面に刺突文	— —	0.6 — 9.0	細粒 少量	△				△		砂泥質 良好	両面:灰褐色	両面: ナデ・指頭痕	HB④ロ R13 V (VII- II) 台106
148			口	口唇-平ら・口縁-上部外反・薄手 文様-口唇部に指頭押圧文	— —	0.6 — 36.2	細粒 少量	△				△		砂質 良好	両面:暗茶褐色	外:ナデ 内:ナデ・指頭痕	HB④イ L1 IV (V) 台65
149			口	口唇-舌状・口縁-上部外反 頸部-縮まる・胴部-張る 文様:外-沈線文(斜)+内-沈線文(斜+ 弧状)	— —	0.9 — 16.7	細粒 少量	△	△	△	△	△		砂泥質 良好	外:灰茶褐色 内:灰白色	両面:ナデ	HB②ロ Q13 IV (ガラス層黒色粘質土) 取2013
第50 図・ 図版 22	150	口	口唇-舌状・口縁-上部外反 頸部-縮まる・胴部-張る 文様:外-沈線文(横+斜+縦)+内- 沈線文(斜+弧状)	— —	0.7 — 32.0	細粒 少量	△				△		砂泥質 良好	両面:赤褐色(強)	外:ナデ 内:ハケ目	HB②イ I13 14 V (橙色シルト③) 台3087 HB① 1016SZ (接合)	
	151	口	短頸壺・口唇-破損 口縁-直状・口径小・文様-外面に横 +弧状沈線文(2mm弱)	8.2 —	0.6~1.0 — 10.2	細粒 少量	△	○			△		砂泥質 良好	両面:橙茶褐色	両面:ナデ	HB① O P16 IV (3層青灰色粘質土) 台459	
	152	頸	壺・最小頸径-7.6cm 最大頸径-11.6cm 文様-外面に弧状の沈線文	— —	1.0 — 22.5	細粒 少量	△	△			△		砂質 良好	両面:黄茶褐色	両面:ナデ	HB① P17 IV (3層青灰色シルト) 台650	

凡例 (◎)=非常に多い ○=多い △=少ない ▽=僅少

第9表-6 土器観察一覧 (在地)

(質量単位:cm、g)

第図 図版	図 番号	分類	部位	形態	口径 器高 底径	器厚 底厚 重量	粒度 含量	石英	赤 色 粒	角 閃 石	砂 粒	そ の 他	胎土 焼成	器色 (外面 内面)	器面調整 (外面 内面)	地区・グリッド・層位・遺構 台帳(取上)番号
第50図 図版22	153	VI類	口	口唇-舌状・やや厚手 口縁-上部は外反・胴部-直	— —	0.9 — 121.0	細粒 少量	△	△	△			砂質 良好	両面:茶褐色	外:ナデ 内:ナデ・指頭痕	HB④イ M4 IV (V) 台45
	154		口 く 底	口唇-丸・口縁-上部外反・厚手頸部 -縮まる・胴部-張る 文様-外面に有孔(2個並列) 底部-乳房状尖底 1890±30BP	20.7 28.4 —	0.8~1.0 2.0 2484.0	細粒 多量	○	△	△	長石 ○	砂質 良好	両面:黄茶褐色	外:粗削り(条痕 明瞭) 内:ナデ	HB④イ O2 V (白砂層)下層トレンチ3 一括土器 台499(取5)	
	155		口	口唇-舌状・口縁-外反・厚手	— —	0.9 — 93.5	細粒 少量	△		△			砂泥質 良好	両面:黄茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ(下部は 削り?)	HB④イ O19 IV (3層青灰色シルト) 取52
	156		口	口唇-舌状・口縁-外反・厚手	— —	0.9 — 95.4	細粒 微量	△	△	△			砂泥質 良好	外:黒黄褐色 内:黄茶褐色	両面:ナデ(下部 は削り?)	HB④イ O19 V (3層青灰色砂)台319
	157		口	口唇-平ら・口縁-やや外反 やや薄手(鉢)	— —	0.85 — 29.5	粗粒 中量	△	○	△			砂泥質 良好	両面:茶褐色	外:ナデ 内:雑仕上げ	HB④イ K5 IV (V) 台34
	158		口	口唇-やや玉縁 口縁-やや外反・やや薄手	— —	0.7 — 15.8	細粒 少量	△		△			砂泥質 良好	両面:赤褐色	両面:ナデ	HB④ロ V (VII) 台63
	159		口	口唇-平ら+丸(若干波状) 口縁-外反・薄手	— —	0.6 — 30.0	細粒 少量	△		△			砂質 良好	両面:茶褐色	両面:ヘラナデ (下部は顕著)	HB④イ L1 IV (V) 台65
160	口	口唇-舌状・薄手 口縁-外反強	— —	0.5 — 7.5	細粒 中量	○	○	△			砂質 良好	両面:茶褐色	両面:ナデ 指頭痕	HB④ロ R13 貝層群 I V (VII-III) 台111		
161	口	口唇-平ら(強調)・薄手 口縁-やや外反 頸部-若干縮まる・胴部やや張る	20.0 — —	0.5 — 23.8	細粒 少量	△	△	△			砂泥質 良好	両面:黄橙褐色	両面:ナデ	HB④イ K2 V (VIII)		
第51図 図版23	162	VII類	口	口唇-平ら(強調) 口縁-外反・薄手	24.8 — —	0.5 — 39.0	中粒 中量	○	○	△	△		砂泥質 良好	両面:暗褐色	両面:ナデ 指頭痕	HB④ロ R10 V (VII) 台99
	163		口	口唇-丸・口縁-外反・薄手 頸部-縮まる・胴部-張る	— —	0.6 — 29.7	細粒 少量	△		△		砂泥質 堅致	両面:茶褐色	両面:ナデ	HB④イ L2 V (VIII) 台72	
	164		口	口唇-玉縁・口縁外反・薄手 頸部-縮まる・胴部-張る	— —	0.5 — 21.1	細粒 少量	△	△	△		砂泥質 良好	両面:黄茶褐色	両面:ナデ 指頭痕	HB④ロ R12 V (VII-IV) 台110	
	165		口	口唇-玉縁・口縁-外反・薄手 頸部-縮まる・胴部-張る	— —	0.6 — 34.2	細粒 中量	△	○	△		砂泥質 良好	両面:茶褐色	両面:ヘラナデ	HB④ロ S13 V (VII-II)	
	166		口	口唇-丸(若干強調)・やや波状 口縁-やや外反・薄手 胴部-やや膨らむ	17.6 — —	0.4 — 29.8	中粒 少量	△	△	△		砂泥質 良好	両面:茶黄褐色	外:ナデ 内:ナデ・指頭痕	HB④ロ 表採 台122	
	167		口	口唇-平ら(強調)・口縁直状・薄手 胴部-やや膨らむ	15.9 — —	0.6 — 34.4	細粒 少量	△		△		砂泥質 良好	両面:茶黄褐色	両面:ヘラナデ	HB④イ K3 V (VIII) 台52	
	168		口	口唇-平ら(強調) 口縁-直状	— —	0.7 — 19.2	中粒 少量	△		△		砂泥質 堅致	両面:茶褐色	両面:ハケ目?	HB④ロ R10 V (VII) 台99	
	169		口	口唇-丸・やや波状 口縁-直状 (指頭痕により頸部やや縮まる)	— —	0.5 — 9.6	細粒 中量	△	○	△			泥質 良好	外:橙褐色 内:灰橙褐色	外:ナデ 内:ハケ目	HB④ロ R13 V (VII-II) 台106
	170		口	口唇-丸 口縁-直状(上部若干外反)	— —	0.4 — 20.1	細粒 少量	△	○	△			泥質 良好	外:淡橙褐色 内:灰褐色	外:ナデ 内:ハケ目	HB②イ III (近世層下部) 台3086
	171		胴	形状不明 文様-外面に斜位の刺突文 (室川下層式)	— —	0.9 — 42.1	粗粒 多量	◎			△	△ チャート	泥質 良好	両面:茶褐色	両面:ナデ	HB④ L16 V (中央'ルト5層白砂) 台259
172	口	形状不明 文様-外面に貼付凸帯文(幅13mm) +その上に横長の刺突文(12mm)	— —	0.6 — 4.4	中粒 中量	○			○	△ チャート	泥質 良好	両面:黄茶褐色	両面:不明 (小破片)	HB④イ M3 IV (V) 台74		
173	口	形状不明 口唇平ら・文様-口唇・外面とも単ヘラ 工具による押し引き文	— —	0.7 — 7.8	粗粒 多量	◎			△	△ チャート	泥質 良好	両面:茶褐色	両面:不明 (小破片)	HB②イ L11 V (黄砂層)取1271		
174	胴	無文・器厚均一・やや厚手	— —	0.7 — 31.0	粗粒 多量	◎			△	△ チャート	泥質 良好	両面:暗茶褐色	両面:ナデ	HB① グリッド 層不明		

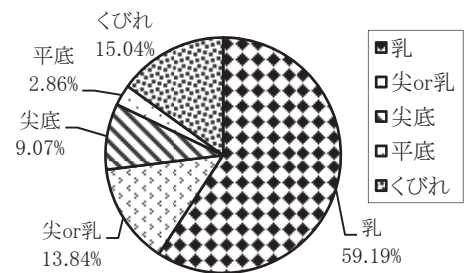
凡例 (◎=非常に多い ○=多い △=少ない △=僅少)

は口縁部と同じで、Ⅰ類と同様な分布状況を見せる。それ以外にHB④イ地区、HB①地区のⅣ層においても出土する。Ⅲ類もほぼ口縁部と同じ出土状況で、Ⅱ類の出土分布に類似する。Ⅳ類はHB④ロ地区、HB①地区での出土が多く、後者の地区ではⅣ層の南側（P15～20、015～20、N15～20）で多数出土する。その他、HB②ロ地区、HB④イ地区でも出土する。Ⅴ類は僅か7点の出土で、分布状況が掴めない。Ⅵ類は口縁部と同じくHB①地区Ⅳ層の南側（P17～19、016～20、N17・20）での出土が多い。Ⅶ類は口縁部と違い、HB①地区、HB②ロ地区での出土が多く、前地区ではⅣ類・Ⅵ類と同場所での出土が多く見られる。また、HB④ロ地区ではⅣ類の出土が圧倒的に多く、口縁部と同じく隣接する平安山原C遺跡との関係が考えられる。

なお、参考までに分類出来なかった胴部も不明土器として図示した。

3. 底部

貝塚時代後期の底部は総数 419 点が得られた。復元土器の底部は集計から除外し、口縁部で集計した。第10表に底部の出土量、第29図に平面分布、第28図に器種別出土量を円グラフで示した。第28図の器種別出土量を見ると、尖底、乳房状尖底、平底、くびれ平底の4種が得られ、乳房状尖底が最も多い。尖底、尖底 or 乳房状尖底、乳房状尖底を尖底系でひとまとめにすると、8割以上を占める。口縁部において尖底系を要する型式が主体であることと一致する。平底の一部も復元した土器からすると、口縁部分類のⅠ類の底部が想定される。ただ、くびれ平底に関しては15%の割合を示すことから多い感を受ける。口縁部でくびれ平底を想定出来るものは僅か2.4%の割合で出土したⅦ類のみである。復元土器の底部を見ると、くびれ平底に分類した中にⅠ類の底部となりうる平底も含まれている可能性がある。第29図の底部の平面分布を見ると、全体的に口縁部と同じHB②イ地区と隣接するHB①地区中央部北側で最も多く出土する。器種別にはあまり差は見られないが、HB②ロ地区ではくびれ平底の出土がやや多い。層位的には尖底系と平底はⅤ層出土が約89.0%、Ⅰ～Ⅲ層、Ⅳ層出土を併せても9.8%である。くびれ平底はⅤ層出土が38.1%、Ⅰ～Ⅲ層出土が41.3%、Ⅳ層出土が20.6%の状況を示す。Ⅰ～Ⅲ層出土のくびれ平底は遺構（Ⅱ層）出土がほとんどで、攪乱を受けていることが分かる。特に、HB①地区においては6点が得られた。今回、丸底は得られず、A：尖底、B：乳房状尖底、C：平底、D：くびれ平底に分類した。以下、その順で記述する。図175～275、図版24～26に図示し、個々の遺物の詳細は第11表の観察一覧にまとめた。



第28図 底部器種別出土量

とまとめにすると、8割以上を占める。口縁部において尖底系を要する型式が主体であることと一致する。平底の一部も復元した土器からすると、口縁部分類のⅠ類の底部が想定される。ただ、くびれ平底に関しては15%の割合を示すことから多い感を受ける。口縁部でくびれ平底を想定出来るものは僅か2.4%の割合で出土したⅦ類のみである。復元土器の底部を見ると、くびれ平底に分類した中にⅠ類の底部となりうる平底も含まれている可能性がある。第29図の底部の平面分布を見ると、全体的に口縁部と同じHB②イ地区と隣接するHB①地区中央部北側で最も多く出土する。器種別にはあまり差は見られないが、HB②ロ地区ではくびれ平底の出土がやや多い。層位的には尖底系と平底はⅤ層出土が約89.0%、Ⅰ～Ⅲ層、Ⅳ層出土を併せても9.8%である。くびれ平底はⅤ層出土が38.1%、Ⅰ～Ⅲ層出土が41.3%、Ⅳ層出土が20.6%の状況を示す。Ⅰ～Ⅲ層出土のくびれ平底は遺構（Ⅱ層）出土がほとんどで、攪乱を受けていることが分かる。特に、HB①地区においては6点が得られた。今回、丸底は得られず、A：尖底、B：乳房状尖底、C：平底、D：くびれ平底に分類した。以下、その順で記述する。図175～275、図版24～26に図示し、個々の遺物の詳細は第11表の観察一覧にまとめた。

第10表 土器（底部）出土量

地区	層位	分類 遺構	尖底	乳	尖or乳	平底	くびれ	合計	
HB①	Ⅰ						3	3	
		遺構		2	1			4	7
	Ⅱ					1		3	5
		遺構	1	2				3	6
	Ⅳ		5	9	4			7	25
			19	109	19	9		16	172
	不明			1					1
小計		25	124	24	10	36	219		
HB②イ	Ⅰ			1			4	5	
		遺構	1	1	2		3	7	
	Ⅲ			1			4	5	
			7	108	30	2	3	150	
	Ⅴ			1				1	
		1023SX			1			1	
	不明			1				1	
小計		8	113	32	2	14	169		
HB②ロ	Ⅱ	2002SZ					1	1	
		2049SD					1	1	
	Ⅳ				1		4	5	
				1				1	
	小計			1	1		6	8	
HB④イ	Ⅰ			1				1	
				1			2	3	
	Ⅴ			1				1	
		小計			3			2	5
HB④ロ	Ⅴ		5	5	1		5	16	
		不明			2			2	
合計		38	248	58	12	63	419		

遺構：HB①(Ⅱ層)8.288SZ 1.359SK (Ⅲ層)163.237SK 271SD 275SL
遺構：HB②イ(Ⅱ層)1005.1016SZ 1006SK 1018SX

A：尖底

尖底は38点の出土で、主なものを図175～183、図版24に図示した。第28図の器種別出土量を参考にすると、僅か9.07%の割合である。

第29図に示した平面分布を見ると、HB②イ地区とHB①地区中央部の北側で最も多く得られた。層位的にはV層出土が81.6%と最も多い。

以下、底面の形状によりa～cに分類し、それぞれ順に記述する。

- a：外底がやや丸みを呈するもの
- b：外底がやや尖り気味のもの
- c：外底がやや平らで、底径が小さいもの

aは図175に図示した1点のみの出土である。全体的にナデ調整を行い、混和材として細かい石英や角閃石などを含む。胎土などの特徴からI類の可能性が考えられる。

bは18点の出土で、HB②イ、HB④ロ地区で多く見られた。後者ではIV類の口縁部が多いことから、大半が同種の底部に相当するものと考えられる。図176～179に4点を図示した。

図176・177は割としっかりした厚手の底部で、混和材も少なく、ナデ調整が施されている。図178は器厚が薄く、開きの大きな底部である。外面には条痕が明瞭に残り、内面はナデ調整が丁寧に施されている。図179は胎土や混和材が粗く、調整も雑で外面には指頭痕が明瞭に残る。

cは19点の出土で、図180～183に4点を図示した。底径が小さく、外底の作りや調整の仕方などから尖底に分類した。図180・181・183の3点は外底面の中央部が若干窪み、立ち上がりの角は丸みを呈する。図182は外底面が平らで立ち上がりの角が明瞭である。

B：乳房状尖底

乳房状尖底は248点の出土で、主なものを図184～240、図版24・25に図示した。第28図の器種別出土量を見ると、59.2%の割合で最も多く出土している。尖底or乳房状尖底は58点の出土で、13.8%の割合を占め、Aも合わせると82.1%と尖底系の底部が主体であることがわかる。層位的にはV層出土が多く、89.0%を占める。Bは胎土や混和材等の特徴からほとんどがI・II類の底部と思われ、中にはIV類の底部と考えられるものも出土している。乳頭部の外底形状によりa～gに分類した。a～cは乳頭部が丸みを呈するもので55点が出土し、乳房状尖底全体では22.2%の割合を示す。d～gは乳頭部が平らなもので157点を得られ、乳房状尖底全体の63.3%を占めることから、本遺跡の主流となる。外底面は平らで平底に近い底部も得られたが、製作技法などから乳房状尖底の変形と思われ、乳房状尖底として集計したものもある。以下、aから順に記述する。

- a：乳頭部の外底が丸みを呈するもので小振りなもの（底径2.6cm以下）
- b：乳頭部の外底が丸みを呈するもので中振りなもの（底径2.7～3.4cm以下）
- c：乳頭部の外底が丸みを呈するもので大振りなもの（底径3.5cm以上）
- d：乳頭部の外底が平らで小振りなもの（底径2.6cm以下）
- e：乳頭部の外底が平らで中振りなもの（底径2.7～3.4cm以下）
- f：乳頭部の外底が平らで大振りやや平底に近いもの（底径3.5cm以上）
- g：乳頭部が不明瞭で内底は斜位、大振りにより平底に近いもの

aは26点を得られ、図184～187に4点を図示した。いずれも乳頭部は小振りであるが、図184～186は乳頭部が低く、図187の乳頭部は他に比べて高い。図185・186の2点は胎土や混和材などの特徴からIV類の底部と思われる。

bは22点を得られ、図188・189の2点を図示した。いずれも乳頭部が低く、砂質で胎土に角閃

石を含むことからⅠ類またはⅡ類の底部と思われる。

cは7点が得られ、図190～194の5点を図示した。図194の底面は破損しているが、残存する乳頭部が大きい。いずれも重量感があり、器面調整は雑である。このタイプは本遺跡では数量的に少なく、図示した5点は混和材や胎土などの特徴からⅣ類の可能性が考えられる。

dは17点の出土で、図195～198に4点を図示した。図195～197は低めの乳頭部、図198はやや高い乳頭部を呈する。

eは91点の出土で、図199～217に19点を図示した。本種の中で最も多い形状である。立ち上がり部はほとんどがくびれを持つ。図199・201・203～205・207・209・210・212～217は底面に粘土を貼り付けて乳頭部を作る。図200・206・208・211には粘土の貼付は見られない。図202は底厚が28mmとかなり厚く、胎土に角閃石を多量に含む。

fは41点で、図218～233に16点を図示した。**e**に次いで多い形状で、両者を合わせると132点が出土している。本遺跡の乳房状尖底は乳頭部が平らで中・大振りなものが圧倒的に多い。中でも乳頭部自体が薄く、底径が割と大きなものが主体となる。このような底部が多数出土する遺跡としては嘉門貝塚B(1993)などが上げられ、同遺跡は土器全般において本遺跡と類似するようである。図228・229は立ち上がりが若干内傾しながら胴部へ移行するが、他は直線的に立ち上がって移行するものが多い。図219・222・224・229・230・233はいずれも程度の差はあるが、外底面の中央部が窪む。

gは僅か8点の出土で、図234～237に4点を図示した。いずれも平底に近いが、僅かに乳頭部と思われる部分があること、内底面が平らではなく斜位であることなどから乳房状尖底に分類した。口～底部まで復元が出来た図55・57の底部も類似の形状を呈するが、製作技法や乳頭部とは捉えられないことから平底に分類した。図236・237はいずれも底厚が15、18mmと厚い。

図238～240は底部付近で不明なものをまとめた。底面が破損しているが、残存部の形状から3点とも尖底か乳房状尖底と思われる。

その他に、乳房状尖底と思われるもので外底が破損し、細分類が出来ないものもある。

C：平底

平底は12点の出土で、図241～247、図版26に7点を図示した。第28図の器種別出土量を見ると、僅か2.9%の割合である。平底は、Ⅱ層の遺構である359SK以外は全てⅤ層出土である。形状の異なるものが多いが、出土数が少ないために細分せずにそれぞれ記述する。図241～243の3点はいずれも胎土が粗く堅致で、混和材はやや粗粒である。図242はHB①地区0・P10・11グリッド359SK出土である。図244は砂質で細かい胎土を呈する。図245は底面のみが残存するもので、胎土や混和材などが第48図134に類似している。図246は他の底部に比べて立ち上がりが急で、底厚も20mmとやや厚い。胎土も粉っぽさが強く、手に付く。図247は底面のみが残るもので底厚が厚く、底径の大きな平底である。

D：くびれ平底

くびれ平底は63点の出土で、図248～274、図版26に27点を図示した。第28図に示した器種別出土量を見ると、全体の約15.0%の割合である。平面分布を見るとHB②イ地区以外の地区ではほとんど出土しており、HB②ロ地区のⅣ層での出土が若干目立つ。層位的に見ると、前述したようにⅤ層出土は尖底系に比べて出土数が少なく、38.1%の割合で、Ⅰ～Ⅲ層出土は41.3%、Ⅳ層は20.6%である。第20図の垂直分布を見ると、HB①・HB②イ地区においてⅤ層出土のくびれ平底は、Ⅰ・Ⅱ類の口縁部より上部で出土する傾向が見られる。また、他の底部に比べてⅠ～Ⅲ層の遺構出土が多く、

攪乱を受けた出土状況が目立つことから、尖底系や平底と若干の時期差があった可能性が想定される。以下、形状の違いにより a～e に分けて記述する。

- a : 立ち上がりは直・底厚が厚いもの
- b : くびれが弱い・器厚は薄い・底厚が厚いもの
- c : くびれが弱い・立ち上がり部がやや丸い・底厚が厚いもの
- d : くびれが明瞭・立ち上がり部は角を持つ・外底は上げ底状が多いもの
- e : くびれが強い・外底が鏝状になるもの

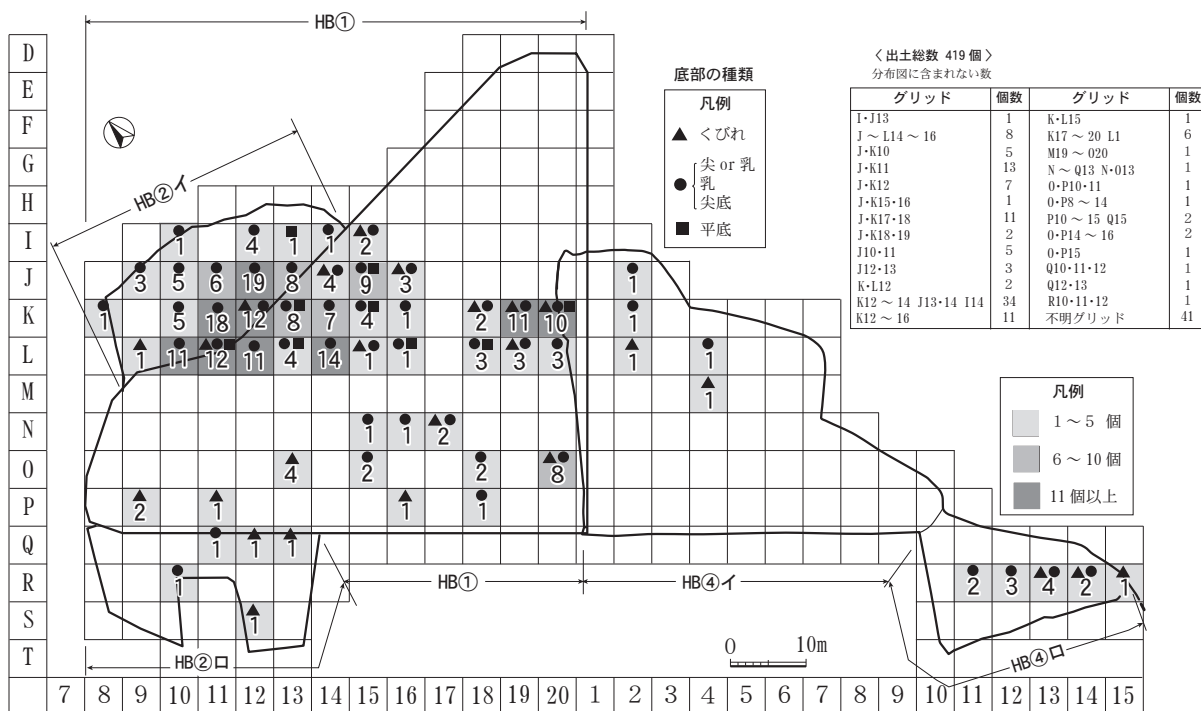
a は 3 点が得られ、図 248・249 の 2 点を図示した。2 点ともくびれがあまり見られず、底径も小さいため乳房状尖底の変形した可能性も考えられる。ただ、胎土等が乳房状尖底や平底と大きく違い、くびれ平底の b に近い。本来なら d より外れる形状であり、口縁部との関係も含めて今後の課題であろう。2 点とも底厚が約 20 mm と厚く、底面から直に立ち上がるもので、重量感がある底部である。

b は図 250～252 の 3 点が得られた。図 250 は他に比べてやや雑仕上げで、重量感がある。立ち上がり部が半分ほど破損しており、調整も雑である。図 251 の外面には条痕が明瞭に残る。図 252 は内面にヘラナデの調整痕が残る。

c は 9 点が得られ、図 253～256 の 4 点を図示した。いずれも立ち上がりがやや丸みを呈し、底厚も若干厚みを持つ。図 256 は外底に楕円状の薄い粘土を数カ所に貼り付けている。

d は 46 点が得られ、図 257～273 の 17 点を図示した。くびれ平底のみの割合では 73.0% を占め、本遺跡出土のくびれ平底では主体となる形状である。立ち上がりの角はシャープで外底の中央部は上げ底状を呈するものが多い。図 263～265 等のように器厚が薄く、ナデ調整が丁寧で内底が丸みを呈するものはアカジャンガー式土器の底部であろうか。くびれ平底を持つ型式には他にフェンサ下層式土器もあり、両者を区別することが今後の課題となる。

e は 2 点が得られ、図 274 の 1 点を図示した。平らな円形状の粘土を土台とし、その上に粘土を積



第 29 図 土器底部出土平面分布

み上げて鏢状を作り出しているものと思われる。両面とも丁寧にナデ調整を行っている。

図 275 は分類が不明である。外面の形状からくびれ平底の a や c にも近いが、胎土などが異なる。外底は上げ底を呈し、外面は丁寧なナデによるものか、器面が滑らかである。内底は器面が剥落しており、底厚は不明である。

<参考文献>

- 高宮廣衛 1960 「具志川村アカジャンガー遺跡調査概報」『文化財要覧』 琉球政府文化財保護委員会
- 具志川市教育委員会 1978 『宇堅貝塚・アカジャンガー貝塚発掘調査報告』
- 本部町教育委員会 1986 『具志堅貝塚』 本部町文化財調査報告書第 3 集
- 高宮廣衛・中村愿・金城利枝 1989 「宜野湾市宇地泊兼久原遺跡発掘調査報告」『沖国大考古』第 10 号
- 沖縄県・具志川村教育委員会 1989 『清水貝塚』 具志川村文化財調査報告書第 1 集
- 沖縄考古学会・鹿児島考古学会 1992 『弥生土器』 第 3 回合同研究会資料集
- 鹿児島県考古学会 1992 『鹿児島県下の弥生土器』
- 浦添市教育委員会 1993 『嘉門貝塚 B』 浦添市文化財調査報告書第 21 集
- 名護市教育委員会 1996 『部瀬名貝塚』
- 沖縄県教育委員会 1996 『平敷屋トウバル遺跡』 沖縄県文化財調査報告書第 125 集
- 中園聡 1997 「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第 9 号 人類史研究会
- 沖縄国際大学文学部考古学研究室 1999 「渡嘉敷村阿波連浦貝塚発掘調査報告」『沖国大考古』第 12 集
- 安座間 充 2000 「沖縄考古学におけるいわゆる「弥生土器」の認識一類型化のための基礎作業一（1）」
『南島考古』No19
- 沖縄考古学会 2002 『沖縄諸島の弥生時代並行期』 沖縄考古学会研究発表資料集
- 新里貴之 2004 「沖縄諸島の土器」『考古資料大観 12 貝塚後期文化』 小学館
- 宮城弘樹 2005 「沖縄貝塚時代後期土器の研究（Ⅲ）一浜屋原式土器とその概念整理一」『廣友会』創刊号
- 北谷町教育委員会 2008 『平安山原 B 遺跡』 北谷町文化財調査報告書第 29 集
- 北谷町教育委員会 2010 『伊礼原 E 遺跡』 北谷町文化財調査報告書第 31 集
- 北谷町教育委員会 2013 『伊礼原 D 遺跡』 北谷町文化財調査報告書第 35 集
- 北谷町教育委員会 2014 『伊礼原遺跡・伊礼原 A 遺跡』 北谷町文化財調査報告書第 36 集
- 新里貴之・高宮広土 2014 『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』 第 1 集
- 仲宗根求・他 2001 「読谷村立出土の弥生土器・弥生系土器について」『読谷村歴史民俗資料館紀要第 25 号』

第11表-1 土器観察一覧(底部)

(質量単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	分類	形態	底径 重量	器厚 底厚	粒土 含量	石 英	角 輝 石	赤 色 粒	白 色 粒	砂 粒	そ の 他	胎 土	器色 (外 内)	器面調整 (外 内)	地区・クリッド・層位 遺構・台帳(取上)番号	
第52図・ 図版24	175	尖底	a 外底-丸み 底厚-器厚とほぼ同じ	- 55.6	0.75 1.0	細粒 多量	◎	◎			○		砂質	両面:茶褐色	両面:ナデ	HB① I14 V(橙色シルト) 取122	
	176		外底-尖る 底厚-やや厚い	- 18.7	- 1.5	細粒 少量	○				△		砂泥質	外:赤褐色 内:橙褐色	両面:ナデ	HB④ R13 V(VII-I) 台101	
	177		外底-尖る 底厚-やや厚い	- 31.5	0.8 1.8	細粒 少量	○	△			△		砂泥質	外:茶褐色 内:暗灰褐色	両面:ナデ	HB④ R12 V(VII) 台100	
	178		外底-尖る 底厚-やや厚い	- 88.1	0.5 1.2	粗粒 中量	△	△	○		△		砂質	外:赤褐色 内:暗茶褐色	外:条痕明瞭 内:ナデ	HB④ R13 V(VII-II) 台106	
	179		外底-尖る 底厚-厚い	- 28.4	0.8 2.6	粗粒 中量	○				○		砂泥質	両面:赤褐色	両面:ナデ	HB① K19 V(混貝層) 台548	
	180		外底-平ら・中央部凹み 底厚-やや厚い	1.5 32.3	0.6 1.8	細粒 少量	△				△		砂泥質	両面:灰茶褐色	両面:ナデ	HB④ R14 V(VII-I) 台102	
	181		外底-平ら・中央部凹み 底厚-やや厚い	2.1 25.9	0.6 1.5	粗粒 中量	○				○		砂泥質	外:茶褐色 内:暗灰褐色	両面:ナデ	HB④ R12 V(VII-IV) 台110	
	182		外底-平ら 底厚-やや薄い	2.6 9.4	0.6 1.2	細粒 少量	△	△			△		砂質	両面:茶橙褐 色	両面:ナデ	HB① K12~14 J13・14I14 V(橙色シルト) 台564	
	183		外底-平ら 中央部僅かに凹み 底厚-やや薄い	3 53.6	0.7 1.6	細粒 中量	○	○			△		砂質	外:灰褐色 内:橙褐色	外:ナデ 内:ナデ・指頭痕	HB① K13 V(混貝層) 台571	
	184		乳房状 尖底	a 乳頭部の外底-丸み 小振り・低い	- 14.1	0.5 1.2	細粒 少量	△		△		△		砂泥質	両面:茶褐色	外:ナデ(雑) 内:ナデ	HB④ R12 V(VII) 台100
	185			乳頭部の外底-丸み 小振り・低い	- 57.8	0.9 1.8	粗粒 中量	○		△		△		砂泥質	両面:赤褐色	外:ナデ(雑) 内:ナデ	HB① L18 V(混貝層) 台390
	186			乳頭部の外底-丸み 小振り・低い	- 37.7	0.6 2.0	中粒 多量	○		◎		○		砂質	外:黄茶褐色 内:灰茶褐色	両面:ナデ	HB④ R V(VII) 台63
	187			乳頭部の外底-丸み 小振り・高い	- 8.7	0.5 1.5	細粒 中量	○	△			△		砂質強	外:橙茶褐色 内:黒褐色	両面:ナデ	HB① K17~20 L1 V(暗褐色シルト) 台229
	188			b 乳頭部の外底-丸み 中振り・低い	2.6 38.8	0.7 2.0	細粒 中量	○	○			△		砂質	外:赤褐色 内:暗褐色	外:ナデ・指頭痕 内:ナデ(雑)	HB④ K2 V(VIII) 台68
	189	乳頭部の外底-丸み 中振り・低い		2.4 40.7	0.8 -	中粒 多量	○	◎			△		砂質強	両面:赤褐色	両面:ナデ・指頭痕	HB① J・K17-18 V(橙色シルト) 台549	
	190	乳頭部の外底-丸み 中振り・高い		- 33.7	0.7 2.6	細粒 少量	△				△		砂泥質	両面:茶褐色	両面:ナデ	HB④ R13 V(VI) 台62	
	191	乳頭部の外底-丸み 大振り・高い		- 50.5	0.6 2.4	細粒 少量	△		△		△		砂泥質	両面:茶褐色	外:ナデ(雑) 内:ナデ	HB④ R V(VII) 台63	
	192	c 乳頭部の外底-丸み 大振り・やや低い		- 40.0	0.9 2.4	粗粒 中量	△		○		△		砂泥質	外:赤褐色 内:茶褐色	両面:ナデ	HB① K20 V(橙色シルト) 台273	
	193	乳頭部の外底-丸み 大振り・高い		- 61.4	0.8 3.0	粗粒 中量	○		○		△		砂泥質	両面:赤褐色	両面:ナデ	HB① J・K17-18 V(橙色シルト) 台549	
	194	乳頭部の外底-丸み 大振り・底厚は不明		- 35.8	0.8 -	細粒 少量	△				△		砂泥質	両面:赤褐色	両面:ナデ(雑) 指頭痕	HB① J・K18-19 V(落岩間) 台245	
	195	d 乳頭部の外底-平ら 小振り・低い		2.6 69.3	0.6 1.6	細粒 少量	△	△			△		砂質	両面:暗灰褐色	両面:ナデ	HB②イ K12 V(黒砂層上) 取1257	
	196	乳頭部の外底-平ら 小振り・低い		2.6 15.8	0.6 1.3	中粒 多量	◎	◎			△		砂質強	両面:黄橙褐色	両面:ナデ	HB④イ J2 I(攪乱) 台49	
	197	乳頭部の外底-平ら 小振り・低い		2.6 53.1	0.6 1.8	中粒 中量	○	○			△		砂質強	両面:橙褐色	外:ナデ・指頭痕 内:ナデ(雑)	HB① K14 V(橙色シルト) 取78	
	198	乳頭部の外底-平ら 小振り・高い	2.3 28.7	0.6 1.9	細粒 多量	◎	△			○		砂質強	両面:茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB②イ J13 V(橙シル④) 取1069		
	199	e 乳頭部の外底-平ら 中振り・低い	3.2 83.6	0.8 1.2	細粒 少量	○	△			△		砂質	両面:茶褐色	両面:ナデ(雑)	HB① L20 V(混貝層) 台387		
	200	乳頭部の外底-平ら 中振り・低い	3.2 71.3	0.6 1.0	細粒 中量	○	○			△		砂質強	外:橙褐色 内:暗褐色	両面:ナデ	HB②イ K11 V(橙シル②) 台3135 K13 V(混貝層) 取138 (接合)		
	201	乳頭部の外底-平ら 中振り・低い	3.3 54.4	0.7 1.2	細粒 中量	○	○			△		砂質強	両面:茶褐色	両面:ナデ	HB②イ J12 V(暗シル) 取1076		
	202	乳頭部の外底-平ら(中央部 は上げ底) 中振り・低い	3.4 45.2	- 2.8	細粒 多量	○	◎			△		砂質	外:赤褐色 内:破損で不明	外:ナデ 内:破損で不明	HB① K19 III 237SK 台605		
203	乳頭部の外底-平ら 中振り・低い	3.4 39.5	0.7 2.1	細粒 中量	△	○			△		砂質強	外:黄茶褐色 内:暗茶褐色	両面:ナデ	HB②イ II 1005SZ 台3081			
204	乳頭部の外底-平ら 中振り・低い	3.4 64.4	0.8 2.3	細粒 多量	○	◎			△		砂質	両面:赤褐色	外:ナデ 内:ナデ丁寧	出土地不明			
205	乳頭部の外底-平ら 中振り・低い	3.4 125.4	0.7 1.6	細粒 中粒	○	○			△		砂質強	両面:橙茶褐色	両面:ナデ丁寧	HB②イ I12 V(貝層①) 取1115 HB②イ J12 V(貝層①) 台3055 (接合)			
206	乳頭部の外底-平ら 中振り・低い	3.4 29.0	0.6 1.4	細粒 中量	△	○			△		砂質強	外:橙褐色 内:灰茶褐色	両面:ナデ	HB① J・K17-18 V(橙色シルト) 台549			
207	乳頭部の外底-平ら 中振り・低い	3.4 67.9	1.0 2.1	粗粒 中量	△		○		○		砂泥質	両面:赤褐色	両面:ナデ	HB① O13 IV(青灰粘質土) 台479			
208	乳頭部の外底-平ら 中振り・低い	3.4 146.4	0.8 1.9	細粒 中量	△	○			○		砂質強	外:赤褐色 内:暗褐色	両面:ナデ	HB②イ J11 V(暗シル) 取1064 HB②イ J12・13 V(貝層①上) 台3131 (接合)			

凡例 ◎=非常に多い ○=多い △=少ない ▽=僅少

第11表-2 土器観察一覧(底部)

(法量単位: cm, g)

第図版	図番号	分類	形態	底径 重量	器厚 底厚	粒土 含量	石英	角 閃石	輝石・ 赤色粒	白色 色粒	砂粒	その他	胎土	器色 (外面 内面)	器面調整 (外面 内面)	地区・クワット・層位 遺構・台帳(取上)番号	
第52図版	209	乳房状尖底	乳頭部の外底-平ら 中振り・低い	3.4 79.1	0.7 1.8	細粒 少量	△				△		砂泥質	両面:暗褐色	両面:ナデ	HB②イKII V(黄砂上)取1200	
	210		乳頭部の外底-平ら 中振り・低い	3.4 19.1	0.5 0.6	細粒 少量	△	△			△		砂質	外:茶褐色 内:暗褐色	両面:ナデ	HB②イJ12 V(貝層①)台3055	
	211		乳頭部の外底-平ら 中振り・低い	3.4 40.9	0.5 1.2	細粒 少量	△	△			△			砂質強	外:茶褐色 内:暗褐色	両面:ナデ	HB① K12 ¹⁴ J13・14I14 V(橙色シルト) 台564
	212		乳頭部の外底-平ら 中振り・低い	3.6 37.5	0.6 1.7	細粒 中量	○	△			△			砂質強	外:赤褐色 内:暗褐色	両面:ナデ	HB②イJ12 V(暗シル)取1077
	213		乳頭部の外底-平ら 中振り・低い	3.6 37.3	0.7 0.9	細粒 中量	○	△			○			砂質強	外:橙褐色 内:暗褐色	両面:ナデ	HB②イI12 V(暗シル)台3111
	214		乳頭部の外底-平ら 中振り・低い	3.6 28.7	0.5 0.7	中粒 少量	△				△			砂質	外:赤褐色 内:暗灰褐色	両面:ナデ	HB②イL10 V(貝層②)台3140
	215		乳頭部の外底-平ら 中振り・低い	3.6 38.3	0.6 1.1	細粒 中量	○	○			△			砂質強	外:灰褐色 内:橙褐色	両面:ナデ	HB① K12 ¹⁶ V(暗褐色シルト) 台226
	216		乳頭部の外底-平ら 中振り・低い	3.6 37.0	0.7 1.3	細粒 少量	△				△			砂泥質	両面:橙褐色	両面:ナデ	HB① L11 V(黄色砂)取213
	217		乳頭部の外底-平ら 中振り・低い	3.8 60.3	0.9 1.6	中粒 少量	△			△		△		砂泥質	外:赤褐色 内:黒褐色	外:ナデ雑 内:ナデ	HB① K19 V(混貝層)取190
	218		乳頭部の外底-平ら 大振り・低い	3.8 50.3	0.6 0.9	中粒 中量	○				△			砂質	外:茶褐色 内:暗黒褐色	外:ナデ雑 内:ナデ	HB②イJ9 V(灰砂層)取1404 HB②イV(灰砂層)台3178 (接合)
	219		乳頭部の外底-平ら(中央部は上げ底) 大振り・低い	4.0 33.8	0.7 1.2	細粒 中量	△	○	△粗粒		△			砂質強	外:橙褐色 内:淡橙褐色	両面:ナデ	HB②イK11 V(貝層②)取1136
	220		乳頭部の外底-平ら 大振り・低い	3.8 47.8	0.4 1.3	細粒 中量	○				○			砂質強	両面:茶褐色	両面:ナデ	HB②イJ12 V(貝層①)台3055
	221		乳頭部の外底-平ら 大振り・低い	4.1 51.1	0.7 1.1	細粒 少量	△				△			砂質	外:橙褐色 内:灰茶褐色	外:ナデ雑 内:ナデ	HB① K12 ¹⁶ V(暗褐色シルト) 台226
	222		乳頭部の外底-平ら (中央部は上げ底) 大振り・低い	4.0 32.6	0.6 0.5	細粒 少量	△				△			砂質	外:灰茶褐色 内:暗褐色	両面:ナデ	HB②イL10 V(貝層③) 台3309 HB②イK10 V(貝層②) 台3149 HB②イL10 V(貝層②) 台3140 (接合)
	223		乳頭部の外底-平ら 大振り・低い	4.1 139.7	0.7 1.4	細粒 中量	○				○			砂泥質	両面:茶褐色	外:ナデ雑 内:ナデ	HB① K19 V(混貝層)取157
	224		乳頭部の外底-平ら (中央部上げ底) 大振り・低い	4.1 112.1	0.6 1.3	中粒 中量	△		○		△			砂質	外:赤褐色 内:茶褐色	外:ヘラナデ 内:ナデ	HB②イJ12 V(貝層①上)取1093
	225		乳頭部の外底-平ら 大振り・低い	3.8 81.6	0.7 1.4	細粒 少量	△				△			砂質	外:茶褐色 内:暗灰褐色	外:ヘラナデ 内:ナデ	HB① K13 V(混貝層)取192
	226		乳頭部の外底-平ら 大振り・低い	4.1 62.0	0.7 1.2	細粒 少量	△				△			砂質	両面:茶褐色	外:ナデ 内:ヘラナデ	HB②イK11 V(黄砂層)取1294
	227		乳頭部の外底-平ら 大振り・低い	4.4 20.5	0.7 0.9	細粒 多量	○	○			△			砂質	外:暗褐色 内:茶褐色	両面:ナデ	HB②イJ12 V(黄砂上)台3303
	228		乳頭部の外底-平ら 大振り・低い	4.4 33.1	0.6 1.4	細粒 多量	◎	△			△			砂質強	両面:黄茶褐色	両面:ナデ	HB① K20 V(混貝層)台569
	229		乳頭部の外底-平ら (中央部上げ底) 大振り・低い	- 146.0	0.6 1.3	細粒 少量	△				△			砂泥質	両面:暗褐色	外:ナデ 内:ナデ丁寧	HB②イK8 V(山土層)取1387~1389
	230		乳頭部の外底-平ら (中央部は上げ底) 大振り・低い	4.1 60.2	0.6 0.7	細粒 中量	○	△	△					砂質強	外:赤褐色 内:黄茶褐色	両面:ナデ	HB① I15 V(橙色シルト)取97
	231		乳頭部の外底-平ら 大振り・低い	4.6 72.0	0.5 1.5	細粒 少量	△	△	△					砂質	外:茶褐色 内:灰茶褐色	外:ナデ 内:ナデ雑	HB②イK11 V(貝層②)取1044
	232		乳頭部の外底-平ら 立ち上がり角が丸 大振り・低い	5 23.6	0.5 0.5	中粒 中量	○	△	△		△			砂泥質	両面:灰茶褐色	外:ナデ雑 内:ナデ	HB① K15 V(黄砂層)台305
233	乳頭部の外底-平ら (僅かに上げ底) 立ち上がり角・内底-斜め	5.0 30.0	0.8 0.4	細粒 中量	△	○						砂質	外:茶褐色 内:暗褐色	両面:ナデ	HB②イK11 V(貝層②)台3146		
234	乳頭部が不明瞭・外底-平ら 立ち上がり角 内底-斜め	5.4 63.7	0.7 1.1	細粒 少量	△		△		△粗粒			砂泥質	外:黄茶褐色 内:灰茶褐色	両面:ナデ	HB②イJ11 V(貝層①上)取1097 HB②イI10 台3142		
235	乳頭部が不明瞭・外底-平ら 立ち上がり角・内底-斜め	5.0 64.2	0.6 1.1	細粒 多量	○	◎			△			砂質強	両面:橙茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB②イV(山土層)台3186		
236	乳頭部が不明瞭・外底-平ら 立ち上がり角・内底-斜め	6 52.7	0.9 1.5	細粒 多量	○	△			○			砂質強	両面:暗茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB① K13 V(混貝層)取163		
237	乳頭部が不明瞭・外底-やや丸み・立ち上がり角が丸 大振り・やや高い	5.6 50.9	- 1.8	粗粒 多量	◎	△			△			砂質	外:茶褐色 内:灰茶褐色	外:ナデ 内:ハカレ?	HB④イL4IV(V) 台43		
238	尖底or乳尖	-	0.7 -	細粒 多量	○	○						砂質	両面:茶褐色	両面:ナデ	HB②イL10V(貝層③)台3309		
239	-	-	0.7 -	細粒 少量	△	△			△			砂質	両面:茶褐色	両面:ナデ	HB②イL10 V(貝層③) 台3309 HB②イL10 V(黄砂層) 台3312 (接合)		
240	-	-	0.5 -	細粒 多量	○	○			△			砂質強	外:橙褐色 内:暗褐色	両面:ナデ	HB②イK11 V(橙シル②)台3135		

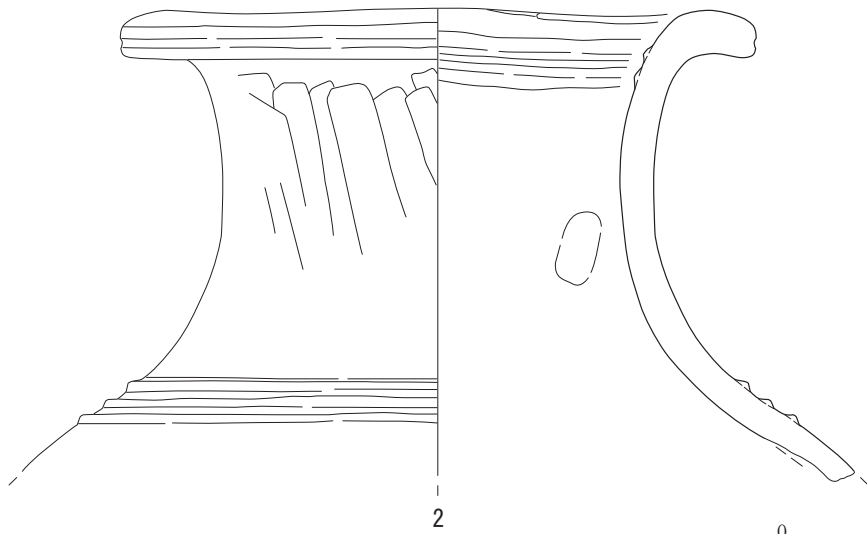
凡例 (◎=非常に多い ○=多い △=少ない △=僅少)

第11表-3 土器観察一覧 (底部)

(質量単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	分類	形態	底径 重量	器厚 底厚	粒土 含量	石 英	角 閃 石	輝 石	赤 色 粒	白 色 粒	砂 粒	そ の 他	胎 土	器色 (外面 内面)	器面調整 (外面 内面)	地区・クワッド・層位 遺構・台帳(取上)番号	
第54図・ 図版26	241	平底	底径小 立ち上がり-角を作る	6.4 18.1	0.8 1.0	細粒 少量	△					黒粒 △	砂質		両面:茶褐色	両面:ナデ	HB① L13 V(黄砂層) 台309	
			底径小 立ち上がり-角を作る	6.4 16.0	0.6 0.8	粗粒 少量	△		△					泥質	外:灰茶褐色 内:橙褐色	両面:ナデ	HB① O・P10・11 359SK 台340	
			底径中 立ち上がり-角を作る	6.4 76.4	0.8 1.2	粗粒 多量	◎				△			砂質	両面:茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB① J15 V(褐色細砂質土) 台532	
			底径大 立ち上がり-角を作る	7.6 80.4	0.7 1.2	細粒 多量	○	◎				△		砂質	外:灰黄褐色 内:淡橙褐色	両面:ナデ	HB① L11 V(混貝層) 取176	
			底径大 底厚-薄い 立ち上がりが不明	- 22.6	- 0.7	粗粒 中量	△	○	○			△	黒粒 △	砂質	外:淡茶褐色 内:灰茶褐色	外:ナデ 内:ナデ(雑)	HB① J・K17・18 V(橙色シルト) 台549	
			底径大 立ち上がり-角を作る 底厚が厚い	8.7 48.4	2.0 0.8	粗粒 少量	○	△				△		砂質	外:灰茶褐色 内:明橙褐色	両面:ナデ	HB②イ I13 V(黄砂層) 取1220	
			底径大・底厚-厚い 立ち上がり-不明	- 142.2	- 1.8	中粒 多量	○	○				○		砂質	両面:茶褐色	両面:ナデ(雑)	HB① L18 V(混貝層) 取150	
	248	くびれ 平底	a	底厚-より厚い 立ち上がり-直	4.8 57.0	4.8 1.9	粗粒 多量	△		◎		△		砂質	両面:茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB① O20 IV(青灰粘質土) 取18	
				底厚-より厚い 立ち上がり-直	5.6 54.2	2.0 2.0	粗粒 多量	△		◎		△		砂泥 質	外:淡茶褐色 内:淡橙褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB②イ I(表土) 台3082	
				底厚-厚い くびれ-弱い	5.2 102.5	0.7 1.4	中粒 少量	△				△	黒粒 △	砂泥 質	両面:茶褐色	両面:ナデ(ヘラ?)	HB②イ K12 V(貝層②) 取1182	
			b	底厚-厚い くびれ-弱い	5 61.5	0.6 1.3	細粒 少量	△		△		△			砂泥 質	両面:赤褐色	両面:ヘラナデ	HB②II(2層) 台488
				底厚-厚い くびれ-弱い	5 17.9	0.7 1.4	細粒 少量	△		△		△			砂泥 質	両面:赤褐色	外:ナデ 内:ヘラナデ	HB① J^L14^16 V(暗褐色シルト) 台228
			c	底厚-厚い 立ち上がり-丸み	4.8 48.4	0.5 1.6	中粒 中量	○				○			砂質	外:灰茶褐色 内:淡茶褐色	両面:ナデ	HB②II(2層) 台488
				底厚-厚い 立ち上がり-丸み	5.4 36.7	0.7 1.5	中粒 多量	△		◎		△			砂泥 質	外:赤褐色 内:茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB① P9 IV(青灰粘質土) 台462
				底厚-厚い 立ち上がり-丸み	5.5 84.8	0.8 1.9	粗粒 少量	△				△	灰色 粒△	砂質	外:茶褐色 内:灰褐色	両面:ナデ 外底:粘土貼付	HB②ロ S12 IV(黒色粘質土) 取2035	
				底厚-厚い 立ち上がり-丸み	6 84.9	1.4 0.8	粗粒 中量	△		○					泥質	両面:灰褐色	外:ナデ 内:ナデ(雑)	HB④ロ R15 V(VII-I) 台103
				底厚-薄い 外底-上げ底	4.4 11.4	0.5 0.5	細粒 少量	△				△			砂泥 質	両面:茶褐色	両面:ナデ	HB④ロ R14 V(VII-I) 台102
				底厚-薄い 外底-上げ底	4.4 21.3	0.4 0.9	細粒 少量	△			△		△		砂泥 質	両面:赤褐色	外:ナデ 内:ヘラナデ	HB① J・K18・19 V(落岩間) 台245
				底厚-薄い 外底-平ら	4.6 20.0	0.5 0.9	中粒 多量	○		○		△			砂泥 質	両面:茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB④イ M4 IV(V) 台45
			d	底厚-薄い 外底-上げ底	4.6 61.4	0.4 0.8	中粒 少量	△		△		△			砂泥 質	外:茶褐色 内:淡茶褐色	外:ヘラナデ 内:ヘラナデ	HB②イ II(1005SZ) 台3081
				底厚-薄い 外底-平ら	4.8 12.4	0.5 0.8	中粒 少量	△		△		△			泥質	外:橙褐色 内:淡橙褐色	両面:ナデ	HB① L19 V(褐色細砂質土) 台520
				底厚-薄い 外底-上げ底	4.8 19.3	0.4 0.5	細粒 多量	○		○		△	黒粒 △		砂泥 質	外:橙茶褐色 内:灰茶褐色	両面:ナデ	HB① K12^14 J13-14I14 V(橙色シルト) 台572
				底厚-薄い 外底-上げ底	5.6 19.3	0.4 0.5	粗粒 多量	○		○		△			泥質	外:橙茶褐色 内:灰茶褐色	両面:ナデ	HB① K19 V(橙色シルト) 取86
				底厚-薄い 外底-上げ底	5.7 55.5	0.4 0.9	粗粒 少量	△		○		△			砂質	外:灰茶褐色 内:赤褐色	外:ナデ 内:ハケメ	HB②イ I(表土) 台3082
				底厚-やや厚い 内底-盛り上がる	4.8 50.6	0.5 1.1	粗粒 多量	○		○		○			砂質	外:茶褐色 内:灰茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB① J14 V(混貝層) 取107
				底厚-やや厚い 外底-上げ底	5.6 30.4	0.7 1.0	中粒 中量	△		○		△	黒粒 △		砂泥 質	両面:茶褐色	両面:ナデ 外底:粘土貼付	HB②ロ 2002SZ 台3367
				底厚-やや厚い 外底-上げ底	6.4 53.2	0.6 1.0	粗粒 多量	△		◎		△			泥質	外:灰褐色 内:灰桃褐色	両面:ナデ	HB④ロ Q10.11.12 V(VII) 台92
				底厚-やや厚い 外底-上げ底	6.1 95.6	1.2 -	粗粒 少量	△				△			砂泥 質	外:茶褐色 内:灰茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB① I15 V(暗褐色シルト) 取34
				底厚-やや厚い 外底-上げ底	6.6 38.5	0.5 1.0	粗粒 中量	△		○		△			泥質	両面:灰桃褐色	両面:ナデ	HB① K13 V(橙色シルト) 取123
			e	底厚-やや厚い 外底-平ら	5.7 56.1	0.6 1.0	細粒 少量	△		△		△			砂泥 質	外:橙褐色 内:橙褐色	両面:ナデ	HB②ロ Q13 IV(黒色粘質土) 取2024
				底厚-やや厚い 外底-上げ底	6.2 70.7	0.7 1.0	粗粒 多量	○		◎		△			砂泥 質	外:灰桃褐色 内:灰桃褐色	両面:ナデ	HB②ロ Q12 IV(黒色粘質土) 取2031
	底厚-やや厚い 外底-平ら	6.5 42.1		0.6 1.3	粗粒 中量	○		○		○			砂泥 質	外:橙茶褐色 内:橙茶褐色	外:ナデ 内:ナデ	HB②イ I(表土) 台3082		
	底厚-やや厚い 外底-平ら	5.8 74.8		0.6 1.5	中粒 中量	○	△			△			砂質	外:赤褐色 内:黄茶褐色	外:ナデ丁寧 内:ナデ	HB① J14 V(混貝層) 取106		
	外底-鏝状に 張り出す	6.1 66.2		0.5 1.1	細粒 少量	△		△		△			砂質	外:赤褐色 内:赤褐色	外:ナデ(指) 内:ナデ(ハケ)	HB① J16 V(暗褐色シルト) 取28		
	275	不明	底厚-不明 外底-上げ底	7 44.5	- -	中粒 少量	○					△	砂質	外:灰茶褐色 内:ハカレで不 明	外:ナデより丁寧 内:ハカレで不明	HB②イ L9 V(赤砂層) 取1363		

凡例 (◎=非常に多い ○=多い △=少ない ▲=僅少)



第30图 土器1



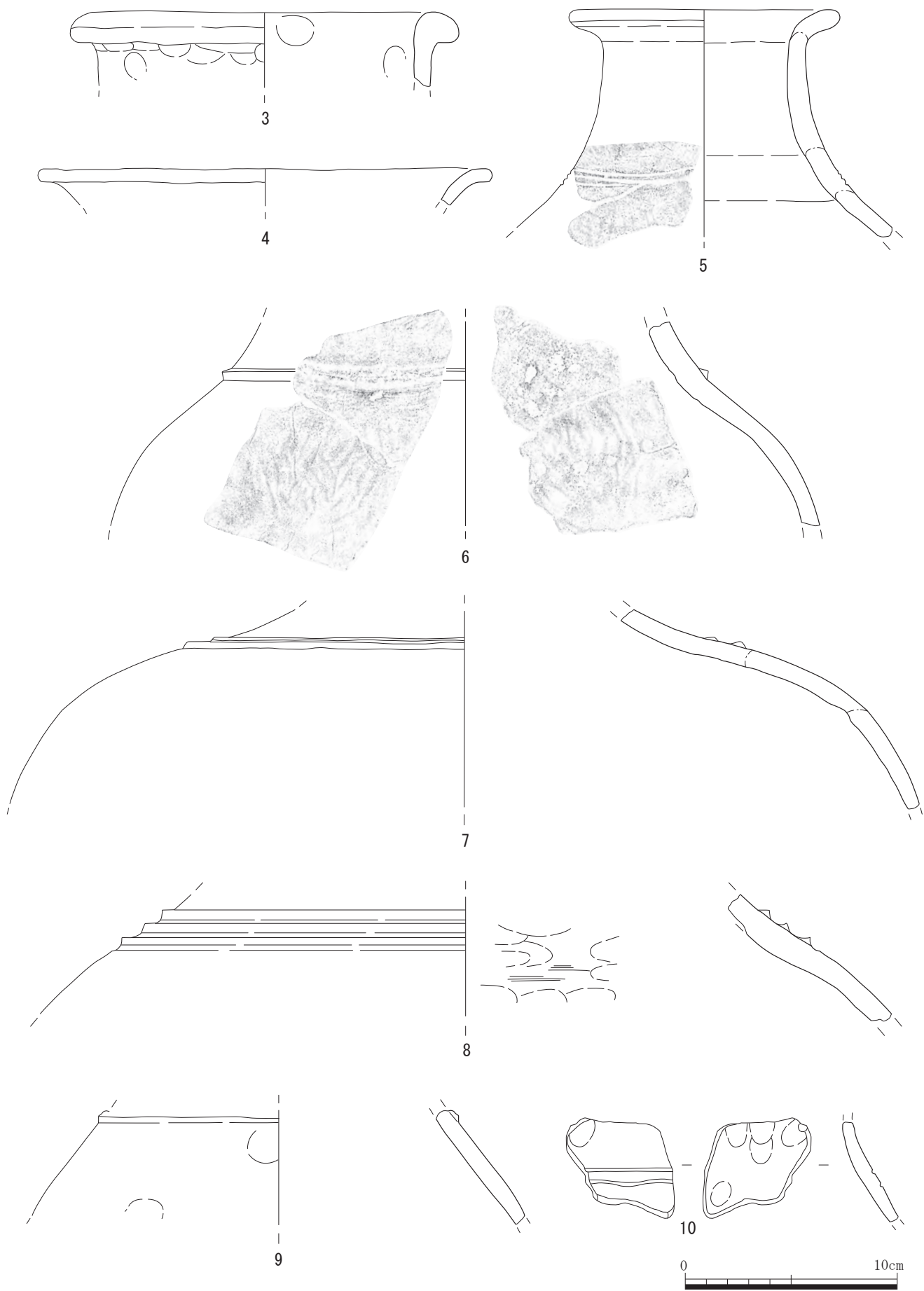
1



2



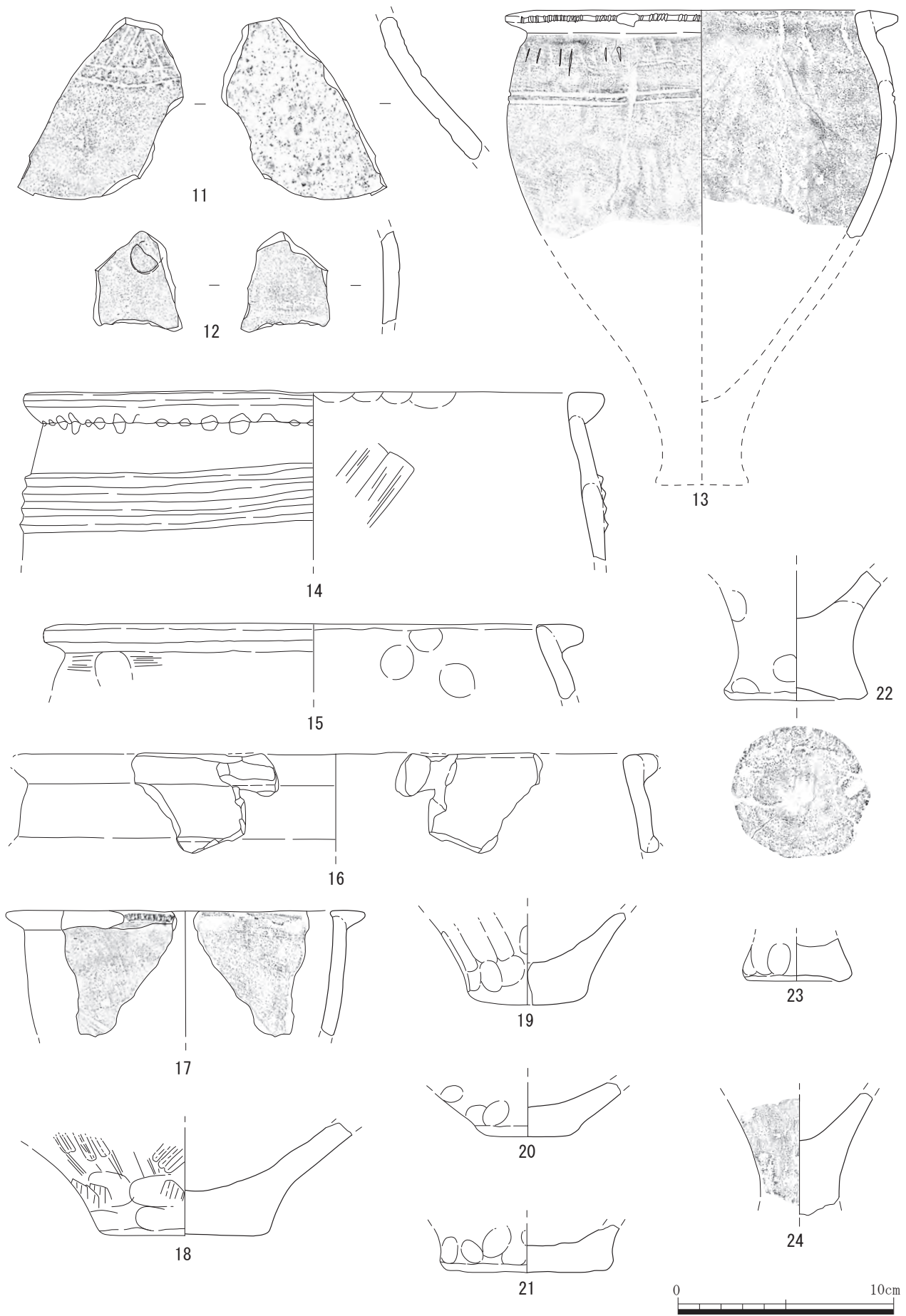
图版 2 土器 1



第31图 土器2



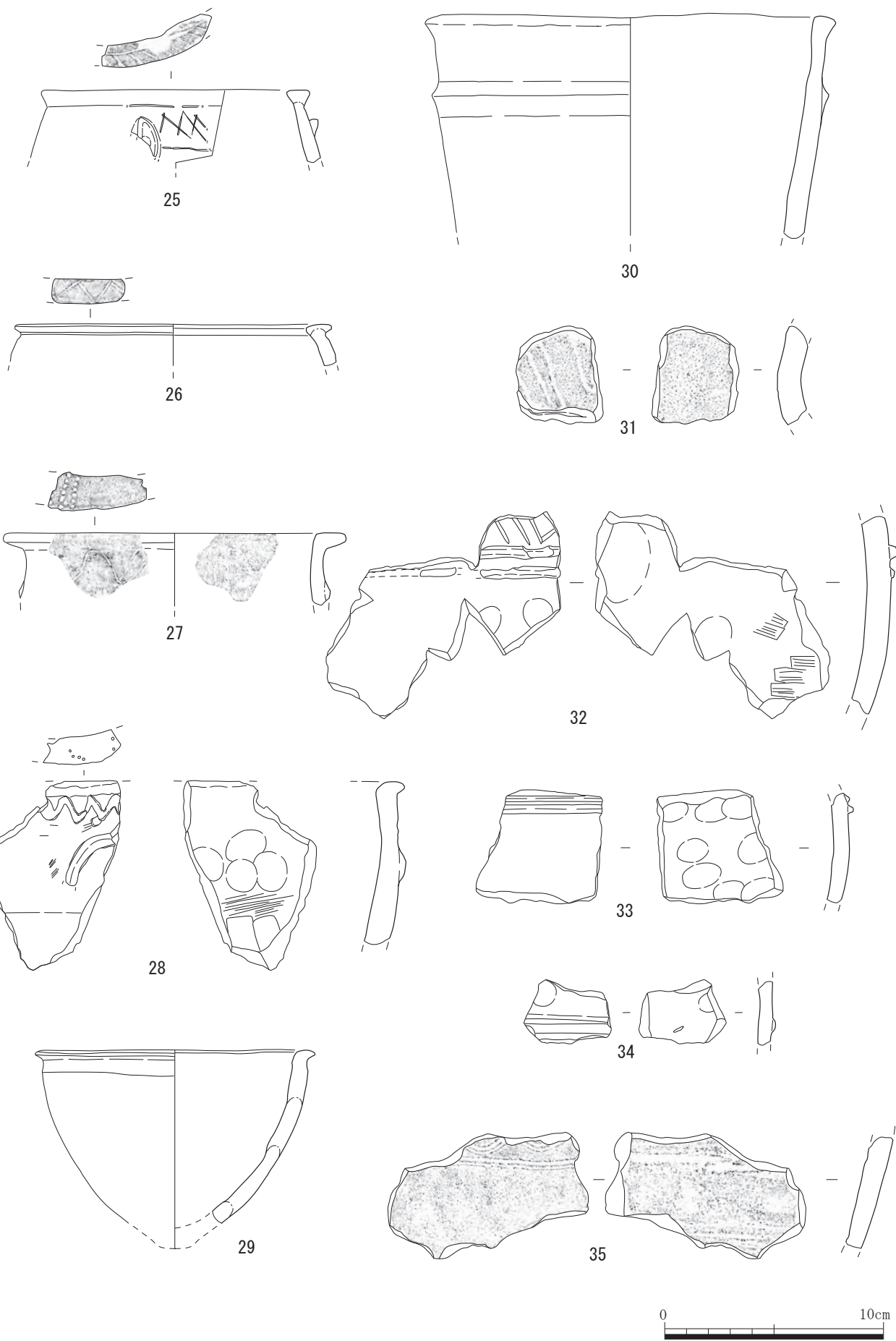
图版3 土器2



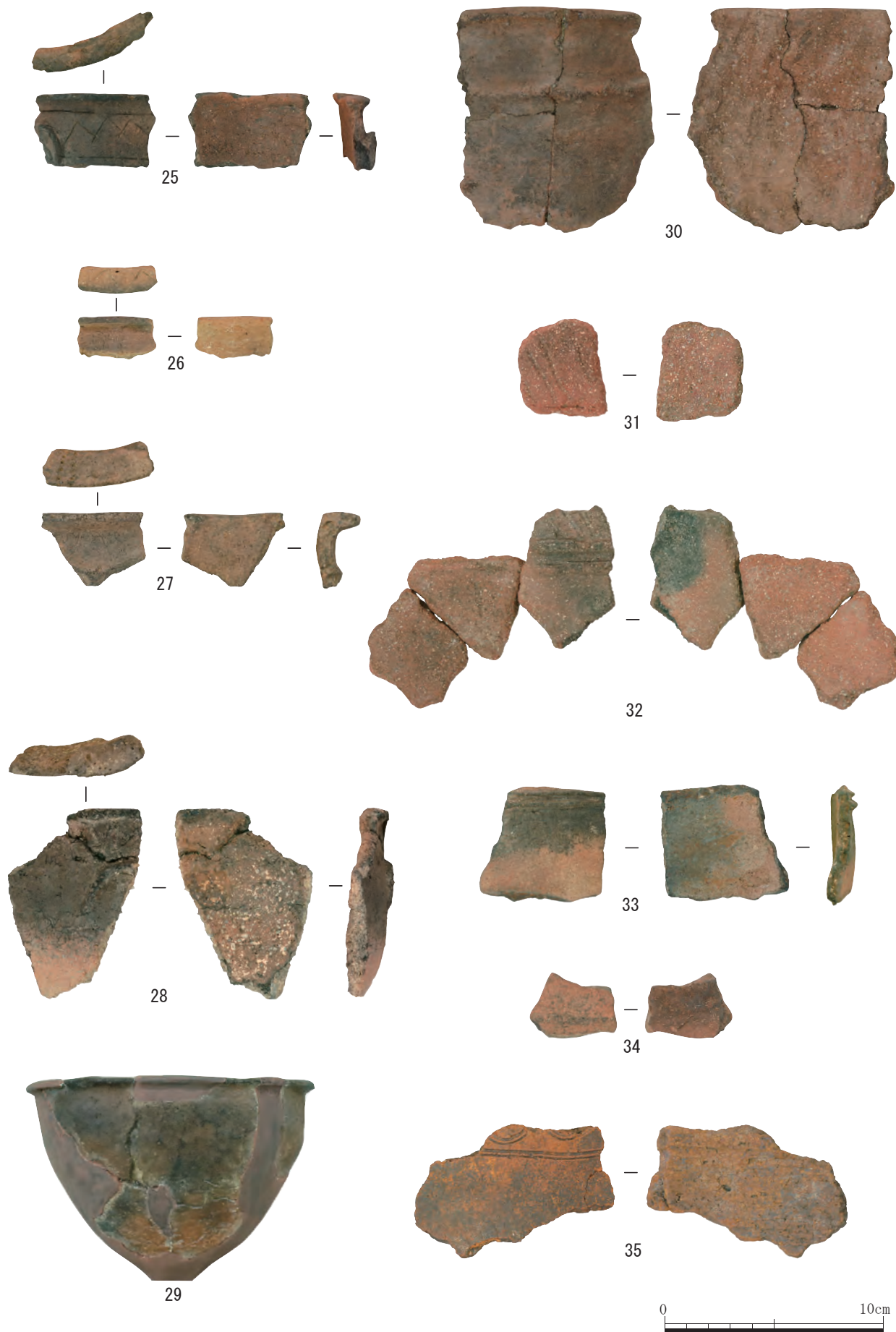
第32图 土器3



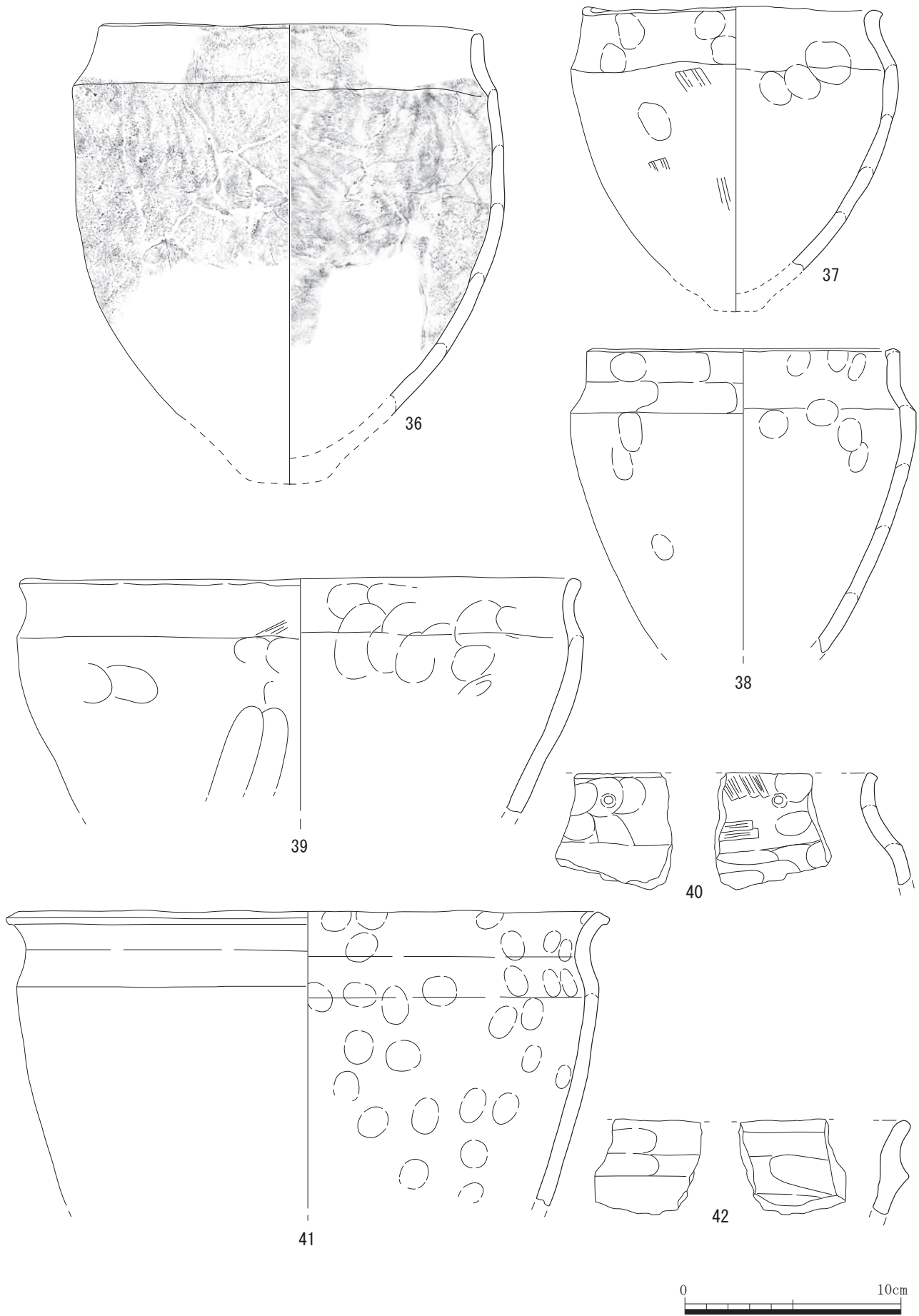
图版 4 土器 3



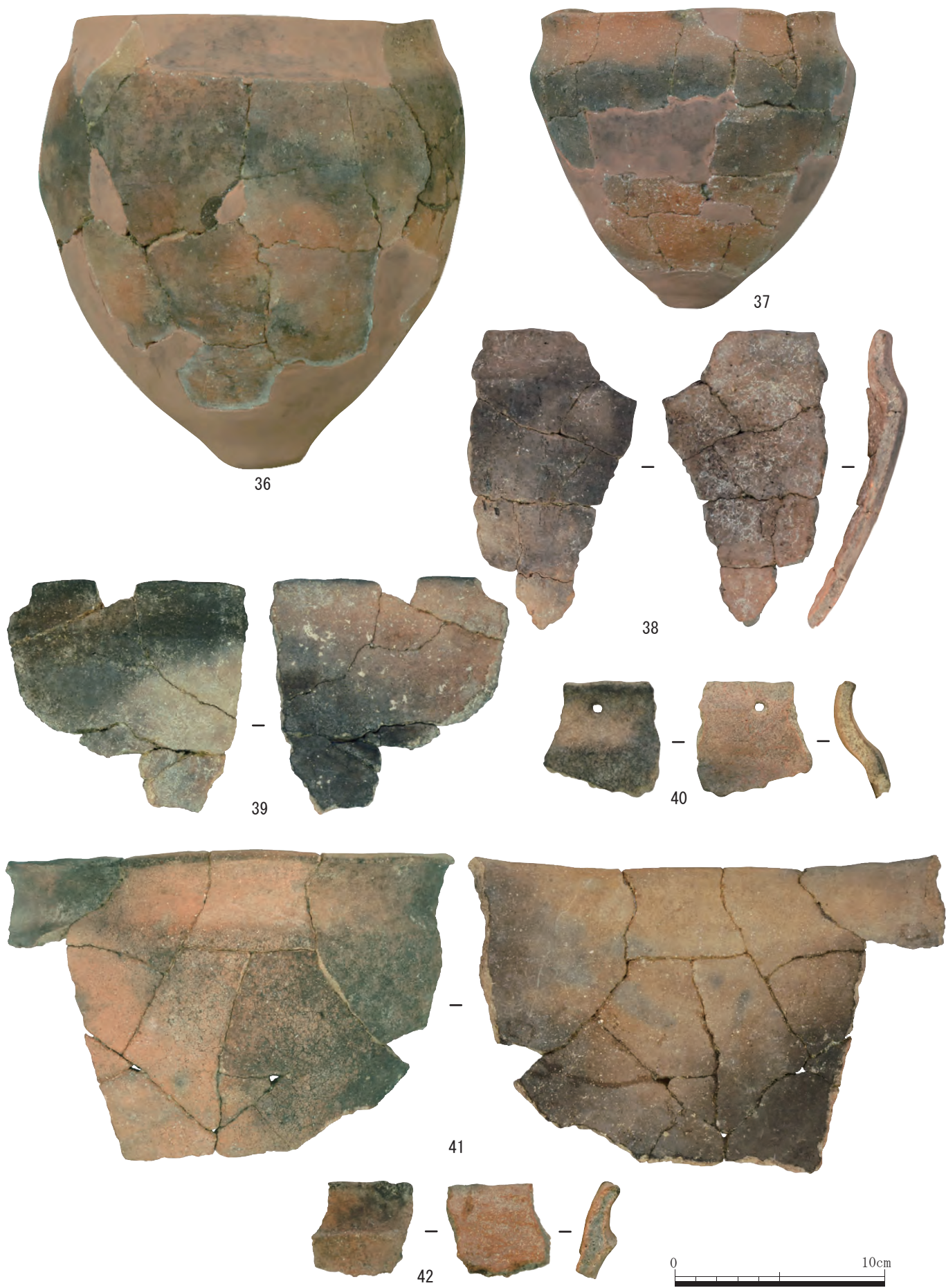
第33图 土器4



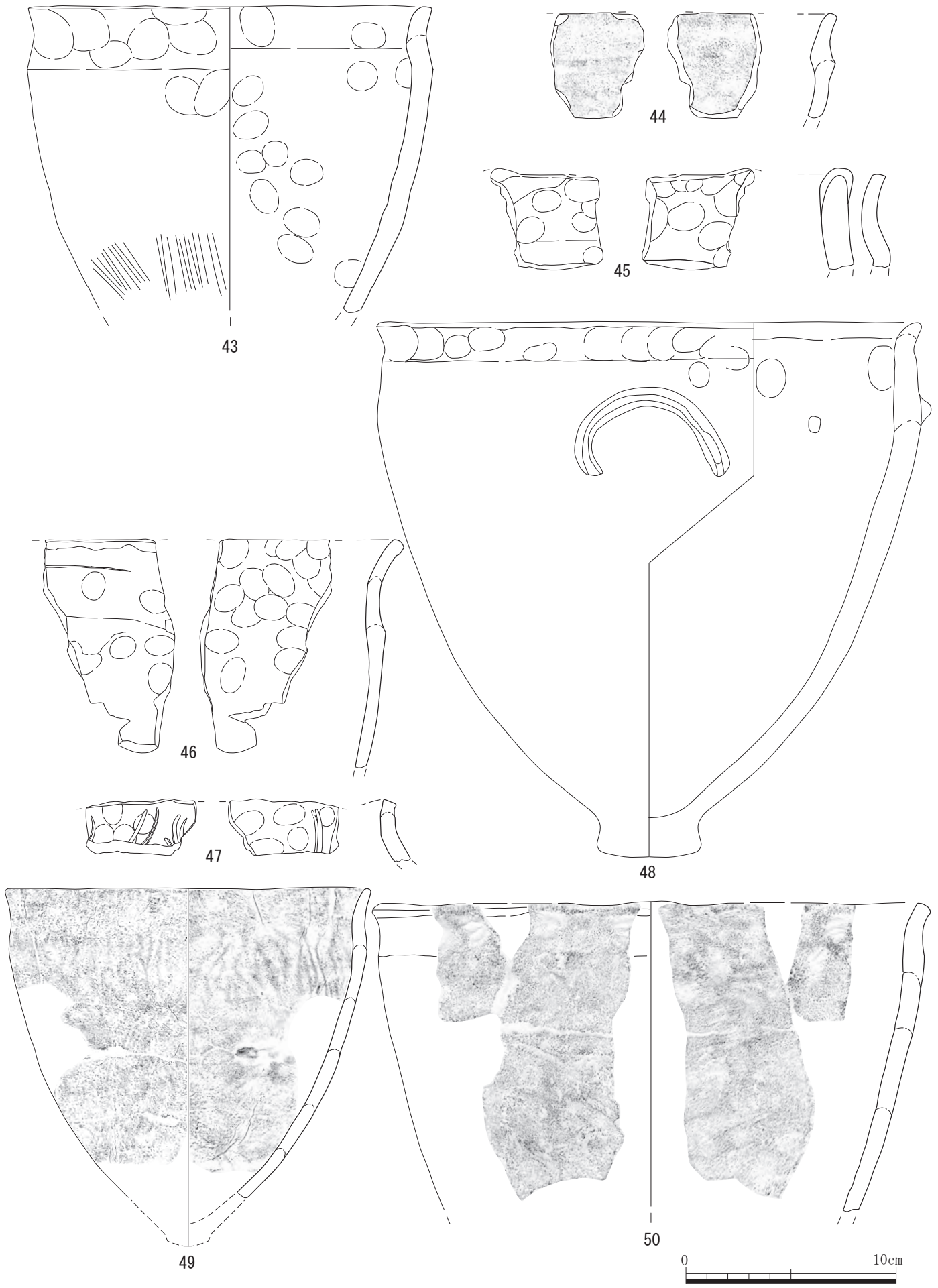
图版 5 土器 4



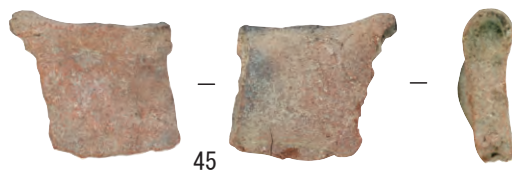
第34图 土器5



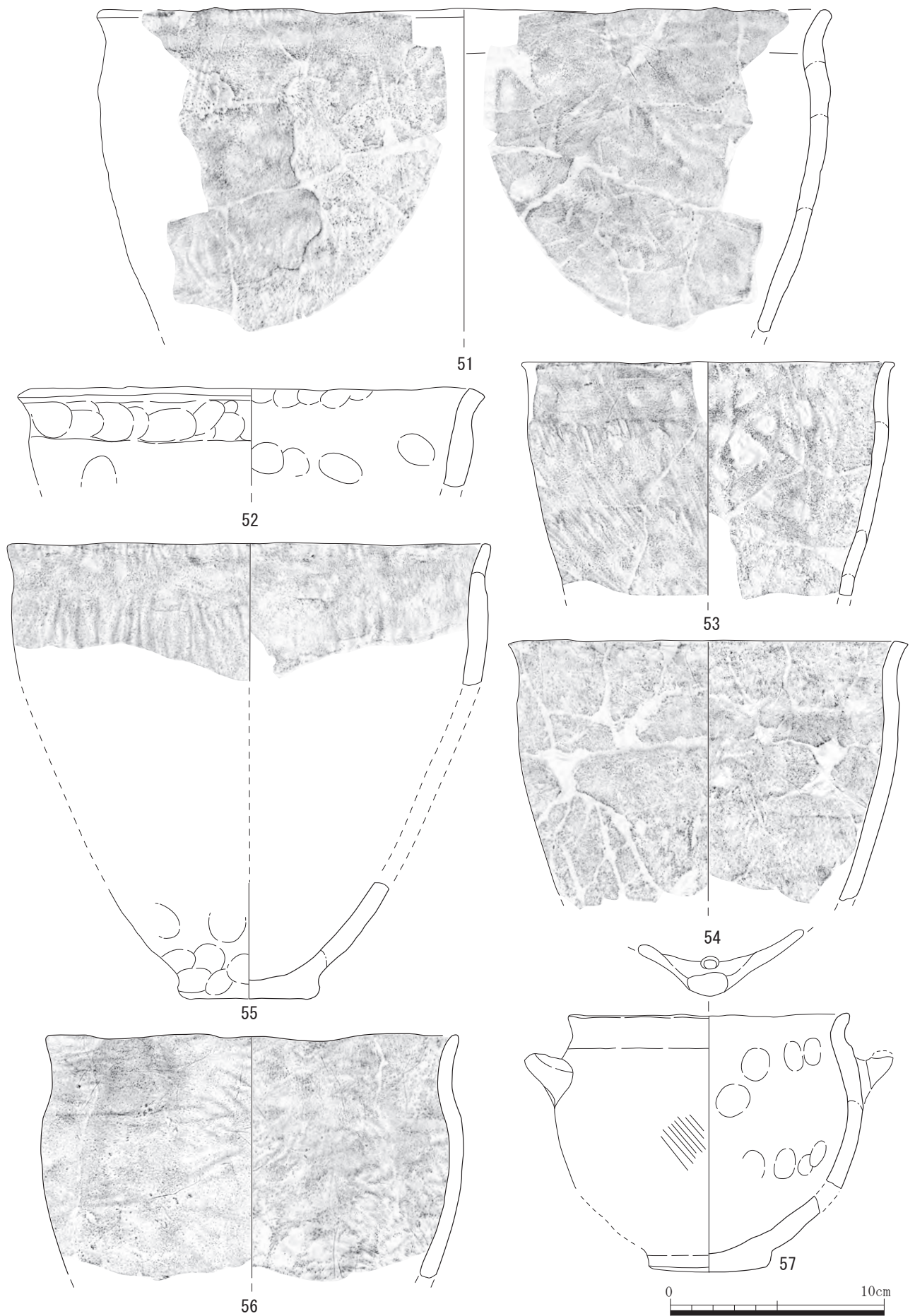
图版 6 土器 5



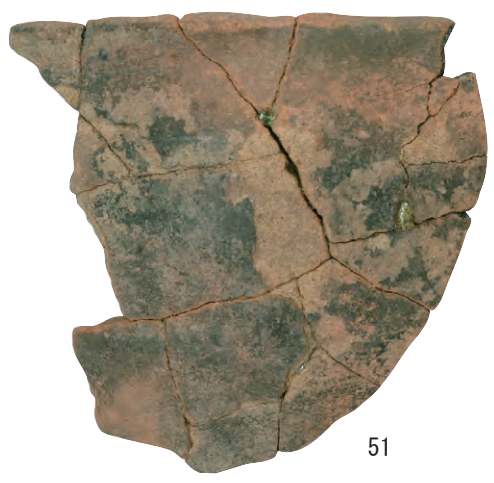
第 35 图 土器 6



图版 7 土器 6



第36图 土器7



51



53



52



54



|



55



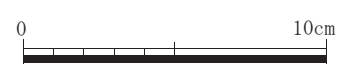
|



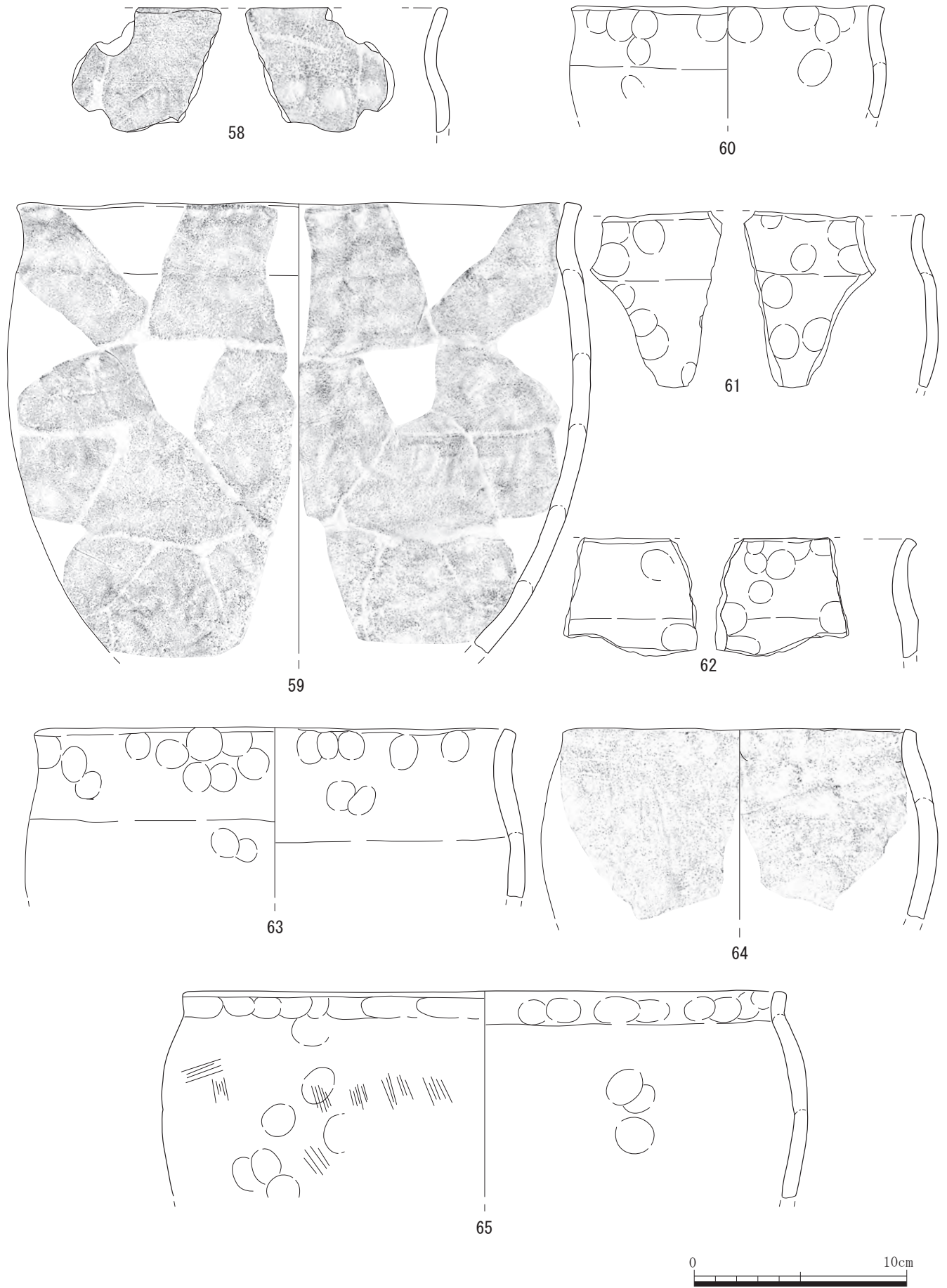
56



57



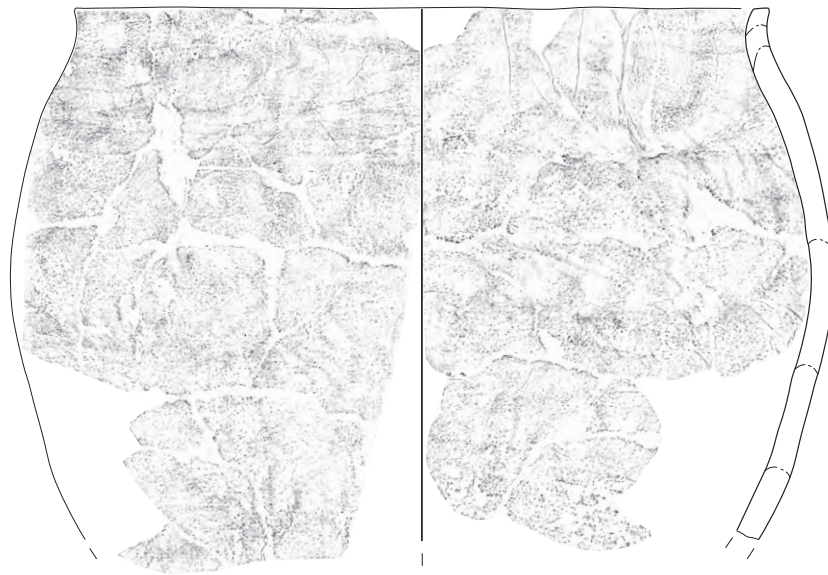
图版 8 土器 7



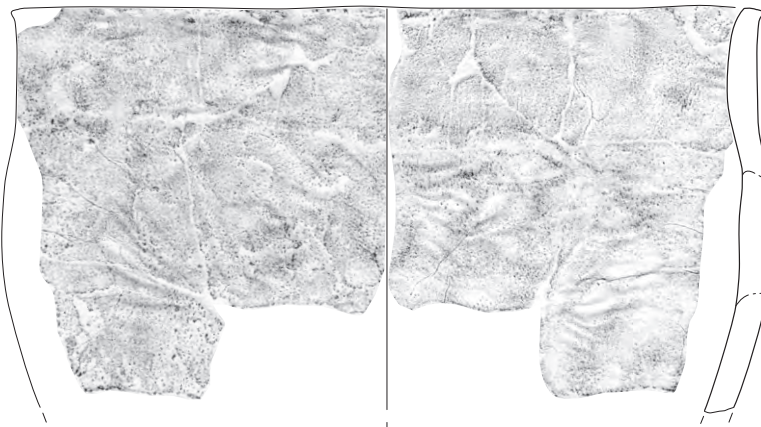
第 37 图 土器 8



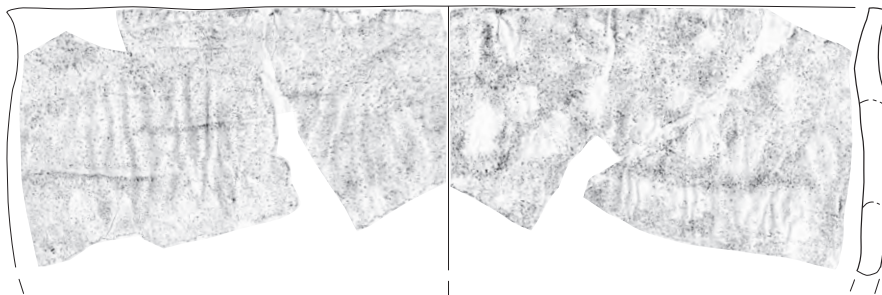
图版 9 土器 8



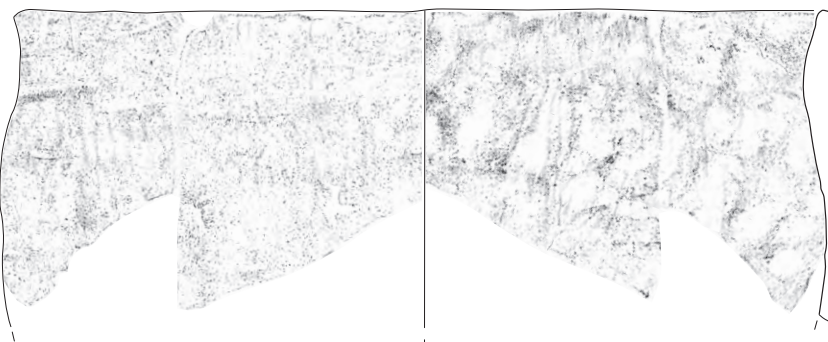
66



67



68



69



第38图 土器9



66



67



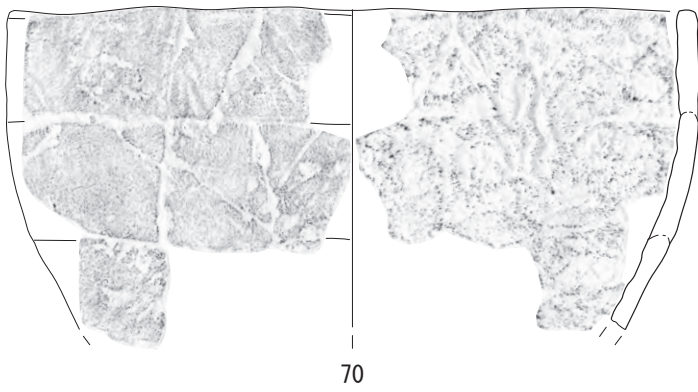
68



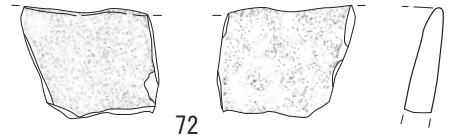
69



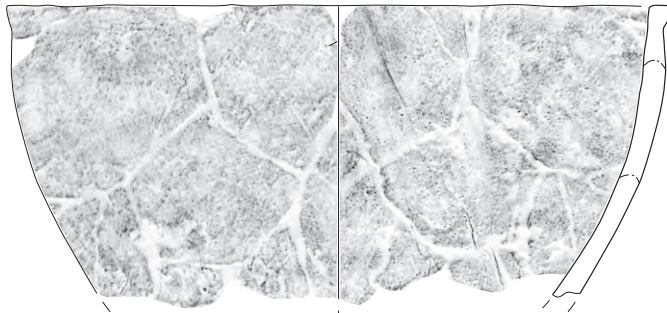
图版 10 土器 9



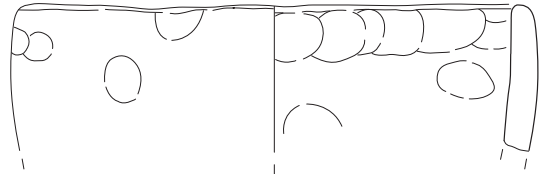
70



72



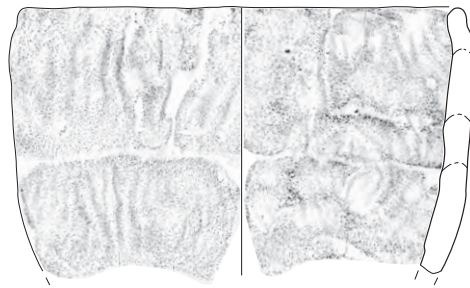
71



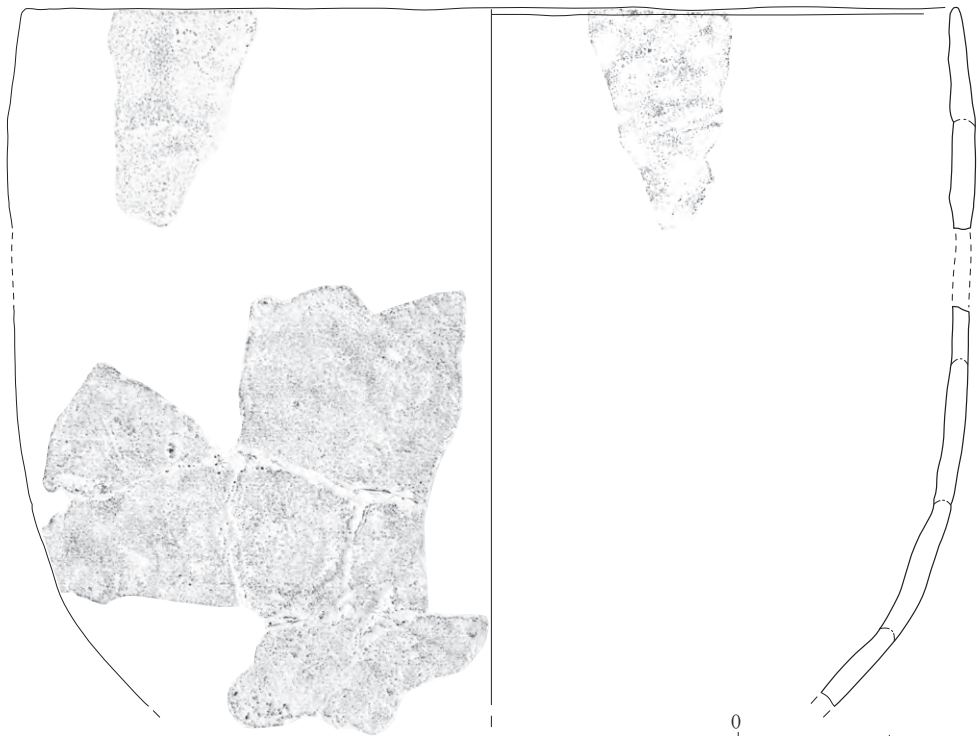
73



74



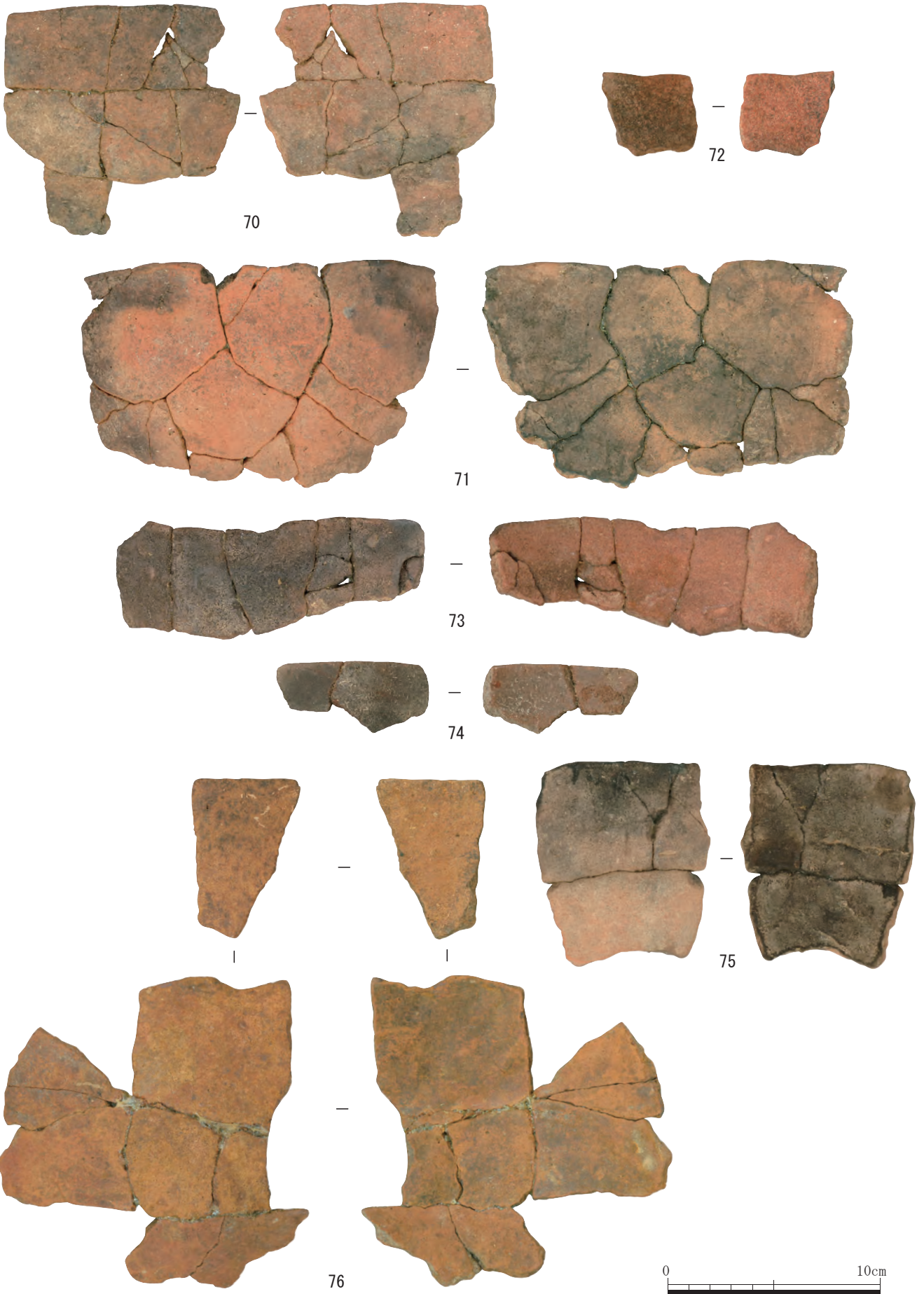
75



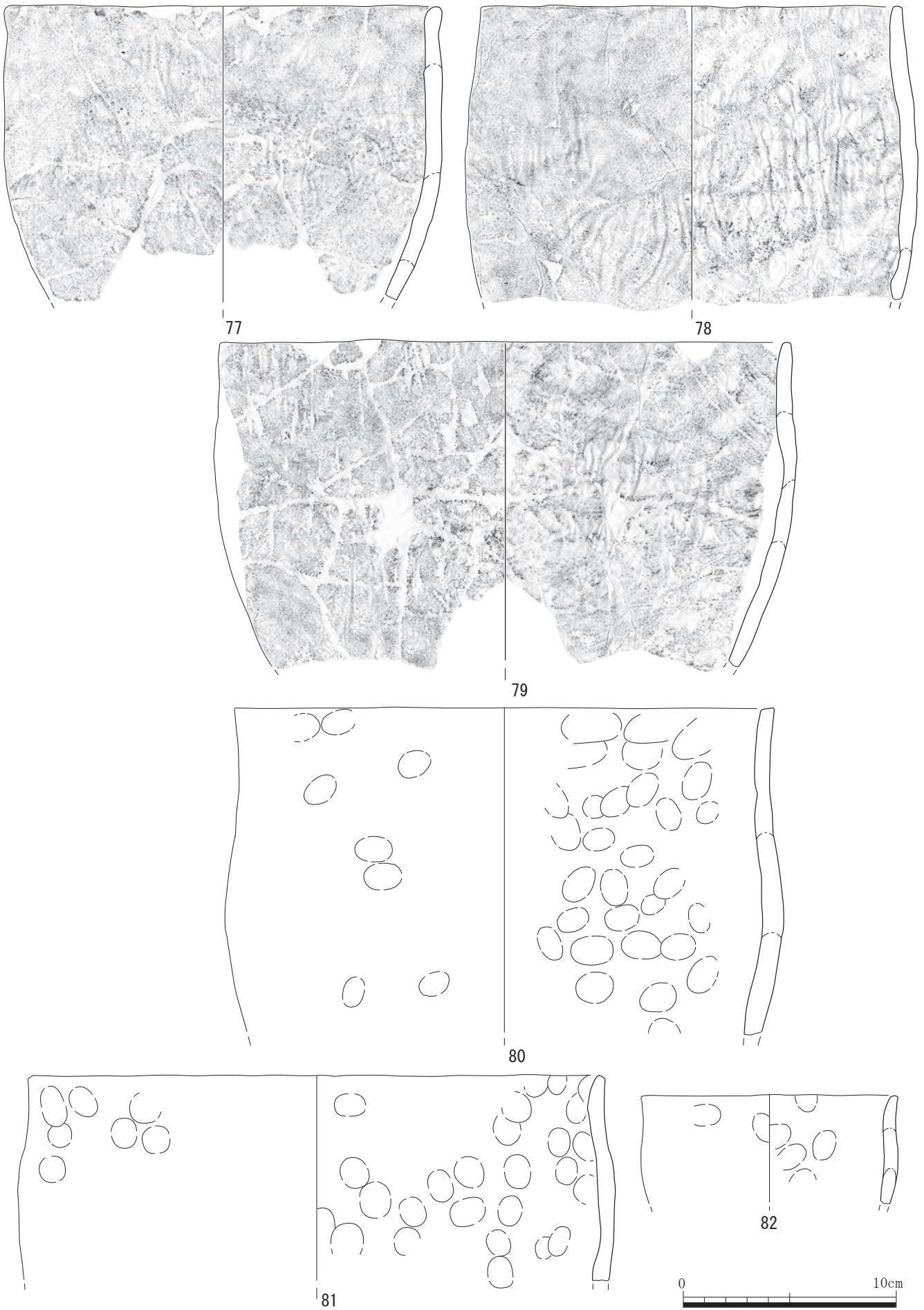
76



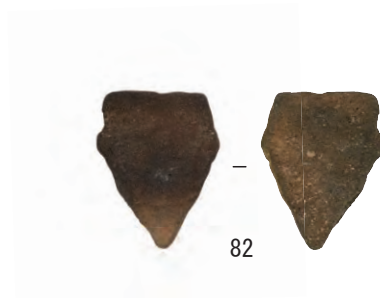
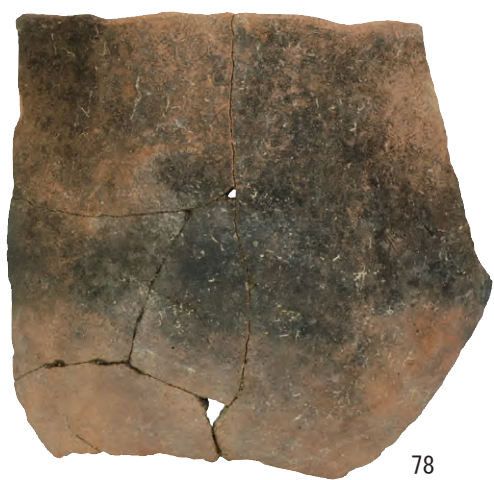
第39図 土器10



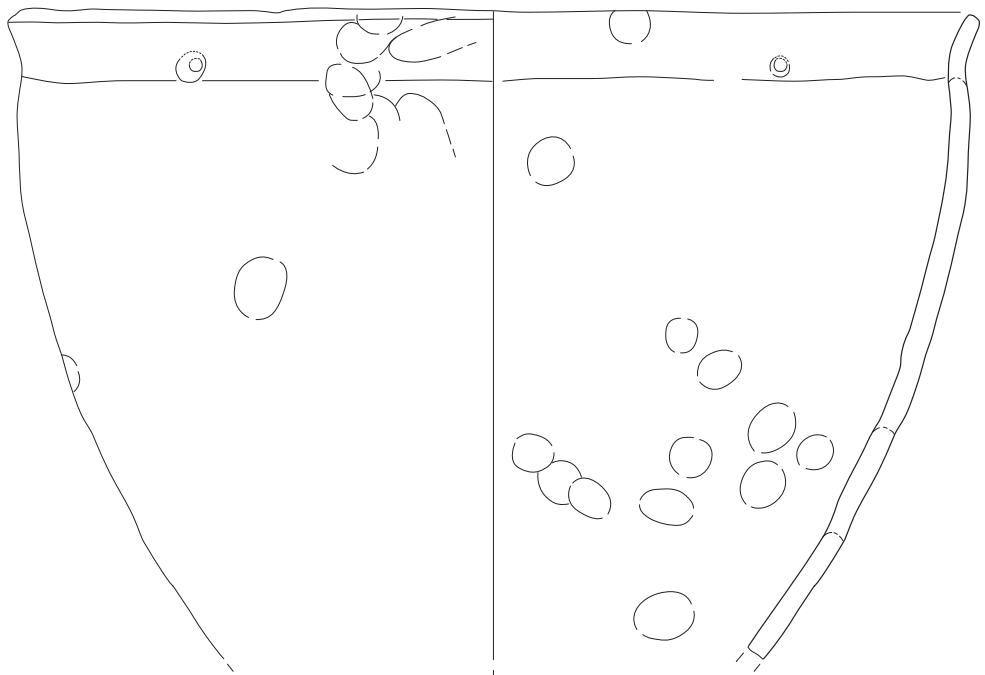
图版 11 土器 10



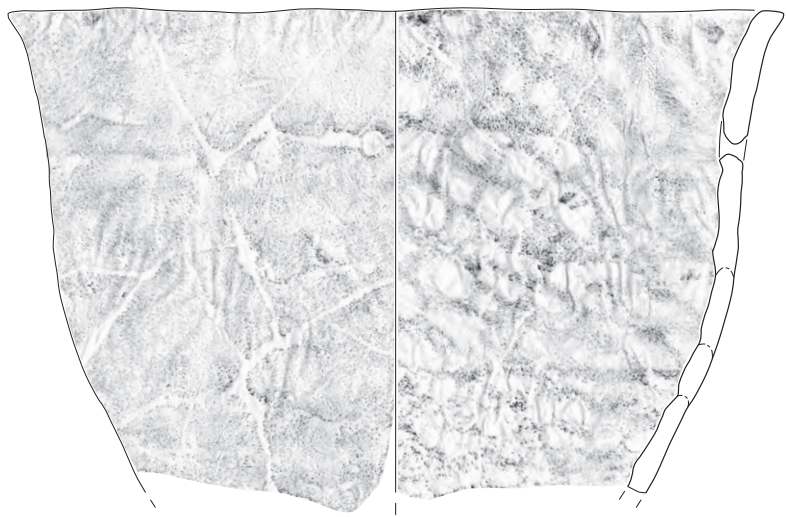
第40图 土器11



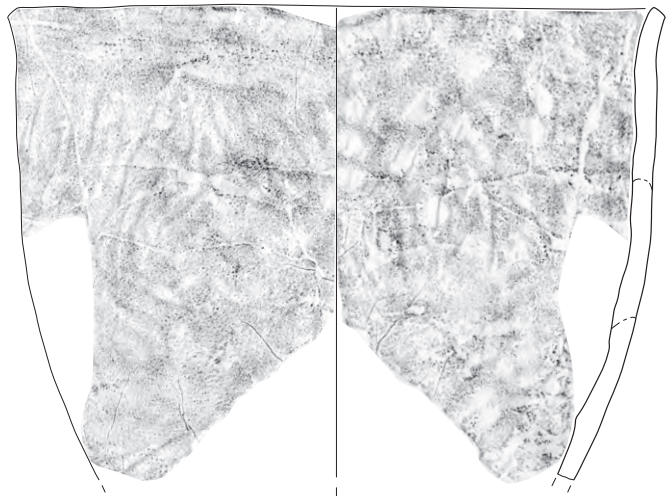
图版 12 土器 11



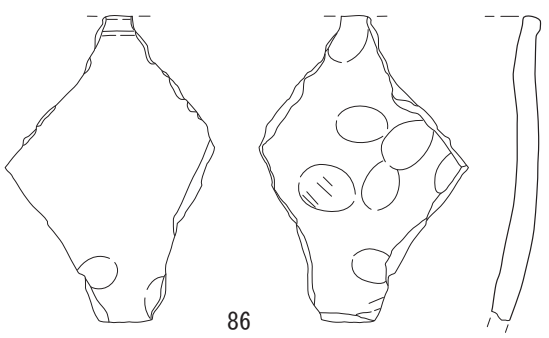
83



84



85



86



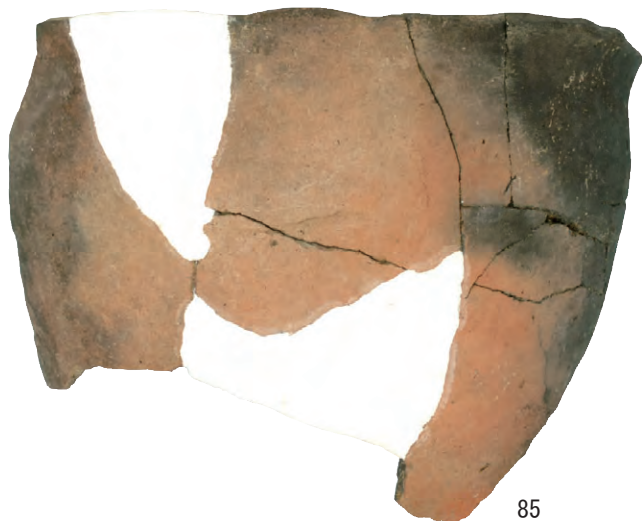
第41図 土器12



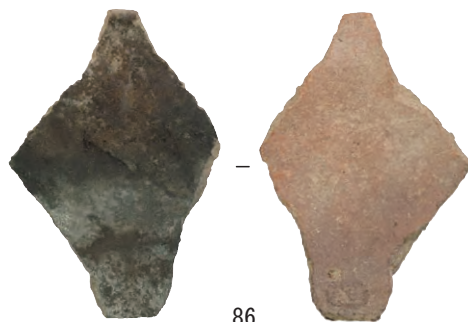
83



84



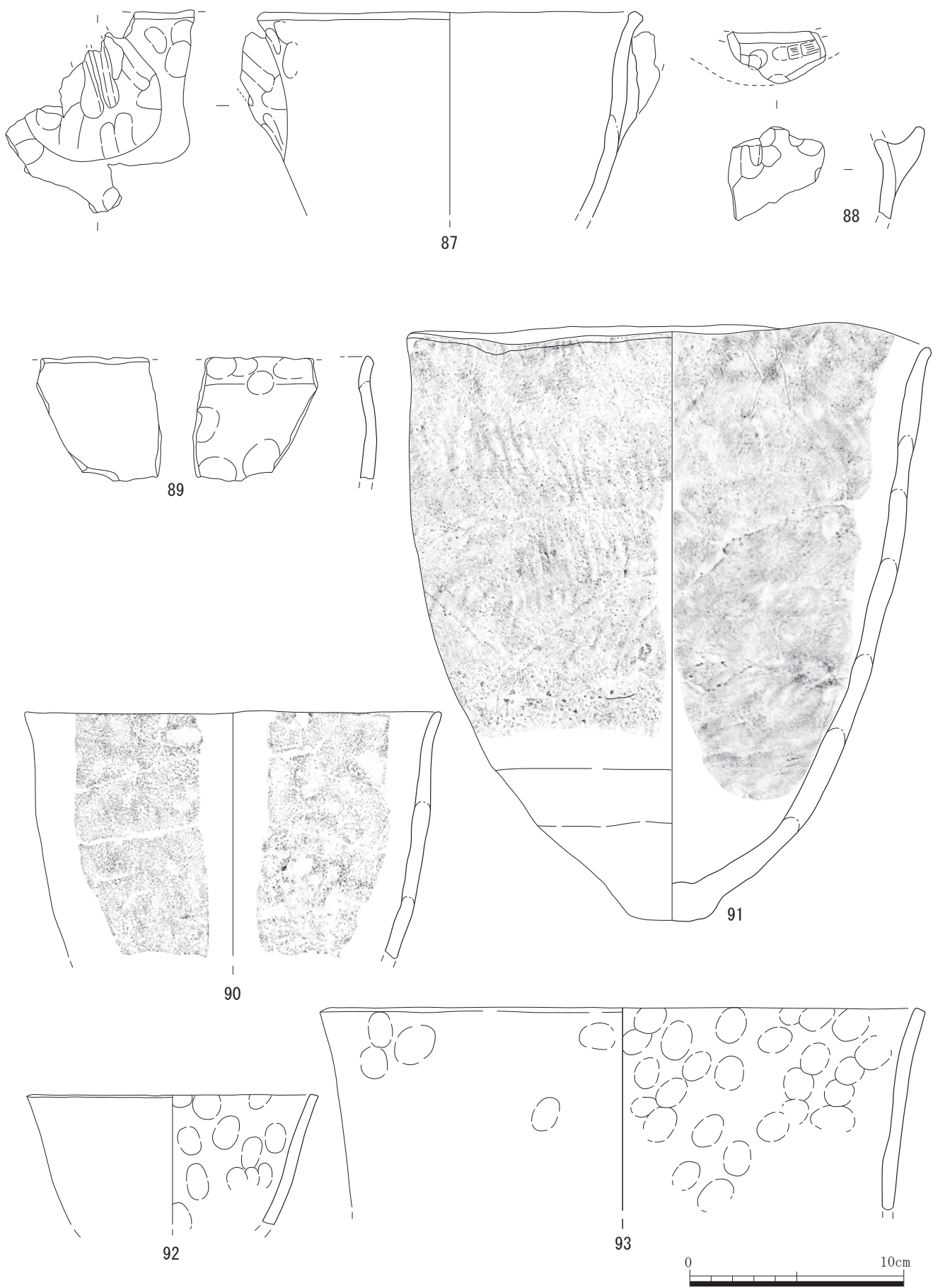
85



86



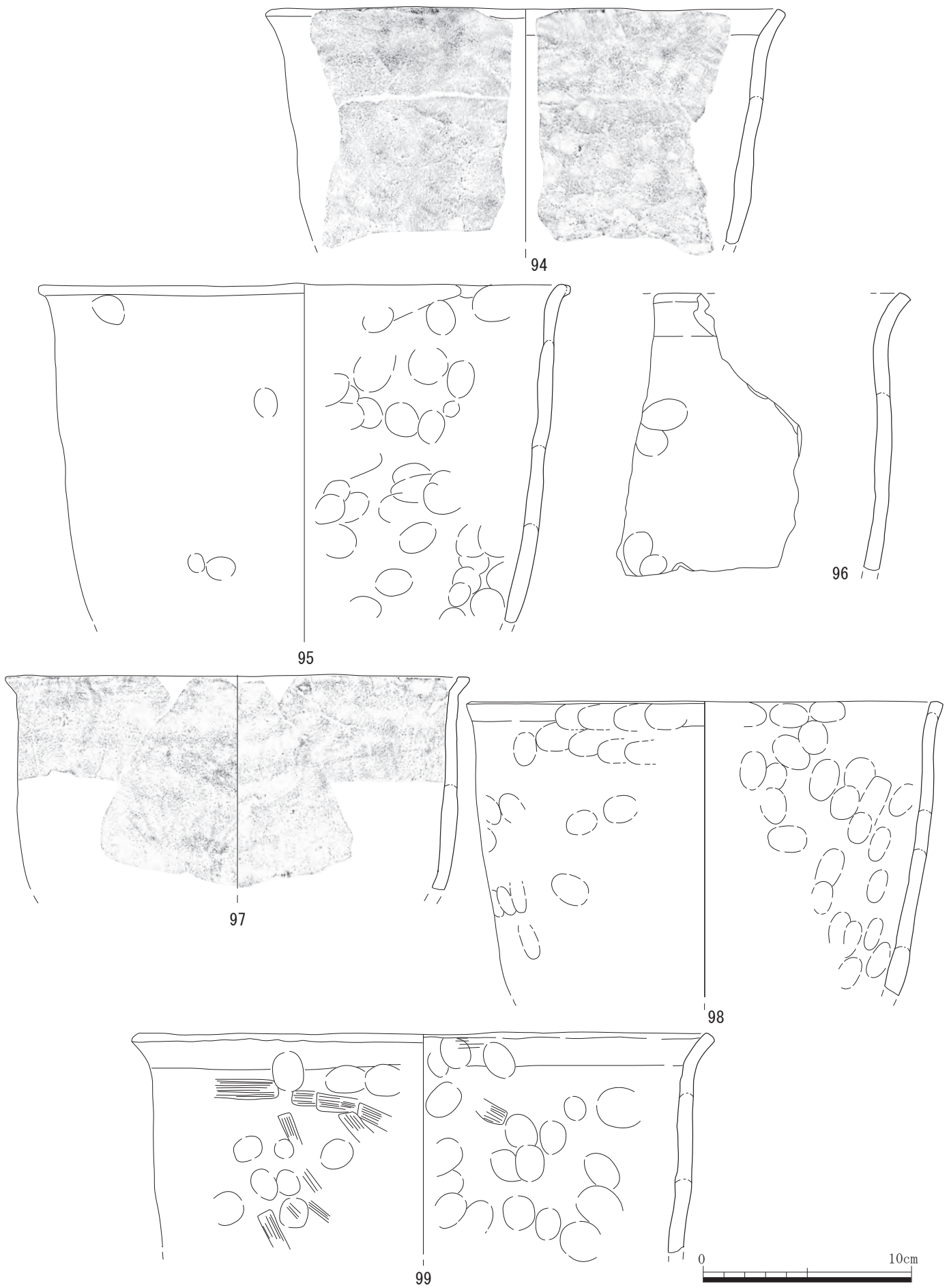
图版 13 土器 12



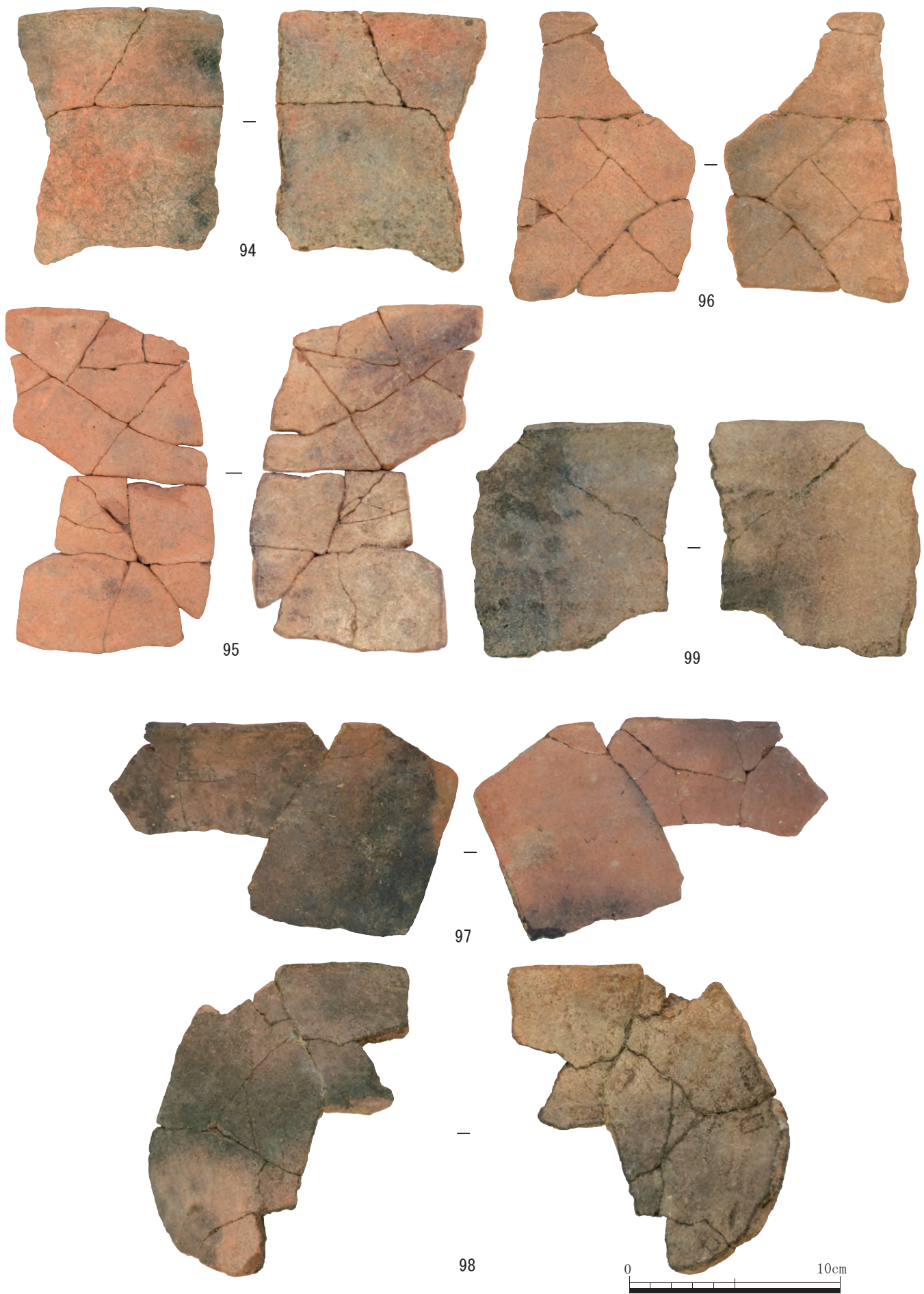
第42图 土器 13



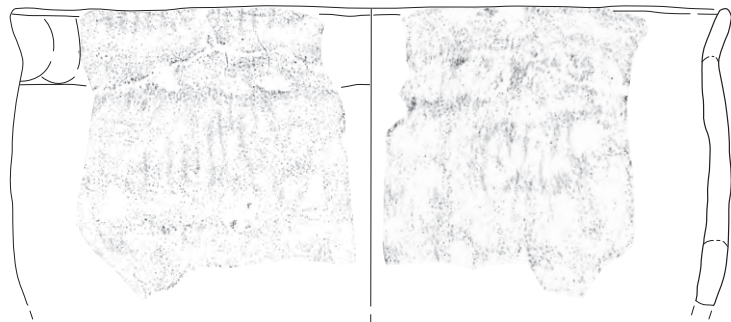
图版 14 土器 13



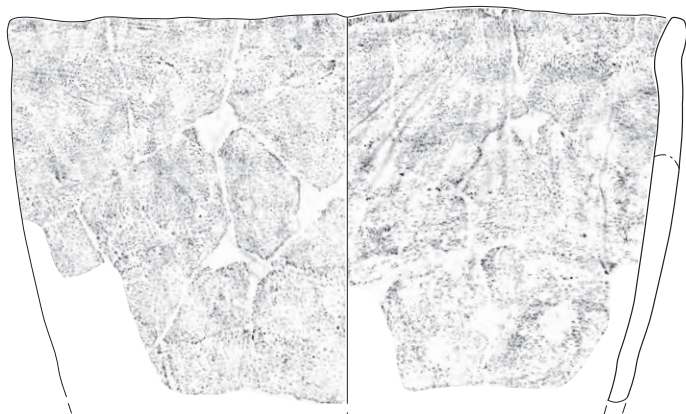
第43图 土器14



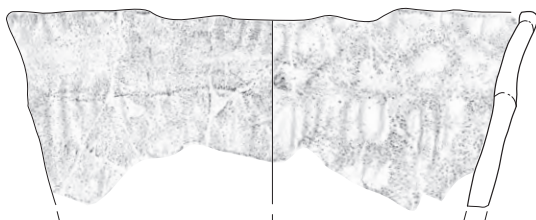
图版 15 土器 14



100



101



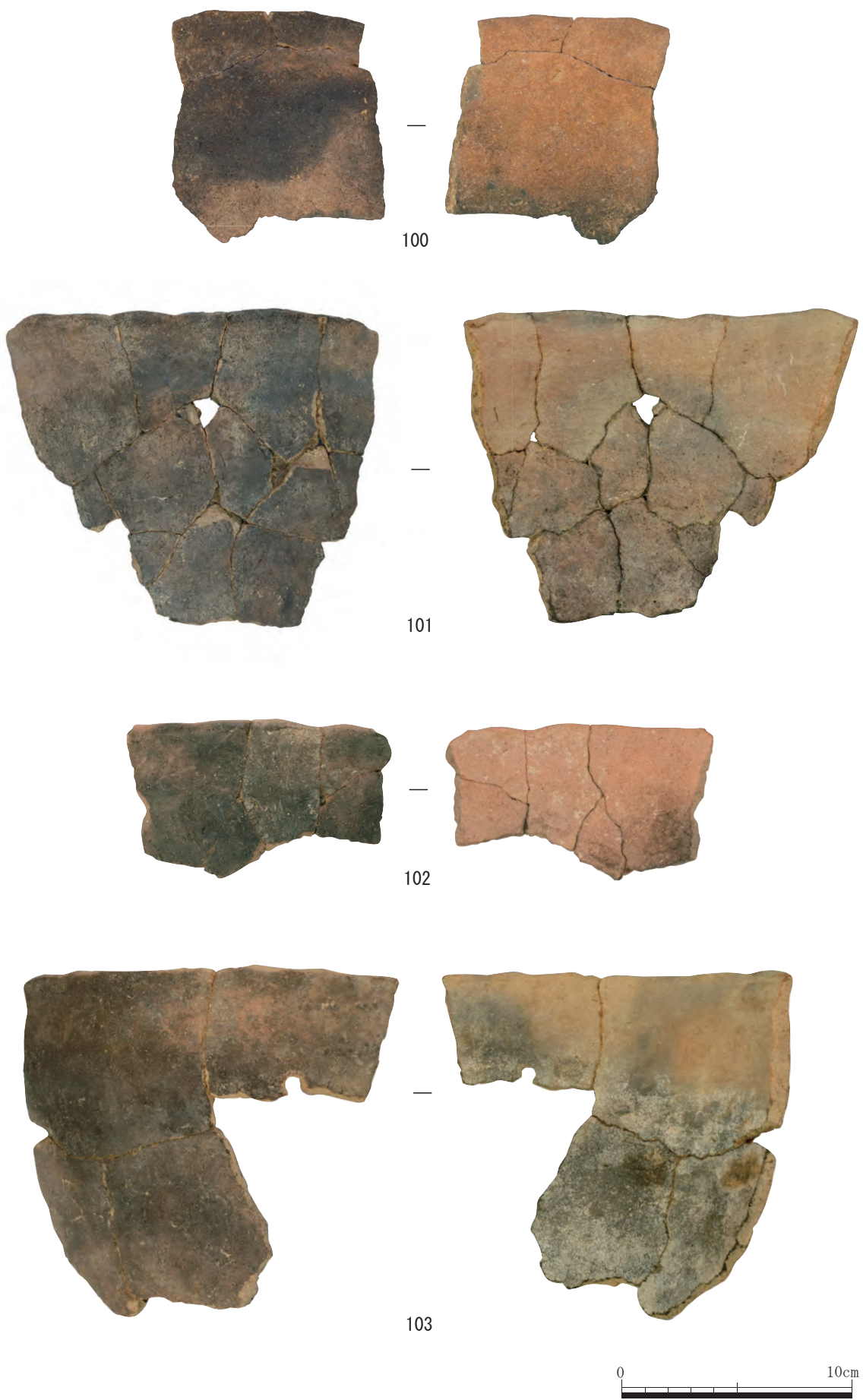
102



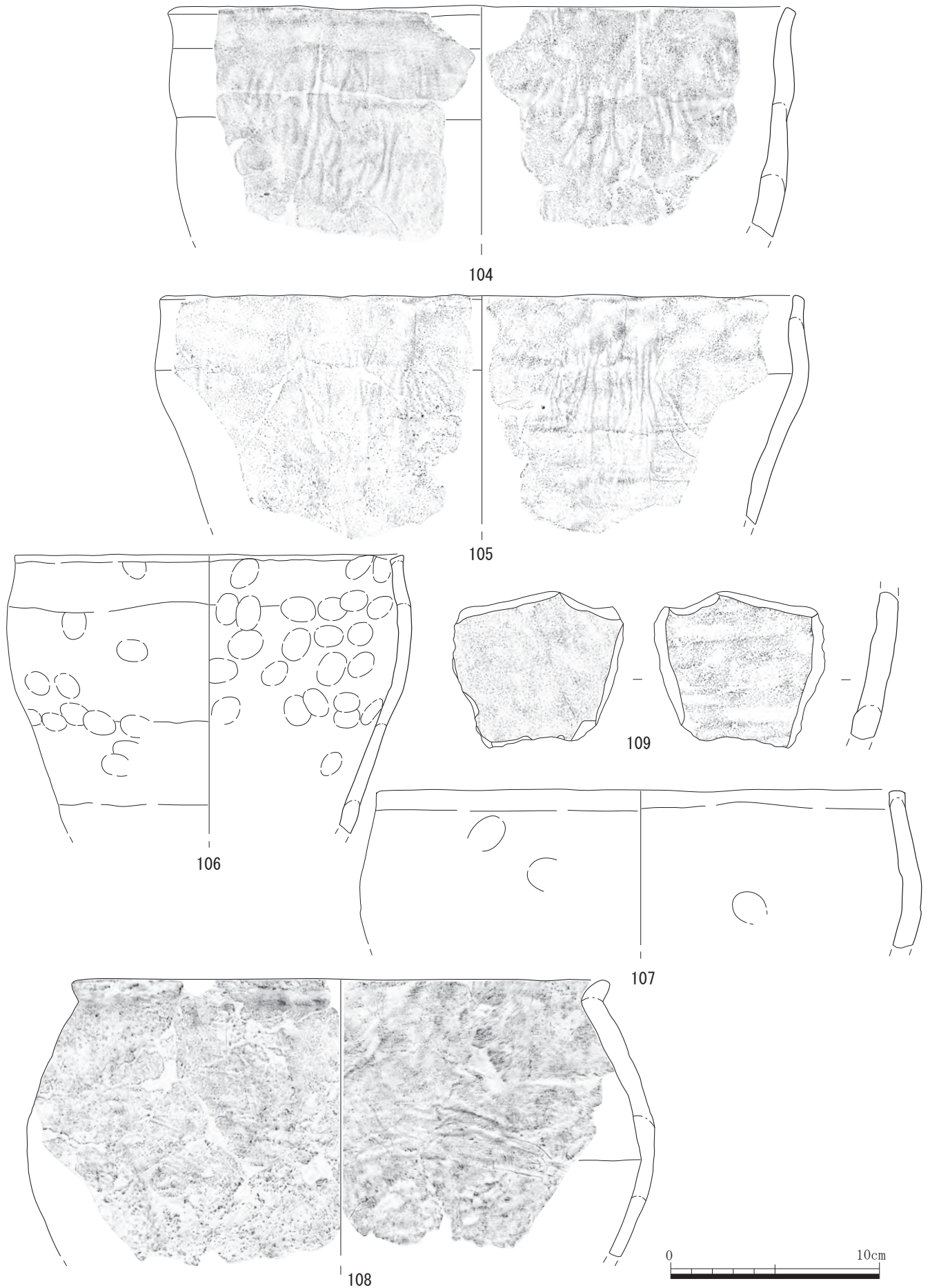
103



第44图 土器 15



图版 16 土器 15



第45図 土器 16



104



105



106



107



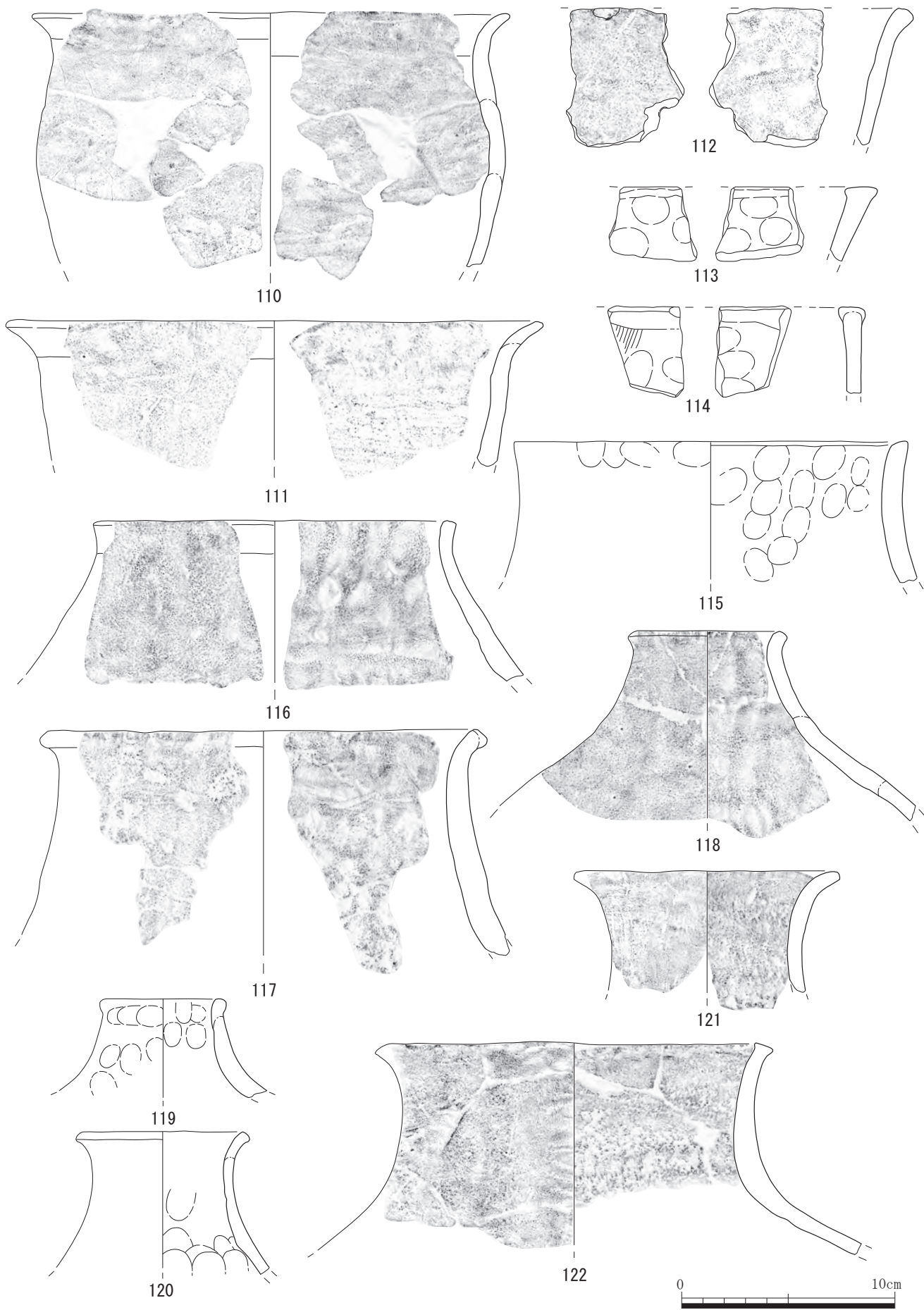
109



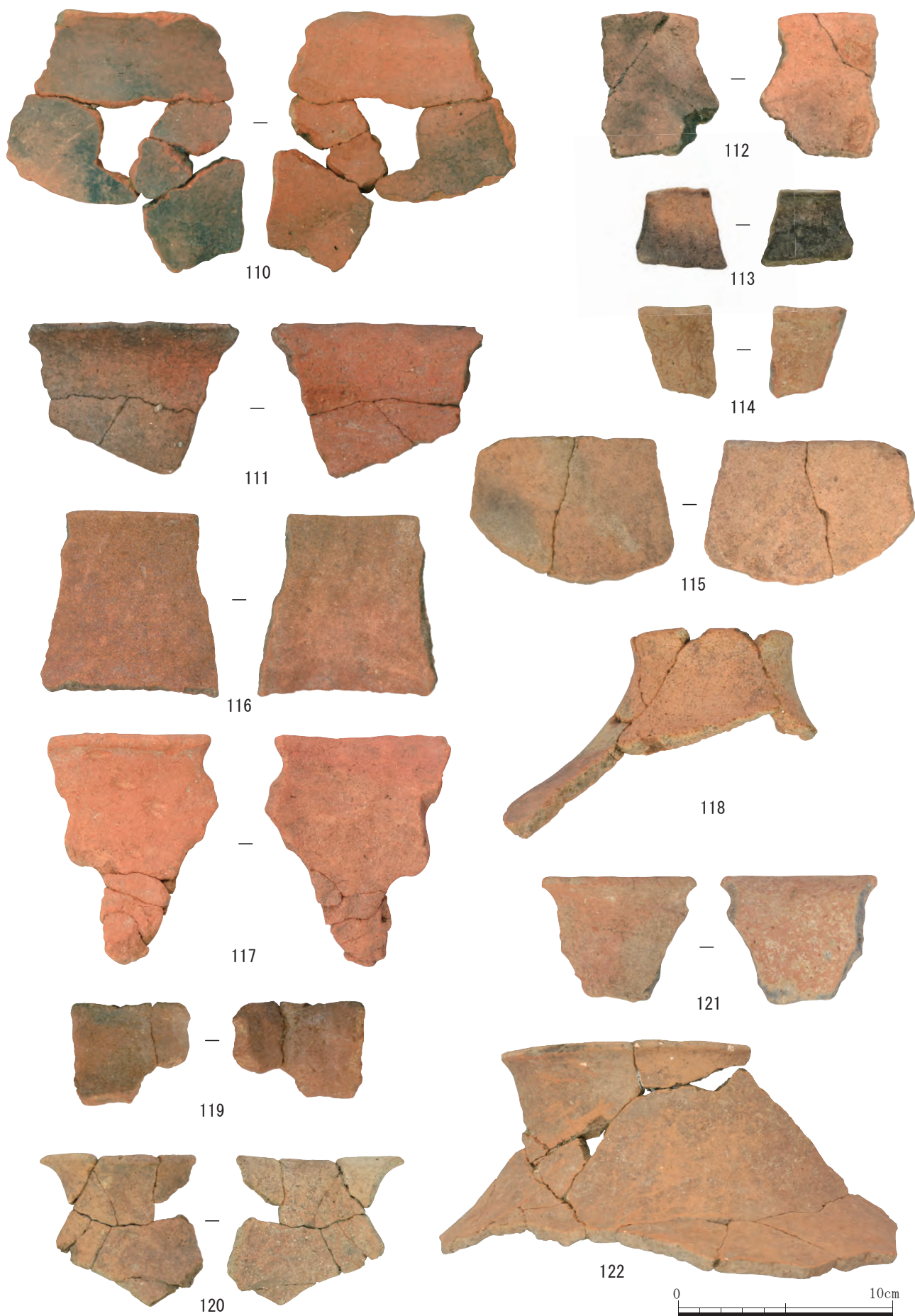
108



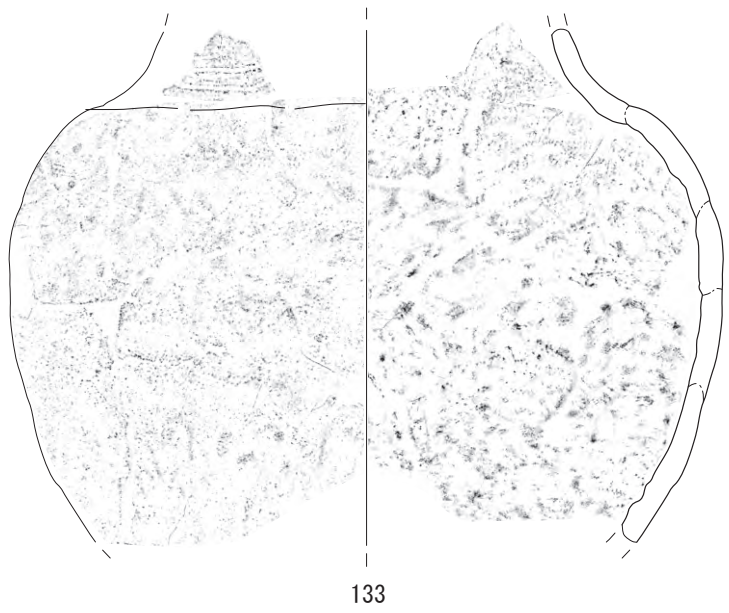
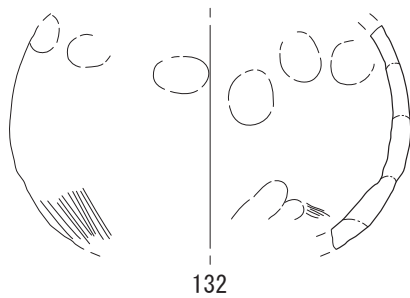
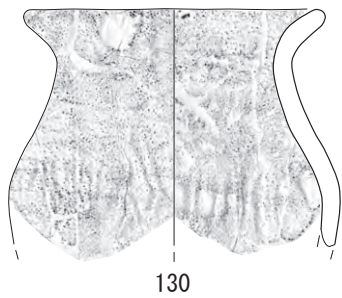
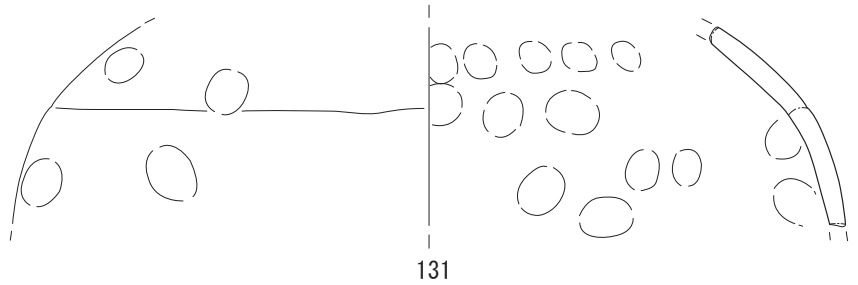
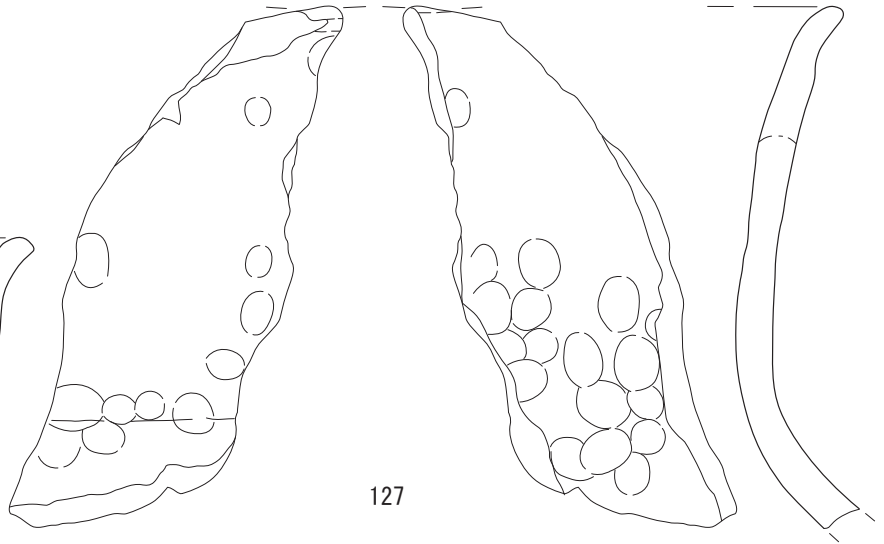
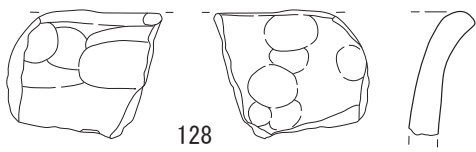
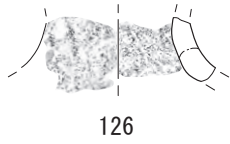
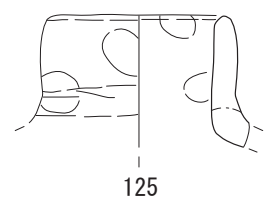
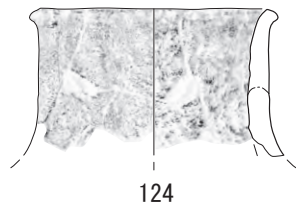
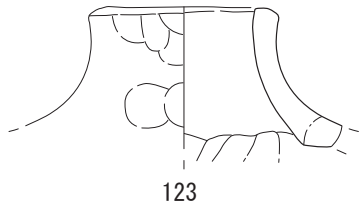
图版 17 土器 16



第46图 土器 17



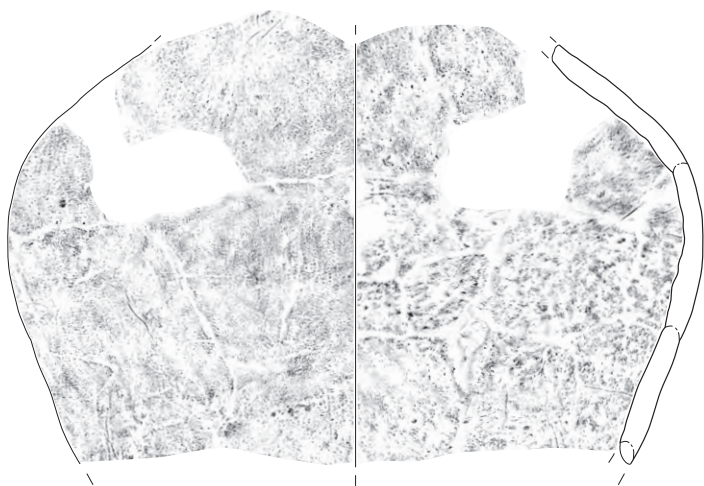
图版 18 土器 17



第47图 土器 18



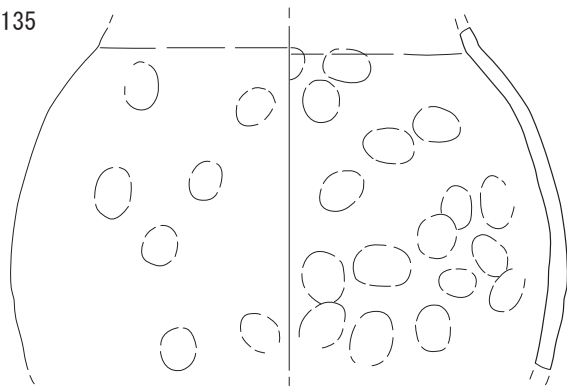
图版 19 土器 18



134



135



136



第48图 土器 19



133



134



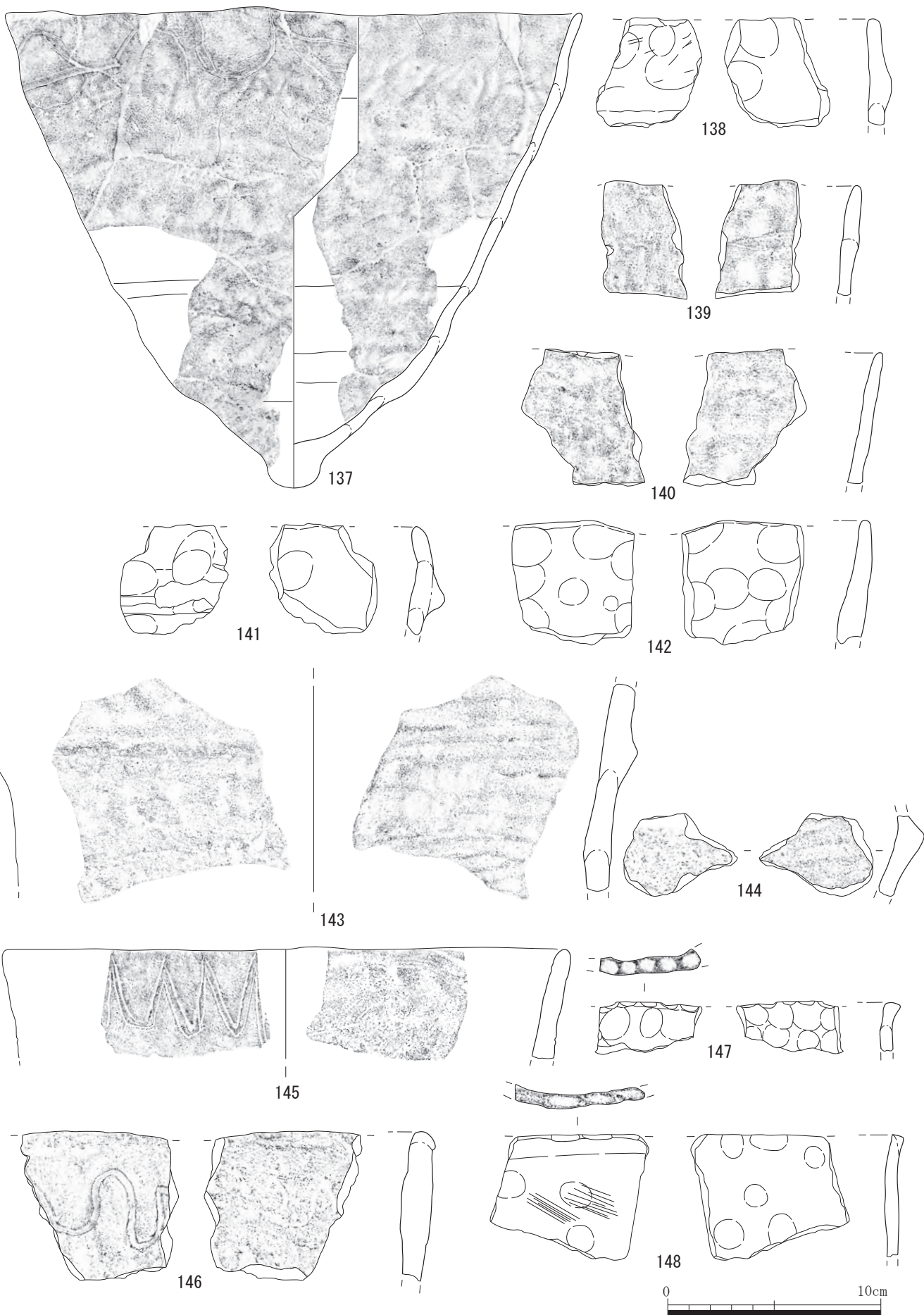
135



136



图版 20 土器 19



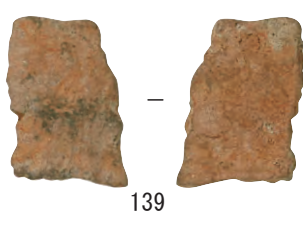
第 49 图 土器 20



137



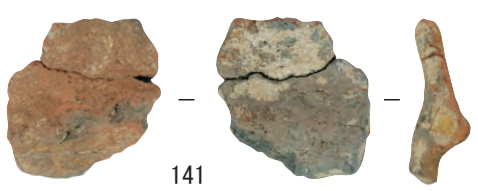
138



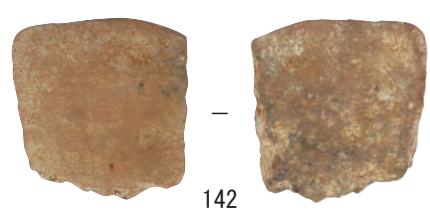
139



140



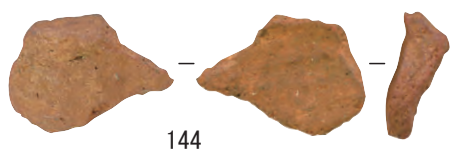
141



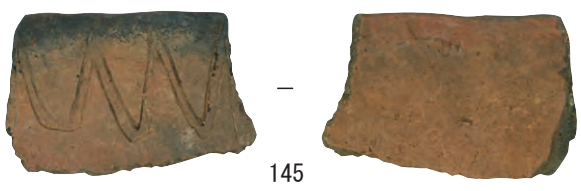
142



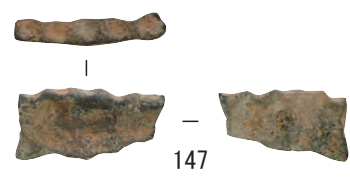
143



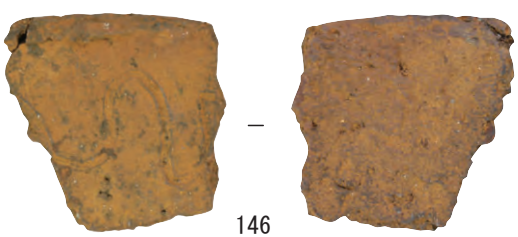
144



145



147



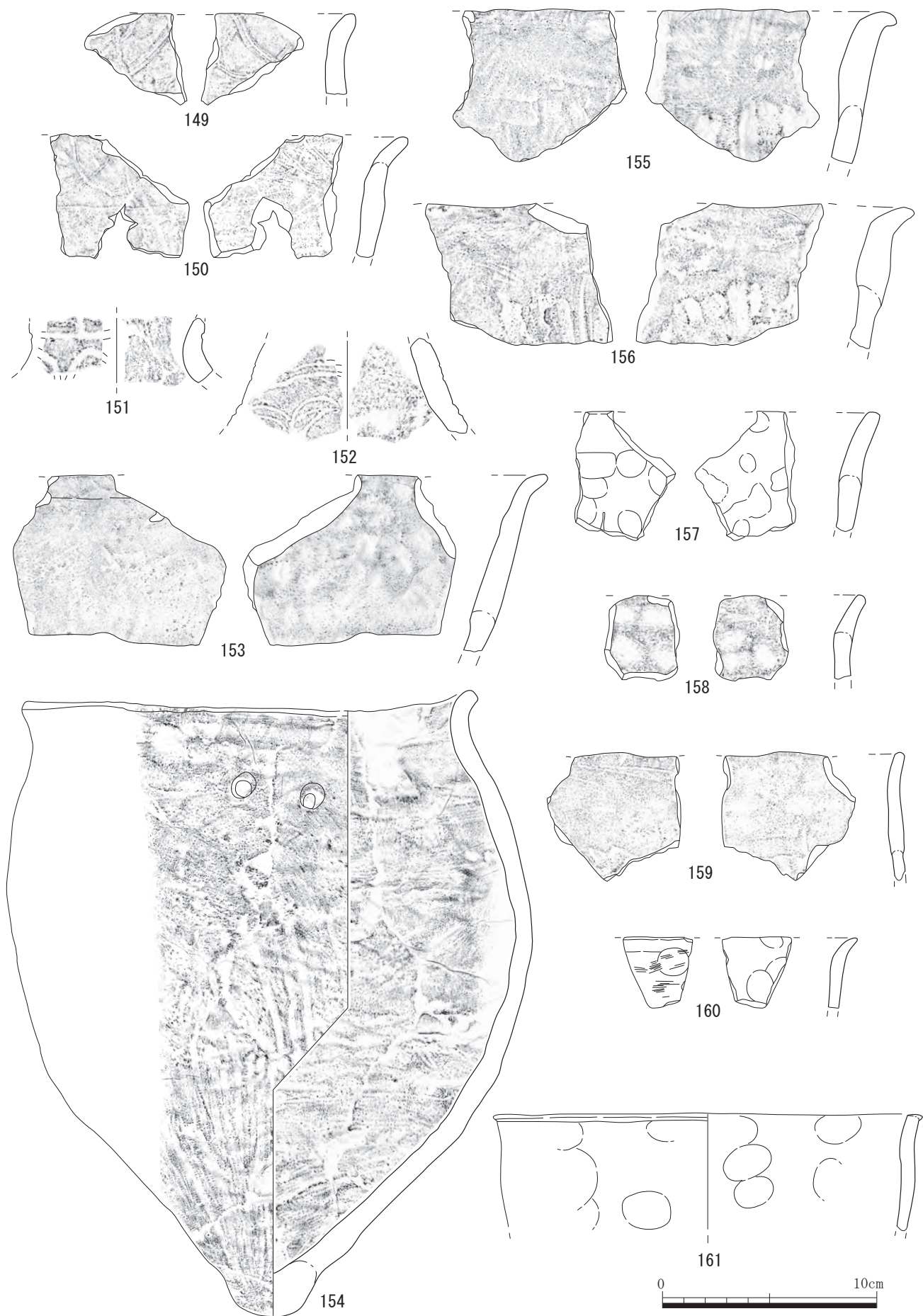
146



148



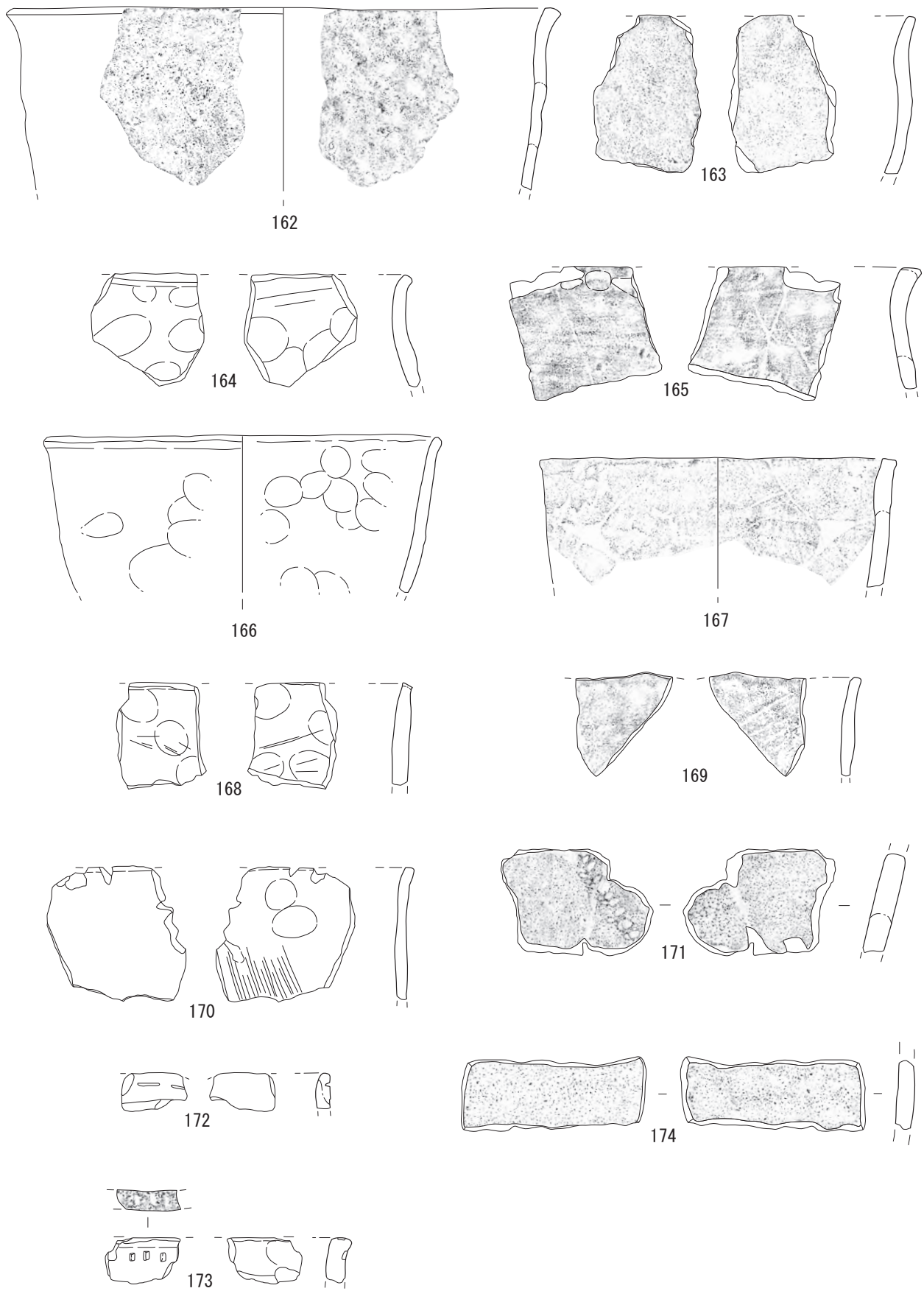
图版 21 土器 20



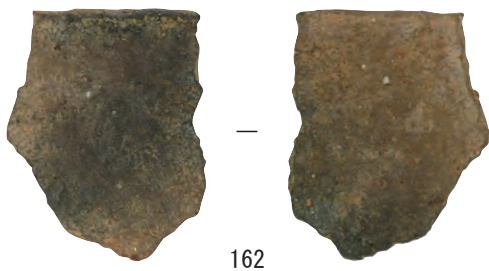
第 50 图 土器 21



图版 22 土器 21



第 51 图 土器 22



162



163



164



165



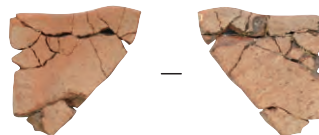
166



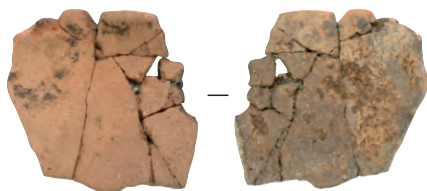
167



168



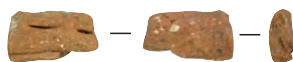
169



170



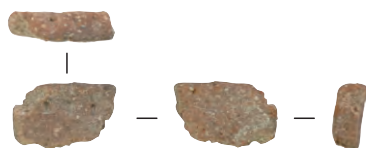
171



172



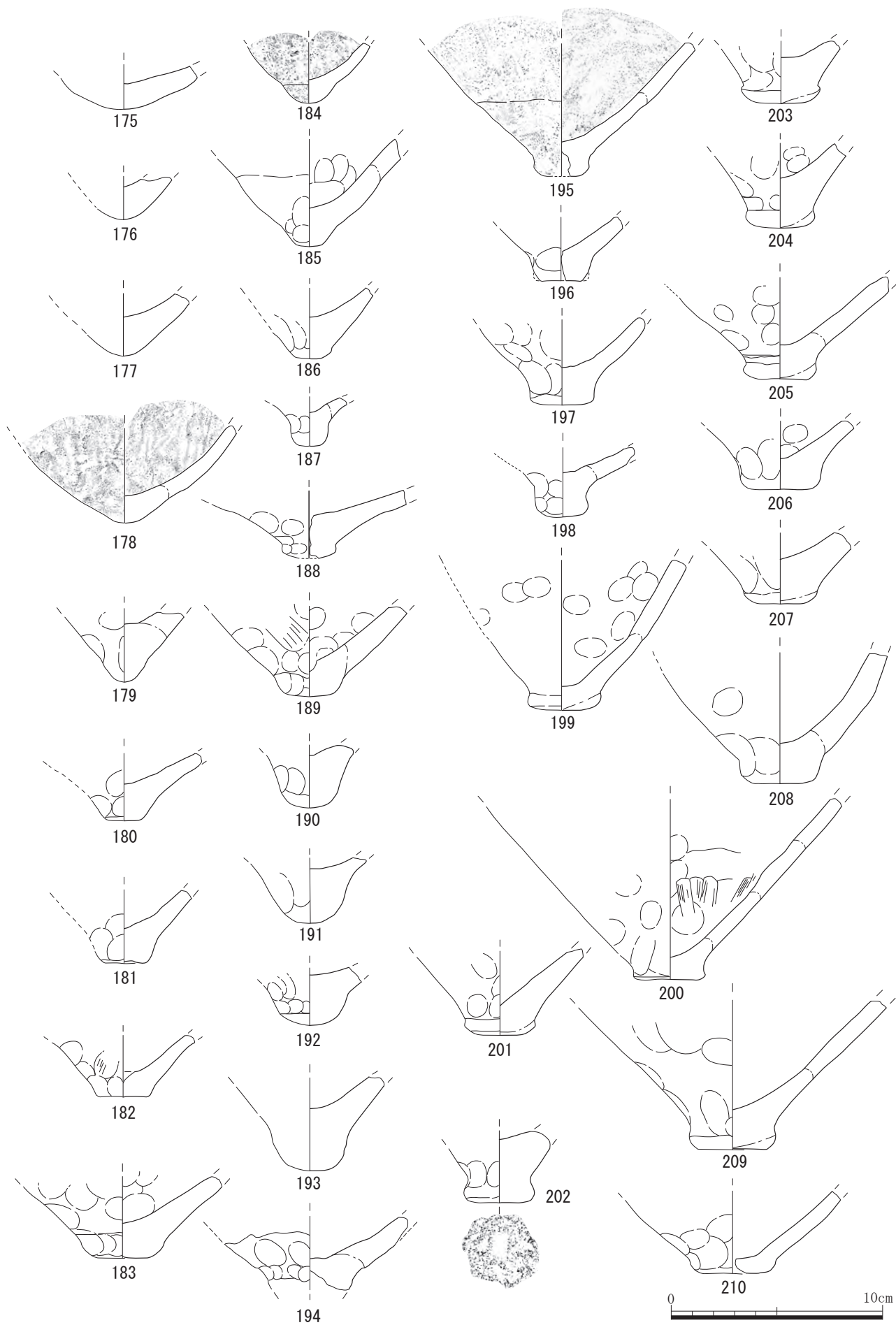
174



173



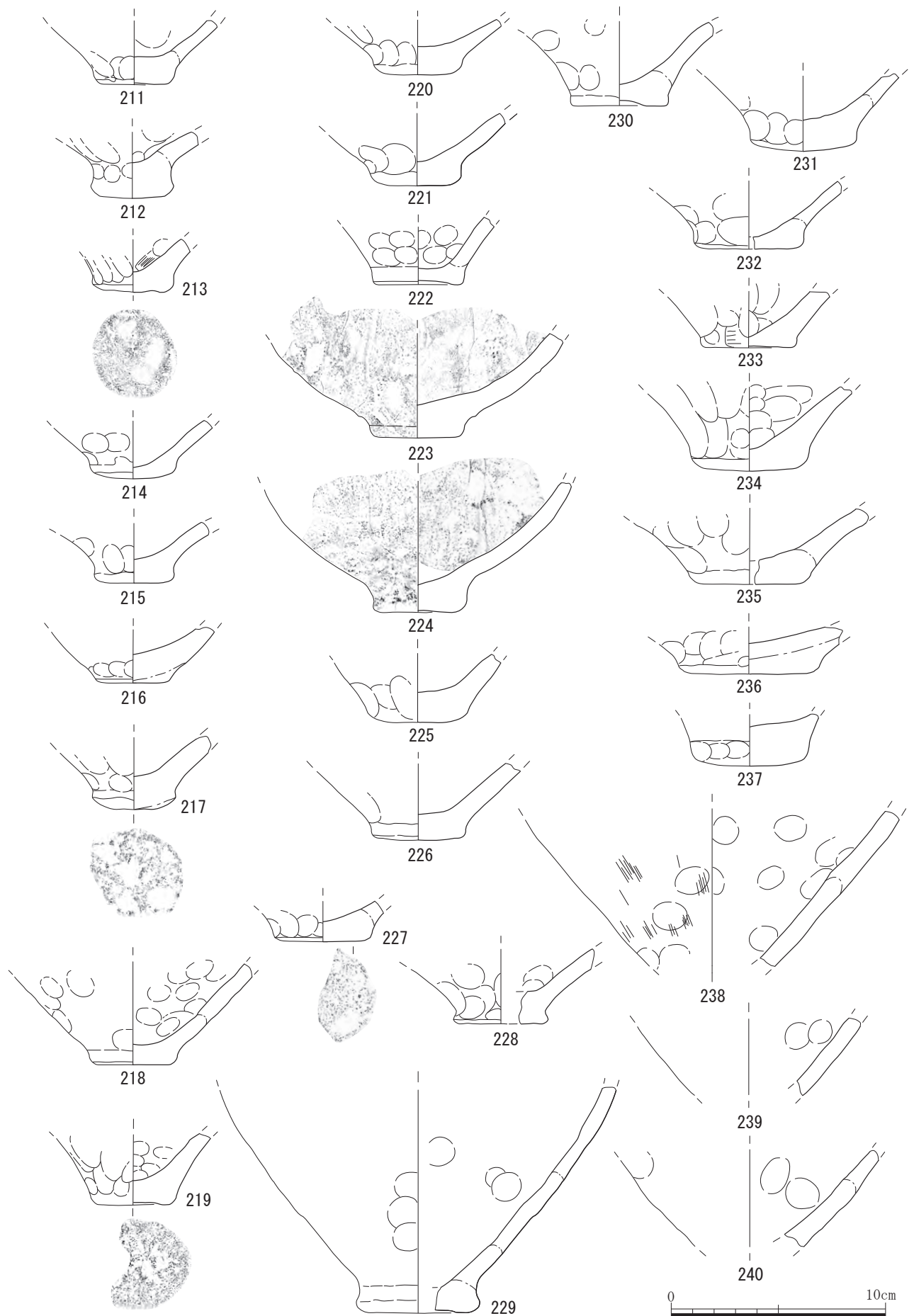
图版 23 土器 22



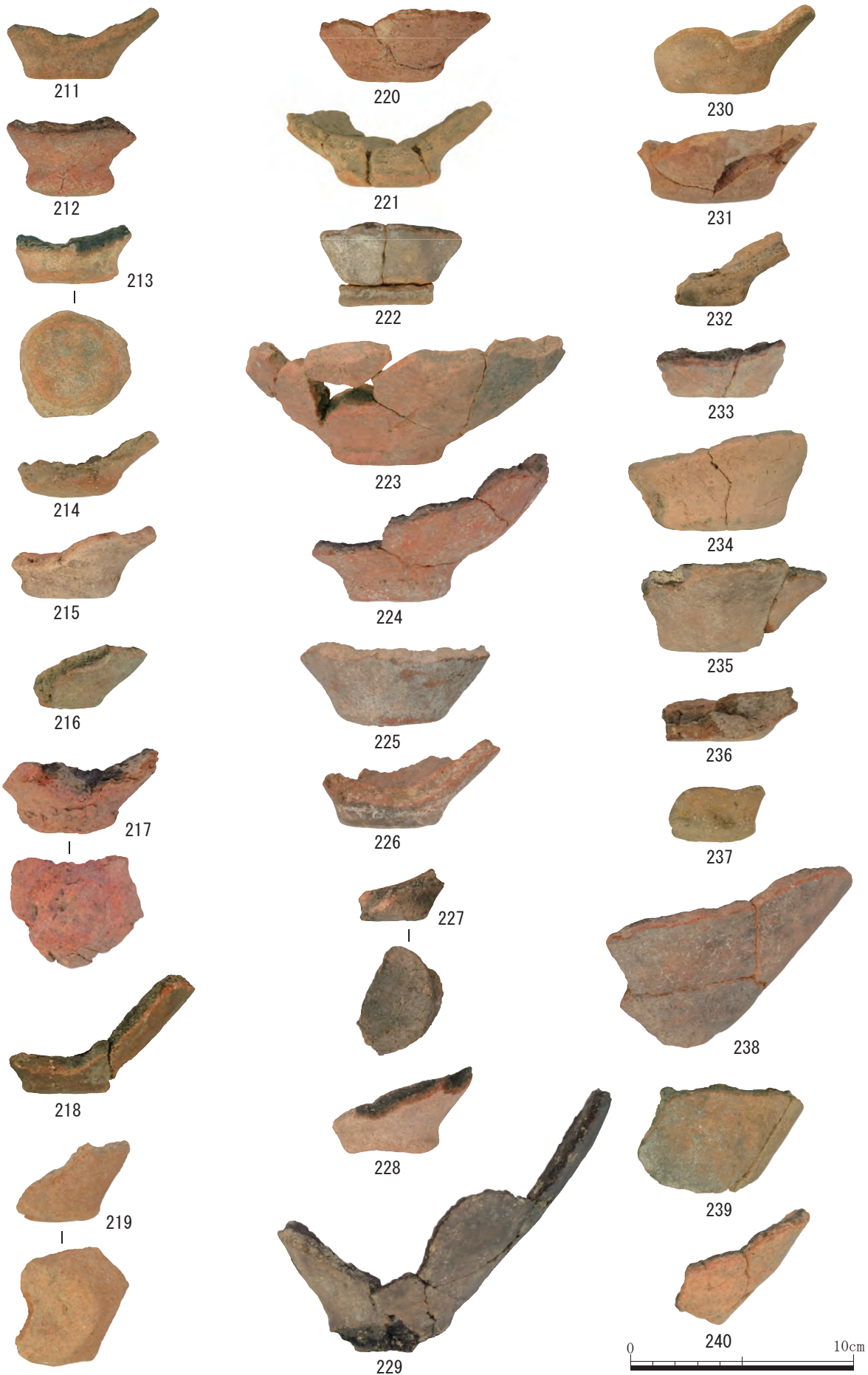
第 52 图 土器 23



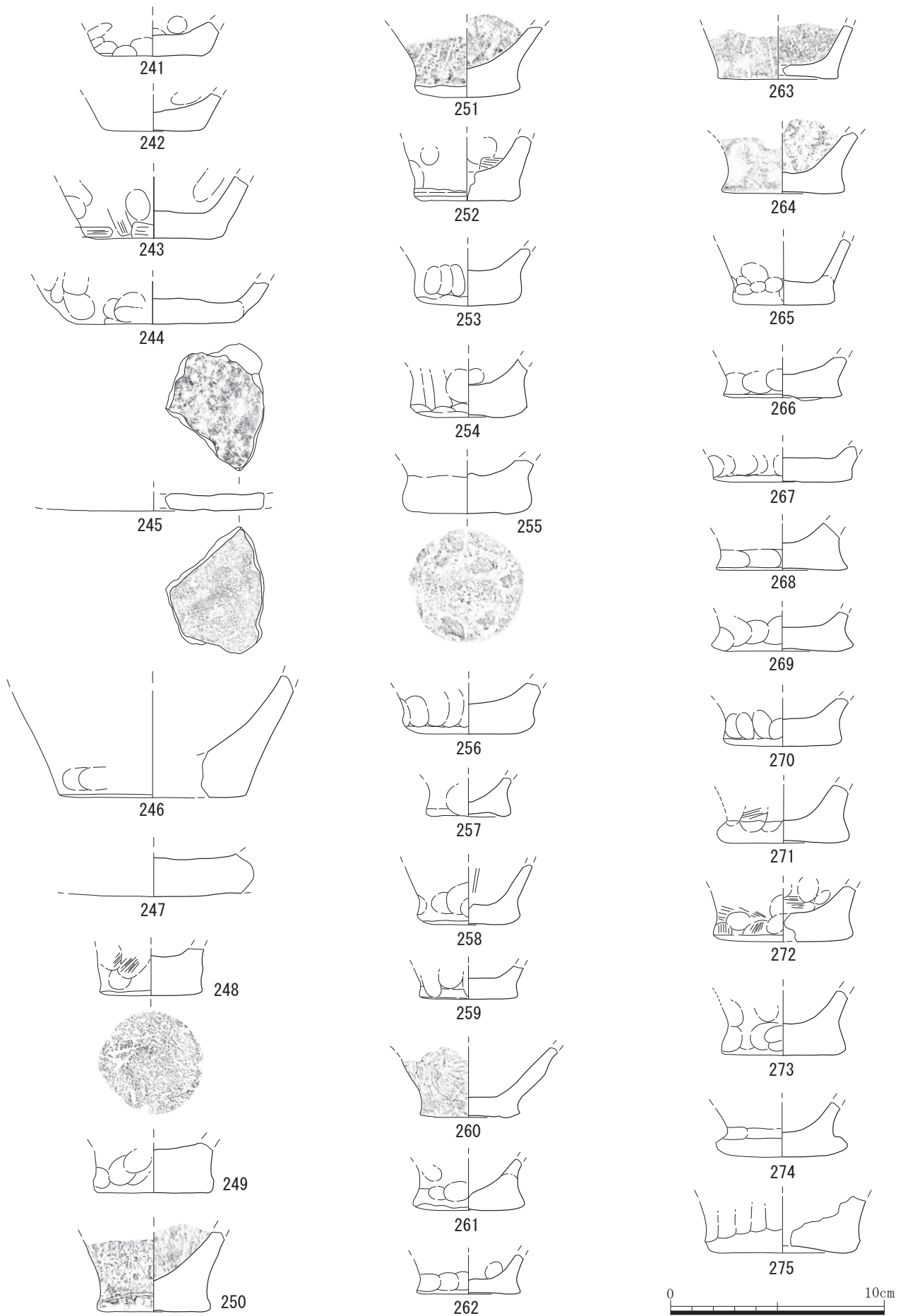
图版 24 土器 23



第 53 图 土器 24



图版 25 土器 24



第 54 图 土器 25



图版 26 土器 25

(2) 石器

石器は総数 177 点得られた。器種は石斧、敲石、敲石兼磨石、磨石、石皿、砥石、有孔石製品、スクレイパー、剥片石器、石製品、サンゴ塊製品、用途不明石器である。

層位は地区ごとに集計を行った。出土量の地区別は HB①地区から 72 点、HB②イ地区 77 点、ロ地区で 18 点、HB④イ地区 6 点、口地区で 4 点である。

層全体では表採 4 点、Ⅰ層 6 点、Ⅱ層は遺構出土を含め 7 点、Ⅲ層 7 点、Ⅳ層 19 点、最も量的に多い貝塚時代後期と捉えられるⅤ層は全体で 134 点出土した。

遺構から出土した石器に限るとⅡ層の遺構は戦前層で遺物は戦前関わりのものである。288SZ から敲石兼磨石 1 点、1003SZ 磨石 1 点、2002SZ は敲石、磨石が 1 点ずつ出土、土坑の 358SK で敲石兼磨石 1 点、62SK で磨石 1 点どちらも破損資料である。

Ⅲ層遺構は近世層で攪乱遺構と思われる。2049SD(溝)では石器が 5 点と多く、完形の石斧、破損した石斧、敲石兼磨石が 1 点ずつ、石皿が 2 点出土した。石器は紛れ込みの可能性も考えられる。381SK(土坑)からは破損した磨石 1 点のみである。Ⅳ層は流路堆積のため遺構の検出は確認されていない。

Ⅴ層遺構は貝塚時代後期で捉えた。364SS(貝集中部)から破損した石皿 1 点他、土器、貝、骨。1039SX直上(燃焼遺構)で完形石皿 1 点だが、他に遺構に関わる遺物の出土はない。

器種別では石斧 37 点、敲石 7 点、敲石兼磨石 38 点、量的に磨石が最も多く 74 点、石皿 6 点、砥石 5 点、剥片石器、スクレイパー等が 1 点ずつ出土している。各々の器種は完形と破損に分け、形状が判断できる完形のみを大型、中型、小型と大別した。細分類に関しては各項目で後述する。詳細は第12表の集計に地区、層位別で示した。

第12表 石器出土量

地区	層位	遺構	石斧							敲石		敲石兼磨石				磨石			石皿		砥石		有孔石製品	スクレイパー	剥片石器	サンゴ塊製品	石製品	用途不明石器	合計	地区別計						
			完形		破損		転用品 完形 破損	未製品	完形	破損	完形			破損	完形	破損	完形	破損	完形	破損																
			中型	小型	基部	刃部					大型	中型	小型								大型	中型									小型					
HB①	Ⅰ				1																	1									2					
	Ⅱ	62SK																																1		
		288SZ																																1		
		358SK																																1		
	Ⅲ	381SK																															1			
	Ⅳ			2								2																					4		8	
Ⅴ	364SS		2	5	1	2	1	1				1	3	2	3	5	2	6	17										1				2	2	56	
	小計		9		4		1	1	1				2		6		5		13		24		1	2	2					1				72		
HB②イ	Ⅰ								1						1	1			1														4			
	Ⅱ	1003SZ													1				1															1		
	Ⅲ														1																			1		
	Ⅴ	1039SX		3	8		3		1	1	1		1	7	6	4	1	2	4	22		1	2		1		1		1			1		70		
	小計		11		3				2	2			14		6		8		24	1	2		1		1		1		1			1		77		
HB②ロ	表採											1		1					1															3		
	Ⅱ	2002SZ								1								1																2		
	Ⅲ	2049SD		1		1										1						2												5		
	Ⅳ					1					1																				1	2		8		
小計		1		2					1	1		1		5		2				2										1	2		18			
HB④イ	Ⅳ				1																												1	3		
	Ⅴ									1											1													3		
	小計		1							1											1													5		
HB④ロ	表採																					1													1	
	Ⅴ						1														2														3	
	小計					1															2														4	
	合計		22		10		1	1	3		4	3		21		17		23		51	1	5	2	3	1	1	1	1	2	1	4			177		
	分類別計				37						7		38				74			6		5		1	1	1	1	2	1	4						

1-a. 石斧

石斧は37点のうち完形22点、破損10点、転用品2点、未製品3点である。平面形態では撥形、側面は厚手資料が多く、刃部形態は両刃が多い。観察表の分類は以下のように行った。

A-I : 平面観

- a. 撥形—基端頭部が小さく刃部に向かうにつれ撥状を呈す
- b. 短冊形—基部から刃部まで、おおよそ同一の身幅を呈す
- c. 分銅形—基部の側面中央に、くびれのあるノッチ状（凹状部）を呈す
- d. 柱状形—基部側面に刃部を呈す
- e. 不明資料—上記形態に該当しない不定形、或いは破損、基部のみで形態不明資料

II : 側面観

- a. 厚手—基部と刃部の境目が最も厚く刃先に向かうにつれ薄くなる
- b. 薄手—扁平で基部から刃部までの厚さが一定になる

B-I : 刃部平面

- a. 円刃—刃の形状、研ぎ出しが正面両端に向かい弧状（円状）にすり上がる
- b. 直刃—刃の研ぎ出しが正面の端（側刃角）に角を付ける
- c. 偏刃—正面観の刃の研ぎ出しが左右の形状でアシンメトリーになる

II : 刃部側面

- a. 両刃—表と裏の両側から均等に刃を研ぎ出す（特に厚手の刃は蛤刃と呼称）
- b. 両刃の片刃—片側が両刃的、一方が片刃の両者の刃の傾向を併せ持つ
- c. 片刃的両刃—刃のつくりが片刃仕様で且つ両側から研ぎ出す
- d. 片刃—刃のつくりが片側から強く研ぎ出す

図1は撥形石斧で刃部は両刃を呈す。形態や刃部の研ぎ出しなど研磨の状態が細かい。伊礼原E遺跡(2010)に類例資料(第93図17)がみられる。図16の石斧は幅広で長径の短い撥形を呈す。側面観は基部から刃部直前まで厚みは均一、基部の表裏面まで研磨が及び刃部は広い範囲で刃こぼれがみられる。左右の側刃角はアシンメトリーで平面左に比べ右側が反り上がる形態を成し片刃的である。刃の研ぎ出しは両面から均しく研磨される。図17・19・21・25の片刃石斧も作りが従来の在地産石斧に対し、丁寧且つ刃部の研磨が非常に明瞭である。図26の資料は小型鑿状利器的な石斧と捉えられる。図19・21・25・26の石斧は九州の石器を例に挙げるとセット関係にあるようだ。図29は荒割り成形の後、僅かな範囲に刃を付けた局部磨製石斧と思われる。総体的に撥形の石斧が多いが、形態や研磨具合の良好な石斧は短冊形で片刃の石斧が多い。

1-b. 転用品

石斧転用敲石は2点の出土である。図32は敲石に転用されたと考えられる資料で小型石斧の形態を示すが残存部が肉厚のため小型鑿状石斧とは考えにくい。原形は棒状、細身、側面が厚手の片刃石斧と想定される。類例資料が伊礼原E遺跡(2010)の第95図33にみられる。

石斧を敲石に転用する事例は多く、これまでの報告でも確認され刃こぼれの酷い石斧を敲打器として使用する機会が頻繁にあったと推測される。

1-c. 未製品

3点の出土で1点を図化した。図30は荒割り、粗加工段階の痕跡は確認されるが、次段階における整形や調整、研磨など微細な加工は施されていない。研磨は施されておらず刃部の研ぎ出しもみられない。石斧製作の工程が窺える資料である。

第55図は石斧の完形のみ抽出し長さとの関係を示したもので、合わせて形態との関係を確かめてみた。完形の石斧は22点でサイズの大きいものは12cm台、小さいもので5cm台である。形態は大別して撥形、短冊形、分銅形、柱状形に分けられる。

撥形石斧に含めた資料は12点で12cm台1点、11cm台2点、10cm台4点、9cm台3点、8cm台2点で8cm以下の資料はみられない。

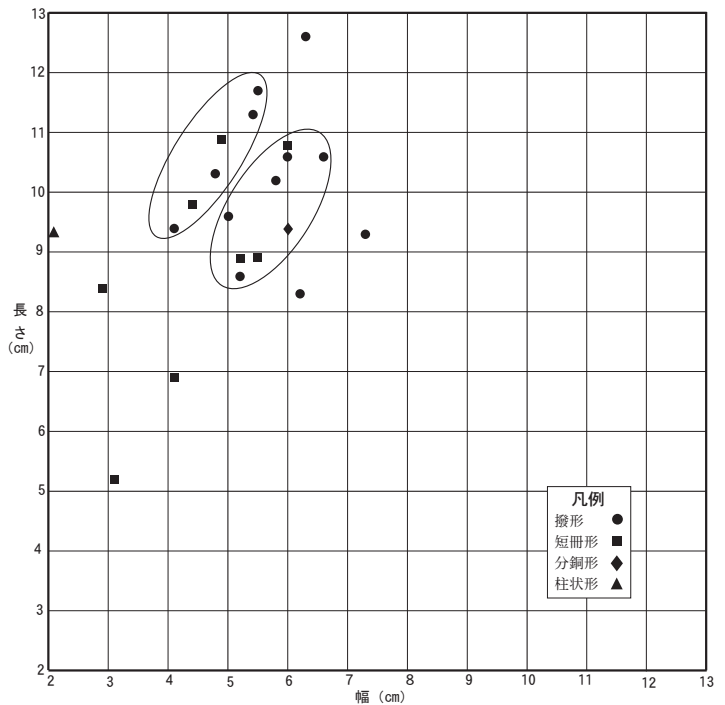
短冊形は8点で、10cm台2点、9cm台1点、8cm台3点、6cm台1点、5cm台1点である。短冊形の石斧は撥形とは逆に11cm以上の石斧はなく小型の資料が多い。又、撥形に比べサイズにばらつきがあり、一定の大きさに集中しない。短冊形の石斧は表裏面、側面、稀に基端頭部を平坦につくり厚みは薄く扁平を呈し、刃部は片刃の場合が多い。最も小さいもので図26の石斧は小型鑿状石斧、或いは貝製品彫画石斧とも捉えられるが判断に乏しい。

分銅形は9cm台の1点の出土である。図に示した石斧の中では中間的な大きさだが、一般的な石斧の範疇からは大きいサイズの類ではない。分銅形石斧は類例資料が伊礼原A遺跡(2014)で3点出土している。

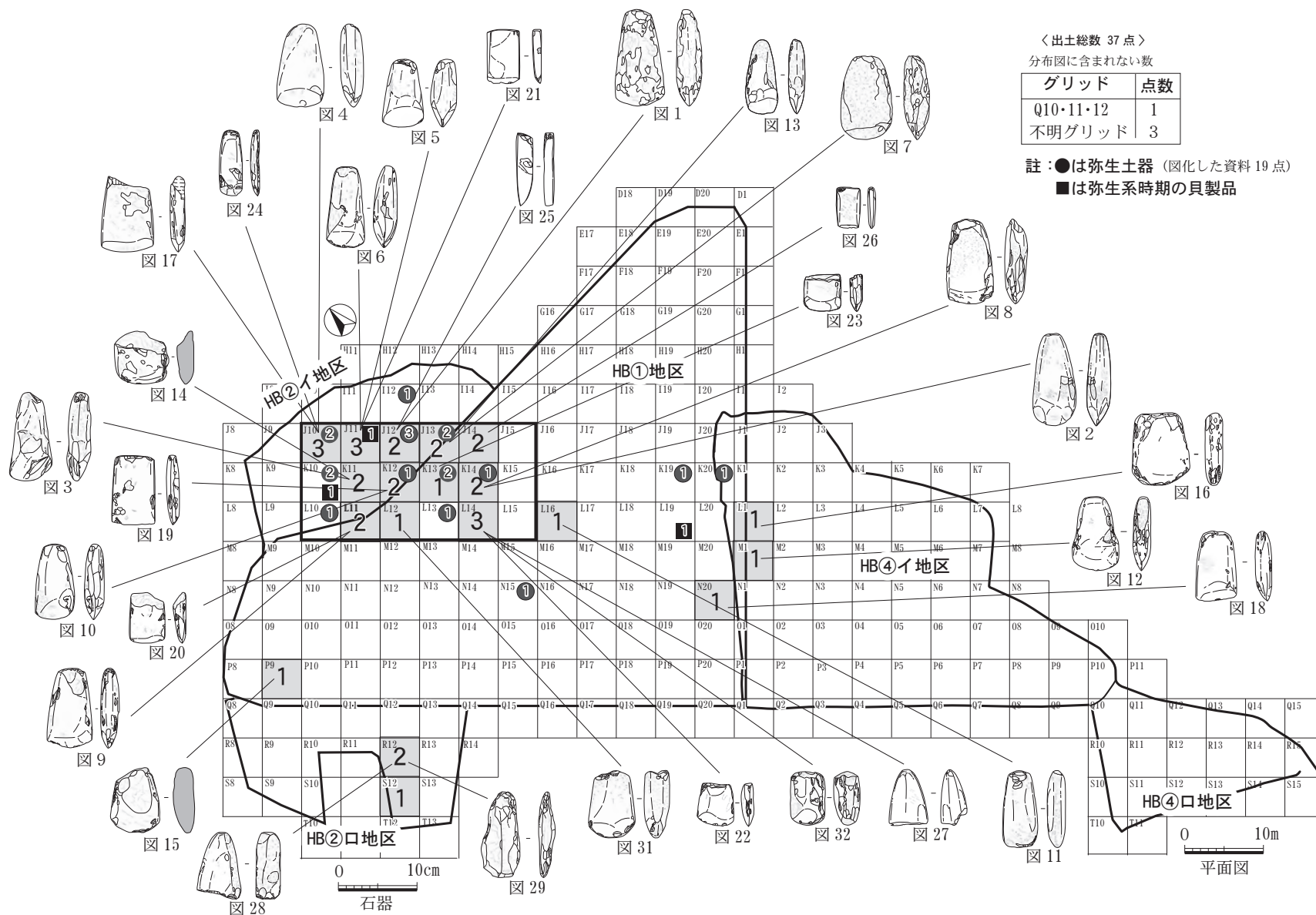
柱状形も1点のみの出土で9cm台である。どの形態の石斧にも言えるが、長さのサイズが小さくなればそれに対して幅の値も小さくなる。図25は柱状石斧の中でも小型の部類で小型方柱状片刃石斧と呼ばれる資料である。柱状片刃石斧の無袂タイプでサイズは長さに対し、幅、厚さとも小さい。石質はシルト岩で、短冊形に分類した図21の扁平片刃石斧(シルト岩)とセット関係が想定される。これまで既に報告した袂入石斧のタイプは扁平片刃石斧で刃の向きに対し、横に袂りを有すタイプの資料として、試掘調査(2005年)1点、伊礼原E遺跡(2010)3点の合計4点出土している。小型方柱状片刃石斧は本来の柱状片刃石斧の形態を呈す小型のものである。

第56図に石斧の量を調査グリッド別に、主要な石斧を示した。合わせて九州系弥生土器、弥生の時期に関わる貝製品も示した。まず石斧は集中する範囲と散在し出土する箇所に分かれ集中範囲は限られる。集中範囲はHB①地区とHB②イ地区との境、J~L10~15の範囲に、散在的に出土する石斧はL16、N20、P9で集中部から離れ僅かに1点ずつである。HB②ロ地区はR・S12の3点とQ10~12の重複グリッド1点の出土である。HB④地区の石斧はイ地区から2点のみ出土した。その他、グリッド不明の資料が3点である。

J~L10~15の範囲で図に示した石斧のうち、九州との弥生に関わる石斧で持ち込みの考えられる両刃や片刃石斧がこの範囲で出土する。図1・2・17・19・21・24~26は、九州からの搬入資料と考えられる。合わせて示した弥生土器(入来Ⅱ式土器)も大半がこの範囲に収まり、貝製品の出土状況も同様に比較すると3点中2点(諸岡型ゴホウラ製貝輪、オオツタノハ製貝輪)が同じ範囲で出土、石斧と同様の傾向をみせる。弥生関連の土器、石斧、貝製品が同じ範囲で集中したことは九州との繋がりが、判明されつつあると考えられる。(土器、貝製品の項目参照)



第55図 石斧(完形) 長さ×幅と形態の相関



第56図 主要石斧及び出土量と南九州系弥生遺物

2. 敲石

敲石は7点で完形4点、破損3点のうち2点を図化した。浅く研磨が確認できる資料も敲打痕が明瞭なものは優先し敲石に含めた。図36は棒状を呈し、使用面は表裏面に二つずつ指痕大の敲打痕が並んで確認される。側面にも同様の小さい敲打が見受けられる。上下端部も敲打で面を成す。図62の資料はチャート製で半球状を呈す。半欠した平坦面の縁辺を細かく剥離調整している。丸味を残す面は自然の状態である。石質がチャートのため敲打痕は明瞭でない。チャート製の敲打器類は他の素材に比べ類例が少ないが、伊礼原D遺跡(2013)で敲石兼磨石として2点出土している。

3. 敲石兼磨石

敲石兼磨石は38点の出土で完形21点、破損17点である。敲石、磨石の両者の使用痕のある資料を示した。図42は俵形の形状を呈し、使用面は片面のみ研磨が確認される。下端部は敲打により面を成す。図50は石罅状の形態を呈し、全面に使用痕が確認できる。表裏面に研磨、表裏面と両側面中央には敲打が認められる。

4. 磨石

磨石は量的に最も多く完形23点、破損51点の合計74点である。敲打が浅くみられる資料も、研磨が特に顕著なものは磨石に分類した。図44は、完形の磨石で形態は変楕円形を呈し厚さは表面中央やや厚く、右側に向かい薄い。敲打は表面中央に微かにみられ、研磨は顕著で表裏面に幾つも使用痕を残す。側面周縁は擦痕の痕跡と表裏面との境に稜線が確認される。

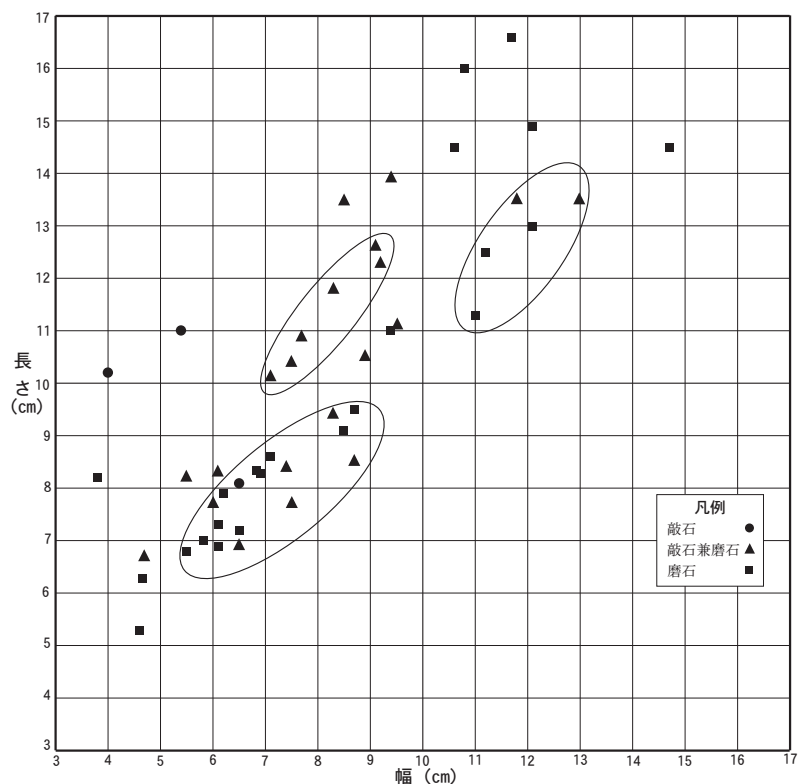
第57図に敲石、敲石兼磨石、磨石の敲打器類について、長さ×幅の計測を示した。破損資料に完形と類似する形態もあるが、大きさの判断できる完形に限定し敲石3点、敲石兼磨石21点、磨石23点の47点を図に示した。

図のとおり敲石は完形資料が少なく、どの資料も長さ11cm、幅7cmの範囲に収まり、小型の資料が主になると言える。おそらく破損資料も原形は小型の範疇になると推測される。

敲石兼磨石は長径6cm～14cm台の範疇である。中には長さ×幅の計測値がほぼ同等のサイズで、形状で言うと方形に近い資料もみられる。敲きと磨りの機能を兼ねるこの資料は、形状が石罅状で中型のサイズが多い。

磨石は小型から大型まで幅広く分布、敲石に比べ小型と大型に二分され小型が同じサイズに集中する。正の相関範囲から外れる例外的なものも認められる。

磨石は小型資料にバリエーションが多く、小型にのみ見られる球状タイプ(作図なし)の資料がある。大型資料は大きさも計測のとおりだが、重量のあるものが磨りの用途に限定され大型になるほど使用面が増える。図化したもので例を挙げると図55や図59がある。



第57図 敲打器類(完形)長さ×幅の相関

5. 石皿

石皿は6点の出土で、完形1点、破損5点が確認された。形状は完形を除き全て不定形である。

使用痕の状態で分類すると表裏面使用4点、片面使用2点である。そのうち3点を図化した。図65は破損が激しく残存箇所は一部で大きさは窺えないが、使用痕が裏面にも確認され横断面の形状からも両面使用と判断できる。図66は板状で破損したうえ不定形を成す。自然礫のまま使われ、使用面は片面のみである。図67は完形の大型資料で、表面中央下部に円形状に窪んだ使用痕が確認できる。これも片面使用である。1039SX 直上（燃焼遺構）V層出土であるが、石皿に焼けた痕跡はみられない。遺構出土の石皿は図66のほか、2049SD（Ⅲ層遺構）では石皿2点と土器、貝製品、グスクや、近世の陶磁器類が出土している。1039SXはV層遺構で、石皿以外の出土遺物がない。364SSはV層で貝集中箇所から石皿1点のほか共伴遺物は土器、イノシシ骨、食料残滓の貝が出土している。（遺構の項目参照）

第13表 石皿使用面

完・破 使用面	完形	破損	合計
両面	1	3	4
片面		2	2
合計	1	5	6

6. 砥石

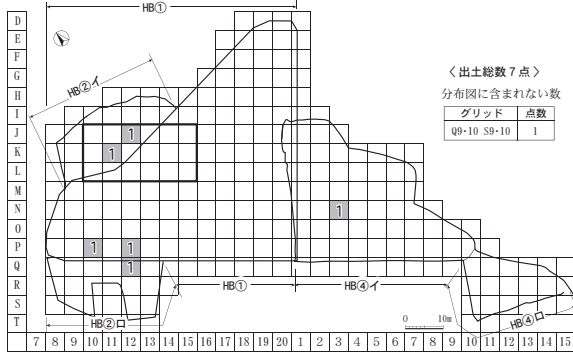
5点と量的に少なく形態はどの資料も不定形を成し、完形2点、破損3点である。そのうち研磨痕が顕著なものが3点ほど確認できた。砥石の研磨はどれも部分的なものが多く、作図したものはないが、大型の砥石を写真資料に挙げた。各々の砥石の出土地はJ12、K15、L12、L18、K12～14、J13・14、I14で出土しており砥石以外の石器の出土は少なく、共伴遺物は貝製品、骨製品、食料残滓の獣骨、貝類が少量で、土器の出土はL12、K12～14、J13・14、I14が多い。

図版27は使用痕の確認できるもので、砥石としてはかなり大型の資料である。全体の形状は縦長不定形、六面のうち二面に研磨が確認できる。正面左端と上端は大きく破損、右側と下端部は自然の丸味を帯びる。使用面は表裏面に認められ、表面は破損部に近い中央部分の平坦面に顕著である。凹凸はなく、研磨はかなり顕著、端部は研磨が浅い。裏面にも部分的に研磨が確認できる。石質は流紋岩系輝緑岩で、この種の岩石は本島中南部では産出しない。法量は最大値で縦67.0cm、横幅27.5cm、厚さ11.8cm、重量31kg、出土地HB①地区、L18、V層（Ⅲ層・暗褐色シルト層）

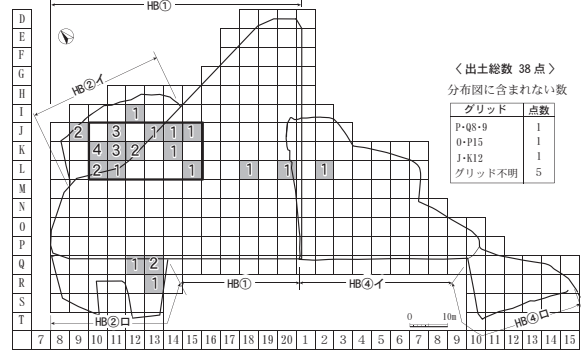


図版27 砥石

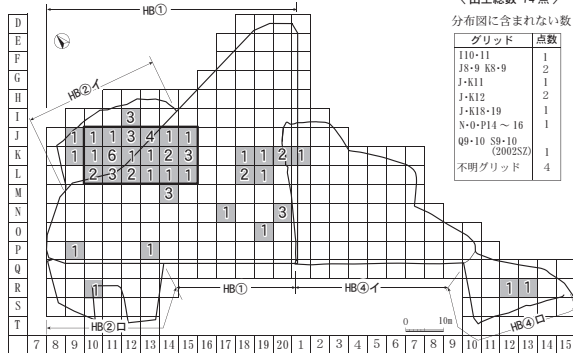
〈敲石〉



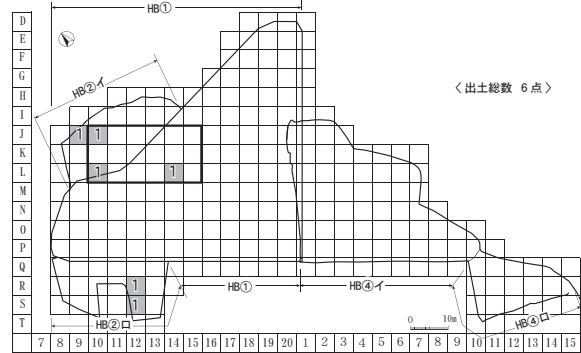
〈敲石兼磨石〉



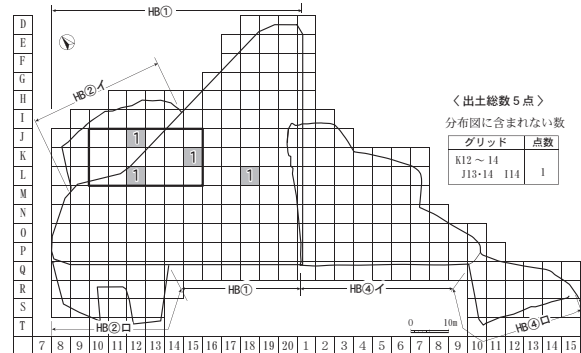
〈磨石〉



〈石皿〉



〈砥石〉



第 58 図 器種別出土平面分布

第58図に石斧と同様、器種ごとに出土量を平面分布に示した。太枠の範囲も前述の通り遺物の集中範囲を示すが、器種により出土量自体が少なく集中しない遺物もある。敲石は量的に少なく J 12、K11、P 12・Q12、N3、重複グリッド Q9・10、S9・10 で僅かに出土する。敲石兼磨石は J～L10～15の太枠の範囲では K10 が4点とやや多く、その他枠外では I12、J9、L18・L20・L2、Q12・13、R13で少量出土する。

磨石は分布図でもわかるとおり J～L10～15の範囲では全てのグリッドで一定量の出土がみられる。特に K11で6点と多い。前述したもの以外に K・L 18～20の範囲で少量だが1、2点ずつ出土している。その他、散発的に出土する箇所が M14で3点、N17で1点、N20で3点、O19で1点、P9で1点、P13で1点、R10で1点又、HB④口地区の R12・13に1点ずつ出土している。範囲確認調査(2008)のトレンチが今回の I16・17～P16を縦断するため本調査で石器の出土はないが、前調査では僅かに出土している。

石皿は6点で J～L10～15の太枠の範囲では、J10、L10、L14の3点、J9で1点、ほか石斧と同じく R12、S12で1点ずつ出土している。図 67の石皿は 1039SX直上(燃烧遺構) V層で唯一の資料である。砥石は太枠の範囲では J 12、K15、L12の3点、範囲から外れた箇所では L18で1点、一括取上した K12～14、J13・14、I14で1点出土している。図版27に示した大型砥石は L18出土で、砥石以外に全体に遺物の量は少なく土器、貝類が少量出土している。

遺構出土の石器は、ほとんどⅡ層、Ⅲ層からで又、石器の量も少なく平面分布を見る限り出土状況から遺構との関連は考えにくい。

7. 有孔石製品

1点の出土である。形状は逆三角状、厚さ2 cm前後、表裏面、側面とも成形した痕跡はなく石器として定型化した形状ではない(図64)。加工痕は上部中央に縦1.0 cm、横0.9 cmの孔が穿たれている。開口部と貫通する孔の大きさはほぼ一定で、孔は表面が左下から上へ、裏面は右上から下へ穿孔される。穿孔以外の加工がなく用途は特定できない。石質は凝灰岩を利用している。HB④ロ地区、表採。

8. 剥片石器

図60はチャートを用いた剥片石器と思われる資料である。形態は楔形石器に類似するが、意図的に加工したものとはすれば雑な印象を受ける。使用痕は認められず、チャートの質は悪い。剥離の際にみられる貝殻状リングも確認できない。製品としては下記のスクレイパーと比較して、調整剥離が簡素で当遺跡で作られた模倣品と思われる。HB④イ地区、08、IV層出土。

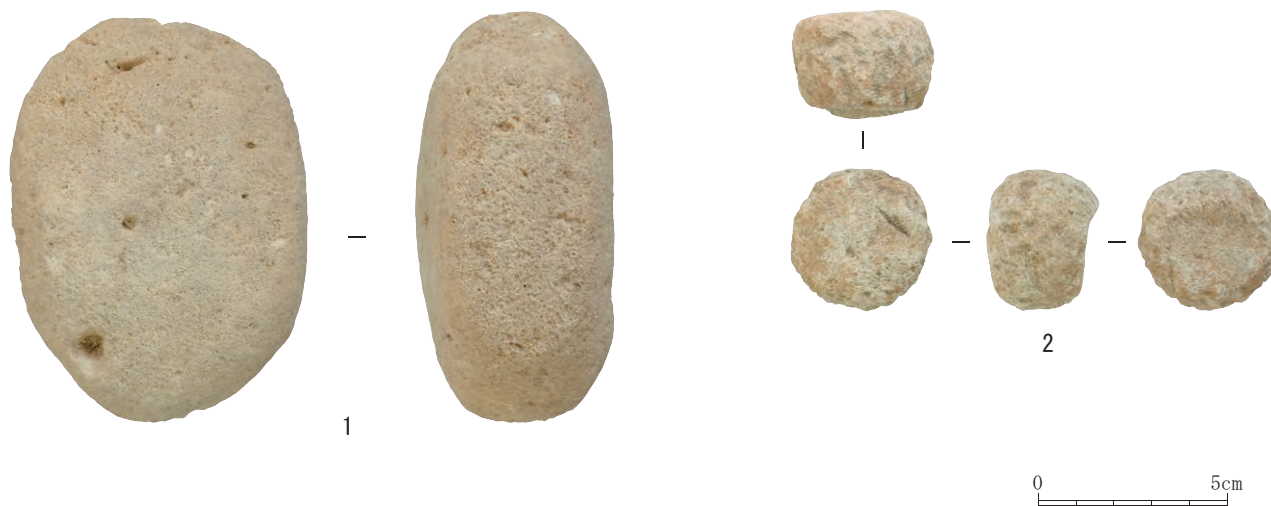
9. スクレイパー

図61の1点でチャート製、完形、成形良好で周縁部に調整剥離の痕跡が認められる。表面に剥離時の貝殻状リング、裏面の一部に石灰質の付着物が認められる。右側縁には敲打による衝撃で潰れが確認される。他の石器より帰属時期は古く縄文時代晩期の資料で、共伴遺物は土器、貝、骨などである。スクレイパーの使用時期の対象遺物は、当遺跡から大山式土器、面縄前庭式土器が僅かに確認されている。製品としての作りが良く良質のチャートを用いており、外部からの持ち込みと思われる。HB②イ地区、ベルト、V層(貝層②)出土。

10. サンゴ塊製品

石器として例外的なものを下記の写真に挙げた。図版28-1の製品は形態が石鹼状磨石に類似し、自然のサンゴ塊を利用した磨石様製品と考えられる。表面中央に浅く小さな敲打痕が認められる。又、左側面が敲きに、右側面は擦りに利用され面を作る。計測値は縦10.0 cm、横7.2 cm、厚み4.8 cm、重さ276 g、HB②イ地区、トレンチ内、V層(黄砂層)出土。

図版28-2も小型のサンゴ塊を使った製品で平面観は円形状を呈す。表面は自然面を成し、裏面は平坦に面をつくり擦れの痕跡が僅かに確認できる。側面周縁を細かく打ち欠いた痕跡が確認できる。用途は不明、層位が上層出土のため近世の玩具とも考えられる。計測値は縦3.6 cm、横3.5 cm、厚さ2.8 cm~2.3 cm、重量25 g、HB①地区0・P8~13、I層出土。



図版 28 サンゴ塊製品

第14表-1 石器観察一覧

(法量単位:cm, g)

第図版	図番号	器種	形態(平面側面)	刃部(平面側面)	完/破残存部位	分類	最大長 最大幅 最大厚 重量	加工痕 使用痕 の有無	観察事項	石質	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取上)番号
第61図 図版29	1	石斧	撥形厚手	円刃両刃	完形	中型	12.6 6.3 3.2 345	研磨痕	基部側面厚く、刃部作り良好、基端頭部まで面を成す 研磨は基部・側面の一部・刃部表裏の一部に有り 石質は伊礼原E遺跡に類似資料有り	玄武岩	HB②-IJ12 V(黄砂層上面) 取1198
	2	石斧	撥形厚手	円刃両刃	完形	中型	11.7 5.5 3.0 301	研磨痕	基端まで成形、頭部小さく刃部直上最も太い、研磨は全面研磨 窪み部分のみ研磨及ばず、刃部は、より研磨明瞭 両面複数回研いだか? 方向違いの研磨有り、刃こぼれ有り、刃線 残存	輝緑岩	HB①-K14 V(4層橙色シルト) 取13
	3	石斧	撥形厚手	— —	完形	中型	11.3 5.4 3.1 263	敲打痕 研磨痕	軋石の形状を上手く利用、両側面に調整の敲き有り 研磨は刃部両面、基部・側面の一部 刃部は刃こぼれ激しく刃面も破損	斑レイ岩	HB②-I.K11 V(橙色シルト②) 取1128
	4	石斧	撥形厚手	円刃両刃	完形	中型	10.6 6.0 2.9 304	研磨痕	形状は全体に整い基端の一部欠ける 研磨は基部まで及び基部・刃部の表裏面に認められ良好 刃こぼれ有り、刃は鈍り鋭利でない	斑レイ岩	HB②-IJ10 V(橙色シルト②) 取1052
	5	石斧	撥形厚手	円刃両刃	完形	小型	8.6 5.2 3.3 220	研磨痕	基部の側面厚みあり、研磨は基部・刃部の表裏面に有り 刃部は特に研磨が顕著、何度か研ぎ直しの痕跡有り	輝緑岩	HB②-IJ11 V(暗褐色シルト) 取1061
	6	石斧	撥形厚手	円刃両刃	完形	中型	10.3 4.8 3.0 247	研磨痕	基部厚く成形良好、刃先に細かい複数回の刃こぼれ有り 研磨は基部、刃部の表裏面に良好、刃は数回研ぎ直し有り	斑レイ岩	HB②-IJ11 V(暗褐色シルト) 取1039
	7	石斧	撥形厚手	円刃両刃	完形	中型	10.6 6.6 3.3 324	成形痕 刃研ぎ出し	サイズやや小さく、形は基端から刃部まで整う 刃部は研ぎ出され刃線残る、刃こぼれなし 全体に石灰分で溶解か、研磨は風化で剥離か判断不可	流紋岩? (付着物あり 識別困難)	HB①-J13 V(4層混貝層) 取144
第62図 図版30	8	石斧	撥形厚手	直刃片刃的両刃	完形	中型	10.8 6.0 2.9 294	研磨痕	基端頭部残るが一部欠損、基部、刃部とも表裏面の研磨は良好窪 み部分に研磨は及ばず、刃部研磨は一度に研ぎ出したと推察、刃 こぼれ重複、刃線は潰れず	輝緑岩	HB①-K14 V(5層黄色砂) 取019
	9	石斧	撥形薄手	直刃両刃的片刃	完形	中型	10.2 5.8 2.3 219	研磨痕	基端頭部に研磨有り面を成す、基部側面も研磨が行き届く 側面は基部、刃部とも厚く、刃の欠けが激しい 研磨は刃部表裏、一部横方向の研磨有り	輝緑岩	HB②-I.L11 V(黄砂層上面) 取1176
	10	石斧	撥形厚手	円刃両刃	完形	小型	9.6 5.0 2.5 197	研磨痕	側面観は刃面直上が最も厚く、基端やや薄い、研磨明瞭 全面研磨が行き届く、窪み部分は研磨行き届かず 刃先は明瞭に残る	輝緑岩	HB②-I.K12 V(貝層①) 取1102
	11	石斧	撥形薄手	直刃片刃的両刃	完形	小型	9.8 4.4 2.3 171	研磨痕	全体に形は整い細身、基部は表裏とも中央を両側から平坦に研 磨、稜線が明瞭で刃部は風化による劣化か、研磨面が剥落 表面片側、裏面全体の一部に研磨残る	砂岩	HB①-L16 V(5層褐色細砂質土) 取221
	12	石斧	分銅形厚手	円刃片刃的両刃	完形	小型	9.4 6.0 2.3 207	研磨痕	薄手で全体に成形良好、研磨良く基部、刃部、表裏全面に及び 側面一部刃部近くも研磨、刃部研ぎ出し丁寧で滑沢 小さい刃こぼれ数ヶ所あり、刃線は残る	斑レイ岩	HB①-M1 IV(3層青灰粘質土) 取87
	13	石斧	撥形薄手	直刃両刃的片刃	完形	小型	9.4 4.1 2.1 123	研磨痕	細身、基端まで形成し丸く調整、刃部は三方向から研ぎ出す 一部刃こぼれあり、研磨は基部、刃部の表裏 裏面は刃部～基部の中央	輝緑岩	HB①-J13 V(4層橙色シルト) 取135
	14	石斧	不明薄手	円刃片刃的両刃	刃部	—	6.7 6.9 2.1 152	研磨痕	基部は破損し、全体の大きさは不明、基部の一部と刃部のみ残存 側面観の厚みは一定で刃部は片刃的 研磨は刃部表裏面と片側側面、基部の一部に確認	輝緑岩	HB②-I.K11 V(貝層①上面) 取1016
	15	石斧	撥形厚手	円刃—	完形	小型	8.3 6.2 2.7 212	研磨痕	基端のつくり不定形、破損か不明、研磨は基部・刃部の表裏面 基部表面は自然を呈し、裏面は基部全体に研磨 両側面自然を呈す、刃部研磨良好、刃線残らず、刃こぼれ7カ所 あり	輝緑岩	HB①-P9 IV(3層青灰色シルト) 台583
第63図 図版31	16	石斧	撥形薄手	偏刃両刃	完形(刃潰れ)	小型	9.3 7.3 2.2 291	研磨痕	基部の長さには比べ刃部幅広い、研磨は基部、刃部、右側面一部 の表裏、特に中央が良好 基端は擦りて面を成し、刃線～刃面稜線の長さは短い 鉱物は細かい雲母有り、刃先は潰れる	輝緑岩	HB④-I.L1 IV(IV) 台166
	17	石斧	短冊形薄手	直刃片刃	刃部	中型	9.7 6.6 1.9 219	研磨痕	基端頭部は破損、全形態は不明 研磨は基部、刃部表裏面、両側面に明瞭 刃面付近の厚みも薄く、片刃の部類に含み直刃	輝緑岩	HB②-IJ10 V(橙色シルト①) 台3001
	18	石斧	短冊形薄手	偏刃片刃	完形	小型	8.9 5.2 2.1 180	研磨痕	成形よく表裏とも基部、刃部研磨良好、両側面も部分的に研磨 表面の刃部研ぎ出しは基部から一気に研磨か 裏面刃部研ぎ出しは片刃目的で斜め方向に研磨 線条痕から判断し刃は二度に分け研磨	輝緑岩	HB①-N20 V(3層青灰砂) 台654
	19	石斧	短冊形薄手	直刃片刃	完形	小型	8.9 5.5 1.6 143	研磨痕	扁平、研磨は基部・刃部表裏・両側面に顕著、基端頭部も研磨で 面を成す刃部研磨かなり明瞭、刃面との境、鋸の稜線明瞭 刃に線条痕有り、基部に一部剥落部分あり 石質は石英脈表面に表われる箇所も有り	輝緑岩	HB②-I.K12 V(貝層②) 台3019

第14表-2 石器観察一覧

(質量単位:cm, g)

図版	図番号	器種	形態 (平面側面)	刃部 (平面側面)	完/破 残存部 位	分類	最大長 最大幅 最大厚 重量	加工痕 使用痕 の有無	観察事項	石質	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取上)番号
第63図・図版31	20	石斧	短冊形 薄手	直刃 片刃	刃部	小型	6.5 4.5 1.6 81	研磨痕	扁平資料、基部の一部、基端破損、全体の形状、大きさ不明 研磨痕は基部の一部、刃部表裏面に有り 特に刃部と両側面が顕著、刃部の研ぎ出しは浅い	輝緑岩	HB②イ.L11 V(貝層②) 取1180
	21	石斧	短冊形 薄手	直刃 片刃	完形	小型	6.9 4.1 1.1 66	研磨痕	全体に成形は薄く、基端頭部も研磨で面を成す 研磨は基部・両側面・刃部表裏面に有り 片刃を成し、刃こぼれ数カ所有り	シルト岩	HB②イ.J11 V(暗褐色シルト) 取1103
	22	石斧	— —	偏刃 片刃	刃部	小型	5.5 4.6 1.6 66	研磨痕	基端部分破損、薄手で刃部の平面形態は偏刃 表裏面とも研磨明瞭で折損した基部、両側面に研磨面が部分的 に残る 刃部は両面から薄く仕上げ、刃こぼれは数ヶ所	輝緑岩	HB①.L14 V(5層黄色砂) 取205
	23	石斧	— —	直刃 片刃的 両刃	刃部	小型	4.7 4.8 1.6 67	研磨痕	基部破損、短冊形と想定、薄手で刃部は両刃を成す 刃部の平面形態は直刃で表裏面は研磨明瞭 基部、両側面の一部も研磨が及ぶ 刃の研ぎ出し箇所は研磨が特に顕著	輝緑岩	HB①.K13 V(4層混貝層) 取181
	24	石斧	短冊形 薄手	直刃 片刃	完形	小型	8.4 2.9 1.1 52	研磨痕	幅の細い鑿状利器を呈す、基部中央が屈曲、転石利用の形跡 研磨は基部、刃部表裏に確認され両側面、窪み部分に研磨は至 らず 刃部研磨は横方向に線条痕有り	砂岩	HB②イ.J10 V(橙色シルト②) 取1137
	25	石斧	柱状形 薄手	直刃 片刃	完形	小型	9.3 2.1 1.3 50	研磨痕	細身、小型柱状片刃石斧・無挾タイプ 研磨は基端の一部、基部の一部・両側面・刃部表裏面に有り	シルト岩	HB②イ.J12 V(貝層①上面) 取1031
	26	石斧	短冊形 薄手	直刃 片刃	完形	小型	5.2 3.1 1.0 32	研磨痕	鑿状を呈し、刃部は片刃の直刃、全面に研磨あり 基端も研磨を施し面を成す、窪み部分に研磨及ばず研磨良好 一部刃こぼれ有り、刃線は残る 小型の鑿状利器か？	輝緑岩	HB①.J14 V(4層橙色シルト) 取142
第64図・図版32	27	石斧	不明 厚手	— —	基部	小型	7.0 4.9 3.3 149	研磨痕	基端頭部に向かい先細り、側面は刃部方向に向かい厚い 基部の成形良好、表裏研磨有り 側面に研磨を施した際の幅1.0~1.5cmの稜線有り 刃部は破損	輝石安山岩	HB①.L14 中央ベルト V(3層暗褐色シルト) 台655
	28	石斧	不明 —	— —	基部	—	8.5 5.6 3.1 236	敲打調整 研磨痕	基部のみ残存、形状三角形、基端頭部も面を成す 側面均等厚さ有り 研磨は表裏面・側面に成形時の敲き痕跡有り 刃部形態不明	輝緑岩	HB②ロ.R12 Ⅲ 2049SD 取2001
	29	石斧	短冊形 薄手	偏刃 片刃	完形	中型	10.9 4.9 2.1 138	成形痕 調整痕 研磨痕	全体の形状は成形の痕跡有り 基部表裏面、側面に研磨はみられず自然面呈す 刃部のみ研磨有り 刃部刃渡り表面から約2cm、裏面から2.5cm程度、片刃を成す	砂質片岩	HB②ロ.R12 Ⅲ 2049SD 台3366
	30	石斧	短冊形 薄手	— —	未製品	—	11.4 4.7 2.0 167	粗加工 研磨痕なし	基部は細身・薄手、荒割り状態の段階 表裏・側面周縁を粗加工後、細かく調整、研磨は全くなし 片刃石斧製作過程の段階か	斑レイ岩	HB②イ.ベルト V(橙色シルト①) 台3010
	31	転用品	撥形 厚手	円刃 両刃	完形	小型	8.6 5.9 3.2 247	研磨痕	敲石に転用、基端欠損、全体に成形良好 研磨は基部表裏面浅く、刃部は顕著 裏面は刃面中央が破損剥離有り、刃潰れで刃線を失う	砂岩	HB①.L12 V(4層橙色シルト) 取2
	32	転用品	不明 厚手	— 片刃	刃部	小型	6.8 4.4 3.3 176	敲打痕 研磨痕	基部中央から上部破損後に敲石に転用か 基部肉厚、原形は長い棒状石斧と想定 基部途中〜刃部は研磨良好、片側側面は破損、刃部は刃潰れ 破損箇所も敲きの痕跡有り、原形時は片刃と想定	斑レイ岩	HB①.L14 V(4層混貝層) 台653
	33	石斧	不明 薄手	— —	刃部	—	4.6 3.3 1.1 23	研磨痕	表裏面の研磨は明瞭で側面は打割により破損 スレート状の様相を呈す、刃先に刃線認められず 表裏面とも刃面部分の研磨も観察される	黒色片岩	HB④ロ.Q10.11.12 V(VII) 台193-1
第65図・図版33	34	磨石	俵形		完形	小型	6.3 4.7 3.3 140	研磨痕 擦痕	平面は楕円俵形、側面は短棒状 表裏面、研磨顕著、裏面一部欠損 上端、下端に擦りの痕跡	石英斑岩	HB①.M14 V(4層混貝層) 取174
	35	磨石	長楕円形		破損	小型	8.3 3.9 2.0 95	研磨痕	転石を利用、浅く研磨を加え裏面は打割で破損 自然面露呈、表・両側面・上下に滑沢な研磨	砂岩	HB④イ.K1 V(VIII) 台175-1
	36	敲石	扁平棒状		完形	小型	10.2 4.0 3.1 211	敲打痕	表面敲打中央に2カ所、裏面、側面にも中央に有り 敲打の新旧前後関係が判別可能 敲打痕は上下両端に面を成す、表裏・両側面も同様	砂岩	HB④イ.N3 V(VIII) 台191-1
	37	磨石	半球状		完形	小型	6.8 5.5 3.6 201	擦痕 敲打痕 研磨痕	平面楕円形、側面は縦、横とも半球状 表面中央に稜線あり、両側から擦りに使用の痕跡 研磨に至らず、裏面は平坦で部分的、又、若干研磨	斑レイ岩	HB①.M14 V(4層混貝層) 取165
	38	磨石	楕円形		完形	小型	7.0 5.8 2.9 172	研磨痕	表面研磨有り、裏面薄く剥落、全体に形状整う 研磨面の光沢、風化作用により失われた可能性	輝石角閃石 ・安山岩	HB①.K19 V(4層混貝層) 取156

第14表-3 石器観察一覧

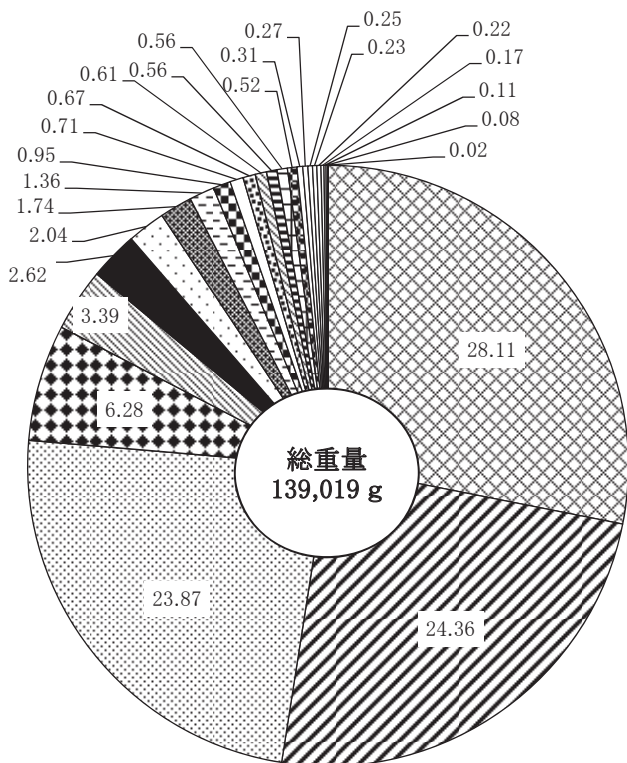
(法量単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	器種	形態	完/破 残存部 位	分類	最大長 最大幅 最大厚 重量	加工痕 使用痕 の有無	観察事項	石質	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取上)番号
第 65 図 ・ 図 版 33	39	敲石兼 磨石	楕円形	完形	小型	7.7 6.0 2.1 222	研磨痕 敲打痕	平面やや縦長楕円形、側面厚手均等 下側面、扁平楕円、研磨痕、表裏面に確認 上端下端に敲打痕跡有り	輝緑岩	HB①.J15 V(5層黄色砂) 取217
	40	磨石	楕円形	完形	小型	7.9 6.2 3.6 263	研磨痕 擦痕	平面楕円形、側面上部太く下部細い 下面右側太く左側細い、使用痕の位置は表裏面 研磨周縁に擦痕	角閃石 安山岩	HB①.L13 V(5層黄色砂) 取207
	41	敲石兼 磨石	不定形	破損	小型	7.2 5.7 4.5 281	研磨痕 敲打痕 擦痕	残存サイズ小型、下面・左側面破損、表裏面研磨 表裏面中央に敲打痕浅く確認 上面、右側面に擦痕観察有り	砂岩	HB①.J14 V(4層橙黄色シルト) 取145
	42	敲石兼 磨石	俵形	破損	小型	9.4 5.4 4.6 358	敲打痕 研磨痕	自然転石利用、平坦面は部分的研磨が顕著 研磨面一面のみ、敲打痕は上下端部2カ所 打割面古く時間経過有り 鉱物含有量多、小型だが重量感有り	砂岩	HB④イ.L2 V(VIII) 台177-1
	43	敲石兼 磨石	楕円形	完形	小型	8.4 7.4 4.9 517	研磨痕 敲打痕 擦痕	表裏面の研磨明瞭、使用頻度高く面が平坦 上下・側面周縁に小さい敲打痕、擦痕有り 下面擦痕は二面、特に顕著	斑レイ岩	HB①.L18 V(4層混貝層) 取170
第 66 図 ・ 図 版 34	44	磨石	変楕円形	完形	中型	9.1 8.5 4.9 626	研磨痕 敲打痕 擦痕	平面変形石鱗状、表裏面研磨痕顕著 両面中央厚く左右に使用による歪み 上下・左右に擦痕、敲打痕確認	砂岩	HB①.L14 V(4層混貝層) 取184
	45	磨石	楕円形	完形	中型	9.5 8.7 5.9 864	研磨痕 敲打痕 擦痕	形状やや楕円、側面・周縁に擦痕有り 上・下面に浅い敲打痕有り 厚手で研磨は顕著、研磨は表裏面に有り	輝緑岩	HB①.K13 V(4層混貝層) 取173
	46	敲石兼 磨石	楕円形	完形	中型	11.1 9.5 4.8 873	研磨痕 擦痕	表裏面研磨明瞭、上・下・側面周縁は擦痕浅い 表裏面中央平坦に研磨削りか？ 使用による歪み中央～両側に傾く、上面に比べ下面厚い	砂岩	HB①.K12 V(4層混貝層) 取99
	47	敲石	変楕円形	破損	小型	9.6 7.7 4.3 361	敲打痕 擦痕	破損し片面のみ残存、左右対称不明 表面中央・右側面に敲打による窪み明瞭 裏面大きく破損、上面に擦痕有り	角閃岩	HB①.P10 IV(3層青灰粘質土) 台430
	48	敲石兼 磨石	石鱗状	完形	中型	12.6 9.1 5.0 994	研磨痕 敲打痕	表裏研磨明瞭、両側面敲打による窪み 上・下面敲き痕の面を成す 研磨石質により滑沢明瞭	安山岩	HB②イ.K11 V(貝層②) 取1042
	49	磨石	不定形	破損	小型	8.7 6.5 5.8 435	研磨痕 擦痕	左側面・下面破損し、自然面露呈 残存部四分の一程度と想定 上面擦痕有り、表裏面研磨滑沢	砂岩	HB①.L18 V(4層混貝層) 取149
	50	敲石兼 磨石	石鱗状	完形	中型	13.5 8.5 5.2 999	研磨痕 敲打痕	表裏面中央浅い敲きの痕跡、両側面は深い敲きの痕跡 表裏面窪み明瞭、上・下面敲打面を成す、研磨風化？	砂岩	HB②イ.L10 V(黄砂層) 取1236
第 67 図 ・ 図 版 35	51	敲石兼 磨石	変形石鱗状	完形	小型	8.5 8.7 6.6 727	敲打痕 研磨痕	敲きの痕跡は表裏・側面・上・下面有り 研磨痕上・下面に部分的僅かに確認 裏面・上面の敲打顕著、浅い窪みを成す	砂岩	HB②ロ. その1区 表採 台3342-1
	52	磨石	楕円形	破損	小型	9.1 9.8 6.4 747	研磨痕	上面・裏面・左側面大きく破損、自然面露呈 原形の二分の一残存 表裏・右側面・下面は研磨明瞭	砂岩	HB①.L12 V(5層黄色砂) 取211
	53	敲石兼 磨石	長楕円形	完形	大型	12.3 9.2 6.7 1,186	研磨痕 敲打痕 擦痕	表裏面に研磨有り 表面中央・右側面・上・下面に敲打も確認 左側面に擦痕有り	片状砂岩	HB①.L11 V(5層黄色砂) 取215
	54	敲石兼 磨石	俵形	完形	中型	10.1 7.1 5.1 583	研磨痕 擦痕 敲打痕	研磨痕は表裏面中央に有り顕著 上・下・左右・裏面に浅い敲打痕 両側面に擦痕で面を成す	砂岩	HB①.K14 V(4層橙黄色シルト) 取89
	55	磨石	変楕円形	完形	大型	11.3 11.0 6.4 1,290	研磨痕	研磨滑沢、転石の形状に合わせた使用痕 表面は研磨四面・裏三面、面を成す 側面研磨至らず自然面露呈部分あり、上・下面は自然状態	砂岩	HB②イ.J・K12 V(貝層①上面) 台3020
	56	磨石	変楕円形	完形	大型	14.5 10.6 6.5 1,688	研磨痕	表裏・両側面・上下ほぼ研磨 打割により部分的に自然面露呈 石質美見特殊な印象	ひん岩	HB①.K20 V(4層混貝層) 取191
第 68 図 ・ 図 版 36	57	磨石	楕円形	完形	大型	16.6 11.7 5.2 1,512	研磨痕	形状楕円形、側面厚手、成形かなり良好 表裏面に研磨痕浅く有り 風化により研磨が剥落した可能性も有り	砂岩	HB①.M14 V(4層混貝層) 取42

第14表-4 石器観察一覧

(法量単位:cm, g)

図版番号	図番号	器種	形態	完/破 残存部位	分類	最大長 最大幅 最大厚 重量	加工痕 使用痕 の有無	観察事項	石質	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取上)番号
第68図・図版36	58	磨石	変円形	完形	大型	13.0 12.1 8.0 1,780	研磨痕	表面中央厚く、右側面に薄い、表面は研磨明瞭又、部分的に黒光り 裏面浅く研磨あり、側面周縁は自然面若干残る	砂岩	HB②イ I (排土) 台3002
	59	磨石	三角錐状	完形	大型	14.9 12.1 10.1 2,428	研磨痕	ほぼ全面研磨、裏面平坦、縦長やや三角四面体、一部打割欠損 表面中央高く稜線は明瞭 使用による稜線顕著	斑レイ岩	HB①.K18 V(4層橙色シルト)取127 HB②イ.K11 V(黒砂層上面) 追加調査 取1280
第69図・図版37	60	剥片石器	略方形	完形	—	3.5 2.7 0.9 10	剥離成形 荒割り チャッピング	形状は粗加工段階? 表裏に調整剥離らしき痕跡有り しかし、上下端に楔形石器特有の対極の使用痕なし 質的に粗悪な印象、自然面残る、楔形石器の模倣品か	チャート	HB④イ.O8 IV (IV) 台156
	61	スクレイパー	不定形	完形	—	7.0 5.4 2.4 106	剥離成形	加工痕あり、打ち割りの痕跡明瞭 両側面の縁辺部は表裏面から剥離 右側面に潰れ?	チャート	HB②イ. ベルト.V(貝層②) 台3028
	62	敲石	半球状	破損	小型	6.6 5.8 3.1 149	チャッピング	球体を半欠した形状 表面破損部縁に加工痕か? 細かい打ち割り痕 裏面は自然面の状態	チャート	HB②イ.L12 V(暗褐色シルト) 取1094
	63	用途不明石器	舟形状	—	—	10.6 6.0 3.7 310	研磨痕	全体に粗く成形、表裏面一部研磨痕有り 側面加工痕あり	砂岩	HB④イ.K3 IV (IV) 台162
	64	有孔石器製品	逆三角状	完形	—	16.6 8.1 2.6 373	穿孔痕	表裏全て自然面、研磨なし 左側厚く右側薄い、加工痕は穿孔部のみ 孔は両面から穿つ 表面左下、裏面右上から斜め方向に穿孔	凝灰岩	HB④ロ. ロ地区周辺 表採 台173
	65	石皿	不定形	破損	中型	12.9 15.2 6.4 1,745	研磨痕	残存形態は不定形、左側面、上面、下面破損 原型の六分の一以下残存資料と推測 表裏中央部に使用による研磨痕有り	片状砂岩	HB②イ.L10 V(赤砂層) 取1237
	66	石皿	不定形	破損	大型	30.2 23.7 6.9 6,000	研磨痕 敲打痕	使用面中央から破損か 使用箇所は片面のみ、表面一部に研磨有り 裏面中央に敲打ちらしき痕跡有り	片状砂岩	HB②ロ.S12 III 2049SD 取2005
第70図・図版38	67	石皿	楕円形	完形	大型	48.5 31.6 8.8 18.5kg	研磨痕	形状やや楕円、上部厚手、下部に向かい薄い 使用痕は表面の片面のみ 表面中央やや下部に円形の窪み状研磨有り	片状砂岩	HB②イ.J9 V 1039SX 取1378



第59図 石器石質重量比 (%)

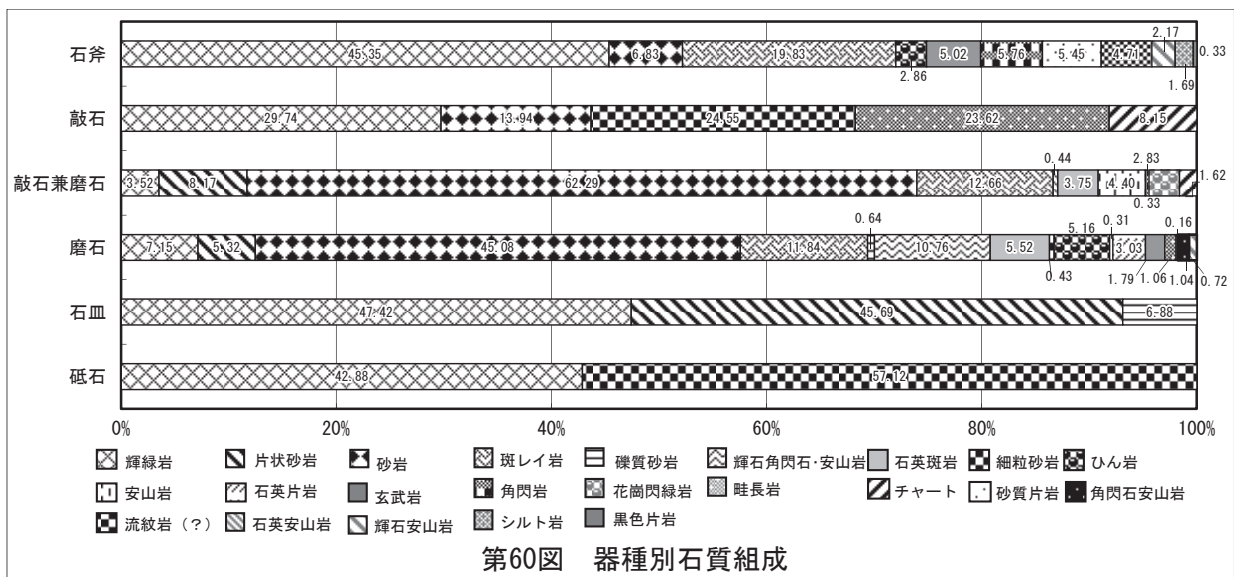
火成岩	変成岩		堆積岩	
	輝緑岩	28.11	片状砂岩	24.36
斑レイ岩	6.28	石英斑岩	2.04	
輝石角閃石・安山岩	2.62	石英片岩	0.71	
ひん岩	1.36	砂質片岩	0.31	
安山岩	0.95	黒色片岩	0.02	
玄武岩	0.67	砂岩	23.87	
角閃岩	0.61	礫質砂岩	3.39	
花崗閃緑岩	0.56	細粒砂岩	1.74	
珪長岩	0.56	チャート	0.52	
凝灰岩	0.27	サンゴ塊	0.22	
角閃石安山岩	0.25	シルト岩	0.08	
流紋岩(?)	0.23			
石英安山岩	0.17			
輝石安山岩	0.11			

第59図に石器に使用された岩石の種類と割合をグラフに示した。岩石は火成岩系統 14 種、堆積岩系統 6 種、変成岩系統 5 種の計 25 種が確認された。

最も多く使われた種類は輝緑岩が 28.11%、次いで片状砂岩、砂岩、斑レイ岩である。この 4 種で出土量の五分の四以上を占める。石質同定の結果、大城逸朗氏によると（以下「」は同じ）「斑レイ岩は徳之島、奄美、トカラ、九州本土の 200 キロ圏内共通の産出地であろう」との見解を得た。

火成岩系統のうち輝緑岩以外の種類は量的に少量で、その他、斑レイ岩 6.28%、輝石角閃石安山岩 2.62%、ひん岩 1.36%、安山岩 0.95%、玄武岩 0.67%、角閃岩 0.61%、花崗閃緑岩 0.56%、珪長岩 0.56%、凝灰岩 0.27%、角閃石安山岩 0.25%、流紋岩 0.23%、石英安山岩 0.17%、輝石安山岩 0.11%の岩石が確認された。少量ながら火成岩系統で多種類の岩石が石器の素材として使用されていることが判る。

堆積岩系統の種類では砂岩が多く 23.87%、その他、礫質砂岩 3.39%、細粒砂岩 1.74%、チャート 0.52%、サンゴ塊 0.22%、シルト岩 0.08%で、沖縄県内で産出される岩石も認められた。チャート素材の石器はスクレイパー、剥片石器、敲石が出土、チャートの出土量は 18 点、1,377 g である。質の良いチャートも僅かにあるが、全体に破片が多い。堆積岩系統の種類は県内、中南部、当遺跡周辺でも採集可能である。**変成岩系統**では片状砂岩が多く 24.36%で、石英斑岩 2.04%、石英片岩 0.71%、砂質片岩 0.31%、黒色片岩 0.02%が確認されている。



第60図に量的に多い主要な 6 器種について個別の比率を示した。まず、石斧に最も多いものは輝緑岩で石斧全体の 45.35%にあたる。次いで斑レイ岩が多く 19.83%である。使用される岩石の多くが輝緑岩と斑レイ岩だが、今回の調査で出土した石斧は岩石の種類が多く、その他、砂質片岩、ひん岩、玄武岩、角閃岩、流紋岩、輝石安山岩、黒色片岩、シルト岩が石斧に使われている。小堀原遺跡（2012）、伊礼原遺跡（2007）では砂岩の石斧も確認され、砂岩の種類によっては含まれる鉱物の比率により硬質なものは、石斧に適した素材の場合もある。

特にシルト岩の石斧は同定の結果、「島尻層群中のノジュールに類似するが石質の顔つきは沖縄産ではないようだ」との見解と又、「九州本土、宮崎近辺でもシルト岩は産出する」との事である。

石器全体のうち火成岩系統の種類は、周辺地域から持ち込みの可能性が考えられるとの意見であった。又、流紋岩質の石斧が 1 点出土し同定の際、石質確認のため硫酸に浸し経過観察と検証を行ったが、付着物が石斧全体を覆い識別困難の為、「おおよそ流紋岩であろう」との同定である。

敲石は 5 種の岩石が使用され、輝緑岩が 29.74%、細粒砂岩が 24.55%、珪長岩が 23.62%、砂岩

が 13.94%、チャートが 8.15%の割合である。

敲石兼磨石は石器に使用された岩石が 10 種類、比率の多い順に砂岩が 62.29%、斑レイ岩が 12.66%、片状砂岩が 8.17%、安山岩が 4.40%、輝緑岩が 3.52%、石英斑岩が 3.75%、花崗閃緑岩が 2.83%、チャートが 1.62%、輝石角閃石安山岩が 0.44%、角閃岩が 0.33%である。

磨石は 74 点中 31 点が砂岩で割合は 45.08%を占める。磨石は石斧以上に点数も多く岩石の種類も 16 種と多い。その他比率の多い順に斑レイ岩 11.84%、輝石角閃石安山岩 10.76%、輝緑岩 7.15%、石英斑岩 5.52%、片状砂岩 5.32%、ひん岩 5.16%、石英片岩 3.03%、玄武岩 1.79%、珪長岩 1.06%、角閃石安山岩 1.04%、石英安山岩 0.72%、礫質砂岩 0.64%、細粒砂岩 0.43%、安山岩 0.31%、砂質片岩 0.16%である。この中に少量ながら火成岩系統の資料が含まれ、中には玄武岩の磨石が 2 点認められた。玄武岩は火成岩系統に分類され久米島、栗国島などで産出するが、その 2 点の産地が久米島とは限定できない。器種では磨石の他、石斧にも玄武岩の資料が確認された。

石皿は出土量が少なくほぼ同種の岩石を使用しており比率は輝緑岩が 47.42%、片状砂岩 45.69%、礫質砂岩が 6.88%である。砥石は 5 点のうち破損資料は同一個体と思われる。細粒砂岩が 57.12%、輝緑岩が 42.88%である。

小結

今回、報告した石器について考察すると、石斧の出土は磨石と比較して多くないが、成形や形状、研磨などについて一般的に簡素な作りの石斧と丁寧な作りの石斧の 2 種類の石斧が出土している。なかでも刃部の仕上げなど研磨の丁寧な資料が出土したことが挙げられる。これらの石斧は在地産の石斧と研磨の状態や石質に違いがみられる。研磨の丁寧な両刃石斧(図 1・2)、扁平片刃石斧(図 17・19・21・25)については持ち込みの可能性も考えられる。図 25 は類例資料が読谷村、中川原貝塚(2001)で出土している。土器も入来Ⅱ式土器など南九州系土器が出土している。石斧のサイズは 12 cm 以上が 1 点のみで、ほとんどがそれ以下の石斧である。

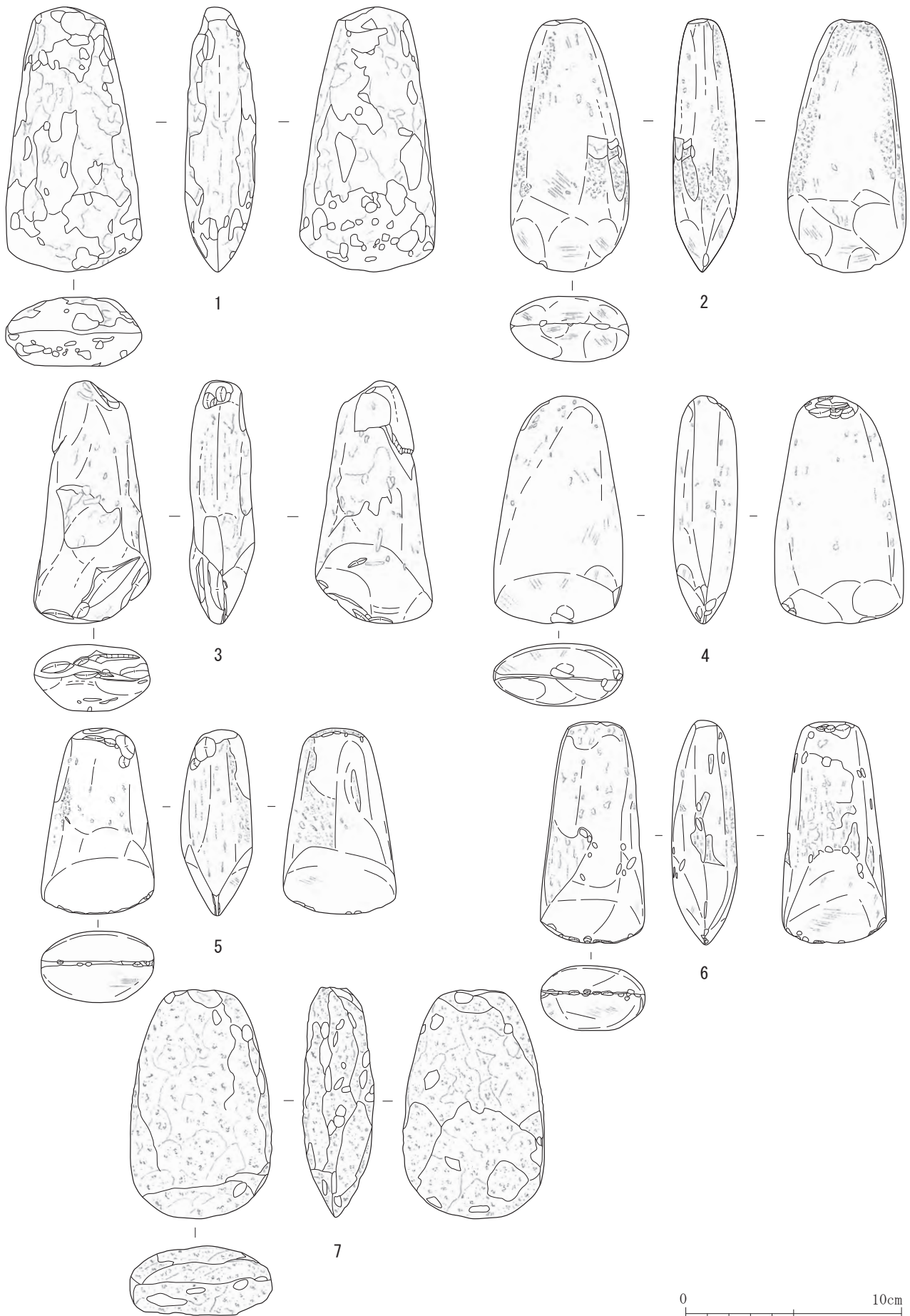
敲打器類は磨石に限らず全般に貝塚時代後期において、それ以前の時期と比べて数量的に大きな変化はみられない。磨石は研磨が顕著で且つ、使用頻度の高い資料が大型資料に認められる。

石皿は完形が 1 点出土、伊礼原 A 遺跡(2014)でも同様に大型の石皿が出土しており又、砥石においても、石皿と同じく大型資料である。大型石器については石質や産地など課題を要す。

石質は輝緑岩が量的にも、使われた器種でも多い。輝緑岩で石斧の多くが作られ、大型砥石も輝緑岩である。火成岩系統の岩石は輝緑岩以外の種類でも少量だが種類は多く、石材の供給地や九州、トカラ、奄美、徳之島との関わりを今後の報告でさらに検討する必要がある。

<引用・参考文献>

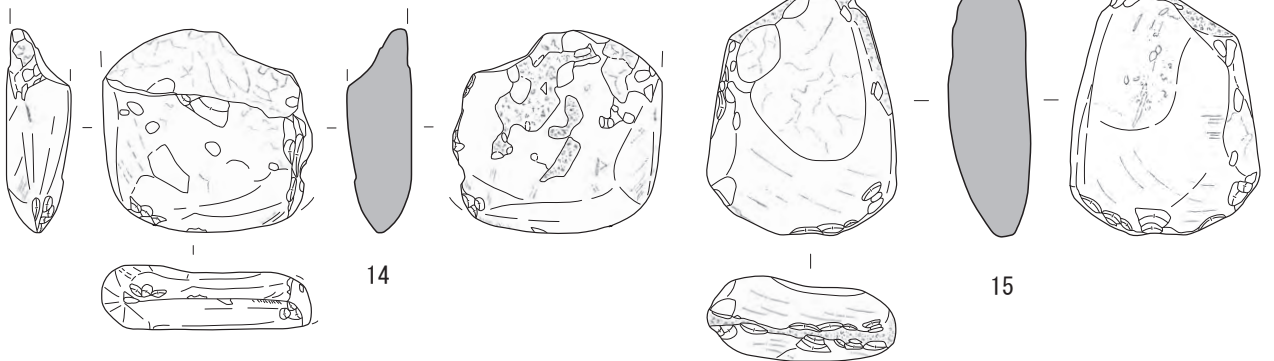
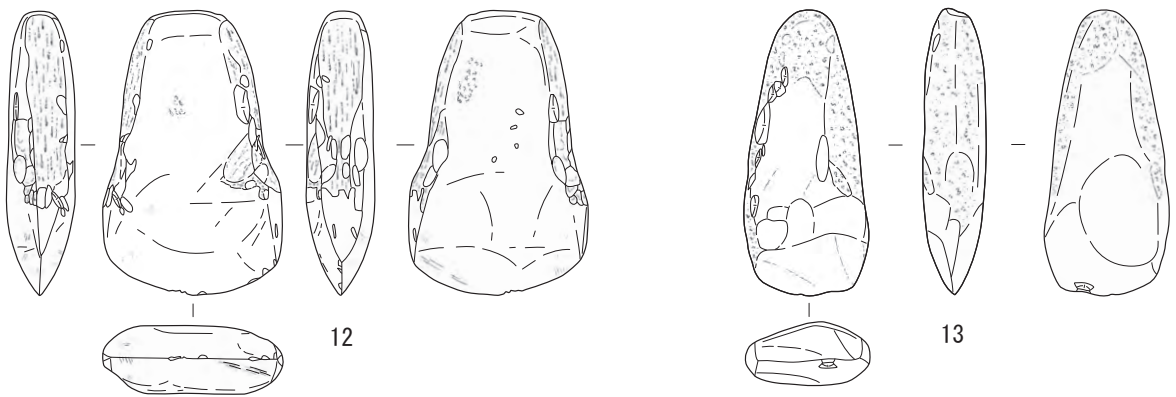
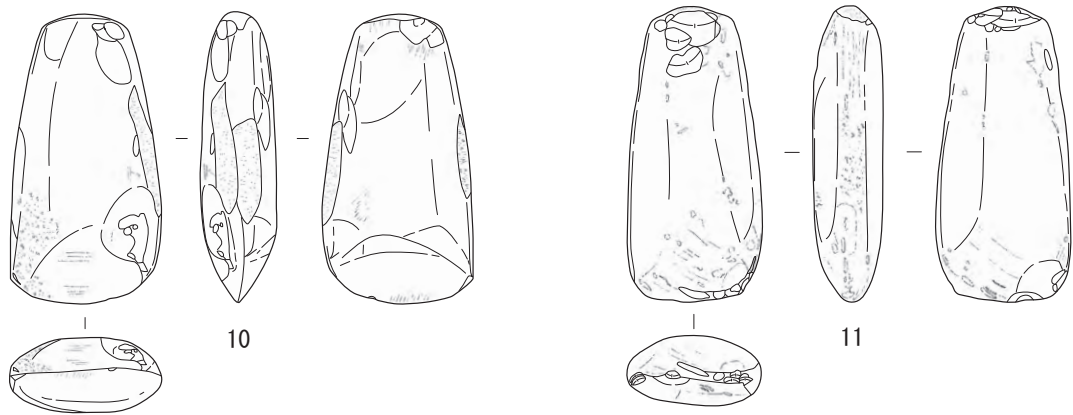
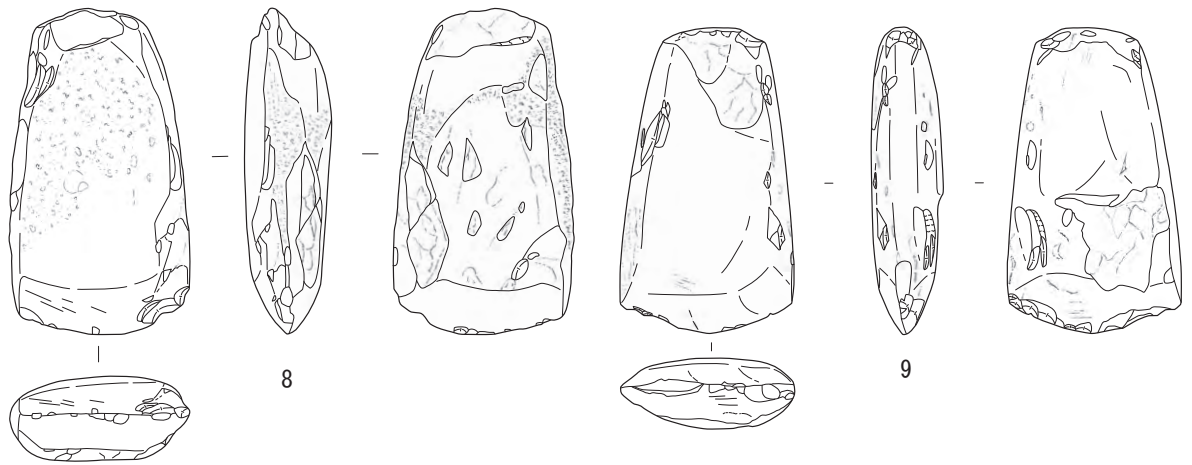
- 仲宗根求他 2001 「読谷村出土の弥生土器・弥生系土器について」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第 25 号
読谷村立歴史民俗資料館編
- 北谷町教育委員会 2005 『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査』北谷町文化財調査報告書 第 23 集
- 北谷町教育委員会 2007 『伊礼原遺跡』北谷町文化財調査報告書 第 26 集
- 山野ケン陽次郎 2010 「琉球列島出土彫画貝製品の製作技術に関する研究」『熊本大学社会文化研究 8』
- 北谷町教育委員会 2010 『伊礼原 E 遺跡』北谷町文化財調査報告書 第 31 集
- 川口雅之 2011 「奄美・沖縄諸島の大陸系磨製石斧」『奄美考古』第 6 号 奄美考古学会
- 北谷町教育委員会 2012 『小堀原遺跡』北谷町文化財調査報告書 第 34 集
- 北谷町教育委員会 2013 『伊礼原 D 遺跡』北谷町文化財調査報告書 第 35 集
- 北谷町教育委員会 2014 『伊礼原 A 遺跡』北谷町文化財調査報告書 第 36 集



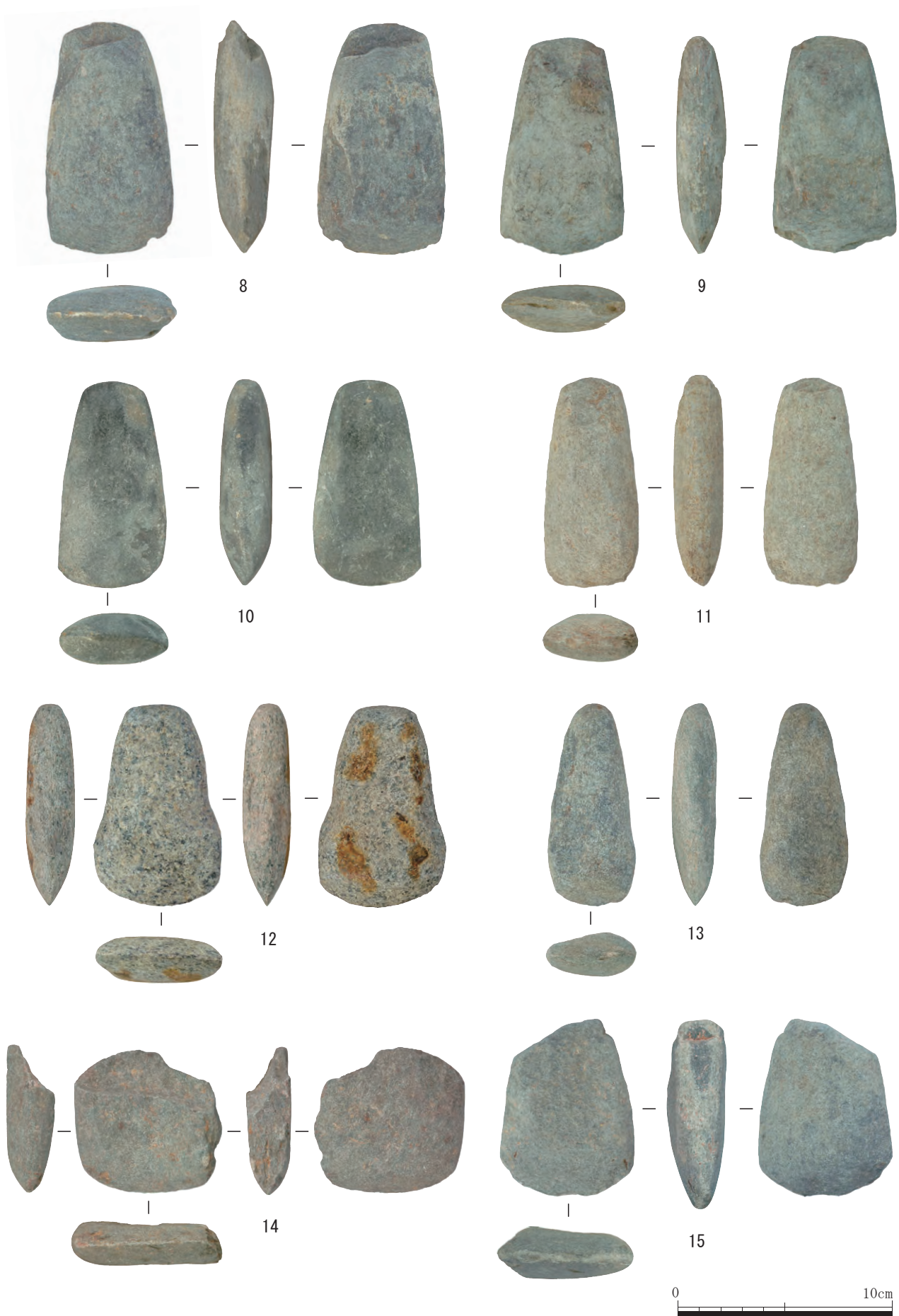
第 61 图 石器 1



图版 29 石器 1



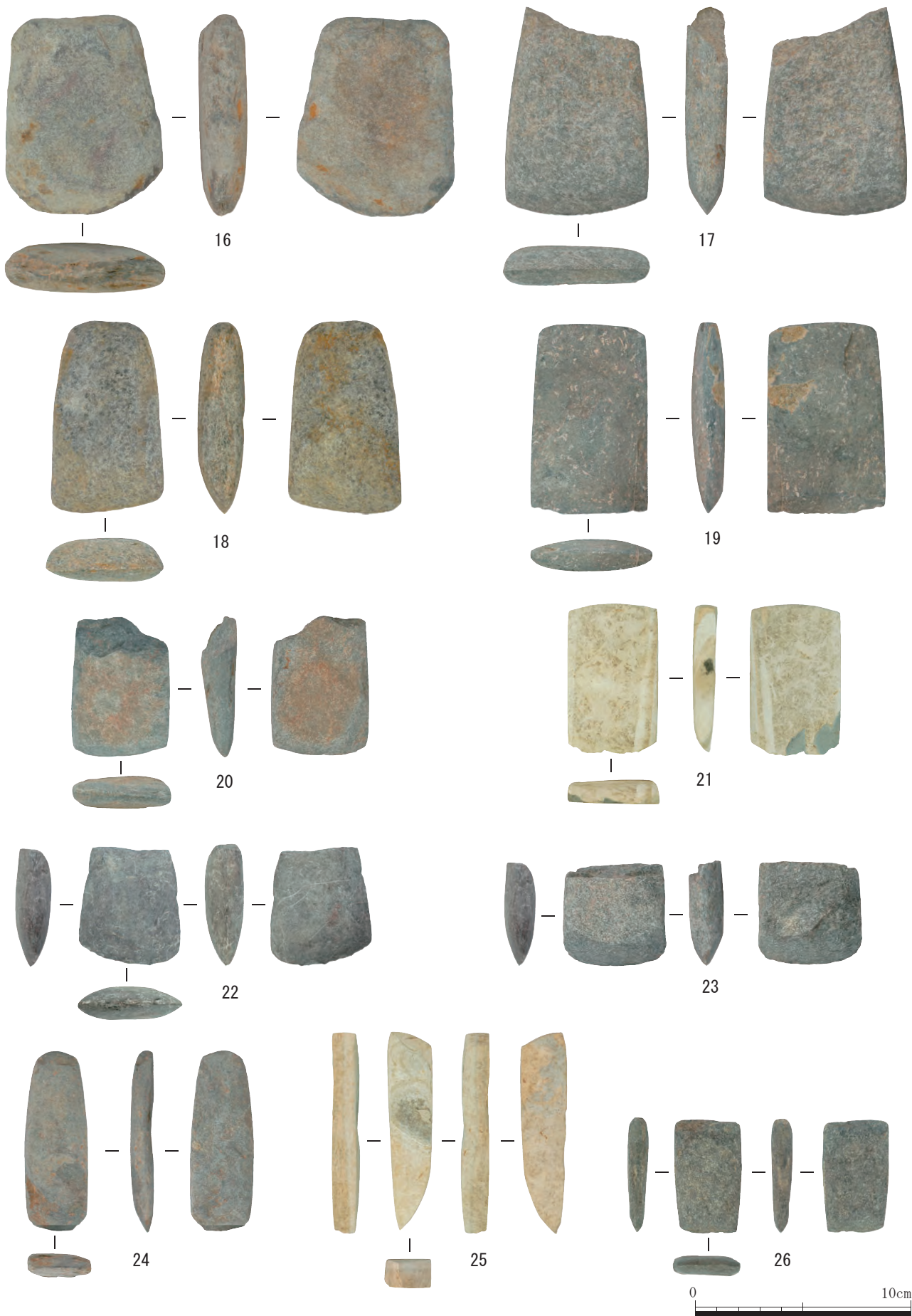
第 62 图 石器 2



图版 30 石器 2



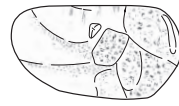
第 63 图 石器 3



图版 31 石器 3



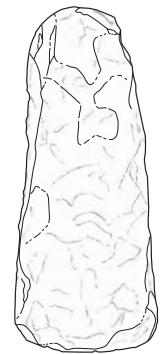
27



28



29



30



31



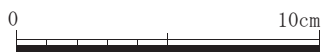
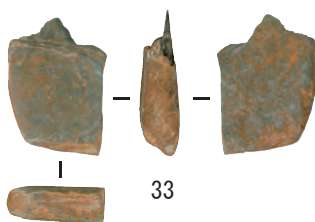
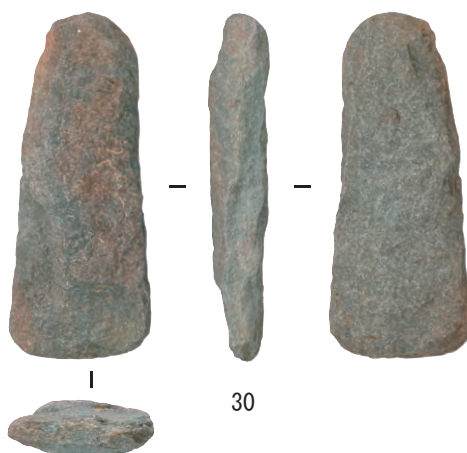
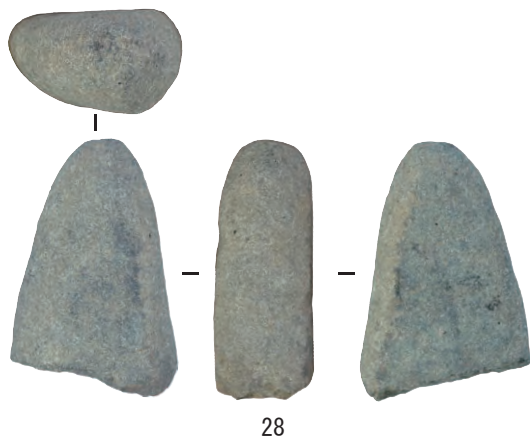
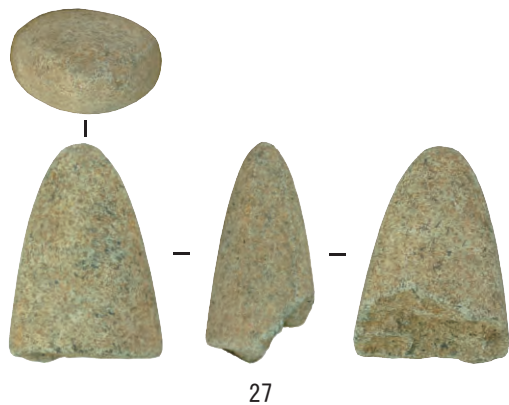
32



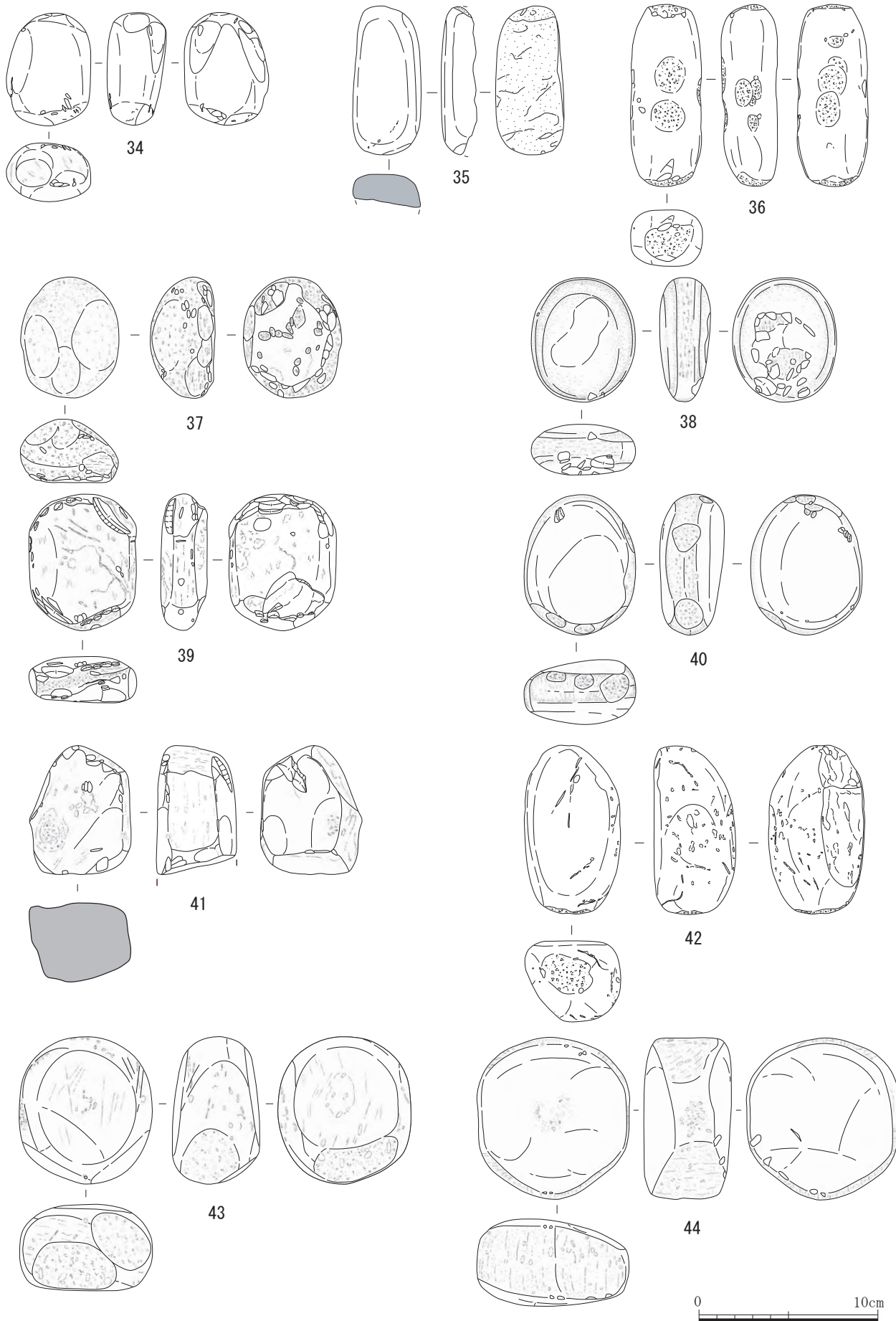
33



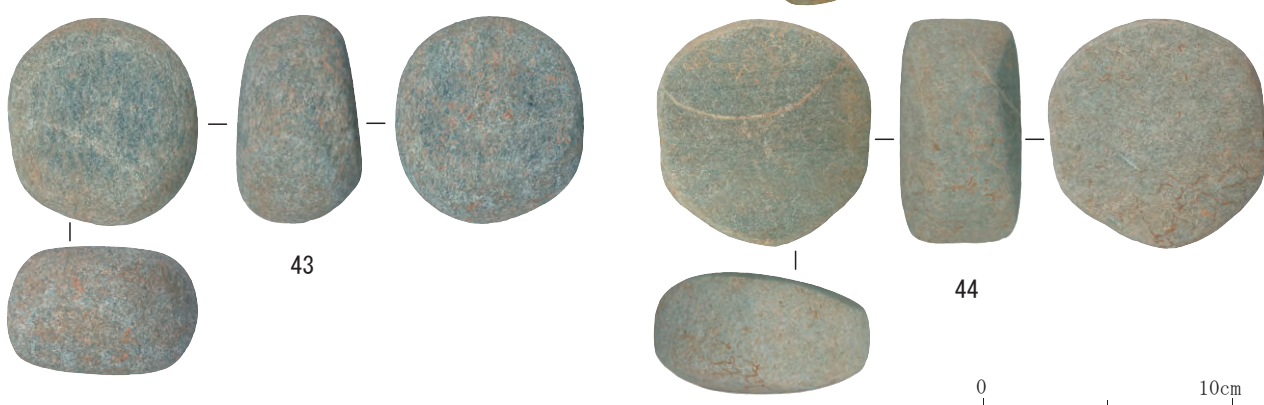
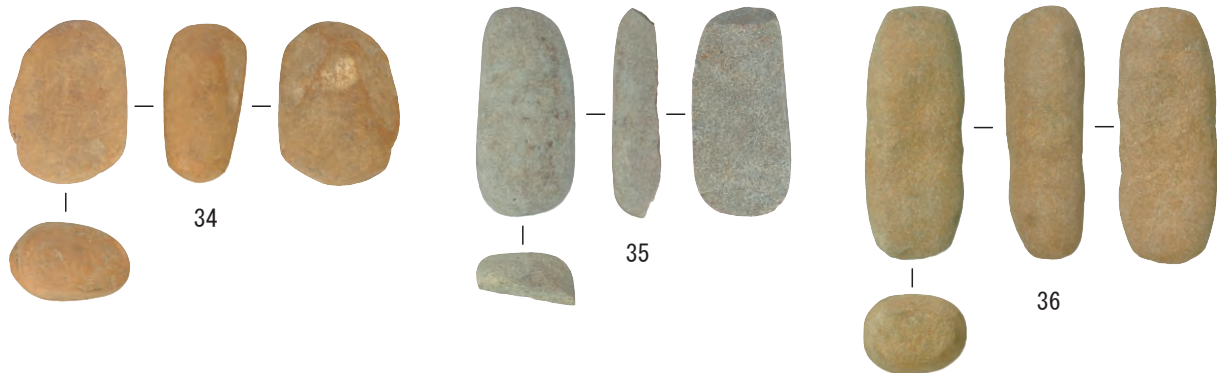
第 64 图 石器 4



图版 32 石器 4



第 65 图 石器 5



图版 33 石器 5



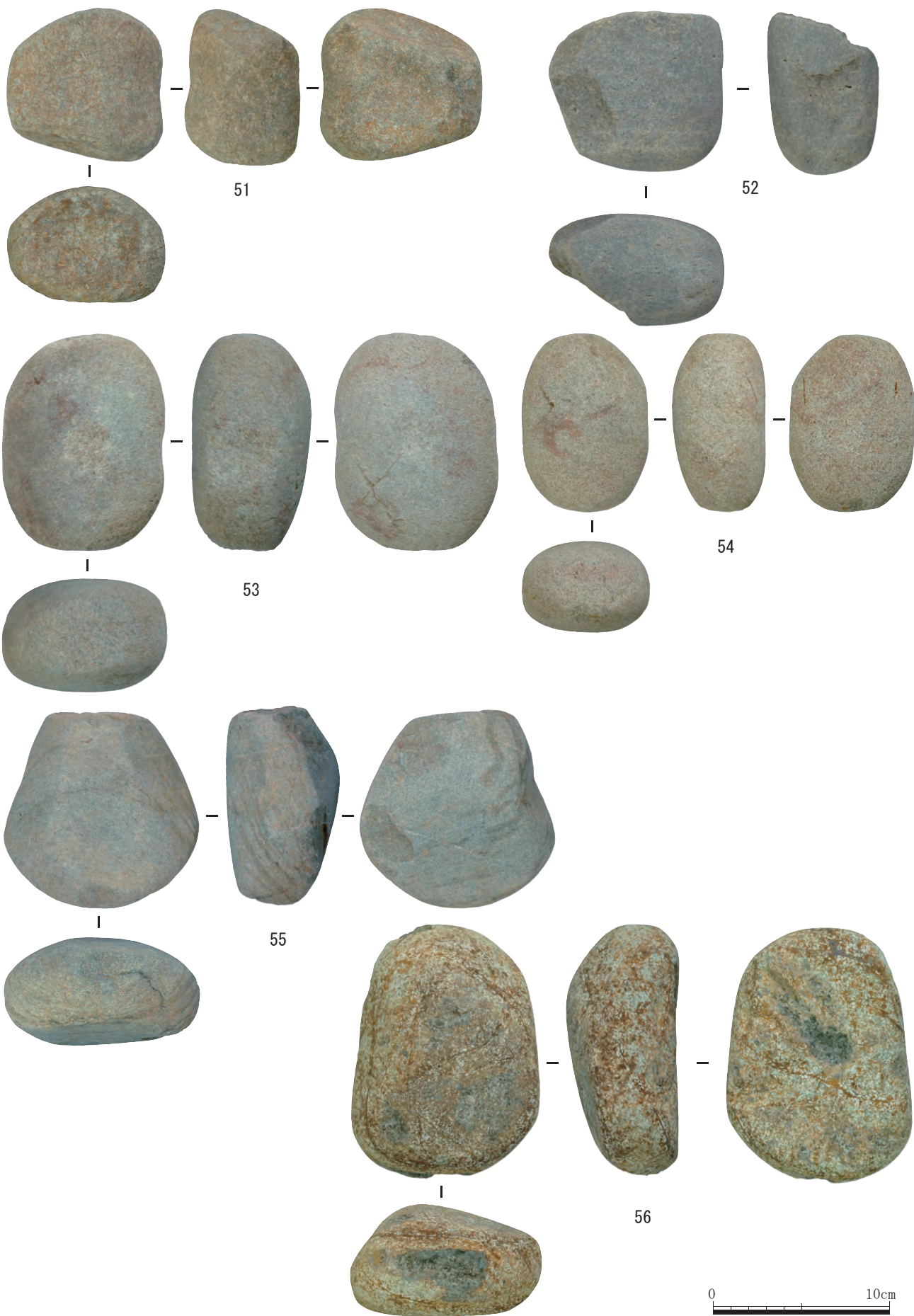
第 66 图 石器 6



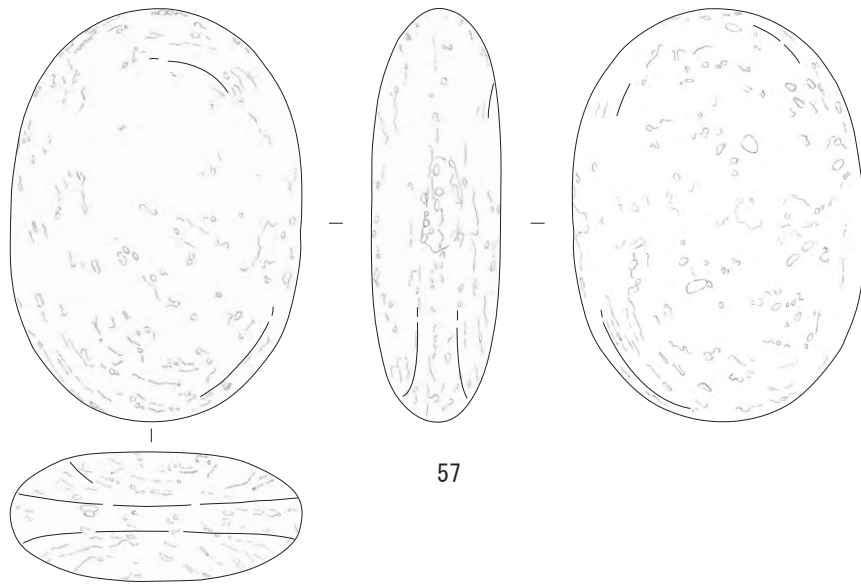
图版 34 石器 6



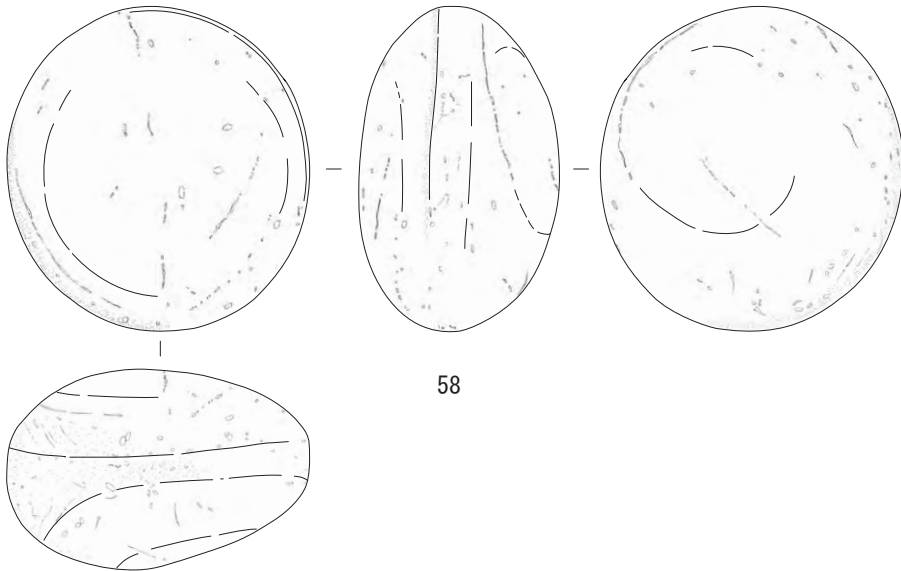
第 67 图 石器 7



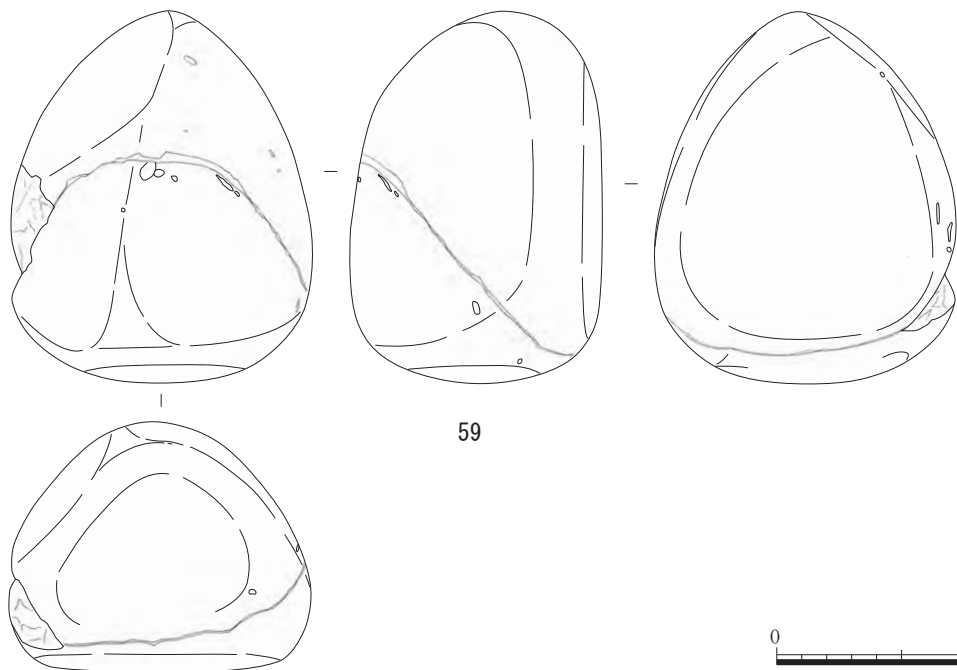
图版 35 石器 7



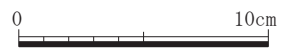
57



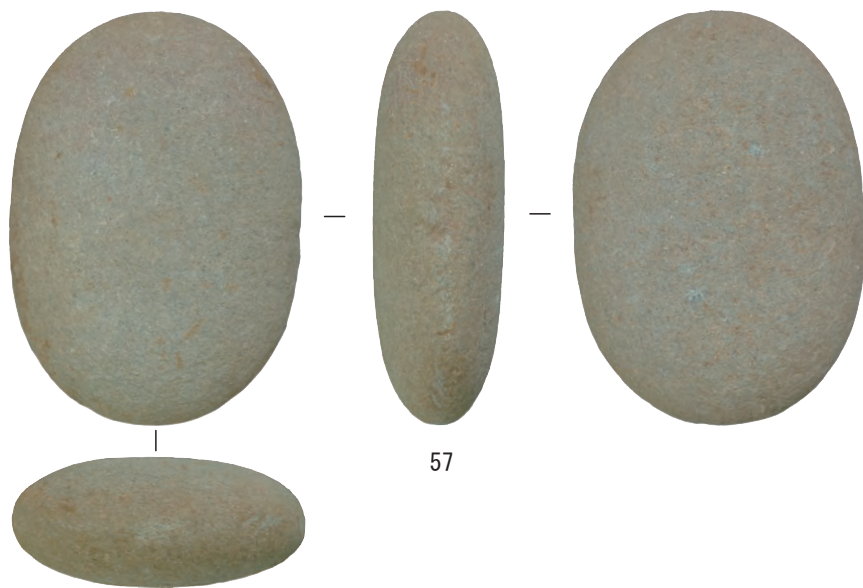
58



59



第 68 图 石器 8



57



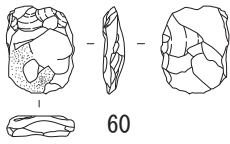
58



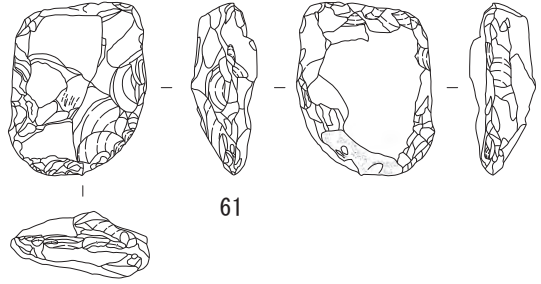
59



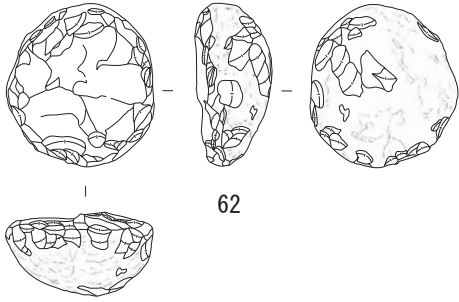
图版 36 石器 8



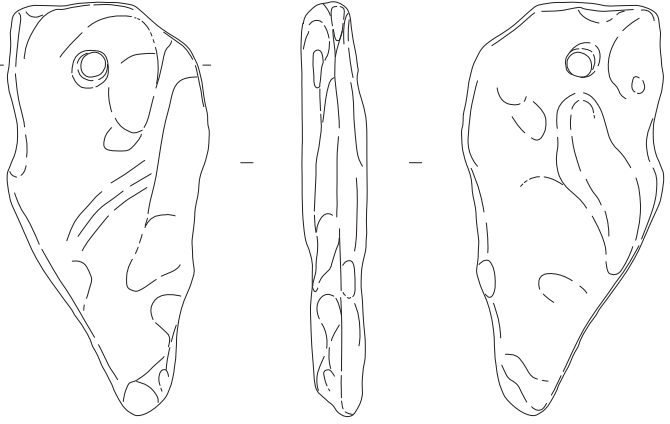
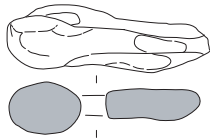
60



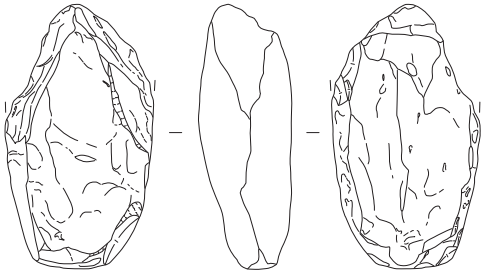
61



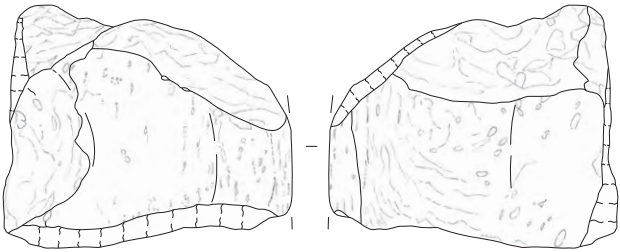
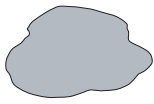
62



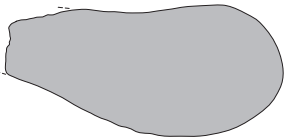
64



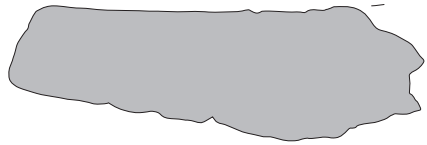
63



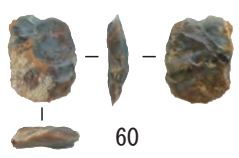
65



66



第 69 图 石器 9



60



61



62



64



63



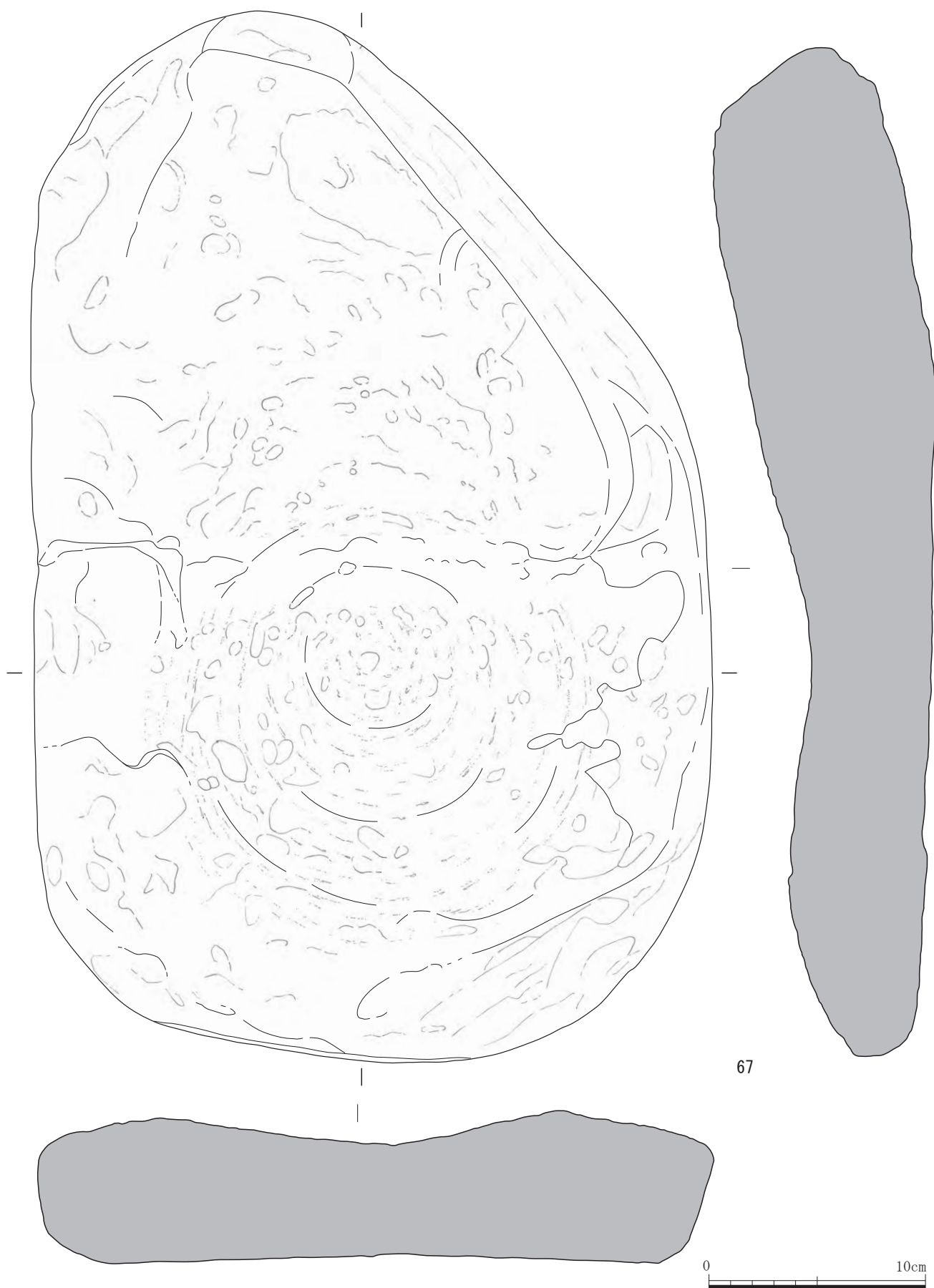
65



66



图版 37 石器 9



第70图 石器 10



67



图版 38 石器 10

(3) 貝製品

本遺跡出土の貝製品は素材貝も含めて 261 点出土した。出土した貝製品は装飾品と考えられるものと、実用品と考えられるものに大きく分けられるが、今回はオオベッコウガサのように複数の製品に加工されたものや、イモガイ・ゴホウラ・アツソデガイのように「南海産貝輪交易」との関連により、製品（貝輪）、未製品、自然貝（素材貝）など複数の加工が見られることから貝種別、製品別に報告する。なお、パイプウニ製品もここに含めた。その内訳は一枚貝 27 点、イモガイ 79 点、ゴホウラ・アツソデガイ等 29 点、マガキガイ製品 1 点、ホシダカラ製品 13 点、ホラガイ有孔製品 19 点、二枚貝有孔製品 46 点、利器 8 点、ヤコウガイ 38 点、パイプウニ製品 1 点の 261 点の出土である。

第15表 貝製品出土量

地区	層位	遺構	一枚貝		イモガイ			ゴホウラ・アツソデ			マガキガイ製品		ホシダカラ製品		ホラガイ		二枚貝有孔							利器		ヤコウガイ			パイプウニ製品	出土別計						
			加工		大形イモガイ	ゴホウラ	ラクダガイ	アツソデガイ	ベリ	ホシダカラ製品	ホラガイ	ボウシユボラ	Rサルボオ	Rシラトリ	Rマスオ	カワラガイ	シラナミ	シレナシジミ	ハイガイ	ヒメジャコ	スイジガイ	イトマキボラ	ヤコウガイ蓋	ヤコウガイ殻	自然貝	計	計									
			貝輪	オオツタノハ																								ガサ	オベッコウ	自然貝	貝輪	切り取り	残存部	殻頂	研磨	有孔
HB①	表採																							1	1	120										
	Ⅲ	226SK																									1	1								
		236SK																										1	1							
		237SK																										1	1							
		234SZ																										1	1							
Ⅳ						11	1				4		5				1							1	1	24										
Ⅴ		1	1	11	2		24	1	2	1		1	1	8	13	1		4	2					3		7	91									
HB②イ	Ⅱ	1018SX		1	1		1																			3	3									
	Ⅴ	1023SX	1	1	3	5		2	1	18	1	3	4		1	1											3	55								
		1042SX-D								1																		1	1							
HB②ロ	Ⅲ	2049SD																									1	1								
	Ⅳ										1				1													2								
HB④イ	Ⅰ	攪乱																										1	1							
	Ⅱ	サーターヤ線跡										1																1	1							
	Ⅲ									1																		1	16							
	Ⅳ									4	3	1				1	1										5	1								
	Ⅴ	トレンチ1								1																	1	1								
HB④ロ	表採																											5	21							
	Ⅴ	貝層群Ⅰ																		1								1	1							
貝層群Ⅲ																												1	3							
不明	表採																											1	1							
合計			1	4	5	17	2	2	1	74	7	7	10	1	1	3	1	13	18	1	15	6	3	2	4	2	1	13	2	1	5	1	1	36	1	261
貝種別計			27				79				29				1		13		19		46							8		38			1	261		

<一枚貝>

オオツタノハ・オオベッコウガサなどの一枚貝で、貝輪 5 点、研磨製品 5 点、自然貝 17 点の計 27 点出土した。

・貝輪

一枚貝の内側を取り除き、輪状にしたもので、オオツタノハ 1 点、オオベッコウガサ 4 点の計 5 点出土した。

図 1 のオオツタノハは外殻の凸面を研磨するが、凹面のへび貝の付着が目立つ。図 2・3 のオオベッコウガサは大きめで殻が厚い。内縁を調整するものである。出土地をみると図 1 のオオツタノハと図 3 のオオベッコウガサは K12 からの出土で、図 2 のオオベッコウガサは L10 だが、いずれも

V (黄砂) 層の出土である。

・オオベッコウガサ研磨製品

オオベッコウガサは殻頂から外縁にかけてやや膨らみを持つが、外縁方向に研磨を数回施し外面を平らにするもので、特に殻の中程は研磨が顕著で真珠層を露呈する。前述の貝輪は研磨が施されていないことから、ここでは別の用途の可能性が高いと考えられ別に扱う。

図5は外殻の研磨が明瞭で、殻頂部に複数の研磨面が認められる。HB②イ地区で図4、図5はV層、図6はII層(1018SX)の出土である。後者は戦前遺構によりV層(貝塚時代後期)が壊されたためである。本品は現段階では類例は報告されていない。

・自然貝

オオツタノハは確認されていない。オオベッコウガサはHB①地区III層で1点、V層で11点、HB②イ地区V層で5点の計17点の出土である。

第16表 一枚貝製品観察一覧

(質量単位:cm, g)

第図 図版	図 番号	製品 番号	貝種	製品	完破	殻高 殻長	孔縦 孔横 (mm)	重さ	観察事項	ア バ タ	色 残	摩 耗	へ び	風 化	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取上)番号
第 77 図 ・ 図 版 41	1	47	オオツタノハ	貝輪	完	8.2 6.3	5.7 4.3	12.8	殻:外殻の突出部分研磨し、右上の凹面にへびガイ付着。縁:内-はやや自然	○	△	△	○	×	HB②イ K12 V (黄砂層) 取1171
	2	48	オオベッコウガサ	貝輪	完	8.3 7.0	6 4.9	21.3	殻:殻厚い、外縁は色残り、殻頂方向に研磨あり。縁:外-僅かに剥離、内-剥離。	×	△	×	×	×	HB②イ L10 V (黄砂層) 取1234
	3	85	オオベッコウガサ	貝輪	完	6.5 4.9	5 3.5	8.4	殻:殻厚い、外-色残り、内-自然。縁:外-自然、内-下縁は打ち割りが顕著、他は自然剥離。	-	○	-	×	-	HB① K12 V (黄色砂) 台732
	4	49	オオベッコウガサ	研磨	半欠	8.8 7.1	7 5.2	20.2	殻:外-研磨が著しく、貝模様無し。内-僅かに外表残り。縁:外-やや摩耗、内-自然剥離。	×	×	×	×	×	HB②イ K10 V (貝層②) 取1049
	5	56	オオベッコウガサ	研磨	完	7.4 5.9	-	23.6	殻:外-ほぼ全面研磨、8割ほど真珠層露呈、殻頂周縁、外縁も研磨顕著、一部自然面残り。殻頂部は4方向、体層は横位に研磨。内-表層はほぼ残る。	×	△	×	×	×	HB②イ L11 V (黒砂層) 台3442
	6	57	オオベッコウガサ	研磨	完	7.5 6.0	-	20.9	殻:外-ほぼ全面研磨、一部真珠層露呈、殻頂周縁、外縁に自然面残り。殻頂部は縦位、体層は横位に研磨。縁:外-丸みを帯びる。	×	○	×	×	×	HB②イ KL9~10M9 II 1018SX 台3401
図 ・ 図 版 なし	-	102	オオベッコウガサ	研磨	半欠	- 4.5	-	8.1	殻:外縁のみ、外-色残り、殻頂方向に研磨あり。内-自然、内縁-自然薄利	-	○	△	×	×	HB②イ K10 V (赤砂層) 取1202
	-	101	オオベッコウガサ	研磨	完	5.8 4.6	-	13.0	殻:外-孔自然剥離、下位の中程研磨顕著。内-自然。縁:外-自然?	×	◎	×	×	×	HB① K13 V (5層黄砂層) 台731
	-	55	オオベッコウガサ	貝輪	1/4	-	-	2.5	殻:やや厚い。外-色残り、やや滑らか。内縁-僅かに打割調整。	×	○	△	×	×	HB②イ J-K12 V 1023SX 台3272

(凡例)完:ほぼ完、◎:多・強、○:普通、△:少・弱、∠:僅少、×:なし、-:不明・計測不可

<大形イモガイ>

アンボンクロザメ・クロフモドキ・ダイミョウイモなどの大形イモガイで貝輪2点、切り取り残存部2点、殻頂研磨1点、自然貝74点の計79点が出土した。

・貝輪

大形イモガイの肩部を横位に切り取った横型貝輪で、HB①地区V層で2点出土した。K12 と L12の近接グリッドである。

図8は体層の殻が薄く、ダイミョウイモ(黒住同定)と考えられる。殻径6.9cm、幅2.7cmと大きめの貝輪で、肩部及び体層面を丁寧に研磨加工し、ほぼ全面に丸みを帯び、裏面の凹面は自然である。図7は殻径5.8cm、幅1.8cmと前者よりは小さく、クロフモドキの貝色の特徴である茶色の斑点を残す。肩部と体層面の加工は前者よりやや粗く、肩部の縫合面は部分的に自然面を残し、体層

部の加工面は水平に研磨し、断面は方形を呈する。報告例は古座間味貝塚（1982）、地荒原貝塚（1986）、宇地泊兼久貝塚（1989）がある。

・イモガイ切り取り残存部

イモガイ横型貝輪を製作した後の残存部と考えられるもので、切り取りは肩部から幅 1.5~3.0cm を切り取るものである。体層の切り口に擦り痕を残すもので、今回 2 点確認できた。いずれも、HB②イ地区V層の出土である。

図 9 は最大径 5.8cm で、体層の擦り痕は 0.8~1.0cm と不規則で、殻口に数回の打割、殻底には敲きにより、丸みを帯びるもので出土例はない。図 10 は最大径 5.5cm で前者より、小ぶりである。体層の擦り痕は圍繞し、その幅は 0.5~0.9cm と不規則で、一部に肩部を残す。殻口は殻頂方向に螺旋状に割れる。図 10 の原貝の大きさを復元すると 6.0cm と図 7 の貝輪とほぼ同じ大きさで、図 10 の部分的に残る肩部と図 7 の破損部が接合される。これら 2 点は第 71 図に示したように、L12 と K10 と近いグリッドの出土である。

・イモガイ殻頂研磨

図 11 はアンボンクロザメの形を保持するものであるが、殻頂から肩部に掛けては水平に研磨を施すものである。貝色も残り、製品の製作途中と思われるが、殻径が 4.7cm と小さく、貝輪の可能性は低く、円盤状製品などの可能性が想定される。

第17表 イモガイ製品観察一覧

(法量単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	製品 番号	貝種	完破	形態	部位 ^b	殻径(横) 殻高(縦)	幅 (貝輪)	孔縦 孔横	重さ	ア パ タ	色 残	摩 耗	へ び	風 化	観察事項	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取上)番 号
第 78 図 ・ 図 版 42	7	92	クロフモドキ	1/3	横型	肩部	5.8 —	1.8	4.5 4.5	11.6	×	○	×	×	×	外殻:殻頂は自然、体層は全面研磨、腹面に横位の研磨痕、片端に溝痕。内殻:殻頂の縫合部分研磨、凹面自然、	HB① L12 V (4層混貝層)台642
	8	91	ダイヨウイモ	2/3	横型	肩部	6.9 4.7	2.7	4.7 4.7	23.4	×	△	×	×	×	外殻:全面研磨、肩部は特に研磨顕著、側面も研磨確認。内殻:殻頂の縫合、体層側も丸み帯びる。	HB① K12 V (4層混貝層)取9
	9	20	クロフモドキ	完	切り取り 残存部	体層	5.8 7.8	—	—	146	×	○	×	×	△	外殻:体層横位に研磨、研磨幅0.8cm前後の面をなす。殻口、数回の打ち割り、殻底は叩き顕著。	HB②イ J10 V (貝層)台3464
	10	22	クロフモドキ	完	切り取り 残存部	体層	5.5 10.9	—	—	132	×	○	×	×	×	殻頂を除去するが、一部残す。外殻は研磨1.0cmと大きい、殻口大きく破損し、螺旋状に打ち割り。殻頂部分は図7と接合可。	HB②イ K10 V (赤砂層)台3386
	11	24	アンボンクロザメ	完	未製品		4.7 8.7	—	—	142	×	○	×	×	×	外殻の殻頂部研磨顕著、外唇は縦位に割れる、製作途中、。	HB②イ V (山土層)台3190

(凡例)完':ほぼ完、◎:多・強、○:普通、△:少・弱、△:僅少、×:なし、—:不明・計測不可

・自然貝

大形イモガイ（アンボンクロサメ、クロフモドキ）の自然貝は後述するゴホウラ・アツソデガイと一緒に、あるいは単独で貝集積遺構として検出されることが多く、また、前述したように貝輪の素材となるため、ここでは完形を中心に出土一覧（第18表）と出土平面分布（第71図）、主なものを写真（図版39）に示した。

伊礼原遺跡（2014）と同様、殻径を 0.5cm 段階ごとに分け、その出土状況を地区・層位別にまとめた（第19表）。これによると HB①地区で 36 点、HB②イ地区で 20 点、HB②ロ地区で 1 点、HB④イ地区で 16 点、HB④ロ地区 1 点の計 74 点の出土で、前 2 地区から多く得られている。第19表に示した様に殻径の出土状況をみると 5.0~5.4cm 台が 31 点、5.5~5.9cm 台が 17 点と多く、4.5~4.9cm 台、6.0~6.4cm 台と除々に少なくなる。これらの貝は伊礼原遺跡（2014）の貝集積SS02（図版10・第

第18表-1 大形イモガイ計測一覧

(質量単位cm, g)

図版	図版(製品)番号	貝種	完破	殻高	殻径a	殻径b	重さ	殻頂アバタ	色残	摩耗	風化	観察事項	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取上)番号
図版39	13	アンボンクロザメ	-	10.1	5.9	5.5	192.0	△	○	-	-	外唇:縦に大きく剥離	HB① L14 V (5層)台415
	21	アンボンクロザメ	完	9.5	5.5	5.2	150.2	×	◎	-	-	外唇:2回剥離	HB① L14 V (5層)台727
	22	アンボンクロザメ	完	10.5	6.2	5.8	285.5	△	○	-	-	なし	HB① L14 V (5層)台727
	23	アンボンクロザメ	完	9.7	5.5	5.1	199.0	×	○	-	-	外唇:剥離、3回	HB① L14 V (5層)台727
	24	アンボンクロザメ	完	10.9	5.0	5.7	264.0	△	◎	-	-	なし	HB① L14 V (5層)台727
	31	アンボンクロザメ	完'	8.8	5.2	4.8	146.4	△	△	-	-	破損	HB① K20 V (4層混貝層)台742
	32	アンボンクロザメ	完	8.3	4.8	4.4	112.7	×	○	-	-	外唇:剥離、縦	HB① K20 V (4層混貝層)台742
	33	アンボンクロザメ	完	8.5	5.1	4.7	151.1	△	△	-	○	外唇:剥離、縦	HB① K20 V (4層混貝層)台742
	34	アンボンクロザメ	完	8.5	5.1	4.8	143.9	○	○	-	△	外唇:剥離、全	HB① K20 V (4層混貝層)台742
	35	アンボンクロザメ	完	8.5	4.9	4.5	137.9	△	○	-	-	外唇:剥離、1回	HB① K20 V (4層混貝層)台742
	36	アンボンクロザメ	完	8.5	5.1	4.8	153.8	△	○	-	△	外唇:剥離、前、2回	HB① K20 V (4層混貝層)台742
	3	アンボンクロザメ	完	9.6	5.1	5.5	154.2	△	○	×	×	外唇:細かい剥離	HB②イ L10 V (貝層②)台3427
	4	アンボンクロザメ	完	10.8	5.8	6.2	228.0	×	○	×	×	なし	HB②イ L10 V (貝層②)台3427
	18	クロフモドキ	完	10.2	5.6	6.0	199.5	×	○	-	-	なし、石灰付着	HB②イ L10 V (貝層③)台3439
	19	アンボンクロザメ	完	6.9	3.5	3.7	55.8	×	○	×	×	外唇:細かい剥離、石灰付	HB②イ L10 V (貝層③)台3439
	23	アンボンクロザメ	半欠	(6.9)	4.0	4.4	54.3	-	○	×	×	破損、石灰付着	HB②イ L10 V (貝層③)台3468
15	アンボンクロザメ	完	10.8	6.2	6.6	306.5	◎	△	-	△	なし	HB②イ K10 V (貝層②)台3429	
16	アンボンクロザメ	完	9.0	5.2	5.7	218.0	◎	△	×	△	外唇:剥離、縦、体層、破	HB②イ K10 V (貝層②)台3429	
17	アンボンクロザメ	完	10.2	5.4	5.8	244.5	△	○	-	-	なし、石灰付着	HB②イ K10 V (貝層②)台3429	
図版なし	1	イモガイ	完	-	5.8	5.5	164.0	×	×	○	○	尾部摩耗	HB④イ O2 V (Ⅷ)台336
	8	アンボンクロザメ	完	6.7	4.1	3.8	49.0	×	×	×		外唇:剥離、縦	HB④イ O2 V (Ⅷ)台336
	9	アンボンクロザメ	完	-	5.7	5.1	106.0	△	△	×	◎	大きく剥離、殻底部摩耗	HB④イ O2 V (Ⅷ)台336
	2	クロフモドキ	完	11.6	7.4	6.4	329.0	△	△	×	○	なし	HB④イ K2 V (Ⅷ)台426
	6	クロフモドキ	完	11.2	6.6	6.1	258.0	△	△	×	○	外唇:剥離、縦	HB④イ K2 V (Ⅷ)台426
	7	アンボンクロザメ	完	9.0	6.1	5.7	215.0	△	△ヌク	×	△	外唇:剥離、縦、殻底部摩耗	HB④イ K2 V (Ⅷ)台353
	14	クロフモドキ	完	10.0	5.8	5.4	155.0	△	○	×	△	外唇:剥離、2回	HB④イ K2 V (Ⅷ)台426
	16	アンボンクロザメ	完	-	5.4	5.0	138.0	×	×	×	○	外唇:剥離、縦	HB④イ K2 III (IV)台272
	1	アンボンクロザメ	完	8.3	4.9	4.6	131.2	△	△	-	○	外唇:上剥離	HB① P17 IV (3層青灰色シルト)台706
	2	アンボンクロザメ	完	9.1	5.4	5.0	181.9	○	△	-	-	外唇:剥離、弱	HB① M20 IV (3層)台320
3	アンボンクロザメ	完	11.4	6.7	6.4	249.0	×	○	-	-	外唇:上剥離、1回、×細	HB① L13 V (5層黄色砂)台778	
4	アンボンクロザメ	完	9.3	5.3	4.9	185.1	×	○	-	-		HB① L13 V (4層)台746	
5	アンボンクロザメ	完	10.0	5.9	5.5	225.0	△	○	-	-	外唇:上剥離、1回	HB① K16 V (5層褐色細砂質土)台773	
6	アンボンクロザメ	完	10.8	6.5	6.1	257.0	△	○	-	-	なし	HB① L14 V (4層混貝層)台672	
7	アンボンクロザメ	完	9.8	5.5	5.2	132.8	△	△	-	-	外唇:剥離、縦 体層にアバタ有	HB① P14 IV (3層青灰シルト)台707	
8	アンボンクロザメ	完	8.5	5.1	4.7	110.0	×	-	-	○	外唇:剥離、弱	HB① K17~20・K1 IV (3層)台726	
9	アンボンクロザメ	完	9.2	5.6	5.3	145.3	○	△	-	△	大きく剥離、殻頂 体層にアバタ有	HB① O18 IV (3層)台790	

(凡例)完':ほぼ完、◎:多・強、○:普通、△:少・弱、△:僅少、×:なし、-:不明・計測不可

第18表-2 大形イモガイ計測一覧

(法量単位cm、g)

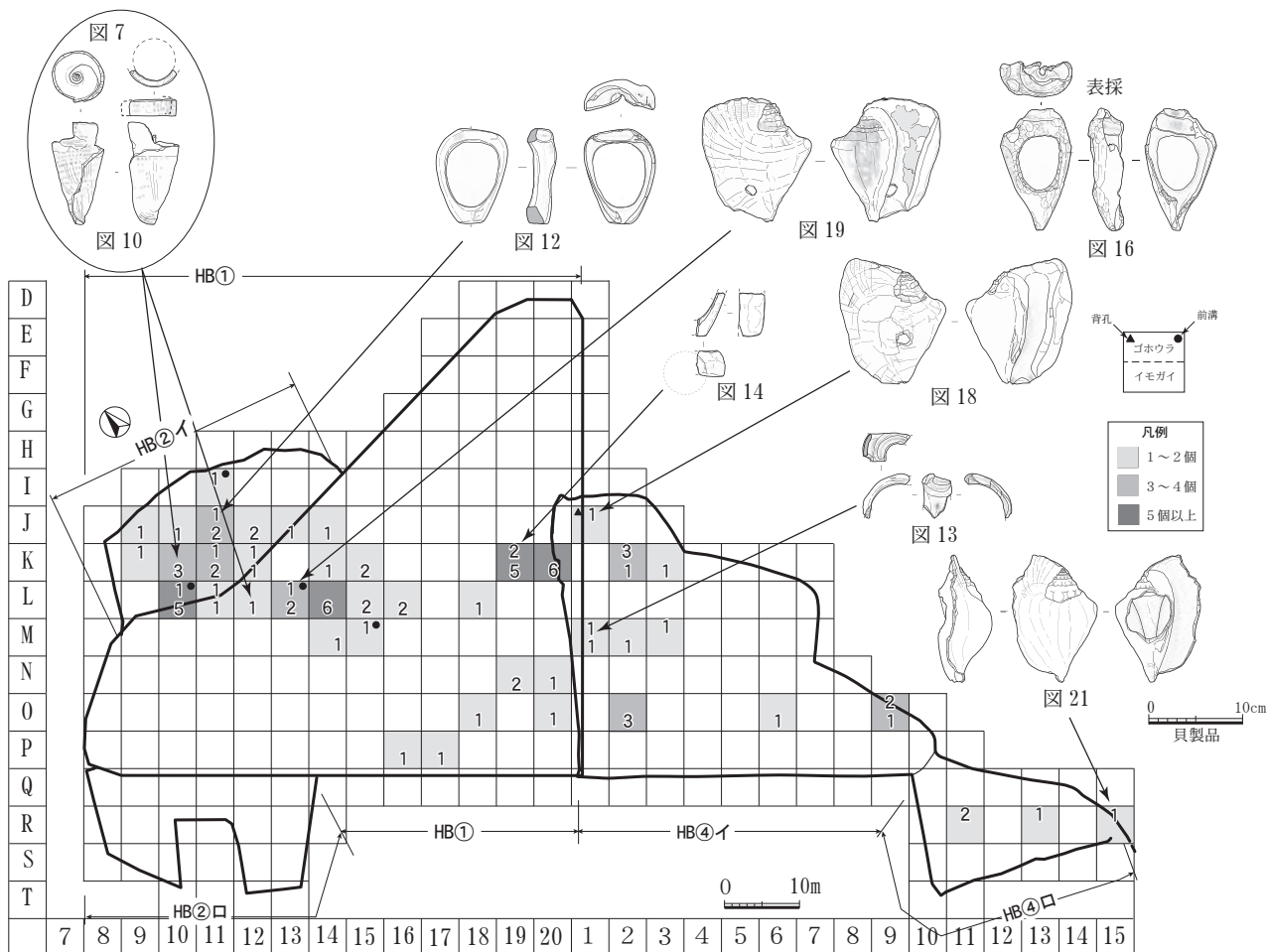
図版	製品番号	貝種	完破	殻高	殻径a	殻径b	重さ	殻頂アバタ	色残	摩擦	風化	観察事項	地区・グリッド・層位遺構・台帳(取上)番号
図版なし	10	アンボンクロザメ	完'	9.6	5.1	4.7	157.4	△	○	-	○	外唇:大きく剥離	HB① N20 IV (3層青灰粘質土)台662
	11	アンボンクロザメ	完	9.1	5.3	4.9	165.4	○	△	-	○	外唇:上剥離	HB① O20 IV (3層青灰粘質土)台677
	12	アンボンクロザメ	完'	8.2	5.0	4.6	149.7	△	△	-	△	外唇:大きく剥離	HB① III 237SK 台605
	14	アンボンクロザメ	完'	8.9	5.1	4.8	166.7	×	△	-	-	外唇:上剥離	HB① L17・18 V (4層混貝層)台747
	15	アンボンクロザメ	-	9.5	5.3	5.0	186.3	△	△	-	-	なし	HB① K14 V (4層)台682
	16	アンボンクロザメ	完	8.6	5.0	4.8	149.7	△	○	-	-	外唇:剥離、弱	HB① L15 V (4層)台733
	17	アンボンクロザメ	完	10.4	6.1	5.7	197.0	△	◎	-	-	なし	HB① K12 ¹ 16 V (3層暗褐色シルト)台704
	18	アンボンクロザメ	完	9.3	5.1	4.9	129.6	△	◎	-	-	外唇:剥離、2回	HB① J14 V (5層)台702
	19	アンボンクロザメ	完	10.2	6.0	5.6	195.0	△	○	-	-	外唇:縦剥離、全	HB① M14 V (5層黄色砂)台669
	20	アンボンクロザメ	完	9.8	5.6	5.4	170.0	△	△	-	○	外唇:上剥離、1回	HB① L15 V (5層)台413
	25	クロフモドキ	完	9.2	5.5	5.2	164.1	△	△	△	△	外唇:剥離、1回	HB① N19 IV (3層青灰粘質土)台660
	26	アンボンクロザメ	完	9.9	5.3	5.1	186.2	△	○	-	-	外唇:剥離1回、深い	HB① N19 IV (3層青灰粘質土)台660
	27	アンボンクロザメ	完	8.9	4.9	4.6	138.8	△	△	-	-	外唇:上剥離	HB① L16 V (5層)台675
	28	アンボンクロザメ	完	8.3	5.1	4.8	146.0	△	△	-	-	なし、△(サンゴ付着)	HB① L16 V (5層)台675
	29	アンボンクロザメ	完	8.9	5.3	5.0	147.5	△	△	-	△	外唇:剥離、縦	HB① O・P16 IV (3層)台782
	30	アンボンクロザメ	完	8.1	4.8	4.5	132.2	△	△	-	-	外唇:剥離、3回縦、かつ鉄付着	HB① O・P16 IV (3層)台782
	1	アンボンクロザメ	完	12.6	7.4	8.0	519.5	×	○	-	-	なし、石灰付着	HB②イ J9 V 1042SX-D 台3416
	2	アンボンクロザメ	完	10.6	6.0	6.4	270.0	△	△	-	-	なし、石灰付着	HB②イ J13 V (貝層②)台3416
	5	アンボンクロザメ	完	10.5	5.8	6.3	226.0	△	○	×	×	外唇:細剥離	HB②イ II 1018SX 台3401
	6	アンボンクロザメ	完	9.4	5.3	5.7	177.9	△	○	-	-	石灰付着	HB②イ K11 V (貝層②)台3430
	7	アンボンクロザメ	完	9.7	5.1	5.5	216.5	△	○	-	-	外唇:上剥離	HB②イ K11 V (貝層②)台3430
	8	アンボンクロザメ	完	8.2	4.6	4.9	126.2	◎	×	×	◎	外唇:剥離縦、褐色	HB②イ K12 V (貝層①)台3461
	9	アンボンクロザメ	完	8.1	4.2	4.5	115.2	△	○	×	×	外唇:上破損	HB②イ J 12 V (貝層②)台3467
	10	アンボンクロザメ	完	8.4	5.0	5.4	170.9	△	△	-	○	外唇:剥離、縦	HB②イ J10・11 V (暗褐色シルト)台3451
	11	アンボンクロザメ	完	9.4	5.3	5.5	175.7	△	△	-	△	外唇:剥離、縦、複数回	HB②イ J10・11 V (暗褐色シルト)台3451
	12	アンボンクロザメ	完	8.5	4.8	5.0	155.3	△	△	-	△	外唇:剥離、2回、褐色	HB②ロ R12 III 2049SD 台3366
	13	アンボンクロザメ	完	10.3	5.7	6.1	265.5	△	△	×	×	褐色	HB②イ L12 V (貝層①)台3445
	14	クロフモドキ	完	10.3	5.5	5.8	246.5	◎	△	-	-	外唇:細かい剥離	HB②イ J 12 V (貝層②)台3467
	21	アンボンクロザメ	完	10.9	5.7	6.2	262.0	○	○	×	×	なし、石灰付着・褐色	HB②イ J10 V (貝層)台3468
	3	アンボンクロザメ	完	9.7	5.3	4.9	125.0	△	△	×	△	外唇:剥離、縦	HB④イ O9 IV (VII)台352
4	クロフモドキ	完	10.3	6.1	5.8	180.0	△	△	×	×	尾部摩擦	HB④イ K3 V (VIII)台324	
5	アンボンクロザメ	完	8.2	5.2	4.8	97.0	○	△	×	○	外唇:剥離、縦	HB④イ L2 IV (IV)台273	
10	アンボンクロザメ	完	6.3	4.0	3.8	64.0	×	△	×	△	外唇:剥離縦、尾部摩擦	HB④ロ V (VII)台341	
11	アンボンクロザメ	完	8.9	5.2	4.9	138.0	△	○	×	×	外唇:剥離、縦	HB④イ M1 V (VII)台332	
12	アンボンクロザメ	完	9.7	6.0	5.7	160.0	○	△	×	○	外唇:剥離、縦	HB④イ M2 V (トレンチ1)台239	
13	アンボンクロザメ	完	8.4	5.3	4.9	136.0	△	△	×	○	外唇:剥離、1回	HB④イ L6 IV (VII)台330	
15	アンボンクロザメ	完	7.3	4.7	4.3	92.0	△	△	×	○	外唇:剥離、縦	HB④イ O6 V (VIII)台366	
17	アンボンクロザメ	完	8.5	5.1	4.9	141.0	△	○	×	△	外唇:剥離、縦	HB④イ L2 IV (IV)台265	

(凡例)完':ほぼ完、◎:多・強、○:普通、△:少・弱、∠:僅少、×:なし、-:不明・計測不可

8表貝集積観察一覧)と同じように殻口が縦位に剥離、殻口の上位のみ欠損、完形など同じような状況が見られる。平面分布をみるとL10で5点、L14で6点、K19で5点、K20で6点の出土は、前述した様に殻径の大きさ・殻の観察から貝集積遺構の可能性が高い。

第19表 大形イモガイ大きさ(殻径)別出土量

地区 層位 殻径(cm)	HB①			HB②イ		HB②ロ	HB④イ			HB④ロ	合計	伊礼原遺跡(2014)				伊礼原D (2013)
	III	IV	V	II	V	III	III	IV	V	V		SS01	SS02	SS03	自然貝	4317SS
3.0~3.4											0					1
3.5~3.9					1						1					1
4.0~4.4					2					1	1	4	4			
4.5~4.9		2	3		1	1				1	8	1	2		8	
5.0~5.4	1	6	11		7		1	4	1	1	31	3	16		11	
5.5~5.9		3	5	1	5				3		17	3	27	4	8	
6.0~6.4			3		2				3		8	2	10	1	7	
6.5~6.9			2						1		3	1			5	
7.0~7.4					1				1		2				2	
7.5~7.9											0				3	
8.0~8.4											0				1	
8.5~8.9											0				1	
合計	1	11	24	1	19	1	1	4	11	1	74	14	55	5	43	35
地区別計	36			20		1	16			1	74	117				35



第71図 ゴホウラ・イモガイ貝輪と自然貝出土平面分布



図版39 大形イモガイ (番号は第18表と一致)

<ゴホウラ・アツソデガイ>

ゴホウラ (ラクダガイ)・アツソデガイは貝輪7点、未製品1点、有孔製品8点、自然貝13点の計29点出土した。

・貝輪

ゴホウラを貝輪に加工したもので、腹面型と背面型があるが、本遺跡では腹面を用いたものが完形1点と破片4点が出土した。他に背面を用いたものが2点得られたが、残りのよい腹面型貝輪を図化した。

図12は完形で厚さ2.8cmの諸岡型に分類されるものである。外殻の研磨は顕著で大結節や肩部に研磨痕が確認され、内外縁の横断面は舌～丸状を呈する。完成度の高い製品で、HB②イ地区 J11V (黄砂層)の出土である。

図13は螺塔部の次体層まで用い、研磨により貝の成長線を露呈する。図14は前溝近くを用いたもので、内外縁の研磨が顕著で丸み帯びる。図15は螺塔の縫合、瘤が残る。内外縁は打割痕や割れが確認されることから製作途中である。幅は1.6～2.6cmで諸岡型より細く、失敗品の可能性が高い。HB④イ地区08～10IV層の出土でHB①地区からの流れ込みと考えられる。

・未製品

ゴホウラの腹面型貝輪の未完成品(図16)、背面中央穿孔(図18)、背面前溝孔のゴホウラ(図19)、アツソデガイ(図20)、袖部を打ち割りした(図21)ものを図化した。図17はラクダガイの背面を除去し、腹面を残したもので、貝全体に石灰と鉄分が付着するが後世のものと思われる。背面部分に打割を施すが、腹面には貫通しない。ラクダガイであるが、ゴホウラと貝の形状が似ることからゴホウラの代用と考えられる。HB④ロ地区R11V(VII-IV)層の出土である。

図16は未完成品であるが、外面は縦位に粗く研磨され、内縁は打割後、研磨を施すものである。殻頂側を除去し、整えれば図12の諸岡型貝輪となるものである。伊礼原遺跡(2014)(第78図10)では側面の大結節を中心に研磨を施すが、本品はさらにほぼ全面に研磨加工が進んだもので、本遺跡内で腹面の諸岡型貝輪の加工をしたと判断されるものである。

図18は貝の背面中央に叩きによる穿孔を施すものである。HB④イ地区のサーターヤー窯跡出土である。そのため、熱を受け、袖上部が破損し、貝殻全体にヒビが入る。平成9年度の調査によると

第20表 ゴホウラ・アツソデガイ製品観察一覧

(法量単位: cm, g)

第図 図版	図番 号	製品 番号	貝種	段階 (形態)	部位 ^b	完 破	殻高 (縦)	殻長 (横)	孔縦 孔横	重さ	ア パ タ	色 残	摩 耗	ヘ ビ	風 化	観察事項	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取上)番号
第79 図・ 図版 43	12	50	ゴホウラ	貝輪 (腹面)	腹部	完	10.1	7.6	6.8 5.6	79.9	△	×	×	△	△	外殻:研磨顕著、大結節近く、ヘビガイの痕有り。稜線有り。内殻:螺塔研磨、一部打割残る。外縁:研磨、断面丸み。研磨、一部、自然面残す。	HB②イ J11 V (黄砂層)取1247
	13	12	ゴホウラ	貝輪 (腹面)	螺塔部 次体層	1/3	-	-	-	18.0	×	×	×	×	×	外殻:研磨丁寧。内殻:内縁に近い所研磨顕著。内縁:研磨顕著、断面丸み。図12より螺塔の範囲が広い。	HB④イ M1 IV (IV)台274
	14	93	ゴホウラ	貝輪 (腹面)	前溝孔	1/3	-	-	-	15.2	△	×	○	×	◎	外殻:研磨顕著、ややアパタが見られる。内殻:自然。外縁:研磨顕著、断面丸み。内縁:研磨顕著、前溝側に平ら、体層に舌状、内外から研磨。	HB① K19 V (4層混貝層)台643
	15	15	ゴホウラ	貝輪 (腹面)	腹部	1/3	-	-	-	19.0	×	×	×	×	◎	外殻:風化著しく、大結節残る。内殻:自然。螺軸摩耗のため不明。外縁・内縁:割れのまま。	HB④イ O8`10 IV (V以下)台305
第80 図 版 44	16	98	ゴホウラ	貝輪 (腹面)	腹部	完	13	7.6	5.7 4.4	113.5	△	×	×	○	×	外殻:石灰付着。外縁:割れのまま、螺塔の巻きに一部打割。内縁:打ち割り後、粗く磨く。	表採
	17	8	ラクダガイ	貝輪未製品 (腹面)	腹部	完	16.5	8.8	-	416.0	△	×	○	-	△	背面除去。周縁打割。鉄分、石灰付着。	HB④ロ R11 V (VII-IV)台435
図 なし 図 版	80		ゴホウラ	貝輪 (背面)	袖部	細	-	-	-	14.5	-	-	-	-	△	縁-内外に粗い打割。外殻-部分的に研磨痕、方向は斜め。	HB① P18 IV (3層青灰粘質土)台795
	13		ゴホウラ	貝輪 (背面)	袖部	細	-	-	-	17.6	×	×	△	×	△	縁-打ち割り、外殻-研磨、背面未製品	HB④イ M3 IV (V)台301
第81 図・ 図版 45	18	10	ゴホウラ	未製品 (背面穿孔)	全形	完	11.6	11	1.2 1.3	433.0	×	×	○	○	○	外殻:ヒビが大きい、サーターヤ出土のため、後世のものと思われる。内殻:内殻も同じ、螺塔部にヘビ貝。孔:叩き痕。全体に火を受け、もろく、ヒビが入る。	HB④イ J1 II サーターヤ窯跡 台425
	19	81	ゴホウラ	未製品 (前溝孔)	全形	完	13.2	11.6	1.1 1.1	321.5	-	○	-	○	-	外殻:袖上部打ち割り剥離、前溝側剥離。内殻:石灰付着。孔:複数剥離、外殻→内殻。(黒)成貝(少し若い)。口内付着あり。	HB① L13 V (5層黄色砂)取206
	20	33	アツソデガイ	未製品 (前溝孔)	全形	完	13.1	7.7	1.2 1.6	223.5	×	×	×	×	×	外殻:石灰付着、穿孔。内殻:自然。孔:外殻→内殻。	HB②イ J9 V (山土層)取1382
	21	7	ゴホウラ	未製品 (腹面穿孔)	全形	完	13.5	9	5.0 4.8	172.0	×	△	○	×	○	外殻:袖、を打割でカット。内殻:孔、割れ、は腹面貝輪の加工の途中。外縁:ソデ、打ち割り。内縁:螺塔を残し大きく打ち割る。、幼貝。研磨。	HB④ロ R15 V (VII-III)台420

(凡例)完':ほぼ完、◎:多・強、○:普通、△:少・弱、∠:僅少、×:なし、-:不明・計測不可・(黒):黒住耐二実見

サーターヤ窯の下位にV層(第15図)が確認されていることから、本品はV層所属の遺物と思われる。被熱は後世の遺構であるサーターヤ(窯跡1)に起因するものと思われる。

図19は小ぶりの貝で貝色が残り、前溝を穿孔し、さらに袖上部を打ち割り調整したものである。

図20はアツソデガイの前溝に穿孔したものである。貝殻は石灰分が付着するが、しっかりしている。孔は外殻→内殻に穿孔する。HB②イ地区J9V(山土層)層の出土である。

図21は背面を残す。袖部の打ち割り、腹面の穿孔、腹面の粗加工段階の可能性が高く、幼貝のため破棄した可能性も考えられる。HB④ロ地区R15V(VII-III)層出土。

前述の大形イモガイ同様、ゴホウラ・アツソデガイの自然貝を南海産貝輪交易の対象と考え第21表、図版40に掲載した。ゴホウラ・アツソデガイの未製品(背面穿孔・前溝孔)を含めて、地区ごとの出土量をみると、HB①地区4点、HB②イ地区9点、HB②ロ地区1点、HB④イ地区5点、HB④ロ地区3点の計22点の出土である。背面穿孔のゴホウラ1点(図18)、前溝孔のアツソデガイ2点、ゴホウラ4点得られている。孔はいずれも外殻→内殻への穿孔である。

前溝孔はHB②イ地区に多いようである。また、伊礼原D遺跡(図版41)で見られたようなゴホウラのヘビガイを除去したものが(製品8)出土している。貝の保存状況を見るとイモガイと同じようにHB①地区、HB②イ地区の貝の保存は良いが、HB④イ・ロ地区の貝は風化が著しい。イモガイと

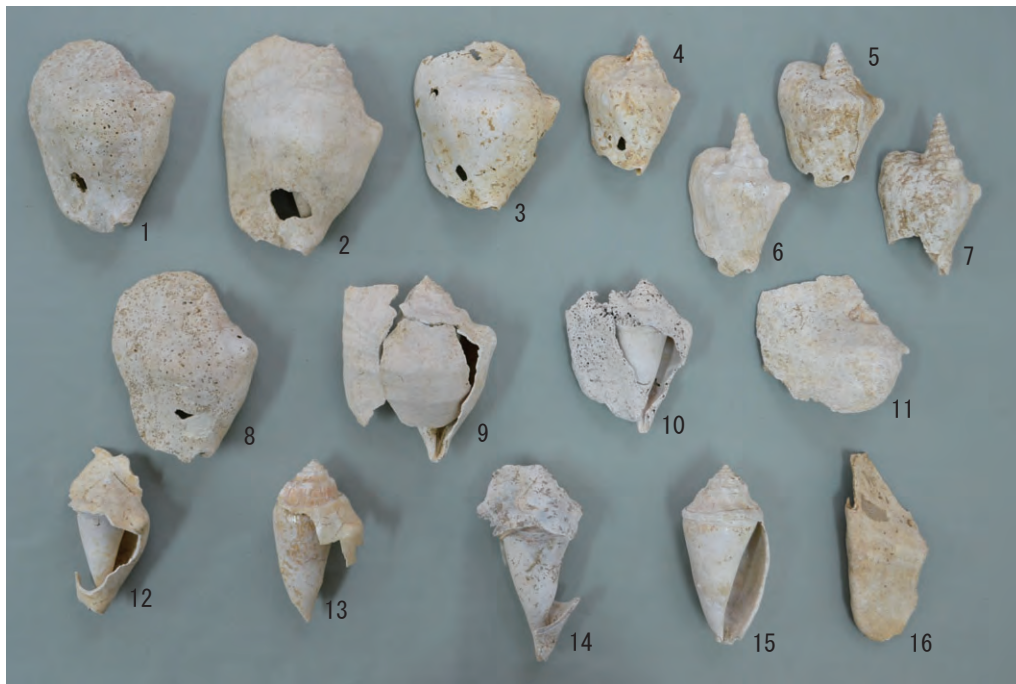
同様、貝集積遺構は検出されていないが、それに伴う背面穿孔や前溝孔の加工されたゴホウラやアツソデガイが出土することから貝集積遺構が存在したことを示唆する出土状況を示す。

第21表 ゴホウラ・アツソデガイ計測一覧

(法量単位:cm, g)

第図 図版	図番 号	製品 番号	貝種	分類	完破	殻長	殻高 (縦)	孔縦 孔横	重さ	ア バ タ	色 残	摩 耗	へ び	風 化	備考	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取上)台帳
図 版 40	1	83	ゴホウラ	前溝孔	完	12.2	16.9	2.2 1.0	557.5	◎	-	-	◎	○	へびガイ除去,側面に研磨顕著 (黒)成貝。口内へび付着。	HB① M15 V (5層黄色砂)台219
	2	26	ゴホウラ	前溝孔	完	13.3	18.7	2.3 3.5	661.0	△	×	×	△	-	(黒)成貝。口内付着なし。(多 分、死殻)	HB②イ L10 V (貝層③)台1340
	3	28	ゴホウラ	前溝孔	完	11.3	12.6	1.9 0.9	275.5	○	×	×	×	△	幼貝、殻薄。孔(外→内)。石灰 付着	HB②イ V (混板礫層)台3191
	4	31	アツソデガイ	前溝孔	完	7.3	11.3	1.2 0.9	227.5	○	×	×	○	-	へびガイ除去途中、殻口へびガイ付 着	HB②イ V(山土層) 台3190
	5	14	アツソデガイ	-	完	7.8	11.4	-	228.5	○	×	△	×	○	風化。	HB④イ M1 V(VIII) 台332
	6	84	アツソデガイ	-	完	12.5	14.6	-	178.2	△	×	×	×	○	風化。	HB① K19 V(5層) 台750
	7	32	アツソデガイ	-	完	7.6	13	-	182.7	×	×	×	×	△	石灰付着	HB②イ L11 V(黒砂層) 台3442
	8	82	ゴホウラ	-	完	12.7	15.3	-	653.0	◎	-	-	◎	◎	(黒)成貝。口内へび付着。へびガ イ一部除去	HB① K19 V (4層混貝層)台187
	9	1	ゴホウラ	-	完	11	14.5	-	248.5	×	△	×	×	○	口唇癒着せず。幼貝→1つにまと める。	HB④イ K2 V (VIII)台426
	10	5	ゴホウラ	-	完	9.1	11.7	-	108.0	◎	×	×	◎	◎	6と同一個体、アバタ顕著、軽い	HB④イ O9 IV(VII) 台352
	11	25	ゴホウラ	-	半欠	(11.8)	(8.8)	-	136.1	×	△	×	×	○	石灰付着(黒)成貝。(少し歪成 貝かも)付着なし。	HB②イ K12 V (貝層②)台3461
	12	27	ゴホウラ	-	半欠	10.8	11	-	151.7	○	×	×	×	△	内唇アバタ	HB②イ I11 V (混板礫層)台3191
	13	29	ゴホウラ	-	半欠	7.3	12.5	-	117.4	×	△	×	×	×	幼貝、殻薄。	HB②イ K9 V(黄砂層) 台1379
	14	9	ゴホウラ	-	半欠	-	-	-	283.0	×	△	×	×	△	腹面は加工の段階か	HB④イ R11 V(VII-IV) 台446
	15	4	ゴホウラ	-	半欠	-	-	-	151.0	×	○	×	×	×	幼-軽い。	HB④イ K2 V(VIII) 台426
	16	30	ゴホウラ	-	細	(6.3)	(14.7)	-	62.2	×	×	×	×	×	幼貝。サゴ付着。袖部	HB②イ V(山土層) 台3190
図版なし	34	ゴホウラ	-	細	-	-	-	19.3	×	×	×	×	△		HB②イ R13 IV (グス層黒色粘質土)台3363	

(凡例)完':ほぼ完、◎:多・強、○:普通、△:少・弱、△:僅少、×:なし、-:不明・計測不可 (黒):黒住耐二実見



図版 40 ゴホウラ (番号は第 21 表と一致)

<マガキガイ製品>

図 22 は、マガキガイの殻頂近くの体層を横位に切り取り、中央を穿孔し、リング状にしたものである。殻頂及び体層面、殻口の研磨が顕著で、体層部分に貝模様が残る。厚さ 0.8~1.1cm と不均一で、殻頂側は内径 1.0cm、外径 1.6cm を測り、研磨が顕著なことから回転穿孔の加工途中と思われる。HB①地区 L19V 層（取 201）の出土である。木下尚子（2014）の報告によると本部町アンチの上貝塚より出土した遺物に酷似する。

<ホシダカラ匙状製品>

ホシダカラの背面を切り取り、周縁を研磨してスプーン状にしたものであるが、他に打割が部分的に見られるものと製作途中、あるいは失敗したものがある。ここでは完成度の高い 4 点を図示（図 23~26）し、他は観察一覧に示した。出土地をみると HB②イV層で 1 点、HB①地区V層で 8 点、IV層で 4 点の計 13 点得られた。出土状況を層別にみるとV層出土のものはL14 を中心に陸側に多く、IV層出土は 0・P17、018~2 の海側にまとまりが見られる。図示したものは柄があるもの（図 24・26）、と柄のないもの（図 23・25）がある。また、（図 26）は小さく、実用性に疑問が残る。図 25 は未完成品で、周縁の打ち割り状況から殻頂方向から打撃を加えて加工したものと思われる。類例は古座間味貝塚（1982）Ⅱ区 2 号住居址で報告されている。また、切り取り残存部に相当するホシダカラの殻底部分も HB①地区 L14・15V層で 5 点、L20V層で 1 点、L16IV層で 1 点の計 7 点出土している。出土地は L14・15 と背面部と同じような状況を示すが、接合はできなかった。

第22表 ホシダカラ匙状製品観察一覧

(法量単位: cm, g)

第図 図版	図番 号	製品 番号	貝種	完破	縦	横	重さ	観察事項	色 残	摩 耗	へ び	風 化	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取上)番号
第 82 図 ・ 図 版 46	23	95	ホシダカラ	完	5.9	6.4	22.1	柄無し。周縁-打ち割り後、丁寧に研磨。	○	×	×	×	HB① K13 V (4層a)取180
	24	96	ホシダカラ	完'	6.5	5.6	18.1	柄あり。幅1.8cm。周縁-打ち割り、粗く、研磨は少ない。	○	×	×	×	HB① L15 V (5層b)取194
	25	45	ホシダカラ	完'	5.1	4.8	11.1	柄無し。周縁-破損、研磨あり	○	-	×	×	HB②イ K12 V (黒砂層)台3431
	26	100	ホシダカラ	完	4.4	3.6	8.0	柄幅1.8cm。	○	×	×	×	HB① L14 V (黄色砂層)台713
図 ・ 図 版 なし		118	ホシダカラ	半欠	4.3	4.2	14.5	未製品、周縁打割、丁寧に	△	○	×	○	HB① O2 IV (3層青灰粘質土)台677
		119	ホシダカラ	完	5.7	5.3	9.5	未製品、周縁部分的に打割	△	△	×	○	HB① O2 IV (3層青灰粘質土)台677
		120	ホシダカラ	完	5.4	4.7	15.1	未製品、殻頂側から打ち割り	△	×	×	×	HB① L14 V (4層混貝層)台672
		121	ホシダカラ	半欠	5.6	4.1	13.2	未製品、周縁は打ち割り	△	×	×	×	HB① L14 V (4層混貝層)台672
		122	ホシダカラ	2/3	6.8	4.7	15.2	未製品、周縁に複数の打ち割りあり、孔は欠損部	△	×	×	×	HB① L14 V (4層混貝層)台672
		123	ホシダカラ	半欠	4.4	3.6	9.3	未製品、周縁は複数の打ち割りあり、丁寧に	△	×	×	×	HB① L14 V (4層混貝層)台672
		124	ホシダカラ	半欠	4.2	4.6	11.5	未製品、殻頂側、打ち割り、僅かに摩耗	△	△	×	△	HB① K20 V (4層混貝層)台742
		125	ホシダカラ	半欠	6.6	5.7	14.5	未製品、周縁剥離、破損	△	○	×	○	HB① O18 IV (3層青灰粘質土)台447
		126	ホシダカラ	完	4.7	4.4	10.5	未製品、周縁摩耗	△	○	×	○	HB① O・P17 IV (3層青灰色粘質土)台779

(凡例)完':ほぼ完、◎:多・強、○:普通、△:少・弱、▽:僅少、×:なし、-:不明・計測不可

<ホラガイ有孔製品>

本品はホラガイの①腹面に 2.0cm 前後を粗孔、②殻頂をカットし、③殻口を平らにするもので、使用により④背面を欠損するもののうち、2 個以上の条件を満たすものを製品とする。

ボウシュウボラ（図 28）が 1 点含まれるが、この条件を満たしており、本項に含めた。

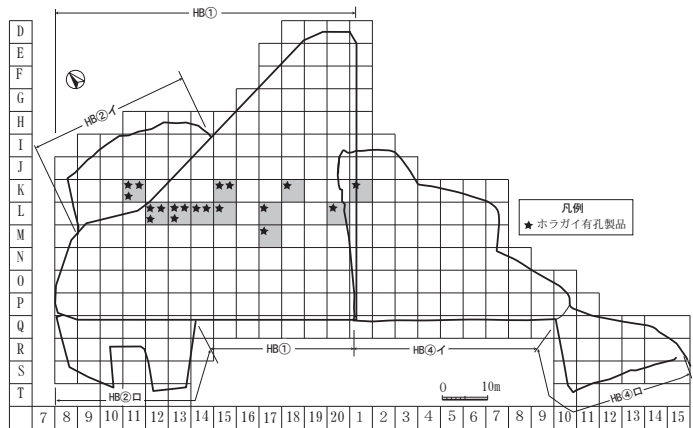
ホラガイ 18 点、ボウシュウボラ 1 点の計 19 点の出土である。地区別には HB①地区で 15 点、HB②イ地区 3 点、HB④イ地区で 1 点である。

これらの出土を平面分布（第72図）でみるとHB①地区とHB②イ地区にまたがるK11、L12～15にほぼ集中する。

製品は容器と考えられ、その容量をみると50ccから500ccまでであるが、100cc台が最も多く、全体に小さめである。図27は容量190ccと小さい。図28はボウシュボラで、黒住によると沖縄・奄美には生息例がなく、九州からもたらされたとしている

（黒住 2011）。図29はHB④イ地区K1標高3.2mで検出されたが、アバタが多く、後世の水浸によるものと思われる。

他に、図は省略したが、製品37は容量500cc、孔径5.0cm前後と大きく、出土したホラガイ有孔製品の中では大きいもので、殻頂に伊礼原遺跡（2014）（第81図26・27）のような研磨が施されている。HB②地区イK11V層の出土である。



第72図 ホラガイ有孔製品出土平面分布

第23表 ホラガイ有孔製品観察一覧

(質量単位: cm, g)

第図 図版	図番 号	製品 番号	貝種	完破	殻高 (縦)	殻径a	重さ	孔縦 孔横	容量 (cc)	観察事項	ア バ タ	色 残	摩 耗	へ び	風 化	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取上)番号	
第 83 図 ・ 図 版 47	27	56	ホラガイ	完	19.5	8.1	125.2	2.7	190	孔1個、孔によって殻軸まで除去。殻頂-欠。殻口-自然。	×	×	×	×	△	HB① L17 V (5層褐色細砂質土) 取199	
	28	67	ボウシュボラ	完	15.9	8.3	161.8	1.8 2.3	150	孔1個、殻頂-欠、殻口-調整か、背面欠損。	○	△	×	×	×	HB① K18 V層 (5層褐色細砂質土) 台807	
	29	1	ホラガイ	2/3	(21.0)	(10.5)	457.5	3.4 2.9	-	-	孔1個、アバタ顕著、背面-欠	◎	△	◎	×	○	HB④イ K1 V 取3
		53	ホラガイ	完'	23.3	10.5	607.5	4.9 4.1	-	-	孔1個、殻頂-丸み、背面欠損	◎	△	×	×	○	HB① L14 V (5層黄色砂) 取204
		54	ホラガイ	完'	26.5	8.2	264.0	3.5 3.3	-	-	孔1個(やや不規則)、殻頂-欠、背面欠損。	×	△	×	△	△	HB① L15 V (4層混貝層) 取186
		55	ホラガイ	完'	23.5	8.6	182.8	2.2 2.2	-	-	孔2個、殻頂-欠、背面欠損	△	△	×	△	△	HB① III J14.15 234SZ 台640
		57	ホラガイ	完	16.7	5.8	114.9	2.1 2.1	110	孔1個、殻頂-欠(打割)	△	○	×	×	×	HB① L12 V (4層混貝層) 台641	
		58	ホラガイ	完'	15.2	5.9	120.3	2.3 2.3	100	孔1個、殻頂-欠、背面欠損	×	△	×	×	×	HB① K15 V (5層黄色砂) 取17	
		59	ホラガイ	完'	20.7	7.6	289.0	4.4 4.3	-	-	孔1個、方形、自然かも。殻頂-欠、背面欠損	△	△	×	×	×	HB① M17 V (5層褐色細砂層) 取200
		60	ホラガイ	完'	21.2	6.2	151.2	3.2 -	-	-	孔1個、殻頂-欠、背面欠損。	×	△	×	×	×	HB① L13 V (5層黄色砂) 台791
		61	ホラガイ	完'	13.2	-	54.9	10.7 10.7	50	孔1個、殻頂-欠、側面欠損	×	△	○	×	×	HB① L14 V (5層) 台727	
		62	ホラガイ	-	14.2	3.8	47.2	3.0 3.7	90	孔1個、	×	△	×	×	×	HB① L13 V (5層細砂質) 台772	
		63	ホラガイ	半欠	12	5.3	52.7	2.4 2.8	-	-	孔1個、殻頂-欠、背面欠損。	×	△	×	×	△	HB① L20 V (4層) 台759
		64	ホラガイ	完'	23	5.1	175.2	2.6 -	-	-	孔1個、殻頂-欠	△	△	×	×	×	HB① L12 V (5層黄色砂) 台758
		65	ホラガイ	半欠	13.9	5.4	64.4	2.0 2.6	110	孔1個、殻頂-欠、背面欠損	△	○	×	×	×	HB① L12 V (5層黄色砂) 台758	
		66	ホラガイ	完	15.5	5.5	71.7	2.6 2.8	130	孔1個、殻頂-欠	×	○	×	×	×	HB① K15 V (5層黄色砂) 台792	
図 ・ 図 版 なし	35	ホラガイ	完	15.9	5.2	80.1	2.4 1.9	100	孔1個(不規則)	-	○	-	○	-	-	HB②イ K11 V (黄砂層) 取1292	
	36	ホラガイ	完	20	8.4	154.4	3.1 3.1	300	孔1個、殻頂-丸み	△	△	-	-	△	HB②イ K11 V (黄砂層) 取1273		
	37	ホラガイ	完	26.5	10.4	386.0	5.1 5.6	500	孔1個(大)、殻頂-研磨	△	△	○	-	○	HB②イ K11 V (黄砂層) 取1275		

(凡例) 完': ほぼ完、◎: 多・強、○: 普通、△: 少・弱、∠: 僅少、×: なし、-: 不明・計測不可

<二枚貝有孔製品>

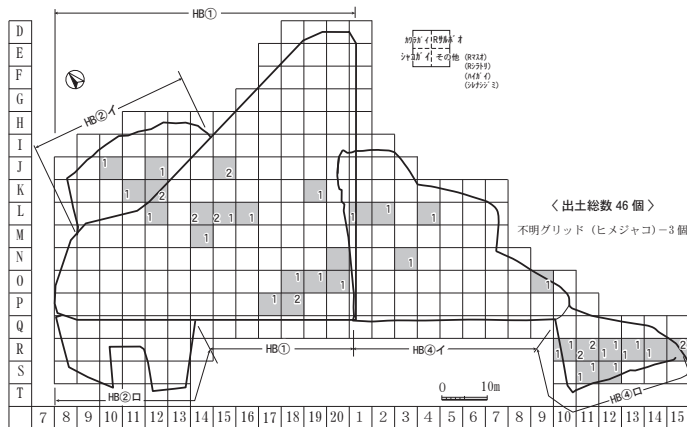
二枚貝の殻頂近くに1.0～2.0cm前後の粗孔を施すもので、伊礼原遺跡で報告したように下記の条件を2つ以上満たすものを製品とした。

- a : 孔の穿孔時に複数の打割が見られるもの
- b : 孔に複数の切り合いがあること
- c : 腹縁に複数の剥離（使用痕）が見られること

出土量をみるとキャンプ桑江北側地区の遺跡の中では、小堀原遺跡と同じく46点と少ない。貝種別にみるとリュウキュウサルボオ15点、リュウキュウシラトリ6点、リュウキュウマスオ3点、カワラガイ2点、シラナミ4点、シレナシジミ2点、ハイガイ1点、ヒメジャコ13点である。層別にIV層10点、V層35点、表採1点で、V層の出土が多い。IV層出土の遺物はV層の流れ込みの可能性が高いためV層にまとめる。地区別にはHB①地区で18点、HB④口地区で18点の出土である。なお、個別の観察一覧を第26表に示し、主なものを第82図30～35に示した。

平面分布でみるとJ12・J15・K12ではリュウキュウシラトリやリュウキュウマスオなどの薄手の貝が出土する傾向が見られ、L12～15ラインを中心にシャコガイ（シラナミ・ヒメジャコ）などが追加される。

HB④イ地区のL1のV層、L2、L4のIV層、HB④口地区西側のR・SラインのV層にシャコガイ類やリュウキュウサルボオが出土するが西側に延びる平安山原C遺跡（平成21年調査）の延長と考えられる。



第73図 二枚貝有孔製品出土平面分布

HB①地区の018～20、P17・18ではIV層で出土している。この付近からは軽石も多く出土（第21図）することからV層に起因するものと考えられる。重量別にみると10～19gが16点、0～9gが13点、20～29gが8点と三者で全体の80.4%を占め、伊礼原遺跡（2014）と同じような傾向を示す。なお、殻が軽く、薄いリュウキュウシラトリやリュウキュウマスオは孔の位置などからシャコガイ類やリュウキュウサルボオなどと同じ用途を持つものかは疑問が残る。

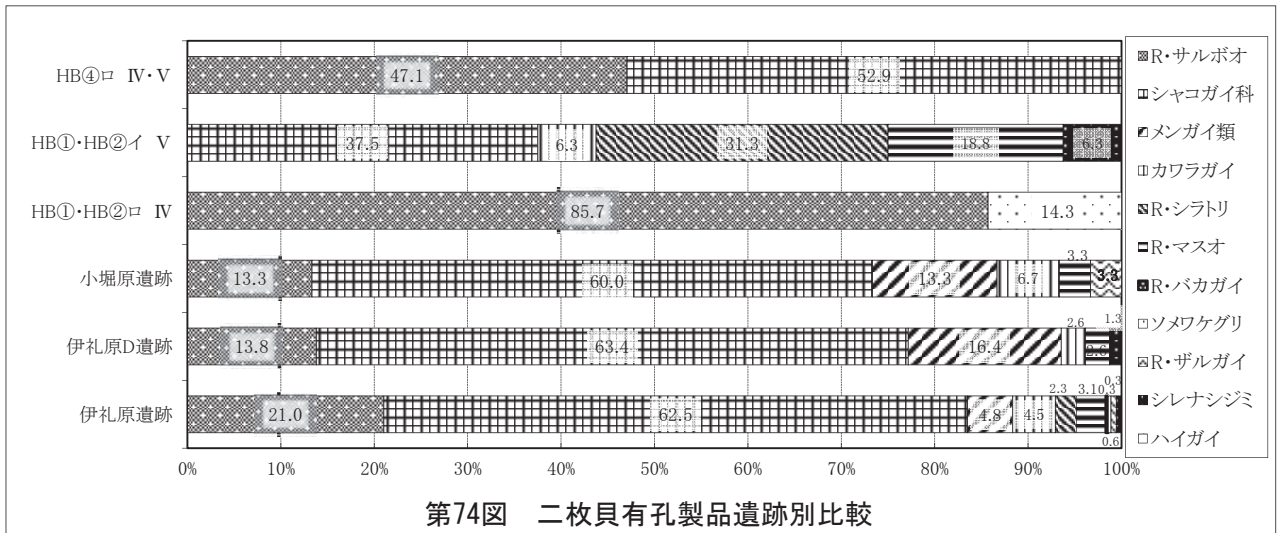
第24表 二枚貝有孔製品・地区別出土量

貝種	地区 層位	R・サルボオ	R・マスオ	R・シラトリ	カワラガイ	シレナシジミ	ハイガイ	シラナミ	ヒメジャコ	合計
		HB①	IV	5					1	
	V		2	4		1		1	4	12
HB②イ	V		1	1	1				1	4
HB②口	IV	1								1
HB④イ	IV	1		1	1					3
	V					1		1		2
HB④口	V	8						2	7	17
	表採								1	1
合計		15	3	6	2	2	1	4	13	46

第25表 二枚貝有孔製品・重さ別出土量

貝種	重さ(g)	R・サルボオ	R・マスオ	R・シラトリ	カワラガイ	シラナミ	シレナシジミ	ハイガイ	ヒメジャコ	合計
		0～9	1	3	6	2				
	10～19	7				3	1		5	16
	20～29	6						1	1	8
	30～39								2	2
	40～49	1				1				2
	50～59						1		1	2
	60～69									0
	70～79								1	1
	100～								2	2
合計		15	3	6	2	4	2	1	13	46

R:リュウキュウの意



第74図 二枚貝有孔製品遺跡別比較

貝種別の出土状況を地区別と他の遺跡と比較した。出土地区に関してはHB①・HB②イ地区V層（貝塚時代後期）でシャコガイ類が37.5%、リュウキュウシラトリが31.3%、リュウキュウマスオが18.8%、HB④ロ地区のIV・V層（平安山原C遺跡に近接）でリュウキュウサルボオ47.1%、シャコガイ類52.9%、HB①、HB②ロ地区のIV層（自然流路）ではリュウキュウサルボオ85.7%と主体となる貝種が変化するようである。他の遺跡と比較すると小堀原遺跡（2012）、伊礼原D遺跡（2013）、伊礼原遺跡（2014）ともシャコガイ類が優位を占めていることから本遺跡のIV層は様相を異にするようである。

第26表-1 二枚貝有孔製品観察一覧

(法量単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	製品 番号	貝種	R・L	完・破	殻高 (縦)	殻長 (横)	重さ	孔縦 孔横	孔位 置	孔一円 方形・タテ楕 ヨコ楕・長	孔打	穿孔 方向	腹縁	状態	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取上)番号
第82 図・ 図版 46	30	22	Rシラトリ	L	完	2.9	3.6	2.0	0.8 0.9	上中	やや方形	単	内→外	×	色残○	HB④イ L4 IV (V) 台314
	31	41	Rサルボオ	R	完	3.9	5.7	10.7	1.0 1.4	上後	楕円	単	内→外	×	摩耗△	HB④ロ R11 V (VII-IV) 台432
	32	42	シラナミ	R	完	4.1	6.5	12.2	0.6 1.0	上前	楕円上ハガレ	単	内→外	×	ヒレあり	HB④ロ R12 V (VII-IV) 台412
	33	16	ヒメジャコ	L	完	4.1	6.1	16.4	0.6 0.8	上中	横楕円	複	内→外	中-○・後-○	摩耗△	HB④ロ S11 V (VI) 貝層群III 台424
	34	43	ヒメジャコ	L	完	7.4	10.0	72.0	2.9 2.4	中中	縦楕円	複	内→外	後-△	摩耗○	HB②イ K11 V (黄砂層上面) 取1231
	35	44	シラナミ	R	完	9.3	12.5	17.0	1.5 1.8	上前	方形上ハガレ	複	内→外	前・中・後-◎	アバタ◎	HB④イ L1 V (VIII) 台344
図・ 図版 なし	37		Rシラトリ	R	完	4.4	3.2	3.8	1.1 1.3	上前	円	複	内→外	×	×	HB① K12 V (5層黄色砂) 台732
	38		ヒメジャコ	L	完	7.0	4.6	17.5	1.3 1.5	上中	方形	複	内→外	中-○	×	HB① L14 V (4層混貝層) 台674
	39		ヒメジャコ	L	完	11.2	8.6	113.5	1.6 2.5	上前	方形	複	内→外	×	×	HB① L14 V (5層黄色砂) 台310
	40		ヒメジャコ	L	完	8.4	6.0	39.5	1.8 1.1	中中	楕円	複	内→外 (自然)	×	摩耗○	HB① L15 V (5層褐色細砂質土) 台540
	41		ヒメジャコ	R	完	12.5	8.3	174.0	1.7 3.7	中中	楕円	複	内→外	×	×	HB① L15 V (5層褐色細砂質土) 台540
	42		シラナミ	R	完	14.1	5.5	40.4	1.7 1.9	上前	方形	複	内→外	×	摩耗○	HB① L12 V (4層混貝層) 台398
	43		Rサルボオ	L	完	5.2	3.7	11.9	0.8 0.9	殻頂	楕円	単	外→内	×	摩耗△	HB① P18 IV (3層青灰シルト) 台711
	44		Rサルボオ	L	完	5.8	4.3	24.4	0.8 1.0	殻頂	横楕円	単	外→内	×	摩耗△	HB① P18 IV (3層青灰シルト) 台711
	45		Rサルボオ	R	完	5.4	4.0	16.3	1.8 1.9	殻頂	楕円	単	外→内	前中後-△	摩耗△	HB① O18 IV (3層青灰粘質土) 台447
	46		Rマスオ	R	完	6.4	4.3	8.0	1.1 1.2	上後	方形	単	内→外	×	摩耗△	HB① M14 V (5層黄色砂) 台669

(凡例) 完: ほぼ完, ◎: 多・強, ○: 普通, △: 少・弱, ◻: 僅少, ×: なし, -: 不明・計測不可, R: リュウキュウ

第26表-2 二枚貝有孔製品観察一覧

(法量単位: cm, g)

第図版	図番号	製品番号	貝種	R・L	完・破	殻高(縦)	殻長(横)	重さ	孔縦孔横	孔位置	孔一円 方形・タテ楕 ヨコ楕・長	孔打	穿孔方向	腹縁	状態	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取上)番号
		47	Rシラトリ	R	完	3.6	2.7	2.0	1.1 1.0	中中	楕円	単	内→外	×	×	HB① J15 V (5層褐色細砂質土) 台701
		48	Rシラトリ	R	完	3.6	3.1	2.7	0.8 0.9	中中	楕円	単	内→外	中-△	×	HB① J15 V (5層褐色細砂質土) 台701
		49	Rシラトリ	R	完	4.3	3.4	3.3	1.0 1.1	上前	方形	複	内→外	×	×	HB① L16 V (5層褐色細砂質土) 台717
		50	Rマスオ	R	完	6.0	4.2	9.7	1.1 1.1	上後	円	複	内→外	中後-○	色残○	HB① L15 V (5層黄色砂) 台792
		51	ハイガイ	R	完	5.4	4.5	23.5	1.0 1.1	殻頂	楕円	単	外→内	×	風化◎	HB① O20 IV (3層青灰粘質土) 台677
		52	シレナシジミ	R	完	6.2	5.4	17.3	1.1 0.9	上中	不定形	単	内→外	中後-○	アバタ○	HB① K19 V (4層混貝層) 台679
		90	Rサルボオ	L	完	12.1	4.4	27.9	1.2 1.5	上中	楕円	複	内→外	×	風化△	HB① P17 IV (3層青灰シルト) 台590
		91	Rサルボオ	R	完	6.0	4.3	29.6	0.9 1.2	殻頂	楕円	単	外→内	×	風化△	HB① O19 IV (3層青灰シルト) 台589
		44	Rマスオ	R	完	3.1	5.2	5.1	0.9 1.1	上後	横楕円	複	内→外	×	風化△	HB②イ K12 V (貝層①) 台3285
		52	カワラガイ	R	完	3.9	3.6	6.5	0.9 0.7	上中	縦楕円	単	内→外	×	摩耗△	HB②イ J-K10 V (灰砂層) 台3177
		53	Rシラトリ	L	完	3.0	4.2	2.7	1.0 1.2	中中	方形	複	内→外	×	×	HB②イ J12 V (黒砂層) 台3488
		54	Rサルボオ	L	完	4.0	6.1	21.0	0.8 1.1	殻頂	横楕円	単	外→内	中-△	風化○	HB②ロ S12 IV (グスク層黒色粘質土) 台3371
図・ 図版なし		1	ヒメジャコ	R	完	3.7	5.8	9.4	0.9 1.3	上前	不定形	複	内→外	後-×	摩耗△	HB④ロ V (VI) 台339
		2	Rサルボオ	R	完	3.9	5.6	18.1	0.6 0.7	上中	円	複	内→外	前・中・後△	摩耗○	HB④ロ S11 V (VI) 貝層群III 台421
		3	Rサルボオ	R	完	3.9	5.6	13.0	0.7 0.9	殻頂	楕円	複	外→内	×	色残△	HB④ロ R15 V (VII-III) 台419
		4	Rサルボオ	R	完	3.9	6.0	12.9	1.1 1.6	殻頂	楕円	単	外→内	△	摩耗○	HB④ロ R11 V (VII-IV) 台433
		10	Rサルボオ	L	完	4.1	6.1	19.0	0.9 1.0	上中	楕円	複	内→外	×	×	HB④ロ R13 V (VI) 台337
		11	ヒメジャコ	R	半欠	5.1	4.0	13.8	0.9 1.3	上前	方形	複	内→外	前・中-△後-○	摩耗△	HB④ロ R13 V (VII-II) 台403
		12	ヒメジャコ	R	完	3.9	5.9	12.8	0.6 0.7	上前	楕円	複	内→外	前・中・後-△	摩耗△	HB④ロ R11 V (VII-IV) 台320
		13	ヒメジャコ	L	完	4.9	6.9	23.7	0.8 1.2	上中	方形	複	内→外	×	摩耗△	HB④ロ 表採 台320
		17	ヒメジャコ	L	完	5.1	7.1	34.7	0.7 1.2	上前	不定形	複	内→外	前中後-△	摩耗△	HB④ロ R11 V (VII-IV) 台434
		19	ヒメジャコ	L	完	3.9	5.4	10.7	0.9 1.1	上前	方形	複	内→外	前・中・後-△		HB④ロ R14 V (VII-I) 台397
		20	ヒメジャコ	R	完	6.8	9.7	58.3	1.4 1.3	上前	円	複	内→外	後-○	摩耗△	HB④ロ V (VII) 台340
		21	カワラガイ	L	完	4.3	3.8	8.1	0.6 0.5	上中	楕円	単	内→外	×	摩耗△	HB④イ O9 IV (VII) 台352
		26	シラナミ	R	完	4.3	6.4	14.9	1.2 1.1	中中	楕円	複	内→外	前・中・後-△	摩耗△	HB④ロ R10.11.12 V (VII) 台387
		32	Rサルボオ	L	完	3.5	5.2	8.6	0.6 0.6	殻頂	楕円	単	外→内	×	摩耗○	HB④ロ R15 V (VII-II) 台429
		34	Rサルボオ	L	完	4.3	6.4	29.3	1.0 0.9	上中	丸	複	内→外	前・中・後-△	摩耗△	HB④ロ R10 V (VII-IV) 台394
		38	Rサルボオ	R	完	4.8	6.9	29.3	1.0 0.8	上中	楕円	複	外→内	×	色残△	HB④ロ R12 V (VII) 台394
		39	シレナシジミ	R	完	7.6	8.8	59.7	1.4 1.3	上中	不定形	複	内→外	×	アバタ○	HB④イ N3 V (VIII) 台334
		40	Rサルボオ	L	完	4.5	7.4	45.7	1.2 1.6	殻頂	不定形	複	外→内	後-○	風化△	HB④イ L2 IV (V) 台313

(凡例)完':ほぼ完、◎:多・強、○:普通、△:少・弱、∠:僅少、×:なし、-:不明・計測不可、R:リュウキュウ

<スিজガイ製利器>

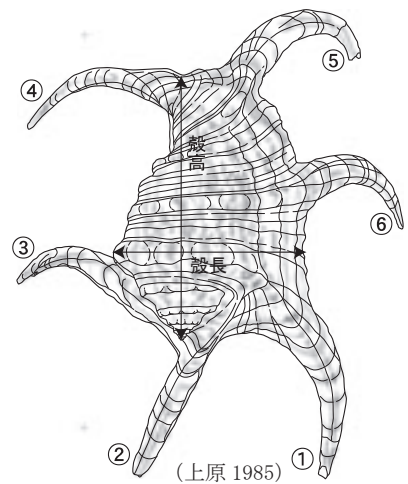
模式図に示した突起番号①を研磨したもので、HB①地区のV層で2点出土した。図36は完形、図37は殻頂と腹面を破損する。伊礼原E遺跡(2010)の分類に従うといずれもB①タイプに分類される。スিজガイ利器としては一般的である。

<イトマキボラ製ノミ状製品>

図38イトマキボラの殻軸部分を棒状に加工し、先端をノミ状に加工したもので、1点出土した。

完形品で刃をみると片刃、平面形は丸刃をなし、大きさは長さ8.9cm、径1.7cm、重さ29.1gを測る。全面を研磨し、削り込んでいることから、かなり大きいイトマキボラを用いたものと思われる。頭部側が殻頂で、刃部側が殻軸先を用いる。HB②イ地区V層(黄砂層上面)(取1228)の出土である。

イトマキボラ製の利器の報告例をみると貝殻を残したものではシヌグ堂遺跡(1985)、大原貝塚(1980)、殻軸のみの加工は地荒原貝塚(1986)、古座間味貝塚Ⅱ区4号住居(1982)、宇地泊兼久原遺跡(1989)で得られているが、本遺跡のように石器のように加工されているは初めてである。



第75図 スিজガイ突起番号

第27表 スিজガイ製利器観察一覧

(法量単位:cm, g)

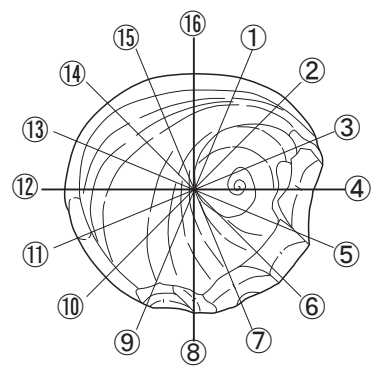
第図 図版	挿図 図反	製品 番号	分類	完破	突起						重さ	殻高 (縦)	殻長 (横)	ア バ タ	色 残	摩 耗	へ び	風 化	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取上)台帳
					①	②	③	④	⑤	⑥									
第 84 図 48	36	88	B	完	研磨	欠	半欠	半欠	欠-	半欠	446.5	20	16	○	×	×	-	△	HB①L15V (4層橙シルト)台639
	37	89	B	破	研磨	破	欠	欠	欠-	半欠	374.5	13.1	21.4	×	×	×	-	○	HB①L12V (黄色砂)取210

(凡例)完':ほぼ完、◎:多・強、○:普通、△:少・弱、∟:僅少、×:なし、-:不明・計測不可

<螺蓋製貝斧>

ヤコウガイの蓋の薄い部分を連続して打ち割り、刃状にしたものでHB①V層で3点、HB②イ地区V層で2点の計5点出土した。図39はHB①地区V層、図40はHB②イ地区V層出土のものである。いずれも附刃の方向が一方のAタイプ(伊礼原E遺跡2010)である。

出土した製品はほとんど縦が7cm以上の大きいタイプである。1点だけ(製38)、6.5cmの小さいのが出土したが、附刃の範囲は他と同様大きい。



『シヌグ堂遺跡』(1985)

第76図 ヤコウガイの蓋附刃分布

第28表 螺蓋製貝斧観察一覧

(法量単位:cm, g)

第図 図版	図番 号	製品 番号	完破	縦	横	重さ	附刃範囲	観察事項	貝状態	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取上)番号
第 85 図 49	39	70	完	7.1	7.8	146.9	附刃A⑥~⑩	打ち割りは細かく、規則的	色残○	HB① L16 V 5層(黄色砂)台694
	40	39	完	7.2	8.1	169.0	附刃A④~⑭	打ち割りは細かく、規則的	色残○	HB②イ K12 V (貝層②)台3284
図 ・ 図 版 な し		68	完	7.3	8.2	152.2	附刃⑩~⑮	打ち割り大きく、やや不連続	色残△	HB① L14 V (5層)台727
		69	完	7.3	7.9	149.1	附刃⑦~⑩	打ち割り不連続	風化△	HB① K20 V 4層(混貝層)台742
		38	完	6.5	7.4	119.4	附刃④~⑭	打ち割り細かく、丁寧	風化△	HB②イ J11 V (貝層②)台3286

(凡例)完':ほぼ完、◎:多・強、○:普通、△:少・弱、∟:僅少、×:なし、-:不明・計測不可

<ヤコウガイ殻>

・貝匙

図 41 はヤコウガイの殻口近くを切り取り匙状に加工したもので、背面型の匙の破損品である。周縁の一部に割取りのための打ち割りが数ヶ所確認できる。外殻は3本の螺肋を器厚調整のための研磨が確認できるが、螺肋の大きいほど研磨が顕著で真珠層を露出する。内殻は特に加工は認められない。HB④口地区V層(VII)の出土である。残存部の大きさは縦8.7cm、横7.7cm、重さ57.5gを測る。

・切り取り残存部及び自然貝

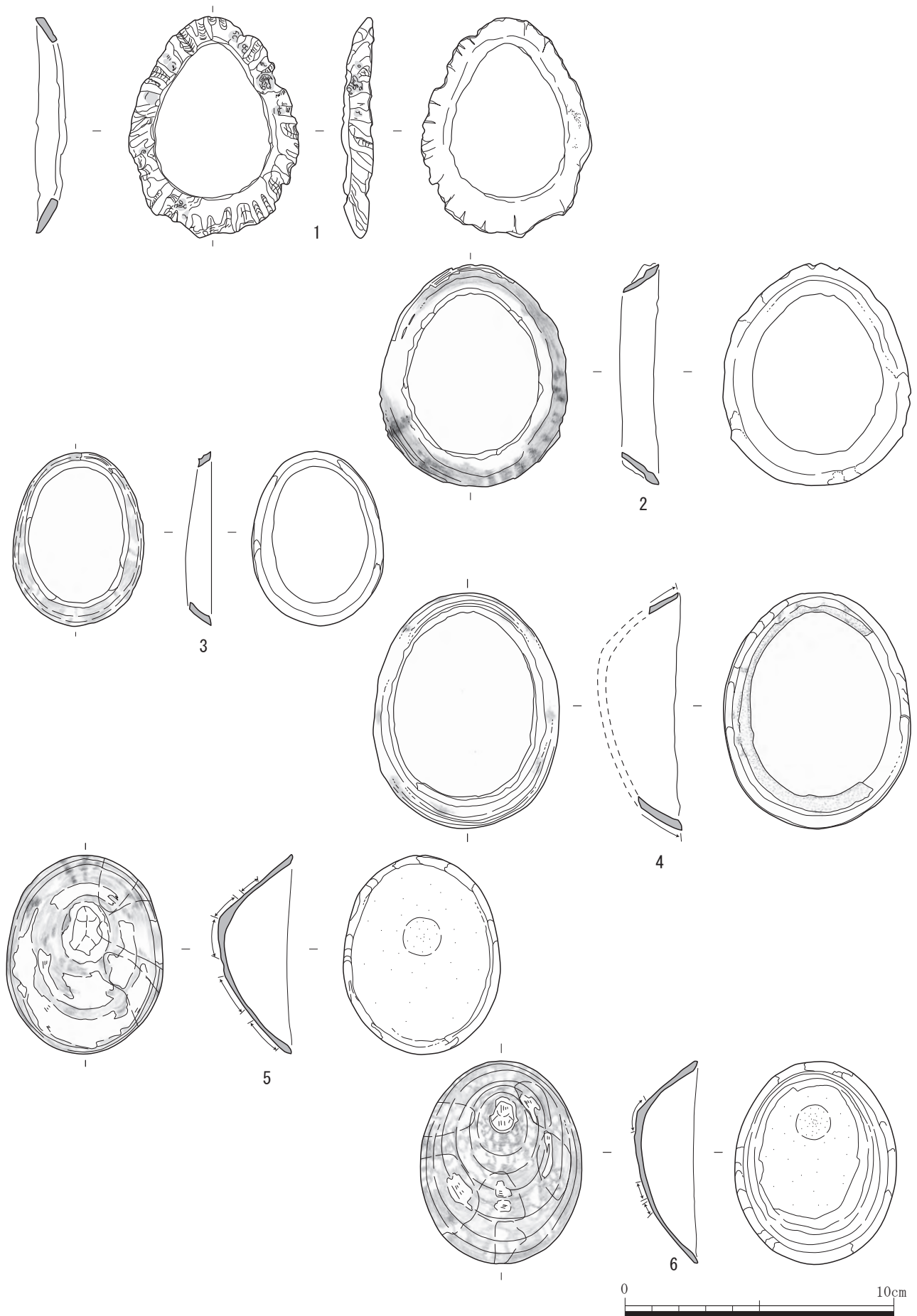
図 42 は井戸南、M15・16 出土。殻頂および殻軸にアバタ、殻口部分は打ち割り調整、貝匙などの切り取り残存部の可能性が高い。表面にさらされていたためか、殻は部分的に黒褐色で覆われ、この状況から殻頂を上に出していた可能性が高い。第29表に出土一覧と主なものを図版で示した。

HB①地区10点(3061.8g)、HB②イ地区3点(744g)、HB④イ地区11点(796.5g)、HB④口地区14点(1732.3g)の出土である。単純に1個あたりの割合をみるとHB①地区306g、HB②イ地区248g、HB④イ地区72g、HB④口地区124gでHB①地区、HB②イ地区に大きい破片が得られている。またHB

第29表 ヤコウガイ観察一覧

第図版	図番号	製品番号	記号(木下)	焼	アバタ	色	摩	へ	風	重さ	観察事項	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取上)番号
第85図版 49	41	3	Dのみ	×	△	△	×	△	△	57.5	貝匙。体層中央。外殻-稜研磨。	HB④口 V (VII) 台340
	42	-	B	×	○	△	△	○	△	316.0	外唇、体層欠。表層、部分的に黒褐色で覆われる。殻頂を上表面に露出。	HB① M15.16 表採(井戸南)台810
図版 50	1	42	A欠	△	×	△	×	×	×	644.0	体層中央欠。複数の打割、匙切り取り残存部。臍部付近焼け?。表層。	HB②イ J10 V (貝層) 台3464
	2	77	BD欠	×	-	-	-	-	-	644.5	殻頂・外唇欠、外唇付近に複数の打割痕、真珠層露呈。かつ鉄付着。	HB① N20 IV (3層青灰砂) 台317
	3	78	D下のみ	×	×	△	×	×	×	268.5	外唇下半分。石灰付着。真珠(一部露出)殻頂次体層(外唇)。	HB① L13 V (5層黄色砂) 台208
	4	72	BD欠	×	◎	△	○	×	△	435.0	割れ自然。表層孔。	HB① L14 V (4層混貝層) 台178
	5	79	BDE欠	×	-	△	-	△	-	194.5	特になし。殻頂欠。臍・口。	HB① K12 16 V (3層暗褐色シルト) 台704
	6	40	D部分	×	×	○	×	×	×	50.3	割れ自然。	HB②イ J12 V (黒砂層) 台3438
	7	75	D部分	×	○	-	-	-	-	293.0	臍のみ。複数の打割痕。褐鉄付着。臍。	HB① L17 V (4層混貝層) 台154
図・ 図版なし	71	BC有	△	×	△	×	×	△	185.5	殻軸。割れ自然。真珠・表層。	HB① K20 V (4層) 台687	
	73	BAD欠	×	○	-	-	○	-	350.5	複数の打割痕。	HB① K19・20 V (4層) 台752	
	74	Dのみ	×	-	-	-	-	-	43.3	臍のみ。打割痕、2回。次体層。	HB① K19・20 V (4層) 台752	
	76	BAD欠	◎	△	-	-	-	-	331.0	殻軸。打割-粗い。部分研磨。ヤケ有りか。	HB① K18 III SK236台630	
	41	C部分	×	×	○	×	×	×	49.7	体層奥部。割れ自然。表層。	HB②イ L10 V (貝層③) 台1310	
	25	Dのみ	×	-	△	-	-	-	15.0	表層。	HB④イ N5 V (VIII) 台373	
	1	Bのみ	×	×	△	×	×	△	46.4	表層。	HB④イ L7 V (VIII) 台331	
	2	Aのみ	×	×	○	×	×	×	218.5	体層中央。	HB④イ L7 V (VIII) 台331	
	4	Bのみ	×	○	×	△	×	○	74.0	殻頂。打割痕、数回。	HB④口 R10 V (VII-III) 台428	
	5	D下	×	△	×	×	×	×	38.3	殻口下部。	HB④口 R10 V (VII-III) 台428	
	6	Dのみ	×	△	×	△	×	○	117.0	臍のみ。打割痕、数回。	HB④イ L1 V (VIII) 台343	
	7	B	×	△	△	△	×	○	208.0	殻頂のみ。割れ自然。	HB④口 R14 V (VII-V) 台442	
	8	D欠	×	△	△	×	△	×	371.0	割れ自然。	HB④口 R12 V (VII-IV) 台437	
	9	Dのみ	×	△	×	○	×	×	222.0	臍。打割痕、数回。	HB④口 R13 V (VII-IV) 台438	
	10	Dのみ	×	×	△	×	△	×	176.5	外唇、割取り。	HB④口 R11 V (VII-III) 台431	
	11	Dのみ	×	○	×	×	×	○	84.0	臍。表層有り。	HB④イ K4 IV (V) 台312	
	12	Dのみ	×	○	×	○	×	○	89.0	臍部に打割痕、数回。	HB④口 R10.11.12 V (VII) 台383	
	13	Dのみ	×	△	×	×	×	△	101.5	殻軸。打割痕、数回。	HB④イ K1 IV (V) 台322	
	14	Dのみ	×	△	×	×	×	△	146.0	殻軸。打割痕、数回。	HB④口 R13 V (VII-III) 台415	
	15	Dのみ	×	○	×	×	×	×	39.0	殻軸。	HB④口 S13 V (VII-I) 台399	
	16	Bのみ	×	×	×	×	×	×	67.0		HB④口 Q10.11.12 V (VII) 台381	
	17	Dのみ	×	×	△	×	×	○	82.0	殻軸。	HB④イ L1 V (VIII) 台344	
	18	Dのみ	×	×	×	×	×	○	14.0	殻軸。	HB④イ L6 IV (IV) 台217	
	19	Dのみ	×	×	×	×	×	×	56.0	臍部。打割痕、複数、石灰付着。	HB④口 S11 V (VI) 貝層群III 台424	
20	B	×	×	△	×	×	×	115.0	殻軸。打割痕、複数。	HB④口 R13 V (VII-III) 貝層群I 台414		
21	Bのみ	×	△	△	×	×	×	48.9	なし。	HB④イ L3 IV (IV) 台258		
22	Dのみ	×	-	-	-	-	-	73.0	打割痕、数回。表層。	HB④口 R11 V (VII) 台391		
23	Dのみ	×	-	-	-	-	-	30.2	打割痕、数回。真珠。	HB④イ L6 IV (VII) 台329		
24	Dのみ	×	×	×	×	×	○	39.0	打割痕、数回。真珠。	HB④イ J2 I (攪乱) 台151		

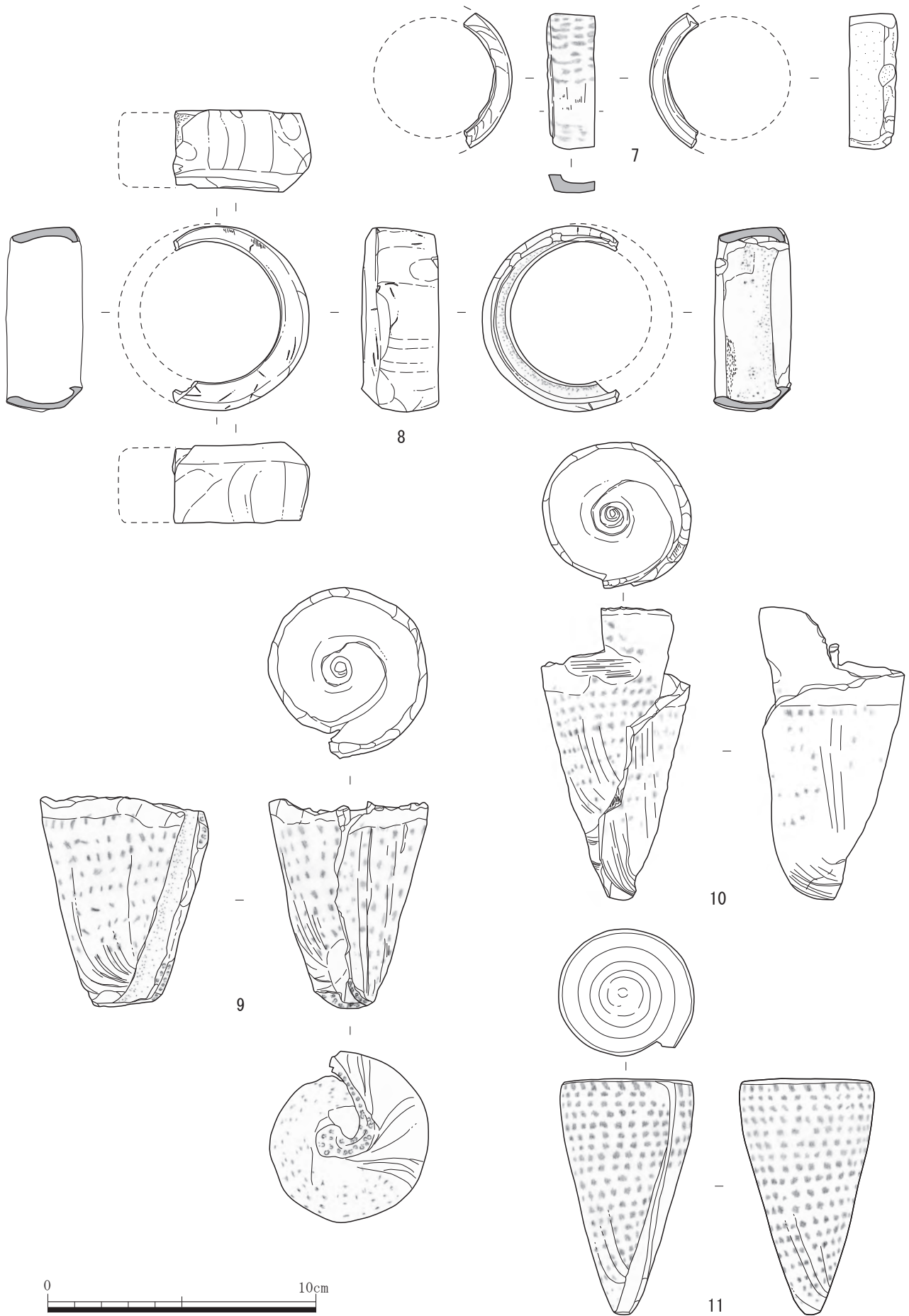
<凡例> 完':ほぼ完、◎:多・強、○:普通、△:少・弱、△:僅少、×:なし、-:不明・計測不可



第77図 貝製品1



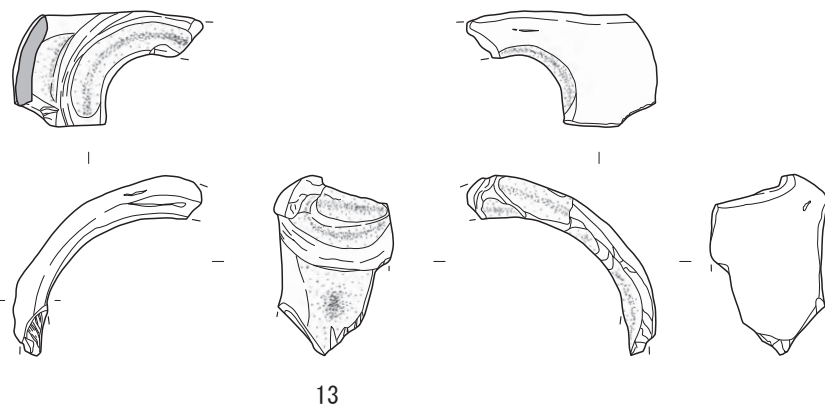
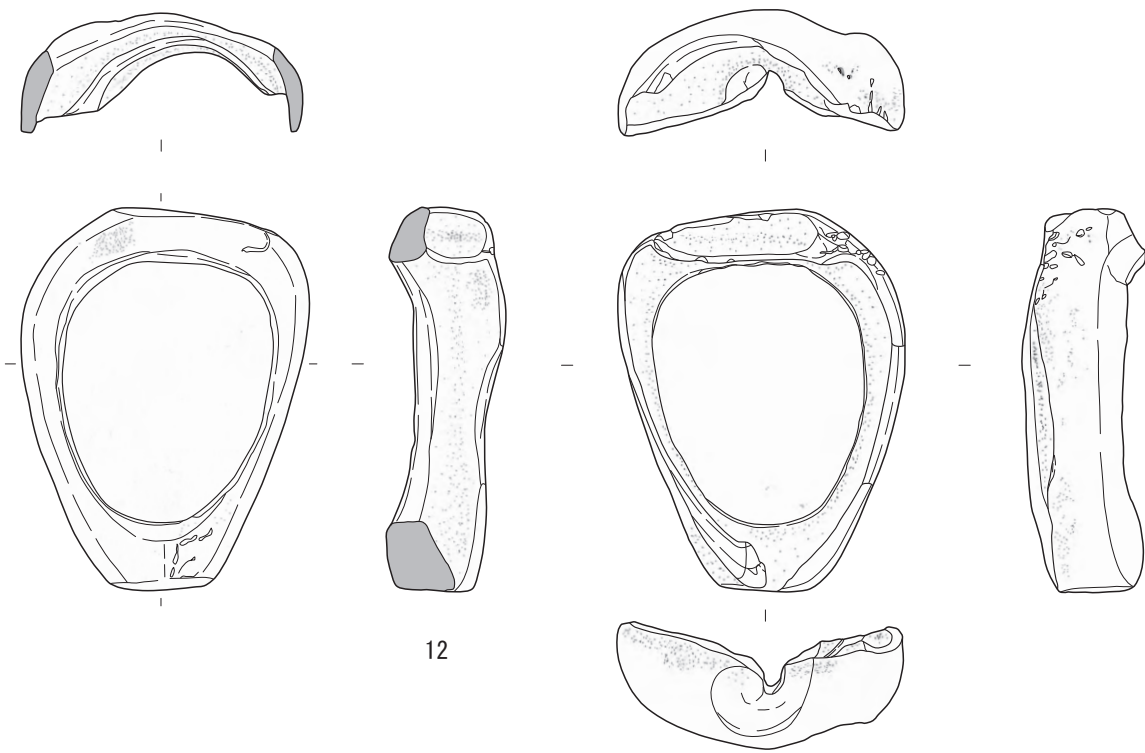
图版 41 貝製品 1



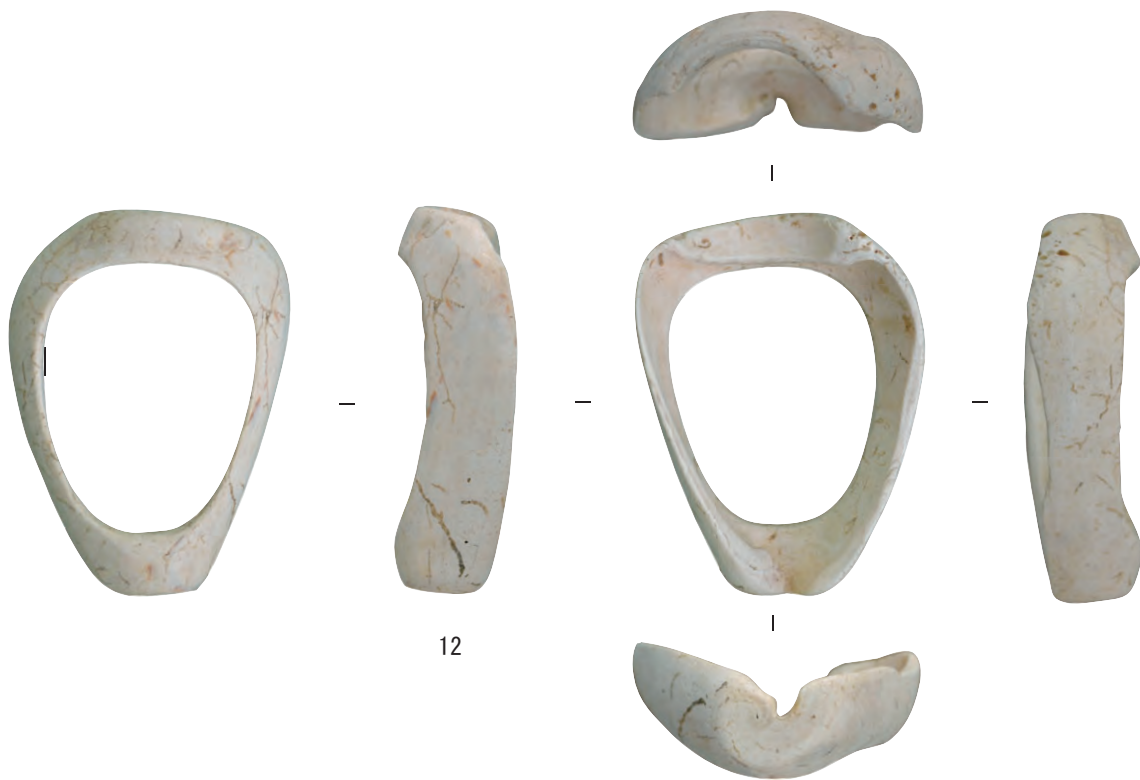
第77図 貝製品2



图版 42 貝製品 2



第 79 図 貝製品 3



12



13



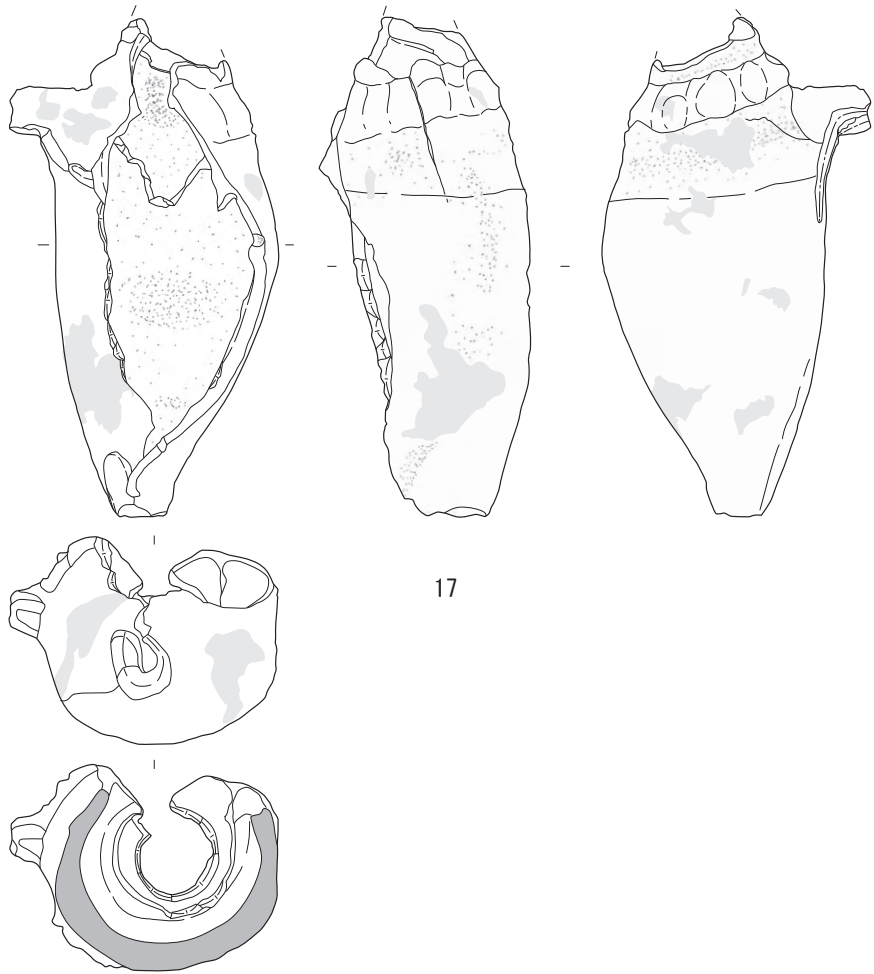
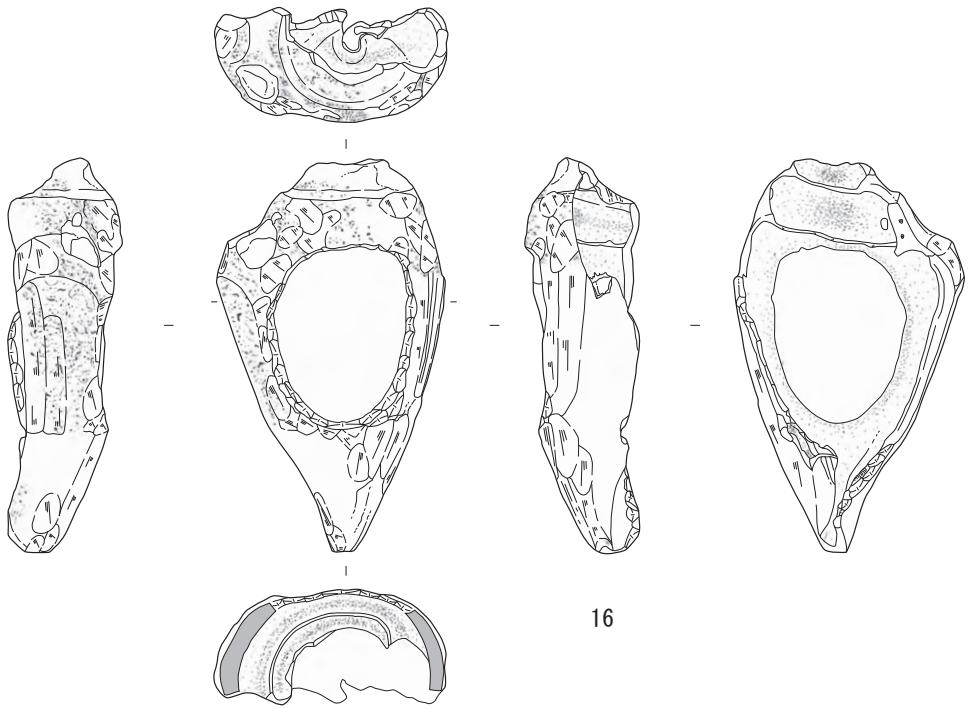
14



15



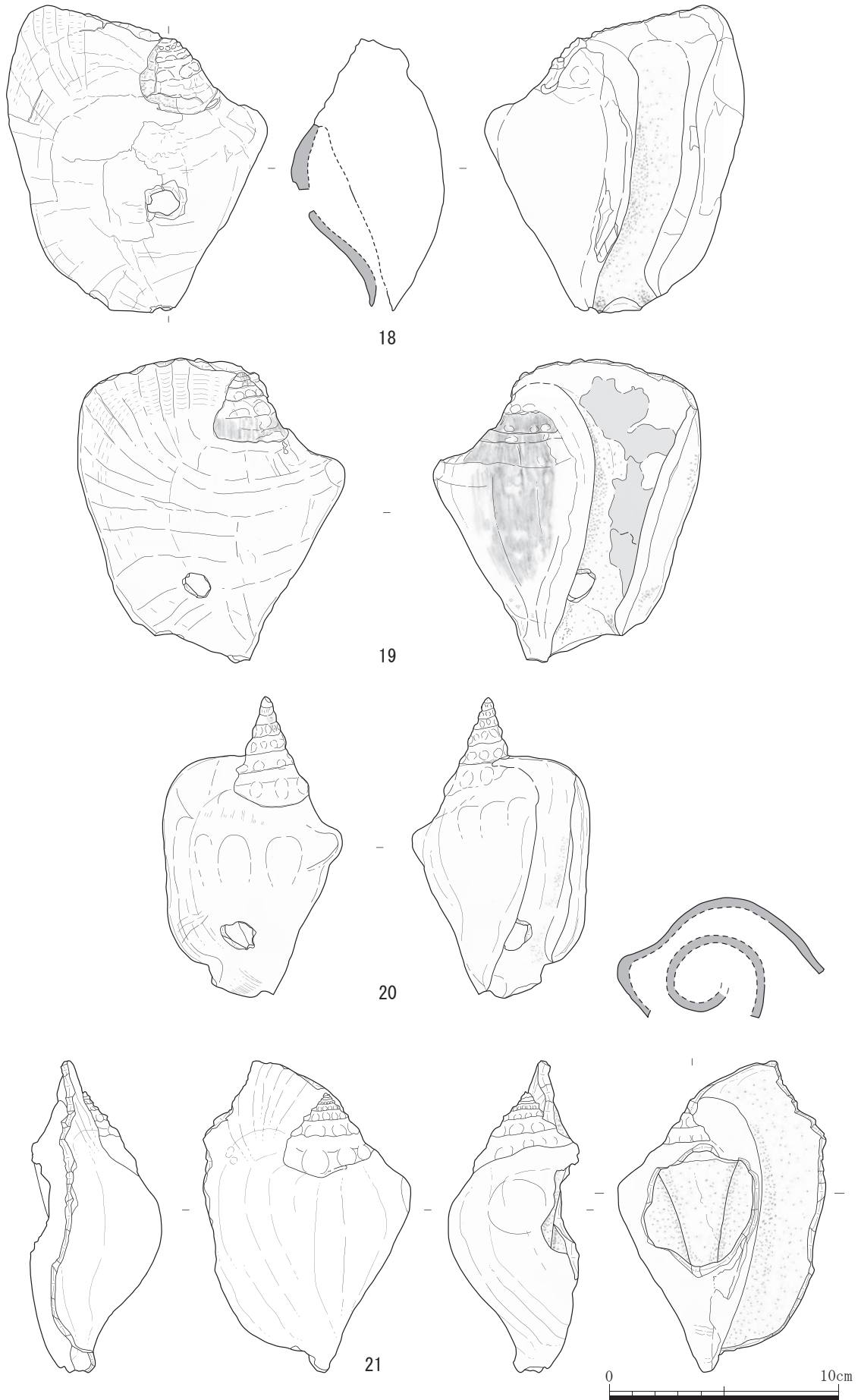
图版 43 貝製品 3



第 80 図 貝製品 4



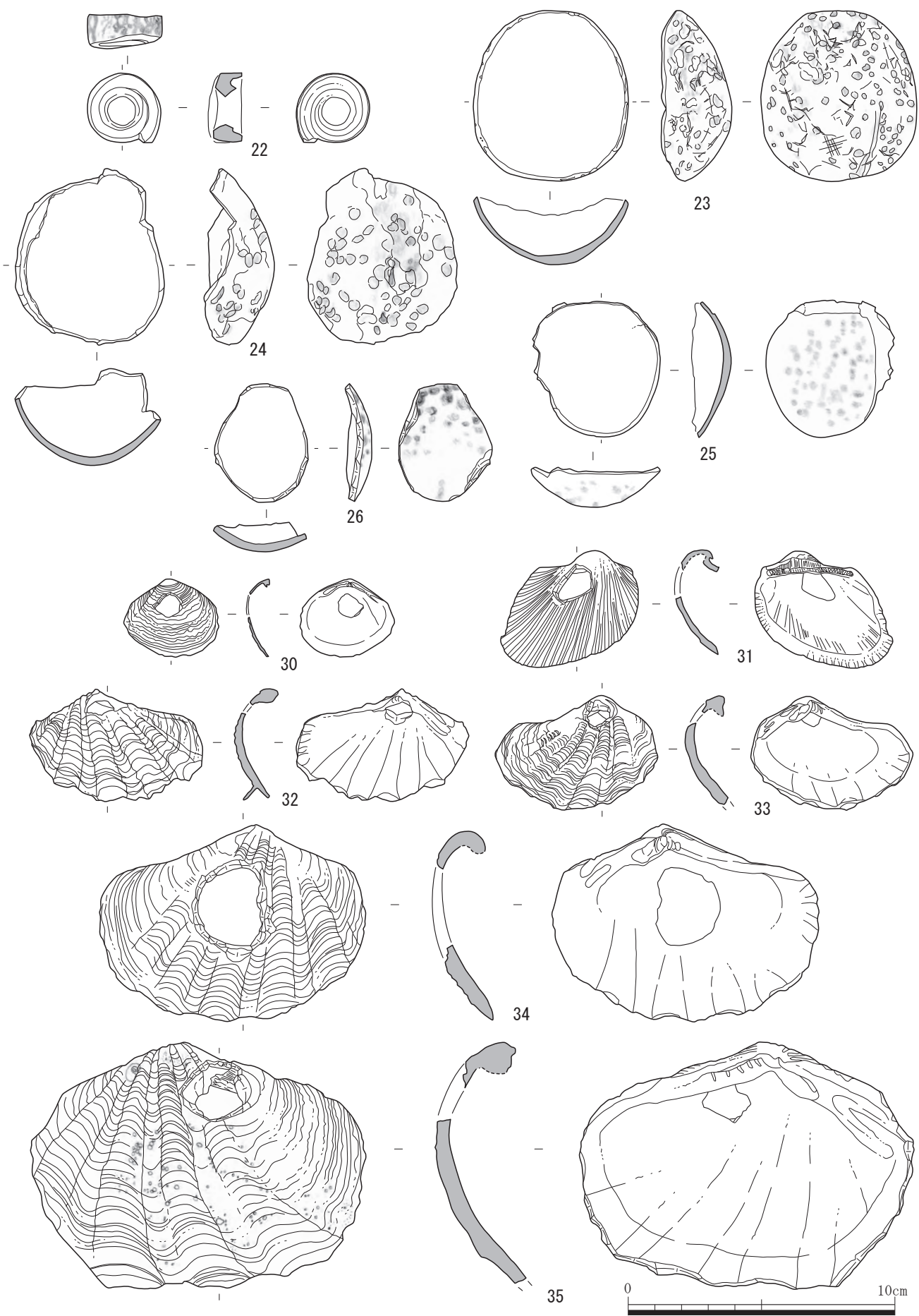
图版 44 貝製品 4



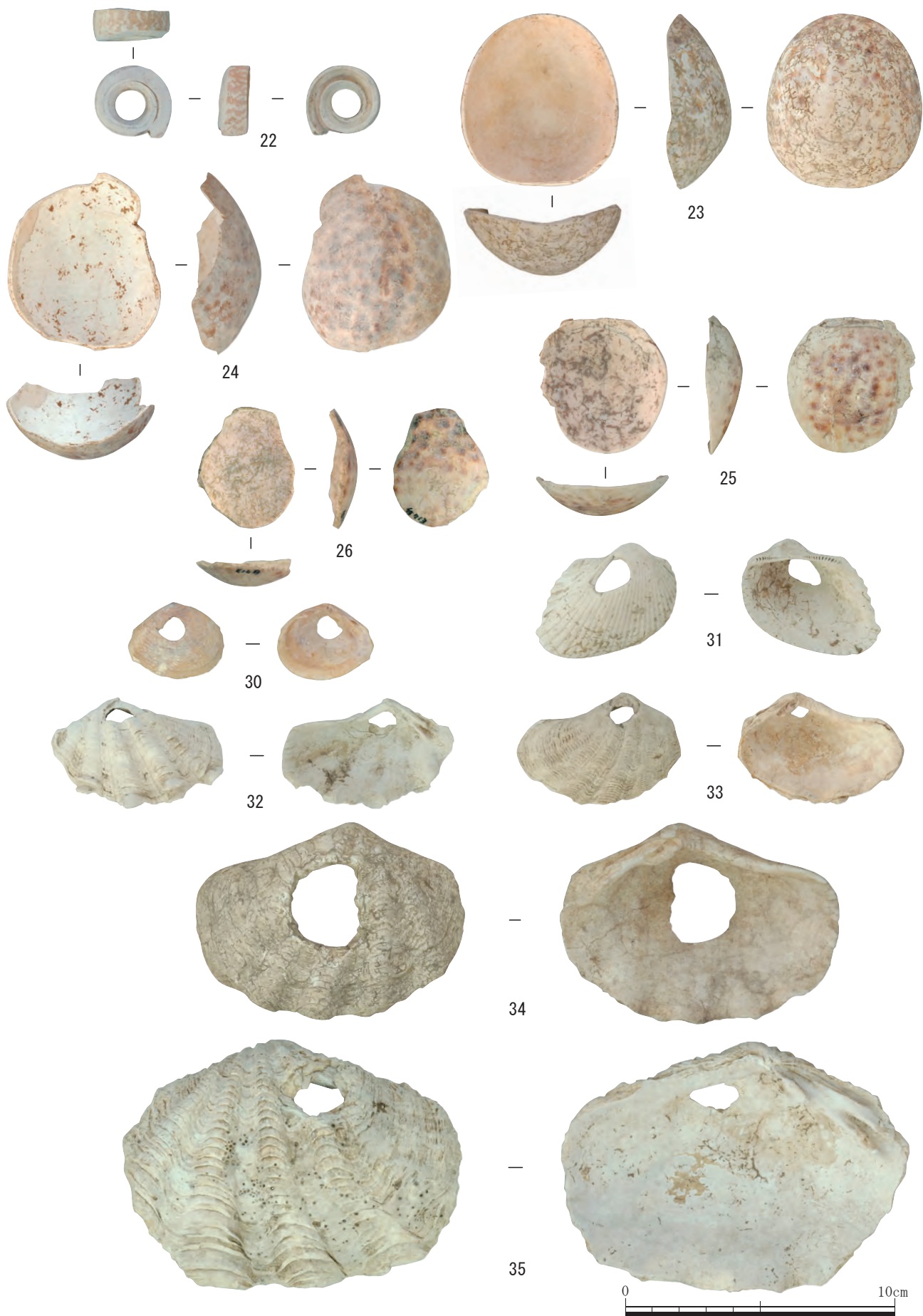
第 81 図 貝製品 5



图版 45 貝製品 5



第 82 図 貝製品 6



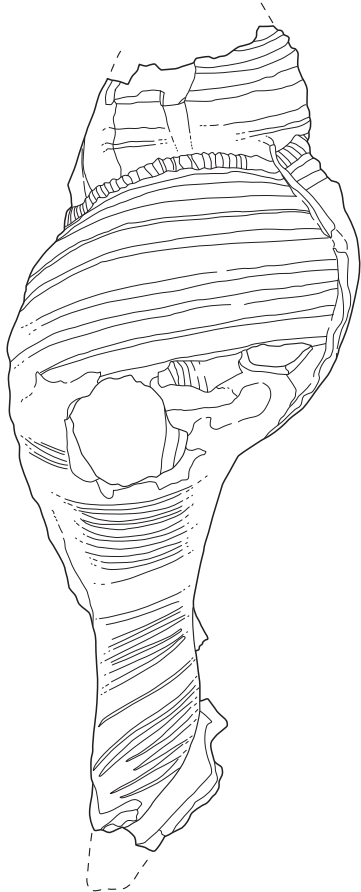
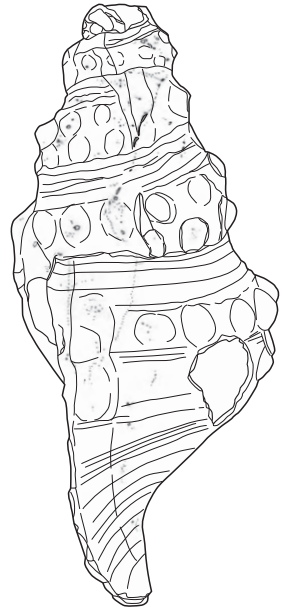
图版 46 貝製品 6



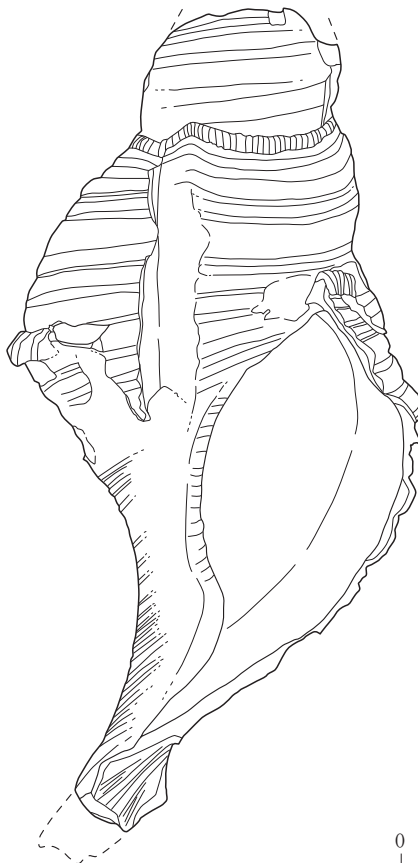
27



28



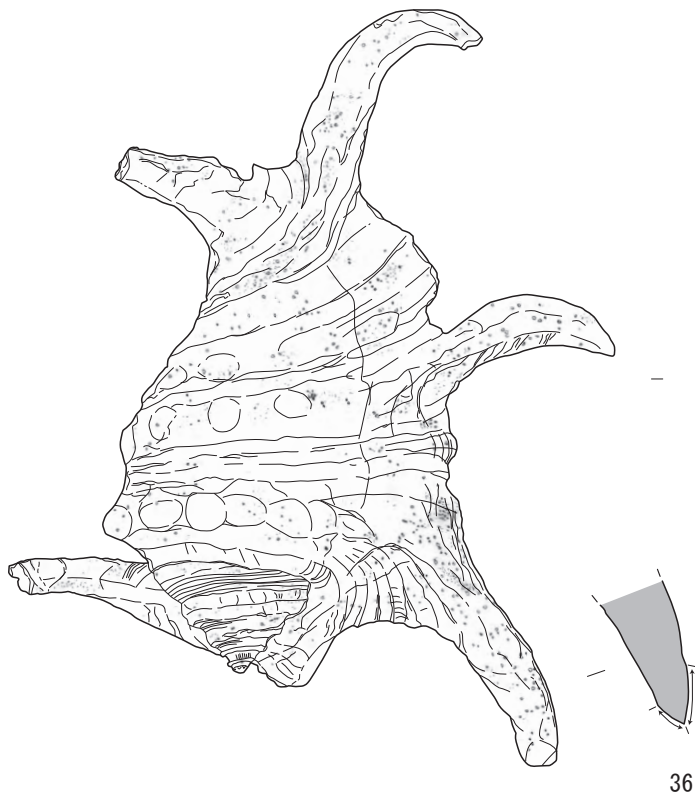
29



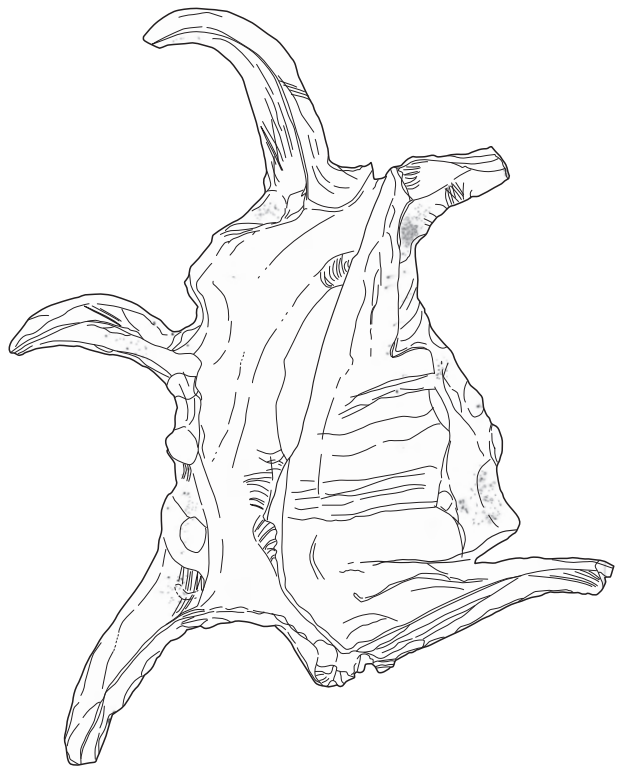
第 83 図 貝製品 7



图版 47 貝製品 7



36



37



第 84 図 貝製品 8



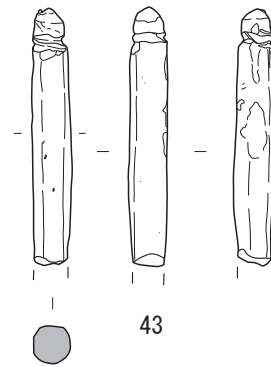
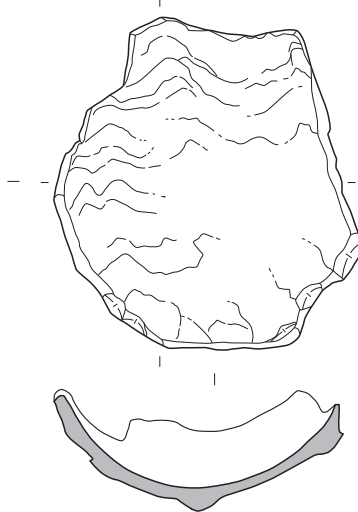
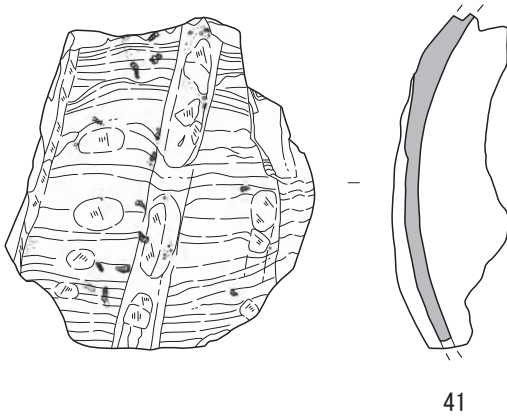
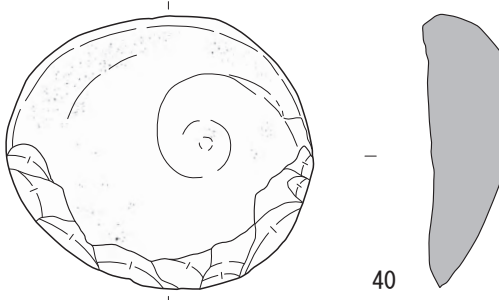
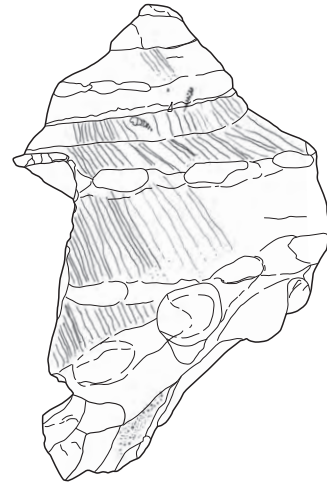
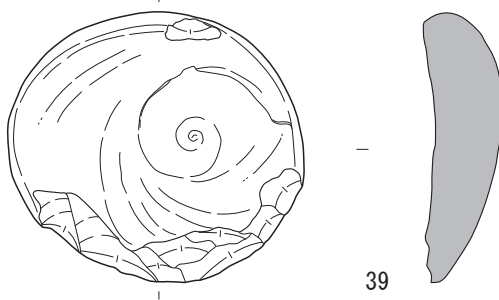
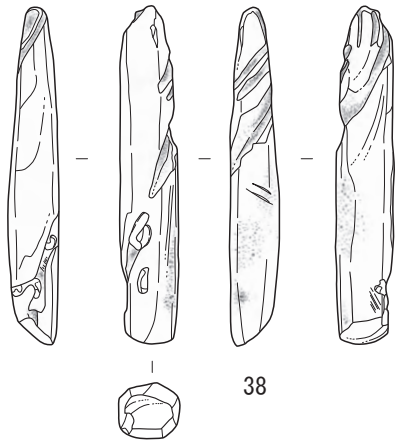
36



37



图版 48 貝製品 8



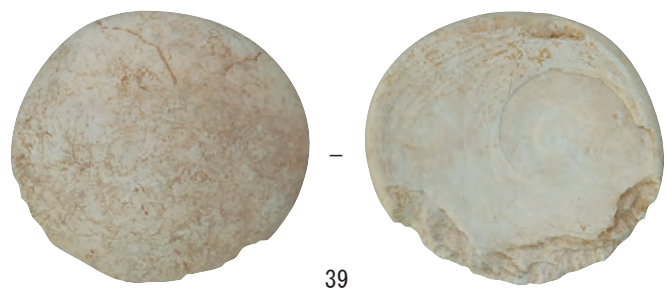
第 85 図 貝製品 9



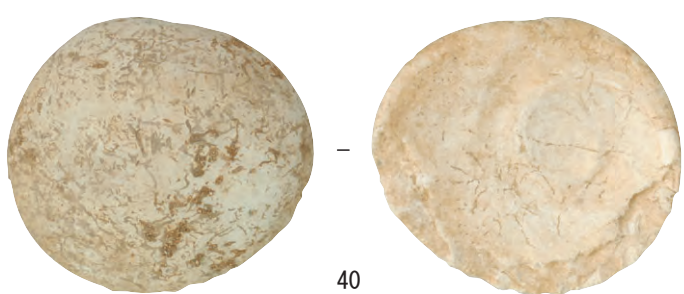
38



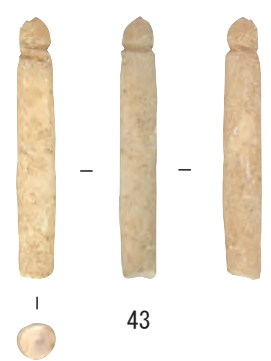
42



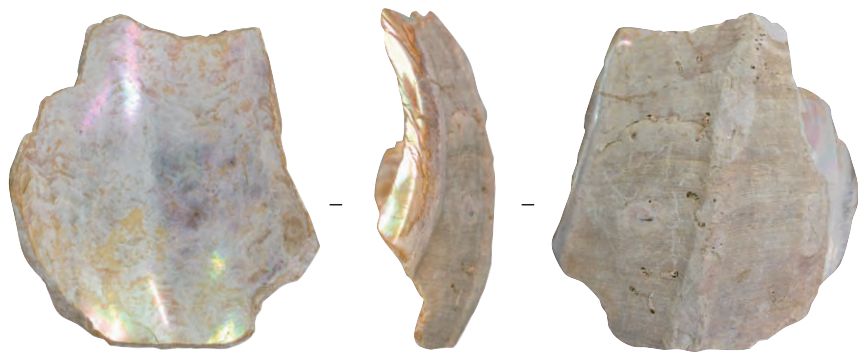
39



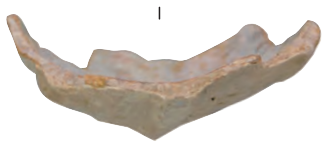
40



43



41

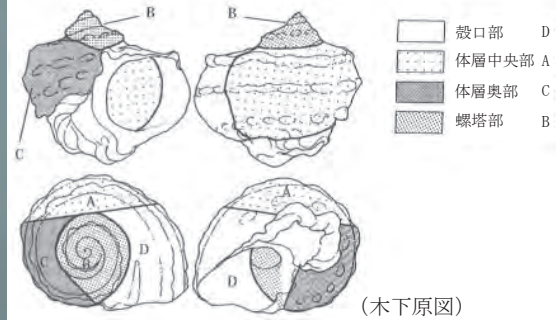


图版 49 貝製品 9

④イ・ロ地区は出土数が多い割に細片である。貝殻も風化しているものが多く、大形イモガイやゴホウラの自然貝と同じような傾向を示す。HB①・HB②イ地区の殻は大きく、その形状は貝匙の切り取り残存部（図版50）と思われる。



図版 50 ヤコウガイ (番号は第 29 表と一致)



第 86 図 ヤコウガイの部位の分類

・パイプユニ製品

図 43 はパイプユニの棘を全面研磨し、横断面は円形を呈するもので先端部を欠損する。基部近くに螺旋状に溝を圍繞するものである。残存する大きさは、長さ 6.8cm、径 1.0cm、重さ 4.6g を測る。HB①地区 N20 IV層の出土。伊礼原遺跡（2014）でも出土するが、加工の仕方が異なる。

<註・参考文献>

沖縄県教育委員会 1980『大原貝塚』沖縄県文化財調査報告書第 32 集

沖縄県教育委員会 1982『古座間味貝塚』沖縄県文化財調査報告書第 43 集

沖縄県教育委員会 1985『シヌグ堂遺跡』沖縄県文化財調査報告書第 67 集

具志川市教育委員会 1986「地荒原貝塚—個人住宅建築工事に係る発掘調査報告—」

黒住耐二 2011 第 2 部「琉球先史時代人とサンゴ礁資源—貝類を中心に—」高宮広土・伊藤慎二（編）考古学リーダー 19『先史・原始時代の琉球列島—ヒトと景観』六一書房

北谷町教育委員会 2014「伊礼原遺跡（国指定外）・伊礼原 A 遺跡」北谷町文化財調査報告書第 36 集

木下尚子 2014「マガキガイの指輪—弥生時代の貝製指輪」『先史学・考古学論究』IV 龍田考古学会

北谷町教育委員会 2010『伊礼原 E 遺跡』北谷町文化財調査報告書第 31 集

高宮廣衛・他 1989「宜野湾市宇地泊兼久原遺跡発掘調査報告」『沖国大考古』第 10 号沖縄国際大学文学部考古学研究室

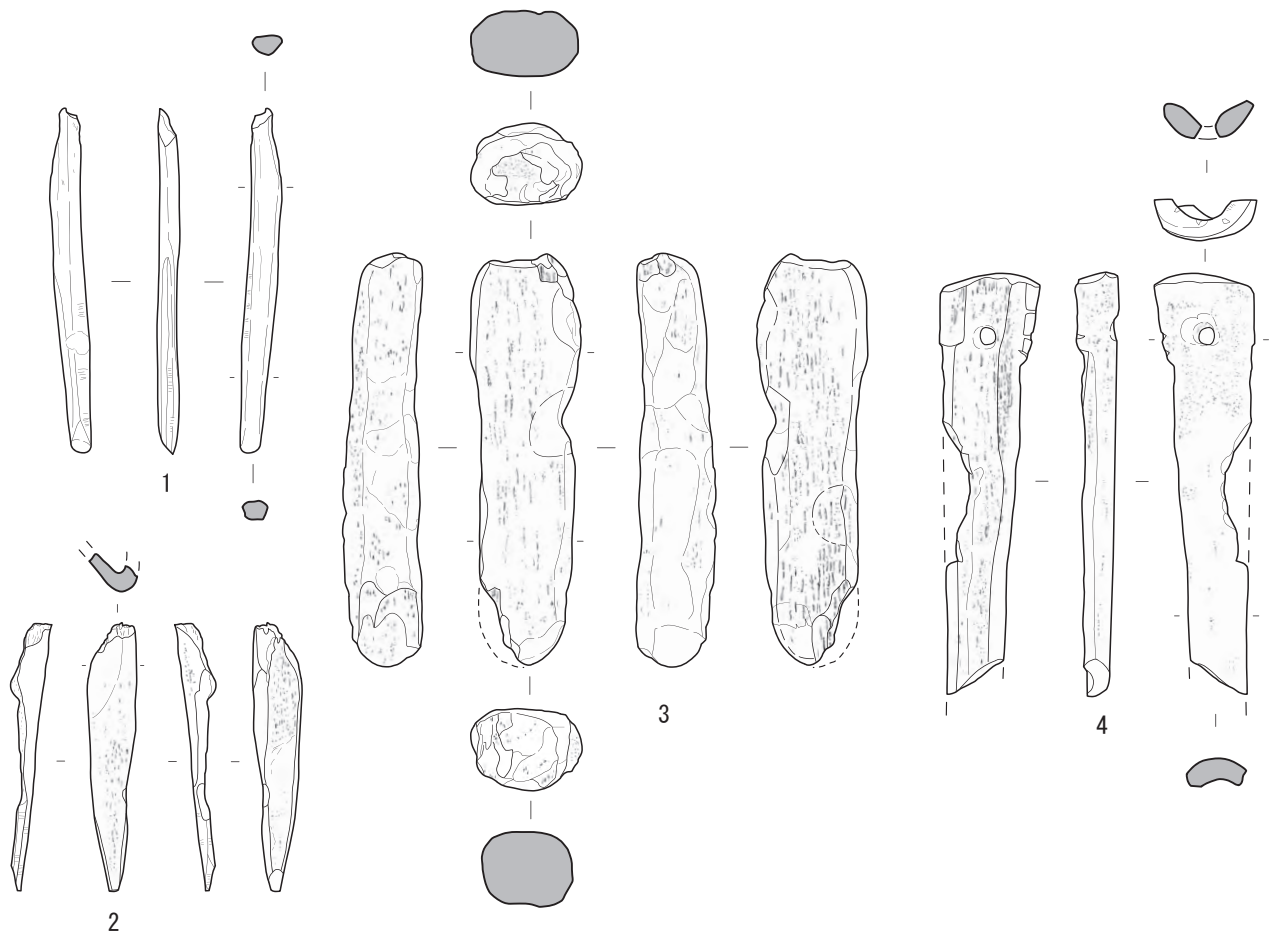
本部町教育委員会 2005『瀬底島・アンチの上貝塚発掘調査報告書』本部町文化財調査報告書第 8 集

（４）骨製品

HB①地区 V 層で 2 点、HB②イ地区 V 層で 2 点の計 4 点の出土である。

素材別にみるとイノシシの四肢骨（図 1・2）、クジラ骨（図 3）、不明（図 4）である。

イノシシの骨を用いたものは図 1 が腓骨で先端部が片刃を呈するもので、類例はアカジャンガー貝塚（1980）で報告されている。図 2 は管骨の大腿骨か上腕骨を縦にさき、その先端を平刃状にしたものである。先端は裏面の削りが顕著で片刃を呈する。他に加工はなく、完成品か未製品かは不明である。



第 87 图 · 图版 51 骨製品

図3はクジラの肋骨を棒状に加工したもので、ほぼ完形で、先端部は丸みを帯び、厚みがあることから、利器としての用途には疑問が残る。伊礼原 D 遺跡 (2008) の試掘 no. 6 で出土したジュゴン製の骨製品にも類似にも類似する。

図4は骨が長く、イノシシよりも大きい動物と思われる。海綿組織が粗く、クジラやジュゴンなどの海獣骨や人の四肢骨の可能性が考えられるが明瞭でない。詳細は観察一覧にしめた。

<註文献>

具志川市教育委員会 1980「宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚発掘調査報告」『具志川市文化財調査報告書』第4集

第30表 骨製品観察一覧

(法量単位:cm, g)

第図 図版	図 番号	製品	種類 部位	完破	長さ	最大幅 最小幅	最大厚 最小厚	重さ	観察事項	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取上)番号
第 87 図 ・ 図 版 51	1	籠状	イノシシ 脰骨	完'	(9.1)	0.85 0.6	0.45 0.4	3.4	近位部が頭部、遠位部が先端部。先端部は平刃、片刃、特に先端部研磨顕著	HB②イ K12 V (黄砂層) 取1245
	2	管状	イノシシ 大腿骨 or上腕骨	完'	7.1	1.3 0.3	0.3 0.3	2.9	四肢骨を縦に裂くが、部位不明。先端が二等辺三角形に尖らす。先端部は表裏面から研磨施す。特に裏面からの加工顕著、片刃的	HB②イ L10 V (黄砂層) 台3231
	3	棒状	クジラ 肋骨	完'	10.7	2.8 2.1	1.05 1.9	50.5	縦位に裂き、棒状にするが先端はやや欠損するが、丸み。頭部から約4.0cmの片側に抉りあり。表面、裏面を研磨するが、海綿組織露呈。	HB① L12V (4層混貝層) 取16
	4	棒状	不明? 肋骨	完'	(10.7)	2.6 1.55	0.5 0.46	11.3	径が約3.0cmの棒状。半裁、内面の海綿組織の部分の部分を削る。切断面、研磨し丸み。頭部から2.1cmで段をなし、その中央に孔径0.4cmを施す。側面に3条の刻み	HB① K12 V (4層混貝層) 取10

(凡例)完':ほぼ完

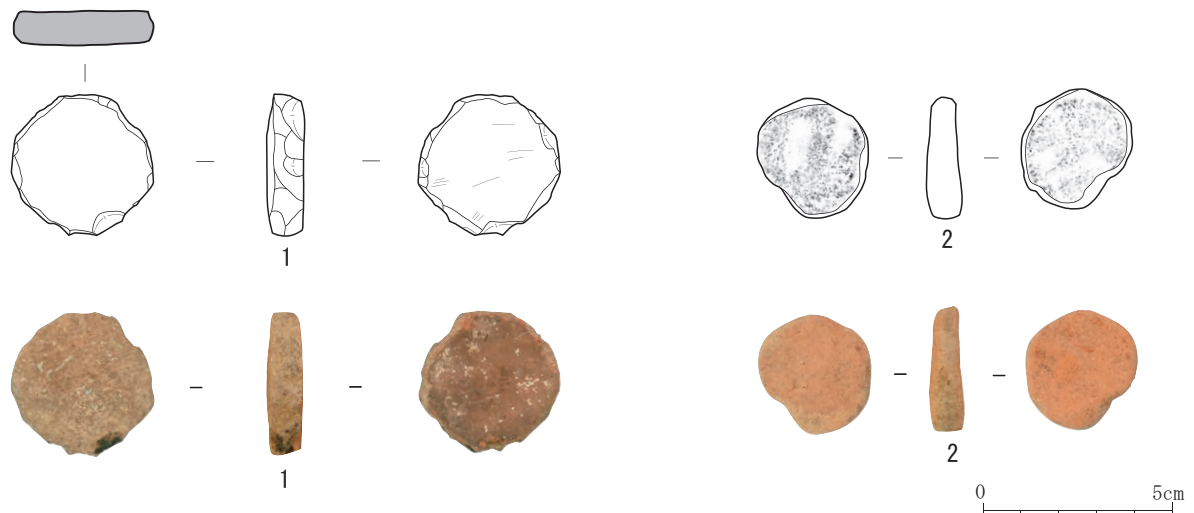
(7) 土製品

土製品が2点得られた。円盤状製品と素材が異なり焼成した土器片を利用したものと考えられ、用途も別物と捉え円盤状製品と分けて報告した。第88図1は小型の円形を呈す資料で、周縁の角を落とし複数回打ち割り後、円形にしたものである。形状は角を若干残すが、円形を意識した意図が窺える。表裏面とも平坦な面をつくり裏面はヘラなでのような研磨痕が部分的に確認できる。計測値は残存長 3.7 cm、残存幅 3.8 cm、残存厚 1.0 cm、重さ 13.8 g、出土地、HB②イ地区 K10V層。

図2は全体に丸味を帯び正円ではなく欠けを生じる。周縁の角や表面は擦れにより当初の面が水磨、或いは風化したものと考えられる。又、上下で厚みが異なり、裏面は僅かに調整らしき痕跡が一部認められる。計測値は残存長 3.2 cm、残存幅 2.9 cm、残存厚 0.9 cm、重さ 8.0 g、出土地、HB②イ地区 J12V層。

<参考文献>

鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会 1984『犬田布貝塚』 伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)



第88図・図版52 土製品

第4節 グスク時代・近世

1. 遺構

グスク時代から近世の遺構は、建物址2基、溝状遺構5基、石列2基、ピット・土坑200基の総数209基が検出された。

第89図にグスク時代・近世遺構、第90～98図、図版53～65に各遺構、第100図にピット群一覧、第32表にピット・土坑観察一覧、第99図にピット群の径と深さ比較、第33表にⅢ層遺構別遺物出土量を示す。遺構出土遺物については、各々の項に記述する。

(1) 建物址

HB①地区で想定した建物址プランである。柱穴観察一覧を各々に示す。

・建物址1 (235SB) (第90図、図版53)

HB①地区K・L14・15で検出された、174・163SK・221Pで想定した建物址プランである。V層上面で検出され、標高は163SK、221Pは3.9m、174SKは4.0mである。

174・163SK、221Pの柱穴の間隔は約4.4mで等間隔である。柱穴の深さは174SKが0.36mとやや深く、163SKは19cm、221Pは15cm、建物址2と比較すると柱穴は浅い。いずれも根石と考えられる扁平な石灰岩礫が検出され、その大きさは174SKのものは長さ約29cm、幅約17cm、厚さ10cm、163SKのものは長さ約35cm、幅約26cm、厚さ9cm、221Pのものは長さ約40cm、幅約29cm、厚さ16cmである。

出土遺物は、163SKから白磁(17～18世紀：第108図29)、青磁染付(18～19世紀：第116図3)・染付が出土した。

・建物址2 (310SB) (第91図、図版54)

HB①地区K・L18・19で検出された。236・342・381・372SKで想定した建物址プランである。標高約3.5～3.6mのV層上面で背後の石灰岩地帯に接して検出された。柱穴の間隔は約2.8mの等間隔である。深さは372SKで約1.05m、381SKは1.36mと深い。

遺物は、236・372SKで青磁(14～16世紀)、236SKでは染付(年代不明)、372SKでは沖縄産無釉陶器、骨が出土した。

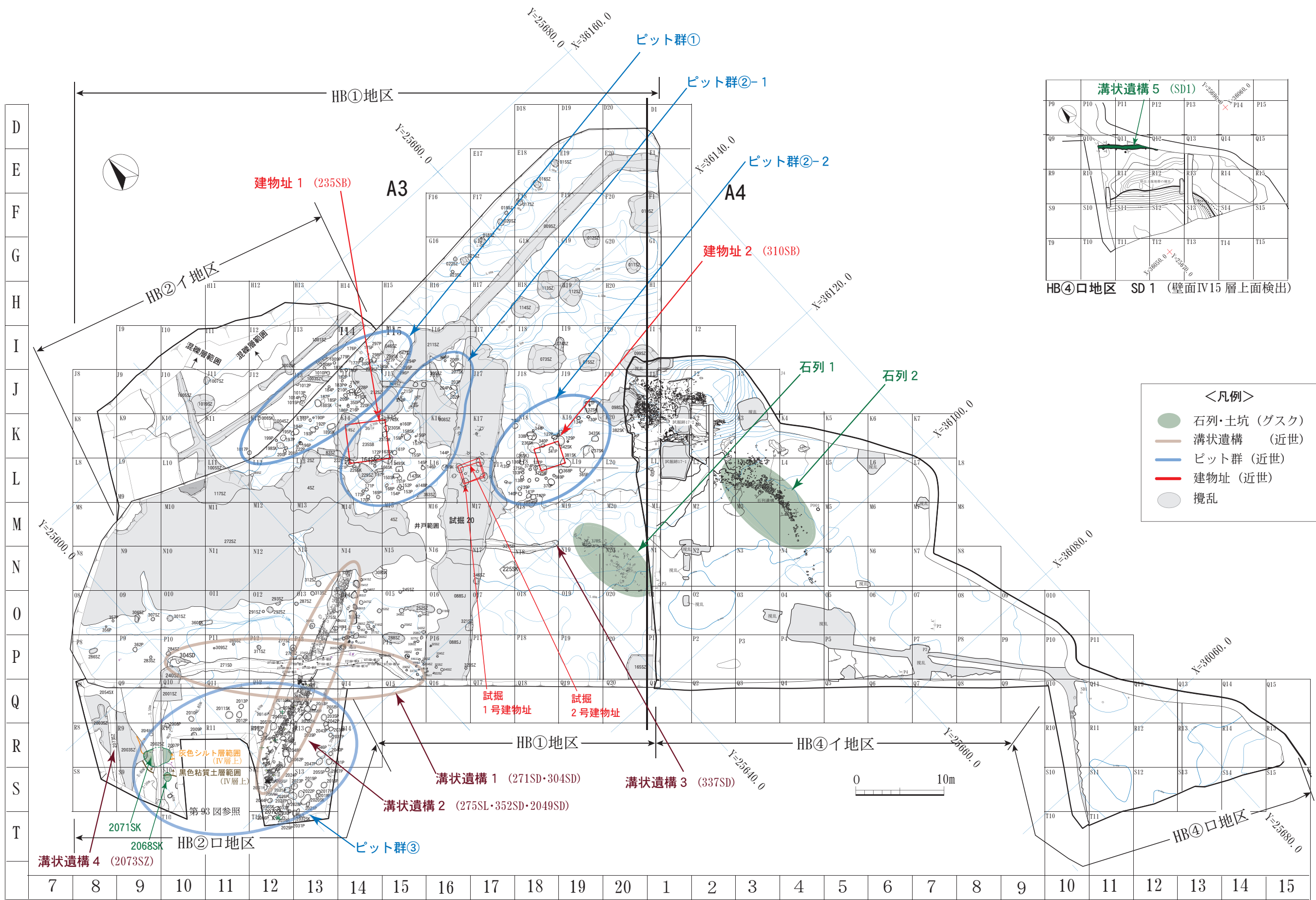
(2) 溝状遺構

・溝状遺構1 (271SD・304SD) (第92図、図版55)

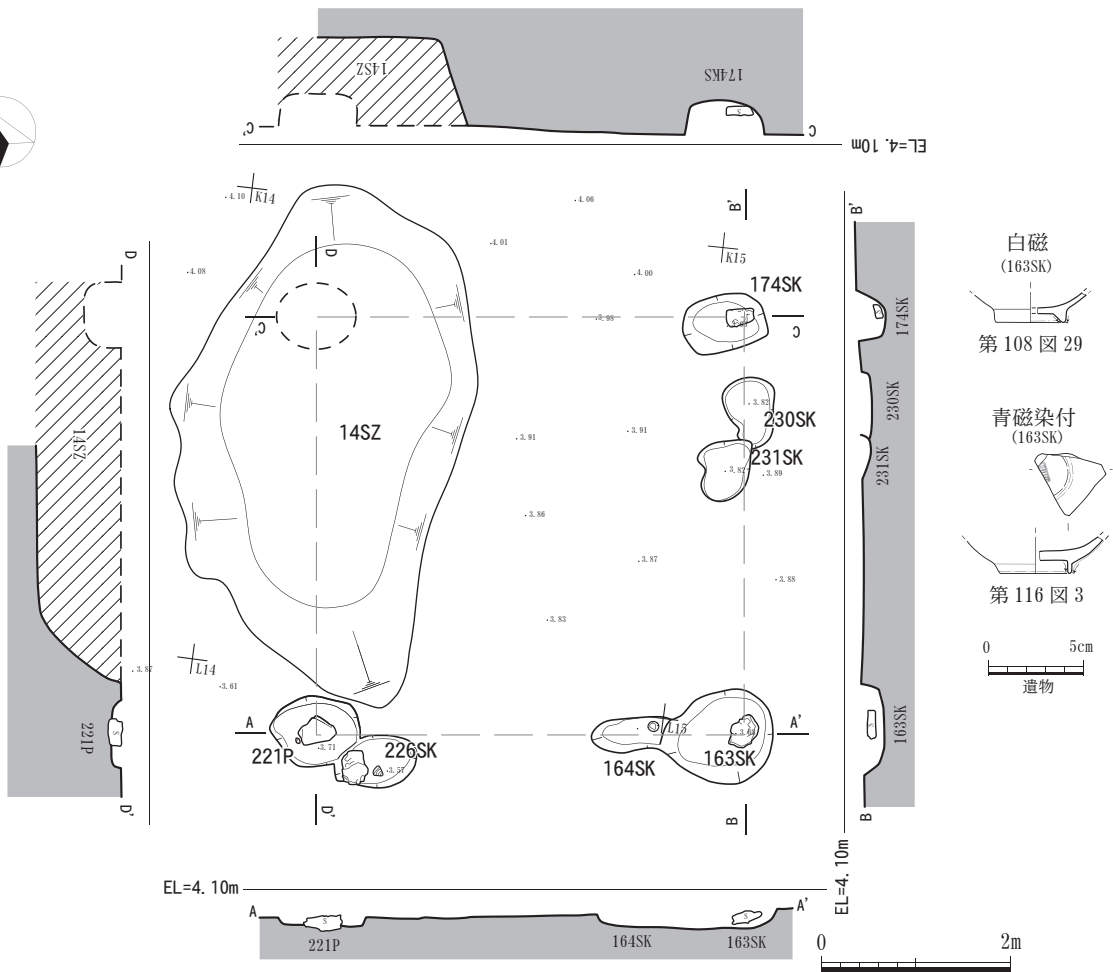
271SDは、HB①地区P10～15で北西―南東に延び、北西端は攪乱(240SZ)に切られ、南東端は幅を狭め南側に向きを変える。長さ約26.7m、幅約0.8～1.6m、深さ約0.42m。溝底の標高は南東側で約2.1m、B-B'断面付近で約2m、11ライン付近で約2mと北西側が僅かに低い。溝内には杭14本が打込まれた状態で検出された。

杭は2～4本のまとまりで検出され、杭1～3は溝を横断するように並び、杭11～14は溝が方向を変える部分、その他は直線部に位置する。検出された杭の角度は杭11のみ91°、その他は118～148°である。

溝内の東側傾斜面にある杭1・4・5・8のうち、杭4は傾斜面に反する方向に傾き、杭8は溝の長軸方向、杭1・5は傾斜面と同様な方向に傾き、西側傾斜面の杭3・9・11・12は傾斜面に反する方向に傾く。杭10は傾斜面と同様な方向に傾く。溝床面で検出された杭2・6・7・13・14は、いずれも異なる方向に傾く。杭の傾斜方向に規則性は窺えず、性格は判然としない。



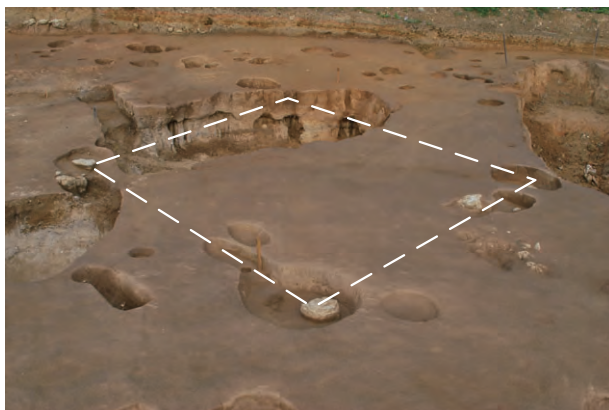
第 89 図 遺構全体 (グスク時代・近世)



第90図 建物址1 (235SB)

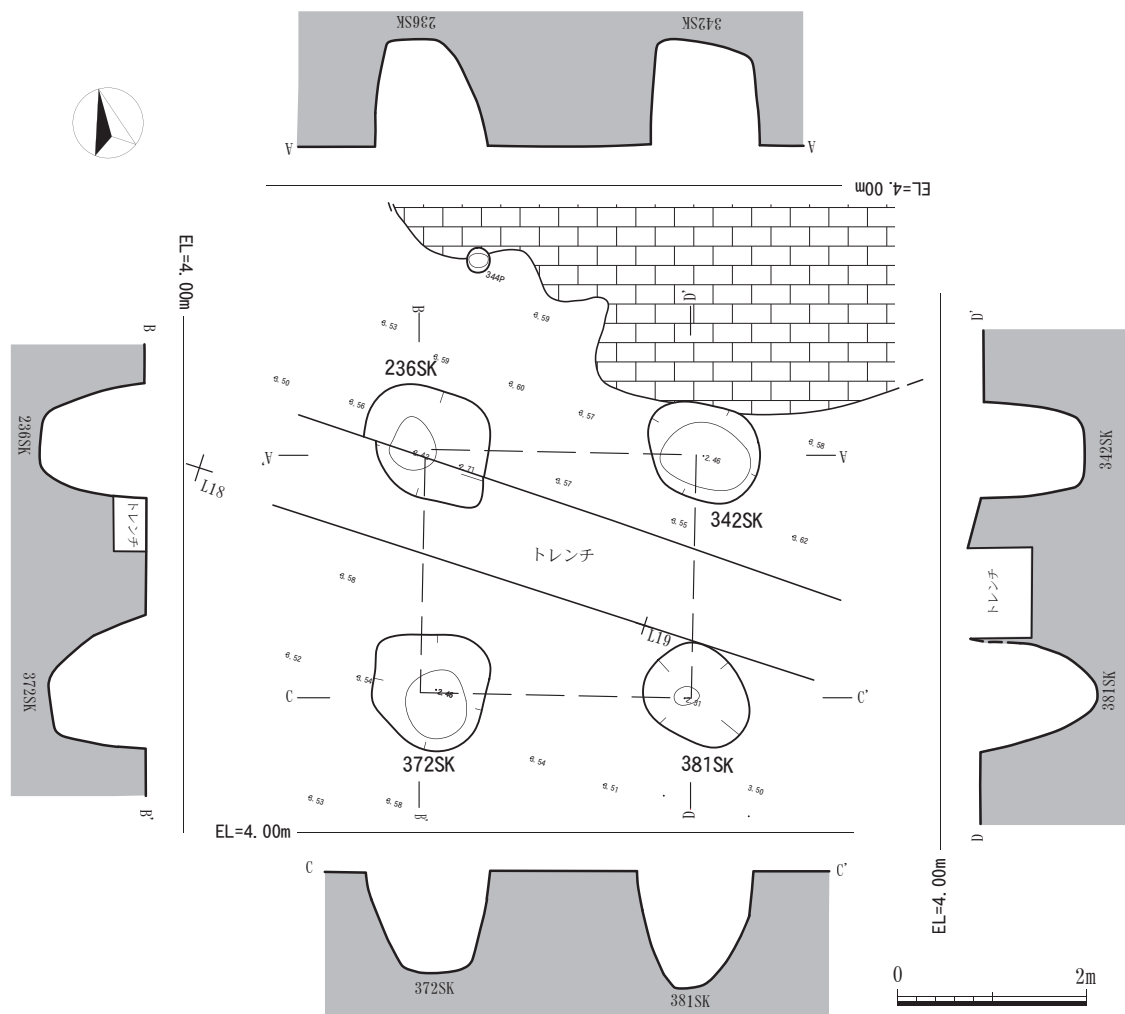
柱穴観察一覧

遺構名	大きさ (cm) 長径 × 短径	深さ (cm)	観察事項
221P	94×74	15	上部は、にぶい黄褐色砂質土。下部は褐色砂質土。ブロック状の褐色(10YR4/6)砂質土、少量の炭化物、径1～3mmの貝片含む。根石(40×29×16cm)
163SK	116×97	19	黄褐色(10YR5/1)が混じる褐色砂質土。根石(35×26×9cm)
174SK	90×75	36	黄褐色(10YR5/1)が混じる褐色砂質土。根石(29×17×10cm)



図版53 建物址1 (南より)

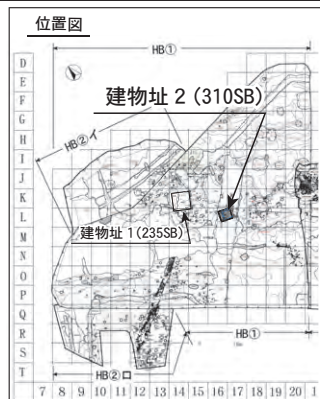
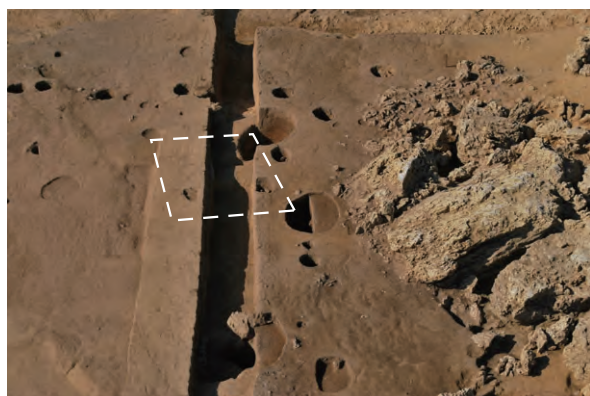




第 91 図 建物址 2 (310SB)

柱穴観察一覧

遺構名	大きさ (cm) 長径 × 短径	深さ (cm)	観察事項
236SK	135 × 75	112	4層に分層。1・2層：褐色シルト（小貝片多量）。2層は小貝片、礫（100mm程度）含む。3層：暗褐色砂質土、少量の褐色（10YR4/4）シルトが混じる。4層は褐色シルト。暗褐色（10YR3/4）砂質土が少量混じる。
342SK	127 × 100	110	3層に分層。1層：粗砂混じりの黒褐色シルト〔微量の炭化物、礫径（2～5mm）、貝片（径1mm・5～10mm）枝サンゴ（長3～8mm）含む〕。2層：明黄褐色粗砂（黒褐色（10YR3/2）、シルト〔礫（径5～8mm）枝サンゴ（長10～15mm）を含む〕。3層：黒褐色シルト〔礫径（2～5mm）、貝片（径5～10mm）含む〕。
381SK	118 × 99	135	褐色砂質土
372SK	125 × 90	105	焼土・炭化物少量混じる褐色砂質土



図版 54 建物址 2 (南東より)

本遺構は下位の溝状遺構 2 (275SL・352SD) を切っており、それより新しい。HB①地区 P15 西壁に切られており、同壁面の堆積は本遺構の埋土上位層はⅡ層、調査区外に続くと見られる。

遺物は、グスク土器、白磁 (14~15c、第 108 図 19:17~18c)、青磁 (14~16c)、染付 (17c 後~18c 前、18~19c)、褐釉陶器 (第 115 図 5)、色絵、本土産磁器 (近世)、本土産陶器 (近世: 信楽、薩摩)、グスク砥石 (第 128 図 3)、銭貨 (元豊通宝: 第 125 図 2・3、寛永通宝: 第 125 図 4・5)、沖縄産施釉 (第 145 図 27、第 146 図 38、第 147 図 57、第 148 図 71、第 149 図 86)・無釉陶器 (第 152 図 8)、陶質土器 (第 159 図 27) が出土した。

304SD は、HB①地区 P10 で 271SD に南端の一部が接し、西側端は 240SZ (攪乱) に切られる。Ⅳ層上面で検出された。長さは直線距離で約 3.5m、幅約 0.25m で部分的に 0.5m、深さ 0.16m である。遺物は沖縄産施釉・無釉陶器、陶質土器が出土した。

・溝状遺構 2 (2049SD・275SL・352SD) (第 93 図、図版 56~59)

2049SD は HB②口地区 Q~S12・13、275SL は HB①地区の N~Q13・N・014 のⅣ層上面で石列を伴って検出された。溝の長さは約 12.7m、幅は HB②口地区で最も広い部分で 4m、狭い部分で 2.2m、深さは HB①地区で残存する深さは A—A' 約 10cm、B—B' 約 40cm、C—C' 約 35cm を測り、B—B' は溝壁が 90~100° の角度を有し、C—C' は幅広な部分で北側の溝壁が約 100°、南側は傾斜面となる。溝内の標高は B—B' で約 2.4m、A—A' 約 2.5m、C—C' は約 2.3m である。

遺構内には、大きさ 10~60cm の礫が集中し列を成す。HB②口地区の範囲では、溝中央部と南側の溝縁沿いで検出され、HB①地区側では溝幅内で検出されているが、同範囲では石列 (SL) として検出されたことから、本来の溝幅は HB②口地区と同様であったものと推察される。

本遺構は HB②口地区 Q12 で 2052P、Q13 で 2050P、QR12 で 2051P、R12 で 2057・2048P、S12 で 2060・2061P に切られる。Q15 西壁 (HB①地区西壁) では 2049SD の上位層はⅡ層であるが、HB②口地区ではⅢ層掘下げ後に検出された。

HB①地区では、石列 (SL) の記号が付されている 275SL・352SD の東端は N14 で攪乱によって途切れ、2049SD は調査区外 (西側) に続くものと見られる。

出土遺物は、2049SD でグスク土器、白磁 (14~15c、17~18c)、青磁 (14c 後~15c 中、15~16c)、染付 (17c 後~18c 前)、褐釉陶器、本土産陶器 (近世)、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器 (第 152 図 4)、陶質土器、骨、275SL ではカムイヤキ、陶質土器が出土した。

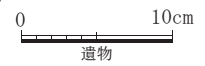
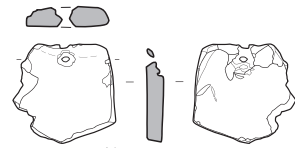
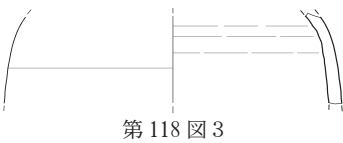
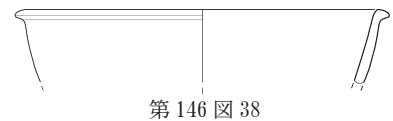
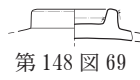
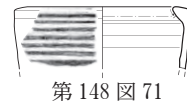
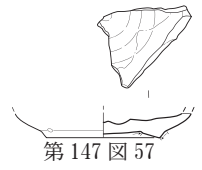
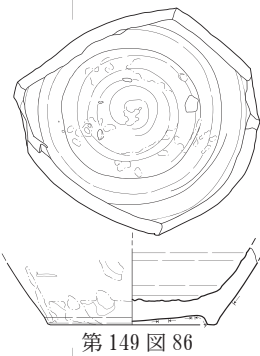
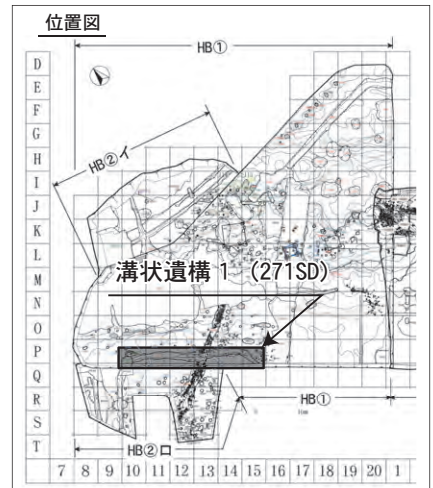
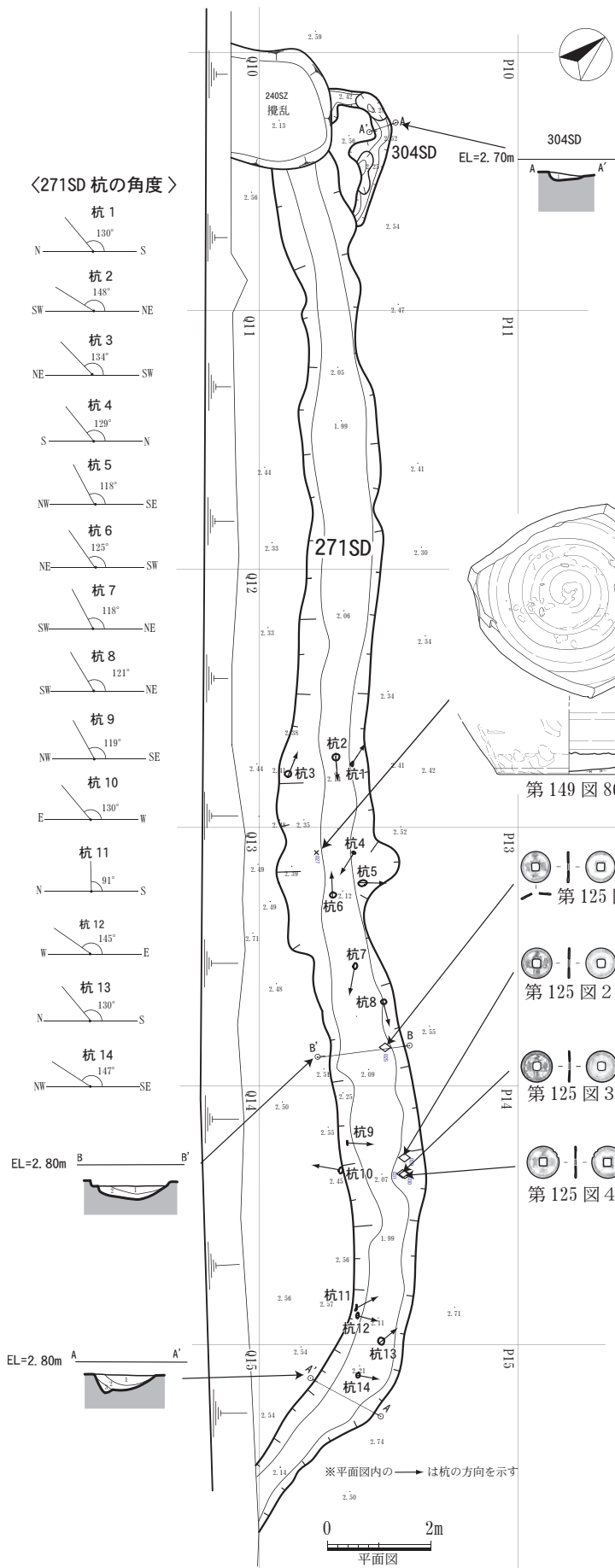
・溝状遺構 3 (337SD) (第 94 図、図版 60)

HB①地区 M・N17・18 のⅤ層上面で検出され、既報告^{註1}の溝状遺構と同一の遺構である。北西—南東に延びる溝の長さは 8.4m、既報告のものをあわせると約 12.2m、幅は約 0.7~1.2m、深さ 0.35m、標高約 3.2m で検出されている。本遺構は北西側に延びていた可能性があるものと思われる。遺物は出土していない。

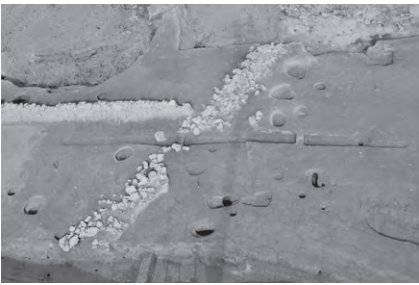
・溝状遺構 4 (2073SZ) (第 63 図、図版 63)

HB②口地区 Q8、R8・9、S8・9 で、北北東—南南西に延びる。長さ約 8.3m、幅約 0.9m、深さ 0.2m。標高約 1.8~2.2m で検出された。

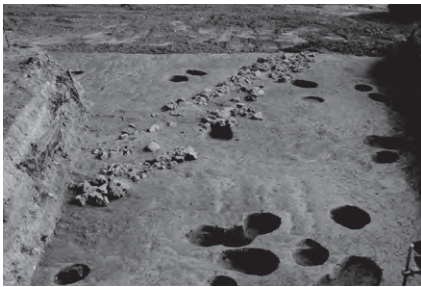
戦後の攪乱 (2003SZ) 下位の砂礫層面 (HB②イ地区 14・15 層に相当) で検出された。土坑 (2054SX) に切られることから、2054SX 以前である。調査区外 (西側) の平安山原 A 遺跡へ続くものと見られる。遺物は出土しておらず、所属時期は近世としたが、2003SZ (攪乱) 下位で検出されており近代の遺構の可能性もある。



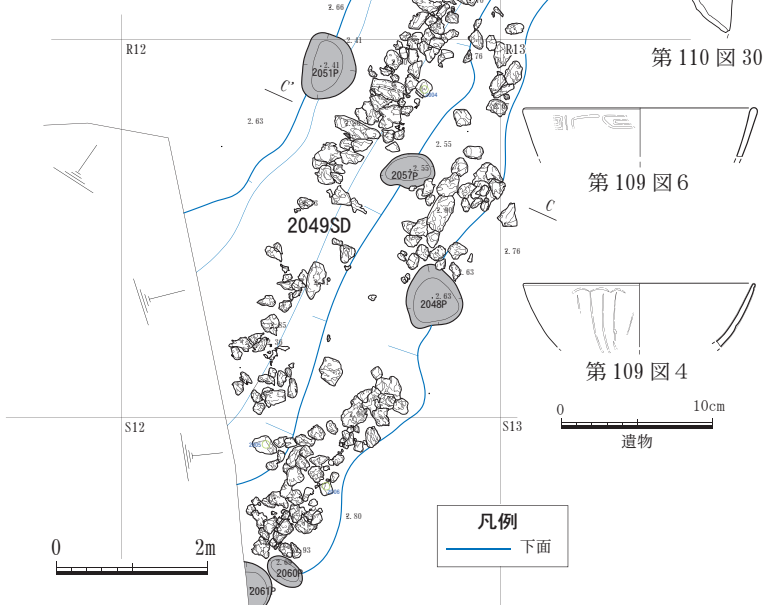
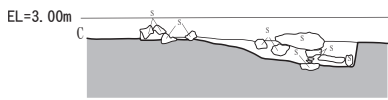
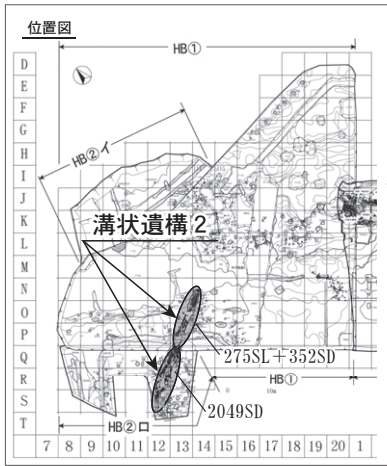
図版 55 271SD 溝状遺構 1 (北西より)



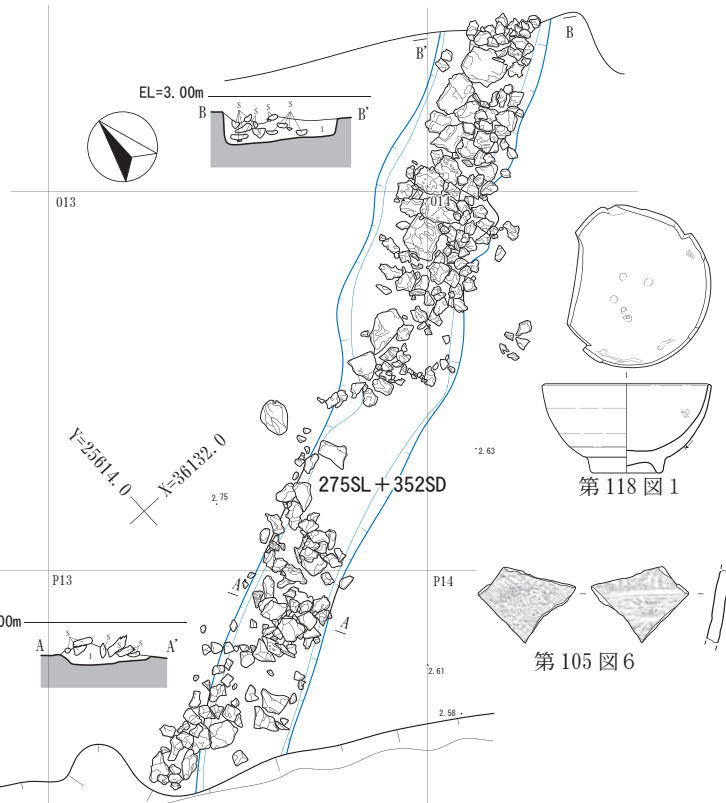
図版 56 275SL+352SD (南より)



図版 57 2049SD (南西より)



第 93 図 溝状遺構 2 (275SL・352SD・2049SD)



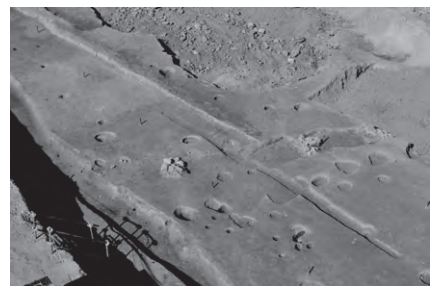
第 118 図 1

第 105 図 6

第 109 図 16

第 152 図 4

第 111 図 21



図版 58 275SL 完掘状況 (南西より)

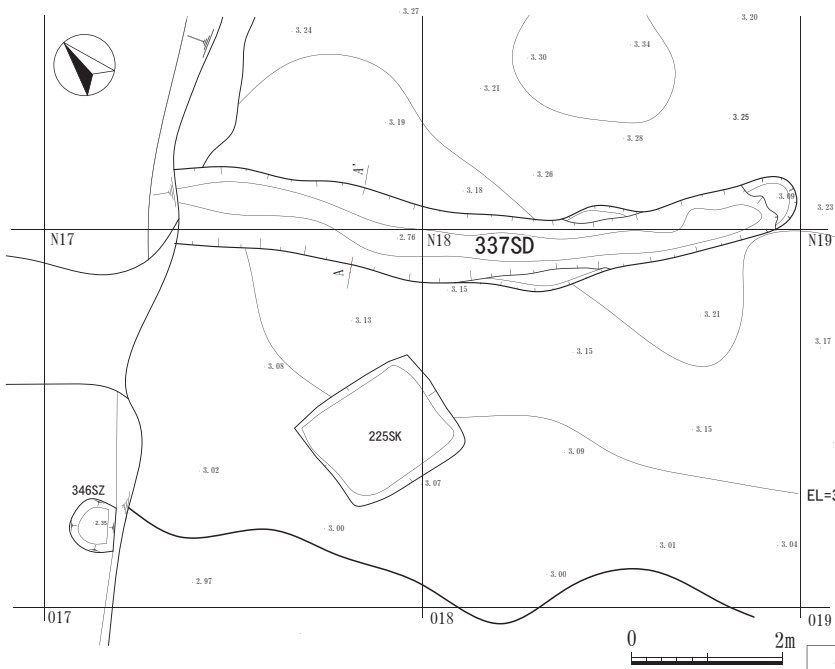


図版 59 2049SD 完掘状況 (南より)

第 110 図 30

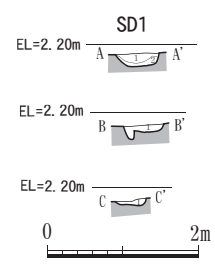
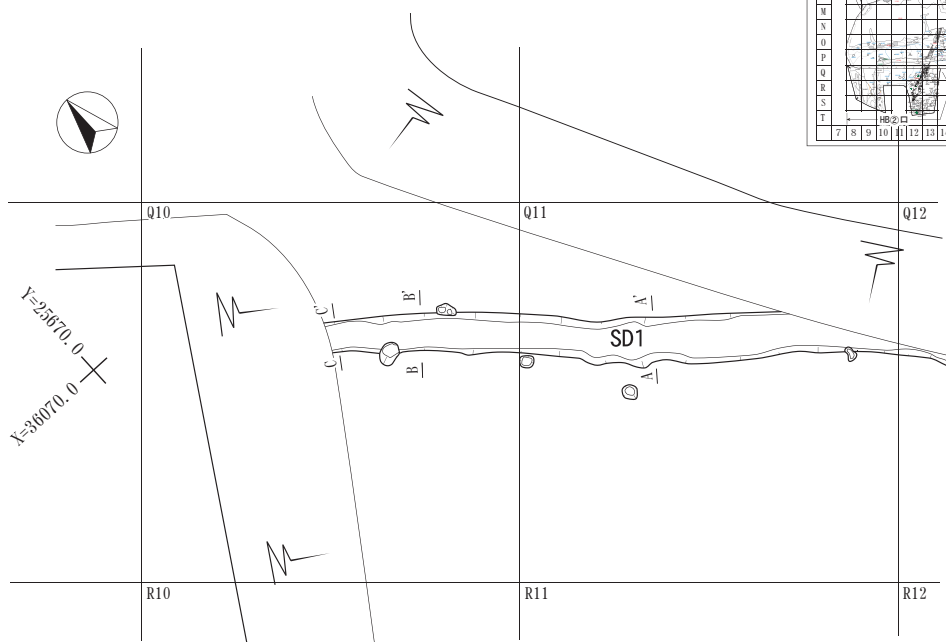
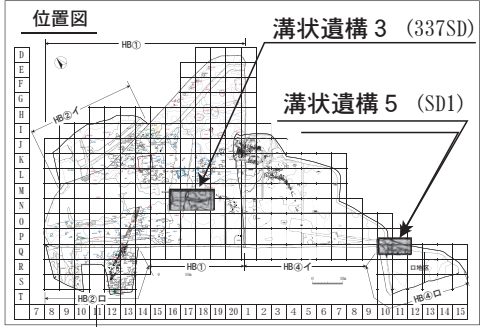
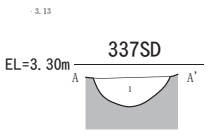
第 109 図 6

第 109 図 4



図版 60 337SD 検出状況 (西より)

第 94 図 溝状遺構 3 (337SD) 平面・断面



第 95 図 溝状遺構 5 (SD1) 平面・断面



図版 61 SD1 検出層 (壁IV: 南西より)



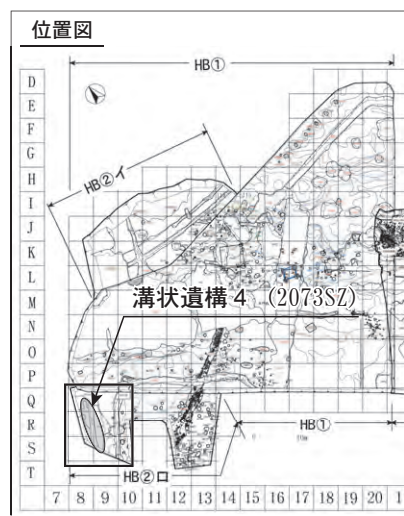
図版 62 SD1 検出状況 (北西より)



第 96 図 溝状遺構 4 (2073SZ) 平面



図版 63 溝状遺構 4 検出状況 (北西より)



・溝状遺構 5 (SD1) (第 95 図、図版 61・62)

HB④口地区 Q10~12 のⅣ層下部 (HB④口地区壁Ⅳ16 層上面) で検出された。長さ約 7.4m、幅は A-A' 0.75m、B-B' は 0.75m、C-C' は幅約 0.5m、深さは A-A' 約 0.25m、B-B' 約 0.12m、C-C' 約 0.12m である。溝縁辺では 4 基のピットが検出されたが、そのうちの 1 つから樹根が検出されたことから、他のピットも樹根の可能性のあるものと思われる。SD 1 は調査区北東側と北西側に続くと見られる。遺物は下位層の貝塚時代後期の土器、貝が出土した。

(3) 石列

・石列 1 (378SL) (第 97 図、図版 64)

HB①地区 M・N19・20、020 のⅣ層堆積範囲の境目にあり N ライン部分は上面 (標高約 3.~3.3m)、それより西側はⅣ層上部で検出された。大きさ 10~70cm の石灰岩礫が直線距離で約 10m にわたって弧状を成して並ぶ。M19・20 では北西—南東に並び、N20 側へ弧状となり散在する。

・石列 2 (第 98 図、図版 65)

HB④イ地区 L2・3・4、M4、N4 のⅣ層堆積範囲の境目付近のⅣ層 (標高約 3~3.2m) で検出された。L3、M4 で大きさ 0.2~1.2m の石灰岩礫が直線距離で約 10m にわたって弧状を成して並び、曲りの強い部分は幅で約 0.9m、端では 0.4m と先細る。L3 北東側には長さ約 3.3m、幅約 1m のまとまりがある。両者の間隔は約 2.5m で礫が散在する。遺物は出土していない。

(4) ピット・土坑

調査時に P (柱穴)、SK (土坑) を付した遺構には、建物址プランに SK が含まれるものがあることから、P・SK のまとまりを以下「ピット群」とする。P は深さ 10cm 以上を柱穴として報告する。

HB①地区では、ほとんどが N ラインより東側 (標高約 3.5~4.5m) でⅢ層上部、Ⅴ層上面で検出された。地区別では HB①地区 132 基、HB②イ地区 8 基、HB②ロ地区 62 基、HB④イ地区 5 基の総数 207 基検出された。HB①地区、HB②イ・ロ地区のピット群には、まとまりがありピット群①~③、これ以外を単独ピットとした (第 89 図 100~102)。

ピット群①は HB②イ地区南側一帯 (標高約 4~4.5m) I13~15、J13・14、K12・13 のⅢ層中で 55 基、ピット群②は HB①地区中央部一帯 (標高約 3.5~4m) で、範囲確認調査トレンチ西側を②-1、東側を②-2 とした。ピット群②-1 は I16、J15・16、K・L14・15・16 (標高約 3.7~4m) のⅢ層上部やⅤ層上面で 42 基、②-2 は J19、K17~20、L17~19 (標高 3.5~4m) のⅤ層上面で 37 基検出された。第 89 図に示すように、これらのピット群が検出された N ライン付近より東側にⅣ層は堆積していないことから、Ⅲ層中やⅤ層上面で検出された。

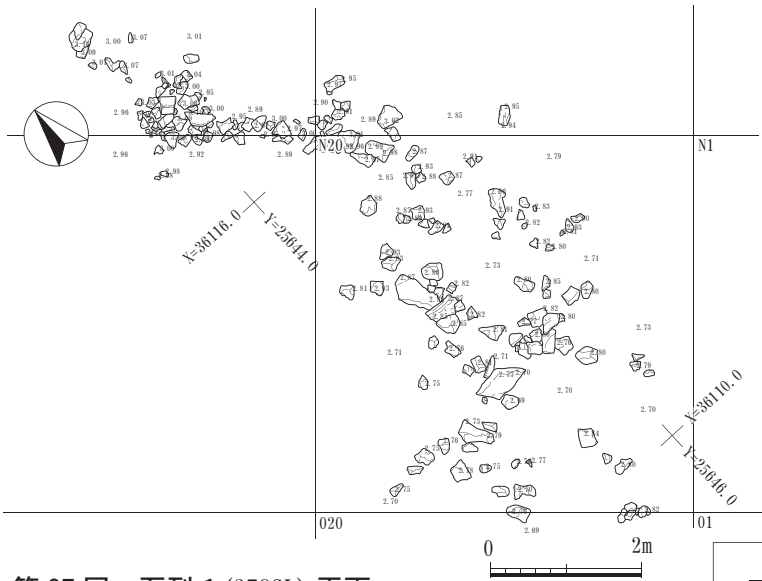
ピット群③は、271SD 西側 (標高約 2.6~2.8m) の HB②ロ地区 Q10~13、R9・10・12・13、S・T12・13 のⅣ層上面で 62 基検出された。

単独ピットは、ピット群①・②と③の間にあたる N~P ライン (標高約 2.6~3.1m) に点在する。

HB①地区で N14・15・17・18、08・10・11、P9 のⅣ層上面で計 6 基、HB④イ地区 M4、N1、07、P6、P7 で各 1 基の計 5 基がⅤ層上面で検出され、P7 で検出されたピット内から樹根が検出された。

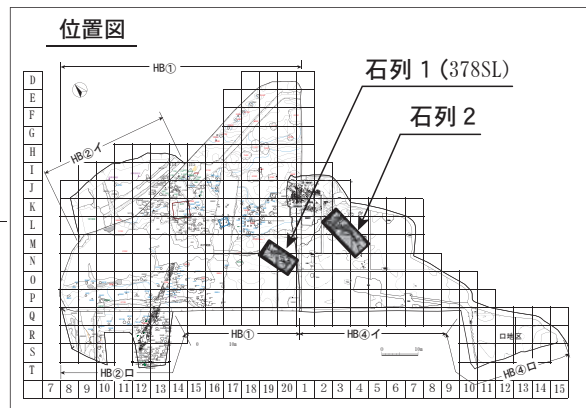
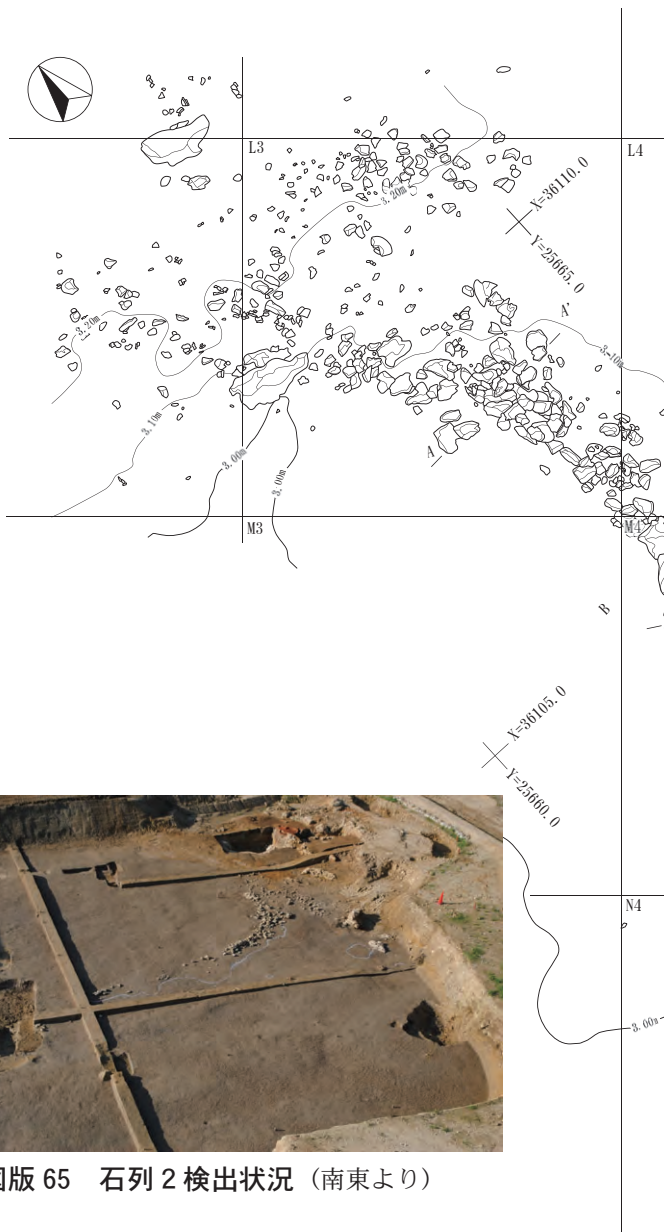
ピット群③のうちⅣ層下位で検出されたものは、HB②ロ地区 R9・10 の 2071SK、S10 の 2068SK、2069・2070P の 4 基で、遺物は出土していない。

2071SK は、Ⅳ層 [HB②ロ地区西・南壁Ⅳ層 (5・6 層：黒色粘質土層) 掘下げ後の細分されたⅣ層の 3 枚目 (7 層：灰色シルト)]、2068SK はⅣ層 [HB②ロ西・南壁Ⅳ層 (5・6 層)] 下位での堆積範囲内外にまたがる。これらは標高約 2.3~2.6m で検出され、S10 の 2068SK の南西側の部分、2069・



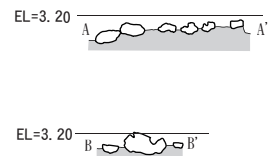
図版 64 378SL 石列 1 検出状況 (南より)

第 97 図 石列 1 (378SL) 平面



図版 65 石列 2 検出状況 (南東より)

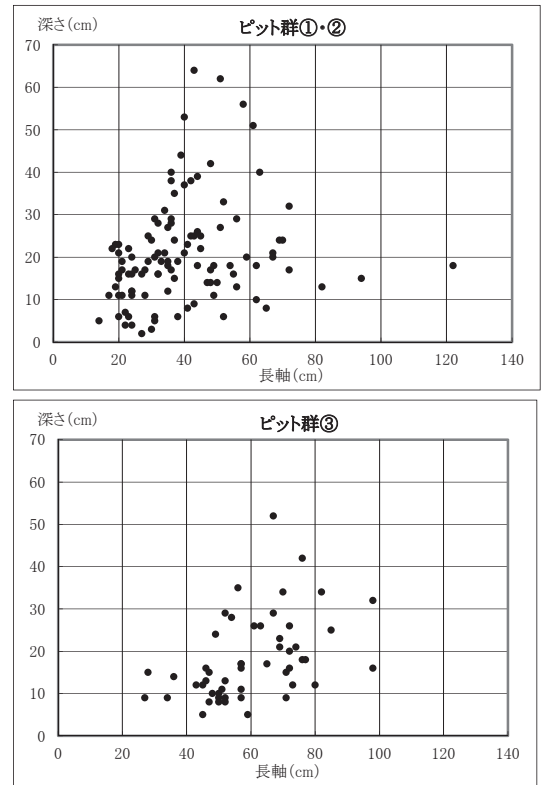
第 98 図 石列 2 平面・断面



2070P は本遺跡西側に広がる粗砂層上面で検出された。ピット群の径と深さを比較すると（第99図）ピット群①②は、径（長軸）が20～40cmで深さ20cm前後の傾向があり、ピット群③は径（長軸）が40～60cm、深さ10cm前後と径（長軸）70～80cm、深さ20cm前後の傾向がある。

ピット群①・②は、ピット群③に比して径（長軸）が小さく深いものが目立ち、HB②口地区のピット群③は径（長軸）に比して浅い傾向が見られる。

ピット群③の2048・2050～2052・2057・2060・2061Pは、溝状遺構2（2049SD）を切っており同SD埋没以後である。ピット群のうちSKには、平面形が隅丸長方形を呈するものがある。ピット群②-1の建物址1（235SB）南側のL14・15で149・150・166SKは、長軸が約0.71～0.82m、短軸は0.32～0.57m、深さ0.18～0.39m。O10・11の360SKは規模が大きく長軸が1.54m、短軸が0.49m、深さ0.84mである。N17・18の225SKは大型で、その上位には近・現代遺構61SKが一部重なるが、225SK



第99図 ピット群の径と深さ比較

は調査時に攪乱とされたが、M～O18で米軍基地整備による掘削が行われた範囲にあり、誤認された。SKの平面形が長方形を呈するものの性格は判然としないが、楕円形や不定形のものとは異なるものと思われる。

（小結）

グスク時代から近世の遺構は、建物址2基、溝状遺構5基、石列2基、ピット・土坑209基の総数216基が検出され、Ⅲ層の遺構210基、Ⅳ層の遺構が6基である。

Ⅳ層の遺構のうちHB②口地区ピット群③のR9・10の2071SKはⅣ層中、S10の2068SK、2069・2070PはⅣ層下位で検出され、HB①地区には見られないことから本遺跡西側に位置する平安山原A遺跡に関連する遺構の可能性が考えられる。

HB④イ地区石列1・2（378SL）はⅣ層中で検出され、ともに弧状に列を成すもので周辺のⅣ層堆積には石灰岩礫を含む様相が見られないことから、何らかの区画を意識したものと思われる。

HB④口地区の溝状遺構5（SD1）は、性格は判然としないが、Ⅳ層がカワニナを含む水成堆積の様相を有することから、小規模な自然流路の可能性もあるものと思われる。

Ⅲ層期の遺構〔SB（建物址）、P（柱穴）、SK（土坑）、SD・SL〕には遺物を伴うものは少なく、グスク時代・近世の遺物と近・現代が混在するものと混在しないものがみられ、後者は僅かである。

Ⅲ層出土の遺物から年代をみると11～19世紀の年代幅を有し、切合い関係がある溝状遺構1（271SD）・2（2049SD）に共通するものは、グスク土器、白磁、青磁、染付、褐釉陶器、本土産陶器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、陶質土器で、異なるものは271SDでは本土産磁器（近世）、グスク砥石、銭貨（元豊通寶、寛永通寶）、骨である。

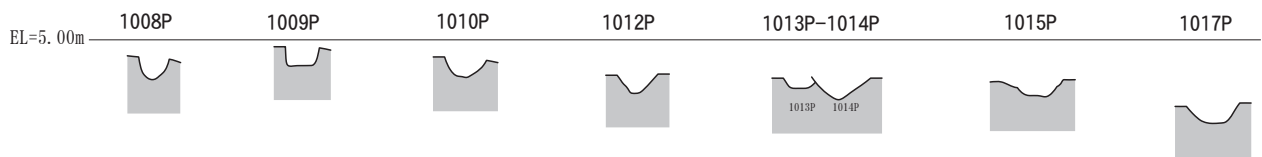
これらの出土遺物の所属年代を見ると白磁（14～15世紀、17～18世紀）、青磁（14～16世紀）、染付（清代前期）、本土産陶器の瓶（近世）、その他の輸入磁器（17～19世紀）で、両者は概ね近世に属すると考えられる。

〈ピット群①〉

(HB①地区)

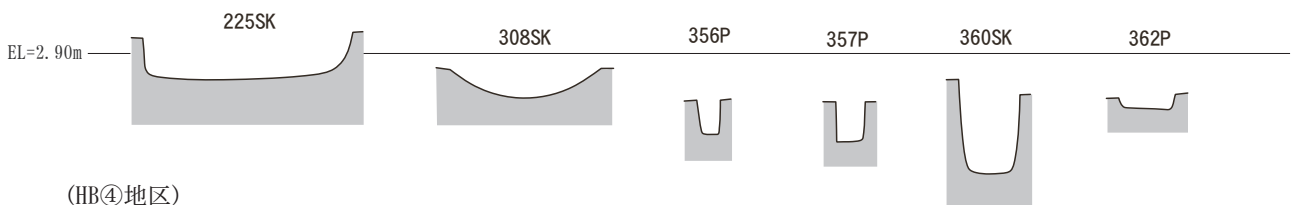


(HB②イ地区)

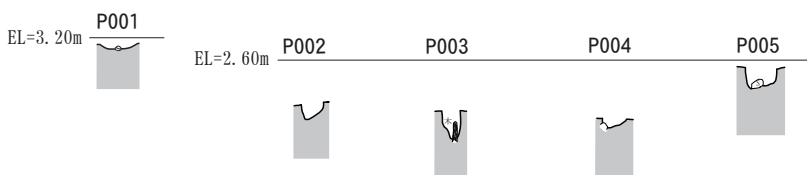


〈単独ピット〉

(HB①地区)



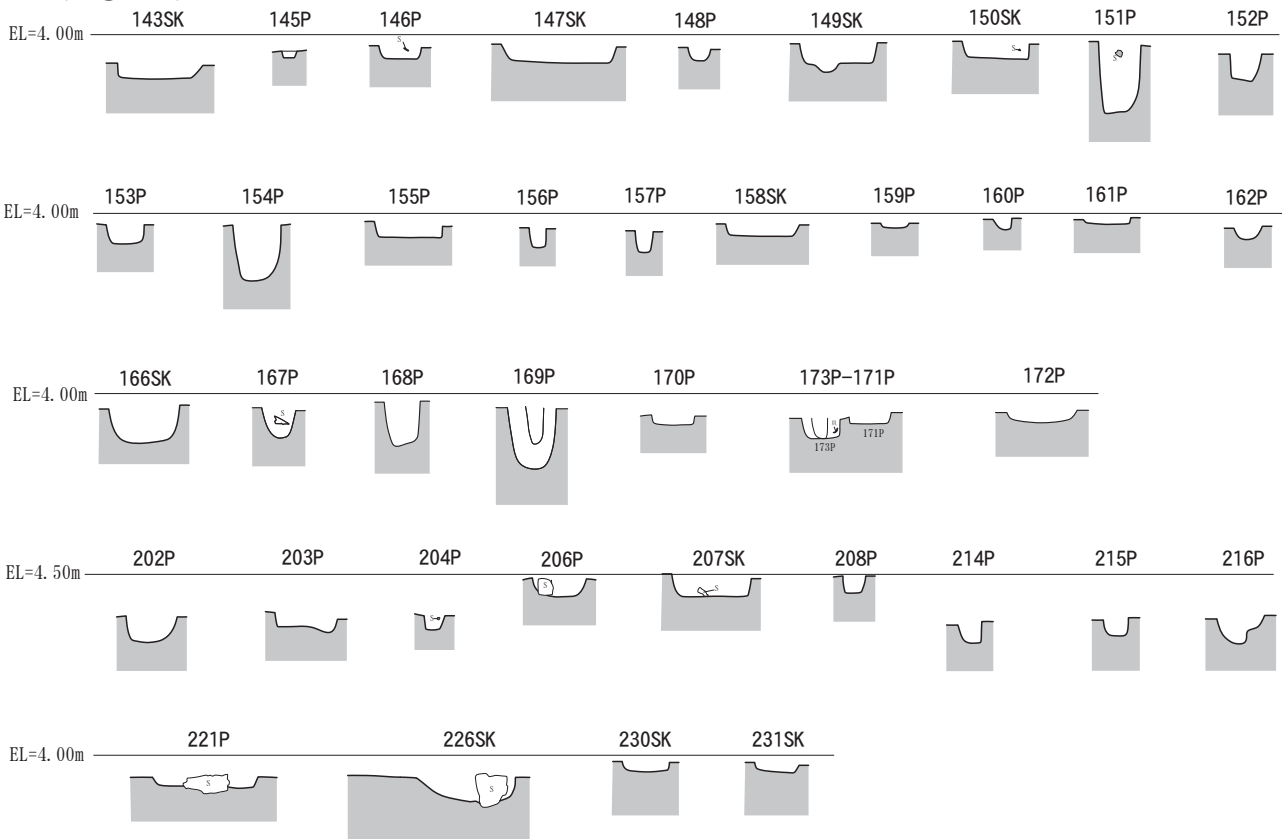
(HB④地区)



第 100 図 ピット群①・単独ピット (グスク時代・近世)

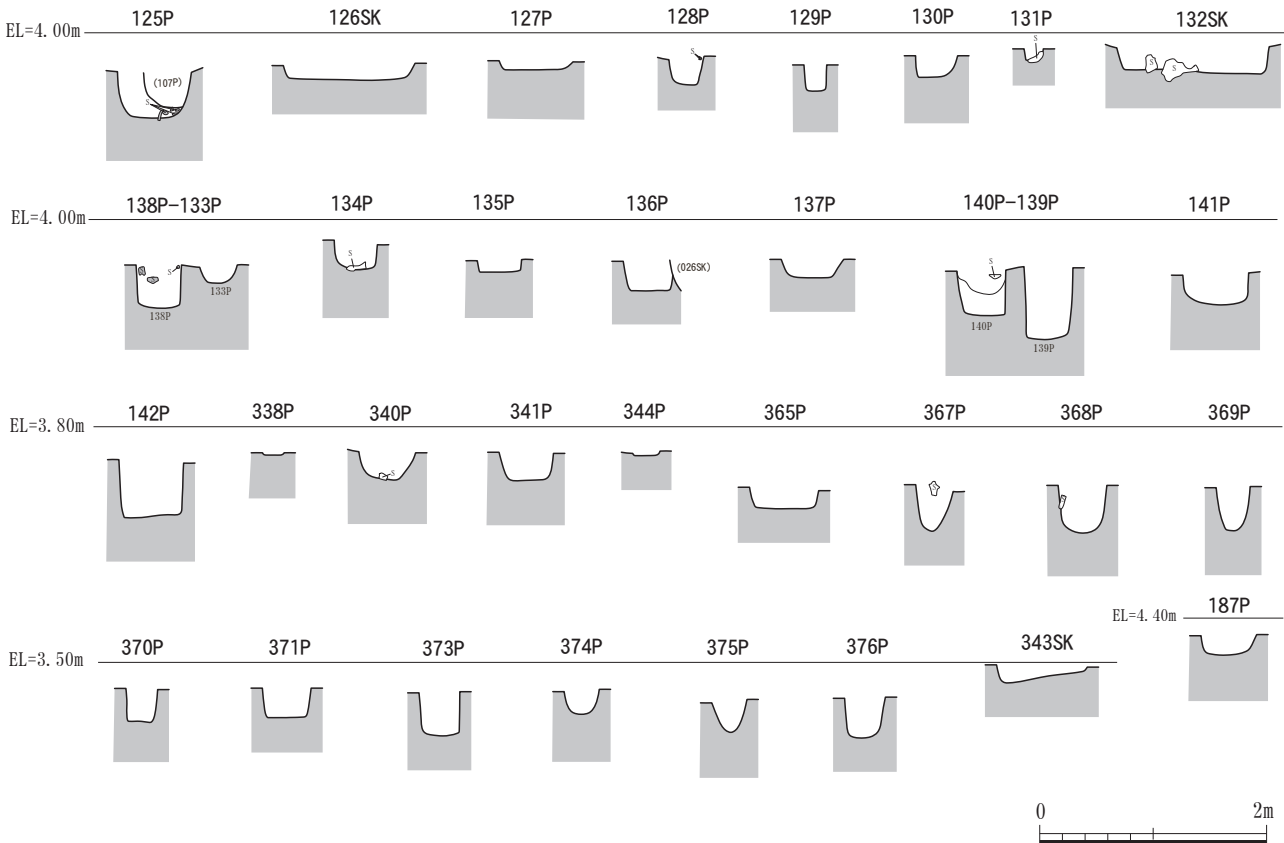
〈ピット群②-1〉

(HB①地区)



〈ピット群②-2〉

(HB①地区)



第101図 ピット群②-1・2 (グスク時代・近世)

〈ピット群③〉
(HB②ロ地区)



第 102 図 ピット群③(グスク時代・近世)

第32表-1 ピット・土坑観察一覧

(法量単位:cm)

ピット群	遺構名	性格	グリッド	調査区	地区	長辺	短辺	深さ	平面形状	断面形状	観察事項	遺物
ピット群 ①	175P	ピット	I14	HB①		22	15	7	楕円形	逆台形	明褐色(7.5YR5/8)砂質土がブロック状に混じり、少量の炭化物含む褐色シルト(10YR4/4)	
	176P	ピット	I14	HB①		31	27	5	円形	皿	明褐色(7.5YR5/8)砂質土がブロック状に混じる褐色シルト(10YR4/4)	
	177P	柱穴	I14	HB①		52	40	33	隅丸方形	有段状	黄褐色(10YR5/8)砂質土がブロック状に混じり、少量の炭化物・焼土、1mm・10～20mmの礫含む褐色砂質土(10YR4/4)	
	178SK	土坑	I14	HB①		62	55	57	不定形	有段状	褐色(10YR4/4)シルトがブロック状に混じり、径30～50mmの礫含む黄褐色シルト(10YR5/6)	
	179P	柱穴	I14	HB①		21	19	19	円形	U	明褐色(7.5YR5/8)・黄褐色(10YR5/6)砂質土がブロック状に混じり、少量の炭化物・焼土含む褐色砂質土(10YR4/4)	
	180P	柱穴	I・J14	HB①		34	31	31	隅丸三角	U	明褐色(7.5YR5/8)砂質土がブロック状に混じり、少量の炭化物含む褐色砂質土(10YR4/4)	
	181P	柱穴	J14	HB①		28	24	11	楕円形	U	明褐色(10YR6/8)砂質土がブロック状に混じる褐色シルト(10YR4/6)	
	182P	柱穴	J14	HB①		29	24	25	楕円形	U	明褐色(7.5YR5/8)砂質土がブロック状に混じり、炭化物、焼土含む褐色砂質土(10YR4/6)	
	183P	ピット	J14	HB①		24	21	4	楕円形	皿	少量の炭化物・焼土、径10mmの礫含む褐色砂質土(10YR4/6)	
	184P	柱穴	J13	HB①		28	26	17	円形	U	明褐色(7.5YR5/8)・暗褐色(10YR3/4)砂質土がブロック状に混じり、炭化物、焼土、径10mmの礫、褐色砂質土(10YR4/6)	
	185P	柱穴	J13	HB①		36	32	28	円形	U	明褐色(7.5YR5/8)砂質土がブロック状に混じり、炭化物、径2～8mmの礫、褐色砂質土(10YR4/6)	
	186P	柱穴	J14	HB①		17	16	11	円形	U	明褐色(7.5YR5/8)砂質土がブロック状に混じる褐色砂質土(10YR4/6)	
	190P	ピット	K13	HB①		20	19	6	円形	U	明黄褐色(10YR6/8)砂質土がブロック状に混じり、炭化物、焼土、径7mmのコーラル含むにぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)	
	191P	柱穴	K13	HB①		32	25	16	隅丸方形	U	明黄褐色(10YR6/8)砂質土がブロック状に混じり、炭化物、径30mmのコーラル含むにぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)	
	192P	柱穴	K13	HB①		35	33	19	円形	U	明褐色(7.5YR5/8)砂質土がブロック状に混じり、少量の炭化物・焼土、10～30mmの礫含む黄褐色砂質土(10YR5/6)	
	193P	柱穴	K13	HB①		70	57	24	楕円形	U	明褐色(7.5YR5/8)砂質土がブロック状に混じり、炭化物、径5mmの貝片、径2mmのコーラル含む黄褐色砂質土(10YR5/3)	
	194P	柱穴	K13	HB①		72	64	32	円形	U	明褐色(7.5YR5/8)砂質土がブロック状に混じり、炭化物、径27mm・5～12mmの礫、径25mmの貝片、径23mmの二枚貝含む褐色砂質土(10YR4/4)	
	195P	柱穴	K12	HB①		44	(31)	18	不定形	U	明褐色(7.5YR5/6)砂質土がブロック状に混じり、炭化物、径5mmの貝片、径5～23mmのコーラル含む黄褐色砂質土(10YR5/6)	
	196P	柱穴	K13	HB①		50	46	14	円形	U	炭化物、径1～3mm・7mmの貝片、径25mmの二枚貝、長10mmの枝サンゴ含む砂交じりの褐色砂質土(10YR4/4)	
	197P	柱穴	K12	HB①		67	58	21	隅丸方形	逆台形	炭化物、鉄分、明褐色(7.5YR5/8)砂質土がブロック状に混じり、炭化物、径3～20mmの礫、径8mmのコーラル含む(10YR5/6)	土器(貝後)
	198SK	土坑	K12	HB①		79	65	33	不定形	U	明褐色(7.5YR5/8)砂質土がブロック状に混じり、炭化物、径10mmの貝片、径15mmのコーラル含む褐色土(10YR4/4)	沖無・骨
	199P	ピット	K12	HB①		31	24	6	楕円形	皿	炭化物、径10mmの礫含む褐色砂質土(10YR4/6)	中国産色絵
	200P	柱穴	K12	HB①		37	34	24	円形	U	炭化物、焼土、径15～20mmの礫含む褐色砂質土(10YR4/4)	
	201P	柱穴	K12	HB①		35	32	12	楕円形	U	褐色(10YR4/4)・黄褐色(10YR5/6)砂質土がブロック状に混じり、炭化物、焼土、径3mmの貝片、径22mmの二枚貝、径1mm・7～30mmのコーラル含む褐色砂質土(10YR4/6)	
	209P	柱穴	J14	HB①		48	38	14	楕円形	U	明褐色(7.5YR5/8)砂質土がブロック状に混じり、炭化物、焼土、径2mmの礫、径30mmのコーラル含む褐色砂質土(10YR4/6)	
	210P	柱穴	J14	HB①		35	31	27	楕円形	U	明褐色(7.5YR5/8)砂質土がブロック状に混じり、少量の炭化物・焼土含む褐色砂質土(10YR4/6)	
	217P	柱穴	J14	HB①		23	26	16	円形	皿	明褐色(10YR6/8)砂質土がブロック状に混じる褐色シルト(10YR4/6)	
	218P	柱穴	J14	HB①		(62)	42	40	楕円形	皿	褐色(10YR4/4)砂質土がブロック状に混じり、微量の炭化物・焼土、径25mmの礫含む黄褐色シルト(10YR5/6)	

註:(貝後)=貝塚時代後期 下位層の遺物が混じった物

(凡例) 沖施:沖繩産施釉陶器 沖無:沖繩産無釉陶器 陶質:陶質土器 本陶:本土産陶器

第32表-2 ピット・土坑観察一覧

(法量単位:cm)

ピット群	遺構名	性格	グリッド	調査区	地区	長辺	短辺	深さ	平面形状	断面形状	観察事項	遺物
ピット群 ①	219SK	土坑	J14	HB①		(78)	80	10	不定形 (半楕円)	皿	明褐色(7.5YR5/8)砂質土がブロック状に混じり、少量の炭化物・焼土、径20mmの礫含む褐色砂質土(10YR4/6)	
	220P	柱穴	J14	HB①		56	48	13	円形	U	明褐色(7.5YR5/8)砂質土がブロック状に混じり、少量の炭化物・焼土含む褐色砂質土(10YR4/6)	
	222P	柱穴	K13	HB①		24	23	12	円形	U	明黄褐色(10YR6/8)砂質土がブロック状に混じり、炭化物、径30mmのコーラル含むにぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)	
	227P	ピット	I15	HB①		23	21	6	円形	すり鉢	褐色砂質土(10YR4/6)	
	228P	ピット	J14	HB①		(46)	29	5	不定形	皿	黄褐色(10YR5/8)シルトがブロック状に混じる褐色シルト(10YR4/4)	
	294P	柱穴	I15	HB①		32	31	21	円形	U	黄褐色(10YR5/8)砂質土がブロック状に混じる褐色砂質土(10YR4/4)	
	295P	柱穴	I15	HB①		20	18	15	円形	逆台形	黄褐色(10YR5/8)砂質土がブロック状に混じる褐色砂質土(10YR4/4)	
	296P	柱穴	I15	HB①		18	15	22	円形	U	黄褐色(10YR5/8)砂質土がブロック状に混じる褐色砂質土	
	297P	柱穴	I14	HB①		27	22	16	円形	有段状	黄褐色(10YR5/8)砂質土がブロック状に混じる褐色砂質土(10YR4/4)	
	298P	柱穴	I14	HB①		20	18	16	円形	U	黄褐色(10YR5/8)砂質土がブロック状に混じる褐色砂質土(10YR4/4)	
	300P	柱穴	I14	HB①		41	37	23	円形	U	黄褐色(10YR5/8)砂質土がブロック状に混じる褐色砂質土(10YR4/4)	
	347P	柱穴	J15	HB①		20	20	11	円形	U	黄褐色(10YR5/8)砂質土がブロック状に混じる褐色砂質土(10YR4/4)	
	348P	ピット	J15	HB①		14	13	5	円形	U	黄褐色(10YR5/8)砂質土がブロック状に混じり、微量の炭化物含む褐色砂質土(10YR4/4)	
	349P	柱穴	J15	HB①		21	20	17	円形	U	黄褐色(10YR5/8)砂質土がブロック状に混じり、微量の炭化物含む褐色砂質土(10YR4/4)	
	350P	柱穴	J14	HB①		21	18	11	楕円形	皿	褐色(10YR4/4)砂質土がブロック状に混じる明褐色砂質土(7.5YR5/8)	
	351P	柱穴	K14	HB①		23	22	22	円形	U	微量の炭化物含む褐色砂質土(10YR4/4)	
	188SK	土坑	J13	HB①		82	66	15	円形	U	明褐色(7.5YR5/8)・褐色(10YR4/4)砂質土がブロック状に混じり、炭化物、焼土、径8mmの礫、径5mmのコーラル含む暗褐色砂質土(10YR3/4)	
	189SK	土坑	K13	HB①		95	61	29	楕円形	U	炭化物、径30～50mmの礫、径12mmのコーラル含む黄褐色粘質土(10YR4/4)	沖無
	299SK	土坑	I15	HB①		116	(57)	45	不定形	不定形	200～500mmの礫、微量の炭化物含む褐色砂質土(10YR4/4)	焼土
	1008P	柱穴	I13	HB②	イ地区	38	28	19	楕円形	U	焼土粒、炭化物(10YR5/6黄褐)	
1009P	柱穴	I13	HB②	イ地区	33	30	19	円形	U	焼土粒、細礫(10YR6/6明黄褐)		
1010P	柱穴	J13	HB②	イ地区	37	27	15	円形	すり鉢	焼土粒、細礫(10YR5/6黄褐)		
1012P	柱穴	J13	HB②	イ地区	36	(28)	17	不定形	すり鉢	細礫(10YR6/6明黄褐)		
1013P	柱穴	J13	HB②	イ地区	49	(24)	11	不定形	逆台形	焼土粒、炭化物、細礫(10YR6/6明黄褐)		
1014P	柱穴	J13	HB②	イ地区	59	(45)	20	円形	V	焼土粒、細礫(10YR5/6黄褐)		
1015P	柱穴	J13	HB②	イ地区	(55)	51	14	不定形	逆台形	炭化物、細礫(10YR4/6褐)		
1017P	柱穴	K11・12	HB②	イ地区	48	46	17	円形	すり鉢	細礫(10YR4/6褐)		
ピット群 ② 1	143SK	土坑	L16	HB①		68	75	11	円形	逆台形	褐色(10YR4/4)シルトが混じる黄褐色シルト(10YR5/6)	
	144P	柱穴	K・L16	HB①		(31)	(25)	44	不定形	—	褐色(10YR4/4)シルトが混じる黄褐色シルト(10YR5/6)	
	145P	ピット	L15	HB①		(12)	16	7	不定形	U	黄褐色(10YR5/1)が混じる褐色砂質土(10YR4/4)	
	146P	柱穴	L15	HB①		47	45	14	円形	U	褐色シルト(10YR4/4)	染付
	147SK	柱穴	L15	HB①		122	85	18	不定形	U	褐色(10YR4・4)・黄褐色(10YR5/6)シルトがブロック状に混じるにぶい黄褐色シルト(10YR5/4)	
	148P	柱穴	L15	HB①		24	23	12	円形	U	黄褐色(10YR5/1)が混じる褐色砂質土(10YR4/4)	
	149SK	土坑	L15	HB①		82	57	22	隅丸長方形	有段状	黄褐色(10YR5/1)が混じる褐色砂質土(10YR4/4)	白磁・貝・沖無
	150SK	土坑	L15	HB①		71	43	18	隅丸長方形	U	黄褐色(10YR5/1)が混じる褐色砂質土	青磁
	151P	柱穴	L15	HB①		(36)	45	73	不定形	U	1層:多量の炭化物、径1mmの貝片含む褐色砂質土(7.5YR4/4) 2層:径30mmの礫、径1mmの貝片含む褐色砂質土(7.5YR4/4) 3層:褐色(10YR4/4)シルトがブロック状に混じる褐色砂質土(7.5YR4/4)	

註:(貝後)=貝塚時代後期 下位層の遺物が混じった物

(凡例) 沖施:沖縄産施釉陶器 沖無:沖縄産無釉陶器 陶質:陶質土器 本陶:本土産陶器

第32表-3 ピット・土坑観察一覧

(法量単位:cm)

ピット群	遺構名	性格	グリッド	調査区	地区	長辺	短辺	深さ	平面形状	断面形状	観察事項	遺物
ピット群 ② 1	152P	柱穴	L15	HB①		43	28	25	楕円形	U	黄褐色(10YR5/1)が混じる褐色砂質土(10YR4/4)	沖無
	153P	柱穴	L15	HB①		40	(32)	21	円形	U	少量の炭化物、径1mm・30mmの礫含む黄褐色シルト(10YR4/4)	
	154P	柱穴	L15	HB①		51	(29)	62	楕円形	U	1層:多量の炭化物、径1mmの貝片含む褐色砂質土(7.5YR4/4) 2層:径30mmの礫、径1mmの貝片含む褐色砂質土(7.5YR4/4)	土器(貝後)
	155P	柱穴	K15	HB①		72	58	17	楕円形	U	炭化物少量混じる黄褐色シルト(10YR5/6)	本陶
	156P	柱穴	K15	HB①		20	18	21	楕円形	U	黄褐色(10YR5/1)が混じる褐色砂質土(10YR4/4)	
	157P	柱穴	K15	HB①		19	17	23	楕円形	U	黄褐色(10YR5/1)が混じる褐色砂質土(10YR4/4)	
	158SK	土坑	K15	HB①		78	77	14	円形	皿	褐色(10YR4/4)シルトが混じる黄褐色シルト(10YR5/6)	
	159P	ピット	K15	HB①		30	22	3	隅丸方形	皿	褐色(10YR4/4)シルトが混じる黄褐色シルト(10YR5/6)	
	160P	柱穴	K15	HB①		24	20	11	楕円形	U	褐色シルト(10YR4/4)	
	161P	ピット	K15	HB①		52	49	6	円形	皿	黄褐色シルト(10YR5/6)	
	162P	柱穴	L14	HB①		31	28	20	円形	U	褐色シルト(10YR4/4)	
	166SK	土坑	L14・15	HB①		75	32	39	隅丸長方形	U	黄褐色(10YR5/1)が混じる褐色砂質土(10YR4/4)	
	167P	柱穴	L14	HB①		36	(25)	29	不定形	U	少量の炭化物、2mm・70mmの礫含む褐色粘質土(10YR4/4)	
	168P	柱穴	L15	HB①		39	28	44	楕円形	U	径1mmの貝片多く混じる褐色砂質土(10YR4/4)	
	169P	柱穴	L14	HB①		40	40	53	円形	U	1層:少量の炭化物混じる褐色砂質土(10YR4/4) 2層:1mmの貝片多く混じる褐色砂質土(10YR4/4)	
	170P	ピット	L14	HB①		41	38	8	円形	U	径1mmの貝片多く混じる褐色砂質土(10YR4/4)	
	171P	ピット	L14	HB①		38	36	6	円形	U	径1mmの貝片多く混じる褐色砂質土(10YR4/4)	
	172P	柱穴	K14	HB①		62	37	10	楕円形	皿	褐色(10YR4/4)シルトが混じる黄褐色シルト(10YR5/6)	
	173P	柱穴	L14	HB①		35	29	18	円形	U	1層:黄褐色(7.5YR5/8)シルトが混じる褐色シルト(10YR4/4) 2層:1mmの貝片多く混じる褐色砂質土(10YR4/4)	
	202P	柱穴	J16	HB①		56	43	29	楕円形	U	暗褐色(10YR3/4)・にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土がブロック状に混じり、径20~50mmの礫含む黄褐色砂質土(10YR5/6)	
	203P	柱穴	J16	HB①		82	51	13	楕円形	W	黄褐色(10YR5/6)シルトがブロック状に混じり、少量の炭化物・焼土含む褐色シルト(10YR4/6)	
	204P	柱穴	J16	HB①		29	22	19	楕円形	U	径70mmの礫、径10mmの貝片含む黄褐色砂質土(10YR5/6)	
	206P	柱穴	I16	HB①		54	51	18	円形	U	1層:10~30mmの礫含む明黄褐色(10YR6/6)粗砂混じりの褐色シルト(10YR4/4) 2層:黄褐色(10YR5/6)砂質土がブロック状に混じる褐色シルト(10YR4/4)	
207SK	土坑	I・J16	HB①		(93)	84	24	不定形	U	褐色(10YR4/4)シルトがブロック状に混じり、微量の炭化物・焼土、径50mmの礫含む褐色シルト(10YR5/6)		
208P	柱穴	I16	HB①		25	24	17	方形	U	褐色(10YR4/4)シルトがブロック状に混じり、微量の炭化物・焼土、径5mmの礫含む褐色シルト(10YR4/6)	沖無	
214P	柱穴	J15	HB①		24	20	20	楕円形	U	少量の炭化物・焼土含む褐色シルト(10YR4/6)		
215P	柱穴	J15	HB①		24	22	16	円形	U	少量の炭化物含む褐色シルト(10YR4/6)		
216P	柱穴	J14	HB①		42	27	25	隅丸方形	有段状	明褐色(7.5YR5/8)砂質土がブロック状に混じり、少量の炭化物含む褐色砂質土(10YR4/4)		
226SK	土坑	L14	HB①		(74)	60	64	楕円形	すり鉢	径10~40mmの礫、径10mmの貝片、径20mmの二枚貝含む褐色砂質土(10YR4/4)	土器(貝後)・貝・貝製品	
230SK	土坑	K15	HB①		64	50	11	不定形	皿	微量の炭化物、径50mmの礫、径3mmの貝片含む黄褐色砂質土(10YR5/6)		

註:(貝後)=貝塚時代後期 下位層の遺物が混じった物

(凡例) 沖施:沖繩産施釉陶器 沖無:沖繩産無釉陶器 陶質:陶質土器 本陶:本土産陶器

第32表-4 ピット・土坑観察一覧

(法量単位:cm)

ピット群	遺構名	性格	グリッド	調査区	地区	長辺	短辺	深さ	平面形状	断面形状	観察事項	遺物
ピット群 ② 1	231SK	土坑	K15	HB①		63	46	11	不定形	皿	微量の炭化物・焼土、径5mmの礫含む黄褐色砂質土(10YR5/6)	
	232P	柱穴	L14	HB①		69	(21)	24	不定形	すり鉢	褐色(10YR4/4)シルトがブロック状に混じり、少量の炭化物・焼土、1mm・10～15mmのコーラル含む褐色砂質土(7.5YR4/4)	土器(貝後)
	164SK	土坑	K・L14・15	HB①		(84)	35	14	不定形	不定形	明褐色(10YR6/8)砂質土がブロック状に混じり、少量の炭化物・焼土、径30～50mmのコーラル含む褐色砂質土(10YR4/6)	沖施
ピット群 ② 1 2	125P	柱穴	K17・18	HB①		63	62	40	円形	U	暗褐色(10YR3/3)粘質土がブロック状に混じる褐色シルト(10YR4/4)	
	126P	土坑	K18	HB①		116	(43)	15	不定形	皿	暗褐色(10YR3/3)粘質土がブロック状に混じる褐色シルト(10YR4/4)	
	127P	ピット	K18	HB①		65	47	8	楕円形	皿	径1mm程度の貝片多量に含む褐色砂質土(10YR4/4)	
	128P	柱穴	K18・19	HB①		30	29	24	円形	U	径1mmの貝片多量に含む褐色砂質土(10YR4/3)	
	129P	柱穴	K19	HB①		20	20	23	円形	U	炭化物少量含む褐色砂質土(10YR4/4)	
	130P	柱穴	K19	HB①		67	28	20	楕円形	U	炭化物多量含む黒褐色砂質土(10YR3/2)	
	131P	柱穴	J19	HB①		19	16	13	楕円形	不定形	炭化物少量含むにぶい黄褐色シルト(10YR5/4)	
	132SK	土坑	J・K19	HB①		142	139	24	不定形	U	暗褐色(10YR3/3)粘質土がブロック状に混じる褐色シルト(10YR4/4)	
	133P	柱穴	L18	HB①		32	29	16	円形	U	1mmの貝片多く含むにぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)	土器(貝後)
	134P	柱穴	K19	HB①		45	34	22	楕円形	U	にぶい黄褐色粘質土(10YR5/4)	
	135P	ピット	L17	HB①		43	38	9	楕円形	U	褐色粘質土(10YR4/4)	
	136P	柱穴	L18	HB①		(40)	44	26	不定形	U	黄褐色砂質土(10YR5/6)	
	137P	柱穴	L18	HB①		55	46	16	楕円形	U	1mm程度の貝片多量に含む褐色砂質土(10YR4/4)	
	138P	柱穴	L18	HB①		40	38	37	円形	U	10～50mm程度の礫少量含む黄褐色砂質土(10YR5/6)	貝・沖無
	139P	柱穴	L18	HB①		43	40	64	円形	U	10～50mm程度の礫少量含む黄褐色砂質土(10YR5/6)	
	140P	柱穴	L18	HB①		42	41	38	円形	U	1層:10～50mm程度の礫少量含む黄褐色砂質土(10YR5/6) 2層:少量の黄褐色(10YR5/8)粘質土がブロック状に混じる褐色砂質土(10YR4/4)	
	141P	柱穴	L18	HB①		58	43	56	隅丸方形	U	地山岩盤ブロック状に混じる褐色粘質土(10YR5/6)	
	142P	柱穴	L18	HB①		61	55	51	円形	U	枝サンゴ少量混じる褐色粘質土(10YR4/4)	
	187P	柱穴	J13	HB①		49	45	18	円形	U	炭化物、焼土、にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)、明褐色砂質土(7.5YR5/8)、径10mmの礫、径7mmのコーラル、含む黄褐色砂質土(10YR5/6)	
	338P	ピット	K18	HB①		22	16	4	楕円形	皿	暗褐色砂質土(10YR4/3)	
	340P	柱穴	K18	HB①		51	42	27	隅丸方形	U	黄褐色(10YR5/8)砂質土がブロック状に混じり、微量の炭化物含む褐色砂質土(10YR4/4)	
	341P	柱穴	K18	HB①		45	(32)	25	不定形	U	少量の炭化物・焼土、径1mmの貝片含む暗褐色砂質土(10YR4/3)	
	343SK	土坑	K19	HB①		77	66	12	不定形	逆台形	暗褐色(10YR3/3)砂質土が混じり、微量の炭化物、5～30mmの礫含む褐色砂質土(10YR4/6)	土器(貝後)・貝・骨・軽石
	344P	ピット	K18	HB①		27	24	2	円形	皿	暗褐色砂質土(10YR4/3)	
	365P	柱穴	L19	HB①		62	(44)	18	不定形	U	褐色砂質土(2.5Y4/2)	
	367P	柱穴	L19	HB①		36	33	40	円形	U	褐色砂質土(10YR4/3)	貝
	368P	柱穴	L19	HB①		48	42	42	円形	U	貝片多く混じる褐色砂質土(10YR4/4)	
369P	柱穴	L18	HB①		36	28	38	楕円形	U	褐色砂質土(10YR4/4)		
370P	柱穴	L18	HB①		31	27	29	円形	U	貝片少量混じる褐色砂質土(10YR4/3)		
371P	柱穴	L18	HB①		44	40	26	円形	U	貝片少量混じる褐色砂質土(10YR4/3)		
373P	柱穴	L18	HB①		44	36	39	楕円形	U	褐色砂質土(10YR4/4)	貝	
374P	柱穴	L18	HB①		34	31	21	円形	U	褐色砂質土(10YR4/3)		
375P	柱穴	L18	HB①		32	28	28	円形	V	褐色砂質土(10YR4/4)	土器(貝後)	

註:(貝後)=貝塚時代後期 下位層の遺物が混じった物

(凡例) 沖施:沖繩産施釉陶器 沖無:沖繩産無釉陶器 陶質:陶質土器 本陶:本土産陶器

第32表-5 ピット・土杭観察一覧

(法量単位:cm)

ピット群	遺構名	性格	グリッド	調査区	地区	長辺	短辺	深さ	平面形状	断面形状	観察事項	遺物
ピット群 ②-2	376P	柱穴	L17	HB①		37	27	35	楕円形	U	褐色砂質土(10YR4/4)	貝・陶質
	237SK	土坑	K19	HB①		151	(144)	124	不定形	有段状	1層:微量の炭化物、径2~5mmの礫、径1mm・5~10mmの貝片、長3~8mmの枝サンゴ含む粗砂混じりの黒褐色シルト(10YR3/2)	土器(貝後)・貝・自然礫・貝製品・軽石
	339SK	ピット	L18	HB①		80	68	5	円形	皿	褐色(10YR4/4)シルトがブロック状に混じり、径1mm・5mmの貝片、長5~20mmの枝サンゴ含む褐色砂質土(10YR4/4)	
	382SK	土坑	K20	HB①		112	49	45	不定形	U	焼土・炭化物少量混じる褐色砂質土(10YR4/3)	
ピット群 ③	2007P	柱穴	R10	HB②	ロ地区	61	(49)	26	不定形	U	カワニナ、炭化物(2.5Y4/3オリーブ褐)	骨製品・骨・沖無
	2008P	ピット	R10	HB②	ロ地区	59	48	5	円形	皿	カワニナ、灰色土(5Y4/4暗オリーブ)	
	2009P	柱穴	R10	HB②	ロ地区	(58)	(33)	12	不定形	有段状	カワニナ、炭化物、灰色土(5Y4/4暗オリーブ)	
	2010P	柱穴	Q10	HB②	ロ地区	63	56	26	円形	U	カワニナ、灰色土(2.5Y4/3オリーブ褐)	
	2011SK	ピット	Q11	HB②	ロ地区	83	80	9	円形	皿	カワニナ、灰色土(5Y4/4暗オリーブ)	
	2012P	柱穴	Q11	HB②	ロ地区	73	57	12	楕円形	有段状	カワニナ(2.5Y4/3オリーブ褐)	
	2013P	柱穴	Q11	HB②	ロ地区	57	52	11	円形	U	カワニナ(2.5Y4/3オリーブ褐)	
	2014P	柱穴	Q12	HB②	ロ地区	72	71	16	円形	U	カワニナ、礫(2.5Y4/3オリーブ褐)	青磁
	2015SK	土坑	Q12	HB②	ロ地区	88	65	20	楕円形	U	カワニナ、礫(2.5Y4/3オリーブ褐)	
	2016P	柱穴	S13	HB②	ロ地区	74	65	21	円形	U	カワニナ、褐色土(10YR4/4褐)	
	2017P	柱穴	S13	HB②	ロ地区	45	44	12	円形	有段状	カワニナ、炭化物、灰色土(10YR4/4褐)	
	2018P	柱穴	S13	HB②	ロ地区	46	33	16	楕円形	U	カワニナ、炭化物、灰色土(10YR4/4褐)	
	2019P	柱穴	S13	HB②	ロ地区	76	73	42	円形	U	カワニナ、灰色土(10YR5/6黄褐)	
	2020SK	土坑	S13	HB②	ロ地区	137	58	19	楕円形	皿	カワニナ(2.5Y4/6オリーブ褐)	
	2021P	柱穴	S13	HB②	ロ地区	52	32	29	楕円形	U	カワニナ、灰色土(2.5Y4/6オリーブ褐)	
	2022P	柱穴	S13	HB②	ロ地区	77	65	18	楕円形	すり鉢	カワニナ、礫(2.5Y4/6オリーブ褐)	
	2023P	柱穴	S12・13	HB②	ロ地区	76	66	18	楕円形	有段状	カワニナ(10YR4/4褐)	染付
	2024P	柱穴	S12・13	HB②	ロ地区	(30)	64	41	不定形	不定形	カワニナ、炭化物(2.5Y4/6オリーブ褐)	染付・銭貨
	2025P	柱穴	S12	HB②	ロ地区	70	60	34	円形	逆台形	カワニナ、海性貝、炭化物、礫(2.5Y4/4オリーブ褐)	青磁
	2026P	柱穴	S12・13	HB②	ロ地区	98	76	32	楕円形	すり鉢	カワニナ、灰色土(2.5Y4/6オリーブ褐)	
	2027P	柱穴	S12	HB②	ロ地区	54	45	28	楕円形	U	カワニナ、褐色土(2.5Y4/4オリーブ褐)	
	2028P	柱穴	S12	HB②	ロ地区	36	29	14	楕円形	すり鉢	カワニナ(10YR4/4褐)	
	2029P	ピット	S12	HB②	ロ地区	27	23	9	楕円形	U	カワニナ(2.5Y4/4オリーブ褐)	
	2030P	ピット	S・T12	HB②	ロ地区	34	32	9	円形	U	カワニナ(2.5Y4/3オリーブ褐)	
	2031P	柱穴	S・T12・13	HB②	ロ地区	67	55	29	楕円形	U	カワニナ、灰色土(2.5Y4/4オリーブ褐)	
	2032SK	土坑	S13T12・13	HB②	ロ地区	(105)	(46)	34	不定形	逆台形	カワニナ(2.5Y4/6オリーブ褐)	
	2033P	柱穴	S・T12	HB②	ロ地区	51	48	11	隅丸方形	皿	カワニナ、炭化物(2.5Y4/3オリーブ褐)	
	2034P	柱穴	T12	HB②	ロ地区	28	33	15	不定形	U	カワニナ、灰色土(2.5Y4/6オリーブ褐)	
	2035P	柱穴	Q13	HB②	ロ地区	72	63	26	楕円形	U	カワニナ、灰色土(2.5Y4/6オリーブ褐)	
	2036P	柱穴	R13	HB②	ロ地区	50	42	10	楕円形	逆台形	カワニナ(2.5Y4/6オリーブ褐)	
	2037P	柱穴	R13	HB②	ロ地区	46	40	13	円形	U	カワニナ(10YR4/4褐)	
	2038SK	土坑	Q13	HB②	ロ地区	82	77	12	円形	皿	カワニナ(10YR5/8黄褐)	骨
	2039P	ピット	R13	HB②	ロ地区	71	67	9	円形	皿	カワニナ、褐色土(10YR4/4褐)	
	2040P	柱穴	R13	HB②	ロ地区	49	45	24	円形	U	カワニナ、炭化物(10YR4/4褐)	
2041P	柱穴	R13	HB②	ロ地区	67	64	52	円形	U	カワニナ、灰色土(10YR5/6黄褐)		
2042P	柱穴	Q・R13	HB②	ロ地区	57	47	17	楕円形	U	カワニナ(2.5Y4/6オリーブ褐)		
2043P	柱穴	R13	HB②	ロ地区	43	48	12	不定形	逆台形	カワニナ、灰色土(2.5Y4/3オリーブ褐)		
2044P	柱穴	S12	HB②	ロ地区	56	45	35	楕円形	有段状	カワニナ、礫(10YR5/6黄褐) 灰色土、礫(5Y4/4暗オリーブ)		

註:(貝後)=貝塚時代後期 下位層の遺物が混じった物

(凡例) 沖施:沖繩産施釉陶器 沖無:沖繩産無釉陶器 陶質:陶質土器 本陶:本土産陶器

第32表-6 ピット・土坑観察一覧

(法量単位:cm)

ピット群	遺構名	性格	グリッド	調査区	地区	長辺	短辺	深さ	平面形状	断面形状	観察事項	遺物
ピット群 ③	2045P	柱穴	R9	HB②	ロ地区	47	34	15	楕円形	逆台形	カワニナ、灰色土(5Y4/4暗オリーブ)	
	2046P	柱穴	R13	HB②	ロ地区	98	80	16	隅丸三角	皿	カワニナ、灰色土(2.5Y4/6オリーブ褐)	
	2047P	柱穴	R13	HB②	ロ地区	82	60	34	楕円形	U	カワニナ(2.5Y4/6オリーブ褐)	
	2048P	柱穴	R12	HB②	ロ地区	80	72	12	隅丸三角	逆台形	カワニナ、灰色土、礫(2.5Y4/6オリーブ褐)	
	2050P	柱穴	Q13	HB②	ロ地区	69	68	23	円形	逆台形	カワニナ、灰色土、礫(2.5Y4/6オリーブ褐)	
	2051P	柱穴	Q・R12	HB②	ロ地区	85	69	25	楕円形	逆台形	カワニナ、灰色土、礫(2.5Y4/6オリーブ褐)	
	2052P	柱穴	Q12	HB②	ロ地区	72	62	20	楕円形	U	カワニナ、褐色土、礫(2.5Y4/6オリーブ褐)	
	2053P	柱穴	Q13	HB②	ロ地区	57	52	16	円形	U	カワニナ、灰色土、炭化物、礫(2.5Y5/6オリーブ褐)	
	2055P	ピット	S13	HB②	ロ地区	50	41	9	楕円形	逆台形	カワニナ、炭化物、灰色土、褐色土、礫(2.5Y4/6オリーブ褐)	
	2056SK	土坑	S・T12	HB②	ロ地区	(68)	73	10	不定形	皿	カワニナ、炭化物、礫(2.5Y4/3オリーブ褐)	
	2057P	柱穴	R12	HB②	ロ地区	71	46	15	楕円形	不定形	カワニナ、礫(2.5Y4/3オリーブ褐)	
	2058P	ピット	Q13	HB②	ロ地区	50	44	8	楕円形	皿	カワニナ(2.5Y3/3暗オリーブ褐)	
	2059P	柱穴	S12	HB②	ロ地区	48	43	10	円形	U	カワニナ、褐色土、礫(2.5Y4/6オリーブ褐)	
	2060P	ピット	S12	HB②	ロ地区	52	33	8	楕円形	皿	カワニナ(2.5Y4/6オリーブ褐)	
	2061P	ピット	S12	HB②	ロ地区	47	(33)	8	不定形	皿	カワニナ、貝片(2.5Y4/4オリーブ褐)	
	2062P	柱穴	R12	HB②	ロ地区	65	45	17	楕円形	皿	カワニナ、炭化物、灰色土、褐色土、礫(2.5Y4/6オリーブ褐)	
	2063P	ピット	R12	HB②	ロ地区	57	57	9	円形	皿	カワニナ、礫(2.5Y4/4オリーブ褐)	
	2064P	ピット	R12	HB②	ロ地区	45	42	5	円形	皿	カワニナ、礫(2.5Y4/4オリーブ褐)	
	2065P	柱穴	S12	HB②	ロ地区	57	48	17	楕円形	U	カワニナ、礫(2.5Y3/3暗オリーブ褐)	
	2066P	柱穴	T12	HB②	ロ地区	(56)	(46)	28	不定形	不定形	カワニナ、灰色土(2.5Y4/4オリーブ褐)	
2067P	柱穴	S13	HB②	ロ地区	(33)	54	10	不定形	皿	カワニナ、灰色土(2.5Y4/4オリーブ褐)		
2069P	ピット	S10	HB②	ロ地区	52	41	9	楕円形	皿	礫、枝サンゴ、貝片(2.5Y4/3オリーブ褐)		
2070P	柱穴	S10	HB②	ロ地区	69	(21)	21	不定形	すり鉢	カワニナ(2.5Y4/3オリーブ褐)		
2072P	柱穴	T12	HB②	ロ地区	52	50	13	不定形	有段状	カワニナ、褐色土(2.5Y4/2暗灰黄)	染付・沖施・沖無	
単独	225SK	土坑	N17・18	HB①		178	77	39	方形	U		褐釉陶器・沖施・沖無・骨
	308SK	土坑	N14・15	HB①		(136)	123	33	不定形	すり鉢	微量の炭化物・焼土、径5mmの礫含む黄褐色砂質土(10YR5/6)	
	356P	柱穴	O8	HB①		21	19	54	隅丸三角	U	径1mmの貝片が少量混じるオリーブ褐色砂質土(2.5Y4/4)	
	357P	柱穴	O8	HB①		27	24	55	円形	U	径1mmの貝片が少量混じるオリーブ褐色砂質土(2.5Y4/4)	
	360SK	土坑	O10・11	HB①		154	49	84	隅丸長方形	U	暗オリーブ色粘質土(2.5Y4/3)	染付
	362P	柱穴	P9	HB①		54	48	10	楕円形	U	暗灰黄粘質土(2.5Y4/2)	
	P1	ピット	M4(A4)	HB④	イ地区	23	20	8	楕円形	皿	黄褐色砂質土(2.5Y5/3)	
	P2	柱穴	O7(A4)	HB④	イ地区	20	20	15	円形	逆台形	黒褐色シルト(2.5Y3/1)	
	P3	柱穴	P7(A4)	HB④	イ地区	18	15	25	楕円形	U	黒褐色シルト(10YR3/1)	
	P4	ピット	P6(A4)	HB④	イ地区	24	21	8	楕円形	逆台形	黒褐色砂質土(2.5Y3/2)	
	P5	柱穴	N1(A4)	HB④	イ地区	28	27	17	円形	U	黒褐色砂質土(2.5Y3/2)	貝

註:(貝後)=貝塚時代後期 下位層の遺物が混じった物

(凡例) 沖施:沖縄産施釉陶器 沖無:沖縄産無釉陶器 陶質:陶質土器 本陶:本土産陶器

溝状遺構 2 はⅣ層上面で溝内に石列を伴ってⅣ層堆積範囲を横断するように検出された。建物址やピット群が検出された標高約 3.5~4.5m には検出されていないことから、標高 3.5m 以下の面に構築されたものと考えられる。また、Ⅳ層はカワニナを含む水成堆積の様相が見られ湿地的な環境が想起されることから、土地条件に合わせた石敷道や水路等、複数の性格を有すると思われる。

溝状遺構 2 を切る溝状遺構 1 とピット群③の 2048・2050~2052・2057P はそれより新しく、ピット群③はピット群①・②(②-1、②-2) に比して径(長軸)が長く浅い傾向が見られることから、柱穴以外の可能性もあるものと思われる。

建物址 1(235SB) の 163SK から白磁(17~18c)、青磁染付(18~19c) が出土し、建物址 2(310SB) の 236・372SK で青磁(14~16c)、236SK で年代不明の染付が出土した。建物址 2 の柱穴は約 0.78~1.35m と深く、柱穴の間隔が約 2.8m を測り、建物址 1 の柱穴は 0.15~0.36m と前者に比して浅く、根石が検出され、柱穴の間隔は約 5.4m である。建物址 1・2 に見られる柱穴の深さや根石の有無の差異は、建物の高さや構築方法が異なることを示唆しているものと思われ、建物址 2 は 14~16 世紀代の青磁や染付が出土していることからやや古い遺構の可能性を有していると考えられる。範囲確認調査トレンチで検出された建物址の規模は後者に類似する。

ピット群①・②(②-1・②-2)、単独ピットで出土する遺物の年代幅は 14~19 世紀のものが出土した。

註 1 北谷町教育委員会 2008 『平安山原 B 遺跡』北谷町文化財調査報告書第 29 集

第33表 Ⅲ層遺構別遺物出土量(グスク時代・近世)

地区	遺構名	グリッド	遺物 遺構	グスク・近世										近・現代				合計		
				グスク土器	カマイヤキ	白磁	青磁	染付	褐釉・半練	その他の輸入磁器	本土産陶器	本土産磁器	骨製品	銭貨	グスク砥石	施釉陶器	沖繩産無釉陶器		沖繩産陶質土器	骨
HB①	建物跡1	K・L15	163SK			1		1		1								1	4	
	建物址2	K18	236SK				1	1											2	
		L18	372SK				2												2	6
	溝1	P10~15 Q15	271SD	1		2	3	5	4	1	2	1		4	1	30	25	7	2	88
P10		304SD													13	11	1		25	
HB②ロ	溝2	N~Q13.N・O14	275SL		1													1	2	
		Q~S12・13	2049SD	4		2	7	2	2		1				1	3	1	4	27	
HB①	ピット①	K12	199P							1									1	
		K13	189SK													1			1	
		K12	198SK													1		1	2	
	ピット②-1	L15	149SK		1											1			2	
		L15	150SK			1													1	
		L15	152P												1				1	
		K15	155P								1								1	
		K・L14・15	164SK											1					1	
	ピット②-2	I16	208P													1			1	
		K19	343SK															1	1	
	ピット③	I38P	138P													1			1	
L15		146P					1											1		
HB②ロ	ピット③	T12	2072P				1							2	1				4	
		R10	2007P									1				1		2	4	
		S12・13	2024P				1						1						2	
		Q12	2014P				1												1	
		Q13	2038SK															1	1	
		S12・13	2023P				1												1	
		S12	2025P				1												1	
HB①	単ピット	N17・18	225SK					1						1	3		2	7		
		O10・11	360SK					1										1		
		P15	336P											1				1		
Ⅲ層合計				5	1	6	16	14	7	3	4	1	1	5	1	49	52	10	16	191

2. 出土遺物

出土遺物はグスク土器、カムイヤキ、白磁、青磁、染付、褐釉陶器（中国・タイ産）、半練土器（タイ産）、その他の輸入陶磁器、瓦質土器、本土産陶磁器（近世）などで、他にも種々の遺物が出土した。第34表の遺物出土量を見ると、Ⅲ層（近世）から440点、Ⅳ層（グスク）から1158点の遺物が得られ、攪乱などによってⅠ・Ⅱ層からの出土も多い。Ⅲ・Ⅳ層からは貝塚時代後期の遺物も出土し、特にⅣ層出土の遺物の中では高い割合を示すが、Ⅴ層の遺物が自然流路に堆積したものと考えられる。主な遺物を時期・層別に分け、その出土量を第34表に示した。染付が256点と最も多く出土し、次いでグスク土器が147点、青磁が98点と続く。グスク土器やカムイヤキは11～13世紀とグスク時代の前半に属し、いずれもⅣ層出土が多い。青磁は11～16世紀に属するものが大半で、Ⅳ層出土は約半数である。褐釉陶器・半練土器は時期不明なものが33点と多く、それを除いた20点は全て14～16世紀に属する。そのうち、Ⅳ層出土は9点である。白磁、染付は11～16世紀代と16～19世紀代の時期に分かれる。11～16世紀代の白磁は22点得られ、玉縁口縁碗や口禿口縁碗はⅣ層より出土する。染付は僅か6点で、そのうちⅣ層出土は2点である。16～19世紀代の白磁は33点、染付は225点の出土である。いずれもⅠ・Ⅱ層からの出土が大半であるが、Ⅱ層の遺構出土も多く、攪乱による下層の遺物の可能性も考えられる。

以上、出土遺物はグスク時代である11～16世紀のものと近世に相当する16～19世紀のものが出土し、白磁や染付はそれぞれ両方の時期に属するものが得られた。このように、グスク時代から近世にかけて出土する遺物もあり、各々の遺物の項において詳細に記述する。

第34表 グスク時代・近世遺物の時期別出土量

遺物 時代 層位	グスク 土器 11～ 13c	カムイ ヤキ 11～ 13c	白磁			青磁			褐釉・半練		染付			その他 輸入陶磁器		合計
			明代 11～ 16c	16～ 19c	不明	11～ 16c	16～ 19c	不明	明代 14～ 16c	不明	11～ 16c	16～ 19c	不明	明代	17～ 19c	
Ⅰ	4	1	3	15	13	9		3	3	4	2	119	11	1	1	189
Ⅱ	13	3	4	14	6	14	1	4	3	10	1	85	8		6	172
Ⅲ	8	2	3	4	1	18	1	6	5	8	1	17	5		3	82
Ⅳ	114	8	12		3	35		7	9	10	2	4	1			205
Ⅴ	8	1														9
不明										1						1
合計	147	15	22	33	23	76	2	20	20	33	6	225	25	1	10	658
器種別計	147	15	78			98			53		256			11		

(1) グスク土器

今回の調査でグスク時代の土器が147点得られた。大半が小破片で、全形を窺えるものは出土していない。第35表に出土量、第104図に平面分布を示し、グスク土器との関連から平面分布にはグスク時代初頭に代表される土器の他にカムイヤキ、白磁（玉縁碗・口禿碗）、青磁（鎬連弁文碗）も併せて載せている。グスク土器はⅣ層（青灰色シルト層、青灰色粘質土層、灰色シルト層、黒色粘質土層）から114点と最も多く出土した。中でも、HB②口地区・HB①地区010～014以下の西側部分における土器出土数はグリッドがまたがるものも合わせると89点が出土している。なお、Ⅳ層からは貝塚時代後期に属する遺物も出土する。他にもHB①地区の北側（J16・K18・L17）から4点得られた。

また、滑石を混入する土器は11点得られたが、グスク土器全体に占める割合は約7.5%と少ない。滑石の混入量もそれぞれ異なり、中には滑石を塗布するものも見られたが、小破片のため図示は省略した。本遺跡では滑石製石鍋自体は出土せず、これらの土器が製作されていたのか、持ち込みな

のか判然としない。ただ、近接する小堀原遺跡（2012）・後兼久原遺跡（2003）からは滑石製石鍋や滑石二次製品等が多数出土し、掘立柱建物址なども検出されている。また、後者の遺跡では滑石製石鍋を模倣したグスク土器なども出土し、グスク時代初頭の様子を窺わせる遺物と遺構が検出されている。以下、第103図、図版66に主なものを図示し、第36表に観察一覧を載せた。口縁部、胴部、底部と部位別に記述する。

1) 口縁部

口縁部は14点が出土し、鍋形、甕形、壺形が見られた。その順で概略する。

鍋形は10点の出土で、そのうち7点を図示した。いずれも内傾し、滑石製石鍋を模倣した瘤状突起、鏝状、瘤状突起や鏝縁が見られないものが出土した。瘤状突起を有するものは図1～4に図示した4点である。図1～3は方形の縦耳が若干変化し、平面形がやや縦長で略方形状を呈する。図1・2の上面はほぼ平垣に整形され、図3は両側のナデにより三角状を呈する。図4は縦耳が崩れ、円形状の瘤を貼付し、胎土に角閃石を含んでいるが、貝塚時代後期の影響であろうか。鏝状口縁は図5・6に図示した2点で、前者は口唇部が丸みを呈し、鏝縁の先端は破損している。後者は鏝縁の部分のみが残り、約4mmの厚さを呈するが、器面に貼付されている部分は約12mmを測る。瘤状突起や鏝縁が見られない口縁部は4点が出土し、図7の1点を図示した。口唇部は丸みを呈し、泥質で石灰質の白色粒を多量に含むもので、報告外の口縁部も同様な混和材を呈する。

甕形は図8～10に図示した3点の出土で、いずれも小破片で器厚は薄い。胎土は鍋形と同じく泥質で白色粒を主体に少量の赤色粒を含む。

壺形は図11に図示した1点のみの出土である。口唇部は破損し、肩部は外側へ大きく張るもので、胎土に赤色粒を含む。

2) 胴部

胴部は125点が得られたが、大半が小破片のため図示は省略した。Ⅱ・Ⅲ層の遺構からも18点が出土しているが、攪乱によるものと思われる。胴部は胎土に白色粒を含むものがほとんどで、本遺跡のグスク土器の主体となる胎土である。

3) 底部

底部は8点が得られ、そのうち6点を図示した。鍋形の底部と思われるものが2点、他は不明である。鍋形の底部としたものは図12・13で、両者とも底径が約12～13cmと広底を呈し、前者は底面からの立ち上がり丸みを帯びながら緩やかに胴部に移行するが、立ち上がりが左右で若干異なる。胎土はそれぞれ異なり、前者は多量の白色粒（微小貝を含む）、後者は多量の滑石を混入しているために手触りは滑らかである。後者の外底には明瞭な調整痕が見られ内底には煤が付着している。図14～17に図示したものは器種不明である。図14はやや角を持ちながら緩やかに外反し、底径が約11cm、底厚が16mmと厚い。図15・16は底面が破損しているが、胎土や底厚などが図14に類似する。図17

第35表 グスク土器出土量

地区	層位	遺構	部位 器種			口縁部		胴部		底部		合計	
			鍋	甕	壺	鍋	甕	壺	不明	鍋	不明		
HB①	I			1			1					2	
	II	008SZ						1					1
		240SZ						2					2
		274SZ						1					1
		305SD						1					1
		358SK						7					7
	359SK						1					1	
III	271SD						1				1		
IV		2	1	1	52	1	3				60		
V		2			3	1	1				7		
	小計		4	2	1	70	2	4				83	
HB②	イ	I		1			1					2	
	ロ	III	2049SD					3				3	
		IV		3	1		32		1			37	
		小計		4	1		40		1			46	
HB④	イ	IV		1			15			1		17	
	ロ	V		1								1	
		小計		2			15			1		18	
合計			10	3	1	125	2	6				147	
部位別計				14		125		8					

は上記3点より底径が小さく、立ち上がりは角を持って外反する。4点とも泥質で白色粒を含む。

尚、胎土等から先島系と思われる胴部がHBイ地区I層より1点得られたが、図示は省略した。

<引用・参考文献>

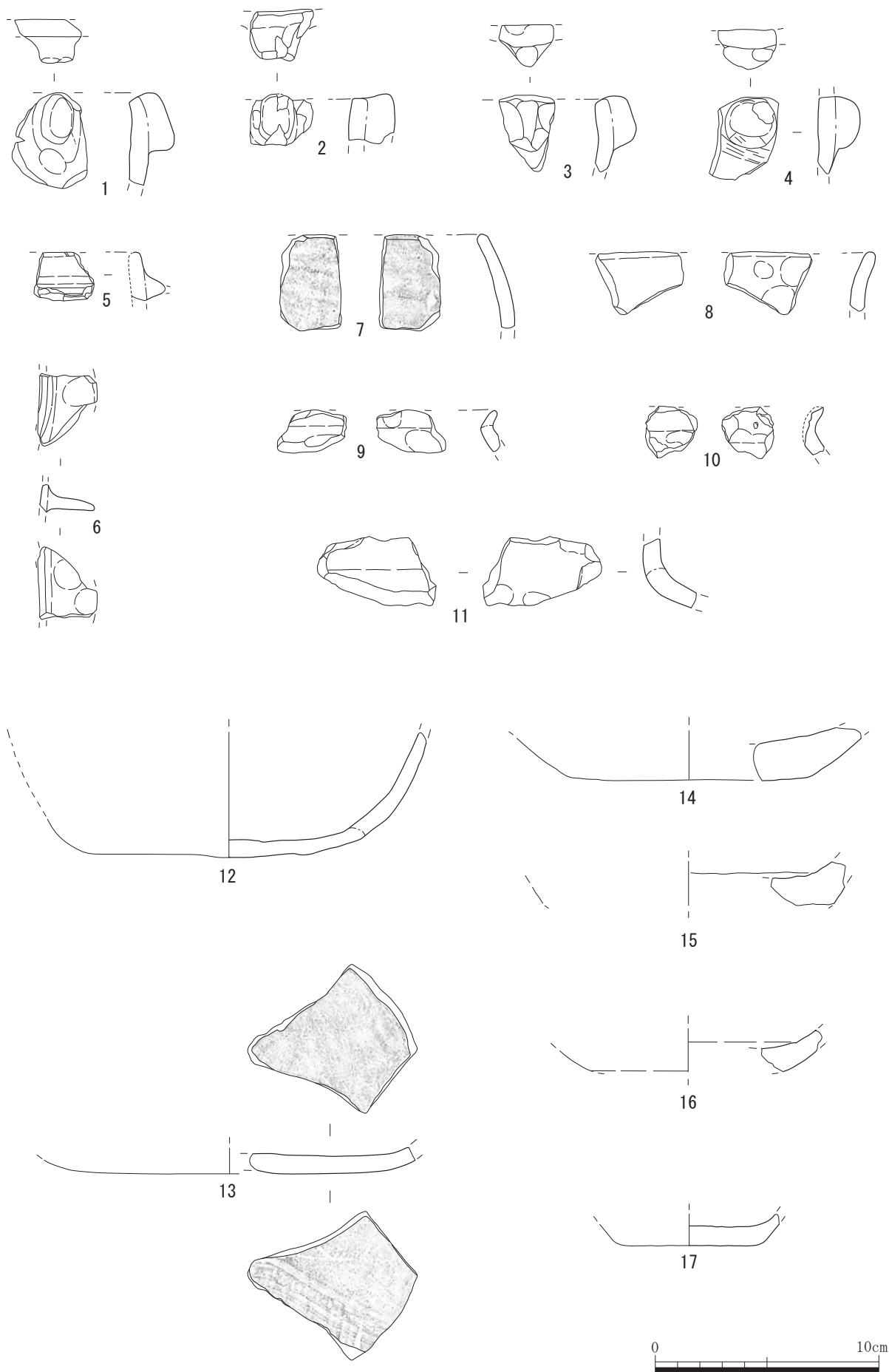
沖縄県教育委員会 1979 『恩納村熱田貝塚発掘調査報告書』 沖縄県文化財調査報告書第23集
 安里進 1995 「沖縄」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
 北谷町教育委員会 2003 『後兼久原遺跡』 北谷町文化財調査報告書第21集
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2004 『後兼久原遺跡』 沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書第22集
 池田榮史 2004 「グスク時代開始期の土器編年をめぐって」『琉球大学考古学研究集録』第5号 琉球大学法文学部考古学研究室
 今帰仁村教育委員会 2009 『企画展 グスク土器展』
 北谷町教育委員会 2012 『小堀原遺跡』 北谷町文化財調査報告書第34集

第36表 グスク土器観察一覧

(質量単位:cm, g)

第図 図版	図 番号	部 位	器 種	口縁・底部形態と 文様有無	口径 底径 器高	器厚 底厚 重量	混和材					胎土 焼成	器色 〔外面 内面〕	器面調整 〔外面 内面〕	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取上)番号
							粒度 含良	石英	赤色 粒	白色 粒	砂粒 その他				
第 103 図 ・ 図 版 66	1	口 縁 部 (頭 部 含 む)	鍋 形	瘤状突起-平面形は略方形・断面 形は平ら(中央は窪み)・やや内傾 口唇部-角	-	0.7 - 18.9	細粒 中量	○	△		△	砂質 良好	外:赤褐色 内:赤褐色	ナデ'	HB① M19`O20 IV (3層青灰色粘質土) 台496
	2			瘤状突起-平面形は略方形・断面 形は平ら・やや内傾・口唇部-角	-	0.8 - 13.5	細粒 少量		△		黑色 粒△	砂泥 質 良好	外:茶赤色 内:茶赤色	ナデ'	HB②イ I (表土) 台3082
	3			瘤状突起-平面形は略方形・断面 形はやや丸み・やや内傾・瘤の両側 に指頭痕・口唇部-角	-	0.6 - 10.0	中粒 中量	○			△	砂質 良好	外:黄茶褐色 内:黄茶褐色	ナデ'	HB① O20 IV (3層青灰色シルト) 台506
	4			瘤状突起-平面形は円形 断面形は丸み 口唇部-破損	-	0.5 - 12.9	細粒 少量		△		角閃 石○	砂質 良好	外:灰茶色 内:灰茶色	ナデ'	HB① K18 V (3層暗褐色シルト) 台233
	5			鏝状(鏝の幅は破損で不明) 口唇部-丸	-	- 5.3	細粒 少量		△	△		砂質 良好	外:橙茶褐色 内:橙茶褐色	ナデ'	HB① K12`16 V (3層暗褐色シルト) 台226
	6			鏝状(鏝の幅は約2cm・厚さは4mm) 口唇部-不明	-	0.3 - 6.7	細粒 少量		△		△	砂泥 質 良好	外:茶赤色 内:茶赤色	ナデ'	HB④イ L1 IV (VIII) 台71
	7			無文・やや内彎状 口唇部-丸	-	0.5 - 10.6	粗粒 中量			○		泥質 良好	外:灰褐色 内:灰褐色	ナデ'	HB②ロ Q13 IV (グスク層黒粘質土) 台3356
	8	甕 形	やや外反・口唇部-丸 瘤状突起・鏝状-無し	-	0.6 - 7.1	中粒 多量		△	○		泥質 良好	外:灰茶褐色 内:灰茶褐色	ナデ'	HB②ロ R12 IV (グスク層黒粘質土) 台3364	
	9		外反・薄手 口唇部-丸	-	0.5 - 2.7	細粒 少量			△		砂質 良好	外:橙褐色 内:橙褐色	ナデ'	HB① 表土 台494	
	10		外反・肩部が張り出す 薄手 口唇部-丸	-	0.5 - 2.6	中粒 多量		△	○		泥質 良好	外:赤褐色 内:橙褐色	ナデ'	HB① P19 IV (3層青灰色粘質土) 台472	
	11	壺 形	口縁破損・肩部が張り出す やや厚手	-	0.7 - 18.8	中粒 中量		○		滑石 △	砂質 良好	外:桃褐色 内:灰褐色	ナデ'	HB① N15 IV (3層青灰色粘質土) 台511	
	12	鍋 形	立ち上がりの角-丸・底面は平ら 底径は大	-	0.5 12 - 192.8	細粒 多量		△	◎		砂質 良好	外:橙茶色 内:橙茶色	ナデ'	HB① O20 IV (3層青灰色シルト) 台506 (3層青灰色粘質土) 台 433	
	13		立ち上がりの角-丸 胎土に滑石混入・内底-煤付着	13.2 - -	- 0.9 - 39.8	粗粒 多量		○		滑石 ◎	砂泥 質 良好	外:灰桃色 内:暗灰色	ナデ'丁寧 外底-ヘラ ナデ'明瞭	HB① J16 V (3層暗褐色シルト) 台231	
	14	底 部	不 明	立ち上がりの角-やや角 底径は中・底厚-厚い	-	0.9 1.6 - 50.6	中粒 中量		△	○		泥質 良好	外:灰褐色 内:灰褐色	ナデ'削り	HB① P17 IV (3層青灰色粘質土) 台424
	15			立ち上がりの角-不明 底径不明(外底破損)	-	- - 18.1	中粒 中量		△	○		泥質 良好	外:赤褐色 内:赤褐色	ナデ'	HB① N16 IV (3層青灰色シルト) 台512
	16			立ち上がりの角-やや角 底径不明(外底破損)	-	0.6 - 14.1	中粒 中量		△	○		泥質 良好	外:灰褐色 内:灰褐色	ナデ'(内-丁 寧)	HB④イ M3 IV (V) 台37
	17			立ち上がりの角-やや角 底径は小・底厚-薄い	-	0.4 0.8 - 14.8	中粒 少量		△	○		泥質 良好	外:灰茶褐色 内:灰茶褐色	ナデ'(内-丁 寧)	HB②ロ Q13 IV (グスク層黒粘質土) 台3356

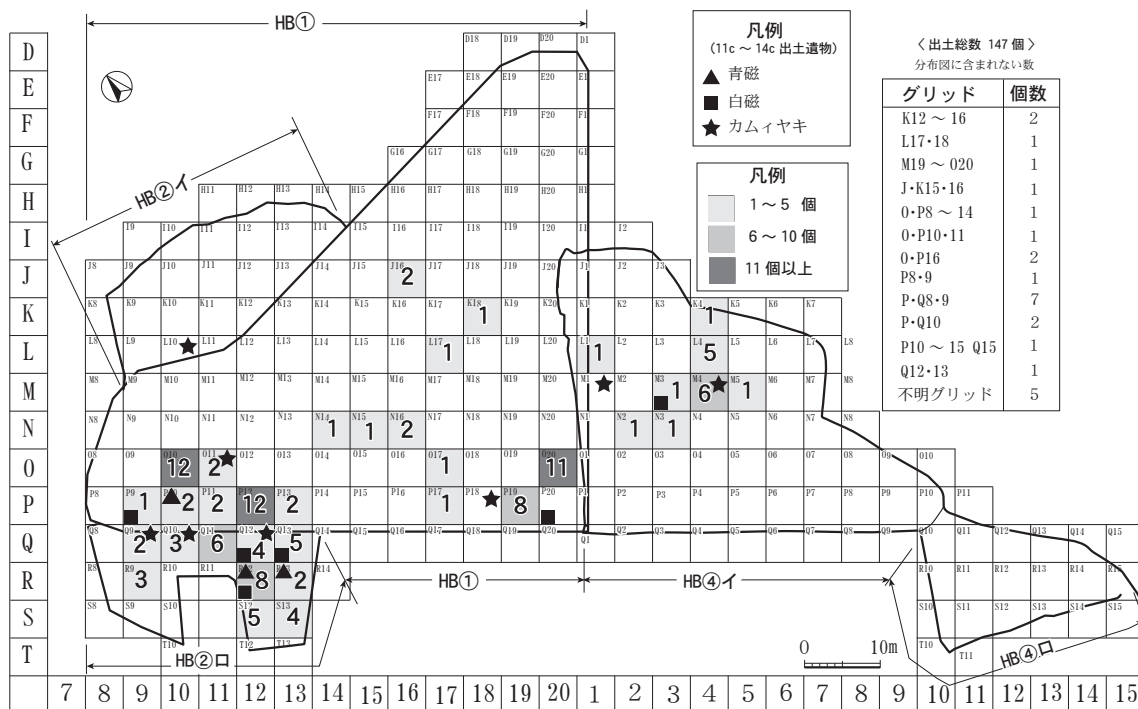
凡例 (◎=非常に多い ○=多い △=少ない △=僅少)



第103図 グスク土器



図版 66 グスク土器



第 104 図 グスク土器と関連遺物の出土平面分布

(2) カムイヤキ

カムイヤキ(類須恵器)が僅かながら 15 点出土した。器種はいずれも壺に含まれると考えられるが、資料の殆どは胴部片であり全形を窺うにはあまりにも頼りない物であった。出土層はⅣ層が 9 点、Ⅲ層が 2 点、Ⅱ層が 3 点、Ⅰ層 1 点である。出土分布は 0~Q9~12 にやや集中し、流路中に分布している。

カムイヤキの標識となるカムイヤキ古窯跡群の甕、壺は口縁部形態による型式分類、文様の変遷と共に叩痕、ナデ、ケズリなどの器面調整による変遷を時期判定の指標とし、A・B群に分かれ分類がなされている。註今回当該製品の口縁部資料は得られず、底部資料 1 点を除き全て胴部資料であったことから主に叩痕、当て具の圧痕、器厚などの器面調整を分類の判断基準とした。

I 類：外体面に平行状叩痕、内体面にナデ及びへら削り調整が認められる。器厚 5 ~ 10mm (図 1・2)

II 類：外体面に平行状叩痕、内体面に格子状圧痕が認められる。器厚 4 ~ 7 mm (図 3)

III 類：外体面に格子状叩痕、内体面に放射状圧痕が認められる。器厚 4 ~ 8 mm (図 4 ~ 7)

IV 類：外体面はナデ調整が徹底され、内体面に放射状圧痕が認められる。器厚 5 ~ 9 mm (図 9 ~ 11)

V 類：外体面と内体面をナデ調整される。器厚 5 ~ 10mm (図 12 ~ 14)

VI 類：外体面と内体面をナデ調整され外体面に文様が描かれる。器厚 4 ~ 9 mm (図 8)

平行叩痕と格子叩痕及び圧痕は器の外表面、内表面の両面に認められるが特に外表面は多く確認できる I 類・II 類。放射状痕は内表面のみに確認できた。ナデ調整は外表面に意識的に用い、内表面は徹底されない III 類。特に肩から頸部、口縁部にかけてと底部及び底部付近の外表面はナデ調整が施されることが解る V 類・VI 類。また轆轤、へらによる器面調整は内表面に顕著にあらわれる。文様及び器面調整(叩打痕、ナデ)器厚が比較的均一で薄いことから I 類から III 類は A 群に含まれる可能性が高いと考えられる。IV 類から VI 類は B 群に含まれる可能性が高いが、頸部から肩部の施文部位

にナデ調整が多いことを考慮すると一部A群を含むB群と考えられる。また器面調整及び器厚は4～9mmと白磁玉縁碗の出土が顕著である後兼久原遺跡とほぼ同等であることや僅かではあるがグスク土器や中国製白磁口禿碗、中国製白磁玉縁碗と共伴関係にあり11世紀～13世紀に位置づけていいと考えられる。(第104図グスク土器と関連遺物の出土平面分布、参照)

第37表 カムイヤキ出土量

地区	分類 層位 遺構		壺						合計	
			胴部							底部
			I類	II類	III類	IV類	V類	VI類		
HB①	II	358SK	1		1				1	2
		275SL			1					1
	IV		1			2				3
								1		
HB②	イ	I			1					1
		III			1					1
HB④	イ	IV			1	1	1	1	1	3
		IV		1						1
合計			2	1	4	3	3	1	1	15

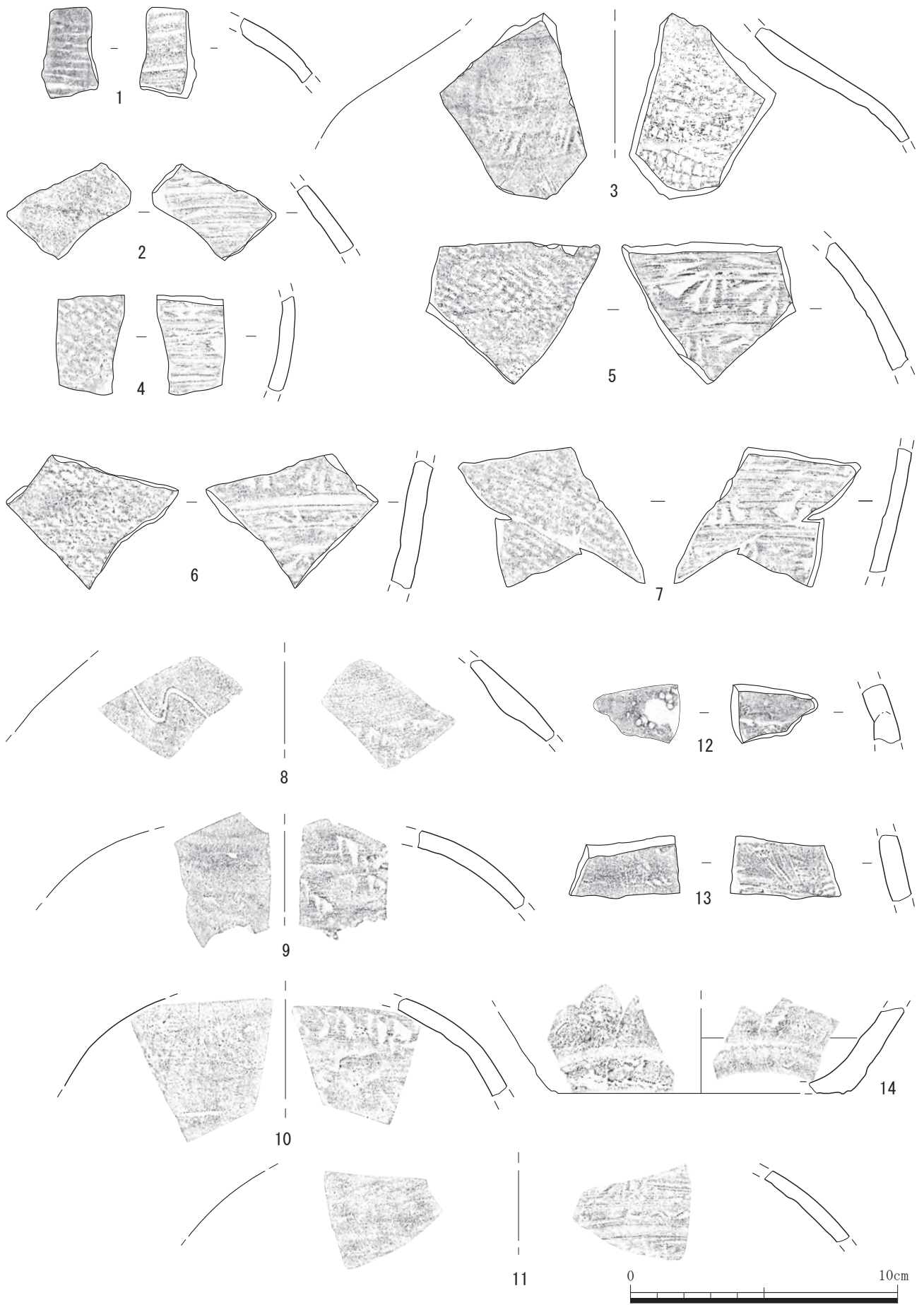
<註・参考文献>

- 註 新里亮人 2007 「カムイヤキとカムイヤキ古窯跡群」特集古代・中世の日本と奄美・沖縄諸島『東アジアの古代文化』130号
- 池田榮史 2004 「類須恵器と貝塚時代後期」『考古資料大観 12 貝塚後期文化』 小学館
- 新里亮人 2003 「琉球列島における窯業生産の成立と発展」『考古学研究』49-1 考古学研究会
- 北谷町教育委員会 2003 『後兼久原遺跡』北谷町文化材調査報告書 第21集

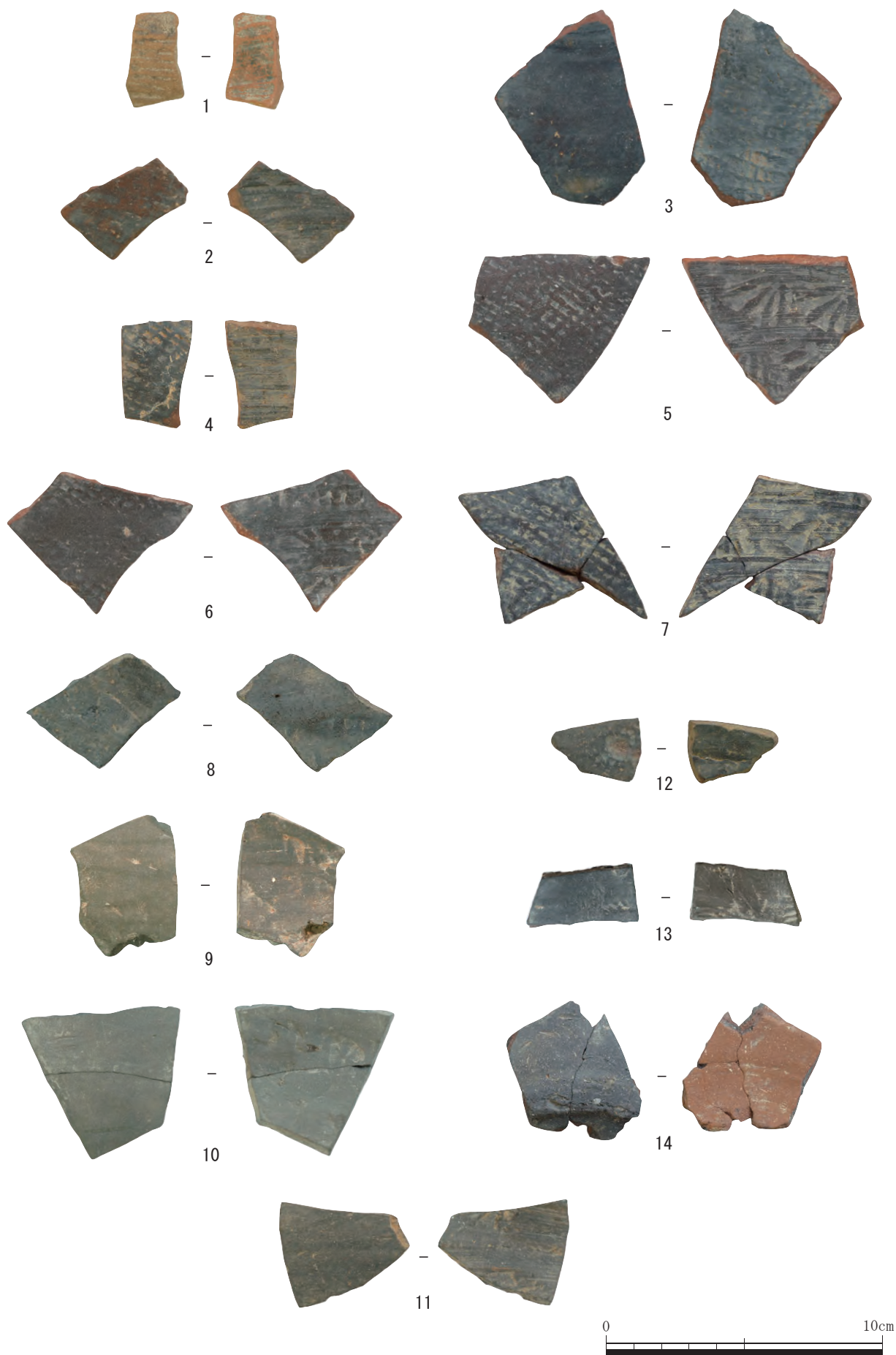
第38表 カムイヤキ観察一覧

(法量単位:mm)

第図 図版	図 番号	器 種	部 位	分 類	器厚	器形・文様	器面調整	胎土・焼成・混和材	器色	地区・グリッド・層位 遺構・台帳番号
第105 図・ 図版 67	1	壺	胴部	I	5~10	肩と考えられるが小破片のため詳細は不明。	表:平行する叩き目がみられる連点文状 裏:轆轤による平行削りがみられる	胎土:細かい 焼成:やや不良 混和材:白色粒子	表-黄茶色 裏-橙色	HB① II 台488
	2				8	肩近くと考えられるが小破片のため詳細は不明。	表:ナデ消されているが僅かに平行する叩き目が認められる。連点文状 裏:轆轤による平行削りがみられる	胎土:細かい 焼成:良い 混和材:白色粒子	表-暗灰色 裏-暗色 サント-茶褐色	HB① L10 IV 台338
	3			II	4~7	肩の張った壺である。	表:平行する叩き目が認められる。 裏:格子状の叩き目が認められる。	胎土:細かい 焼成:良い 混和材:白色粒子	表-暗青色 裏-淡青色 サント-茶褐色	HB④イ M4 IV 台149
	4			III	4	壺が考えられるが小破片のため詳細は不明。	表:格子状の叩き目が認められる。 裏:放射線状の叩き目を轆轤により削り取っている。	胎土:細かい 焼成:良い 混和材:白色粒子	表-暗灰色 裏-暗灰色 サント-茶褐色	HB②イ III 台3085
	5				7	壺が考えられるが小破片のため詳細は不明。	表:格子状の叩き目が認められる。 裏:放射線状の叩き目を轆轤により削り取っている。	胎土:細かい 焼成:良い 混和材:白色粒子	表-暗灰色 裏-暗灰色 サント-茶褐色	HB②ロ Q12 IV 取2044
	6				8	壺が考えられるが小破片のため詳細は不明。	表:格子状の叩き目が認められる。 裏:放射線状の叩き目を轆轤により削り取っている。	胎土:細かい 焼成:良い 混和材:白色粒子	表-暗灰色 裏-茶褐色 サント-茶褐色	HB① N~Q13. N・O13 III 275SL 台352
	7				5	壺が考えられるが小破片のため詳細は不明。	表:格子状の叩き目が認められる。 裏:放射線状の叩き目を轆轤により削り取っている。	胎土:細かい 焼成:良い 混和材:白色粒子	表-暗青色 裏-暗青色 サント-茶褐色	HB① P・Q8.9 II 358SK 台484
	8			VI	4~9	頸下部外体面に一条の波状文	表:轆轤ナデ 裏:轆轤ナデ	胎土:細かい 焼成:良い 混和材:白色粒子	表-暗青色 裏-暗青色 サント-茶褐色	HB④イ M1 IV 台141
	9			IV	6	肩が丸い	表:轆轤ナデ 裏:放射線状の叩き目を轆轤により削り取っている。	胎土:細かい 焼成:良い 混和材:白色粒子	表-明灰色 裏-明灰色	HB②ロ Q10 IV 台3347
	10				5~6	肩が丸い	表:轆轤ナデ 裏:放射線状の叩き目を轆轤により削り取っている。	胎土:細かい 焼成:良い 混和材:白色粒子	表-明灰色 裏-明灰色	HB① O11 IV 台478
	11				5	肩が張る	表:轆轤ナデ 裏:放射線状の叩き目を轆轤により削り取っている。	胎土:細かい 焼成:大変良い 混和材:白色粒子	表-明灰色 裏-明灰色	HB① P18 IV 台500
	12			V	9	壺が考えられるが小破片のため詳細は不明。	表:轆轤ナデ 裏:轆轤ナデで積み痕が顕著である。	胎土:細かい 焼成:良い 混和材:白色粒子	表-明灰色 裏-明灰色	HB②イ I 台3083
	13				8	壺が考えられるが小破片のため詳細は不明。	表:轆轤ナデ叩 裏:轆轤ナデ叩	胎土:細かい 焼成:良い 混和材:白色粒子	表-暗灰色 裏-暗灰色	HB②ロ Q9 IV 台3337
	14			底部	V	5~10	平坦な底面、底面に台の跡が残る。	表:方形状の叩痕がみられる。 裏:轆轤ナデ 底径:11.2cm	胎土:細かい 焼成:良い 混和材:白色粒子	表-暗灰色 裏-暗赤色 サント-茶褐色



第105図 カムイヤキ



図版 67 カムイヤキ

(3) 白磁

本遺跡出土の白磁は総数 78 点、確認できる器種は碗 42 点、皿 9 点、杯 21 点、瓶 1 点の 4 種であった。出土地別の分布は HB①②地区 0～Q8～16 グリッドに集中する傾向にあり、層位別では I、II 層に集中している。全体的に出土点数が少なくその中で比較的多いのが碗である。碗は 12 世紀から 13 世紀代の玉縁口縁碗から型成形の碗である近世資料まで含み生産地、生産年代に幅広い様相を持つ。分類は器形、成形方法、施釉範囲、釉調、胎土により行い編年は森田勉 (1982) ^{註1} に準拠するものである。以下に器種別に分類概念を記し、詳細を第 39 表観察一覧において述べる。

碗 (第 108 図 1～19)

総数 42 点の出土であった。口縁は形態により I 類：玉縁口縁、II 類：口禿口縁、III 類：内彎口縁、IV 類：外反口縁、V 類：直口口縁、VI 類：型成形の 6 種に分類、V 類は更にイ～ニの 4 つに細分できる。底部は高台形と施釉範囲、施釉方法で 3 種に分類、加えて内底面見込みの文様を A：有、B：無に細分した。

I 類：玉縁口縁

口縁を玉縁状に肥厚させ、底部は高台の浅いものである。器肉厚い。HB①地区 IV 層で 1 点出土。福建系、12 世紀～13 世紀に位置づけられる。(図 1)

II 類：口禿口縁

腰部に丸味を持ち口縁まで直線的に開く、口縁は端反を成し、口唇と裏面先端から約 6 mm 露胎させている。HB②地区 IV 層で 1 点出土。生産地：福建系、生産年代：13 世紀～14 世紀前半に位置づけられる(図 2)

III 類：内彎口縁

全体的に器肉の厚い碗である。腰、胴部は弱い丸味を保ちながら開き口縁に至る。口唇は丸く、先端で内に寄る。底部は内底全面釉、外底腰下部まで露胎。釉は厚め。高台の削りが浅く器肉は厚い。内底面見込みに印花を施文するものと無文がある。HB①、HB②地区 IV 層で各 1 点出土。福建系、14 世紀～15 世紀に位置づけられる。(図 5) (ピロースク II タイプ・閩清義窯) ^{註2}

IV 類：外反口縁

腰に張りがあり口縁部まで丸味を持ち立ち上がる。口縁部で一旦内に寄せ一気に外反させる。口唇は丸いものとやや細くなるものとある。底部は内底全面釉、外底腰下部まで露胎。釉は厚め。高台の削りは浅く器肉が厚い。内底面見込みに印花を施文するものと無文がある。全体的に器壁の厚い碗である。(森田分類 C 群タイプ) 14 世紀頃に位置づけられる。(図 6)

V 類：直口口縁

イ-口縁部は腰部から直線的に開く浅い碗である。口唇は僅かに肥厚し先端は水平に切り平坦に整える。断面形は四角状である。福建系、13 世紀～14 世紀に位置づけられる。(図 3) (今帰仁タイプ・甫口窯)

ロ-逆「八」字状に大きく開き立ちあがる直口の平碗である。口唇は尖り外体面に轆轤痕を留める。HB①地区 358SK II 層の出土。福建系、13 世紀～14 世紀に位置づけられる。(図 4)

ハ-逆「八」字状に開き立ちあがる直口の碗である。口唇は舌状を成す。HB①地区 I 層 2 点、HB②地区 II・III 層で 2 点出土。(図 15～17)

ニ-腰部から直線的に開き立ちあがる直口の碗である。口縁の断面形態はバチ状をなし口唇先端は平坦になる。器面に轆轤痕が顕著である。同様の形態が青磁にもみられる。HB①地区 I 層で 2 点出土した。福建・広東系、16 世紀～17 世紀に位置づけられる。(図 18)

Ⅵ類：型成形

口縁は先端で外反させ口唇は尖る型成形の碗である。HB①地区Ⅲ層で1点出土。徳化窯、17世紀～18世紀に位置づけられる。(図19)

・碗底部

1類：底部 高台は低めの幅広の外割り、断面形は逆台形を呈する。見込みは蓮通心形で畳み付けを含め外底は露胎。口折碗の可能性ある。HB④イ地区Ⅳ層出土。13世紀～14世紀代に位置づけられる。(図11)

2類：底部 高台幅が広く断面形は四角形を呈する。畳み付けを含め外底は露胎。A：内底面見込みに印花文を施すもの(図12)と、B：無文(図13)がある。高台の割りは浅く器肉が厚い。HB①地区Ⅳ層でそれぞれ1点出土。13世紀～15世紀に位置づけられる。

3類：底部 高台外面を斜位に削り出し断面形は三角形を呈する。内底と腰下部から畳み付けを含め外底は露胎。見込みに「得」の字款を施文する。比較的浅い碗である。2類に比して器肉は薄い。HB②ロ地区Ⅰ層で1点、Ⅳ層で1点出土。15世紀～16世紀に位置づけられる。(図14)

Ⅲ (第108図20～24)

出土総数は9点で全てが破片資料である。部位の内訳は口縁部4点、胴部2点、底部3点である。成形方法で**I類：轆轤成形**(図20～23)と**Ⅱ類：型成形**(図24)に大別できる。口縁はa：直口とb：外反の口縁が得られている。図20は腰部から口縁部まで直線的に開きながら立ち上がる直口の浅皿である。胴部から口縁までほぼ均一な器厚を示す。口唇は舌状を成す。図24は腰部から丸味を持ちつつ開き立ち上がる口縁で外反させ口唇は丸く収める。型成形で無文である。I類はHB①地区Ⅰ、Ⅱ層でそれぞれ1点、Ⅱ類はHB①地区Ⅰ層で1点、HB②ロ地区Ⅱ層で1点の出土。徳化窯、17世紀～18世紀に位置づけられる。

底部は3点得られた。図21は外底外面削りだしが浅く高台内の割りは外向き兜巾状に中央が尖る。高台の断面形は逆台形状を呈する。内底と腰下部は露胎している。図22は低めの高台を持ち内底見込みは広めで扁平。高台の断面形は逆台形状を呈し外底器肉は厚い。外底は畳み付けを含め露胎している。図23は碁笥底で内割りである。外体面と内底面見込みに線彫の草花文を施文するものである。

杯 (第108図25～31)

口縁から底部まで残す資料が1点、口縁部7点、胴部5点、底部8点の総数21点である。成形方法により**I類：轆轤成形**と**Ⅱ類：型成形**に大別し、口縁はa：直口とb：外反に細分した。多くが徳化窯系の型成形の杯であった。

I類：轆轤成形 腰部に丸味を持ち外体面は轆轤痕が顕著である。腰下部から底部を露胎させ、高台は割りが比較的浅く断面形は四角状を呈する。胴部1点、底部1点の出土で、明代に位置づけられる。(図25・26)

Ⅱ類：型成形 口径10cm前後のものから5cm大のものがみられる。いずれも腰部に丸味や張を持ち、口縁まで直線的に立ち上がる。口縁はb：外反し口唇は尖る。底部は高台形が断面形三角状を成す。口唇と畳付を露胎させている。(図27～31)口～底部1点、口縁部7点、胴部4点、底部7点の出土である。生産地：徳化窯、生産年代：17世紀～18世紀に位置づけられる。

<註文献>

註1 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶器研究』N02日本貿易陶磁研究会

註2 金武正紀 2014 「陶磁器が語る琉球の海外交易史」『第35回日本貿易陶磁研究会(沖縄大会)発表要旨・資料集 琉球列島の貿易陶器』日本貿易陶磁研究会

第39表 白磁観察一覧

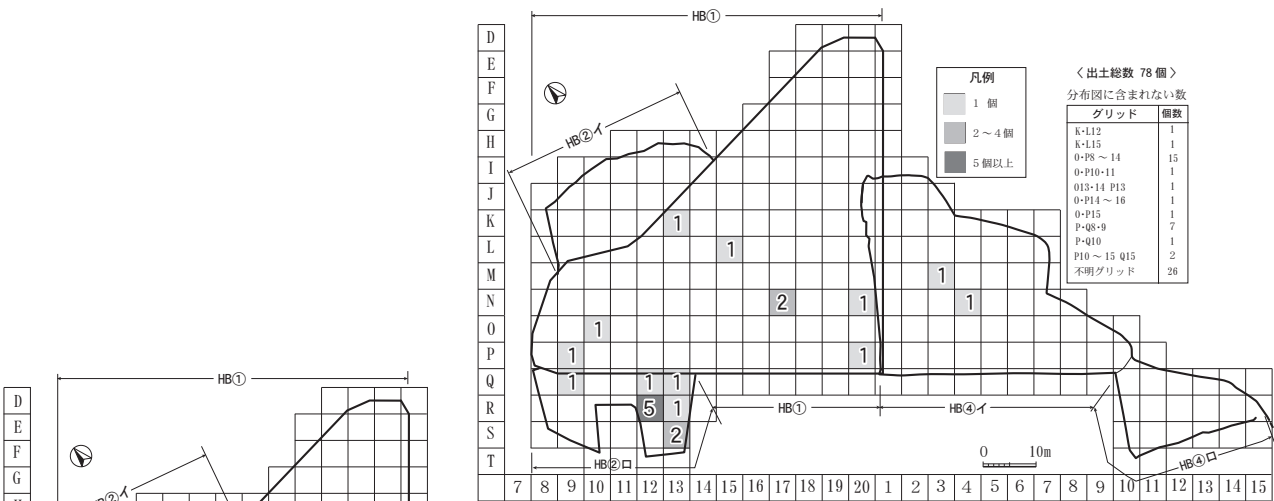
(質量単位: cm, g)

第108図・図版68	図番号	器種	部位	口径 底径 器高	重量	分類	器形・文様構成・器面調整	色・範囲・貫入	素地 (色・混和材・質)	生産年代 生産地 (その他)	地区・グリップ・層位 遺構・台帳(取上) 番号
第108図・図版68	1	碗	口縁部	18.2 — —	9.37	I類	ラップ状に外側に開き立ち上がる。口縁は断面形が三角形の肥厚を有する。	淡い灰白色失透釉	黒色微粒子を含む白色微粒子。	12c~13c 福建系	HB① P9 IV 台462
	2			16.4 — —	35.63	II類	口禿。腰部が僅かに張る。逆「八」の字状に開き立ち上がり。口縁は端部で反る。比較的轆轤痕を留める。	灰白色の失透釉を口唇を除き施釉。 貫入がみられる。	白色微粒子。 黒色微粒子を含む。 やや密である。	13c~14c前 福建系 (太IV・森A)	HB② Q12 IV 取2040・2043
	3			12.8 — —	4.7	V類イ	口縁部は腰部から直線的に開く浅い碗である。口唇は僅かに肥厚させ平坦に整える。断面形は四角状である。	灰白色釉	白色微粒子。	13c~14c 福建系(甬口窯) (今)	HB② Q II 台3327
	4			17.0 — —	29.6	V類ロ	碗。腰部にやや丸味を持ち外に開く。口縁は直口、口唇は尖る。轆轤痕を留める浅い。	淡い緑灰白色釉を腰部まで施釉。	灰白色の微粒子。 黒色微粒子を含む。	13c~14c頃 福建系	HB① P・Q8.9 II 358SK 台484
	5			16.4 — —	8.41	III類	逆「八」の字状に開く。口縁上端で僅かに内向する。轆轤痕を残す。	灰白色の釉をやや厚く施釉。	灰白色微粒子。微細な気泡を多く認める。	14c後~15c前 福建・広東系 (ビ・森C)	HB① O10 IV 台474
	6			16.8 — —	15.77	IV類	腰部に丸味を持ち開く、口縁で一旦内に寄り端部は外反する。口唇は丸い。	白色釉、貫入が見とめれる。	灰白色微粒子。気泡を僅かに認める。	14c頃 福建系 (森C)	HB② Q R12 III 台3341
	7	— — —	6.68	III類	腰部に丸味を持つ。	灰白色の釉を腰部まで施釉。	白色微粒子。 黒色微粒子、気泡が認められる。	14c後~15c前 福建・広東系 (ビ・森C)	HB② Q S13 IV 台3359		
	8	— — —	19.54	III類	腰部に丸味を持つ。	淡い灰白色釉	灰白色微粒子。微細な気泡を僅かに認める。	14c後~15c前 福建・広東系 (ビ・森C)	HB② Q S13 IV 台3359		
	9	— — —	9.55	III類	腰下部に高台を削り出した放射状痕が認められる。	灰白色釉	白色微粒子。 黒色微粒子や微細な気泡を認める。	14c後~15c前 福建・広東系 (ビ・森C)	HB① II 台485		
	10	— — —	7.01	III類	内底に圏線が認められる。	灰白色釉	白色微粒子。 黒色微粒子や微細な気泡を認める。	14c後~15c前 福建・広東系 (ビ・森C)	HB① O・P15 IV 台464		
	11	— — —	44.2	1類B	低い幅広高台で見込みは蓮通心形である。高台が内側から外に開く外削りを成す。口折碗の可能性ある。	淡い青灰白色釉、高台脇まで施釉。	白色微粒子。 黒色微粒子を含む。	13c~14c (太IV・森A)	HB④イ M3 IV 台145		
	12	— — —	5.6	2類A	幅広高台で断面形は四角形を成す。内底面に牡丹の印花文を施す。	灰白色釉、外底露胎貫入がみられる。	白色微粒子。 黒色微粒子や微細な気泡を認める。	14c後~15c前 福建・広東系 (ビ・森C)	HB① N20 IV 取8		
	13	— — —	5.8	2類B	幅広高台で断面形は四角形。玉縁口縁碗底部の可能性ある。	青味がかった灰白色釉。外底は露胎。	白色微粒子。黒色微粒子や微細な気泡を認める。	13c~14 福建系	HB① P20 IV 台581		
	14	— — —	5.4	3類A	高台の断面形が三角形を成す。直口口縁平碗底部？見込みは平坦で内底面に「得」の寺印花を施す。	底部無釉	黄白色微粒子。黒色微粒子や微細な気泡を僅かに認める。	15c後~16c前 (森D)	HB② Q I 台3327		
	15	— — —	13.5	V類ハ	腰部から直線的に外に開き口縁に至る碗である。口唇部は丸く整える。染付碗に同様な器形が見られる。直口口縁碗である。	淡い青灰白色釉、高台脇まで施釉。	白色微粒子。 黒色微粒子を含む。	17c代	HB② Q II 2002SZ 台3367		
	16	— — —	12.6	V類ハ	腰部から直線的に外に開き口縁に至る碗である。口唇部は丸く整える。染付碗に同様な器形が見られる。直口口縁碗である。	淡い青灰白色釉、高台脇まで施釉。	白色微粒子。 黒色微粒子を含む。	17c代	HB① O・P8~14 I 台239		
	17	— — —	10.4	V類ハ	直口口縁で口唇は尖がる。	淡い青灰白色釉。貫入がみられる。	灰白色の微粒子。 黒色微粒子を含む。	17c代	HB② Q R12 III 台3341		
	18	— — —	6.37	V類ニ	腰部から直線的に開きながら立つ口縁。口唇の断面形は先端が平坦な四角状。口縁直下に横位の陽線文を三条めぐらす。	淡い青緑白色、高台脇まで施釉。	黄白色の微粒子。黒色微粒子、白色微粒子を含む。	16c後~17c前 福建・広東系	HB① O・P8~14 I 台239		
	19	— — —	1.69	VI類	腰部から直線的に立ち上がる直口、型成形の小板である。口唇部に二次的な剥離痕がみられる。	白色釉	白色微粒子。	17c~18c 徳化窯	HB① P10~15.Q15 III 271SD 台491		
	20	— — —	10.6	I類a	腰部はやや丸味く口縁に向かい直線的に開く。口縁は直口、口唇はやや丸い。外体に轆轤痕を留める。	灰白色釉	灰白色の微粒子。 黒色微粒子を含む。	15c~16c 福建・広東系	HB① O13.14・P13 II 台487		
	21	— — —	4.7	I類	外側は浅めの削り出しで高台内削りは外向きで深い削り出し。無文高台は碁笥底に近い。	灰色の釉を高台際まで施釉。内底は露胎	灰色の微粒子。 微細な気泡、黒色微粒子を含む。	16c 福建系	HB② Q II 台3328		
	22	— — —	7.0	I類	高台際の外側から削り出し、断面形態が四角状。高台内の削りは外向き。内底に圏線。	緑灰色の釉を高台際まで施釉	黄白色の微粒子。 黒色微粒子を含む。	14c頃 窯不明	HB② Q Q13 IV 取2020		
	23	— — —	12.0	I類	碁笥底の大皿でやや内削りである。外面と見込みに線彫りの草花文。	淡緑灰色釉を高台脇まで施し、高台は露胎	白色の微粒子。 黒色微粒子を含む。	15c後~16c 景德鎮窯	HB④イ N4 IV 台137		
	24	— — —	12.0	II類b	やや丸味ある腰部から開き口縁に至る。口縁は外反し口唇は丸い。型成形成。	白色釉	白色の微粒子。 黒色微粒子を含む。	17c~18c 徳化窯	HB② Q IV 2002S Z台3367		
	25	— — —	3.6	I類	外底は高台の際から断面形態が四角状に削り、更に畳付け外側を斜めに削り出している。高台内削りは比較的浅い。	淡黄緑白色釉を腰部まで施釉。	白色の微粒子。 黒色微粒子を含む。	明代 窯不明	HB② Q II 台3327		
	26	— — —	7.0	I類	腰部が丸く、外面に轆轤痕を留める。	灰白色釉を腰部まで施釉	灰白色の微粒子。 黒色微粒子を含む。	15c~16c 福建・広東系	HB② Q Q9 IV 台3346		
	27	— — —	7.0	II類b	腰部が張り直線的に立ち上がる。口縁は先端から外反。口唇は尖る。	黄白色釉	白色微粒子。	17c~18c 徳化窯	HB① O・P8~14 I 台239		
	28	— — —	3.03	II類	腰部に丸味を持ち直に立ち上がる。	白色釉	灰白色の微粒子。 黒色微粒子を含む。	17c~18c 徳化窯	HB① O・P8~14 I 台239		
	29	— — —	3.8	II類	高台の断面形は三角形、畳付けに砂目が見られる。型成形成。	白色釉 全面施釉後畳付け釉剥ぎ	白色微粒子。	17c~18c 徳化窯	HB① K・L15 III 163SK 台609		
	30	— — —	3.0	II類	高台は断面形が三角形をなし畳付けの内側に砂目が認められる。	灰白色釉 全面施釉後畳付け釉剥ぎ	灰白色微粒子。	17c~18c 徳化窯	HB① O・P8~14 I 台239		
	31	— — —	4.8 2.0 2.8	II類b	丸味のある腰部からやや開きながら直線的に立ち上がる。口縁は先端で外反し口唇は尖る。型成形成。	白色釉 全面施釉後畳付け釉剥ぎ	白色微粒子。	17c~18c 徳化窯	HB① II 台356		

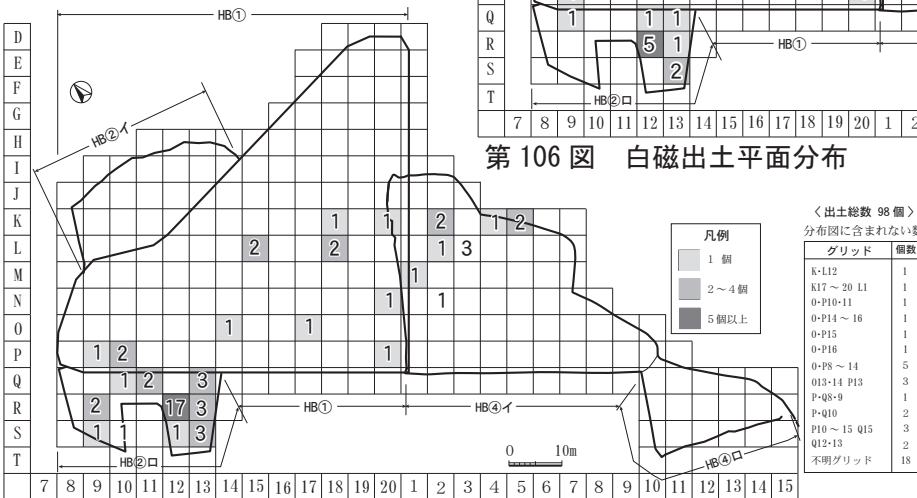
凡例: (仮称)太IV・森A(太宰府IV類・森分類A)ビ・森C(ピロースクII・森分類C)今(今帰仁タイプ)森D(森分類D)胴部・底部ピロースクは細分類不可「ビ」で表記

第40表 白磁出土量

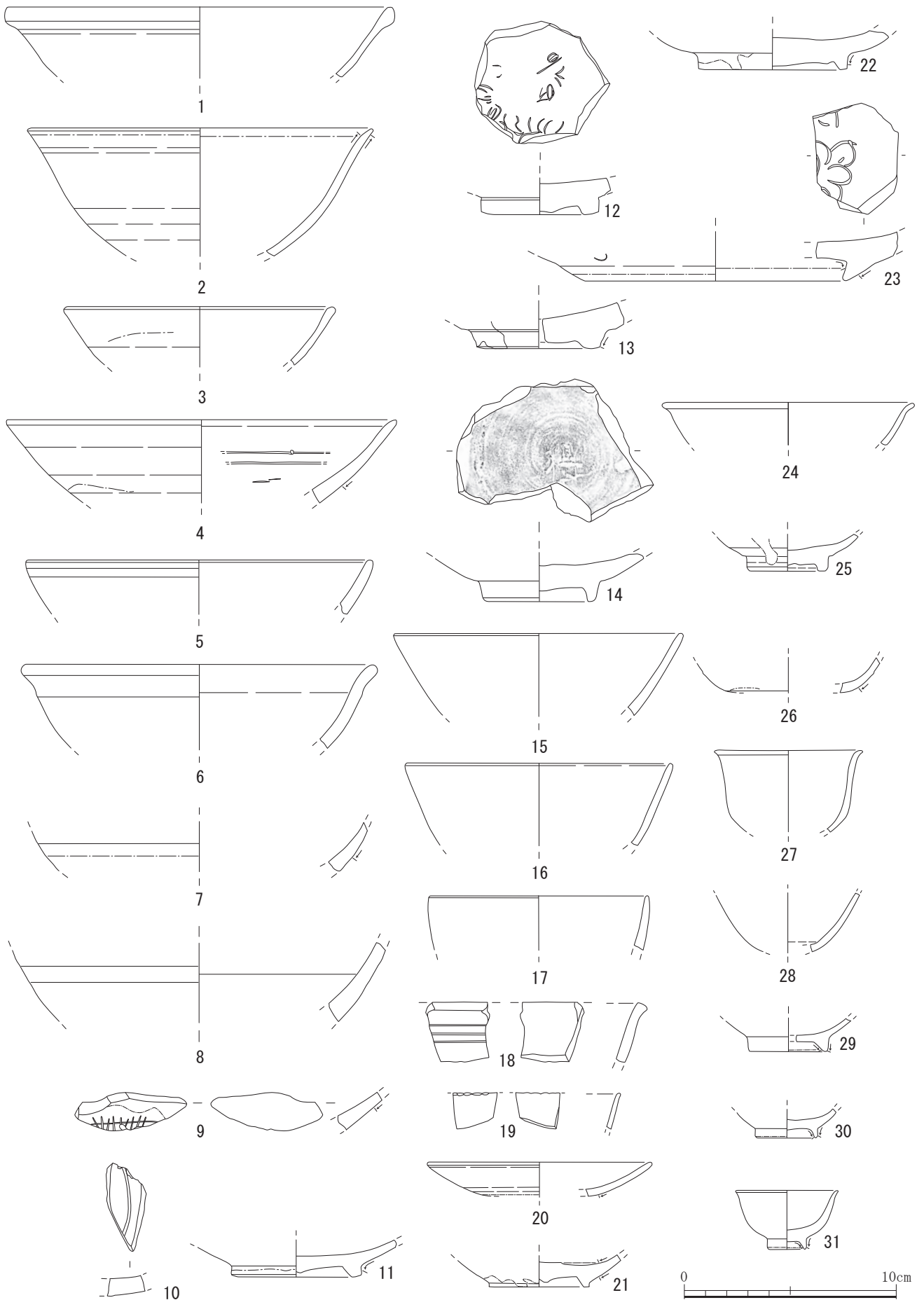
地区	層位	遺構	碗															皿			杯				瓶		器種不明	合計		
			口						胴		底			口	胴	底	口	口	胴	底	底	不明								
			I類	II類	III類	IV類	V類		VI類	不明	III類	分類不可	1類	2類	3類	不明	I類	II類	I類	I類	II類	II類	I類	II類	I類	II類			I類	II類
							イ	ロ	ハ	ニ			B	A	B	A	B	a	b	b		b	a	b						
HB①	I					2	2		1		6					1	1	1			1	2		2		4	1	3	27	
	II	1SK								1		1					1	1			1	1	1						6	
		62SK										1																		1
		83SZ																						1						1
		240SZ																												1
358SK					1					2										1								1		
359SK										1																		1		
III	149SK										1																		1	
	163SK								1		1																		1	
IV	271SD	1	1							1	1	1	1	1															2	
小計		1	1			1	2	2	1	1	3	12	1	1		1	2	1	1			1	3	3	4	7	1	5	55	
HB②口	I				1								1																4	
	II	2002SZ			1		1						1				1													3
	III	2049SD			1		1						2																	2
	IV			1	1						2				1							1								7
小計			1	1	2	1	2			2	3			1	1		1	1	2			1	1	1	1				21	
HB④イ	IV										1																		2	
小計											1																		2	
合計		1	1	2	2	1	1	4	2	1	1	5	15	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1	1	3	1	3	4	7	78
器種別計												42								9				21			1	5		



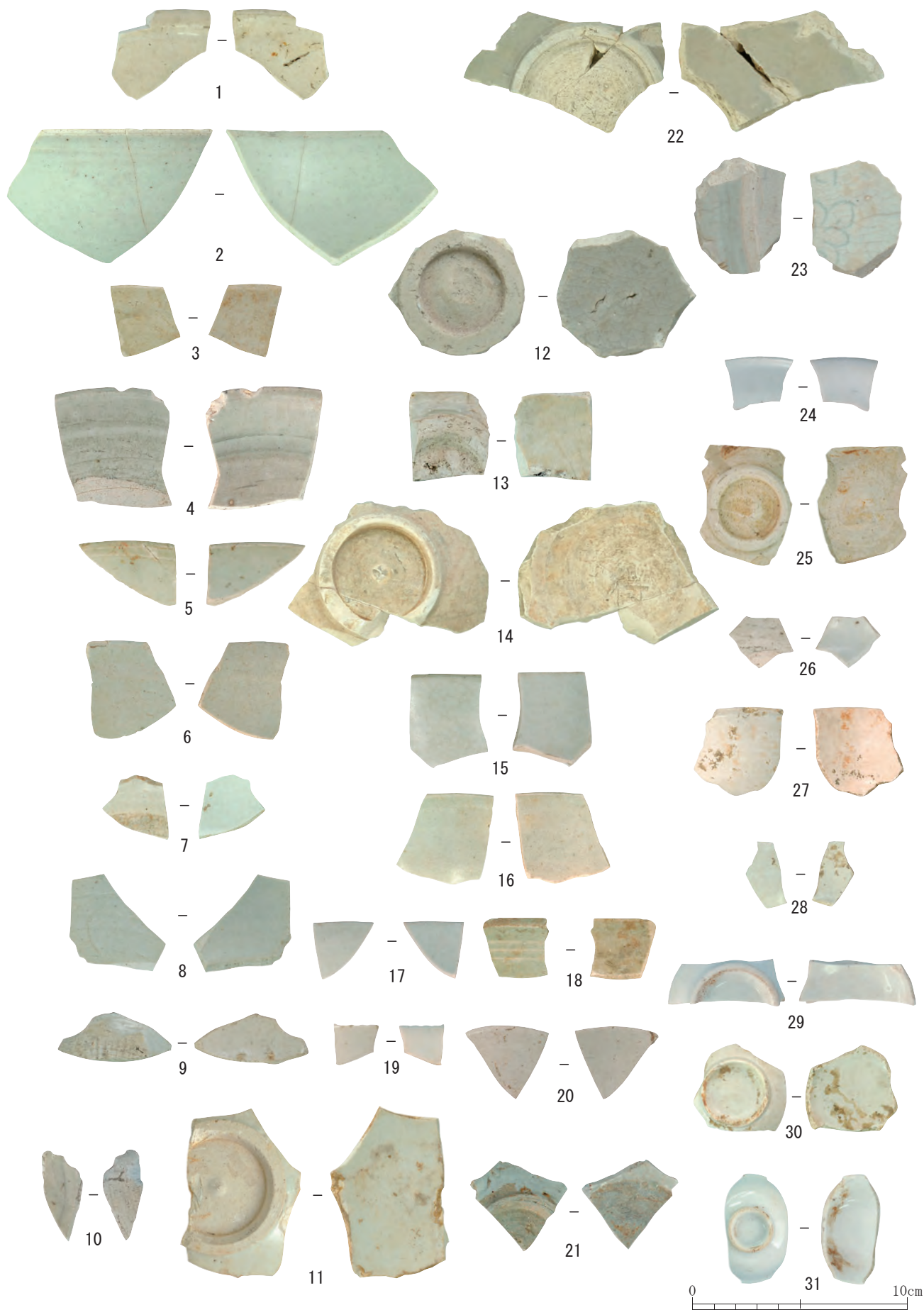
第106図 白磁出土平面分布



第107図 青磁出土平面分布



第108图 白磁



图版 68 白磁

(4) 青磁

本遺跡出土の青磁は総数 98 点、完品の出土はなく確認できる器種は碗 75 点、皿 7 点、盤 11 点、鉢 1 点、瓶 3 点の 5 種であった。第 41 表に示すように殆どは龍泉窯とその系列窯のものである。わずかではあるが福建・広東系のももみられた。生産年代は概ね 13 世紀から 18 世紀に位置づけられる。また瓶胴部が 3 点得られているが小片のため図化はできなかつた。以下その概要を述べ個々についての詳細は第 41 表観察一覧において述べる。器種ごとに分類し観察一覧にその記号を示した。なお、その分類にあたっては基本的に上田 (1982) 註に準拠するものである。

碗 (第 109~110 図 1~24)

75 点と最も多く出土している。全形を窺う資料に乏しく口縁部と底部に分けて分類した。口縁は形態により①直口、②外反、③内彎、④玉縁に分かれる。文様は大きく I~V 類の 5 種に分類、さらに施文具や施文方法により細分を加えた。底部は高台の断面形態と施釉範囲で A~F 類の 6 種に分類し、内底の文様の有無と施文方法で細分した。

I 類：蓮弁文 (図 1~4)

a: 片切り彫りの鎬を持つ蓮弁文 4 点、b: 片切りの輪郭線のみで鎬を持たないもの 3 点、c: ヘラ先を用い描く線刻細蓮弁文 4 点がある。図 1・2 は「I 類 a」鎬蓮弁文碗の口縁部と底部である。片切り彫りにより浮き彫的に花卉を表現している。13 世紀を主として 14 世紀前半に位置づけられる。図 3・4 は「I 類 c」ヘラ先を用い描く線刻細蓮弁文碗である。c には弁先が山形に独立し基部と別々に描くタイプ (図 4) もみられた。15 世紀後~16 世紀前に位置づけられる。

II 類：雷文帯 (図 5・6)

a: 雷文は施文方法で篋により施文されるもの (図 5) と、b: 印花によるもの (図 6) の 2 点がある。14 世紀後~15 世紀中に位置づけられる。

III 類：型押文 (図 9・10)

内面に型押の陽花文を施すものが 4 点で、図 9 は陽花の蓮弁文、図 10 は故事を題材とした人物型押文と考えられる。14 世紀後~15 世紀中に位置づけられる。

IV 類：篋描草花文

碗の外面や内面に篋描きの草花や唐草を描くものである。一般的には雷文帯とセットで描かれることが多く 9 点得られた。当該品は胴部小破片のみの出土であることから図化はしていない。14 世紀後半~15 世紀中葉に位置づけられる。

V 類：無文 (図 7・8・11~14)

無文は 36 点で最も多く a: 有圈線 2 点 (図 8・11) と、b: 無圈線 34 点に分かれる (図 7・12~14)。15 世紀~16 世紀に位置づけられる。

・碗底部 (図 15~24)

12 点得られ、内底面の文様は陰圈線に印花文を施すものが認められた。a は印花文などの文様を施すものである (図 16~21)。b は内底は無文である (図 22~24)。高台断面形と施文範囲で以下に分類できる。

A 類 : (図 2) 高台の断面形が略四角状を呈し、斜は比較的浅い。釉は高台外面まで掛かるが、畳付けを含め外底は無釉である。鎬蓮弁文を伴うことがある。1 点得られた。

B 類 : (図 16) 高台の断面形が三角状を呈し、高台内側途中まで釉のかかるもので外底は無釉で 1 点得られた。

C 類 : (図 18~20) 高台の断面形が三角状を呈し、全面に施釉後外底の釉を輪状に削り取るもの

で、3点得られた。

D類：(図 17) 高台の断面形が三角状を呈し、全面に施釉後畳付けの釉を削り取るもので、1点得られた。

E類：(図 15・21～23) 高台の断面形が四角状または三角状、高台外面途中まで釉のかかるもので5点得られた。

F類：(図 24) 高台の断面形が幅広四角状高台外面途中まで釉のかかるもので1点得られた。

18世紀～中葉に位置づけられる。内底面の施釉方法と範囲は**イ**：輪状の露胎、**ロ**：全面施釉とあり(図 23・24)は内底面見込みを釉剥ぎまたは無釉にすることにより胎を露出させたものである。**イ**：輪状の露胎には①全面施釉後に輪状に釉剥する(図 23)と内底見込以外の施釉後に見込み中央に円形上に釉を塗布することにより②輪状の露胎(図 24)とするものに分かれる。

皿(第110図 25～29)

口縁部1点、胴部3点、底部3点の総数7点得られた。

I類：蓮弁文(図 25・28)

蓮弁文は**b**：片切彫り蓮弁文、**c**：線刻細蓮弁文の2種が得られている。(図 25)は**b**：の片切彫り蓮弁文を外面と内面に描くものである。(図 28)は**c**の線刻細蓮弁文を外体面に篋先により描いている。

II類：草花文・唐草文(図 29)

外面が無文の腰折れの皿である。内面に片切彫りの唐草文を描く。

III類：無文(図 26)

腰折れの無文皿底部資料である

・**皿底部**(図 25～27)

底部内底面の文様は**a**：内底面に印花文を施すもの(図 25)と、**b**：内底面が無文になるもの(図 26・27)とがある。高台の断面形と施釉範囲で3種に分類した。

A類：高台の断面形は四角状、釉は高台の外側まで掛かり、畳付を含め外底は無釉。(図 27)

B類：高台の断面形は三角状、高台の内側途中まで釉のかかるもので外底は無釉。(図 26)

C類：高台の断面形は三角状、全面に施釉後外底の釉を輪状に削り取るものである。(図 25)

内底面の施釉方法は**イ**：露胎するものと**ロ**：全面施釉とある。図 26は内底見込みを略円状に露胎させるものである。

盤(第110図 30～35)

総数11点得られている。内9点は口縁部で1点が胴部、1点が底部資料であった。いずれも小片資料である。口縁部は形態別に**イ**：口折、**ロ**：鏝縁、**ハ**：直口、**ニ**：外反にわかれ、縁部でさらに①輪花、②稜花、③平縁の3種に分類できる。外面に文様のあるものは得られなかった。内面は**I類**(有文)と**II類**(無文)のものがあるが文様の**I類**は蓮弁文を篋により描かれるものである。文様の施文具の幅で**a**幅広蓮弁文**b**細蓮弁文の2種に分かれる。図 30・31は「**II類イ**」口折れの口縁で、図 31は「**II類イ②**」口折れ稜花盤である。図 32～34は「**II類ロ③**」鏝縁盤である。図 35は底部資料である。

鉢(第110図 36) 1点のみの出土であった。腰部に丸味を持つ無文の碁笥底の鉢である。

瓶 胴部片が3点出土している小片のため作化していない。

<註文献>

上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』N02 日本貿易陶磁研究会

第41表-1 青磁観察一覧

(質量単位:cm, g)

第109図・図版69	図番号	器種	分類	部位	口径 底径 器高	重量	器形・文様構成	釉	素地	生産年代 生産地 (その他)	地区・グリップ・層位 遺構・台(取)番号
								(色・範囲・貫入)	(色・混和材・質)		
第109図・図版69	1	碗	I類a ①	口縁部	16.0 — —	25.7	腰部から開き立ち上がる。口縁は端反ぎみの直口。口唇は僅かに尖る。外面に幅広の片切彫り鑄蓮弁文を施文。觚部分は肉厚。	両面、淡緑色釉薄い。	微細な気泡を含む。灰色微粒子。やや密。	13c中～14c前 龍泉窯 (上B-I、太I-5b)	HB②ロ R12 IV 台3364
	2		A類a口	底部	— 5.1 —	49.4	外面に鑄蓮弁文。高台の断面は四角形。内底は平坦で渦状陰線文を施文。底部の器肉が厚く高台の割は浅い。	淡緑色釉を高台外面まで施釉。畳付～高台内露胎。体部の釉は厚い。	微細な気泡を含む。灰色微粒子。やや密。	13c中～14c前 龍泉窯 (上B-I、太I-5c)	HB②ロ R12 III 台3341
	3		I類c ①	口縁部	— — —	4.0	直口口縁、口唇は舌状。へら先による線描蓮弁文。	オリーブ灰色の釉を両面に施す。	黒色の微粒子と方解石粒を含む。灰白色微粒子。やや粗。	15c後～16c前 龍泉窯 (上B-IV)	HB④イ K4 IV 台134
	4		I類c ①	口縁部	— — —	6.5	腰部に丸味を持ち内湾気味に立つ。口縁直口。口唇はやや角張った舌状。外面へら先による線描蓮弁文を施文、剣頭は簡略化。	青緑色の釉を両面施す。細かい貫入。	白色の微粒子や黒色微粒子を含む。灰色微粒子。	15c後～16c前 龍泉窯 (上B-IV')	HB②ロ R12 III 2049SD 台3366
	5		II類a ①	口縁部	14.2 — —	9.1	内湾気味の直口。口唇は丸い。片切彫り雷文帯を施文。	淡緑色の釉を両面施す。	微細な気泡や黒色微粒子を含む。灰白色微粒子。やや密。	14c後～15c中 龍泉窯 (上C-II)	HB②ロ S13 IV 取2026
	6		II類b ①	口縁部	15.5 — —	17.4	腰部から直線的に外に開き立つ。口縁部は直口、口唇は撥状に先端が僅かに肥厚する。端部は平坦。外面に印花雷文帯。	オリーブ灰色の釉を両面に施す。	黒色の微粒子を含む。灰白色微粒子。やや密。	14c後～15c中 龍泉窯	HB②ロ R12 III 台3366
	7		V類b ③	口縁部	— — —	18.4	胴部に丸味を持たせ立ち上がる。口縁は内湾させ口唇は肥厚気味の丸味を持つ。	灰緑色の釉を両面施す。	黒色の微粒子を含む。灰色微粒子。密。	15c代 龍泉窯 (上E)	HB① O13.14-P13 II 台487
	8		V類a ①	口縁部	16.4 — —	11.9	腰部に僅かに丸味を持たせ内湾気味に立つ。口縁直口。上位に陰線帯を一条巡らす。	暗黄緑色の釉を両面施す。	黒色の微粒子を含む。灰色微粒子。緻密。	14c後～15c中 龍泉窯 (上E)	HB① I 台494
	9		III類b ④	口縁部	15.6 — —	10.2	口縁の上位で外側に折り外反。口唇は僅かに玉縁状に肥厚。腰は張る。内面に型押し陽花蓮弁文を施文。	青緑色の釉を両面に施す。内面の型押し、文様部分は釉が薄く橙色。	微細な気泡や黒色微粒子を含む。灰色微粒子。緻密。	14c後～15c中 龍泉窯 (上D)	HB②ロ R9 IV 台3349
	10		III類b ④	口縁部	— — —	10.2	口縁は開き先端を外側に折り返し丸味整える玉縁口縁碗である。内体面に型押しの印花文を巡らす。	淡黄緑色の釉を両面に施す。細かい貫入が認められる。	微細な気泡や黒色の微粒子を含む。灰色微粒子。緻密。	14c後～15c中 龍泉窯 (上D)	HB②ロ Q10 III 台3329
	11		V類b ④	口縁部	15.6 — —	25.3	丸い腰部内湾気味に立つ。口縁は外反させ口唇は玉縁。外面下部に陰線帯を一条巡らす。	淡黄緑色釉を両面施す。口唇の釉薄く淡い直下は釉が厚い。	微細な気泡や白色、黒色微粒子を含む。灰色微粒子。緻密。	14c後～15c前 龍泉窯 (上D)	HB① II 取3
	12		V類b ②	口縁部	16.8 — —	18.3	丸い腰部から外に開き口縁で直に立つ。口縁は外反。口唇は肥厚気味の舌状。	緑灰色の釉を両面施す。	微細な気泡を含む。灰白色微粒子。やや密。	14c後～15c前 不明 (上D)	HB②ロ R12 IV 取2030
	13		V類b ②	口縁部	— — —	14.6	丸味のある腰部から外に開き口縁で直に立つ。口縁は外反。口唇は細めの舌状をなす。	緑灰色の釉を両面。釉は厚みにむらがある。	微細な気泡、黒色微粒子を含む。灰白色微粒子。やや密。	14c後～15c前 不明 (上D)	HB① O.P15 IV 台464
	14		V類b ②	口縁部	— — —	4.1	口縁が緩やかに外反する無文の碗である。口唇は舌状を成す。	緑灰色の釉を両面施す。	白色、黒色の微粒子。灰白色微粒子。やや密。	14c後～15c前 龍泉窯 (上D)	HB②ロ S12 IV 台3371
	15		E類b口	底部	— — 6.5	79.1	高台外側を僅かに削りだすが断面形は略四角を呈する。	オリーブ灰色釉を高台外面まで、畳付け含め外底は無釉。	微細な気泡や褐色、黒色微粒子を含む。灰色微粒子。やや密。	14c後～15c前 龍泉窯	HB②ロ S9 IV 台3332
	16		B類a口	底部	— — 5.8	163.0	高台断面形は三角状、割りは外に開く。内底面に蓮花の印花文を施す。外底面に目跡。	淡緑色釉は高台内途中。外底無釉。貫入あり。	黒色の微粒子、白色粒子を含む。灰白色微粒子。緻密。	14c後～15c前 龍泉窯	HB②ロ I 台3370
17	D類a口	底部	— — 7.0	56.0	畳付けの外側を斜めに削りだし高台断面形は三角状を呈する。割りは外に開き、外底面に目跡が認められる。内底面に印花文を施すもので、底部器肉は比較的厚い。	黄緑色の釉は全面に施す。畳付けの釉を削り取っている。	微細な気泡や白色、黒色の微粒子を含む。灰白色微粒子。密。	14c後～15c前 龍泉窯	HB②ロ Q13 III 2025P 台3381		
第110図・図版70	18	C類a口	底部	— — 6.2	112.6	高台は両側を斜めに削り断面形は三角状。高台は外に開く。内底面に印花の十字花文。	淡緑色、釉は全面釉後、外底の釉を輪状剥ぎ。	微細な気泡や白色、黒色の微粒子を含む。灰白色微粒子。やや密。	15c後～16c前 龍泉窯	HB②ロ R12 III 2049SD 取2009	
	19	C類a口	底部	— — 8.4	97.7	高台は畳付けの外側を削り断面形は三角状。外底に目跡。内底面に蓮花の印花文。	オリーブ灰色、釉は全面釉後、外底輪状剥ぎ。	微細な気泡や白色、黒色の微粒子を含む。灰白色微粒子。密。	15c後～16c前 龍泉窯	HB① K20 V 取32	
	20	C類a口	底部	— — 6.8	10.5	腰が張る。外面に轆轤痕。高台は外側を削り三角状。内底面に陰線帯と蓮花の印花文。外底に目跡。底部器肉は厚い。	淡緑色、釉は全面釉後、外底の釉を輪状剥ぎ。	微細な気泡や黒色の微粒子を含む。灰白色微粒子。緻密。	15c後～16c前 龍泉窯	HB②ロ S10 IV 取2012	
	21	E類a口	底部	— — 5.8	134.2	内削りは外に開く。高台の断面形は三角状。畳付けに砂目痕。内底は輪状の窪み。内底に菊花の印花文。	淡緑色、釉は高台外面まで、高台内は無釉である。釉に貫入。	微細な気泡や白色、黒色の微粒子を含む。灰白色微粒子。やや粗い。	15c後～16c前 龍泉窯?	HB④イ L2IV 台147	
	22	E類b口	底部	— — 4.8	100.1	高台両側を斜めに削りだし高台の断面形は三角状を呈する。内底面に轆轤痕を顕著に残す。	淡小豆色の釉を両面、高台外面まで施す。	白色、黒色微粒子含む。淡小豆色微粒子。やや粗い。	14c後～15c中 龍泉窯系	HB① L18 III 台349	
	23	E類bイ ①	底部	— — —	66.9	高台外側を僅かに削りだし断面形は四角。	オリーブ灰色、高台外面まで施す。内底は輪状釉剥ぎ。外底無釉。	微細な気泡や白色、黒色の微粒子を含む。灰色微粒子。密。	14c後～15c中 不明	HB②ロ R12 IV 台3364	
	24	F類bイ ②	底部	— — —	163.8	外面は雑な削り出、竹節状の幅広高台。高台断面形は四角形。内底面に轆轤痕中心部は施釉。	黄緑灰色の釉を施す。内底は輪状に露胎。高台外面まで施す。	黒色の微粒子を含む。淡褐色微粒子。やや粗い。	18c前～中 福建・広東	HB④イ K2 III 台142	

凡例:(その他)上:上田分類(1982) 太:大宰府分類の意

第41表-2 青磁観察一覧

(法量単位: cm, g)

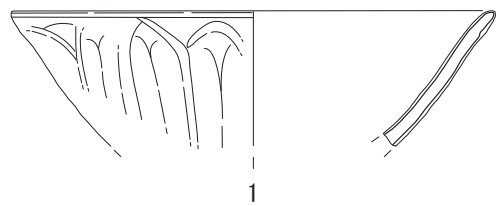
第図 図版	器 番号	器 種類	分類	部位	口径 底径 器高	重量	文様構成・器形	釉		素地		生産年代 生産地 (その他)	地区・グリップ・層位 遺構・台(取)番号
								(色・範囲・貫入)	(色・質・混和材)				
第110 図・ 図版 70	25	皿	Ca口	底部	— 6.0	42.4	畳付けの両側を削り、断面形は三角状。外面に細線描蓮弁文、内面に片切彫り蓮弁文。内底面は印花の菊花文。	水色釉、全面施釉後外底の釉は輪状釉剥ぎ。	白色、黒色微粒子を含む。灰白色粒子。密。	14c後～15c前 龍泉窯	HB②口 R12 III 台3341		
	26	皿	Bbイ	底部	— 5.2	30.0	畳付けの両側を斜めに削り、断面形は三角状。	オリーブ色、畳付まで施釉、内底中心は円形に釉剥ぎ。貫入あり。	黒色の微粒子を含む。灰白色粒子。	14c後～15c前 龍泉窯	HB②口 I 台3327		
	27	皿	Ab口	底部	— 7.6	26.1	高台は低めで断面形は四角形を呈する。高台高に対して高台径は大きい。内底見込みに陽圏線のみみられる。	緑灰色の釉は内底から畳付の外側まで施釉。外底無釉。	微細な気泡や白色、黒色微粒子を含む。淡灰色微粒子。	14c後～15c前 龍泉窯	HB②口 R12 IV 台3364		
	28	皿	I c	胴部	— —	5.8	腰部は丸く内湾気味に立つ。外面に細線描蓮弁文。	オリーブ色の釉を全面に施釉。	黒色の微粒子を含む。灰白色粒子。緻密。	14c後～15c前 龍泉窯	HB④イ K5 IV 台130		
	29	皿	II a	胴部	— —	4.8	外体面は無文、内体面に片切彫りの唐草を描く腰折れの皿である。	淡黄緑色釉を全面施釉。	黒色の微粒子を含む。灰白色粒子。密。	15c代 龍泉窯	HB① K・L12 II 1SK 台377		
	30	皿	IIイ③	口縁部	— —	10.1	口縁部はくの字状に折り曲げ鏝縁を成す。口折の盤である。屈曲は比較的弱い。	オリーブ色の釉を全面に施す。	微細な気泡を含む。灰白色微粒子。	14c後～15c前 龍泉窯	HB②口 R12 III 2049SD 台3366		
	31	皿	IIイ②	口縁部	23.0 —	14.0	鏝縁は稜花、鏝上面の釉は虫食状、露胎の粗製品。	オリーブ色の釉を全面に施す。	灰白色微粒子。密。	14c後～15c前 龍泉窯	HB④イ K5 IV 台143		
	32	皿	IIロ③	口縁部	23.6 —	38.5	鏝の縁先端を階段状に上面に引き上げる。	淡緑色、全面釉。	微細な気泡を含む。灰白色微粒子。密。	14c後～15c前 龍泉窯	HB②口 II 2002SZ 台3367		
	33	皿	IIロ③	口縁部	— —	8.9	鏝縁の先端を鏝上面に丸味を持ちながら上面に引き上げる。	オリーブ色の釉を全面に施す。	灰白色微粒子。密。	14c後～15c前 龍泉窯	HB②口 II 2003SZ 台3374		
	34	皿	IIロ③	口縁部	— —	21.2	鏝縁の先端を上面に直状で折り返す。	淡緑色の釉を全面に施釉。	微細な気泡や黒色の微粒子を含む。淡灰色微粒子。	14c後～15c前 龍泉窯	HB②口 IV 取2023		
35	鉢	無文	底部	— 14.6	22.7	高台は畳付けの外側を削りだす。断面形は三角状。内底面見込みに幅広の陰圏線と印花文を施文。	淡黄緑色の釉を全面に施釉後高台内の釉を輪状に削り取る。	微細な気泡や黒色の微粒子を含む。灰白色微粒子。	14c後～15c前 龍泉窯	HB②口 S13 IV 取2033			
36	鉢	無文	底部	— 7.4	12.3	腰部の丸い基筒底の鉢である。内底は平坦になる。	淡緑色の釉を高台内を除き全面に施釉。	微細な気泡や黒色微粒子を含む。灰白色微粒子。やや粗。	14c後～15c前 龍泉窯	HB②口 R13 IV 取2037			

凡例: (その他) 上: 上田分類(1982) 太: 太宰府分類の意

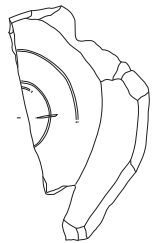
第三章 4

第42表 青磁出土量

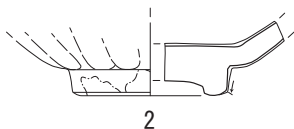
分類	碗												皿					盤			瓶 鉢	計									
	口縁部～胴部												底					口縁部					無文	不明							
	I類			II類			III類			IV類			V類		A類	B類	C類	D類	E類	F類					III	II	I	II	II		
	a	b	c	a	b	c	a	b	c	a	b	c	a	b	a	b	a	b	a	b					a	b	a	b	a	b	c
	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明					不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
HB①	I				1				1																				1	8	
	II			1					1																			1	7		
	150SK																											1	1		
	236SK																											1	1		
	271SD																											1	1		
	372SK																											1	1		
小計	2			1					1	1	1	1		1	3	10	8										1	38			
HB②口	I																												4		
	II			1																									2		
	2002SZ																												3		
	2003SZ																												1		
	2004SX																												1		
小計	2	1	2	2	1	1	2	2	2	2	2			1	1	2	4	1									1	7			
HB④イ	III																												1		
	IV			1																									1		
	2014P																												1		
	2025P																												1		
小計	2	1	2	2	1	1	2	2	2	2	2			1	1	2	4	1									1	22			
合計	2	2	1	2	3	1	1	2	2	3	1	4	1	1	1	6	13	15	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	98		
分類別計				11				2	4		9				36				1	1	1	3	1	5	1	1	1	1	98		
器種別計															75																



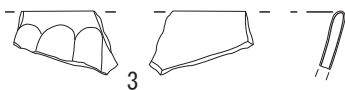
1



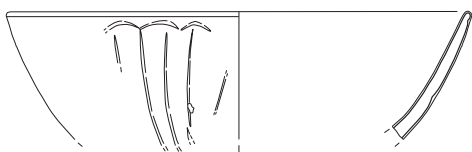
1



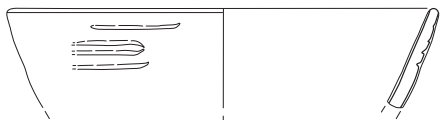
2



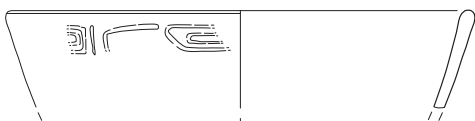
3



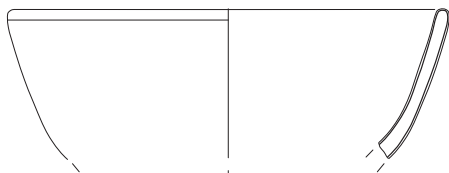
4



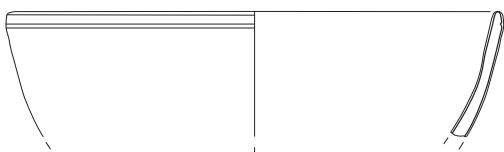
5



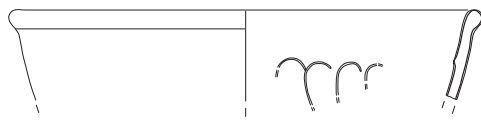
6



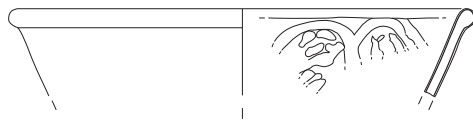
7



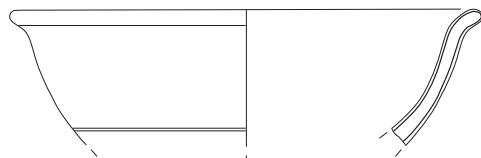
8



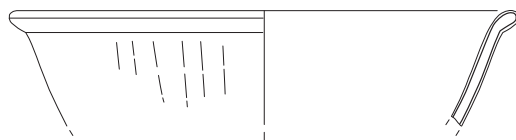
9



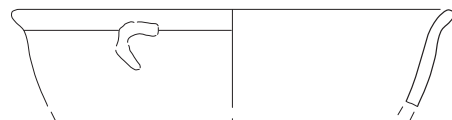
10



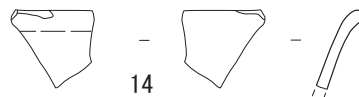
11



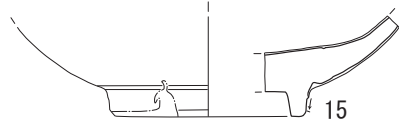
12



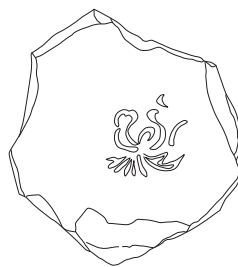
13



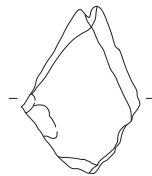
14



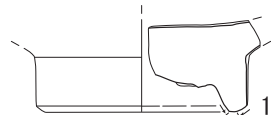
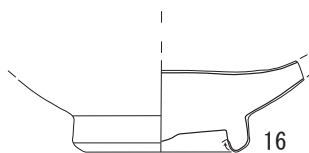
15



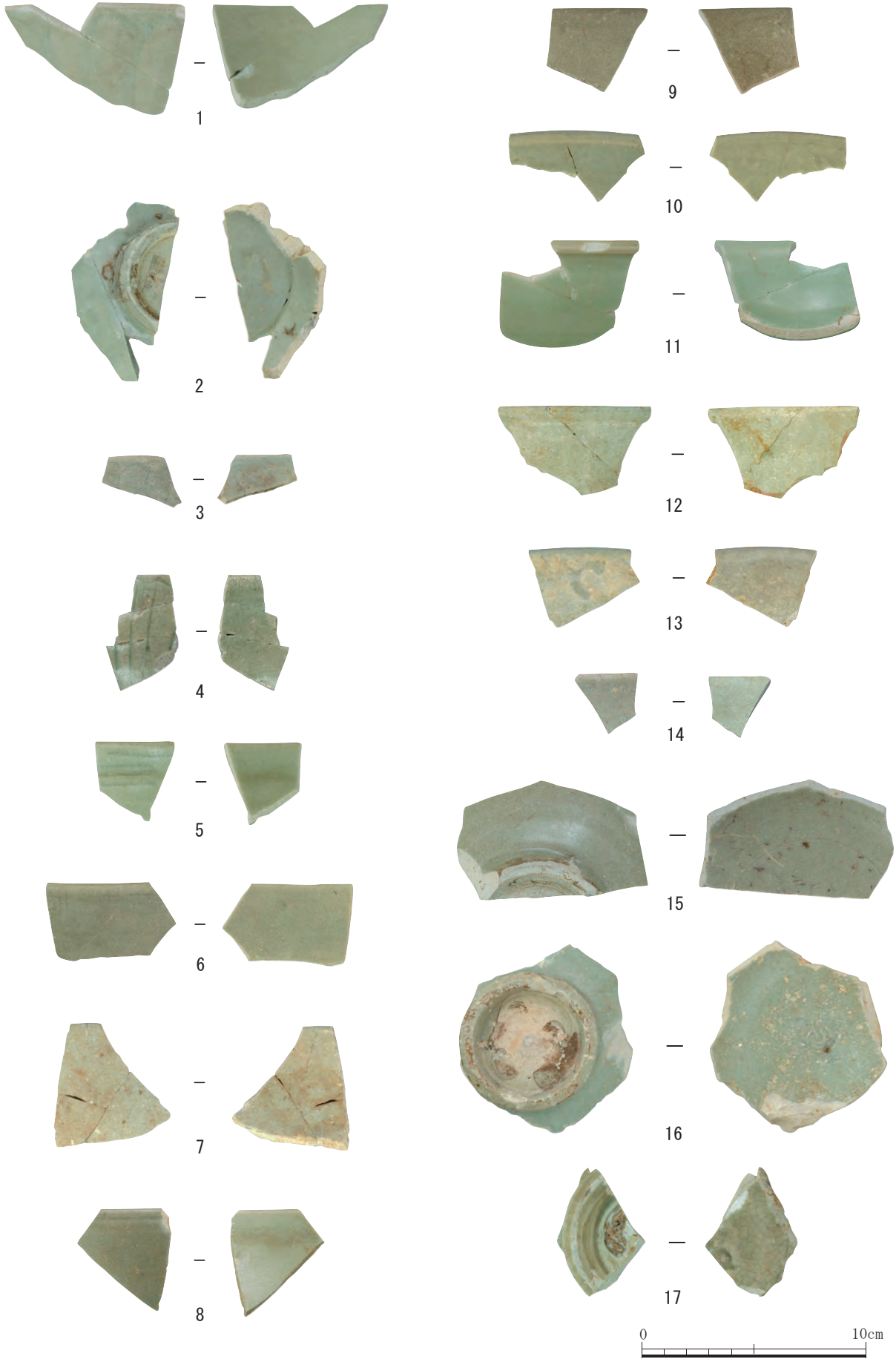
16



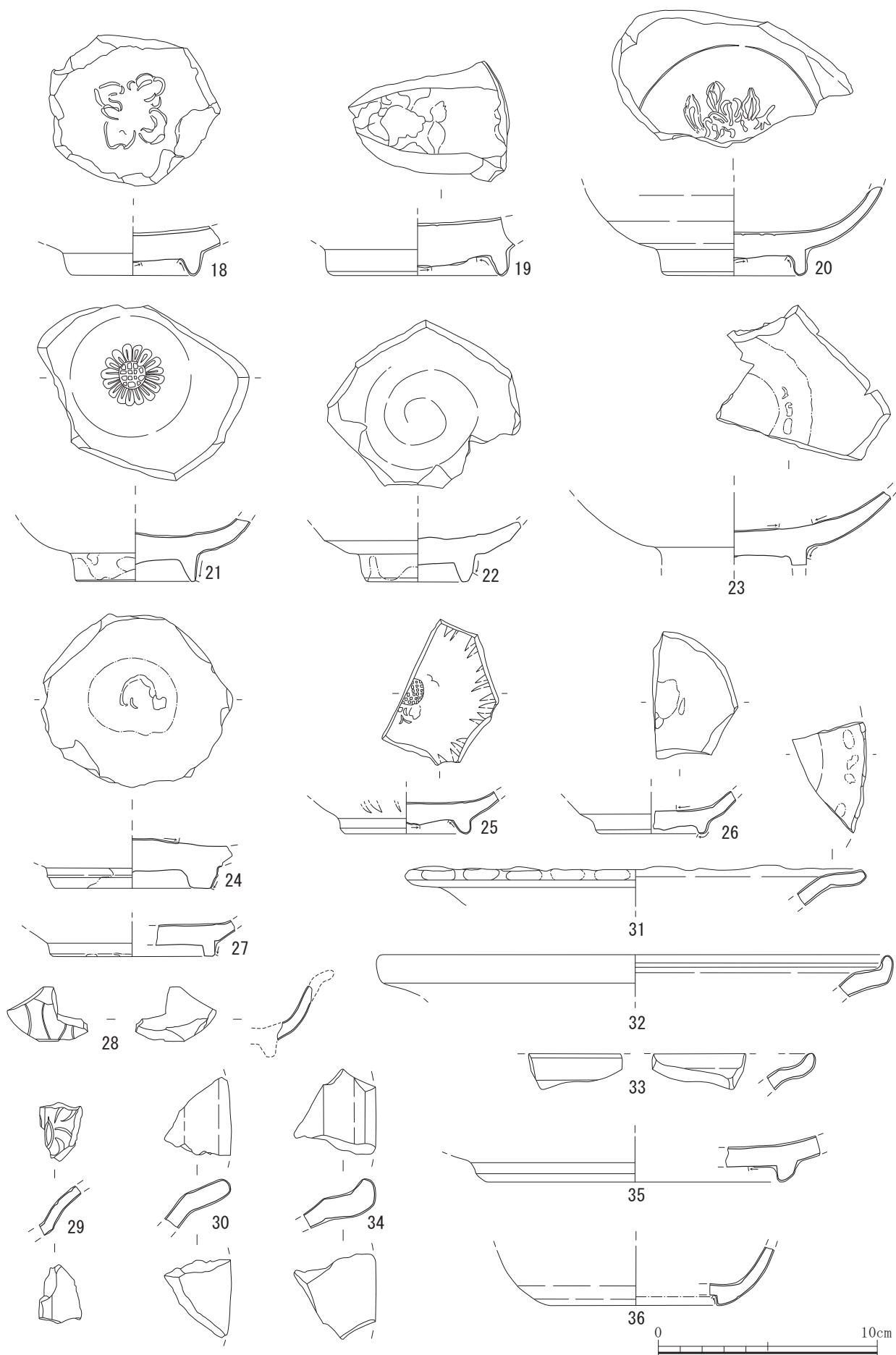
17



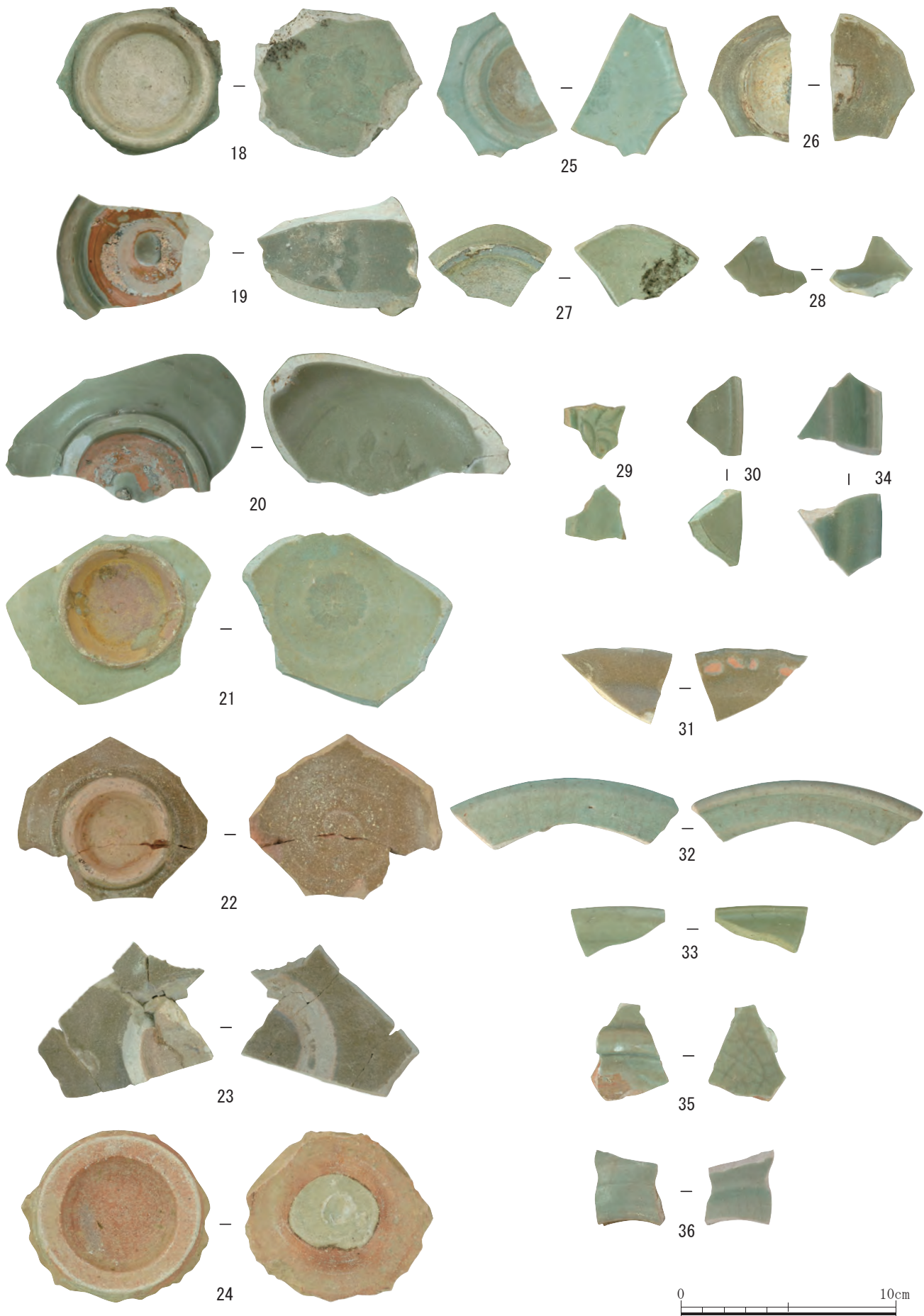
第 109 图 青磁 1



图版 69 青磁 1



第 110 图 青磁 2



图版 70 青磁 2

(5) 染付

総数 256 点得られた。器種は碗 228 点、皿 10 点、杯 11 点、瓶 5 点の 4 種あり、碗は全体の 89% と最も多く、杯、皿、瓶とつづく。染付の出土平面分布（第113図）は0～S8～16グリッドに集中し全体の 59%を占める。生産地、生産年代は景德鎮窯産の 15 世紀代、福建・広東系産、17 世紀後半から 18 世紀代、徳化窯産の 19 世紀代と幅広い。以下にその概要を述べ、主なものについては第 111～112図に示した。個々についての詳細は第46表観察一覧にまとめた。

碗（第111～112図 1～30）

総数 228 点で最も多い。特に外面に太めの筆描きの草花文や印青花、半梅花文、簡略化した蓮弁文を描き、口縁は逆「八」字状に開き腰と底部に安定感を有する形態で、福建・広東系、17 世紀後半から 18 世紀代に位置づけられる一群（図 5～26）が碗全体の 84%と圧倒的である。

図 1～3 は外面に雷文、草花文、如意頭文を描く景德鎮系の 15 世紀代～16 世紀代に位置づけられる一群で碗全体の 6%に過ぎない。図 1 は胴が直線的に立ち口縁で外反し口唇は尖る。先端は平坦に整えている。器厚は 3.5 mm で比較的薄い。外面の上位に雷文帯下位に草花文、内面上位に雷文帯を巡らしている。雷文は上段に一条の横線、下段に二条の横線で収めるものである。景德鎮窯の 15 世紀代。図 2 は腰部が屈曲し口縁までは筒形に直線的に立ち上がる腰折碗である。腰部外面に如意頭文と二条圏線を巡らし高台に二条圏線を配する。内底に二条圏線に草花文を描いている。景德鎮窯の 15 世紀代。図 6 は外面に印青花（団子花文）を描く。口縁部から底部まで残す唯一の資料である。図 23～26 は腰の張る口縁まで逆「八」字状に直線的に立つもので。口縁は先端で僅かに反り、口唇は尖る。外面に半梅花文、簡略化した蓮弁文、祝寿文を描くもので、福建 18 世紀代。図 28 は腰部に丸味を持つ。内底は軽微な窪みの蓮通心形をなす小碗である。外面と内面に仙芝祝寿文、内底に捻子花を配している。景德鎮窯の 18 世紀代～19 世紀代。

分類概念を右記に示した

年	代: 1期-明代、2期-清代前期、3期-清代後期
器	形: A-丸碗、B-平碗、C-撥形碗、D-腰折碗
口縁	形態: I 類-直口口縁、II 類-外反口縁、III 類-内彎口縁、IV 類-端反口縁
底部	形態: イ-蓮通心、ロ-平坦、ハ-饅頭心
高台	形態: (断面形) a-三角、b-四角、c-台形、d-基筒底、e-型成形
釉の	範囲: ①量付剥、②外底露胎、③内底輪状釉剥ぎ、④内底露胎 ⑤高台内露胎、⑥高台露胎

皿（図 31～35）

総数 10 点である。口縁部～底部まで残すもの 1 点、口縁部 1 点、胴部 1 点、底部 7 点であった。図 33・34 は 18 世紀代の福建系で高台断面形が太めの三角状を呈し、内底面は平坦で広い見込みを持つ中皿である。図 33 は内体面に仙芝祝寿文を施文。図 34 は内底面に龍文を描き、外底高台内に二条の圏線と「〇〇壺珍」の字款を施している。図 31 は 15 世紀代の景德鎮窯の小皿である。外面に唐草文を描き、内底面に二条の圏線と菊花文を配するものである。図 32 は直口で底が割合に大きく外面に草花文、内体面に唐草文を描いた型成形で徳化窯の 18 世紀～19 世紀に位置づけられる小皿である。

杯（図 36～41）

総数 11 点得られた。図 36 は景德鎮窯系、明代末期から清代初期に位置づけられる小杯である。直線的な立ち上がりで口縁は外側に折り外反させる。外面に二条の圏線と草花文を描く。図 39～41 は型成形、徳化窯系が得られている。

瓶（図 42～45）

総数 5 点得られた。図 42 は肩の位置が高く胴の長い瓶である。小ぶりの梅瓶が考えられる。図 45 は表面に「同仁堂口」、裏に「平安散口」の文字が認められる 17 世紀後～18 世紀前代の薬瓶（首里城跡、「御内原北区」）である。

<参考文献>

沖縄県埋蔵文化財センター 2010 『首里城跡－御内原北地区（I）』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 54 集

第43表 染付碗（口縁部）出土量

地区	部位 口～底	生産地 福建・広東	時代 2期	口縁部																								不明	合計
				景德鎮												福建・広東													
				1期			2期			3期			2期					3期					2期						
				C	A	D	E			A	B				C					E	A	B	B		B				
				I	I	I	II			I	I	II	III	IV	I	II	IV	I	I	II	II	I							
	器形																												
	口縁形態																												
	釉																												
	産地																												
	層位																												
	遺構																												
	I																												
	II	62SK 83SZ 240SZ 274SZ 358SK 359SK																											
	III	146P																											
	小計																												
	I																												
	II	1006SK 1005SZ																											
	小計																												
	I																												
	II	2002SZ																											
	III	2023P 2024P 2049SD 2072P																											
	IV																												
	小計																												
	合計																												
	産地別計																												

第44表 染付碗（底部・胴部）出土量

地区	部位 口～底	生産地 景德鎮	時代 1期	底部																															徳化窯 3期	不明	胴部			不明	合計								
				景德鎮												福建・広東																																	
				1期			2期			3期			2期												3期				1期		2期		3期																
				A	D		A	A		イ												イ	ロ	ハ	A	不明	1期	2期	D	3期	不明																		
				a	a	a	a	a	a	a	b	a	c	a	b	a	b	a	b	a	b	a	b	a	b	a	b	a	b	e	不明																		
				⑤	①		①	①	①	①③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	不明																
	I																																																
	II	1SK 29P 62SK 83SZ 240SZ 305SD 358SK 359SK																																															
	III	236SK 271SD 360SK																																															
	IV																																																
	小計																																																
	I																																																
	II	1006SK 1005SZ 1016SZ																																															
	III																																																
	小計																																																
	I																																																
	II	2002SZ 2054SX																																															
	III																																																
	IV																																																
	小計																																																
	合計																																																
	産地別計																																																

第45表 染付（皿・杯・瓶・不明）出土量

地区	部位 口～底	年代 清代後	産地	皿											杯				瓶			器種不明		合計																															
				口縁部		底部			胴部		口縁部～底部		杯		胴部		底部		胴部																																				
				清代後	清代前	明代	清代後	不明	清代後	清代後	清代後	清代前	清代後	清代前	清代後	清代前	清代後	清代前	清代後	清代前																																			
				徳化窯	景德鎮	景德鎮	福建・広東	徳化窯	不明	福建・広東	景德鎮	徳化窯	景德鎮	徳化窯	景德鎮	景德鎮	景德鎮	福建・広東	景德鎮	福建・広東	不明																																		
				①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①																																		
	I																																																						
	II	83SZ 358SK 359SK																																																					
	III	163SK																																																					
	小計																																																						
	I																																																						
	II	1006SK 1005SZ 1018SX																																																					
	小計																																																						
	I																																																						
	II	2002SZ 2054SX																																																					
	III																																																						
	小計																																																						
	I																																																						
	小計																																																						
	合計																																																						
	産地別計																																																						
	器種合計																																																						

第46表-1 染付観察一覧

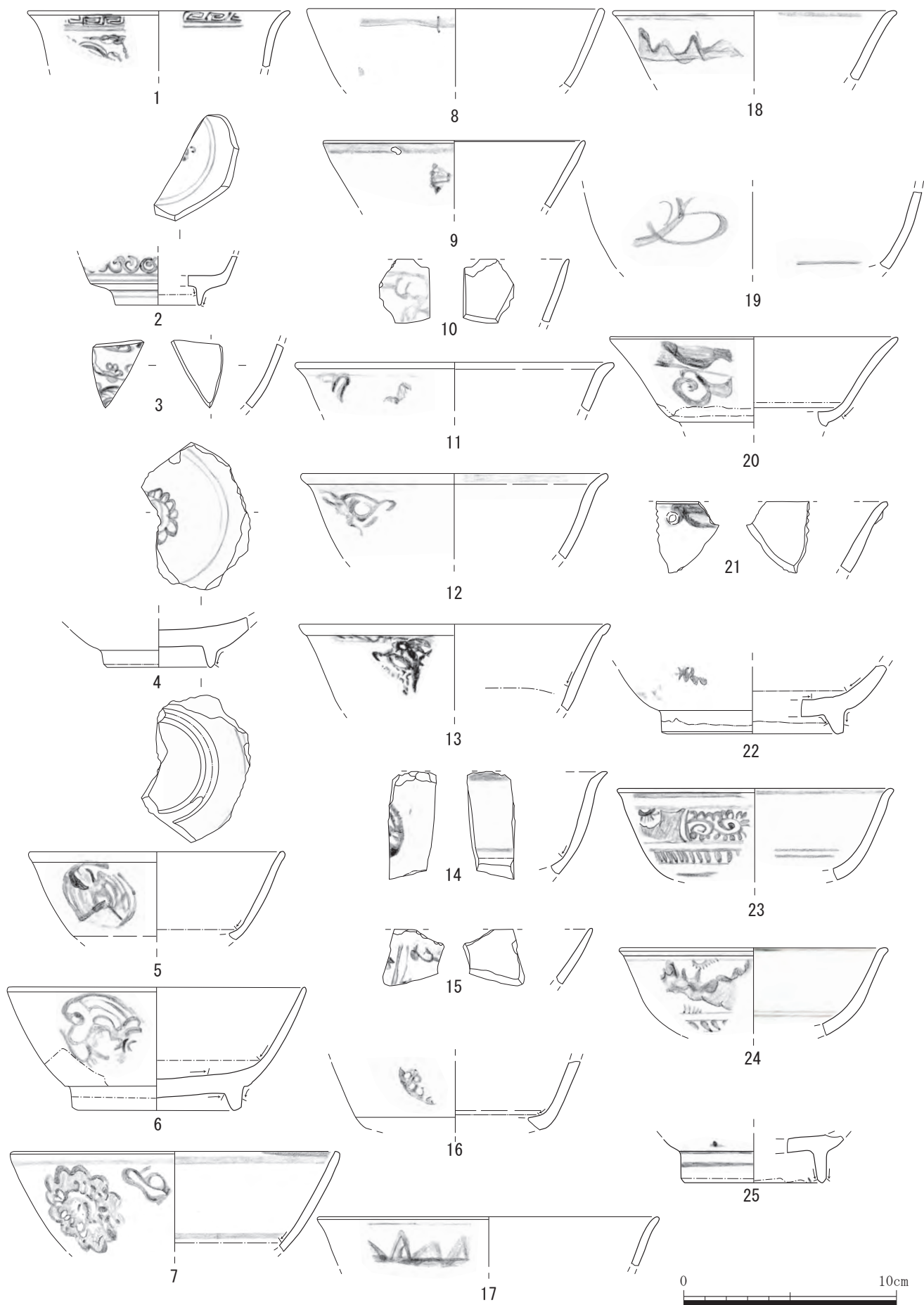
(法量単位:cm, g)

1	図番号	器種	部位	口径 底径 器高	重量	分類	器形・文様構成	釉・呉須・範囲	素地 (色・質)	生産年代 生産地	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取上)番号
第111図・図版71	1	碗	口縁部	12.2 — —	4.7	1期 EⅡ類	口縁は外反、口唇で細まり先端は平坦。 外面:上位-雷文帯+下位-蓮花文。内面:上位雷文帯雷文は上段に一条の横線、下段に二条の横線で閉じる。	淡青白色 呉須濃淡あり	灰白色 密	15c中～末 景德鎮窯	HB②ロ Q13 IV 台3356
	2		底部	— 4.0 —	16.8	1期 DⅡa ①	腰部が屈曲し口縁までは筒形に直線的に立ち上がる(腰折)。高台形は細身、刹りは深い。 外面:下部-如意頭文+下位二条圈線+高台二条圈線。内底:二条圈線+草花文。	淡青白色 高台量付けから高台内際まで露胎	灰白色 密	15c後～16c前 景德鎮窯	HB②ロ I 台3327
	3		胴部	— — —	3.4	1期	器厚:薄作り、外面:唐草文。	淡青白色 呉須濃淡あり	灰白色 密	15c前～中 景德鎮窯	HB②イ III 台3086
	4		底部	— 5.2 —	51.4	1期 AⅠa ⑤	腰部は丸味を持つ。高台形は外側削り出し断面形態三角状、外底は外剝で深い。 外面:二条圈線内底面:二条圈線+菊花文。	淡青白色 呉須濃淡あり高台量付けから高台内まで露胎	灰白色 密	15c後～16c中 景德鎮窯	HB②ロ R13 IV 取2032
	5		口縁部	12.0 — —	16.6	2期 CⅠ類 ②	腰部から逆「八」字状に開く、口縁は上部で内に寄せ外反。口唇は丸く収めるが、先端はやや平坦になる。 外面:印青花(団子花文)。	淡青白色 高台量付と見込みは輪状に露胎	灰白色 密	17c後～18c前 福建・広東系	HB① O・P8～14 I 台241
	6		口 底	14.0 8.0 5.8	139.0	2期 CⅠ類 Pc ③⑥	腰部から口縁部まで逆「八」字状に直線的に立ち上がる。口唇は丸い。腰部は下部に高台削り出しのため有段。高台は外側、斜めに削りだし断面形は台形状。外面:印青花(団子花文)。	淡青白色 高台量付と見込みは輪状に露胎	灰白色 密	17c後～18c前 福建・広東系	HB②ロ I 台3385
	7		口縁部	14.4 — —	24.5	2期 CⅠ類 ④	腰部から口縁部まで逆「八」字状に直線的に立ち上がる。口唇は先端が平坦な四角形。 外面:上位-幅広横線文+印青花(花文+三弁花) 内面:上位-幅広圈線+下位-幅広圈線	淡青白色	灰白色 密	17c後～18c前 福建・広東系	HB① I 台494
	8		口縁部	14.0 — —	11.3	2期 CⅠ類	腰部から開きながら直に立ち上がる。口唇は断面形が四角状、先端は平坦。 外面:上位-幅広横線+印青花	淡青白色	灰白色 密	17c後～18c前 福建・広東系	HB① O13・14.P13 II 台487
	9		口縁部	12.4 — —	8.6	2期 CⅠ類	胴部は撥形に立ち上がる。口唇は尖る。 外面:上位-幅広横線+印青花(花文)	淡青白色	灰白色 密	17c後～18c前 福建・広東系	HB① II 台487
	10		口縁部	— — —	4.0	2期 CⅠ類	直口の碗である。口唇は先端が尖る。 外面:印青花(団子花文)	淡青白色	灰白色 密	17c後～18c前 福建・広東系	HB①～ O・P814 I 台239
	11		口縁部	15.0 — —	9.5	2期 BⅡ類	上部で折る外反口縁。口唇は舌状。 外面:上位-圈線+印青花(三弁花) 内面:上位-幅広圈線。	淡青白色	灰白色 密	17c後～18c前 福建・広東系	HB① O・P8～14 I 台239
	12		口縁部	14.4 — —	13.7	2期 BⅡ類	腰部に若干丸味を持ち口縁に向かい開き立ち上がる。外反口縁。口唇は舌状。 外面:上位-幅広圈線+印青花(三弁花)内面:上位-幅広圈線。	淡青白色	灰白色 密	17c後～18c前 福建・広東系	HB① O・P8～14 I 台241
	13		口縁部	14.6 — —	13.9	2期 BⅣ類	腰部から直に立ち口縁上部で僅かに外反、口唇はわずかに肥厚した舌状。 外面:上位-幅広圈線+印青花(三弁花)	淡青白色	灰白色 密	17c後～18c前 福建・広東系	HB① I 台494
	14		口縁部	— — —	8.7	2期 BⅡ類	腰部に丸味を持ち開きながら直線的に立ち上がる。口縁は外反し口唇は尖る。外面:上位-広横線文+印青花(三弁花)。内面:上位-幅広圈線、内面:下位-幅広圈線。	淡青白色	灰白色 密	17c後～18c前 福建・広東系	HB① O・P8～14 I 台219
	15		口縁部	— — —	3.5	2期 CⅠ類	直口口縁、口唇は尖る。 外面:上位-印青花(三弁花)+縦位界線。	灰白色	黄白色 密	17c後～18c前 福建・広東系	HB②ロ II 1005SZ 台3081
	16		胴部	— — —	10.0	2期 D	腰部から直線的に開きながら立ち上がる。腰折れ。 外面:印青花(丸文)。	淡青白色	白色 密	17c後～18c前 福建・広東系	HB① K18 II 029P 台379
	17		口縁部	16.0 — —	8.8	2期 CⅣ類	端反口縁。口唇は丸い。 外面:波状文。	淡青白色	灰白色 密	17c後～18c前 福建・広東系	HB②ロ O9 III 台3340
	18		口縁部	13.4 — —	15.1	2期 CⅣ類	逆八の字状に開き直線的に立つ。端反口縁。口唇は舌状。 外面:上位-幅広横線文+波状文。内面:上位-幅広圈線。	淡青白色	灰白色 密	17c後～18c前 福建・広東系	HB① I 台494
	19		胴部	— — —	12.4	2期	胴に丸味を持つ。外体面に草花文を施文する。 外面:草花文。内面:下位-圈線。	淡青白色	灰白色 密	17c後～18c前 福建・広東系	HB②イ I 台3082
	20		口縁部	12.4 — —	19.4	2期 CⅣ類	腰は丸味のある屈曲をなす。腰部から逆「八」字状に開き立ち上がる。直口口縁。口唇は丸い。 外面:草花文。	淡青白色 腰部露胎	黄白色 密	17c後～18c前 福建・広東系	HB① I 台494
	21		口縁部	— — —	6.3	2期 CⅣ類	直線的に立つ端反口縁。 外面:圈線+草花文	灰白色 全面釉	黄白色 密	17c後～18c前 福建・広東系	HB②ロ R12 III 2049SD 台3366
	22		底部	— 6.8 —	41.1	2期 Pc ③⑥	腰部から直に立つ。腰部は高台際より削りを入れ有段になる。高台断面形は台形状。外底は外剝。 外面:草花文。	淡青白色 量付け無釉見込み輪状に露胎	灰白色 密	17c後～18c前 福建・広東系	HB②ロ II 2054SX 台3369

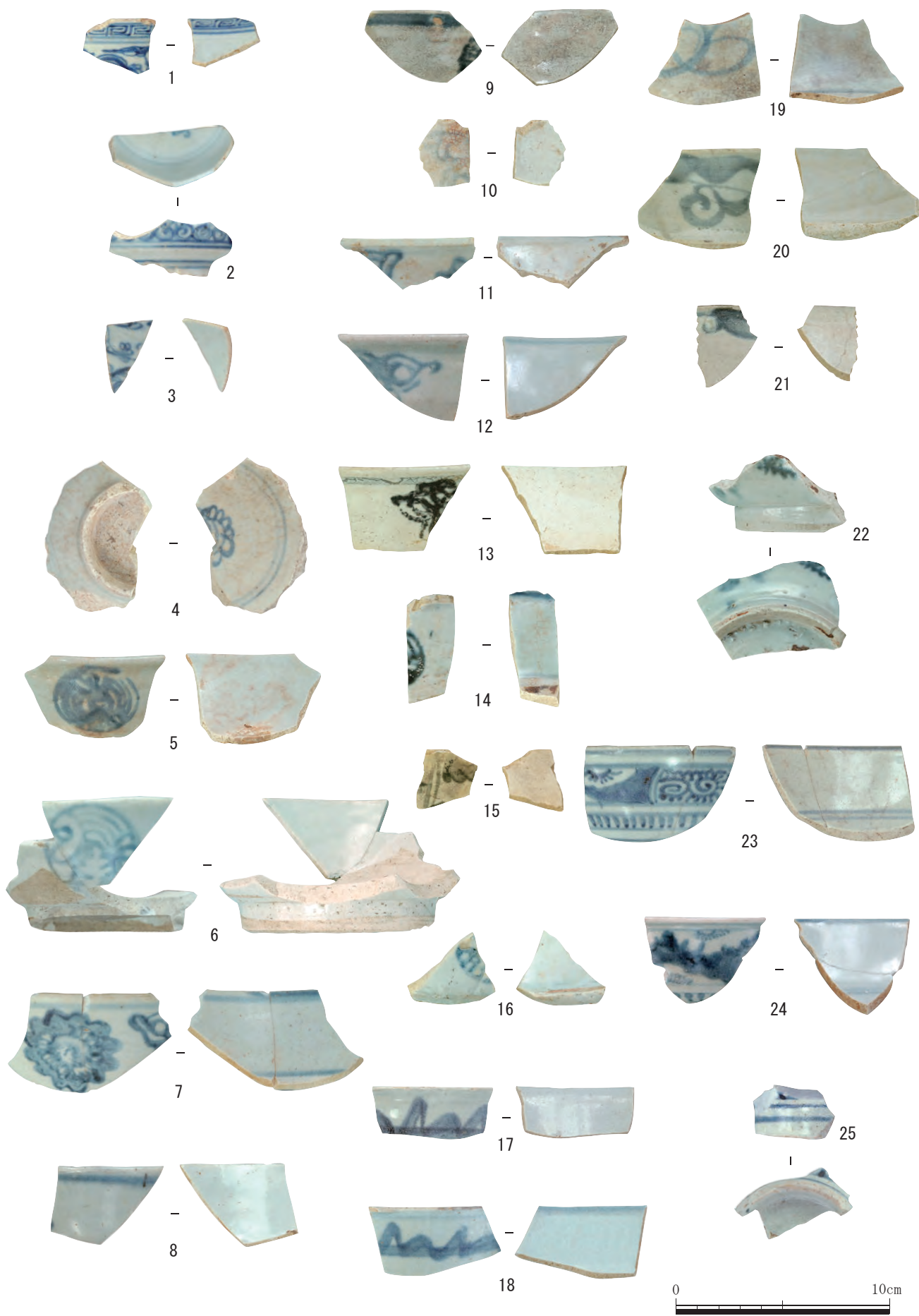
第46表-2 染付観察一覧

(質量単位: cm, g)

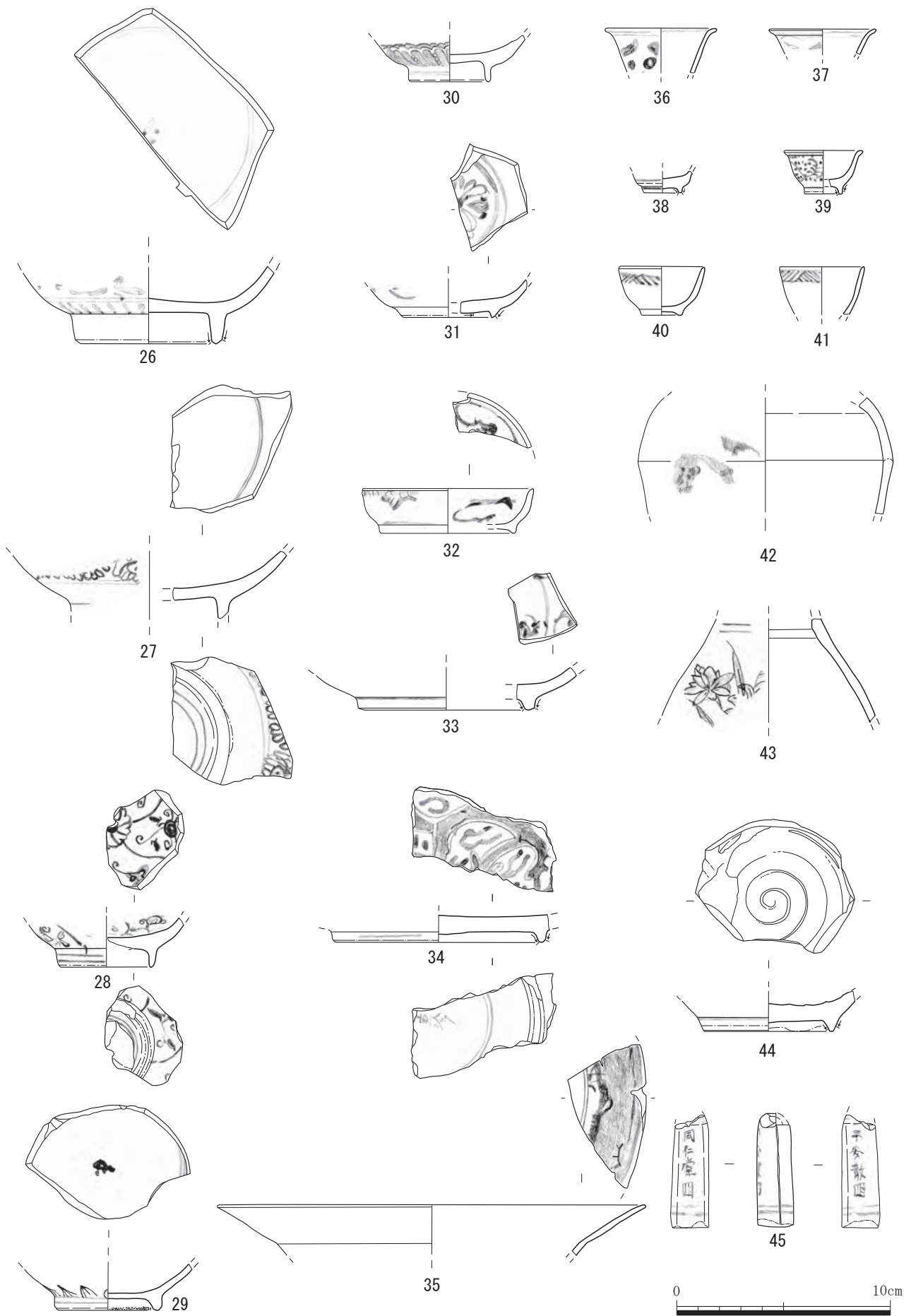
図版図	図番号	器種	部位	口径 底径 器高	重量	分類	器形・文様構成	釉・呉須・範囲	素地 (色・質)	生産年代 生産地	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取上)番号
第111図・図版71	23		口縁部	13.0 — —	25.3	3期 BⅡ類	腰が張り口縁まで逆「八」字状に直線的に立ち上がる。口縁は先端で僅かに反る。口唇は尖る。 外面: 上位二条圏線+半梅花文+唐草文+下位二条圏線+蓮弁文(簡略)。内面: 上位一条の圏線+下位二条圏線。	淡青白色	灰白色密	18c代 福建・広東系	HB②ロⅡ QR9.10 2002SZ 台3367
	24		口縁部	12.6 — —	15.4	3期 BⅡ類	腰部は丸味を持ち口縁部まで直立ち上がる。口縁上端で反る。口唇は舌状。外面: 上位二条圏線+半梅花文+下位二条圏線+蓮弁文(簡略)。内面: 上位一条の圏線+下位二条圏線。	淡青白色	灰白色密	18c代 福建・広東系	HB②ロⅠ 台3082
	25		底部	— 6.8 —	18.3	3期 Ⅱa ①	高さのある高台は両側を斜めに削り出し断面形は三角。 外面(高台)二条圏線。	淡青白色 施釉量付けが釉剥ぎ されている。	灰白色密	18c代 福建・広東系	HB②イⅡ 1016SZ 台3294
第112図・図版72	26	碗	底部	— 6.8 —	82.4	3期 Ⅱa ①	腰部が張り高さのある高台。量付けの両側を斜めに削り出し、断面形は三角状。内底は中心に盛り上がりを持たせる饅頭心形、外底面は水平。 外面: 上位草花文+下位二条圏線+蓮弁文(簡略)+二条圏線。 内底: 二条圏線+草花文(花卉)。	淡青白色 量付無釉	灰白色密	18c代 福建・広東系	HB①P・Q8.9Ⅱ 358SK 台484
	27		底部	— 3.4 —	38.3	3期 Ⅱ	腰部にやや丸味をもち開き立ち上がる。内底は平坦。外体面下段に草花文を描く。 外面: 下位に唐草文を描く。	淡青白色 量付無釉	灰白色密	18c代 福建・広東系	HB①Ⅱ 台485
	28		底部	— 4.6 —	17.5	2期 AⅠa ①	腰部に丸味を持つ。内底は軽微な窪みの蓮通心形。小碗。 外面: 仙芝祝寿文。内面: 仙芝祝寿文。内底: 捻子花。	淡青白色 量付無釉	灰白色密	18c~19c 景德鎮	HB②ロⅡ QR9.10 2002SZ 台3367
	29		底部	— 5.0 —	34.4	3期 AⅡe ①	腰に丸味を持つ型成形の碗である。小碗。 外面: 腰部に蕉葉文を巡らす。 内底: 二条の圏線と花卉。	淡青白色 量付無釉	白色密	17c末~18c 徳化窯	HB①P・Q 8.9Ⅱ 358SK 台484
	30		底部	— 3.8 —	30.0	3期 AⅠa ①	腰に丸味を持つ碗である。小碗。 外面: 腰部にラマ蓮弁を巡らし蓮弁内に瓔珞文を描く。	淡青白色 量付無釉	白色密	17c末~18c 景德鎮窯	HB①P・Q10Ⅱ 240SZ 台490
	31		底部	— — 4.4	12.5	1期	腰部は丸い。高台は外側を斜めに削り出した、断面形は三角状。内底は平坦。外底は内削り。 外面: 唐草文。内底: 二条圏線+菊花文。	淡青白色 量付け無釉外底輪状に露胎	灰白色密	15c後~16c前 景德鎮窯	HB①K13Ⅱ 083SZ 台374
	32		口底	8.0 — —	5.0	3期	腰部が張り、直に立ち上がる。口縁は直口で口唇は尖る。内底は平坦。外面: 圏線+草花文。内面: 圏線+唐草文。	淡青白色 施釉後口唇と量付け 釉剥ぎ。	灰白色密	18c~19c 徳化窯	HB②ロⅡ 2054SX 台3369
	33	皿	底部	— 8.2 —	9.3	3期	器形: 高台は外側を斜めに削り出し断面形は三角状。外底は外削り。 外面(高台): 二条の圏線。内面: 仙芝祝寿文。	淡青白色 施釉後量付け釉剥ぎ	灰白色密	18c代 福建・広東系	HB①Ⅰ 台494
	34		底部	— 10.0 —	33.8	3期	高台は外側を斜めに削り出し断面形は三角状。内底は平坦。 外面(高台): 一条圏線。内底: 龍文。 外底: 二条圏線+字款(○珍)	淡青白色 施釉後量付け釉剥ぎ	灰白色密	18c代 福建・広東系	HB①O・P8~14Ⅰ 台241
	35		口縁部	20.0 — —	9.9	2期	腰部から外側に折り曲げる様に幅の広い鏝縁をつくる。 内面: (鏝上面)霞状ダミ+草花文。	淡青白色	灰白色密	17c末~18c前	HB②ロ S12Ⅲ 台3339
	36		口縁部	5.2 — —	1.5	2期	腰部から開きながら直に立ち上がり口縁は外側に折る様に外反。薄作りの杯である。口唇はやや肥厚し、舌状を成す。口唇に鉄釉による覆輪線が認められる。外面: 二条圏線+草花。内面: 二条圏線 明末~清初か?	淡青白色	灰白色密	17c代 明末~清初 景德鎮窯	HB①O13・14・P13 IV 台437
	37		口縁部	5.0 — —	1.0	2期	腰部から開きながら直線的に立ち口縁は外側に折り外反。口唇は舌状。外面: 二条圏線+草花文。内面: 二条圏線。	淡青白色	灰白色密	17c代 明末~清初 景德鎮窯	HB②ロ Q11Ⅲ 台3338
	38	杯	底部	— 1.8 —	6.3	2期	腰折れ。高台の断面形は三角状。内削りは外向。 外面: 下位圏線+(高台)圏線。	淡青白色 量付無釉	灰白色密	17c前半 景德鎮窯	HB①O・P8~14Ⅰ 台241
	39		口底	3.7 1.8 2.05	4.2	3期	腰部は丸味を持ち開き立つ。口縁は外反し口唇は舌状。型成形。 外面: 上位圏線+鉞文+唐草下位圏線。	淡青白色 量付無釉	灰白色密	18c代 徳化窯	HB①Ⅰ 台494
	40		口底	4.0 1.8 2.3	4.4	3期	腰部は直線的に立ち口縁は直口。口唇は舌状。量付けに砂目跡。型成形。 外面: 樽垣文	淡青白色	灰白色密	18c後~19c 徳化窯	HB①O・P8~14Ⅰ 台241
41		口縁部	5.0 — —	1.4	3期	腰部から開き直に立つ、直口口縁。口唇は舌状。 外面: 樽垣文。型成形。	淡青白色	灰白色密	18c後~19c 徳化窯	HB①Ⅰ 台494	
42		胴部	— — —	39.4	3期	肩の継ぎ目から「く」の字状に屈曲する胴繫ぎがみられる。 外面: 草花文。	淡青緑白色	灰白色密	17c代 景德鎮窯	HB①O・P8~14Ⅰ 台239	
43	瓶	胴部	— — —	10.9	3期	なで肩の瓶である。外体面に蓮花文を施文している。 外面: 蓮花文。	淡青白色	白色密	17c代 景德鎮窯	HB②イⅡ 1018SX 台3296	
44		底部	— 6.0 —	68.4	3期	高台の断面形は三角状。内削りは外向き。 外面: (高台)圏線。	淡青白色 量付無釉	灰白色密	17c後~18c初 景德鎮窯	HB①O・P8~14Ⅰ 台241	
45		底部	— 1.7 —	15.9	3期	筒状の小瓶。縦位の張り合わせ跡が認められる。型成形。磁器薬瓶。 外面: 字款表(同仁堂口)+裏(平安散口)	淡青白色	白色密	17c後~18c初 景德鎮窯	HB②イK12Ⅱ 1006SK 台3290	



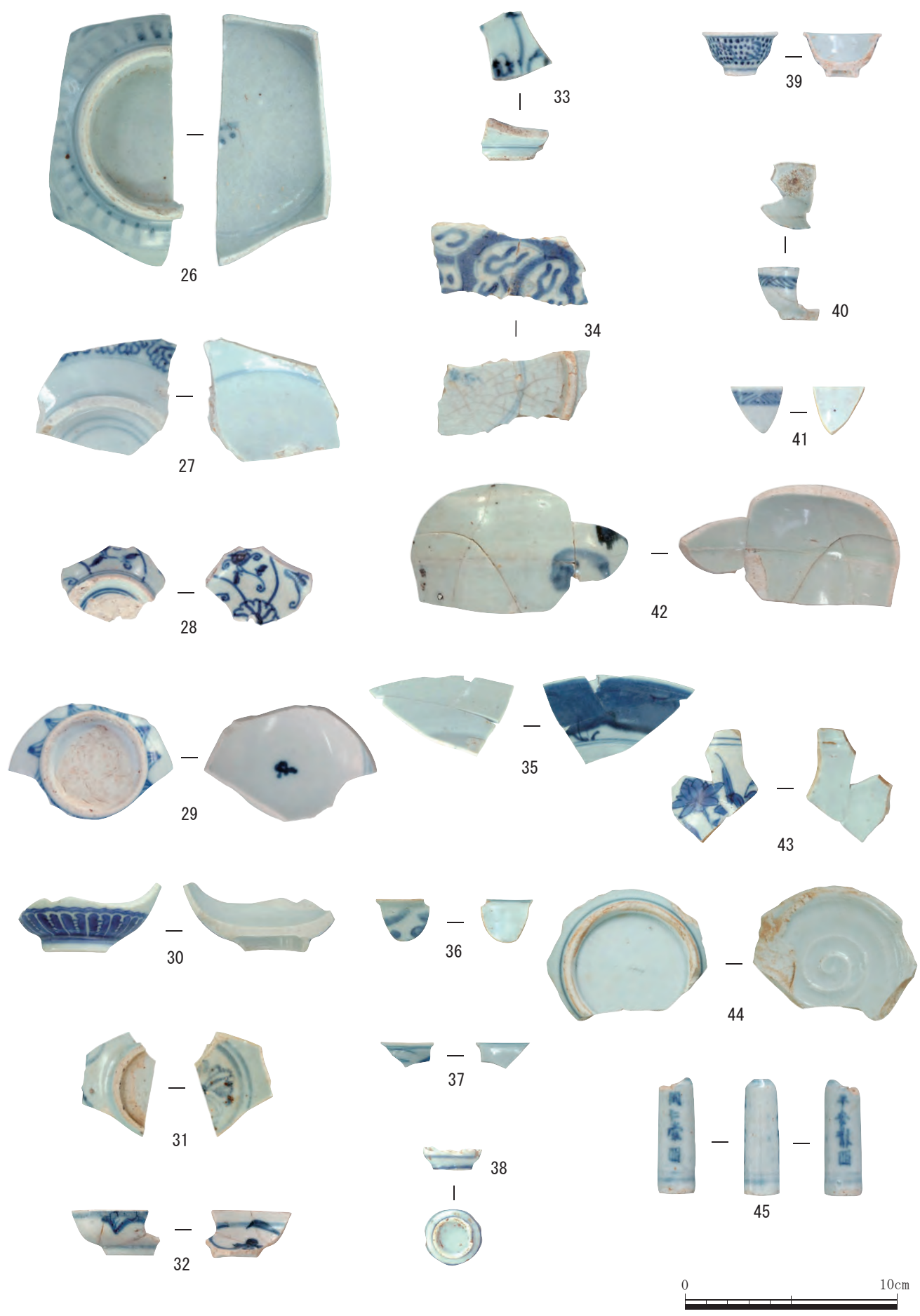
第111图 染付1



图版 71 染付 1



第112图 染付2



图版 72 染付 2

(6) 褐釉陶器・半練土器

褐釉陶器は総数で52点出土し、中国産の壺や播鉢と、タイ産の壺がある。大半は中国産の壺である。また、タイ産の半練土器の壺が1点得られている。第47表に出土量、第114図に平面分布、主なものを第115図と第48表観察一覧に示した。

中国産褐釉陶器 (図1~10)

総数41点、器種は壺が殆どで1点播鉢が得られている。壺は大型、中型、小型に分かれ中型は今回図化していないが口縁部6点、胴部2点の計8点得られている。

壺

小型 (図1~7) 口縁部4点、胴部2点、耳1点、底部1点の計8点得られた。

図1~7は茶壺が考えられる資料で、生産年代は14世紀~16世紀に位置づけられる。図1・2・6は肩が張り、器の最大径を肩部に近い胴上部に持つタイプである。図3~5はなで肩で器の最大径を胴部に持つ可能性があるものである。図1は肩が丸く張り、頸部はやや内寄り気味に上に引き上げ口縁部に至る。口縁は外側に折るように丸めた玉縁状を成す。器の最大径が肩部に近い胴上部に持つと考えられ、口縁部から肩まで残す唯一の資料であった。図2は玉縁口縁を成し、頸部が内寄り気味に上に引き上げられる資料で図1と同様の器形が考えられる。図3は断面形が「く」字状に肩から外側に折り返し口縁断面形態は方形を成す。図4は口縁部を内寄り気味に短く引き上げ口唇は平坦である。図5は四耳壺と考えられる。耳は肩の頸部寄りに横位に貼付されている。図6は肩が丸く張り、器の最大径を肩部に持ち図1と同様の器形が考えられる。図7は底径が9.6cmで器壁の薄い底部資料である。

大型 (図8・9) 胴部17点、底部4点、計21点と最も出土が多い。

底径が10cm~14cm大で器壁は1cm~1.5cm大の壺である。図8は紐作りの積み痕が顕著なもので外側に約60度の角度で急激に立ち上がる。図9は緩く立ち、底面は輪状に凹凸が認められる。15世紀~16世紀に位置づけられる。

播鉢 (図10) 播鉢1点の胴部がIV層より出土した。ボール状に丸味を持つ器形を呈する。9本組の櫛目が確認でき底部から口縁部方向に櫛描されたことが解る。明代に位置づけられる。胴タイプに沖縄県内では銘苅原遺跡(1997)、天界寺跡(II)(2002)、湧田古窯跡(IV)(1999)、渡地村跡(2007)などで出土している。

タイ産褐釉陶器 (図11・12)

総数11点得られ、胴部8点、耳1点、底部2点出土のうち2点図化した。図12は底部からほぼ直に立ち上がる。底面は扁平、内底面に轆轤痕が僅かに認められる。図11はやや大型の壺が考えられる。比較的扁平な底面を有し、底部は開き緩やかに立ち上がる。生産地メナムノイ窯、生産年代は15世紀後~16世紀に位置づけられる。同タイプが沖縄県内に首里城跡-京の内跡(I)(1998)、首里城跡-御内原北地区(2010)などで出土している。

タイ産半練土器 (図13)

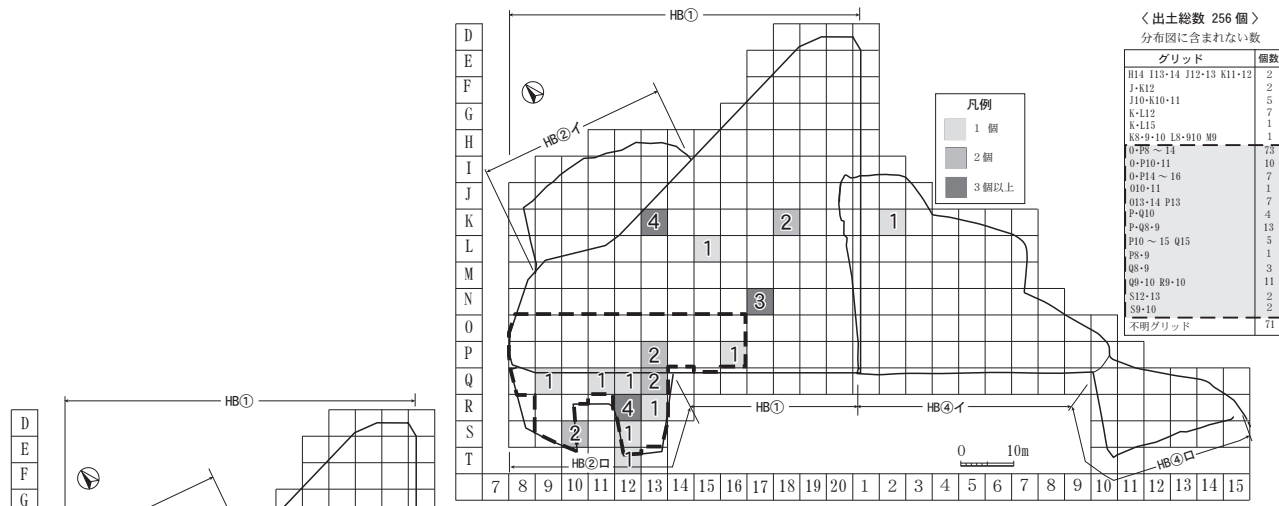
丸味のある平底を持つ壺が考えられる。底面に並行した溝が3ないし4条重なり合う叩き跡がみられる。15世紀~16世紀が考えられる。HB②ロ地区Q11IV層の出土である。同タイプに沖縄県内では渡地村跡(2007)、阿波根古島遺跡(1990)などで出土している。

<参考文献>

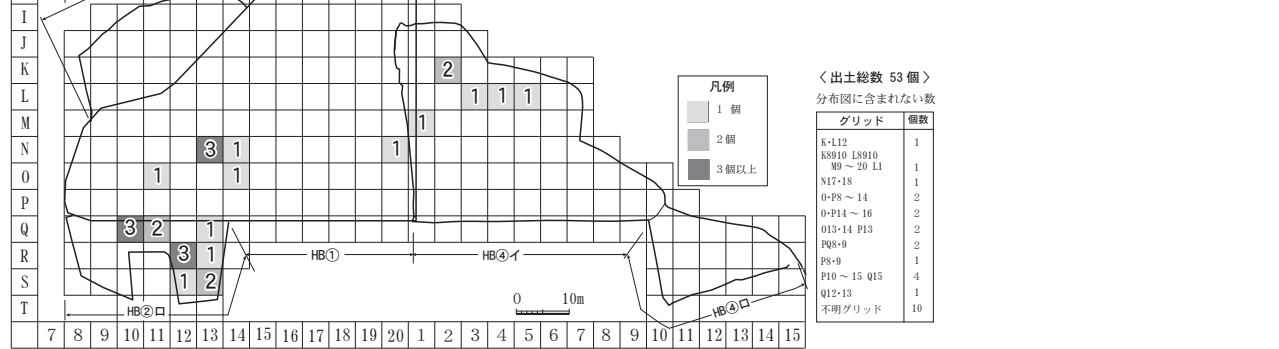
沖縄県立埋蔵文化財センター 2010 『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(1)』第54集

第47表 褐釉陶器・半練土器出土量

地区	層位	産地 器種 サイズ 遺構	中国産									タイ産					褐釉陶器 合計	タイ産 半練土器		
			壺						挿鉢			不明		壺						
			大		中		小							大		中				
胴	底	口	胴	口	胴	耳	底	胴	胴	底	胴	底	耳	胴	底					
HB①	I			1	1												2			
	II	1SK	2	2														5		
		240SZ	1						1									1		
		305SD				1												1		
		358SK	1				1											1		
	III	225SK														1		1		
271SD			2				1						1			4				
IV		2		3	1	1											7			
小計		6	3	6	2	3		1							1		24			
HB②イ	I		1															1		
	II	1018SX	1															1		
	不明															1		1		
	小計		2														1	3		
HB②ロ	I		1							1						1		4		
	II															2		2		
	III		2						1									3		
		2049SD	2															2		
	IV		3	1				1	1			1					8	1		
小計		8	1				1	2		1	1				2	3	19	1		
HB④イ	III		1												1	1		3		
	IV																2	3		
	小計		1														2	6		
合計			17	4	6	2	4	2	1	1	1	2	1	3	1	1	5	6	52	1
サイズ別計			21		8		8			1		2		1		5			6	
産地別合計			41						11											



第 113 図 染付出土平面分布

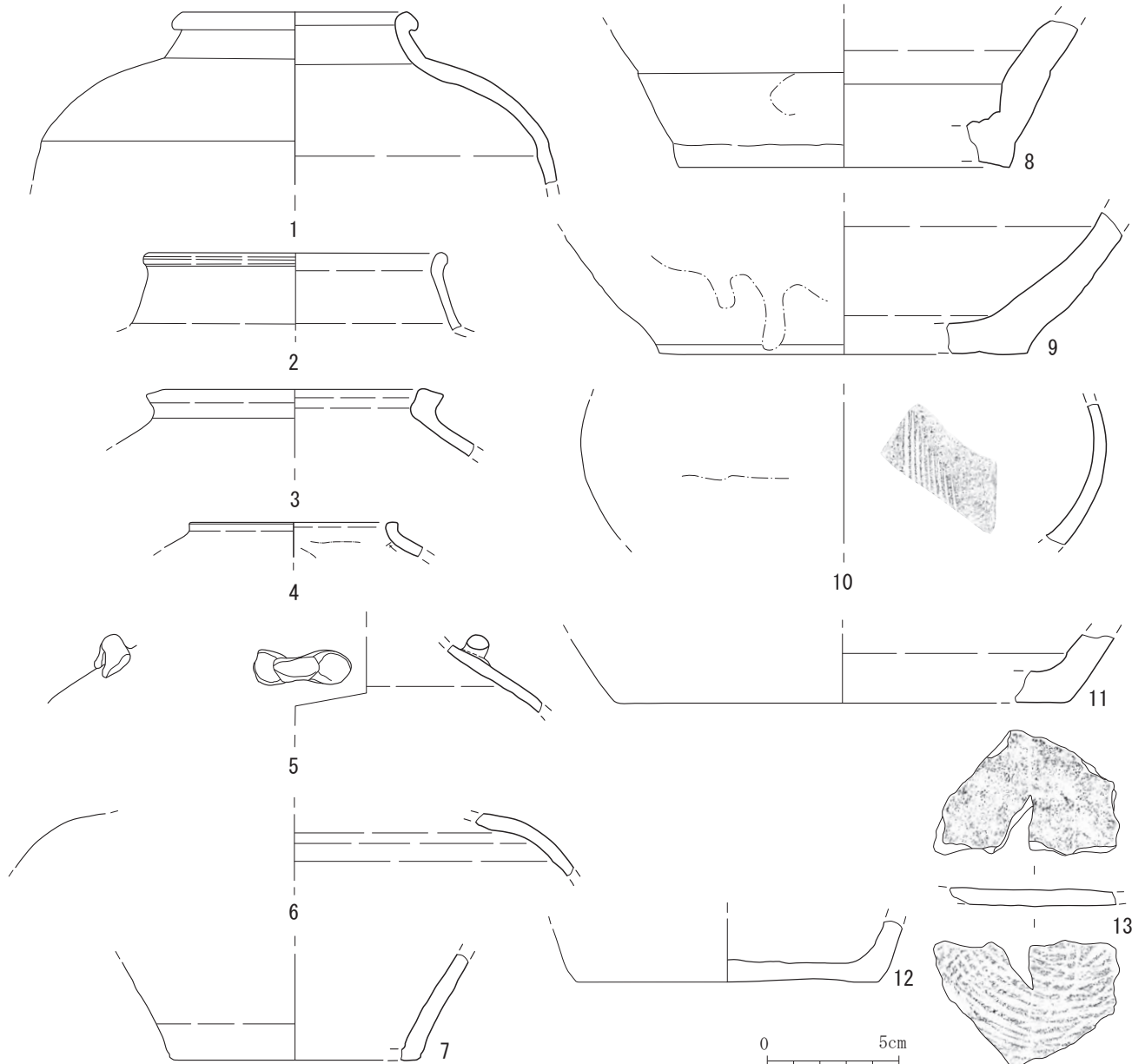


第 114 図 褐釉陶器出土平面分布

第48表-1 褐釉陶器・半練土器観察一覧

(法量単位: cm, g)

第図版	図番号	器種	分類	部位	口径 底径 器高	器形・器面調整・文様	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	生産年代 生産地	地区・グリッド・ 層位・遺構 台帳番号
第115 図・図版 73	1	壺	小型	口縁部	9.4 — —	肩は丸く張り、頸をやや内寄り気味に上に引き上げ口縁に至る。口縁は外側に折る様に丸める。器の最大径を肩部に持つものである。(40.5g)	暗褐色の釉をおおよそ外面は胴下部までと、内面は頸部から胴上部まで施す。釉は薄く塗布された物である。	橙色の密な胎土。黒褐色、白色の粒子を含む。	14c~15c 中国産	HB① N13 IV 台510
	2				11.0 — —	口縁は口唇が玉縁状を成し頸を内寄り気味に上に引き上げる。(7.5g)	暗褐色の釉を外面は頸部内面は頸上部まで施す。	赤紫褐色で細かな胎土。褐色と白色の粒子を含む。	15c~16c 中国産	HB① P-Q8.9 II 358SK 台484
	3				11.0 — —	口縁は頸部が短く引き上げられ外側に折り返し方形を成す。(12.4g)	暗褐色の釉を外面と内頸部付近まで薄く施す。	紫褐色で密な胎土。黒褐色、白色の粒子を含む。	15c~16c 中国産	HB②ロ S12 IV 台3371
	4				8.0 — —	口縁は頸部が短く引き上げられ外側に折り返し方形を成す。短頸の壺が考えられる。(3.2g)	暗褐色の釉を外面と内体頸部付近に施す。	褐色で細かな胎土。黒褐色、白色の粒子を含む。	15c~16c 中国産	HB① II 台356
	5			胴部 (耳)	— —	四耳壺と考えられる。耳は肩の頸部寄りに横位に貼付されている。(12.5g)	暗褐色の釉を外面と内体頸部付近まで薄く施している。	赤紫褐色で細かな胎土。褐色と白色の粒子を含む。	15c~16c 中国産	HB① P10~15, Q15 III 271SD 台491
	6			胴部	— — —	肩が丸く張り、器の最大径を肩部に持つ小型な壺である。頸部寄りに輪状の熔着痕がみられる。(23.0g)	暗褐色の釉を外面に施している。輪状熔着痕の見られる頸部近くは生焼けのせいか灰黒褐色である。	青灰色で細かい。黒色と白色の粒子を含む。	15c~16c 中国産	HB②ロ S13 IV 台3359
	7			底部	— 9.6 —	底面から外にやや開きながら立ち、器面には積み痕を確認することができる。(17.5g)	外体に付いた暗褐色の釉だれを拭き取っているが、内外ともに無釉である。	淡灰橙色で細かい。黒色と白色の粒子を含む。	15c~16c 中国産	HB②ロ I 台3327

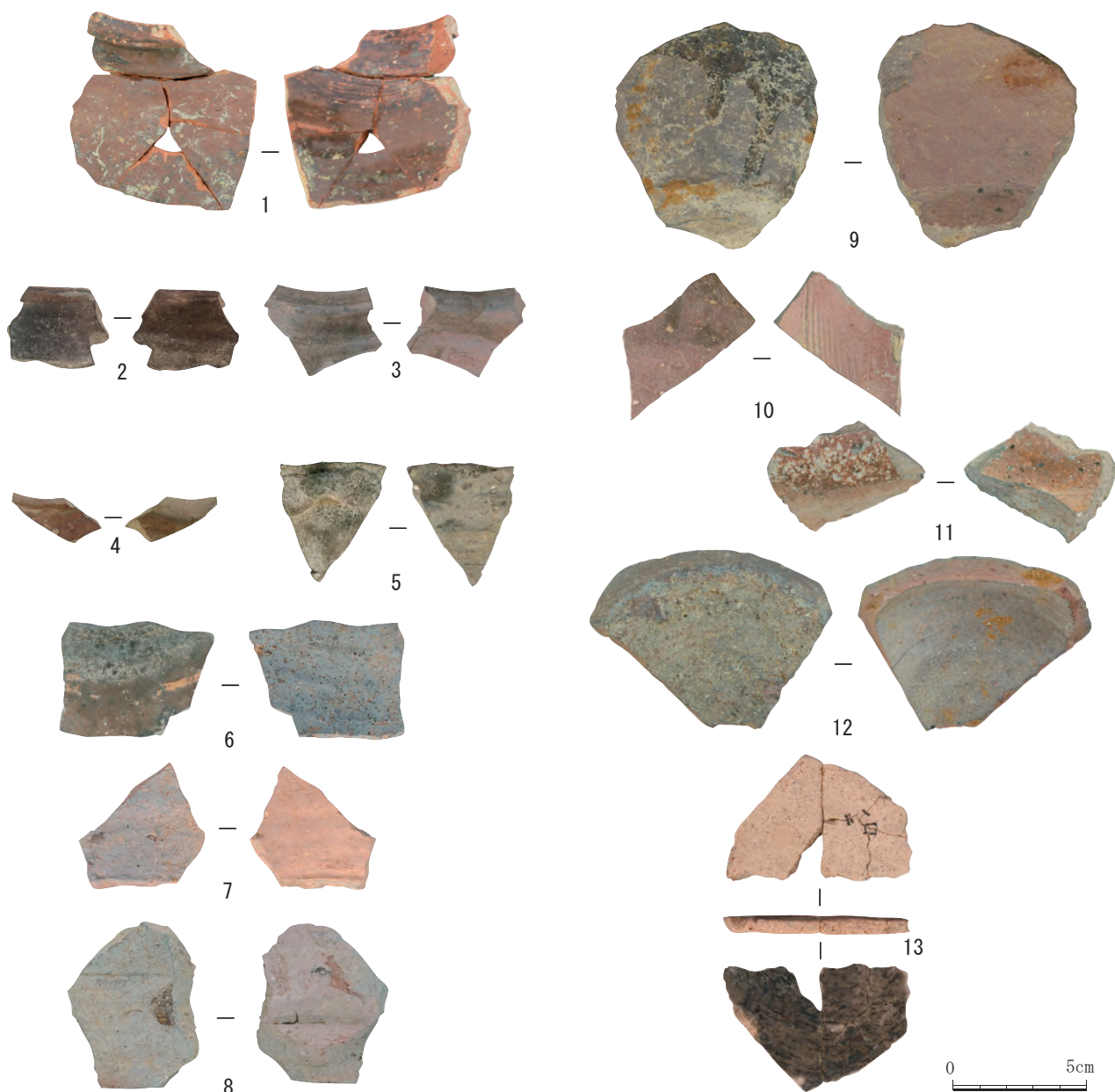


第115図 褐釉陶器・半練土器

第48表-2 褐釉陶器・半練土器観察一覧

(法量単位:cm, g)

第図版	図番号	器種	分類	部位	口径 底器高	器形・器面調整・文様	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	生産年代 生産地	地区・グリッド・ 序・遺構 台帳番号
第115図 図版73	8	壺	大型	底部	— 10.4 —	小さい底部から外に開きながら立つ。外面に積み痕が顕著である。(53.9g)	暗褐色の釉だれが付着するが、基本的には内外ともに無釉である。	赤紫褐色で細かい。赤褐色、黒色、白色の粒子。	15c~16c 中国産	HB① O・P14~16 II 台486
	9			底部	— 14.0 —	底部は外に大きく開きながら立ち上がる外体面に積み痕が顕著である。(130.7g)	暗褐色の釉だれが付着するが、基本的には内外ともに無釉である。	赤紫褐色で細かい。黒褐色、白色の粒子を含む。	15c~16c 中国産	HB① O・P8~14 I 台241
	10	播鉢	中型	胴部	— — —	ボール状に丸味を持つ。楯目は9本確認でき底部から口縁部に向けて楕円。(13.9g)	外面の胴部まで暗褐色の釉を施している。内体無釉。	赤紫褐色で細かい。赤褐色、黒色、白色の粒子を含む。	明代 中国産	HB② 口 R13 IV 台3363
	11	壺	大型	底部	— 17.2 —	底部からやや開きながら緩やかに立ち上がる。底面は扁平で熔着剥離痕がみとめられる。(29.9g)	暗褐色の釉垂れがみられるが、内面外面ともに無釉である。	灰紫褐色で細かい。赤褐色、黒色、白色の粒子を含む。	15c~16c タイ産 メナムノイ窯	HB④ イ L5 III 台129
	12	壺	中型	底部	— 11.4 —	底部からほぼ直に立ち上がる底面は扁平、内底面に轆轤痕が僅かに認められる。(72.3g)	外面に暗褐色の釉垂れがみられる。内面外面ともに無釉である。	赤紫褐色で細かい。赤褐色、黒色、白色の粒子を含む。	15c~16c タイ産 メナムノイ窯	HB① N1 7.18 III 台610
	13	壺		底部	— — —	半練土器の底部である。僅かに丸い平底で内底面は指圧と考えられる凹凸がみられ、外面は並行した筋状の敲き痕がランダムな重なりで確認できる。(12.4g)	内面外面ともに無釉である。外面一面に煤が付着。	淡茶白色(クリーム色)で細かい。赤褐色、黒色、白色の粒子を含む。	15c~16c タイ産	HB② 口 Q11 IV 台3331



図版 73 褐釉陶器・半練土器

(7) その他の輸入陶磁器

出土点数の少ない輸入陶磁器をここに含め報告する。磁器は、青磁染付小碗3点、鉄釉染付1点、瑠璃釉1点、色絵5点がある。陶器に華南三彩1点が得られている(第49表)。いずれも中国産である。ほぼ同じ年代でHB①地区Ⅱ・Ⅲ層、HB②口地区Ⅱ層から出土している。

主なものは図示(第116図)し、観察一覧(第50表)を示した。

青磁染付(図1～3)

小碗の口縁部1点、底部2点である。図1は胴に丸味を持ち口縁は上部で僅かに外反する。口唇は丸く整えている。図2・3は小さく華奢な高台を有し胴部に丸味をおびる。翡翠色の釉を外面に掛け内面には透明釉と掛け分けている。外底面に方形銘款を呉須書きしている。いずれも生産地は景德鎮窯、生産年代は18世紀後半～19世紀前半に位置づけられる。

鉄釉染付(図4)

小碗の口縁資料が1点得られている。外反口縁を持ち口唇は丸く整える。器厚は3mmで薄手である。外面は鉄釉掛、内面に二条の圏線を呉須描する。生産地は景德鎮窯、生産年代は17世紀末～18世紀初に位置づけられる。

瑠璃釉(図5)

口縁から底部まで残した図上復元が可能な小杯の資料である。口径に比して大きめ底部を持ち、高台から僅かに膨らみ直に立つ口縁は直口で口唇は尖る。型成形の小杯で生産地は徳化窯、生産年代は18世紀後半～19世紀前半位置につけられる。

色絵(図6)

総数5点で、すべて小碗である。口縁部2点、胴部3点が得られた。作図外の4点は全て徳化窯系の17世紀～18世紀に位置付けられる型成形の小碗であった。図6は腰部の資料で外面に黄色と青色の草花文を描くが、小片のため詳細は不明。生産地は福建・広東系、生産年代は17世紀～18世紀に位置づけられる。

華南三彩(図7)

中国南部の福建省、広東省で生産された華南三彩で1点得られた。鳥の胴体部分の破片資料で鳥羽が浮き文で表現され緑釉と黒釉で彩釉されている。型成形の鶴型水注が考えられる。生産地は福建・広東、生産年代は明代に位置づけられる。同タイプに沖縄県内では首里城京の内(1998)、首里城西北側下(西)(2010)、首里城管理用道路(2001)、豊見城村内伝世品(1988)、本町では伊礼原E遺跡(2010)、伊礼原D遺跡(2013)、伊礼原A遺跡(2014)などで出土している。

<参考文献>

沖縄県教育委員会 1998 『首里城跡—京の内跡』 沖縄県文化財調査報告書 第132集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『首里城跡—管理用道路地区』 沖縄県立文化財センター調査報告書 第1集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2010 『首里城跡—御原北地区(Ⅰ)』 沖縄県立文化財センター調査報告書 第54集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2012 『中城御殿跡』 沖縄県立文化財センター調査報告書 第63集

金城亀信・長嶺均ほか 1988 『豊見城の遺跡』 豊見城村文化財調査報告書 第3集

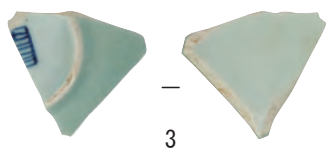
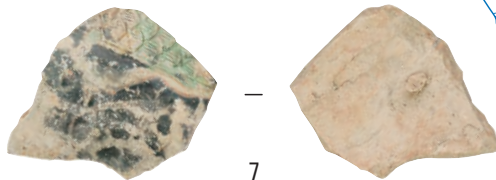
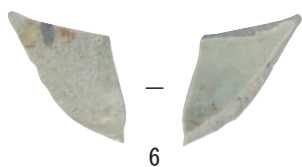
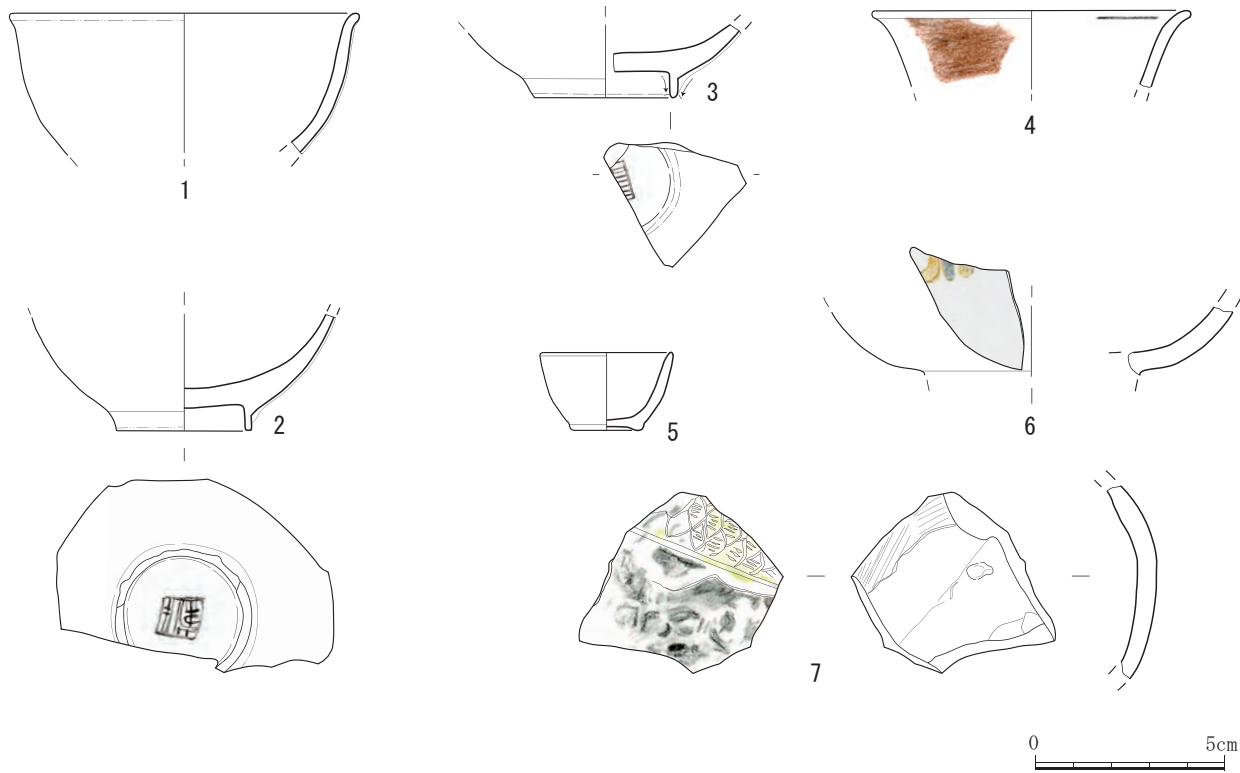
第49表 その他の輸入陶磁器出土量

地区	層位	遺構	分類	青磁染付	鉄釉染付	瑠璃釉	色絵		三彩	合計
			器種	小碗	小碗	小杯	小碗		水注(鶴型)	
			生産年代	18c後～19c前	17c末～18c初	18c後～19c前	17c～18c		明代	
			窯	景德鎮	景德鎮	徳化	福建広東	徳化	福建広東	
HB①	I						1(口)		1	
	II	240SZ	1(底)			1(胴)			2	
		1SK 62SK	1(口)					1(口)	1	
	III	199P						1(胴)	1	
163SK 271SD		1(底)					1(胴)	1		
HB②口	I							1(胴)	1	
	II	2002SZ 2054SX		1(口)	1(口～底)				1	
合計				3	1	1	1	4	1	11

第50表 その他の輸入陶磁器観察一覧

(質量単位: cm)

第図 図版	図 番号	種類	器種	部位	口径 底径 器高	器形・文様・器面調整	釉・呉須 (色・範囲・貫入)	素地 (混和材・質)	生産年代 生産地	地区・グリッド・層位 遺構・台(取)番号
第116 図・ 図版 74	1	青磁 染付	小碗	口 縁部	9.2 — —	胴部は丸味を持ち開きながら立つ。口縁は先端で外反させ、口唇を丸く整える。	薄翡翠色の釉を外面に施釉し内面は透明釉を施している。口唇は露胎している。	白色微粒子密	18c後～19c前 景德鎮	HB① K・L12 II 1SK 台377
	2		小碗	底部	— 3.6 —	腰部にやや丸味を持ち口縁に向い開き立ち上がる。高台は畳付けが丸味のある断面三角状を成し、やや内割りで細い。外底面は平坦、中央に四角形の呉須描の銘款が認められる。	薄翡翠色の釉を外面の高台際まで施す。内面と外底面は透明釉を施し畳付けは露胎。呉須は藍色である。	白色微粒子密	18c後～19c前 景德鎮	HB① P・Q10 II 240SZ 台490
	3		小碗	底部	— 3.6 —	高台の形態は細作りの内割りで畳付けを外側から三角状に削り出し、断面形は三角状を成す。外底面は平坦、中央に四角形の呉須描の銘款が見られる。	薄翡翠色の釉を外面の高台際まで施す。内面、外底面は透明釉を施す。畳付けは露胎し呉須は藍色である。	白色微粒子密	18c後～19c前 景德鎮	HB① K・L15 III 163SK 台609
	4	鉄釉 染付	小碗	口 縁部	8.4 — —	胴上部から直に口縁に至り口縁は外反している。口縁部の内面上部に二条の圏線を巡らせている。	褐色の釉を外体に施す。内面は透明釉を施す。畳付けは露胎である。呉須は藍色。	白色微粒子密	17c末～18c初 景德鎮	HB②口 II 2002SZ 台3367
	5	瑠璃 釉	小杯	口 底	3.6 1.8 2.1	高台から僅かに膨らみ立つ口縁部は直口する。型成形である。	緑青色の釉を外面の外底面まで施す。内面は透明釉を施す。口唇は露胎。	白色微粒子密	18c後～19c前 徳化	HB②口 II 2054SX 台3369
	6	色絵	小碗	胴部	— — —	腰部の丸い小碗である。胴部外表面に黄色と青色の文様を施すが小破片のため詳細は不明。	透明釉	灰白色微粒子密	17c～18c 福建・広東	HB① P・Q10 II 240SZ 台490
	7	華南 三彩	鶴型 水注	胴部	— — —	胴上部に鳥羽を浮き文で描く、鳥形(鶴)水注の胴と考えられる。型成形で裏面に指ナデ痕が認められる。	羽の部分は緑釉と黄釉を胴下半部は黒釉を彩釉するものである。	生成り色の微粒子で密、褐色の粒子を僅かに含む。	明代 福建・広東	HB②口 I 台3327



第116図・図版74 その他の輸入陶磁器

(8) 瓦質土器

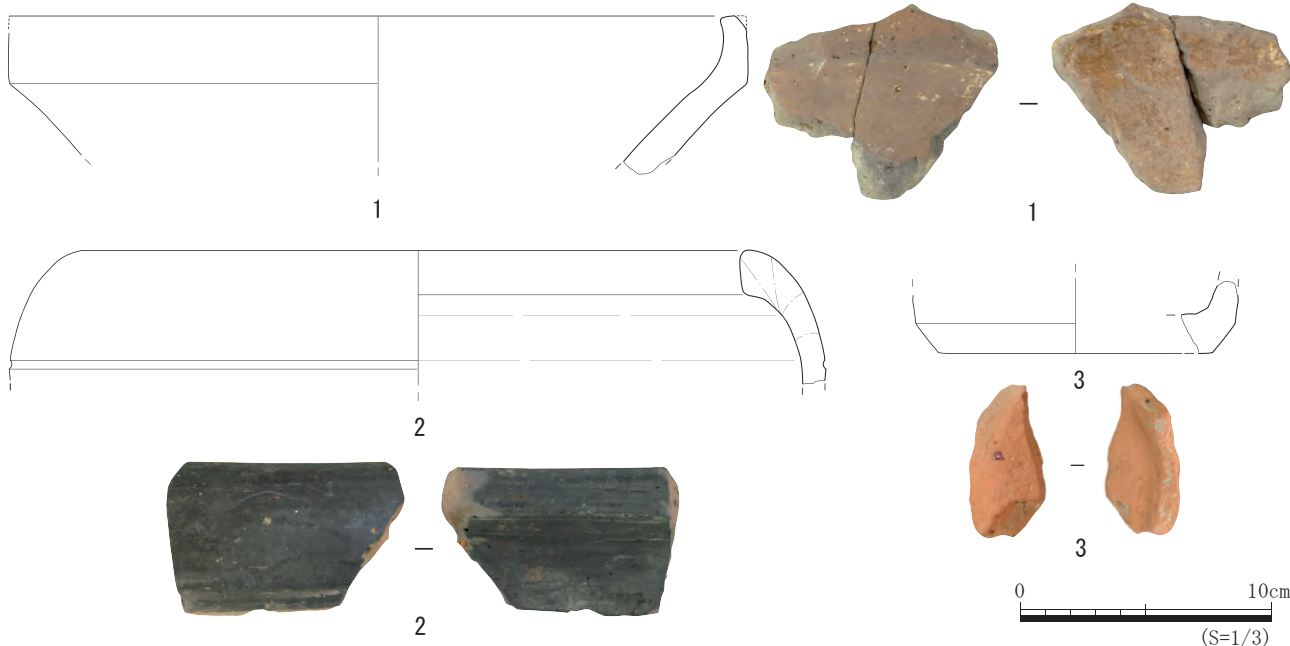
湧田産や本土産、近世以降の生産と考えられる瓦質土器が計4点確認できた。胎土はいずれも精良である。遺物の詳細については第51表に記載し、第117図、図版75に示す。

図1は湧田産の播鉢口縁部で15世紀後半～16世紀後半に製作された備前産の播鉢を意識した器形である。内面に櫛目が1本確認できる。図2は18世紀～19世紀に製作された本土産（関西系）の風炉か火鉢と考えられる口縁部で、燻しにより黒色化した器表面を磨く。図3は近世以降に生産されたと考えられる火取の底部で陶質土器製火取（第159図19）と底部の削り等器形が類似している。

第51表 瓦質土器観察一覧

(法量単位:cm, g)

第図 図版	番号	器種	部位	口径 器高 底径	重量	器厚	色調 (芯部)	混和材	器面調整		文様等	産地	地区・グリット 層位・遺構 台帳番号
									内面	外面			
第 117 時 ・ 図 版 75	1	播鉢	口縁	推29.2 - -	80.9	1.2	灰褐色 (淡灰色)	黒色粒・茶色粒 石灰質砂粒 若干の雲母	不明	回転擦痕 指ナデ	口縁が僅かに内傾 櫛目が1本見える	沖縄	HB②ロ R12 III 台3341
	2	風炉 火鉢	口縁	26.4 - -	111.2	1.0 } 1.8	黒色 (淡灰色)	黒色粒・赤色粒 白色粒・雲母	回転擦痕 指ナデ	篋削り ナデ消し	胴部に一条の圈線 積み上げ痕が明瞭	本土 (関西系)	HB②ロ Q8・9 II 2054SX 台3369
	3	火取	底	- - 11.0	30.8	1.1	赤橙色 (淡橙灰色)	黒色粒・赤色粒 砂粒	ナデ消し	ナデ消し	-	沖縄	HB① P8・9 II 305SD 台343



第117図・図版75 瓦質土器

(9) 本土産陶器(近世)

近世に製作されたと考えられる本土産の陶器が合計33(碗7、皿1、壺23、土瓶2)点得られた。底部数と破片有りを最少個体数とすれば碗3点、皿1点、壺2点、土瓶2点と非常に少ない。生産地は内野山・薩摩・信楽で、器類は内野山(肥前系)、貯蔵器は薩摩・信楽であった。33点のうち26点がHB①地区、4点はHB②イ地区、3点はHB②ロ地区からの出土。また、33点のうち12点が遺構からの出土で、8点は戦前(Ⅱ層)の遺構、4点が近世(Ⅲ層)に属する遺構からの出土であった。いずれも沖縄産無釉陶器・沖縄産施釉陶器・本土産磁器などの近世以降に製作された遺物との伴出が多く見られた。主な遺物については第52表に詳細を記載し、第118図、図版76に示す。

図1は内野山産の碗である。高台からほぼ斜め上方へ向かって緩やかに延び口縁部に至る器形で

高台内に兜巾を持つ。器形と施釉範囲から『九州陶磁の編年』のⅣ期（1690～1780）と考えられるが、高台内に兜巾がある事からⅣ期の早い時期と思われる。畳付けは焼成後に磨かれて砂目は見られない。図2は肥前で作られた京焼風陶器で撥形の高い高台を持つ呉器手の碗である。呉器手碗の終末期に作られたそうである(註)。図3は信楽産の茶壺の肩部である。長石の吹き出しが見える。耳が付くタイプだと思われる。図4～7は薩摩産の陶器である。図4は壺の口縁部で、口縁部内側下及び外面から粘土を貼り付け、断面三角形に作られる。口唇部に貝目が残るが、貝は1.5cm前後の間隔を空けて置かれたようである。図5は壺の底から胴部へ向かう立ち上がり部分で、内外面共にうっすらと器面調整痕が見える。胎土から沖縄産無釉陶器の可能性も考えられる。図6・7は土瓶の底部でサイズ違いである。図7には煤が付着する。

<註> 大橋康二先生よりご教示頂いた。

<参考文献> 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
江戸遺跡研究会〔編〕2001 『図説 江戸考古学研究事典』

第52表 本土産陶器(近世)出土量

出土地区	器種	碗						皿 関西系?	壺				土瓶 薩摩	合計
		内野山			肥前系				薩摩?		信楽	九州産?		
		産地	部位	口	胴	底	胴		底	口	胴	底		
HB①	I					1		1		7				9
	II	1SK	1							6				7
		62SK			1									1
		358SK							1	1				1
		240SZ								1				1
III	155P			1									1	
	271SD			1							1		1	
合計		1	2	1	1		1	1	17		1	1	26	
HB②イ	I									2				2
	II	1018SX					1				1			2
	合計						1			2	1			4
HB②ロ	II											1	1	2
	III	2049SD	1											1
	合計		1										1	3
総合計		2	2	1	1	1	1	1	19	1	1	1	2	33

第53表 本土産陶器(近世)観察一覧

(法量単位: cm, g)

第図版	番号	器種	部位	口径器高底径	重さ	素地/焼成	器形	施釉/所見	産地	製作年代	地区小グリッド層位遺構台帳(取上)番号
第118図・図版76	1	碗	口	11.2 5.9 4.8	130.7	淡灰白色で粒子はきめ細かく精良 外面の銅緑釉にはガラス質が見られない	直口口縁 高台からはぼ斜め上方へ向かって緩やかに延び口縁部に至る	外面:銅緑釉を施し腰部以下露胎 内面:透明釉(細かい貫入) 畳付け:焼成後、研磨されているようである。高台内側に兜巾。	内野山	17C末 18C後	HB②ロ Q12 III 2049SD 取2008
	2	碗	底	- - 6.6	16.9	淡黄白色で粒子はきめ細かく精良	撥形の高い高台を持つ	外面(高台内含):白化粧後、畳付けのみ化粧土を掻き取る 内面:透明釉	肥前系	17C末 18C前	HB②イ KL8・9・10 II 1018SX 台3296
	3	茶壺	肩	最大径 11.0	47.5	灰白色の微粒子で密、黒色の粒子を含む。	肩部に最大径を持ち、耳が付く	暗褐色の釉を外面に施す。 長石の吹き出しあり。	信楽	江戸期	HB① P10~15・Q15 II 271SD 台491
	4	壺	口	15.6 -	19.1	赤褐色土に若干の黒色粒と白色粒混入。 非常に堅緻	外反口縁 口縁部は内側下及び外面から粘土を貼り付け断面三角形に作る。	口唇部には重ね焼きのための貝目が残る	薩摩	17C	HB① PQ8・9 II 358SK 台484
	5	壺	底	- -	23.4 16.6	赤褐色土に若干の赤色粒と白色粒混入。 非常に堅緻	-	器表面・胎土ともにピンホールが見られる 沖縄産無釉陶器の可能性あり	薩摩?	17C	HB②イ KL8・9・10 II 1018SX 台3296
	6	土瓶	底	- -	28.8 8.0	赤橙色に微細な赤色粒と砂粒混入/堅緻	丸底を呈し、底部より丸みを帯びながら胴部へ移行	焼成により底面と胴部への移行部に色の違いを生じる	薩摩	18C 19C	HB②ロ II 台3328
	7	土瓶	底	- -	32.6 -	赤橙色に大粒の赤色粒と砂粒混入。 堅緻	丸底を呈し、底部より丸みを帯びながら胴部へ移行	内面:釉を掻き取るが、轆轤目に沿って若干釉が溜まっている。 外面:上部1/4に釉を掛け、以下には煤が付着。	薩摩	18C 19C	HB① PQ8・9 II 358SK 台484



第118図・図版76 本土産陶器（近世）

(10) 本土産磁器（近世）

明治時代以前に製作されたと考えられる碗 20 点、小碗 10 点、小杯 3 点、皿 18 点、鉢 3 点、仏飯器 1 点、瓶 6 点、急須 16 点、段重蓋 3 点、器種不明 3 点の合計 83 点を確認した。底部数と破片有りを最少個体数とすれば、碗類 11 点、皿類 10 点、袋物 4 点であった。同時期の器類として中国産磁器は多数得られている。生産地としては肥前系（特に有田産）が大半を占め、瀬戸美濃系は数点のみである。83 点のうち 43 点は遺構（P・SD・SK・SX・SZ）からの出土であるが、271SD 以外は戦前の土坑や溝で中国産・沖縄産・本土産の陶磁器との伴出であった。271SD はⅢ層（近世）の溝状遺構で屋敷囲いの可能性も考えられる。

以下、主な遺物について第55表にて詳細を記載し、第119・120図、図版77・78に掲げる。

図1～5は肥前系の碗である。図1は内面口縁下に文様帯が入り、鉢の可能性もあるが口径が15cmのため碗とした。図2は山水文碗の口～腰部で、焼成不良により発色していない。図3・5は見込み荒磯文碗の胴部と底部である。色味や文様に類似性があり同一碗の可能性もあるが、出土地点が違う事から別個体として報告する。図4はその形状と厚みから「くらわんか碗」と考えられる底部である。図6・7も肥前系の小碗と小杯で碗よりは若干古手である。図8～10は口錆が施される同タイプの中皿で、小片のため報告を省いた2点を含めると、圏線や寛入の有無の違いから計6タイプの中皿が確認できた。ほぼ同じ地点より出土。図11は底部で針支えの痕が残る。図8～10の中皿と同タイプであるが一時期古手である。図12は瀬戸美濃産と限定できる皿で内面に靈芝が描かれる。図13は皿の底部で見込みにコンニャク印判による五弁花、外底面に渦福が見られる。図14は内面には菊・桐・花菱など縁起の良い花を描き、外面には古手の芙蓉手を描く八角の皿である。図15は大皿でやや「L」字状になる口縁を持ち、内面に大きく水草を描く。図16は段重の蓋で外面に雪輪文を窓に梅花、水仙、福寿を描く。図17は仏飯器で上面から打ち欠いた痕が見られ、二次加工の可能性も考えられる。図18は外面に太湖石を描くが中皿（図8～10）よりは若干古手である。図19は瓶の胴部で鋸歯状の網目文から17世紀後半に製作されたようである。

<参考文献> 九州近世陶磁会 2000 『九州陶磁の編年』
西田宏子・大橋康二（監） 1988 『別冊太陽 古伊万里』 平凡社

第54表 本土産磁器（近世）出土量

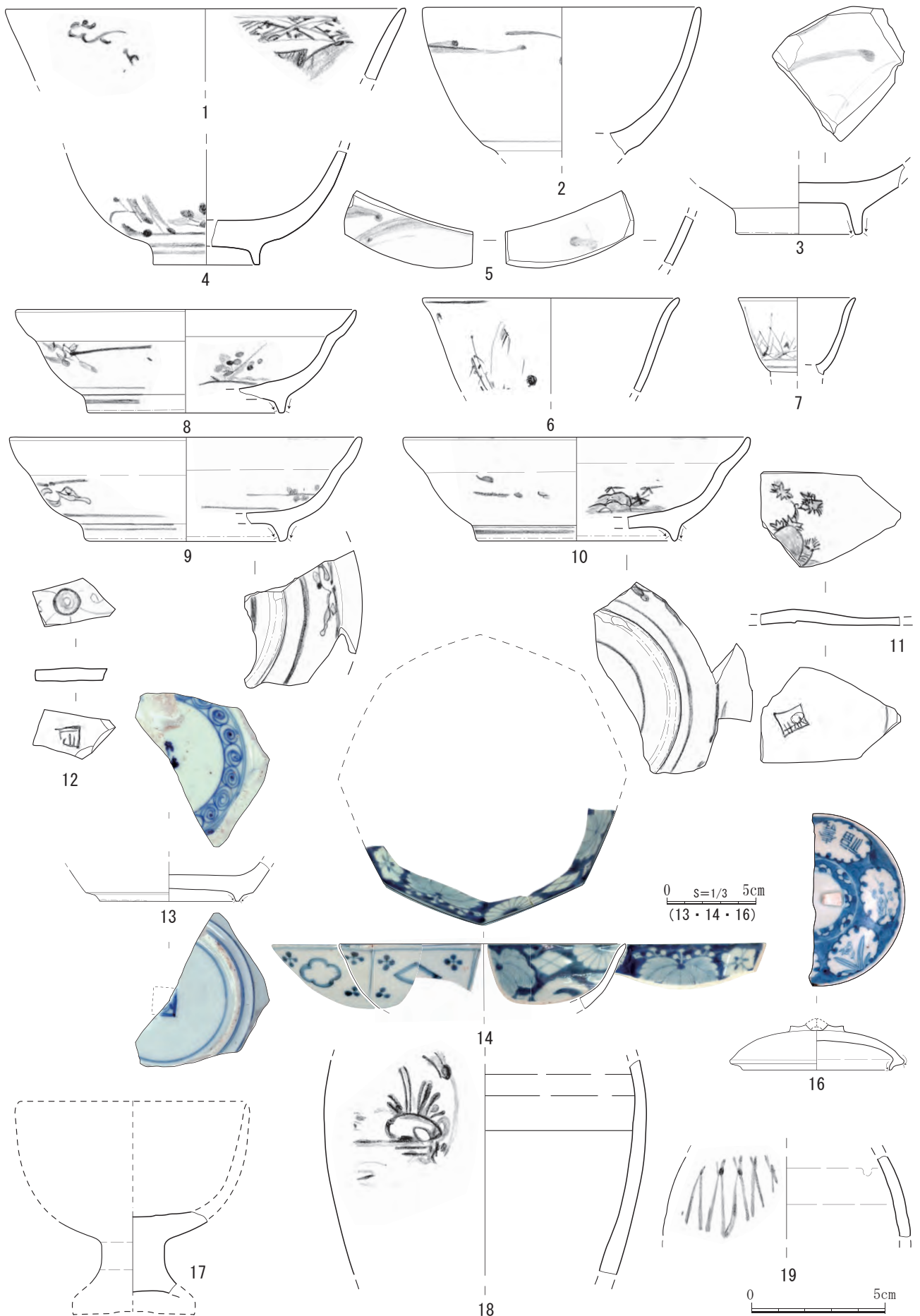
器種・部位 地区・層位・遺構	碗			小碗			小杯		皿		中皿		大皿		鉢		仏飯器		瓶		急須			蓋		不明		合計
	口	口～底	胴底	口	口～底	底	口	口～底	口	口～底	胴	口～底	底	口～底	口	胴	底	胴	胴	注口	口	胴	底	底	胴	底		
H B ①	I	3		1	2	1	1		5			4	2	1					1	1	1							24
	II	33P			1					1							1											3
		81SK			1																							1
		358SK											1	4					1			4	1			1		14
		359SK	1				2													1	1							4
		100SZ										1										1						2
240SZ				1								1														2		
III	271SD																			2							2	
合計	4	3	2	4	1	5	1	6	1	4	3	1	1	1	1	6	2	4	2	1	1	1	1	1	1	54		
H B ②	I			1																							1	
	II																										2	
	イ			1	1				1																		3	
H B ②	ロ	I			1																1		1	1				5
		II	1		1				1																		4	
		2002SZ	2	2							1	1		1		1												8
		2003SZ																					1					1
		2004SX	1																									1
	2054SX			1																		1	2		2		6	
III	合計	4	2	3			1		1	1		1		1	1						3	3	1	2	2	26		
器種合計	8	2	7	3	4	1	5	2	1	6	1	2	4	4	1	1	1	1	1	6	2	7	5	2	3	2	1	83
最小個体数/合計		5/20			6/10			3		1/9			8	1		3		1	6		2/16		3		3			

※皿はサイズ特定の難しかったもの

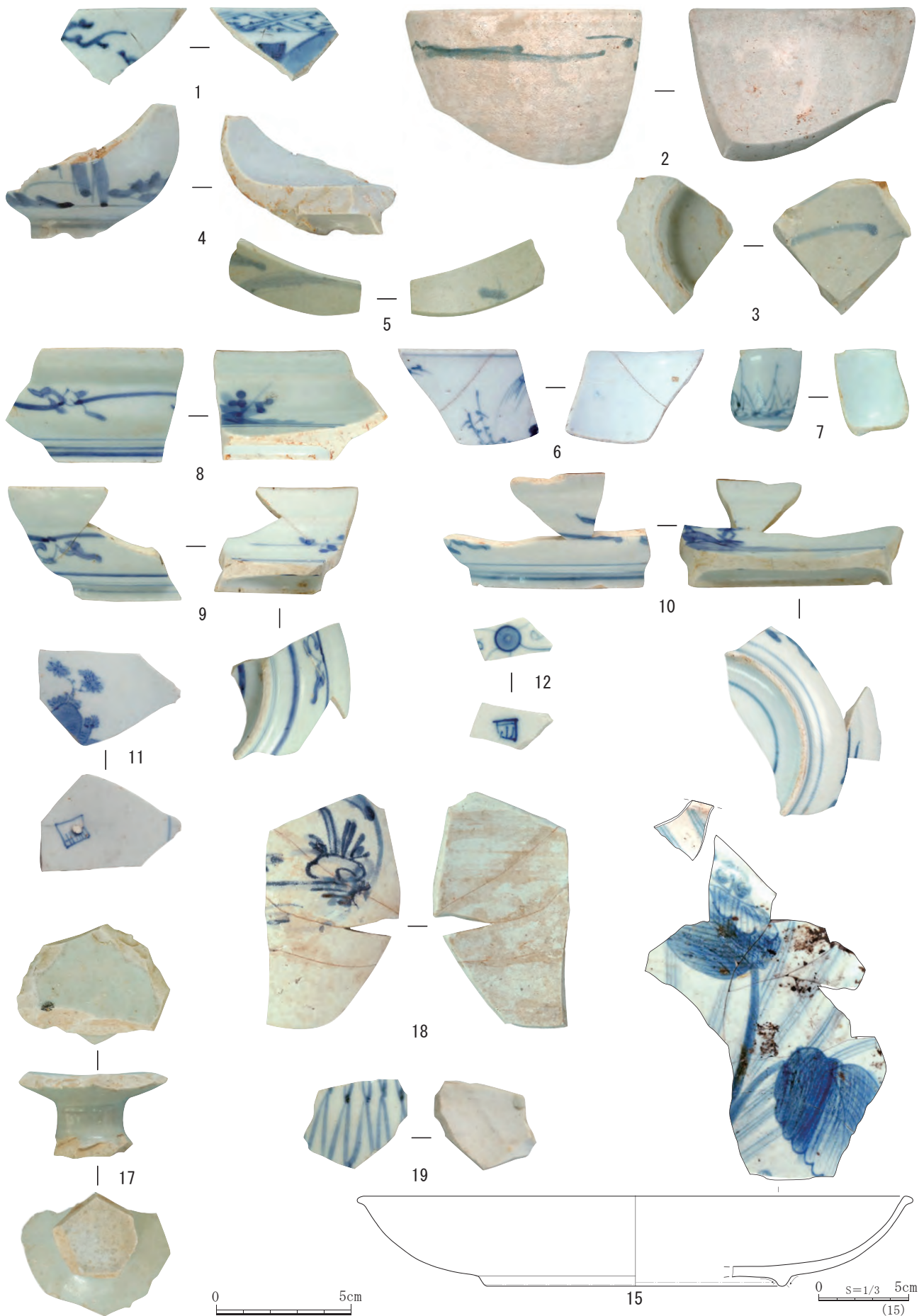
第55表 本土産磁器(近世) 観察一覧

(法量単位: cm、g)

第図 図版	番号	器種	部位	口径 器高 底径	重量	器形	文様・施釉・所見	素地/混入物	成形 技法	産地	年代	地区 グリッド 層位 遺構 台帳番号
第 119・ 120 図・ 図版 77・ 78	1	碗	口	15.0 — —	6.37	直口口縁 口唇舌状	外面:雲 内面:口縁下に四方棒	灰白色で堅緻 ピンホール	轆轤	肥前系	17C末 ~ 18C前	HB① OP8~14 I 台239
	2			10.4 — —	39.72		外面:山水文				17C 後半	HB① OP8~14 I 台239
	3		底	— — 4.8	36.42	不明	見込み:荒磯文 畳付けのみ無釉	淡灰色で堅緻		1655 ~ 1680	HB① OP8~14 I 台239	
	4			— — 4.0	31.4		外面:植物 全面施釉のため畳付けに 付着物あり	青灰色で滑らか 若干の微細な黒色 粒		17C末 ~ 18C前	HB① OP8~14 I 台239	
	5		胴	— — —	6.2	外面:雲龍 内面(胴):魚	淡灰色 微細な黒色粒とピ ンホール	不明		17C	HB②イ KL8・9・10M9 II 1018SX 台3296	
	6	小碗	口	9.6 — —	7.97	端反口縁 口唇舌状	外面:柳・葦	灰白色で堅緻	轆轤	肥前系	1650 ~ 1660	HB① OP10・11 II 359SK 台340
	7	小杯	口	4.4 — —	3.39	端反口縁 口唇舌状	外面:蓮弁文	灰白色で堅緻	轆轤	肥前系	1650 ~ 1660	HB① I 台494
	8	中皿	口 底	12.8 3.9 7.4	27.46	底部から内彎 して立ち上がり、 胴部で一 度外側に屈曲 させ、口縁部 を受け口状に 内湾させる	外面:ハート状如意頭唐草 内面:梅花、口唇:口銹 畳付けのみ無釉	灰白色で堅緻 ピンホール	轆轤 型打ち	有田	1670 ~ 1700	HB① O・P8~14 I 台241
	9			13.2 3.9 7.6	17.6		外面:如意頭崩れの唐草 内面:太湖石・竹筴 口唇:口銹 畳付けのみ無釉				1680 ~ 1700	HB① OP8~14 I 台239
	10		13.1 3.9 7.6	33.1	中央部で厚み を持つ	外底面:針支えの痕と銘 内面:岩に植物	17C 末				HB① P・Q10 II 240SZ 台490	
	11		底	— — —	10.5	不明	外底面:銘あり(不明) 内面:霊芝文				白色で堅緻	機械? 轆轤
	12	皿	底	— — 8.0	66.71	—	外底面:渦福、内面:渦文 見込み:五弁花(コンニャク 印判)/畳付けのみ無釉	灰白色で堅緻 若干の微細な黒色 粒	轆轤 型打ち	有田	1690 ~ 1730	HB②ロ I 台3385
	13			16.2 — —	49.04	八角	外面:芙蓉手 内面:菊・桐・花菱・三弁花	青白色で滑らか			1780 ~ 1820	HB②ロ 2002SZ 台3367
	14	大皿	口 底	31.2 5.1 16.8	183.3	「L」字状口縁	内面:水草 畳付け:アルミナ塗布	白色で堅緻	轆轤	肥前系	1780 ~ 1860	HB① I 台494
	15	段重 蓋	底	9.8 — —	45.23	鈕は熨斗形	外面:雪輪文を窓に梅花・ 水仙・福寿	白色で堅緻 若干のピンホール	轆轤	有田	1770 ~ 1810	HB②ロ I 台3370
	16	仏飯 器	胴	— — —	43.73	脚は円筒形、 外底面は平坦	高台内の割り込は浅く無釉 5ヶ所に打ち欠いた痕が見 られる。二次加工か?	灰白色の微粒子。 黒色微粒子を含む	轆轤 底部 削り出し	肥前系	1630 ~ 1660	HB① PQ8・9 II 358SK 台484
	17	瓶	胴	— — —	35.1	いかり肩	外面:窓絵(太湖石・草木)	白色で非常に堅緻 ピンホール	轆轤	肥前系	1650 ~ 1670	HB① P10・15~Q15 III 台491
	18			— — —	8.27	なで肩	外面:網目文 (鋸歯状に描く)	青白色で滑らか			17C 後半	HB① P10・15~Q15 III 台491



第119图·图版77 本土産磁器（近世）1



第120図・図版78 本土産磁器（近世）2

(11) 貝製品

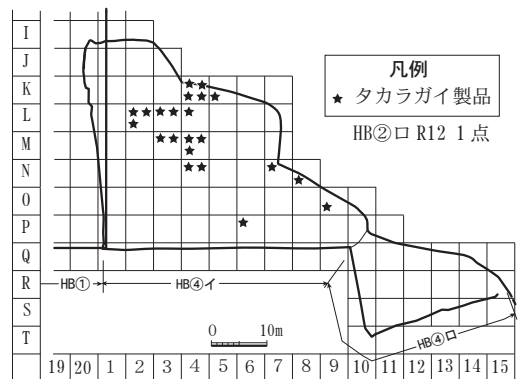
タカラガイの背面を除去したいわゆる貝錘が 23 点出土した。地区別には HB②口地区でハナマルユキ 1 点、HB④イ地区でハナマルユキ 22 点、ハナビラダカラ 1 点の計 23 点で、出土層は 1 点のみ III 層で、残りすべて IV 層である。

タカラガイの貝錘は背面の残存により、大きく A：殻軸（巻）を残すもの、B：殻軸（巻）を残さないものに分けられる。(島袋 1997) さらに A は A①：巻有 1 点、A②：巻が半欠 4 点、A③：巻無が 12 点でその中にはハナビラダカラ 1 点が含まれる。B①：軸半欠 4 点、B②：軸欠 2 点と総じて A の割合が 73.9% と高い。分類別に写真を示し、2 点は図示した。第 56 表に示した貝製品番号と図版は一致する。貝の大きさは殻幅が平均殻径 2.4cm、殻高 3.3cm、重さ 6.1g を測る。

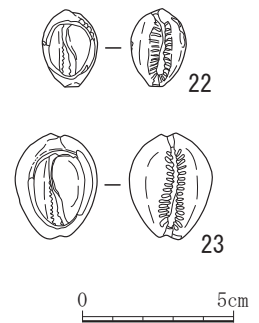
本品は民俗事例(上江洲 1972)でも漁網錘に用いられており、HB④イ地区の IV 層に集中することからほぼ同じ重さで、数を多く必要とする網の条件を満たしている(島袋 2004)。本層ではグスク土器やカムイヤキ、白磁、青磁なども出土することから本品の上限を示す資料といえる。同様な遺跡には今帰仁村古宇利原遺跡(1983)、うるま市の前頂原遺跡(1987)などグスク期～近世の遺跡がある。

第 56 表 タカラガイ製品観察一覧 (法量単位:cm, g)

第図 図版	分類 記号	貝製品 番号	貝種	殻長 (横)	殻高 (縦)	重さ	観察事項	地区・グリッド・層位 台帳番号
第 122 図・ 図版 79	A①	21	ハナマルユキ	2.4	3.1	5.8	色残△	HB④/L4IV台251
		4		2.3	3.3	5.5		HB④/K4IV台249
		7		2.5	3.2	7	縁整う	HB④/N7IV台297
	A②	9	ハナマルユキ	2.2	3.1	4.9		HB④/M3IV台301
		18		2.6	3.5	8.7	色残△	HB④/M4IV台302
		1		2.3	3.3	6	色残△	HB④/K4IV台249
		5		2.8	3.8	9.9		HB④/N8IV台284
	A③	6		2.5	3.3	7		HB④/L2IV台235
		8		2.3	3.2	4.9		HB④/M3IV台301
		11	ハナマルユキ	2.6	3.3	6	風化	HB④/O9III台220
		13		2.5	3.4	6.5		HB④/K5IV台281
		14		2.7	3.5	7.6		HB④/L2IV台265
		15		2.6	3.5	7.3		HB④/L2IV台265
		16		2.3	3.4	5.6	前溝摩耗△	HB④/M4IV台302
		19		2.5	3.3	6.68		HB④/L3IV台258
		22	ハナビラダカラ	1.8	2.6	2.6	実測No.4022	HB④/N4IV台262
		2		2.4	3.2	4.9		HB④/K4IV台249
	B①	12	ハナマルユキ	2.6	3.6	6.6	前溝摩耗△	HB④/P6IV台241
		17		2.8	3.9	10.3	色残△	HB④/M4IV台302
		20		2.5	3.3	5.6		HB④/L3IV台258
		3		2.1	2.9	2.3	色残△	HB④/K4IV台249
	B②	10	ハナマルユキ	2.2	2.7	3.6		HB④/N4IV台254
		A③	23	ハナマルユキ	2.8	3.5	5.9	実測No.4030



第 121 図 タカラガイ製品出土平面分布



- A①: 21
 - A②: 4. 7. 9. 18
 - A③: 1. 5. 6. 8. 11. 13. 14
15. 16. 19. 23. 22
 - B①: 2. 12. 17. 20
 - B②: 3. 10
- (番号は第 56 表と一致)

第 122 図 図版 79 タカラガイ製品

<註・参考文献>

- 島袋春美 1997「県内出土の「タカラガイ製品」について」『南島考古』NO.16 沖縄考古学会
 島袋春美 2004「奄美・沖縄諸島の漁網錘の形態的研究(その3)ー考古資料ー」『南島考古』第23号 沖縄考古学会
 今帰仁村教育委員会 1983『古宇利原遺跡発掘調査報告書』今帰仁村文化財調査報告書第8集
 具志川市教育委員会 1987『前頂原遺跡ー石灰石採掘に伴う緊急発掘調査報告ー』
 上江洲 均 1973『沖縄の民具』慶友社

(12) 骨製品

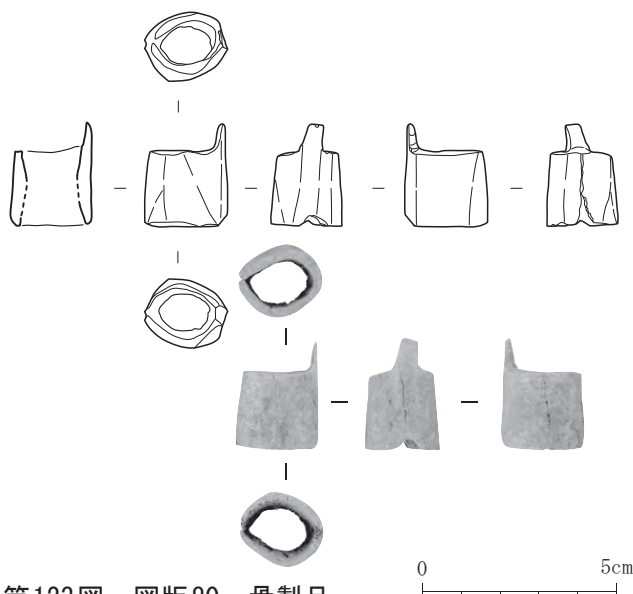
イノシシかブタの四肢骨を加工したものが、HB②ロ地区2007P(Ⅲ層)から1点出土した。

四肢骨の骨体を横位に切断し、上端が骨体方向となる。上端部の細かい部分には台形状の突起があり、研磨し管状にしたものである。

横断面は楕円形を呈し、上端が1.6×1.9cm、下端が2.0×2.3cm、突起部は上端が細く幅0.3cm、下端が0.6cmを測り、先端は削られて細くなる。外面及び断面もほぼ全面研磨され、研磨の方向は横位が主である。製品の上下端も削られ細くなる。

沖縄産無釉陶器の胴部(器種不明)と共伴する。Ⅲ層(近世)に属する遺構である。

骨の断面の形状から大腿骨の遠位部の可能性が高い。重さ3.9gを量り、何らかの付随的使用が想定されるが、現段階では類例はみられない。

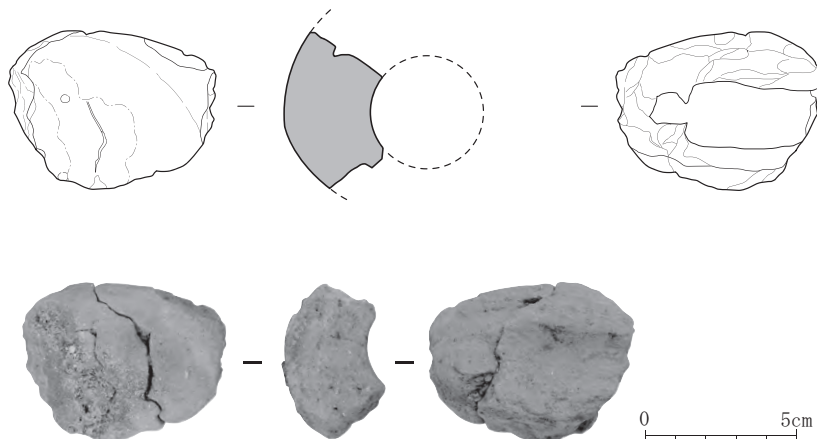


第123図・図版80 骨製品

(13) 羽口・焼土

羽口は1点の出土である。破損品で外径9.3cm、内径3.7cm、厚さ2.8cmを測る。外面は砂粒などが熔着し灰褐色を呈し、他は内面と同じ橙褐色を呈する。内外面とも羽口の面が残る。1～2mmの石英粒、砂粒を少量混入する。HB②イ地区K11Ⅲ層(取1001)の標高4.279mで近くからは敲石兼磨石も出土する。小堀原遺跡(2012)では外径が5.0～12.0cm大の羽口が出土するが、本品は、同遺跡の第138図7に近い。

焼土は全体的に少なく、羽口と関連するものとしてはⅢ層(近世)で2.8gと少ない。ただし、HB②イ地区J11、K11のⅤ層出土は貝塚時代後期の遺構に関連するものと思われる。(貝塚時代後期遺構参照)



第124図・図版81 羽口

第57表 焼土出土量

地区	層位	遺構	個数	重量(g)
HB①	Ⅱ	299SK	11	86.2
	Ⅰ	排土	1	4.2
HB②イ	Ⅲ	近世層	2	2.8
	Ⅴ	貝層①	2	13.0
HB②ロ	Ⅳ	ガス層	1	4.0
合計			17	110.2

(14) 銭貨

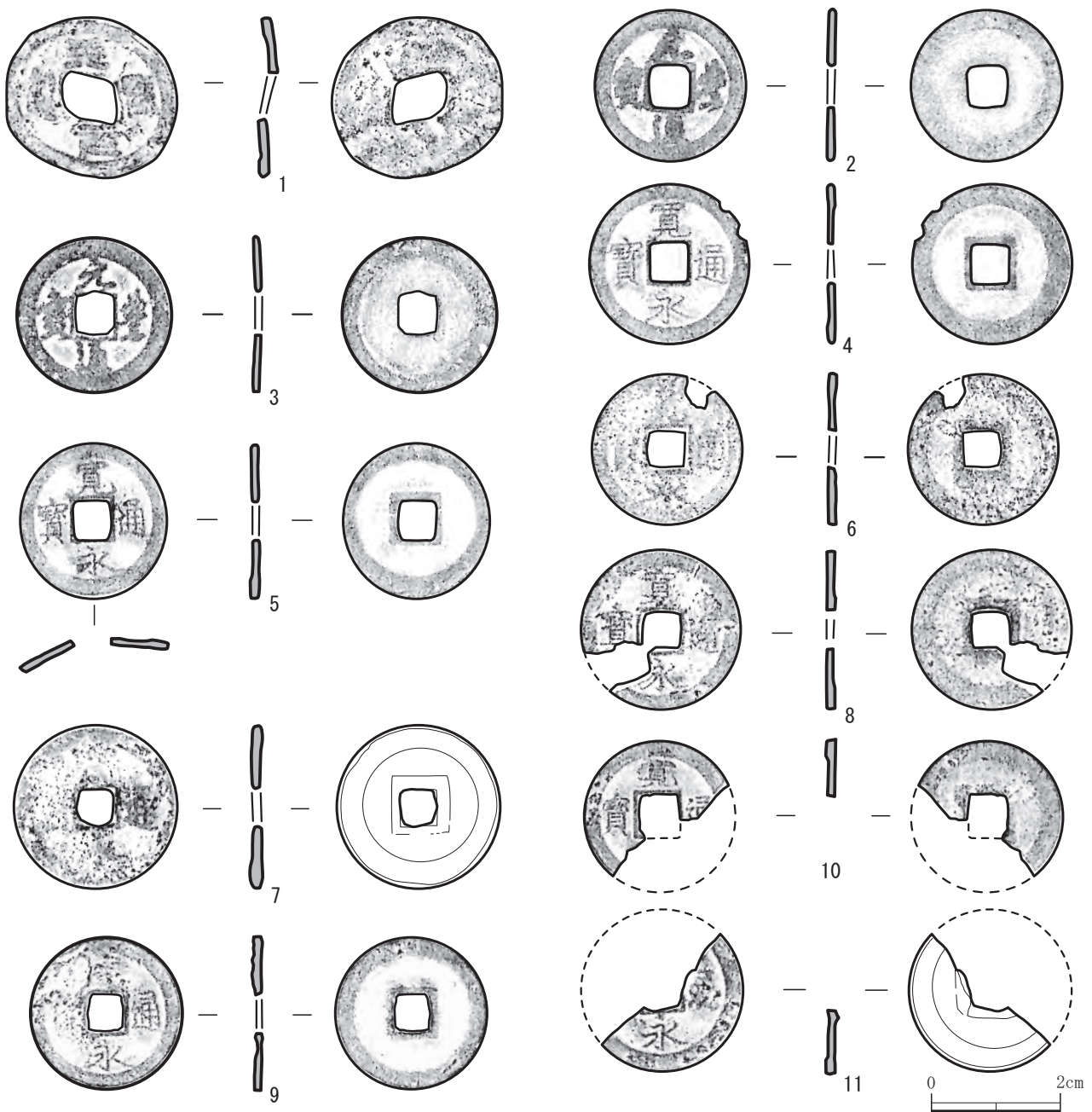
HB①地区で6点、HB②口地区で4点、HB④イ地区で1点の計11点得られた。種類は天聖元寶1点、元豊通寶2点、寛永通寶8点で、前2者は中国の北宋銭、後者は日本銭である。

北宋銭：天聖元寶は篆書で1023年に鑄造されたもので、日本への渡来量が多いため、中世だけでなく近世の寛永通寶に混じって出土することもある(兵庫埋蔵調査会1996)。

元豊通寶の書体は行書で沖縄では6番目に多い(宮城2008)出土である。

日本銭：寛永通寶はすべて楷書体で、中には鉄成分の多いもの2点(図5・7)も含まれている。

出土地は271SDで元豊通寶と寛永通寶が出土していることから同時期に使用されたと判断される。またHB①地区76P、HB②口地区2024Pでも寛永通寶が出土していることから、近世の遺構と判断される。



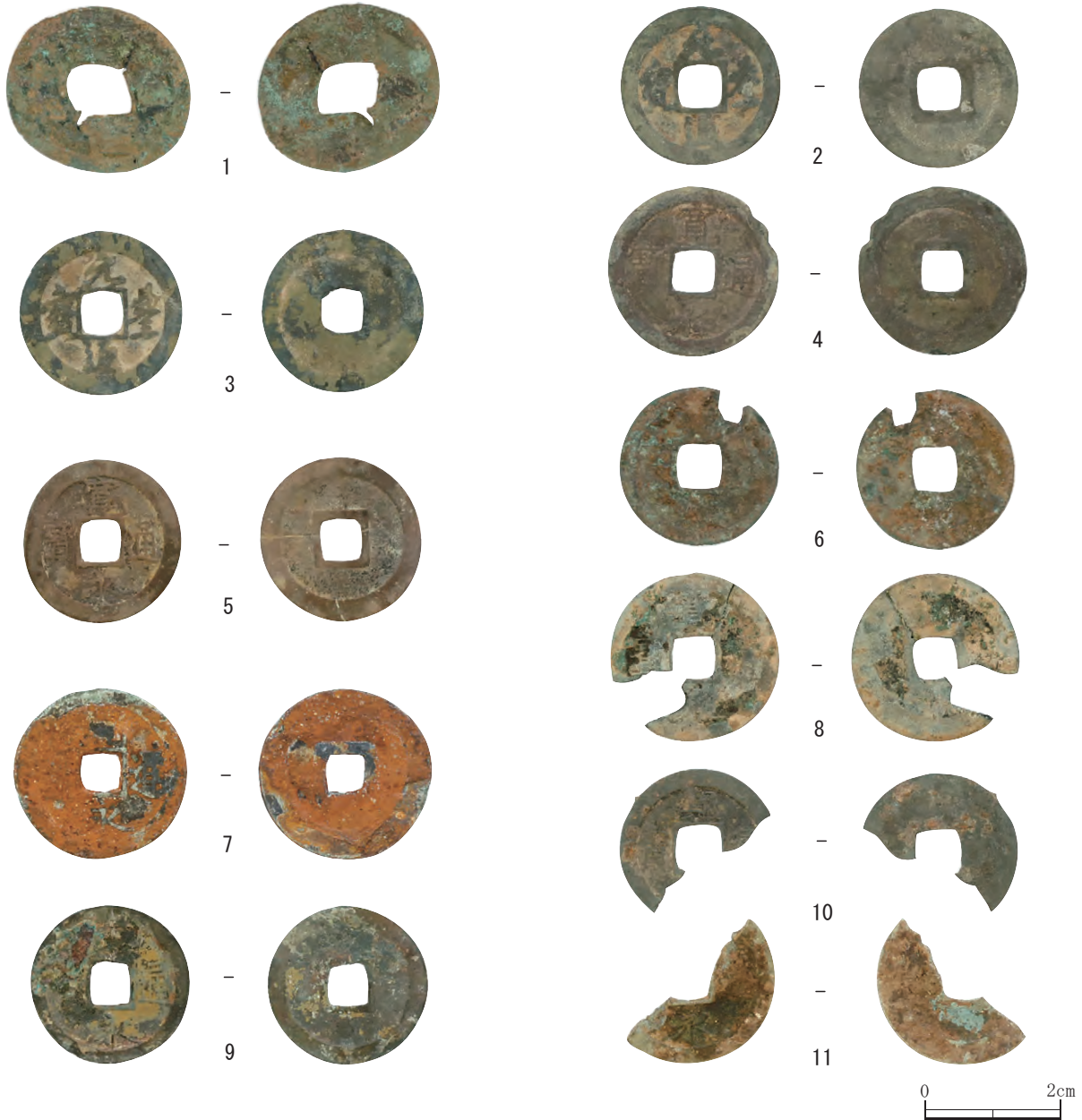
第125図 銭貨

第58表 銭貨観察一覧

(法量単位:cm、g)

第図版	図番号	銭貨名 銭文	背文字	初鑄造	残存	外径	内径	縁幅	縁厚	重量	字体	内縁・観察	地区・グリッド・層位・遺構・台帳番号
第125図・図版82	1	天聖元寶	無	1023年北宋	完	2.7	0.80	0.23	0.11	3.6	篆書	外圧により孔にヒビが入り、歪む。裏面摩耗。	HB④イ L2 IV 台491
	2	元豐通寶	無	1079年北宋	完	2.4	0.65	0.25	0.15	3.4	行書	表裏面摩滅	HB① P14 III 271SD 取29
	3	元豐通寶	無		完	2.5	0.65	0.28	0.14	2.5	行書	表裏面摩滅	HB① P14 III 271SD 取31
	4	寛永通寶	無		完'	2.5	0.65	0.20	0.10	2.4	楷書	外縁に2ヶ所の幅2mmの刻み有。	HB① P14 III 271SD 取30
	5	寛永通寶	無	1636年初鑄「古寛永」、1668年「新寛永」1738年「鉄銭」、 「文銭」は新しい	完	2.4	0.60	0.25	0.15	3.1	楷書	外圧により湾曲、赤錆(鉄分多し)横に沈線あり。	HB① P14 III 271SD 取25
	6	寛永通寶	無		完'	2.4	0.65	0.20	0.15	2.6	楷書	外縁欠、表裏面摩滅、特に裏面は強い。	HB① L14 II 76P 台636
	7	寛永通〇	無		完	2.5	0.60	0.30	0.20	4.1	判読	縁幅が広い。表裏面に錆付着、摩滅。	HB① K15 III 取1
	8	寛永通寶	無		3/4	2.5	0.70	0.25	0.15	2.9	楷書	表裏面摩滅	HB②ロ S12 III 2024P 台3380
	9	寛永通寶	無		完	2.4	0.65	0.20	0.15	2.7	楷書	表面に錆付着、裏面摩滅。径1mmの孔痕、貫通せず。	HB②ロ 南側 II 台3343
	10	寛口通寶	無		1/2	2.3	0.70	0.30	0.10	1.6	楷書	裏面摩滅	HB②ロ 南側 II 台3343
	11	口永通口	無		1/2	-	-	0.20	0.18	1.7	楷書	半欠、錆付着。裏面摩滅	HB②ロ 南側 II 台3343

<凡例>○:判読不可 □:欠 完':ほぼ完形



図版 82 銭貨

(15) 簪

HB①地区で2点出土した。図1はI15、I層、図2はP9、281SD II層の出土で、いずれも点取りされており、前者が標高4.4m、後者が2.4mの値を示す。

簪の型はいずれも匙型で素材は前者が青銅、後者が真鍮製である。形状は頭部で1.5cm前後、首部で厚さ0.35cmの正六角形を呈し、竿部でねじり、その先端では太く0.5cm×0.3cmの扁平の六角形を呈する。大きさは図2の真鍮製が若干小さいが、逆に重い。出土遺物から考慮するといずれも近世に属すると判断される。

第59表 簪観察一覧

(法量単位:cm, g)

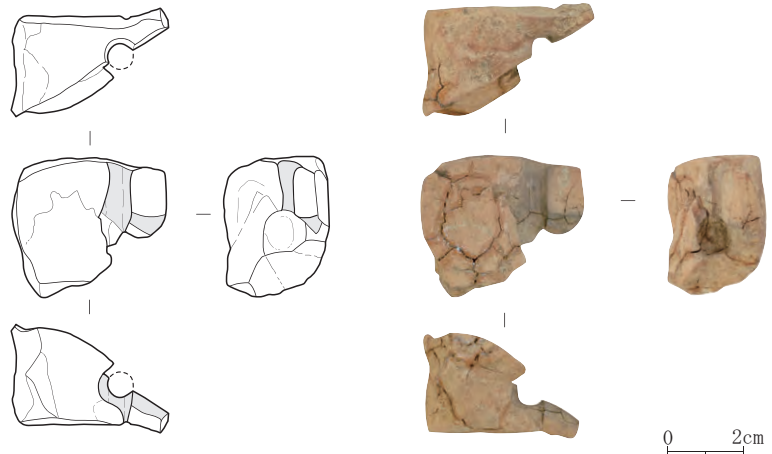
第図 図版	図番 号	分類	素材	全長	頭部 幅	首部		竿部		重量	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取上)番号
						首	厚さ	竿	厚さ		
第126 図版 83	1	匙型	青銅	14.7	1.5	2.8	0.35	10.05	0.3×0.5	12.09	HB① I15 I 取77(EL4.432)
	2	匙型	真鍮	13.7	1.4	2.7	0.35	9.7	0.4×0.5	15.3	HB① P9 281SD II 取33(EL2.471)



第126図・図版83 簪

(16) 石製品

石製品が1点得られた。本品は破損し全体の形状は不明、残存形は上面、下面観とも三角状を呈す。加工痕と捉えられる部分は2カ所で孔を穿った痕跡が確認される。孔は破損、半欠状態で、それぞれ開けられた方向が異なり、一方は縦方向、もう一方は横に縦の孔と直角に交差、大孔が小孔の方を遮る形を呈し又、両者の孔には研磨痕が残る。計測値は残存長3.7cm、残存幅4.1cm、残存厚2.8cm、孔のサイズ、大、縦1.4cm、横0.7cm、小は縦1.1cm、横0.6cm、重量35.7g、出土地はHB①地区K.L12 1SKである。



第127図・図版84 石製品

(17) 砥石

砥石が3点出土した。図1は分銅形を呈し、側面、下面は不均等、図2は方形で表面、両側面、上下に使用痕が確認できる。図3は破損し大きさは不明、扁平で上部に穿孔、携帯砥石と思われる。貝塚時代の砥石にない微細な切り傷状の線条痕を確認、刃物を研ぐ用途に使用した可能性がある。

第60表 砥石観察一覧

(法量単位: cm, g)

第図版	図番号	平面形態	側面形態	上面・下面形態	完・破	加工痕/使用痕 (敲打・研磨の位置)	観察事項	石質	最大長 最大幅 最大厚	重量	地区・グリッド・層位 遺構・台(取)番号
第128 図・ 図版 85	1	分銅形	上厚・下薄	横長楕円	完形	敲打痕-表裏面中央 研磨痕-表裏面 擦痕-両側面・下面	小型、扁平、表面中央に敲打痕あり、浅く窪む、研磨良好、表裏面にみられる、裏面、両側面に刃物状の擦りの痕跡、刀を研いだか?	砂岩	9.1 3.0 3.0	224	HB②□ Q9.10・ S9.10 II 2002SZ 台3367
	2	方形	厚み不均等	横長四角形	破損	研磨痕-両側面・ 上面・下面 擦痕-両側面 上面・下面	残存形態は小型、方形、やや厚手不均等、四面使用痕あり、表面は平坦だが自然面、裏面も剥離の痕跡あり、両側面、上面、下面に切り傷状の刃物を擦った痕跡、下面の使用痕は幅7ミリ程のへら状の擦り痕が確認	頁岩	6.3 6.0 2.7	171	HB②□. Q8.9 II 2054SX 台3369
	3	札形	扁平薄手	扁平横長	破損	研磨-表裏面 (側面)	携帯用砥石? 扁平、下部破損、表裏面研磨顕著、右側面破損、左側面研磨痕あり、上端部も僅かに欠損、上端部近くに穿孔を施す、孔は貫通するが横長レンズ状で正円ではない、孔径縦0.4cm、横0.6cm表面の開口部は破損、裏面は開口部残存	流紋岩	6.6 6.8 11.0	67	HB① P10~15・Q15 III 271SD 台647



第128図・図版85 砥石

(18) 煙管

煙管は3点得られた。種類としては羅宇煙管で、部位の内訳は雁首2点、吸い口が1点出土している。素材は雁首が陶器製、吸口が金属製である。層序はI層、II層出土である。

A. 雁首

図1は破損資料で素材は沖縄産無釉陶器製、火皿の縁、外縁輪郭部分の角が剥がれ丸味を帯びる。図2も破損資料で、これも沖縄産無釉陶器製、従来の資料より火皿部分の立ち上がりが短く若干小振りである。

B. 吸口

図3は完形で素材は金属製（銅？）の資料である。口付の部分は窄まり羅宇との接合部分は吸管の幅に合わせやや太くなる。

喫煙は史実の上では古く、琉球王国時代に王府、上流階級の士族といった一部の人々の間でたしなみ、嗜好品として広まり又、ノロ、ユタは呪術の道具として喫煙を行なったが、時代とともに一般庶民にも広がりを見せた。煙管は喫煙道具の一つで当時の様子を知るうえで貴重な資料である。琉球王国時代に葉煙草の栽培も行われ近世～現代に至るが、紙巻き煙草が生産され主流となる1950年代まで煙管は使用された。

<参考文献>

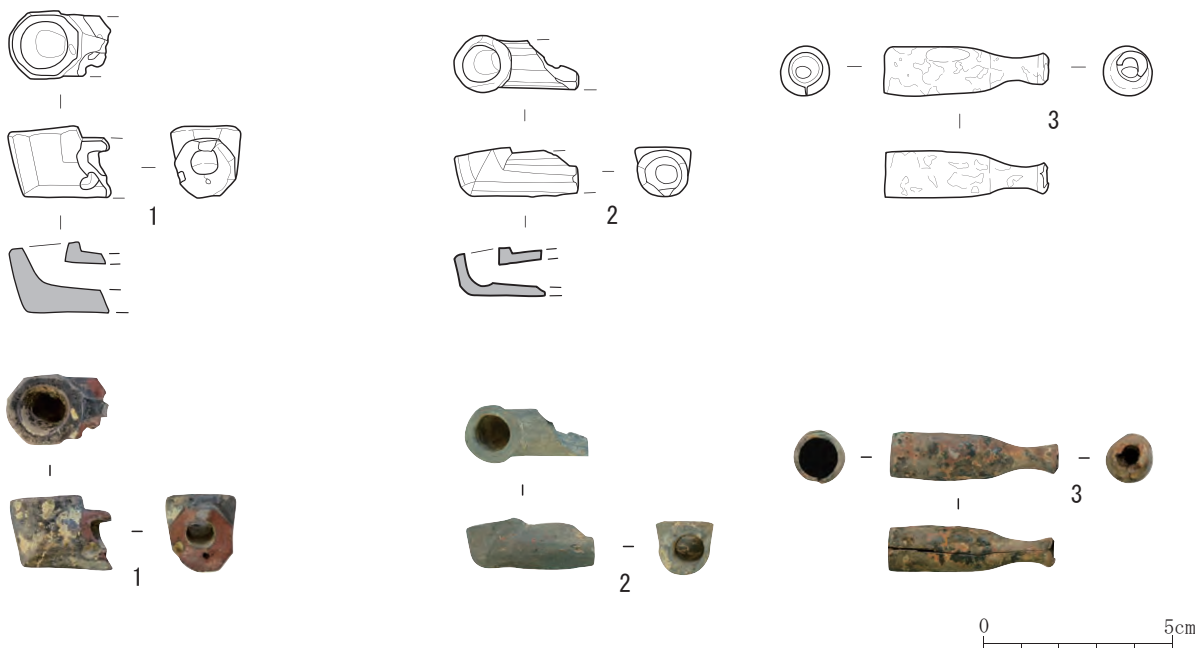
沖縄タイムス社（編） 1983 『沖縄大百科事典（上・中・下）』

江戸遺跡研究会（編） 2001 『図説 江戸考古学研究辞典』 柏書房

第61表 煙管観察一覧

(法量単位: cm, g)

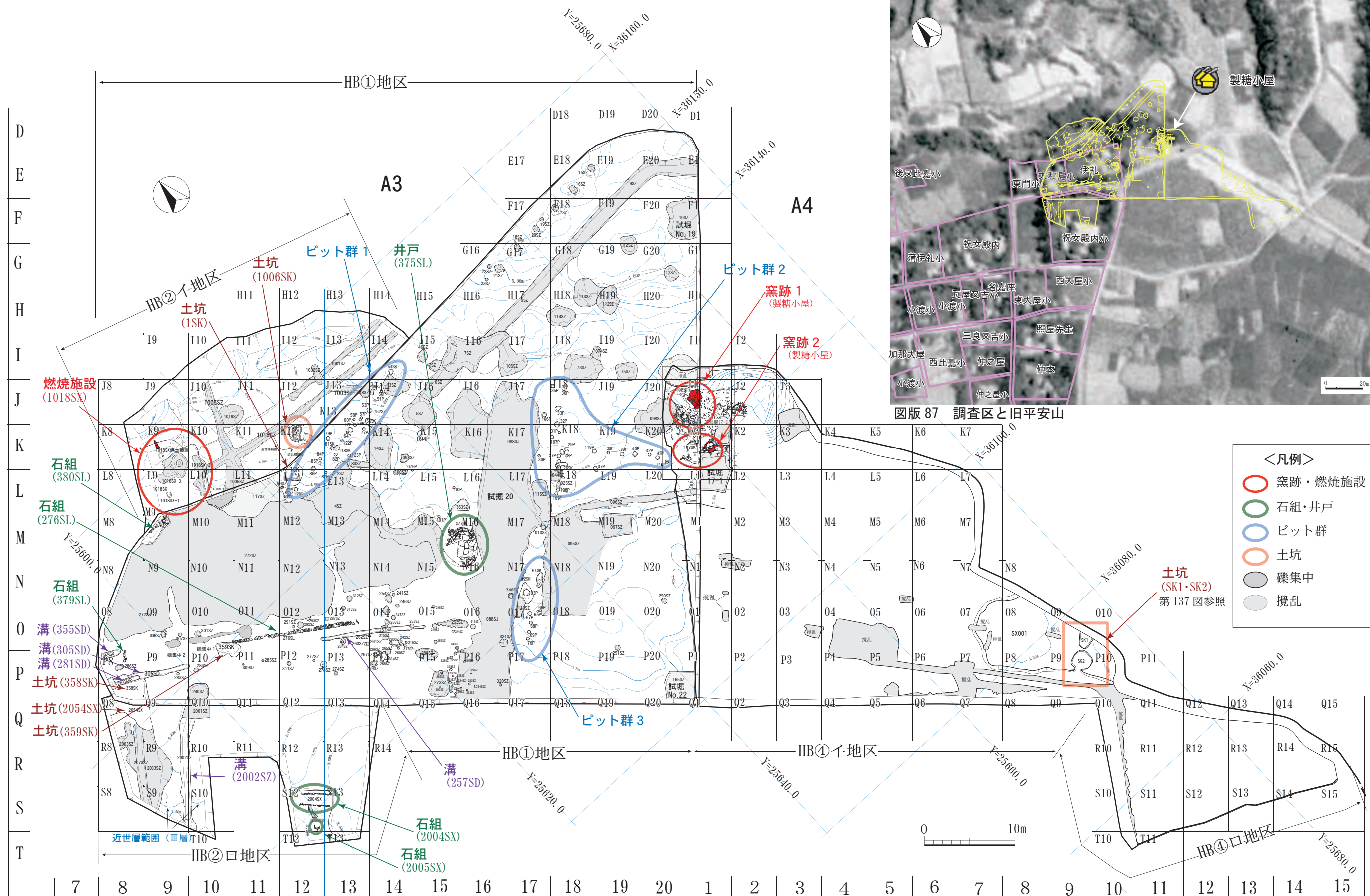
第図 図版	図 番号	部位	素材	雁首					吸口				残存 長軸	残存 重量	観察事項	地区・グリッド・層位 遺構・台(取)番号
				火皿		小口		高さ	小口		口付					
				外径	内径	外径	外径		外径	内径	外径	外径				
第 129 図 ・ 版 図 86	1	雁首	沖縄産無釉陶器製	1.8	1.2	1.6	0.7	1.9	-	-	-	-	2.7	8.48	全体に薄く施釉、雁首小口は破損	HB① O・P8~14 I 台645
	2	雁首	沖縄産無釉陶器製	1.5	0.9	1.2	0.7	1.3	-	-	-	-	3.3	4.19	全体に細身、小型	HB①L11 I 台646
	3	吸口	金属製(銅?)	-	-	-	-	-	1.2	1.0	0.8	0.4	4.3	6.3	所々に青錆を確認	HB②ロ II 台3343



第129図・図版86 煙管



図版 87 調査区と旧平安山



第 130 図 遺構全体 (近・現代)

第5節 近・現代

1 遺構

調査区内第130図には、J・K・L1に平成9年度試掘坑No.17（試掘坑1・2）、F20に試掘坑No.19、P20・1に試掘坑No.22^(註1)、J～P15・16・17に平成14・15年度の範囲確認調査の試掘トレンチ^(註2)が位置する。

米軍基地整備による攪乱はK13、L9～14、M・N8～15、O8～13で米軍の廃棄物投棄穴（272SZ）、Nライン東側に溝状や中規模、N～Pラインでは小規模のピット状が散在する。遺跡背後D～Hグリッド帯は、背後の丘陵が削平され平坦地となっている。

これらを除いて、近・現代の遺構を整理すると、石組（SL・SX）5基、溝（SD）5基、土坑（SK）7基、燃焼施設（SX）1基、井戸（SE）1基、窯跡2基、ピット59基、総数81基が検出された。

第130図に遺構全体図、図131～141、図版87～113に各遺構、第62表に近・現代ピット群一覧、第63表にピット観察一覧、第64表にⅡ層遺構別遺物出土量を示す。遺構出土遺物については、各々の項に記述する。近・現代の遺構の性格を把握するために、図版87に旧字平安山集落と調査区（HB①・②・④）を示した。両図面の比較から、近・現代の遺構と地名調査の屋敷との位置関係を窺うことができた。検出された近・現代の遺構は、Ⅲ層上面に構築、または、同層に掘り込まれたものが殆どである。以下、各遺構について述べる。

（1）石組

276SL（第131図、図版88・89）

HB①地区011～13で、北西—南東方向で直線状に並ぶ。長さ約14m。不定形の石灰岩礫を使用し、大きさは20～60cmで30cm程度のものが目立つ。礫の長軸を北西—南東方向に向け、南東側（標高約3.0m）から北西側（標高約2.8m）へ緩やかに下るⅢ層上面に構築される。

本遺構は、旧字平安山の東側奥の大和島小（方言：ヤマトシマグラー）宅と伊礼（方言：イリー）宅にまたがる道路の境界にあたると見られ（図版87）、屋敷を囲う石垣根石の可能性のあるものと考えられる。

本石組北西側のHB①地区09～11で、礫集中1・2が検出された。

礫集中1は010・11で長さ約7m、南東側は幅1.5m、北西側へ幅0.4mで細く延びる。礫集中2は09で長さ約2m、幅約0.8mのまとまりが検出された。この礫集中は、石組（276SL）北西側（内側）で同じ方向に延びることから、石垣の裏込石の可能性のあるものと思われる。Ⅲ層上面で検出された（第130図）。

379SL（第132図、図版90）

HB①地区0・P8で、北東—南西方向に直線状に並ぶ。長さ約1.3m。方形や不定形の石灰岩礫を使用し、大きさは30cm以下である。標高2.8mのⅢ層上面に構築されている。

本遺構は、屋敷の敷地境界にあたるとみられ（図版87）、前述の石組（276SL）と比較すると、直交する向きを有していることから、旧字平安山の東門小（アガリジョーグラー）と大和島小の屋敷の境界に関連する可能性が考えられる。



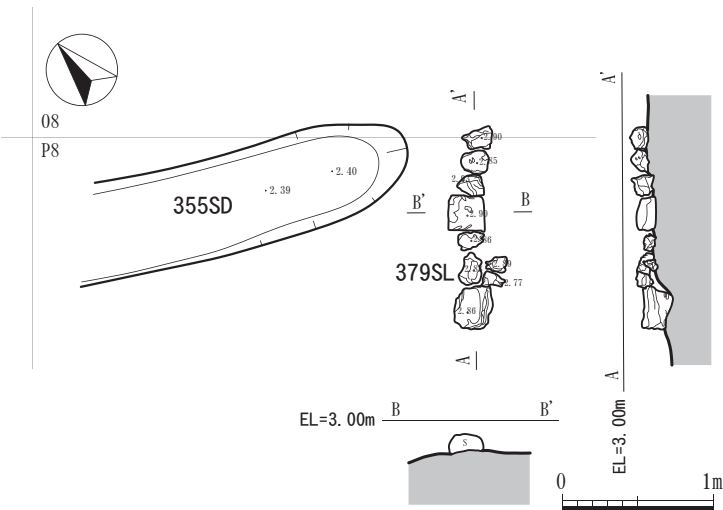
第131図 257SD・276SL・359SK 平面・断面



図版 89 257SD・276SL (南西より)



図版 88 276SL (南より)



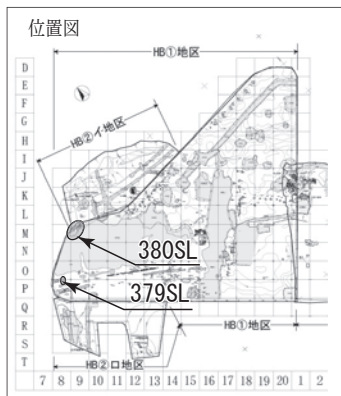
第132図 379SL 平面・断面



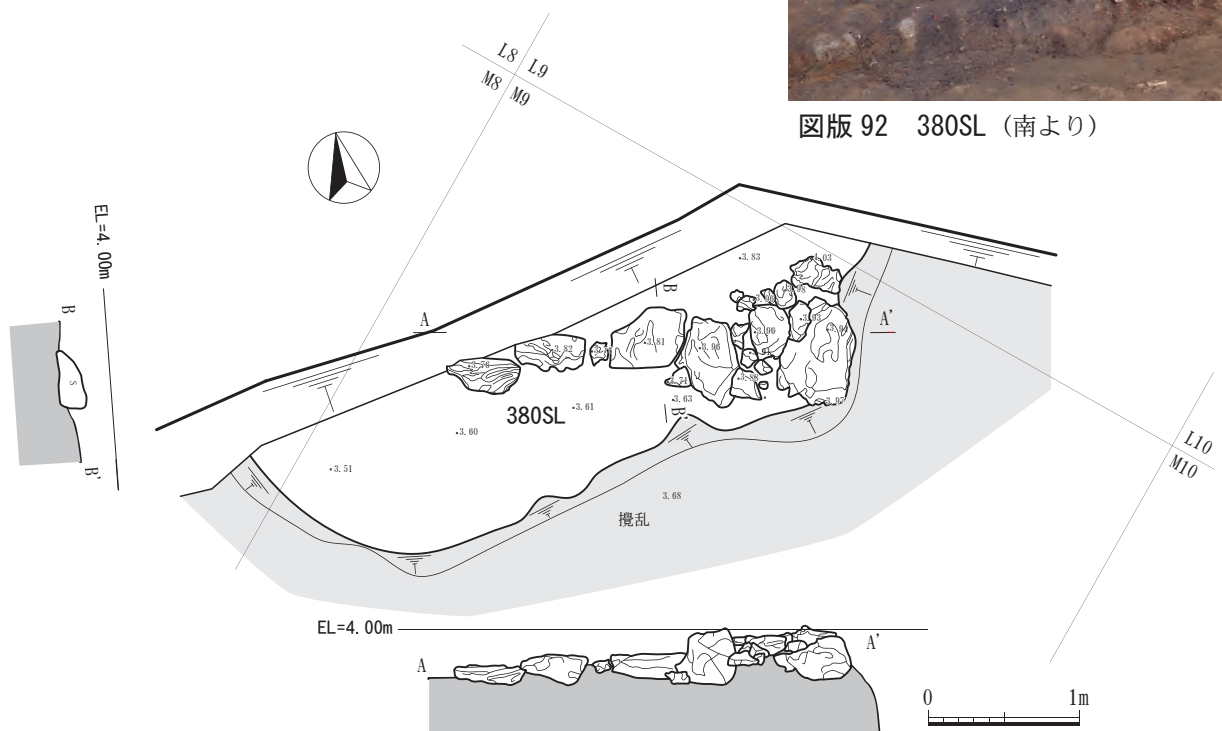
図版90 379SL (西より)



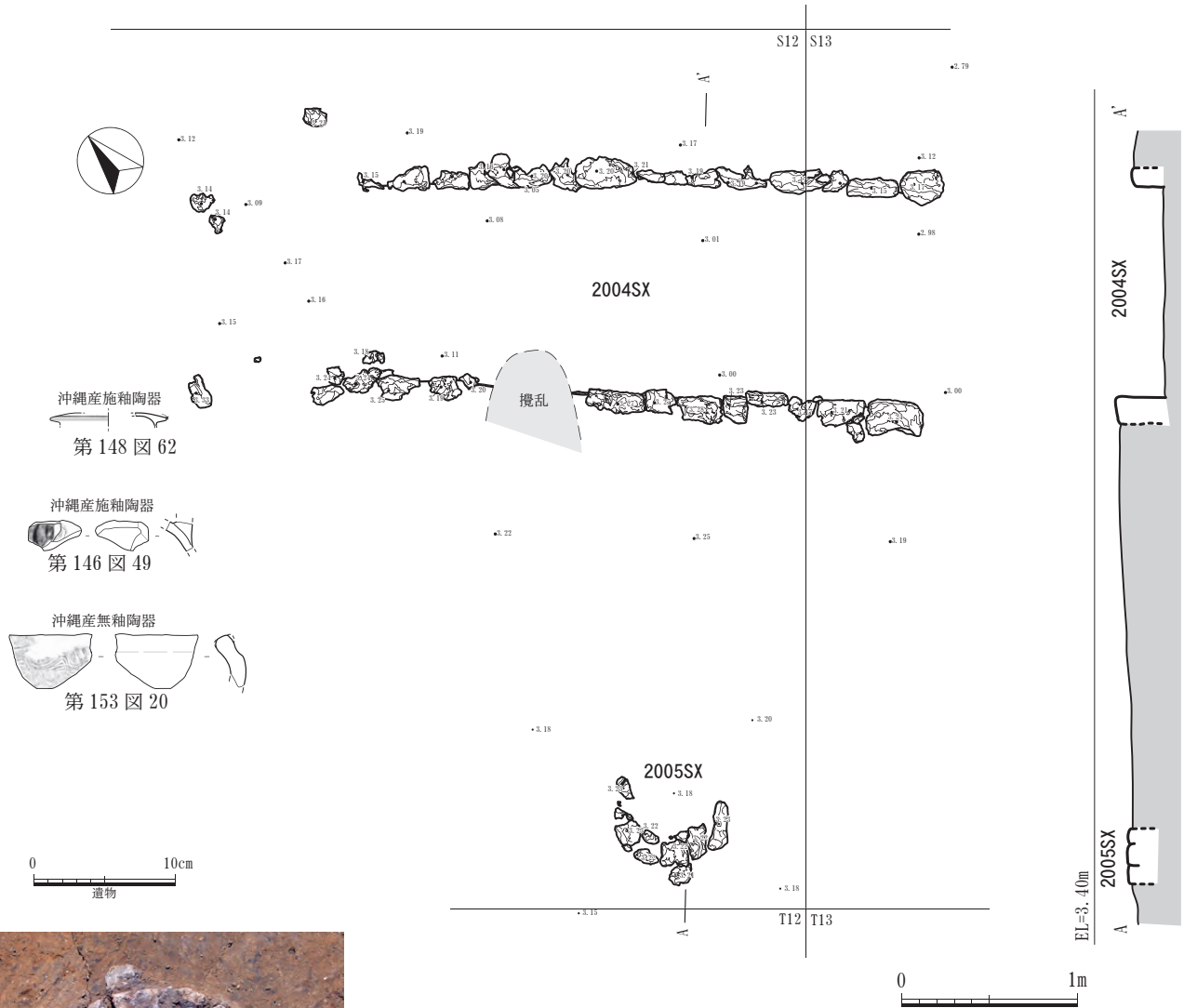
図版91 355SD (南より)



図版92 380SL (南より)



第133図 380SL 平面・断面



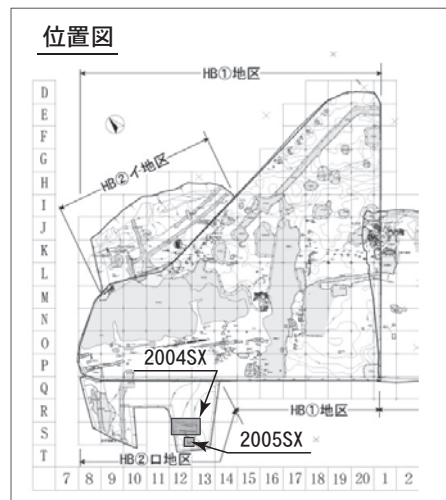
第134図 2004SX・2005SX 平面・断面



図版 93 2005SX (北東より)



図版 94 2004SX・2005SX (東より)



380SL (第133図、図版92)

HB①地区M9で、東—西方向に直線状に並ぶ。長さ約2.7m。東側は大・小の礫のまとまりが見られる。不定形の石灰岩礫を使用し、大きさは主に長軸の長さが約100cmのものと50cmのものが用いられる。前者の幅は約50cm、後者は約25cmである。標高3.7mのⅢ層上面に構築される。本遺構南側は、米軍廃棄物投棄穴(272SZ)によって失われる。

本遺構は、旧字平安山の和島小の屋敷内の家屋北側にあたと見られる(図版87)。

2004SX (第134図、図版94)

HB②口地区S12・13で、北西—南東方向に直線状に2列並ぶ。北東側の石組は長さ約3.3m、南西側の石組は、長さ約3.5mで攪乱による途切れが見られる。面を内向きにする石組間の幅は約1.1m。不定形の石灰岩礫が使われているが、長方形や方形も僅かに見られる。大きさは40cm以下である。石組天端の高さは、南西側が標高3.3m、北東側が3.2m。標高約3mのⅢ層上面に構築される。

遺物は、沖縄産施釉・無釉陶器、本土産磁器(近代・近世)、瓦、ガラス瓶、青磁が出土した。

本遺構は、旧字平安山の祝女殿内小(ヌンドゥルチグラー)の敷地内の主屋と見られる建物背後にあたることから(図版87)、屋敷内に設けられた通路の縁石の可能性が考えられる。

2005SX (第134図、図版93)

HB②口地区S12で、弧状に構築される。不定形の石灰岩礫が使われており、大きさは30cm以下である。石列2004SXの南西側2mで標高約3.2mのⅢ層上面に構築される。

旧字平安山の祝女殿内小の主屋に近い位置(図版87)にあたることから、礎石などの建物に関連する可能性があるものと思われる。

(2) 溝**305SD・281SD** (第135図、図95～97)

HB①地区P8～10で、北西—南東方向に延びる。長さ約8.5m、幅0.72m、深さ0.24m、標高約2.5m、Ⅲ層上面で検出された。調査区外に続くと見られる。P8で幅広となる部分では、281SDが下位に重複する。

下位で検出された281SDは、長さ約2.7m、幅約0.5m、深さ約0.19mである。354Pの上位にあり358SKを切ることから、土坑(358SK・2054SX)埋没後の遺構である。

305SDから沖縄産施釉・無釉陶器、陶質土器、本土産磁器(近代)、円盤状製品、瓦、染付、褐釉陶器、グスク土器、281SDから真鍮製の簪(第126図2)が出土した。

257SD (第131図、図版89)

HB①地区013～15で、北西—南東方向に延びており276SLの延長線上に位置する。長さ約11.6m、幅は約0.3～0.6m。深さはB—B'約0.2m、C—C'約0.1mで中央部付近が深くなる。

Ⅳ層上面(標高約2.6m)で検出され、近世遺構の2049SD・275SLを切っていることから、2049SD・275SLより新しく、Ⅲ層上面に構築される石組(276SL)より古い可能性を有していると思われる。また、Q13～16ではⅢ層の堆積が見られないことから、この一帯ではⅢ層の堆積は、17ライン一帯(標高3.5m)から標高約3mとなる傾斜地形による自然浸食、もしくは人為的に失われた可能性があると思われる。遺物は出土していない。

355SD (第135図、図版91)

HB①地区0・P8で、北西—南東方向に延びる。長さ約2.1m、幅0.67m、深さ0.26m。標高約2.5mで検出された。調査区外(西側)へ続くと見られる。遺物は出土していない。

本遺構は、溝(257SD)と同方向の延長線上に位置し、形状には類似性があることから同時期の可

能性があると思われる。

2002SZ (第135図、図版95～97)

HB②口地区 Q・R・S9・10 で、北東—南西方向に延びる。長さ約112m、幅1～1.5m、深さ南西側 0.47m、北東側 0.88m、北東側に深くなる。Ⅲ層上面で検出された。調査区外南西側に延びると見られる。溝の北東側先端部は攪乱 (240SZ・2001SZ) で欠失している。

出土遺物は沖縄産施釉・無釉陶器、陶質土器、本土産磁器 (近代)、瓦、レンガ、現代遺物、白磁、青磁、染付、鉄釉染付、本土産磁器 (近世) が出土した。遺物の出土量は311個と多量である。

(3) 土坑

358SK・2054SX (第135図、図版96・97)

358SK と 2054SX は HB①地区 P8・9、HB②口地区 Q8・9 にまたがり、平面形は不定形を呈し、東側の長辺は約 6m、北側の短辺は約 4.8m、深さ約 0.95m。北・東側が直線的、西側は蛇行する。戦後の攪乱 (2003SZ) 除去後に検出された。本遺構はⅢ・Ⅳ層を掘抜き、さらに下位の砂礫層に達する。

Ⅲ層上面で検出された 358SK は溝 (281SD) に切れ、2054SX は溝 (2073SZ) を切る。

このことから、358SK・2054SX は溝 2073SZ より新しく、281SD より古い。出土遺物から、ごみ投棄穴を埋めたものと推察される。

出土遺物は、358SK・2054SXに共通するものは沖縄産施釉・無釉陶器、陶質土器、本土産磁器 (近世・近代)、円盤状製品、現代遺物、染付である。さらに358SKから瓦、骨、現代遺物 (ガラス瓶)、グスク土器、カムイヤキ、青磁、白磁、本土産陶器、褐釉陶器、2054SXから 瓦質土器、瑠璃釉、鉄製品が出土した。遺物の出土量は503個で最も多い。

359SK (第130・131図)

HB①地区 O・P10・11 で 276SL の下位で検出された。平面形は不定形、長軸の長さは約 2.9m、最も狭い短軸の長さは約 1m、深さ約 1.75mである。

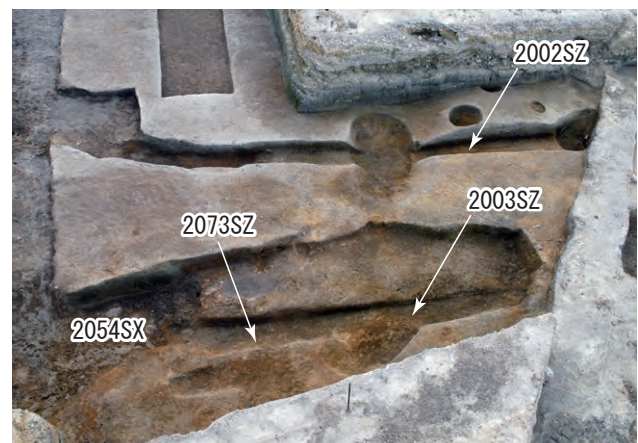
出土遺物は、沖縄産施釉・無釉陶器、グスク土器、青磁、白磁、染付、本土産磁器 (近世)、陶質土器、円盤状製品、瓦、骨が出土した。



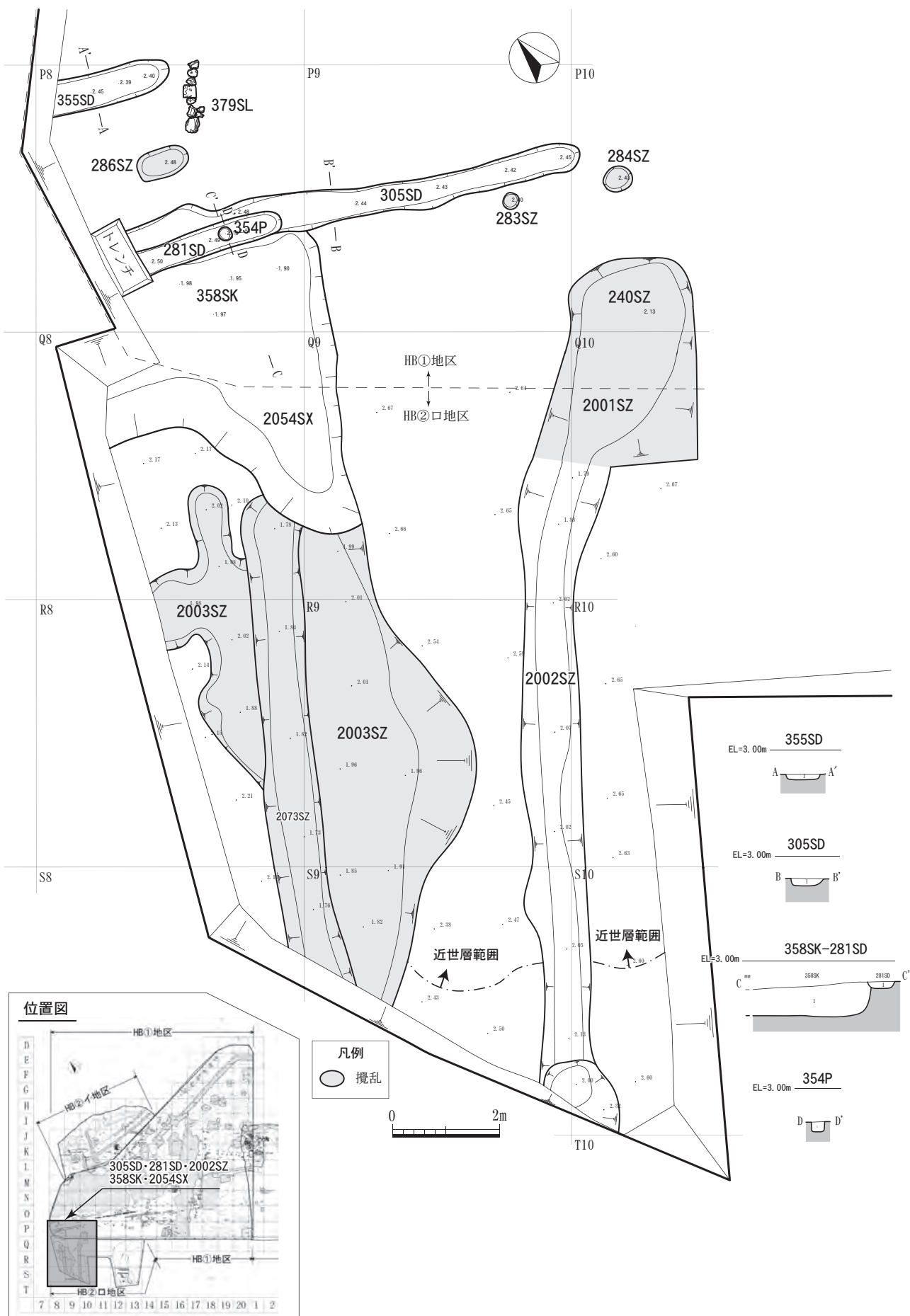
図版 95 2003SZ・2002SZ (南西より)



図版 96 2054SX・2073SZ・2002SZ (南西より)



図版 97 2002SZ・2003SZ・2073SZ・2054SX (北西より)



第 135 图 305SD・281SD・2002SZ・358SK 平面・断面

1SK (第130図)

HB①地区 K・L12 のⅢ層上面で検出された。平面形は不定形、長軸が約 2.7m、短軸は 1.7m、深さ 0.6m である。

出土遺物は、沖縄産施釉・無釉陶器、青磁、白磁、染付、青磁染付、褐釉陶器、本土産陶器、陶質土器、石製品、骨が出土した。

ピット群 1 の西側にあり、旧字平安山の伊礼宅敷地内にあたると見られる。

1006SK (第136図、図版98・99)

HB②イ地区 J・K12 のⅢ層上面で検出された。本遺構は、平面形が隅丸長方形を呈し、長辺約 1.9m、短辺約 1.7m、深さ約 0.75m の土坑に床を石敷、4面の壁を石積を施したものである。土坑内部に構築された石組の平面形は長方形を呈し、壁4面を石積、床は板状石灰岩を敷く。内寸は長辺約 1.2m、短辺約 0.7m、深さ約 0.8m。床・壁の表面に粘土を塗り込み漆喰を施す。

家畜(豚)の肥溜めと考えられ、伊礼宅の敷地内北側にあたる(図版87)。

出土遺物は沖縄産施釉・無釉陶器、本土産磁器(近代)、瓦・レンガ、染付が出土した。

SK1・2 (第137図、図版100~102)

SK1・2 は、HB④イ地区 N7・8、0・P7~10 で最大幅約 8.1m、長さ 14.6m、高さ約 0.2m の台地状の平坦面をなす範囲(SX001)で検出された。

SK1 は、HB④イ地区 09 のⅢ層上面で壁面 I に切られて検出された。平面形は台形状を呈し A—A' の長さは 1.6m、南西側の短辺は約 0.8m、深さ約 0.19m、浅い鍋底状を呈する。

遺構の埋土は、上・下位層と同様にカワニナ・マンガが見られ僅かに炭を含む。調査区東側に続くと見られる。遺物は出土していない。

SK2 は、HB④イ地区 P9 のⅢ層上面で検出された。平面形は円形を呈し A—A' は約 2.2m、B—B' は約 2.1m、深さ約 0.16m、浅い鍋底状を呈する。南西側は N7・8、07、P7~9 にまたがる段差の縁に繋がり、土坑の壁面は一部途切れる。埋土は SK1 と同様であるが炭は殆ど含まない。遺物は出土していない。

SK1・2 が検出された台地状の平坦面(SX1)の段差は、HB④イ地区の南隅に延びる。類似する段差が HB④ロ地区の壁面 IVQ14 の中央部付近にみられ、次第に南側へ低くなる様相が見られる。

(4) 燃焼施設

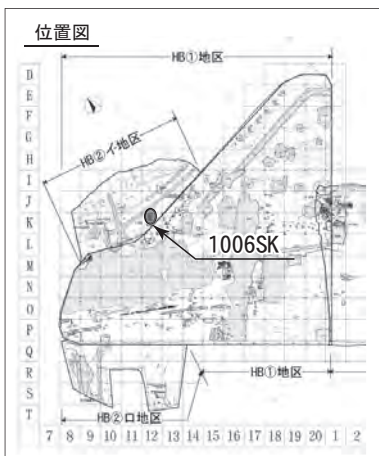
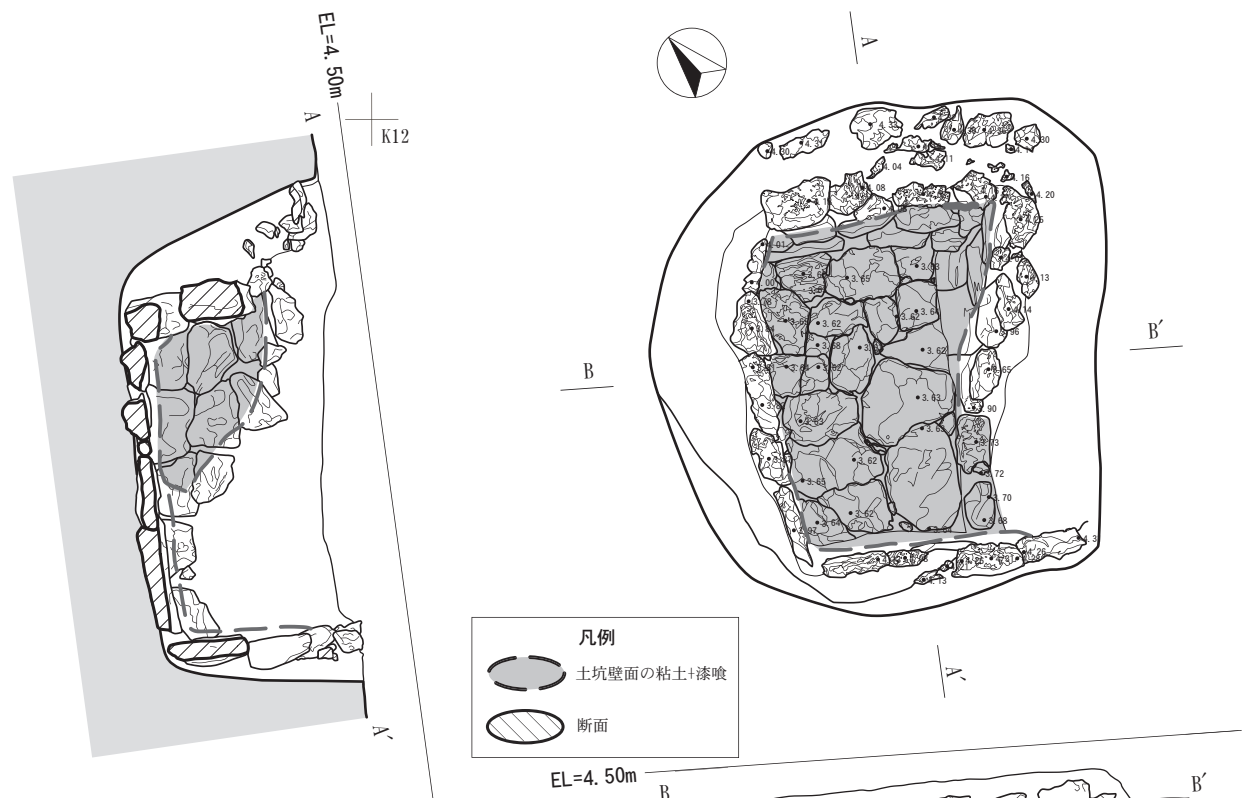
1018SX (第138図、図版103~105)

HB②イ地区 K9 で、調査区壁の斜面に被熱痕が半裁されて露出し、その前面に平面形が「コ」字状を呈する焼土範囲が検出された。焼土範囲は炭化物と焼土が集中することから焚口、被熱痕は煙道部と考えられる。

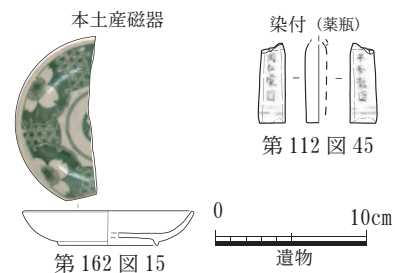
煙道部の下部 D—D' の幅約 0.2m、中央部 C—C' 約 0.13m、上部 B—B' 約 0.1m、煙道下部の深さ 0.1m、傾斜角度 40° の勾配で背後の段丘崖に向かって高くなる。被熱痕は煙道壁面の全面に見られ被熱幅は約 6cm。崩落土に構築される。

「コ」字状を呈する焼土範囲は、長辺 0.3m、短辺約 0.2m。南側の長辺部に約 0.13m の石灰岩礫を 1 個伴う。煙道下部から約 0.4m 低い位置で約 0.5m 離れた位置にある。焚口と煙道部の高低さは、燃焼室の高さを示すものと推察される。焚口が検出された砂層は、HB②イ地区中央ベルト 14 層に対応すると見られる。

本遺構は、段丘崖下に崩落礫を含む二次堆積の斜面に煙道部が構築され、焚口は前述の砂層に構築されている。遺物は沖縄産施釉・無釉陶器、染付、褐釉陶器、本土産磁器(近代)、本土産陶器、



第136図 1006SK 平面・断面



第162図15

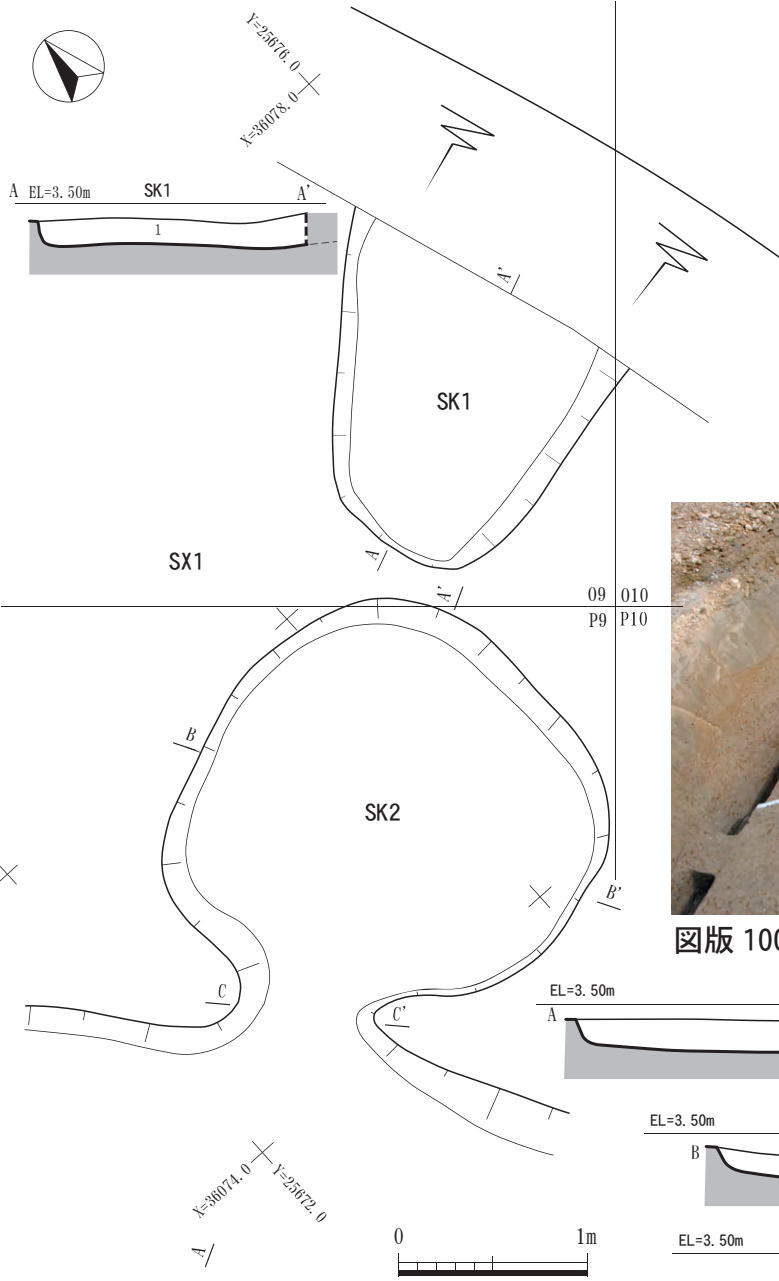
第112図45



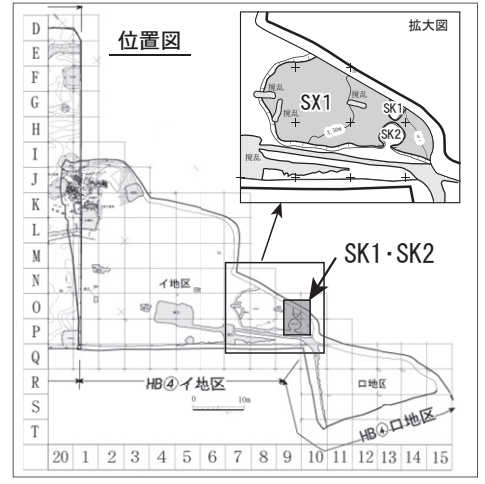
図版98 1006SK 検出状況 (西より)



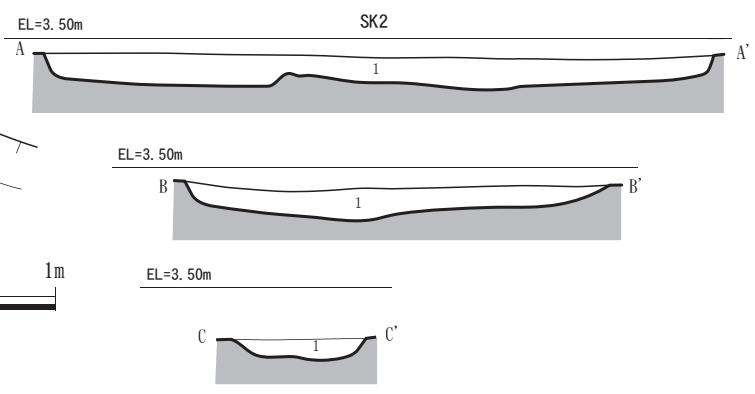
図版99 1006SK 完掘状況 (西より)



第137図 SK1・SK2 平面・断面



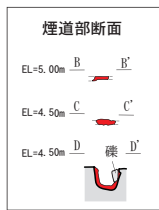
図版100 SK1・SK2 検出状況 (北西より)



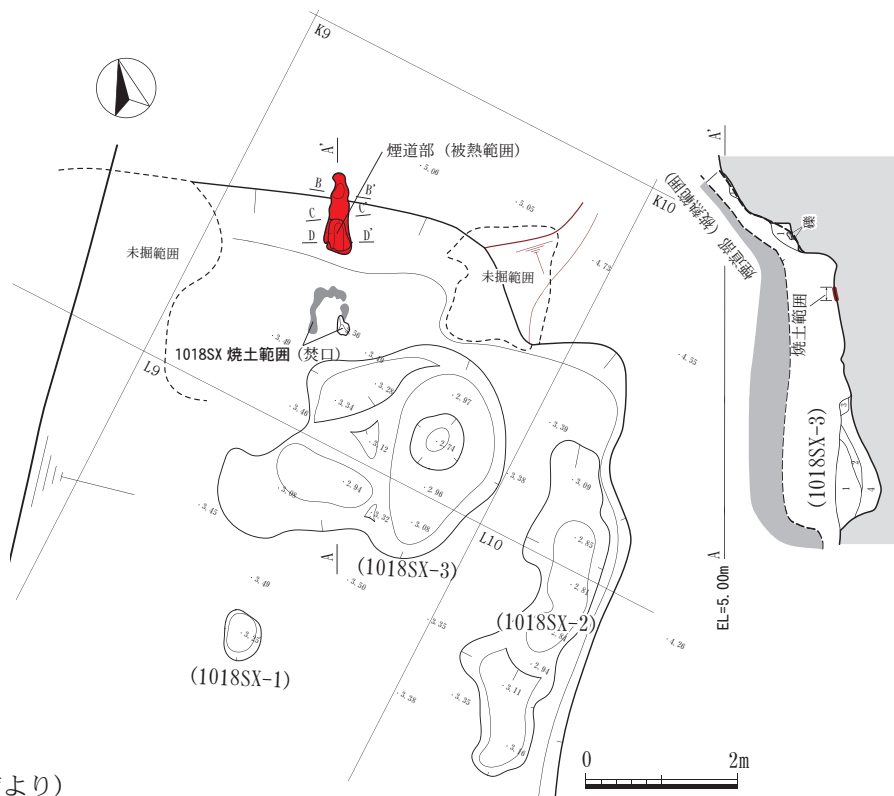
図版101 SX1・SK1・SK2 (西より)



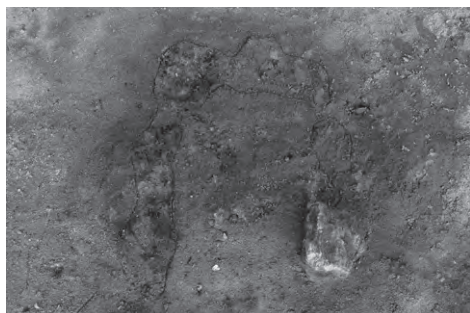
図版102 SX1・SK1・SK2 (北より)



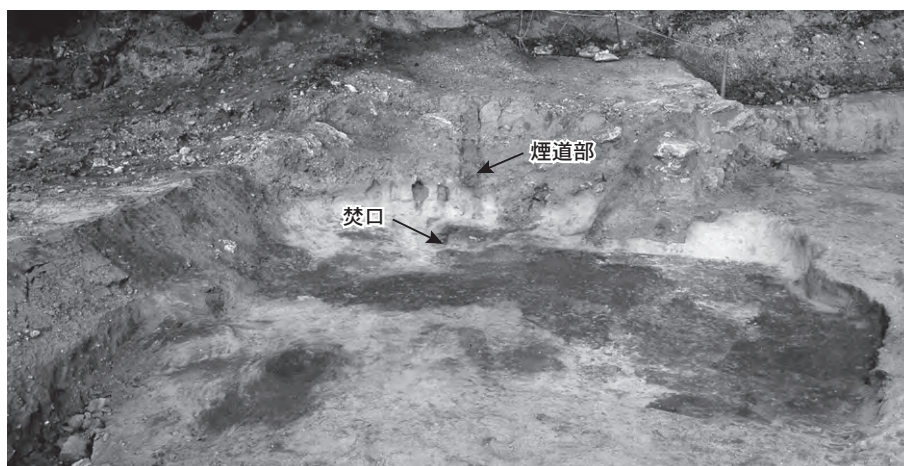
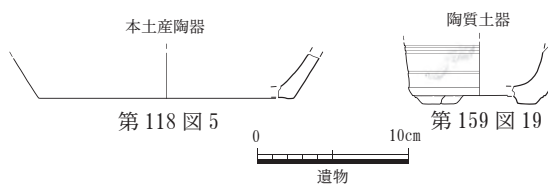
図版 103 煙道部完掘 (南より)



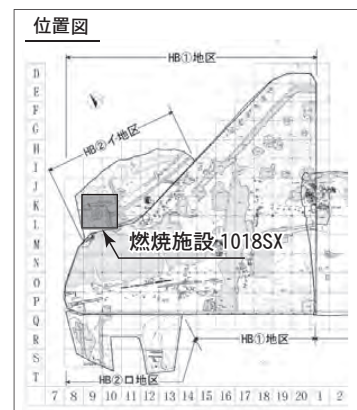
第 138 図 1018SX 平面・断面

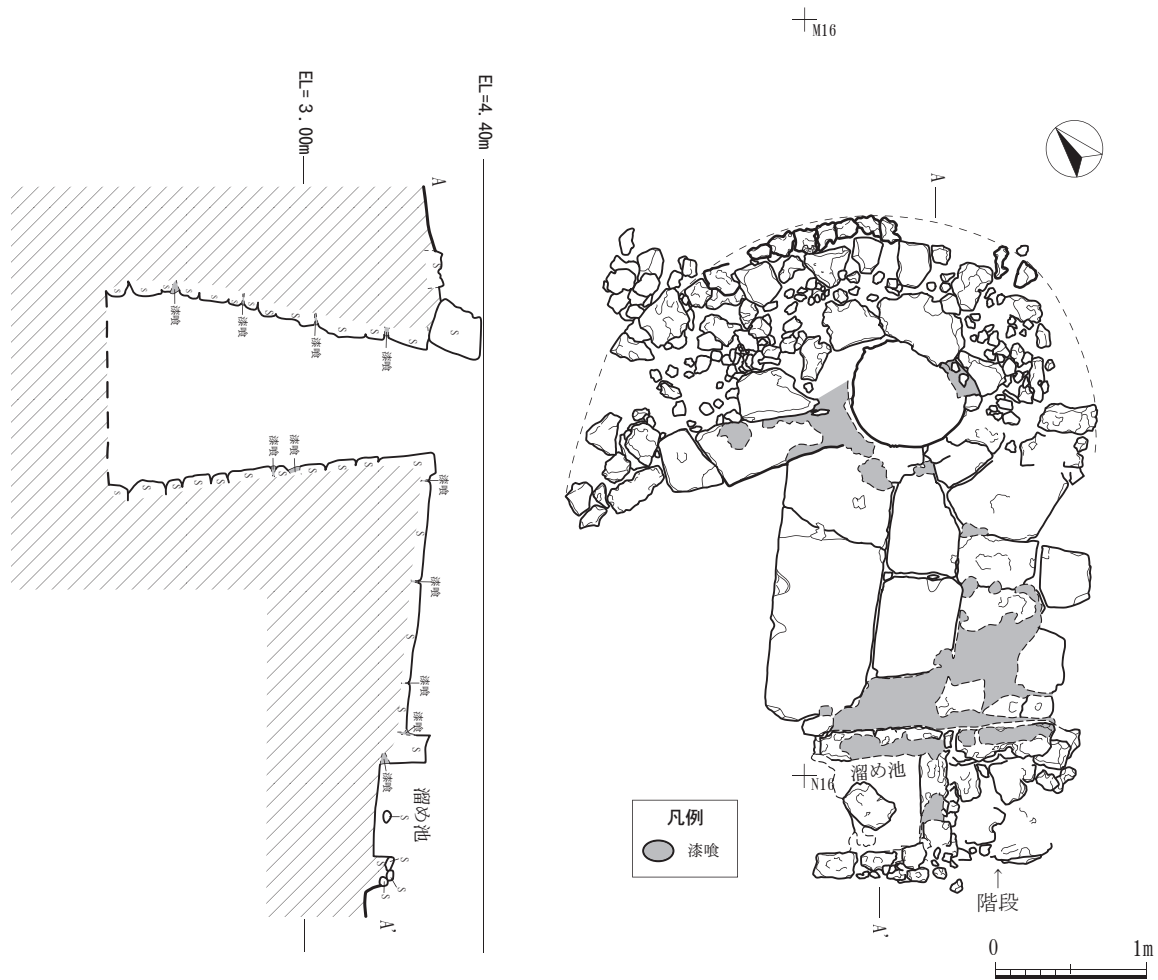


図版 104 焚口



図版 105 1018SX 検出状況 (南より)





第 139 図 井戸 (377SE) 平面・断面



図版 106 井戸 (377SE) 検出状況 (南より)



陶質土器、鉄製品が出土した。

1018SX の周辺に見られる 1018SX-1~3 は埋土の土質や色調が同様で、ブロック塊やテントの杭が出土したことから、戦後の攪乱と判断される。

煙道部が構築された壁面には、砂層に達する掘削痕が 2 箇所見られる、掘削痕は煙道部の下位の褐色堆積層を掘り抜き、幅広の掘削痕は、下側の角が明瞭であることから、比較的新しいものと見られる。

これらの攪乱痕と 1018SX との関連は不明である。

(5) 井戸

377SE (第139図、図版106)

HB④地区 M15・16、N16 に残る戦前の井戸である。平安山原 B 遺跡 (2008) ^(註2) で既に報告されていることから、詳細は既報告を参照されたし。本報告では、井戸、溜池の断面を示し、立地等について述べる。

井戸口から下部に向かって径を広げ、北側の傾斜が強い。井戸は内壁を石積で構築し、目地に漆喰が施される。確認された深さは約 2.1m。溜池の深さは、井戸側の縁石部分で約 0.25m。井戸の前面(南西側)の敷石が施された広場から、平面形が「コ」字状の溜池に向かって低くなる傾斜が付く。

溜池の南東側に設けられた階段は、井戸が標高約 4 m に立地し、前述した屋敷と道路の境界にあたと見られる石組 (379SL) が標高約 3 m に構築されており、高低差が約 1m となるため階段を設けたものと推察される。

井戸の深さについては、安全面を考慮し完掘しておらず不明であるが、HB④地区の下層確認トレンチ 2 で標高約 1.5m 以下から湧水が見られることから、同標高以下になるものと推察される。

本井戸は、調査区と戦前の集落の位置 (図版87)、石列 (379SL) と後述する窯跡との位置関係から伊礼宅の屋敷内南側にあたと見られる。

(6) 窯跡

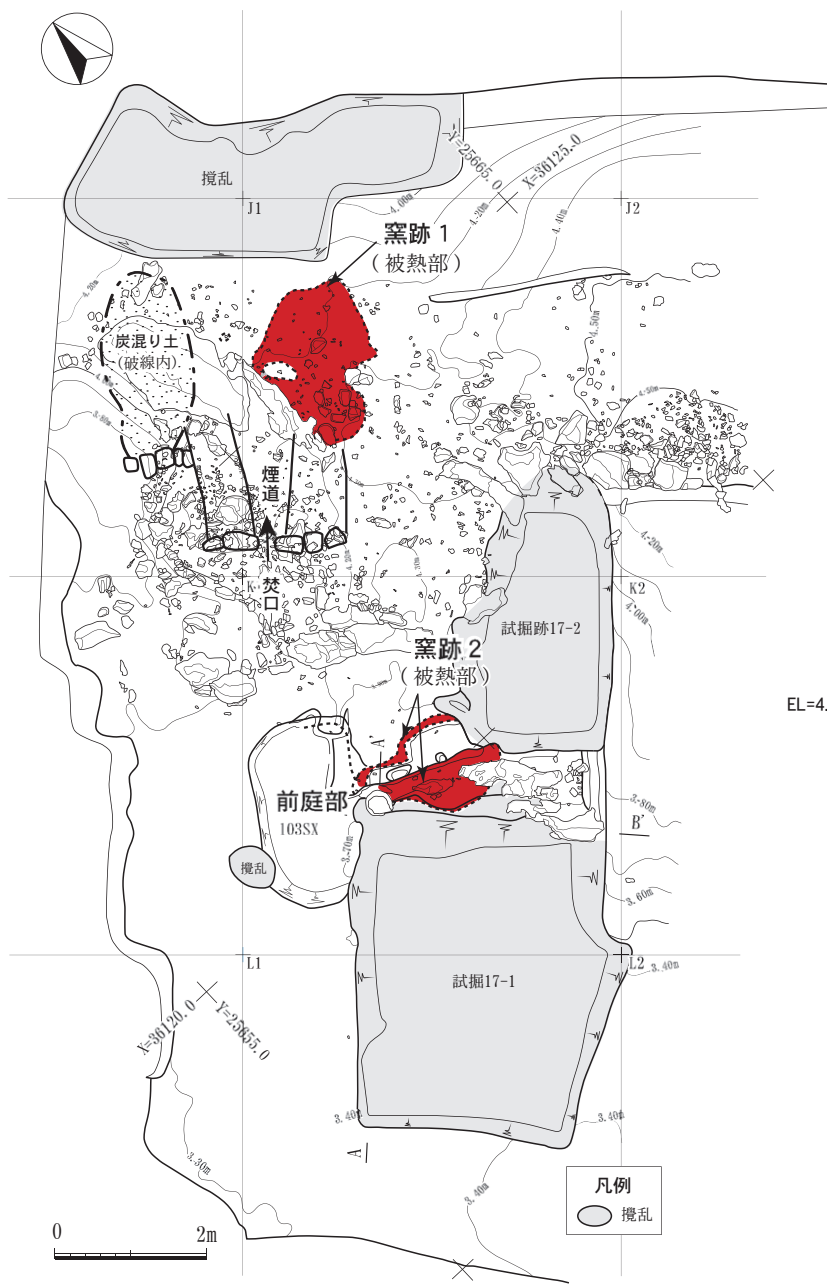
窯跡 (第140図、図版107~113)

平成 9 年度試掘調査 ^(註1) で確認された製糖小屋 (サーターヤー) の窯跡が 2 基検出され、窯跡 2 は焚口の前庭部として設けられた窪み (103SX) を伴って、石灰岩礫地帯の標高約 3.5~4 m で検出された。

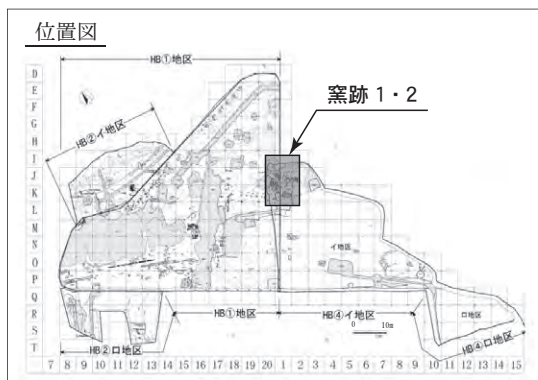
窯跡 1 は、平成 9 年度試掘調査 ^(註1) で確認された製糖小屋の窯跡 (図版108・111・112) で、保存措置を講じて埋め戻していたが基地返還に伴う工事によって失われたと思われ、四角柱状に加工した石灰岩などで構築された焚口や窯の形状 (図版108・111・112) は失われており、HB④イ地区 J1 北東側で被熱痕が約 3 m² の範囲で検出された。範囲確認調査時の焚口は J1 西隅となる。被熱痕の一角は、石灰岩礫がまとまって見られるが、人為的な様相は窺えない。遺物は被熱痕近くからゴホウラが出土している。

試掘調査で検出された窯跡は (図版111)、高さ約 36cm の四角柱状に加工した石灰岩 2 本を立位に設置する。焚口の幅は約 20cm。焚口から内側約 1m の範囲に鉄製角柱棒が検出された。「この鉄製棒は灰を掻き出すため設置した」という ^(註3)。焚口の前面は平坦面であるが大型の石灰岩が露頭しており、南側の炉との境界の役割を有する可能性があるものと思われる。

範囲確認調査時の図面を重ねてみると、試掘調査では、炭混・焼土が混じる範囲が、J20 北東部にあたる範囲で検出されており、HB④地区 J20、HB④イ地区 J1 にまたがって、炭・焼土混じり範囲



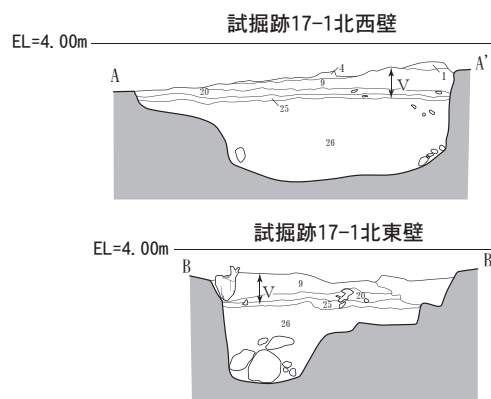
第140図 窯跡1・2遺構平面・断面



図版107 窯跡1 (北より)



図版108 窯跡1焚口 平成9年度試掘調査



図版109 窯跡2 (南より)



図版110 窯跡1・2 (南西より)

下位に、北—南方向の窪みが見られ、灰を掻き出すためのものと思われるが、関係性は不明である。J1北側の煙道部と見られる被熱痕は、焚口から約1.6～2m離れた位置にあたる。

「この製糖小屋の窯は、大鍋（シンメーナービ）を2つ置くことができた」という^(註3)。

窯跡2は、HB④イ地区のK1で、前述の窯跡の南側約1.5mで検出された。試掘坑1・2の間に位置する。試掘坑は平成9年度試掘調査^(註1)の試掘坑No.17で確認された製糖小屋の窯跡である。

窯跡の平面形は、団扇状を呈する。細長い焚口部分は長さ約80cm、幅約50cm、北西—南東に向き、炉と繋がる。炉は円形で径約1.2m、残存する深さ約18cm。焚口・炉の全面に見られる被熱痕は幅10～20cm。東側の一部は試掘坑2によって欠失する。炉はⅢ層を掘り込んで構築され炉床はⅤ層に達し、石灰岩の崩落礫と見られる自然礫が露頭する。焚口の一部は、電柱と思われる立位の丸太材の設置によって欠失する。遺物は出土していない。

103SX（第140図、図版113）は、HB①地区K20とHB④イ地区K1にまたがって検出された、2基目の窯跡の焚口前面（北西側）に構築された窪み（前庭部）である。長辺2.5m、短辺1.5mの隅丸長方形、深さは試掘調査時の試掘坑1壁面で見ると約50cmである。

本遺構の埋土には、明褐色土（10YR5/6）がブロック状に混じり、炭化物、焼土、径20～50mmの礫、長さ10mmの枝サンゴ、径15mmの貝片を含む。

四角柱状の石材等で構築された窯は焚口を南西側に向け、その南側に約3m離れた位置で検出された窯跡は焚口を西に向けている。

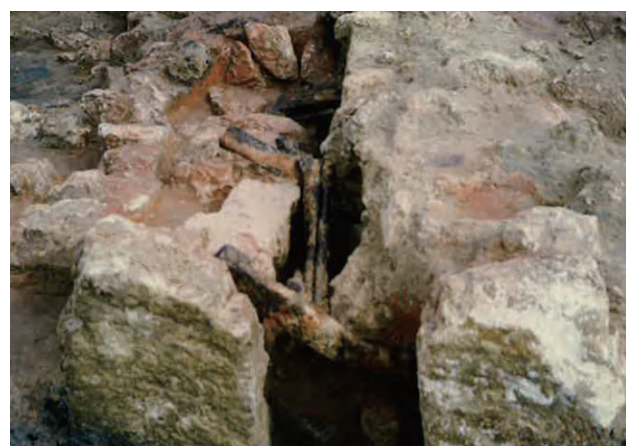
（7）ピット

HB①地区のみで59基検出され、3つのまとまりが見られることからピット群1～3（62表、第130図）とした。調査時に土坑（SK）とした、小規模の土坑をここに含める。ピットの深さが10cm以上のものを柱穴として、第141図は基本的には、検出された並びで図示し、単独で検出された5基については断面図を割愛する。第62表にピット群遺構番号、第63表に遺構観察を示す。

ピット群1は23基（第63表）、東—西方向に並ぶ規則性が見られ、径は22cm以上から59cmまで



図版 111 窯跡1（西より） 平成9年度試掘調査



図版 112 窯跡1内部の鉄製棒検出（南西より） 平成9年度試掘調査



図版 113 窯跡2被熱部と前庭部（北西より） 平成9年度試掘調査

のものが見られる。深さは10cm未満が30.4%、11～20cmが26.1%、21～30cmが17.4%、31cm以上は26.1%で、もっとも深いものは76cmである。性格は判然としないが、列を成すことから柵が想起される。

53P、72P、118SKは、約2.4m間隔で並ぶ同程度のピットで、径が57～59cm、深さ56cm(53P)、31cm(72P)、41cm(118SK)と深い。

出土遺物は53Pで陶質土器、本土産磁器(近代)、64・85Pで沖縄産無釉陶器、72Pで沖縄産施釉・無釉陶器、86Pでは沖縄産無釉陶器、陶質土器が出土した。

ピット群2は22基(第63表)、K18～K20で北西—南東方向にならぶもの(第130図)、J・K・L18で北東—南西方向の並ぶもの(図130)が見られる。この2つの並びはK18で「T」字状、又は隅丸長方形のプランの並びが想定される。このピットが検出された一帯は、旧字平安山の製糖小屋敷地内にあると見られ(図130)、この製糖小屋には、旧字平安山の方の話によると戦前はサトウキビを搾るサーター車(搾取機)が設置されていたということから、関連する施設の可能性が考えられる。

出土遺物は29Pで染付、沖縄産無釉陶器、33Pで本土産磁器(近世)、37・108・109Pでは沖縄産無釉陶器が出土した。29・33P以外のピットにはグスク時代の遺物は含まれない。

ピット群3は9基(第62表)、北東—南西に並ぶもの(第130図)。63P以外は深さ20cm以下である。位置的には旧集落内の道路付近にあると見られる。

出土遺物は63Pで沖縄産無釉陶器、67Pで沖縄産施釉陶器、陶質土器が出土した。

単独のものは、5基(第62表)である。出土遺物はK15の94Pで沖縄産施釉陶器が出土した。

小結

本報告のHB①地区、HB②イ・ロ地区、HB④イ・ロ地区の近・現代遺構について、図版87の比較から屋敷との位置関係を窺うことができた。

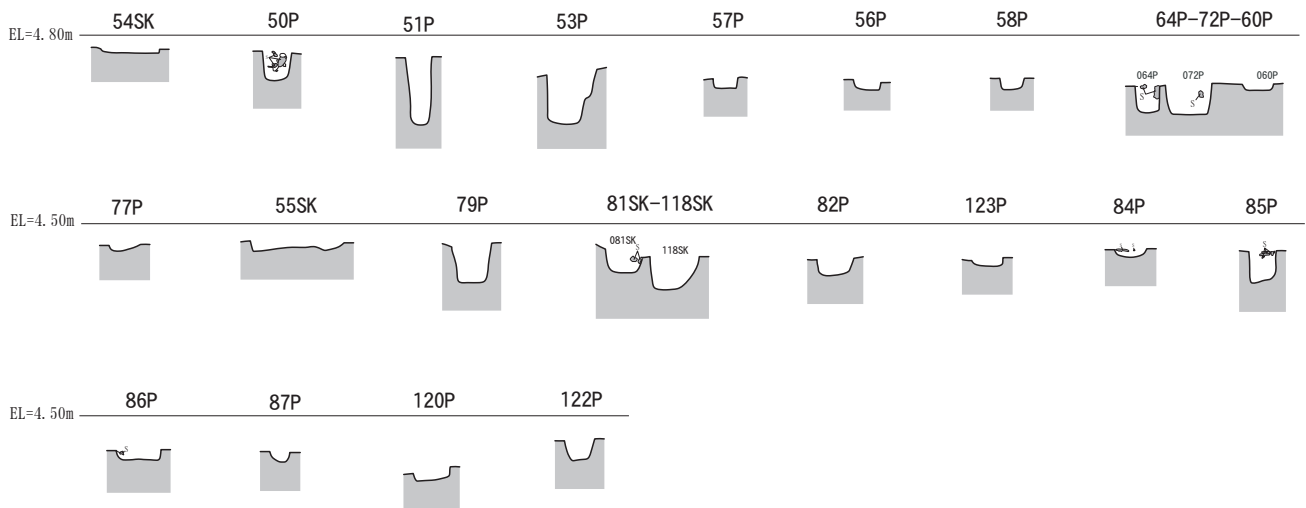
調査区は、戦前の旧字平安山の東側奥にあたり、東門小(アガリジョーグラー)、大和島小(ヤマトウシマグラー)、伊礼(イリー)製糖小屋(サーターヤー)、祝女殿内小(ヌンドゥルチグラー)、その間の道路や耕作地にあると見られる。

検出された石組(276SL)は、祝女殿内小と大和島小、伊礼の間を南東(標高約3m)—北西方向(約2.8m)に走る道沿いの位置にあると見られ、0・Pライン一帯は、集落内の道路と考えられる。また、石組(276SL)の石の向きは、長軸が道と直交する向きとなることから、石の面を道に向けて配していたと考えられ、その背後で同様な方向にある礫集中1.2は、裏込めが崩れたものの可能性があるとと思われる。

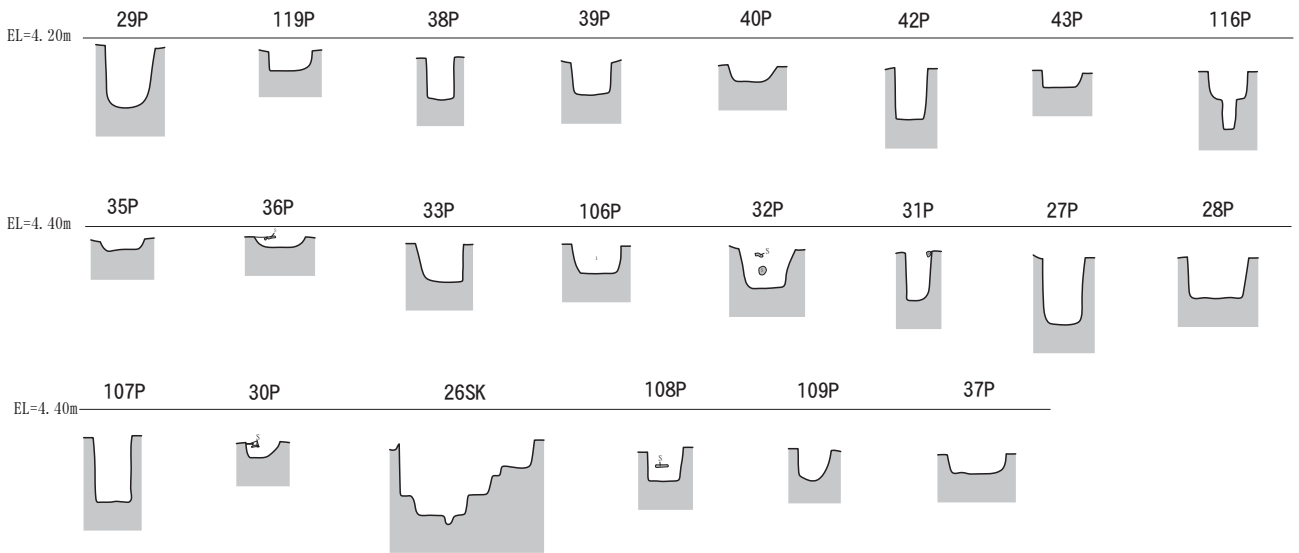
第62表 近・現代ピット群一覧

ピット群		グリッド	遺構番号
ピット群1		J13	56～58P
		J14	50・51P
		J13・14	53P
		K12	84・85P
		J・K13・14	55SK
		K・L12	86P
		J・K13	60・72P
		K13	64・77・79・82・122・123P、81SK・118SK
		L12	120P
		L13	87P
		I14	54SK
ピット群2	北東—南西 向の並び	J17	106P
		J18	33・35・36P
		K17	30P
		K18	27・107P、26SK
		J・K18	32P
	北西—南東 向の並び	L18	108・109P
		K18	28・29・31P
		K18・19	119P
		K19	38・39・40P
		K20	42・43・116P
	K・L18・19	37P	
ピット群3		N17	63P、61・62SK
		O17	65～70P
単独		K15	94P
		K・L14	76P
		L15	110P
		M15	101P
		P8	354P

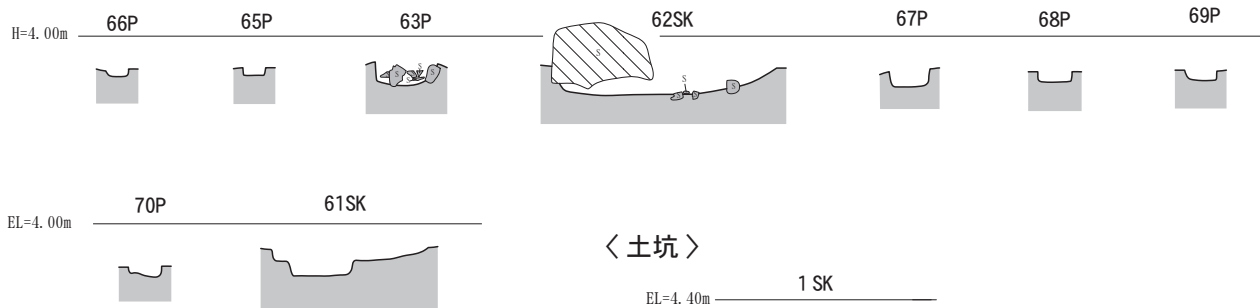
〈ピット群 1〉



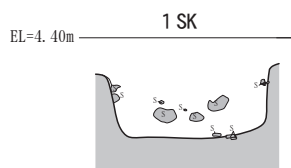
〈ピット群 2〉



〈ピット群 3〉



〈土坑〉



第 141 図 ピット群 1・2・3

第63表-1 ピット観察一覧

(法量単位:cm)

ピット群	遺構名	性格	グリッド	長辺	短辺	深さ	平面形状	断面形状	観察事項	遺物
ピット群 1	50P	柱穴	J14	35	30	28	楕円形	U	径50～150mmの礫含む黄褐色砂質土(10YR5/6)	
	51P	柱穴	J14	27	25	76	円形	U	径25mmの礫含む黄褐色砂質土(10YR5/6)	
	53P	柱穴	J13・14	59	53	56	円形	U	明褐色(7.5YR5/6)砂質土がブロック状に混じり、炭化物、径10～12mmの礫含むにぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)	陶質・本磁(近代)
	54SK	ピット	I14	62	46	6	楕円形	皿	明褐色砂質土(7.8YR5/8)・明褐色砂質土(5YR5/8)がブロック状に混じるにぶい褐色砂質土(10YR4/3)	
	55SK	土坑	J・K13・14	(109)	75	14	不定形	皿	1層:褐色(7.5YR4/4)シルトがブロック状に混じり、炭化物含むオリブ褐色砂質土(2.5YR 4/3).014SZに切られる 2層:オリブ褐色(2.5TR4/3)砂質土がブロック状に混じり、径70mmの礫含む褐色シルト(7.5YR4/4)	本磁
	56P	ピット	J13	31	26	9	円形	U	褐色(10YR4/6)砂質土、明褐色(7.5YR5/8)砂質土含む暗オリブ褐色砂質土(2.5YR3/3)	
	57P	ピット	J13	22	26	9	不定形	U	炭化物、にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土含む黄褐色砂質土(10YR5/6)	
	58P	柱穴	J13	26	24	13	隅丸方形	U	炭化物、明褐色(7.5YR5/8)砂質土、5mmの礫含むにぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)	
	60P	ピット	J・K13	31	30	7	円形	U	にぶい黄褐色土(10YR4/3)含む褐色砂質土(10YR4/6)	
	64P	柱穴	K13	26	27	28	円形	U	炭化物、径30～130mmの礫含む明黄褐色砂質土(10YR6/6)	沖無
	72P	柱穴	J・K13	59	47	31	楕円形	U	明赤褐色(2.5YR5/6)・暗褐色(7.5YR5/8)シルトがブロック状に混じり、炭化物、径150mmの礫含む暗褐色砂質土(10YR3/3)	沖施・沖無
	77P	ピット	K13	33	29	7	円形	すり鉢	にぶい黄褐色土(10YR4/3)含む褐色砂質土(10YR4/6)	
	79P	柱穴	K13	30	25	40	楕円形	U	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルトがブロック状に混じり、径70mmの礫含む褐色シルト(10YR4/6)	
	81SK	土坑	K13	46	37	28	楕円形	U	径20～50mmの礫、長20mmの枝サンゴ含むにぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)	陶質・骨・瓦・本磁(近世)
	82P	柱穴	K13	37	33	20	楕円形	U	炭化物、径20mmの礫含む黄褐色砂質土(10YR4/3)	
	84P	ピット	K12	38	30	9	隅丸方形	U	炭化物、径30～100mmの礫含む褐色砂質土(10YR4/6)	
	85P	柱穴	K12	28	26	31	円形	U	炭化物、径30～60mmの礫含む褐色砂質土(10YR4/4)	沖無
	86P	柱穴	K・L12	49	37	11	不定形	U	暗褐色(7.5YR3/4)シルトがブロック状に混じり、径50mmの礫含む黄褐色砂質土(10YR6/6)	沖無・陶質
	87P	柱穴	L13	24	21	11	隅丸方形	U	径5mm～2mmの礫含むにぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)	
	118SK	土坑	K13	57	50	41	不定形	U	炭化物、焼土、褐色土(10YR4/6)、15mmの礫含む暗オリブ褐色砂質土(2.5YR3/3)	
120P	柱穴	L12	42	39	11	円形	U	褐色土(10YR4/6)、径5mmの礫、径1mmの貝片含む明黄褐色砂質土(10YR6/6)		
122P	柱穴	K13	32	31	23	円形	U	炭化物、5～10mmの礫含む黄褐色砂質土(10YR6/6)		
123P	ピット	K13	36	36	6	円形	U	黄橙色(7.5YR7/8)・黄褐色(10YR7/8)シルトがブロック状に混じり、炭化物、径30mmの礫、径20mmの貝片含む黄褐色砂質土(10YR5/6)		
ピット群 2	26SK	土坑	K18	(144)	139	52	不定形	不定形	黄褐色(10YR7/6)粗砂、径25mmの礫、長10mmの枝サンゴ含む褐色粘質土。004SZに切られる。	
	27P	柱穴	K18	45	41	70	円形	U	黄褐色(10YR7/6)粗砂、径25mmの礫、長10mmの枝サンゴ含む褐色粘質土(10YR4/4)	
	28P	柱穴	K18	64	47	44	楕円形	U	黄褐色(10YR7/6)粗砂、径15～50mmの礫、長20mmの枝サンゴ含む褐色粘質土(10YR4/4)	
	29P	柱穴	K18	51	47	64	円形	U	黒褐色色(10YR2/3)・褐色(7.5YR4/6)砂質土がブロック状に混じり、長10～25mmの枝サンゴ含む褐色砂質土(10YR4/4)	沖無・染付
	30P	柱穴	K17	35	29	17	楕円形	逆台形	炭化物、赤褐色土(2.5YR4/6)・橙色土(5YR6・8)ブロック、径50mmの礫、径5～10mmの貝片含む褐色砂質土(10YR4/4)	
	31P	柱穴	K18	29	27	51	円形	U	明黄褐色(10YR6/6)粗砂、径20mm～40mmの礫含む褐色シルト(10YR4/4)	
	32P	柱穴	J・K18	60	57	40	円形	U	炭化物、明褐色(7.5YR5/6)砂質土がブロック状に混じり、径20～60mmの礫含む褐色砂質土(10YR4/6)	
	33P	柱穴	J18	72	51	39	楕円形	U	にぶい黄褐色(10YR4/3)・明褐色(7.5YR5/6)砂質土がブロック状に混じり、径20～70mmの礫含む黄褐色砂質土(10YR5/6)	本磁(近世)
	35P	柱穴	J18	47	39	17	楕円形	皿	にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土がブロック状に混じり、径20mmの礫含む黄褐色砂質土(10YR5/6)	
36P	柱穴	J18	58	55	12	隅丸方形	皿	炭化物、黄褐色(2.5YR5/6)砂質土、径20～60mmの礫含む黄褐色砂質土(10YR5/8)		

(凡例) 沖施:沖繩産施釉陶器 沖無:沖繩産無釉陶器 陶質:陶質土器 本磁:本土産磁器 本陶:本土産陶器 褐釉:褐釉陶器

第63表-2 ピット観察一覧

(法量単位:cm)

ピット群	遺構名	性格	グリッド	長辺	短辺	深さ	平面形状	断面形状	観察事項	遺物
ピット群2	37P	柱穴	K・L18・19	61	38	21	楕円形	U	炭化物、径5～10mmの貝片含む褐色砂質土	沖無・骨
	38P	柱穴	K19	34	31	42	円形	U	にぶい黄褐色(10YR6/4)粗砂、長10～30mmの枝サンゴ含むオリブ褐色シルト(2.5YR4/4)	
	39P	柱穴	K19	44	44	33	円形	U	にぶい黄橙(10YR7/4)粗砂、長10～20mmの枝サンゴ含むにぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)	
	40P	柱穴	K19	54	52	15	円形	U	径20～40mmの礫含む褐色砂質土(10YR4/6)	
	42P	柱穴	K20	35	35	55	円形	U	径20～40mmの礫含む褐色砂質土(10YR4/6)	
	43P	柱穴	K20	44	41	18	円形	U	径20～40mmの礫含む褐色砂質土(10YR4/6)	
	106P	柱穴	J17	53	49	33	円形	U	炭化物、径30～80mmの礫含む褐色砂質土(10YR4/4)	骨
	107P	柱穴	K18	41	38	69	円形	U	径5～10mmの礫含む褐色砂質土(10YR4/4)	
	108P	柱穴	L18	36	35	36	円形	U	径30～100mmの礫、長10～20mmの枝サンゴ含む褐色砂質土(10YR4/4)	沖無
	109P	柱穴	L18	37	32	23	円形	U	明黄褐色(10YR6/6)粗砂、長10～40mmの枝サンゴ含む黄褐色砂質土(10YR5/6)	沖無
	116P	柱穴	K20	42	38	62	円形	有段状	径20～40mmの礫含む褐色砂質土(10YR4/6)	
	119P	柱穴	K18・L19	49	46	22	円形	U	明黄褐色(10YR7/6)中砂、径20mm・径70mmの礫、長25mmの枝サンゴ、径30mmのコーラル含む黄褐色砂質土(10YR5/6)	
ピット群3	61SK	土坑	N17	167	68	17	楕円形	有段状	炭化物、焼土含む黄褐色砂質土(10YR5/6)	沖施
	62SK	土坑	N17	238	(141)	34	楕円形	皿	50～350mmの礫含む黄褐色砂質土(10YR5/8).111SZに切られる(10YR5/8)	沖施・沖無・陶質・本磁(近代)・円盤状製品・瓦・白磁・染付・中国産色絵・本陶
	63P	柱穴	N17	74	58	26	円形	U	径230mm～170mmの礫含む黄褐色シルト(10YR5/6)	沖無
	65P	ピット	O17	22	20	8	円形	U	にぶい黄橙(10YR7/3)中砂、径80mmの礫、長10mmの枝サンゴ含む明黄褐色砂質土(10YR6/8)	
	66P	ピット	O17	23	20	7	円形	U	径10mmの礫含む明黄褐色砂質土(10YR6/8)	
	67P	柱穴	O17	48	43	18	円形	U	褐色(10YR5/6)砂質土がブロック状に混じり、炭化物含む黄褐色砂質土(10YR5/6)	沖施・陶質
	68P	柱穴	O17	36	33	10	円形	U	明赤褐色(2.5YR5/8)砂質土がブロック状に混じり、炭化物含む黄褐色砂質土(10YR5/6)	
	69P	ピット	O17	36	32	9	円形	U	明赤褐色(2.5YR5/8)砂質土がブロック状に混じり、炭化物含む黄褐色砂質土(10YR5/6)	
単独	70P	柱穴	O17	36	34	18	円形	有段状	明褐色(10YR4/4)・褐色(10YR5/6)砂質土がブロックに混じり、炭化物含む黄褐色砂質土(10YR5/6)	
	76P	柱穴	K・L14	25	23	13	円形	有段状	明赤褐色(5YR5/8)砂質土がブロック状に混じり、炭化物、灰含む黒褐色色砂質土(7.5YR3/2)	
	94P	柱穴	K15	66	42	12	楕円形	U	炭化物、鉄分、径3mmの礫含む粗砂混じりの黄褐色砂質土(10YR5/6)	沖施
	101P	柱穴	M15	30	25	23	楕円形	U	径50mmの礫含む褐色砂質土(10YR4/6)	
	110P	柱穴	L15	29	24	17	楕円形	U	径5～30mmの礫含む褐色砂質土(10YR4/6)	
354P	柱穴	P8	25	23	31	円形	U	径1mmの貝片が少量混じるオリブ褐色砂質土(2.5Y4/3)		

(凡例) 沖施:沖繩産施釉陶器 沖無:沖繩産無釉陶器 陶質:陶質土器 本磁:本土産磁器 本陶:本土産陶器 褐釉:褐釉陶器

同石組の南東側、N・017 グリッドで検出されたピット群 3 は、標高 3.5~3.6m、集落東端に位置した製糖小屋（サターヤー）の 2 基の窯跡で、標高約 3.5~4m で検出されたことから、この道は北東から南西に向かって下る坂道となっていたことが窺える。

製糖小屋の 2 基の窯跡は、窯跡 1 は焚口を西、窯跡 2 は北西に向く。後者は焚口前庭部を掘り窪めて構築されている。規模の異なる窯を使用した施設配置の様子が窺えた。

製糖小屋には、搾取機（サター車）が設置されていたということから、窯跡北西側で検出されたピット群 2 は関連する施設の可能性があると思われる。

この坂道の西側に並ぶ 3 軒の屋敷の内、伊礼宅の南側隅に井戸（377SE）があたると見られる。標高約 4 m に構築されており、集落内の道路と約 1 m の高低差を有する井戸は、付随施設として階段を設けたものと推察される。また、井戸の深さは、HB④地区の下層確認トレンチ 2 で標高約 1.5m 以下から湧水が見られることから、同標高以下になると推察される。

伊礼宅の北側にあたる土坑（1006SK）は、肥溜めと考えられ、民俗例の屋敷内北側に設けると合致すると考えられる。

石組（380SL）は、大和島小宅の中央付近にあたり建物に近い位置と見られることから建物に関連するものの可能性があると思われ、石組（379SL）は、前述の石列（276SL）と直交する向きを有することから、大和島小と東門小の屋敷境界に関連する可能性が考えられる。

坂道に並ぶ石積（276SL）西側で、同様な方向に延びる溝（257SD・3055SD）のうち、溝（257SD）は、溝（2049SD・275SL：近世遺構）を切っていることから、溝（2049SD・275SL：近世遺構）より新しく、Ⅲ層上面に構築される石組（276SL）より古い可能性を有していると思われる。

また、Q13~16 ではⅢ層の堆積が見られないことから、傾斜地による自然浸食、もしくは、人為的に失われた可能性があるものと思われる。

溝と土坑には切り合い関係があり、土坑（358SK）は溝（281SD）に切られており、同溝の構築時には埋没していたと判断され、ごみ投棄穴を埋めたものと推察される。同土坑（358SK）は溝（2073SZ：近世遺構）を切っていることからそれより新しい。

石組遺構（2004SX）は、祝女殿内小の屋敷内にあたる位置で検出され、主屋と見られる建物背後にあたることから、敷地内の通路の縁石、石組遺構（2005SX）は礎石などの建物に関連する可能性があるものと思われる。

SK1・2 が検出された台地状の平坦面（SX1）は、土坑（SK1・2）の埋土である 3 層（HB④ロ地区壁面Ⅳ）が、調査区全体に堆積することから、SX1 はⅡ層堆積過程で生じた段差と考えられる。

〈註文献〉

註 1 北谷町教育委員会 2005『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査』北谷町文化財調査報告書 第 23 集

註 2 北谷町教育委員会 2008『平安山原B遺跡』北谷町文化財調査報告書 第 29 集

註 3 旧字平安山の方に教示頂いた。

第64表 II層遺構遺物出土量（グスク時代・近・現代）

地区	グリッド	遺物 遺構	グスク時代													近・現代							合 計					
			グ ス ク 土 器	カ ム イ ヤ キ	白 磁	青 磁	染 付	褐 釉 ・ 半 練	輸 入 磁 器	そ の 他	瓦 質 土 器	本 土 産 陶 器	本 土 産 磁 器 (近 世)	本 土 産 磁 器	焼 土	簀	石 製 品	グ ス ク 砥 石	沖 縄 産 施 釉 陶 器	沖 縄 産 無 釉 陶 器	陶 質 土 器	本 土 産 磁 器 (近 代)		円 盤 状 製 品	鉄 製 品	骨	瓦 ・ レ ン ガ	現 代 遺 物
			HB①	P・Q8.9	358SK	7	2	7	1	13	2		3	14							64	52		33	60	6		39
	P・Q10	240SZ	2		1	2	4	1	2	1	2							41	48	23	7	4		1	8		147	
	K・L12	1SK			1	1	7	1	1	1					1			47	13	1					13		87	
	N17	62SK			1		3		1	1								29	22	3	12	1			1		74	
	K13	83SZ			1		3											8	28		5			1	9	1	56	
	O・P10.11	359SK	1		1	1	10				4							4	5	5		1		2	1		35	
	P8.9	305SD	1				1	1		1								6	5	6	1	1			5		28	
	I15	299SK											11														11	
	P13	274SZ	1				2											2	6	2						1	14	
	K・L14	100SZ									2								2		3				1		8	
	K13	81SK									1									1				7	1		10	
	P9	281SD												1													1	
	K18	29P					1												1								2	
	J18	33P									1																1	
	J・K15.16	8SZ	1															2	1		1				1		6	
	L14	229SZ																1	10	1	1			2	8		23	
	O・P15	288SS																4	2	3	1						10	
	K13	72P																2	7								9	
	K・L12	86P																	3	1							4	
	O17	67P																2		1							3	
	J・K・13・14	55SK																			2						2	
	N17	61SK																2									2	
	J13・14	53P																		1	1						2	
	N17	63P																	2								2	
	P10～15	271SD																			1						1	
	K・L18.19	37P																	1					1			2	
	K13	64P																	1								1	
	K12	85P																	1								1	
	K15	94P																1									1	
	J17	106P																						1			1	
	L18	108P																	1								1	
	L18	109P																	1								1	
	L18	138P																	1								1	
	L14	376P																		1							1	
HB②イ	K8・9・10 L8・9・10 M9	1018SX					1	1		2								20	36	7	6		1	10		1	85	
	J10・K10.11	1005SZ					5											29	15		6						55	
	J・K10・11	1019SZ																					1				1	
	J13	1003SZ																4	12		3				1		20	
	H14 I13・14 J12・13 K11・12	1016SZ					2											3	12		2				1		20	
	K12	1004SZ																	5						1		6	
	J・K12	1006SK					3											3	1		2			2	1		12	
HB②ロ	Q9.10K9.10・S9.10	2002SZ			3	3	11		1		8					1	146	64	17	34			4	17	2		311	
	Q8.9	2054SX					3		1	1	6					1	66	63	33	6	2	1			1		184	
	Q・R・S8.9	2003SZ					1				1						8	8	2	3				2			25	
	S12・13	2004SX					1				1						9	12		2					6	2	33	
II層合計			13	2	15	10	69	6	6	2	8	40	11	1	1	2	503	441	141	159	15	2	86	71	15		1619	

2. 出土遺物

(1) 沖縄産施釉陶器

HB①地区で465点、HB②イ地区で128点、HB②ロ地区で334点、HB④イ地区で3点の計930点の出土である。層別にはⅠ層228点、Ⅱ層635点、Ⅲ層57点、Ⅳ層6点で、そのほとんどがⅡ層で68.3%を占め、そのうち79.2%（503点）が遺構内からの出土である。器種別には碗545点、小碗45点、皿12点、鉢43点、急須86点、酒器9点、鍋39点、蓋15点、火取11点、香炉9点、火炉12点、壺41点、瓶40点、厨子甕1点、不明22点（急須か瓶、火炉か火取を含む）の出土である。これまで報告したキャンプ桑江北側地区の中では最も多く得られた（第65表・第142図）。

・観察の方法

沖縄産施釉陶器の変遷（主に施釉法）を検討するため、下記のような観察を行った。

施釉の方法：いわゆるフィガキー（浸し掛け）^{註1}、白化粧の有無あるいはそれに伴い、見込みに蛇の目が施されているか、内外面の熔着や外底の畳付けの研磨など

釉薬の色：透明釉、鉄釉、飴釉、黒釉等、施釉の濃淡でさらに細分

文様の方法：鉄釉（絵）、線彫りや呉須、二彩と施文の位置

以下、主なものを第144～149図、観察一覧を第68表に示した。器種ごとに略述する。

<碗>

碗はHB①地区243点、HB②イ地区70点、HB②ロ地区231点、HB④イ地区1点の計545点得られ、沖縄産施釉陶器の58.6%を占める。施釉の方法で大きく4種に分けた。（第67表）

I類：素地にそのまま透明釉を施すもの

123点得られ、碗の22.6%を占め、無文（a）と有文（b）がある。口縁部は直口で高台から腰部の立ち上がりもまっすぐを呈するのがほとんどである。高台の断面は逆三角形を呈する。

a 無文：図1～3は粘土が白く、粒が細かく、沖縄産施釉陶器の中では上質の粘土を用いているようである。図1は器高が低く、畳付けも研磨され、丸みを帯びるもので、湧田古窯跡Ⅰ（1993）に類例がある。図3は素地が赤褐色を呈し、釉も透明釉に灰が混じり、白釉が部分的に見られる。

b 有文：外面や見込みに鉄釉で施文するもので9点得られ、I類の1割程度である。ここでは残りのよい2点を図示した。図4・5は見込みに鉄釉で丸文を描くものであるが、図4は他の碗より高台が若干高いことから鉢の可能性も考えられる。図5はaより、腰部が丸みを帯びるものである。

II類：鉄釉あるいは飴釉を内外面に施すもの

38点得られ、碗の7.0%を占める。口縁部は僅かに外反し、玉縁を呈し、高台から腰部の立ち上がりは丸みを帯びる。畳付けの断面はI類に近いが、やや畳付けに幅を持つものである。

a 無文：図6は素地にそのまま飴釉あるいは鉄釉を施すものである。

b 有文：見込みに刷毛で丸文及び圏線を施すものがある。図7は口～底部資料で口縁部は外反し、腰～底部は丸みを帯びる。I類と同じように浸し掛け（フィガキー）するものであるが、見込みに刷毛で丸文を施す。畳付けに化粧土は見られない。図8は底部で前者と同じように内面の胴下部に刷毛で圏線を施すもので外底に化粧土が確認される。

III類（掛け分け）：外面に鉄釉あるいは濃い飴釉（黒釉）、内面に透明釉を施すもの。白化粧を施さない（イ）と施す（ロ）があり、さらに無文（a）と見込みに丸文と圏線を施す有文（b）がある。高台から腰部へは丸みが強くなる、高台も若干高くなる。

イ：白化粧（無）は30点で碗の5.5%と少ない。図9は見込みに径1.8cmの丸文を鉄釉（b）で施した後、透明釉を掛け、その後蛇の目釉剥ぎを行うもので外底に若干の熔着が確認できる。

ロ：白化粧（有）は33点でイとほぼ同じ割合である。図10は見込みに蛇の目釉剥ぎを施すもので、畳付けは大きく剥離、高台には熔着が明瞭に残る。

図11・12は外面に飴釉あるいは鉄釉以外の釉を施すもので、図11は外面に緑釉を腰部まで施し、外底は無釉である。この手の碗は少なく首里城御内原北地区（2013、図492）の報告例がある。図12は内面に緑釉を施すものである。腰部の形状が逆「ハ」字状で沖縄産施釉陶器の碗とは異なり、胎土も磁器質なことから中国産の可能性も考えられるが、類例を待ちたい。

Ⅳ類（白化粧有）：全体に白化粧を施したのち、両面に透明釉を施すものである。これにより、両面とも光沢のある白色を呈する。内外面とも総釉で仕上げ、高台の畳付けを研磨して露胎、見込みは蛇目釉剥ぎにするものである。321点の出土で碗全体の58.9%を占める。無文（a）と有文（b）があり、後者は線彫り①、呉須②、二彩③があり、Ⅳ類の9.3%を占める。Ⅰ・Ⅱ類に比べて底厚も約2倍になり、高台も台形を呈し、腰部も丸みを帯びる。

a 無文：図20～22で、畳付けの研磨、腰部が丸みを帯びる。

b 有文：文様には①線彫り、②呉須、③二彩などの絵付けが確認された。

①線彫り：3点得られた。図13は口縁に幅2.3cmで外面に沈線で格子文描き、その上に緑釉を重ね、内唇にも外面と同じ幅で緑釉で縁取るものである。図14は外面に円を構図とするもので、弧状沈線文を円に沿うように連続して施し、その上に緑釉と少量の黄釉を重ねる。

②呉須：13点得られ、4.0%を占める。図15・16は呉須（青釉）で草花文を施すもので、前者が外面のみ、後者が内外面に施す。内面は幅2.0cm程度に圍繞するもので、口径が12.0cmと小ぶりである。

③二彩：14点得られ、4.4%を占める。筒描きで中央に黄釉で径2.5cm大の円を配し、その回りを径0.8cm前後の呉須で囲むのを1組として、碗に3個配するもので「インチチャグラー」と呼ばれるものである。図18は中の円が細身、図19は点が太めである。文様の釉だれをみると口縁部方向に向いていることから1920年代以前に行われた伏せ焼き^{註2}と思われる。

<小碗>

HB①地区で14点、HB②イ地区8点、HB②ロ地区23点の計45点で全体の4.8%である。碗の分類に準ずるとⅠ・Ⅱ類は見られない。

Ⅲ類：掛け分けは白化粧を施さない（イ）と施す（ロ）がある。

イ：（白化粧無）は8点出土した。図23・24は口縁部、図25は底部で、図23が鉄釉、図24・25が濃い飴釉を外面に施し、内面はいずれも白化粧は無く、透明釉を施すが図24は釉が厚く、灰色を呈する。

ロ：（白化粧有）は6点出土した。そのうち、図26を示した。外面に鉄釉、内面は白化粧後透明釉を施すものである。外面の畳付けの白化粧はそのまま残すもので、厚みを残し、部分は熔着のため、破損したと思われる。

Ⅳ類：白化粧を施すもので、見込みは蛇目釉剥ぎ、畳付けは研磨、無文（a）有文（b）がある。

a 無文：図28は直口口縁、図27は外反口縁である。

b 有文：有文は腰部から口縁部方向に放射状に削りとり「面取り」とされる加飾の一種である。図29・30で、前者は面取りの幅が大きく明瞭で、白化粧後に灰色釉を施すもので報告例は少ない。後者は面取りの幅が細いため、面は明瞭でなく、口縁は玉縁を呈する。いずれもHB②ロ地区2002SZの出土で大きな時期のずれはない。

<皿>

HB①地区で7点、HB②イ地区1点、HB②ロ地区4点の計12点で全体の1.3%である。底径の大

きさで5.0cm以下（小）、5.0cm以上（大）に分けた。

小：直口口縁のベタ底で、図31は口縁部に三角状の突起をもつことから灯明皿と考えられる。図31～33は外面の口縁から内面に濃い飴釉を施す。図32は白化粧後透明釉を施すもので、腰部に煤痕が確認されている。図32が62SK、他はHB①地区とHB②ロ地区のⅡ層の出土である。

大：口縁部1点、底部3点の計4点で、底部（図36・37）を図示した。

いずれも胴下部は露胎、器色は赤褐色で、僅かに石粒を含み、釉は濃い飴釉を施すものである。

<鉢>

HB①地区で19点、HB②イ地区17点、HB②ロ地区7点の計43点で全体の4.6%である。

碗の施釉の分類に準ずると、単釉（Ⅰ・Ⅱ類）、掛け分け（Ⅲ類）、白化粧有（Ⅳ類）に分けられる。

Ⅰ・Ⅱ類：2点の出土で、見込みに刷毛で丸文を施す。灰釉と飴釉を施したものがある。

Ⅲ類：掛け分け7点の出土で、白化粧無し（図42）が5点、白化粧有が2点得られた。図42は高台に粗孔を施す。

Ⅳ類：白化粧有は図43の1点で、腰部の丸みから碗の可能性も否定できない。見込みに呉須で施文されており、碗に類例がないことからここで扱った。

<急須>

HB①地区で60点、HB②イ地区3点、HB②ロ地区23点の計86点で全体の9.2%を占め、碗に次いで出土量は多い。口縁部9点、注口11点、胴部31点、把手1点、底部34点である。急須は小・中・大に分けられる。底部は小・中サイズは脚、大は高台を呈する。

小：肩部が角をなすもの（図44）、胴部が丸くなるもの（図45・46）がある。加飾を見ると前者は外面に青釉（呉須）、後者のうち図46は胴部の上下に2条の圏線を施し、白粘土で埋めるいわゆる象眼、図45は菱形と花形で印し、鉄釉を埋めるもので前者と色調は逆である。

中：口径8cm前後で、白化粧で線彫りし二色を塗布した図47・48と把手を有する図49がある。

大：アンビンと呼ばれるもので図52の注口、図50は口径11cm。図53は把手幅が4.5cmで断面が三日月状を呈する。そのほとんどは黒釉を施す。図49の中型のアンビンは白化粧に呉須を施すものである。

<酒器>

いわゆる「カラカラ」と呼ばれるもので、HB①地区から8点、HB②ロ地区1点の計9点でそのうち遺構から5点出土した。全体の1.0%で、胴部5点、底部3点、注口1点である。

胴部の形状から丸型とソロバン玉型がある。底部も特徴が有り、畳付けの内縁が上がる形状を呈する。

図54は丸型の胴部で、白化粧がなく胴部の上下に圏線で区画し、その間を3段階の長さの線を1組として縦位に鉄釉で施すものである。図55はソロバン玉型の胴部で外面は白化粧後、肩部から胴上部に線彫りを施し、青・黄釉を重ねる。

図56～58は酒器独自の底部の形で、外面に施釉、内底に若干の釉を不規則に施す。図56が黒釉で腰～底部は無釉で畳付けは特に加工は見られない。図57・58は外面の白化粧後、飴釉や青釉を掛け加飾するもので、畳付けに釉を掻き取った線條痕が確認できる。

製作方法からは図54・56は白化粧が無く、他は白化粧が施されていることからやや新しいと思われる。図54がHB①地区Ⅱ層の出土である。

<鍋>

HB①地区で31点、HB②イ地区5点、HB②ロ地区3点の計39点の出土で全体の4.2%である。遺構内より22点、Ⅰ層5点、Ⅱ層27点、口縁部が7点、胴部24点、底部8点の計39点である。

鍋は口縁部断面を逆「く」字状に湾曲し、底部は丸底を呈するものである。釉は外面に鉄釉、濃い飴釉、内面の胴部～底部にかけて薄い釉を施すものである。口縁部の形状から図 59 のやや筒状のタイプ (a) と図 60 の胴下部の張るタイプ (b) がある。前者は口縁の受縁が 1.4cm、後者の受縁が 1.9cm と大きい。鍋の口縁部の形態は図示した以外に内唇が幅 1.8cm で釉を施すもの、幅 1.3cm と 1.9cm を測るものがある。口唇の幅のあるものは内唇の湾曲が強い。また、小振りの底部も見られることから鍋の大きさには数種あることが想定される。本遺跡では破片であるが、湧田古窯跡Ⅳ (1999)、天界寺 (2001) の類例から施釉は外面の大部分は胴下部が施されてなく、内面は防水のため、薄釉が施すものである。主に黒～飴釉が主体である。

<蓋>

HB ①地区 8 点、HB ②口地区 7 点の計 15 点で全体の 1.6% である。

蓋は撮み部分が饅頭タイプ (Ⅰ類) と高台タイプ (Ⅱ類) に分けられるが、身とは必ずしも一致しない。

Ⅰ類：撮みの形状が饅頭タイプで縁の部分は脚を有する (a) と有しない (b) があり、急須や壺に用いられる

急須の蓋は 5 点得られうち 3 点を図示した。いずれもⅠ類 a に分類されるもので、HB ②口地区Ⅱ層あるいはその遺構の出土である。

図 62 は外縁に幅 0.3cm の断面が「U」字状の深い圈線を施すものである。図 63 は内外面に白化粧を施し、外面に 0.2cm の断面が「U」字状の深い圈線を等間隔で施し化粧土で埋め、飴釉を掛けるもので三島手のようである。内面も釉が施されていることから製品としては上等品と思われる。図 64 は全体に白化粧を施し、外面に線彫り、さらに青釉 (呉須) と黄釉を塗ったものである。外縁に規則的に剥離が見られる。図示は省いたが、蓋の縁にヒスイ釉たまりを残すもの (HB ①地区 N17-62SK) がある。

壺の蓋は 3 点図示した。図 65～67 は脚タイプ (a)、図 68 は脚なし (b) タイプである。

a タイプはいずれも外面に濃い飴釉を施すもので、胴部が膨らむ。鏝の浅い図 65 と胴部が直状で鏝の深い図 66・67 がある。

Ⅱ類：高台タイプは主に鍋の蓋に用いられるもの

図 69 は撮みが高台タイプで鍋の蓋である。高台の部分がわずかに逆「ハ」字状にし、掴みやすい。図 37 の皿とも類似するが、高台の向きや施釉の範囲から区別される。外面に飴釉を施すが撮み部分の内は無釉である。

これらのうち、図 64・69 は周縁に複数の剥離が確認できることから円盤状製品として二次利用されている。

<火取>

HB ①地区 7 点、HB ②口地区 4 点の出土で、全体の 1.2% である。口径 12cm 前後で外面に施釉し、内面は無釉か白化粧のみである。碗型 (図 70) と筒型 (図 71～74) に分けられる。

碗型：口縁部が内湾し、胴部が張るもので 1 点の出土である (図 70)。白化粧はなく、トビガンナと黒釉で加飾し、胴下部に透明釉を施す。

筒型：口縁部と腰部の大きさが同じで、口縁部が逆「L」字状を呈するもの (図 71) と直状 (図 72) のものがある。また、白化粧無し (5 点) 白化粧を施すもの (4 点) がある。

図 71 は薄手で胴部に深い圈線を数条施し、釉の濃淡で、加飾するものである。近世期の 271SD から出土。図 72 は白化粧を有するもので口縁部に呉須 (青釉) を施すもので、図 74 は腰部に呉須 (青釉) の熔着が見られ、同様なタイプを重ね焼きしていたことがわかる資料である。

<香炉>

HB ①地区で8点、HB ②イ地区で1点の計9点で、全体の1.0%の出土である。形状は口縁部が逆「L」字状を呈し、頸部で窄まり、胴下部で張り、脚を3個有するものが確認された。

図75は全形の窺えるものである。白化粧を施し、線彫りで草花文を施し、上に薄い呉須を塗布する。図76は同じ形を呈するが、白化粧が無く、透明釉を施すもので、胴部に黄釉で加飾する。

<火炉>

HB ①地区で6点、HB ②イ地区2点、HB ②ロ地区4点の計12点で全体の1.3%である。

筒型(図77～79)と袋型(図80～82)に分けられ、白化粧は見られない。

筒型：底部が高台タイプ(図79)で胴部に2個の横耳を貼り付け(図78)、口縁部は「U」字状に抉る(図77)のものである。口唇は幅1.3cmと厚く、化粧土を塗布する。図78・79に見られるように深い沈線文を施すもので、図79のように等間隔、あるいは数条を一単位として部分的に施すものなどバリエーションがある。

袋型：図80～82は破片であるが、器厚や胎土から同一個体と想定される。図82のように脚を有するもので、胴部には格子状の深い沈線文を施し(図81)、その上から飴釉を塗布するものである。内部の突起(図80)は幅4.2cmと大きな三角形で上部は斜めに削る。これら3点は灰白色で密を呈し、やや上質の火炉と思われる。I・II層の出土である。

<壺>

壺は「アンダガーミ」と呼称されるもので、口はやや窄まり、胴部が膨らみ、頸部に4個の縦耳を有するもので、外面に黒釉、内面は黒～飴釉の失透釉を薄く施すものである。底部は畳付が無釉で、外底内は釉を搔くように塗布する。用途はブタ油や味噌などの調味料入れとされている。なお、外面に濃い飴釉を施す胴部片もここに含めた。

HB ①地区23点、HB ②イ地区3点、HB ②ロ地区14点、HB ④イ地区1点の計41点で、全体の4.4%である。

小は底径7.2cmで10点得られ、中は底の大きさは大と同じであるが、最大胴径が異なることから中とし、1点得られた。大は底径11.0cm台で1点得られた。他は破片のため不明である。

小：図83は底径7.2cm、図84は口径10.8cmを測り、前者が2002SZ、後者がI層の出土。

中：図85は胴径16.6cm、底径11.2cmと前2者より大きいもので、240SZと358SKから得られ、接合できた。

大：図86は底径11.2cmと底部は畳付けから逆「ハ」字状に立ち上がるもので、図85と底径は同じであるが、底部から腰部にかけて直状に立ち上がるため胴径が大きくなる。他の壺と形状が異なることから分けた。III層の271SDの出土である。

<瓶>

HB ①地区27点、HB ②イ地区5点、HB ②ロ地区8点の計40点で全体の4.3%である。

完形はないが、口縁部と底部の形状から口縁部がアサガオ(図88・89)、長頸(図87)、丸型(図90)、底部が脚台(図92)、碁笥底(図91)、角瓶(図93)の6種がある。

施釉でみると白化粧無で透明釉を施すものは図88・91と他2点、濃い飴釉を施すものは図89と他13点、鉄釉を施すもの3点の計20点得られた。白化粧ありは5点でそのうち、2点は線彫りで加飾されている。図92は白化粧の濃淡で地に透明釉を施し加飾のようでもある。形は胴部の張る瓶で、脚台タイプの可能性がある。

図93は白化粧が見られない。破片は板状を呈することから角瓶が想定される。外面に飴釉の濃淡で加飾するもので、釉に貫入が見られることから本土産の可能性も考えられる。

・器種と釉色の関係

第 69 表に器種と釉薬の関係を示した。これによると碗は灰釉が 21.8%、鉄釉が 7.5%、掛け分け 11.6%、白化粧 59.1%と白化粧が多い。これは HB ①地区、HB ②イ・ロ地区の割合もほぼ同じである。灰釉の割合は小堀原遺跡（2012）と比べると多い。

火に用いる鍋、香炉、火取、火炉や油壺は全体として濃い飴釉、鉄釉の割合が高い。

また、急須も小タイプは白化粧に加飾したものの割合が高く、大タイプはいわゆる「アンビン」と呼称されるもので濃い飴釉の割合が高い。

・施釉の比較

本遺跡のⅡ層は「北谷町の地名」によると戦前平安山集落があった場所で、19世紀頃以降の壺屋焼の消費地の様相を呈している。その観点から沖縄産施釉陶器の釉色の出土割合を器種ごとに示した。（第 143 図）

第 143 図をみると碗や小碗、急須など日常食器は白化粧を施すものが 50%以上を占め、鉢は掛け分けが 51.9%を占める。貯蔵用の壺（アンダガーミ）、調理用の火炉、灯明皿は飴～黒釉が多く用いられている。また、火取や香炉もそれぞれほぼ半数を占める。以上のことから食事用の沖縄産施釉陶器は手間の掛かる白化粧掛けで、貯蔵用などは白化粧を掛けないものが主流である。白化粧はやはり割り高になるためであろうか。

最も多い碗をみると白化粧無の灰釉が 21.8%、白化粧有が 59.1%と後者が主体を占める。湧田窯産の代名詞とされる灰釉碗が 2割と高い出土である。Ⅱ層は壺屋に焼き物窯が統合されてから 300年経った時期であるが灰釉碗が使用されている。生産地の遺跡である壺屋古窯群Ⅲ（1997）の出土状況を見ると灰釉碗は全体の 74.3%を占めることから、壺屋古窯群Ⅲでも指摘されているように湧田焼以後も灰釉碗が焼かれていたようである。灰釉碗については松島朝義によると若干、胎土に違いが見られるが、名護の古我知焼や知花焼でも焼かれていたようである（2002）。本遺跡出土の灰釉碗と白化粧有の碗の作りについてみると前者（Ⅰ類）は底部から腰部に直状に立ち上がり、底厚も薄い、白化粧を施したもの（Ⅳ類）は底部から腰部への立ち上がりは丸みを帯び、底厚で前者の約 2倍を呈する。その中間の鉄釉を施したもの（Ⅱ類）は底部は薄手であるが、腰部はやや丸みを持ち、口縁部は僅かに外反する。また、掛け分け（Ⅲ類）についてもⅡ類と同じであるが、僅かに底厚が増し、畳付けは細くなる（図 10）ようである。この器形の違いは施釉方法に起因するか、製作方法の時期差なのか今後、資料を追加し検証したい。いずれにしても壺屋焼と平安山原 B 遺跡で灰釉碗の割合が高いことが判明した。これらの課題は生産地の壺屋焼や他の窯、消費地での資料の検証が望まれる。また、同じ時期に使用された本土産磁器との器種構成（碗・小碗・皿）も関連するであろう。

<註・参考文献>

註 1：木村謙介は従来「フィガキー」と呼称してきた灰釉碗について「・・・製品の高台を持ち、容器のための釉薬に口縁部から浸す、いわゆる「浸し掛け」の技法を用いた・・・」（木村 2000「沖縄施釉陶器に関する研究（1）一灰釉碗を中心に」『壺屋焼物博物館紀要第 1 号』壺屋焼物博物館）

註 2：1910 年当時は匣（さや）棚板、棚棒を使わず、焼き物は裸積みで、碗などは伏せて重ね焼きをしていたが、1920 年代後半から、粘土板、棒で棚を組む技術が導入された。（壺屋焼物博物館，2008『壺屋焼近代百年のあゆみ，那覇市焼き物博物館 10 周年記念特別展』）

松島朝義 2002「「沖縄の陶器類関係資料調査」を総括して」『沖縄の陶器類関係資料調査報告書』沖縄県文化財調査報告書 142 集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）』第 54 集

那覇市教育委員会 1997『壺屋古窯群Ⅲ』那覇市文化財調査報告第38集

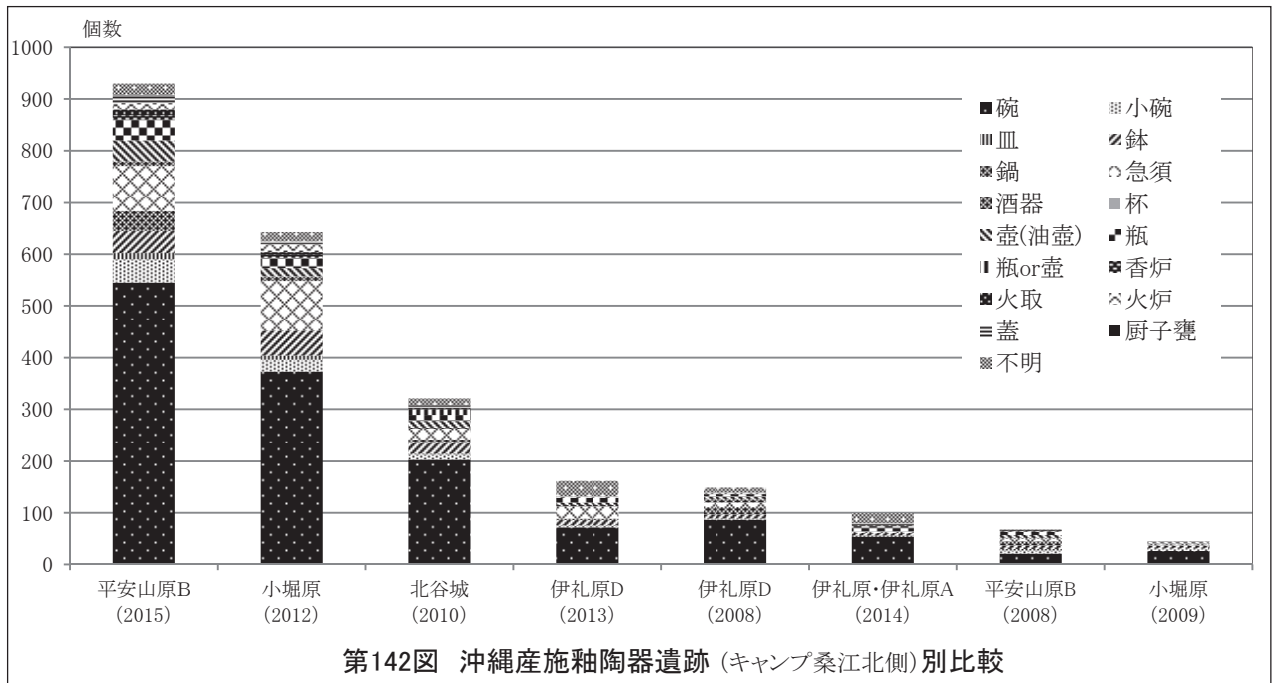
沖縄県教育委員会 1993『湧田古窯跡(Ⅰ)』沖縄県文化財調査報告書第111集

沖縄県教育委員会 1999『湧田古窯跡(Ⅳ)』沖縄県文化財調査報告書第129集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『天界寺跡Ⅰ』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第8集

第65表 沖縄産施釉陶器遺跡別比較

遺跡	器種	碗	小碗	皿	鉢	鍋	急須	酒器	杯	壺(油壺)	瓶	瓶or壺	香炉	火取	火炉	蓋	厨子甕	不明	合計
平安山原B(2015)		545	45	12	43	39	86	9		41	40		9	11	12	15	1	22	930
小堀原(2012)		373	23	8	49		95	8	1	16	20		6	5	15	6		18	643
北谷城(2010)		203	10	2	21	5	21	2		13	12	11	1	2		4	1	13	321
伊礼原D(2013)		72	3	1	10	3	23	3		5	9				2	1		30	162
伊礼原D(2008)		86	1	2	8	14	9	6		5	5			1	2			10	149
伊礼原・伊礼原A(2014)		54		2	5		2		1		10			2		4		19	99
平安山原B(2008)		21	6	3	7	8	5	1		6	6	1	1	2				1	68
小堀原(2009)		26	5		5	1	2	1	1	2						1		1	45
合計		1380	93	30	148	70	243	30	3	88	102	12	17	23	31	31	2	114	2417



第66表 沖縄産施釉陶器出土量

地区	層位	器種 遺構	器種															不明	合計				
			碗	小碗	皿	鉢	急須	酒器	鍋	蓋	火取	香炉	火炉	火炉 or 火取	壺	瓶	瓶 or 急須			厨子甕			
HB①	I		64	4	1	3	16	1	4	1	3	7	5	11	8								128
			38	2	1		5	2	11	3					1	9							2
	II	1SK	27		1	1	12	1	1	1					1	2							47
		8SZ	1				1																2
		61SK	2																				2
		62SK	9	2	1		12		3	1		1											29
		67P	2																				2
		72P	1																				2
		83SZ	3			1	1								2	1							8
		94P	1																				1
		229SZ	1																				1
		240SZ	25	2	1	2	5	2				2		1		1							41
		274SZ														1	1						2
		288SS	1												2	1							4
		305SD	5											1									6
		358SK	41	1	1	8	4		5			1		1		2	1						64
359SK	3						1														4		
III	152P									1												1	
	164SK	1																				1	
	225SZ							1														1	
	271SD	9	3		3	3	1	3	1	1				3	3							30	
	304SD	9			1	1		2														13	
	IV			1																		1	
小計		243	14	7	19	60	8	31	8	7	8	6	1	23	27						3	465	
HB②イ	I		31	2	1	10	2		1				1	1	4	1						10	64
			2			1																1	4
	II	1003SZ	13	6		6			2							1							29
		1005SZ	3						1														3
		1006SK	1						1														3
		1016SX	16				1						1		2		1						20
III	1																				1		
不明	3						1														4		
小計		70	8	1	17	3		5			1	2		3	5	2				11	128		
HB②ロ	I		18	3			6	1		1	1			1	1					1		33	
			41	3	3		3				4				1	2					1	58	
	II	2002SZ	123	6		1	7				1				2	3	2					1	146
		2003SZ	3	3					1								1						8
		2004SX	6				1		1	1													9
		2054SX	36	5		6	4		1		3			2	6	1						2	66
III	3				1								1	1							6		
IV	1	3											1								5		
小計		231	23	4	7	23	1	3	7	4		4		14	8				1	4	334		
HB④イ	I	1												1								3	
	小計		1											1								3	
合計		545	45	12	43	86	9	39	15	11	9	12	1	41	40	2	1	19				930	

第67表 沖縄産施釉陶器(碗)出土量

地区	層位	釉色 部位 遺構	I類(白化粧無)			II類(白化粧無)			III類(掛け分け)						IV類(白化粧有)			合計				
			灰or透			黒or鉄			イ:黒(白化粧無)			ロ:黒(白化粧有)			透							
			口~底	口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底	口~底	口	胴	底	口~底		口	胴	底	
HB①	I		1	3	5	7	1		2	3	2	2		1	1			10	17	8	64	
					4	6		2	2	2	1	2			1	1			7	4	6	38
	II	遺構		5	7	6	4	2	2	1	2	1	1	8	10	1	4	20	31	18	124	
		164SK			1																	1
		271SD			1	2				1							2	3				9
III	304SD		3	1				1	1						1					7		
小計		1	11	20	22	5	4	6	8	6	5	1	9	12	2	4	40	55	32	243		
HB②イ	I			3	3	1	1	3		2	2						1	5	7	3	31	
				3	3	2			2				1					1	11	7	5	35
	II	遺構											1									1
		不明			1													2				3
小計			7	6	3	1	3	2	2	2	1				2	18	14	9	70			
HB②ロ	I					2									1	1	8		6	18		
				8	7	1	4	1		1	1			1	1	1		12	2	1	41	
	II	遺構	1	12	8	12	3	6	3	1	2	1		3	1	1	7	59	38	10	168	
					1	1										1						3
		IV															1					1
小計		1	20	16	16	7	7	3	2	3	1		4	2	3	9	80	40	17	231		
HB④イ	I																1				1	
	小計																1				1	
合計		2	38	42	41	13	14	11	12	11	7	1	13	14	5	15	139	109	58	545		
施釉別合計				123			38			30			33				321					

⑦遺構: 8.83.229.240(SZ) 67.72.94(P) 1.61.62.67.358.359(SK) 288(SS) .305(SD)

⑧遺構: 4地区 1003.1005.1016(SZ) 1006(SK) 1018(SX) 2地区2002.2003(SZ) 2004.2054(SX)

第68表-1 沖縄産施釉陶器観察一覧

(質量単位:cm, g)

第図 図版	図番 号	器種	分類	部位	口径器 高底径	器厚 重量	形状(口・腰・底) 器面調整・文様	釉色 施釉範囲・貫入	素地 胎土	地区・クワッド・層位 遺構・台帳番号	
第144 図・ 図版 114	1	碗	I a	口～底	12.6 6.0 5.6	0.4～0.5 70.4	口:直口-玉縁。腰:やや直状。底:畳付方形、幅0.4cm、やや研磨。 内:轆轤痕-弱	内外:透明釉。白化粧-無。 浸寸掛け(内外:腰～底-露胎)	淡灰色 密	HB① O・P8~14 I 台239	
	2			口	13.6 -	0.35 13.7	口:直口-丸。	内外:透明釉。白化粧-無。 口縁幅1.0cmほど釉が厚い。	灰色 密	HB① I 台494	
	3			口～底	13.8 6.4 7.0	0.4 48.9	口:直口-丸。腰:直状。底:畳付-角、台形。 外:轆轤痕。	内外:透明釉。部分白濁り。白化粧-無。 2回掛け(内外:腰～底、露胎)。熔着痕。	赤褐色 やや密	HB②□ Q8 II 2054SX 台3369	
	4		I b	底	- 6.4	0.5 13.9	底:畳付削り、片側丸み、幅0.6cm、 内:見込みに鉄軸で径4.0cmの丸文、刷毛目明瞭。	白化粧-無。 内外:腰～底、露胎 高台内壁に化粧土付着。	乳色 細粒	HB① N17 II 62SK 台359	
	5				- 6.2	0.4 65.0	腰:丸み、底:畳付-丸、幅0.2cm、不定形。 内:胴下部に轆轤痕 内:鉄軸、刷毛目で見込みに径4.2cm丸文(濃)、 胴下部に幅1.1cm圏線(濃)。	内外:透明釉。白化粧-無。 内底、外-腰～底露胎、化粧土付着、指痕	淡灰色	HB②□ QKS9.10 II 2002SZ 台3367	
	6		II a	口	12.6 -	0.4 11.7	口:直口-玉縁。腰:やや丸み。 外:轆轤痕	内外:胎釉-濃。白化粧-無。 内外:腰～底へ、露胎	乳色 細粒	HB① N17 II 62SK 台359	
	7		II b	口～底	13.4 6.4 6.3	0.3～0.6 149.0	口:外反-玉縁。腰:丸み。底:畳付-方形0.5cm、 内外調整丁寧。 内:刷毛目、見込みに径5.2cmの丸文と圏線。	内外:胎釉-濃。白化粧-無。 外:浸し掛け2回 外-腰～底、内-見込み釉剥ぎ	乳色 やや粗	HB① I 台494	
	8			底	- 6.2	0.5 40.0	腰部:丸み。畳付-角、幅0.5cm。内外:丁寧。 内:鉄軸、刷毛目で見込みに径3.5cm丸文(濃)と 圏線(薄)	内外:胎釉-濃。白化粧-無。 外:腰～底露胎、化粧土付着	灰色 細粒	HB②□QRS8.9 II 2003SZ 台3374	
	9		III イ b	底	- 6.4	0.5 59.4	腰:丸み、底:畳付角、幅0.5cm。 内:鉄軸、刷毛目で径1.8cmの丸文と圏線。	外-胎釉-濃、内-透明釉。白化粧-無。 外:高台～内底露胎、見込み-蛇目軸剥ぎ 内外:熔着痕	淡乳色	HB②□ Q8 II 2054SX 台3369	
	10		III ロ a	口～底	13.2 12.4 6.6	0.3～0.6 66.85	口:外反、腰:丸み、底:畳付け剥離、幅0.4cm。溶着	外-黒釉、内-透明釉。白化粧-有。 畳付け露胎、高台部分的に溶着。 内-貫入	乳色 やや粗	HB①K・L12 II 1SK 台377	
	11			底	- 6.0	0.6 62.1	腰部:丸み。底:畳付-角、幅0.6cm。	外:緑釉、失透、内-緑釉気味。白化粧-有。 外-腰～底は化粧土のみ、見込み-蛇目軸剥ぎ	濃灰色 やや粗粒	HB②□ 北側 I 台3385	
	12		III イ a?	底	- 5.6	- 23.9	腰:逆「ハ」字状に開く、底:丸、高台浅い。 釉の厚さ、底部の形状から中国産?一類例	外-胎釉-濃、内-ヒスイ釉。白化粧-無。 畳付け剥離	灰色	HB① O・P8~14 I 台241	
	13		IV b ①	口	口	14.0 -	0.4～0.5 19.6	口:外反-玉。腰:丸み。 線彫り、外:幅2.3cmに圏線で区画、間を格子文で 埋め、さらに淡緑釉を塗布。内:ほぼ同じ幅を緑釉 で塗布。	内外:透明釉。 白化粧-有。	乳色 細粒	HB① O・P14~16 II 台486
	14				口	- -	0.5 5.3	口:外反-玉縁。 線彫り、外:沈線文を弧状に連続して施し、器全体 に円を描く、黄釉と緑釉を塗布	内外:透明釉。 白化粧有。	濃乳色 やや細粒	HB②イ10・ KL10.11 II 1005SZ 台3081
15	IV b ②	口～底	14.0 6.9 6.4	0.5 190.0	口:やや外反-丸。腰:丸み。底:畳付-やや丸、幅 0.5cm。 呉須、外:全体に草花文	内外:透明釉。白化粧-有。 外:畳付研磨、露胎、見込み-蛇目軸剥ぎ、熔 着有	乳色 やや粗粒	HB②イ I 台3082			
16		口	口	12.0 -	0.4 5.8	口:やや外反-舌、 呉須、外:草花文、内:略草花文	内外:透明釉。 白化粧-有。	乳色 やや粗粒	HB②□ QKS9.10 II 2002SZ 台3367		
17			口	14.8 -	0.3 11.8	口:外反-角。 外:呉須で草花文。器厚が薄い	内外:透明釉。白化粧-有。 貫入有。	乳白色 細粒	HB① I 台494		
18	IV b ③	口～底	12.6 7.5 6.4	0.6 121.0	口:外反-丸。腰:丸み。 二彩、外:黄釉を中央に配し、その周辺を青釉(呉 須)で圍繞し、円を描く	内外:透明釉。白化粧-有。 畳付やや研磨、化粧土残 見込み-蛇目軸剥ぎ	淡乳色 やや粗粒	HB②□ 北側 I 台3385			
19		口	13.4 -	0.5 14.27	口:外反-丸 二彩、外:黄釉を中央に配し、その周辺を青釉(呉 須)で圍繞し、円を描く。伏せ焼き	内外:透明釉。 白化粧-有。	灰色 やや粗粒	HB②□ 北側 I 台3385			
20	IV a	口～底	口	14.4 6.7 7.0	0.6 240.0	口:外反-丸。	内外:透明釉。白化粧-有。 畳付研磨、見込み-蛇目軸剥ぎ、幅1.1cm、熔 着有	赤褐色 やや密	HB②□ QKS9.10 II 2002SZ 台3367		
21			口	13.4 6.4 5.5	4～5 120.0	口:外反-玉縁。腰:丸み、底:畳付-丸、幅 0.6cm。 外:腰部に稜線3本	内外:透明釉。白化粧-有。 畳付研磨、見込み-蛇目軸剥ぎ	乳色 やや細粒	HB① K・L12 II 1SK 台377		
22			口	14.4 6.4 5.9	0.4～0.6 130.0	口:やや外反-舌、釉垂れて膨らむ。腰:丸、底:畳 付-丸、幅0.5cm、底部の中央膨らむ。 外:腰部に稜線3本。	内外:透明釉。白化粧-有。 畳付研磨、見込み-蛇目軸剥ぎ、溶着	乳色 やや密	HB① P・Q10 II 240SZ 台490		
23	小碗	III イ	口	8.8 -	0.25 7.3	口:外反-舌。腰:丸み。 内:轆轤痕-弱。外:腰部-轆轤痕-弱。 内外面の口縁に黒釉、外面に一部釉垂れ	外-鉄軸、内:透明釉。白化粧-無。 見込み-蛇目軸剥ぎ	灰色 密	HB②□ QKS9.10 II 2002SZ 台3367		
24			口～ 底付近	9.0 4.0 4.8	0.2～0.5 9.7	口:やや外反-舌。腰:やや丸	外:胎釉-濃、内透明釉、厚。白化粧-無。 外:腰～底露胎、見込み-蛇目軸剥ぎ、熔着 痕	灰色 密	HB②イ10・ KL10.11 II 1005SZ 台3081		
25			底	- 4.2	0.45 34.7	腰:丸み。底:畳付-方形、幅0.45cm。	外:胎釉-濃、内:透明釉。白化粧-無。 外:腰～底-露胎、見込み-蛇目軸剥ぎ	乳色 やや粗	HB① I 台494		
26			III 口	底	- 4.2	0.25～0.4 38.4	底:中央部1.1cmと厚い。畳付0.5cm、丸、 高台内壁に厚く化粧土残	外:鉄軸、内:透明釉。白化粧-有。 見込み-蛇目軸剥ぎ、溶着痕	灰色 密	HB②イ I 台3082	

第68表-2 沖縄産施釉陶器観察一覧

(法量単位: cm, g)

第図 図版	図番 号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	器厚 重量	形状(口・腰・底) 器面調整・文様	釉色 施釉範囲・貫入	表地 胎土	地区・クワド・層位 遺構・台帳番号	
第145 図・ 図版 115	27	小碗	IVa	口～底	8.2 4.2 4.0	0.3～0.4 44.6	口:外反-舌。腰:丸み。底:畳付-丸、幅0.45cm。	内外:透明釉。白化粧-有。 外:畳付露胎、見込み-蛇目釉剥ぎ	乳色 やや粗	HB① P10 ¹⁵ .Q15 III 271SD 台491	
	28				8.0 4.5 4.2	0.35～0.6 66.8	口:僅かに外反。腰:やや丸。底:畳付幅0.5cm。	内外:透明釉。白化粧-有。 外:畳付研磨、見込み-蛇目釉剥ぎ	灰色 密	HB②口 QKS9.10 II 2002SZ 台3367	
	29	IVb	口～底	8.0 3.8 4.0	0.35～ 0.45 21.1	口:やや外反-舌。腰:丸み。底:畳付-丸、 0.45cm、 面取(幅1.6×1.3cm)	内外:灰釉。白化粧-有。 外:畳付研磨、高台内壁化粧土残。見込み- 蛇目釉剥ぎ、化粧土痕	濃灰色 やや密	HB②口 QKS9.10 II 2002SZ 台3367		
	30			8.4 4.5 4.0	0.25～0.3 88.0	口:直口-玉。腰:丸み。底:畳付-丸、0.4cm、底厚 は胴部に比して厚い。 面取(幅1.4×1.1cm)	内外:透明釉。白化粧-有。 外:畳付研磨、露胎、見込み-蛇目釉剥ぎ、熔 着痕	灰色 密	HB②口 QKS9.10 II 2002SZ 台3367		
	31	皿	小	口～底	13.4 3.5 5.0	0.4～0.9 80.6	口:直口-舌、口唇に三角形(1.7×1.4cm)突起。 底:畳付-方形、0.4cm。	内外:鉛釉-濃(口縁に0.5cm幅)。白化粧- 無。 見込み-蛇目釉剥ぎ	灰色 やや粗	HB②口南側II 台3328	
	32				底	- 4.4	0.3 69.8	腰:やや丸み。底:畳付-丸、0.4cm。 外:煤の痕	内外:鉛釉-濃(口縁のみ、腰に化粧土)。白 化粧-無。 内底:釉玉ができる。	乳色 やや粗	HB① N17 II 62SK 台359
33	口				10.8 -	0.3～0.4 6.4	口:直口-舌。腰:やや丸み。	内外:鉛釉-濃。 白化粧-無。	灰色 粗	HB②口南側II 台3328	
34	口				9.8 -	0.25～0.6 9.8	口:やや内湾。腰:やや丸み 外:口唇に煤?	内外:透明釉。白化粧-有。 貫入。	灰白色 密	HB① O・P8 ¹⁴ I 台241	
35	口				- -	0.3～0.4 2.4	口:直口、腰:やや丸み。 内:0.3cm大の白粘土で花文	内外:透明釉。白化粧-無。 貫入-細	灰白色 細	HB① K・L12 II 1SK 台377	
第146 図・ 図版 116	36	大	底	- 6.8	0.45 132.3	腰:やや丸み。底:畳付-方形、0.65cm、 底厚0.9cm	外:鉛釉-濃、内:不明。白化粧-無。 内外:胴～底露胎	赤褐色 粗、白粒	HB②口南側II 台3328		
	37			- 6.7	0.6 88.1	腰:直状。底:畳付-台形、0.6cm。	外:鉄釉、内:不明。白化粧-無。 外:腰～底露胎	赤褐色 粗、白粒	HB① N16 II (IV) 台512		
	38	鉢	IIIイ	口	23.0 -	0.7 23.7	口:外反	外:鉛釉-濃。内:透明釉。白化粧-無。	灰色 細粒	HB① P10 ¹⁵ .Q15 III 271SD 台491	
	39				III口a	18.6 -	0.6 39.6	口:内湾	外:鉛釉-濃、内:透明釉。白化粧-有。	淡乳色	HB① P・Q8.9 II 358SK 台484
	40				III口a	22.8 -	0.6 93.2	口:外反	外:鉛釉-濃、内:透明釉。白化粧-有。	乳色	HB① P・Q8.9 II 358SK 台484
	41				IIIイ	- -	- 41.4	高台内に削り痕明瞭。高台に穿孔(孔径0.6cm、外 →内)	外:不明、内:透明釉。白化粧-無。 外:腰部～底部、露胎、見込み-蛇目釉剥ぎ、 熔着痕	乳色	HB① I 台494
	42				IIIイa	- 10.6	0.8 63.0	高台に穿孔。	外:鉛釉-濃、内:透明釉。白化粧-無。 見込み-蛇目釉剥ぎ	乳色	HB②イ I 台3082
	43				IV口b	- 7.0	- 57.5	小鉢か皿。底:畳付-台形、幅0.7cm。 淡青色で内底に草花文、胴下部に幅0.3cmの2本 の圈線	内外:透明釉。白化粧-有。 外:畳付研磨、見込み-蛇目釉剥ぎ、化粧土 付着	灰色 やや粗	HB②イJ10・ KL10.11 II 1005SZ 台3081
	44				小 角型	口	6.1 -	0.4 4.1	口唇は内段をなす。肩部あり。	外:呉須(青釉)、内:透明釉。白化粧-有。 口唇:白化粧のみ	灰色 やや粗
	45	小 丸型	胴部	- -	0.47 8.7	胴:丸(残存胴径9.8cm)。内:轆轤痕-弱。鉄釉で 文様、頸部にスタンプで「◇」「○」のスタンプを2条 の圈線で区画、胴下部は縦位に3条1組の沈線文	外:透明釉、内:無釉。白化粧-無。	白灰色 細粒	HB① I 台494		
	46			胴～底	- -	- 15.7	胴:丸(残存胴径12.1cm)。底は脚。内:轆轤痕- 弱。外:脚の周りをナデ。胴部にトビガンナ、胴下 部2条の圈線、白粘土で埋める(三島手)	外:透明釉、内:無釉。白化粧-無。 外:脚から底、露胎	灰色 細粒	HB① I 台494	
47	急須	中 丸型	口	8.8 -	0.4～0.7 89.8	口:幅0.4cm、立口、断-舌状、胴径14.8cm、内:轆 轤痕。 線彫り、上と下に2本の圈線、間に丸の中に縦位に 2条1組で5個、三角形に縦位に2条1組の沈線で 埋め、上に青か黄で塗布。	外:透明釉、内:透明釉、口～胴上部。白化粧 -有。 外:底部露胎、内:胴下部白化粧のみ	乳色 やや粗	HB②口 QKS9.10 II 2002SZ 台3367		
48				胴	- -	0.7 17.1	胴:丸(胴径15.0cm)内:轆轤痕 線彫り、最大胴径を中心に沈線で丸文、その縁の 上下に三角形を配し、間を沈線で埋め、青と黄の 釉を塗布	内外:透明釉。白化粧-有。 内:白化粧	濃乳色 やや粗	HB②口南側II 台3327	
49				胴	- -	0.6 9.4	把手(幅約3.0×1.1cm) 把手上面に呉須を塗る。	内外:透明釉。光沢。白化粧有。	淡橙色 やや細	HB②口S12.13 II 2004SX 台3161	
第147 図・ 図版 117	50	大	口～胴	11.0 -	0.6～0.9 227.0	アンピン 口:立口、幅0.7cm、方形 内:轆轤痕。	外:鉛釉-濃(光沢)。内:鉄釉-薄。白化粧- 無。部分的厚く施釉 口唇～口縁露胎	濃乳色 やや粗粒	HB① N17 II 62SK 台359		
	51			胴	- -	0.6 112.1	アンピン 胴径17.4cm、把手4.1×1.35cm 外:胴下部、内:轆轤痕。	内外:鉛釉-濃、光沢、部分鉄釉。 白化粧-無	暗灰色 やや密	HB②口 北側 I 台3385	

第68表-3 沖縄産施釉陶器観察一覧

(法量単位: cm, g)

第図 図版	図番 号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	器厚 重量	形状(口・腰・底) 器面調整・文様	釉色 施釉範囲・貫入	素地 胎土	地区・グリッド・層位 遺構・台帳番号	
第147 図・ 図版 117	52	急須	大	胴 (注口)	- - -	0.5~0.6 60.0	アンペン、胴径16.4、注口2.0cm。 注口がまっすぐに伸び、注口内に石灰付着。 注口は切り取り、装着内:轆轤痕	内外:胎釉-濃。白化粧-無。	乳色 やや粗	HB②イ I 台3082	
	53			把手	- - -	1.7 73.5	アンペン 把手の幅4.5×1.7cm、断面:三日月状	内外:胎釉-濃(光沢)、裏面-気泡。 白化粧-無。	濃灰色	HB②ロ Q8 II 2054SX 台3369	
	54	酒器	丸型	胴	- - -	0.5 23.6	胴部:丸(12.9cm)内:轆轤痕、 胴部:縦位に3条1組の鉄軸で沈線文	外:透明釉、内:無釉。白化粧-無。	淡灰色 細	HB① O・P14 ¹⁶ II 台486	
	55			ソロバン型	- - -	0.6 29.8	胴:ソロバン型(径12.4cm)。内:轆轤痕明瞭。 胴上部の角を2条の沈線で区切り、その上部を斜 沈線で菱形に施文、その上を青釉で囲み、中 に黄釉を施す	外:透明釉、内:無釉。白化粧-有。	乳色 やや粗	HB① I 台494	
	56			丸型	- - -	0.55 33.4	底:畳付-内縁に斜め、幅1.35cm。	外:黒釉、内:無釉。白化粧-無。 外:腰~底露胎	灰色 やや密	HB②ロ 北側 I 台3385	
	57			-	- - -	0.55 28.5	底:畳付-内縁に斜め、幅1.3cm。	外:透明釉、内:胎釉-濃。白化粧-有。 外:畳付露胎、内:部分露胎	乳色 やや粗粒	HB① P10 ¹⁵ .Q15 III 271SD 台491	
	58			丸型	- - -	0.48 170.0	底:畳付-内縁に緩やかに斜め、幅2.0cm。 胎釉と青釉をかける。	外:透明釉、内:無釉。白化粧-有。 外:畳付露胎	乳色 粗	HB① P・Q10 II 240SZ 台489	
	59	鍋	a	口	18.8 -	0.4 23.7	口:「く」外反、幅1.4cm。胴下部に若干張る。 轆轤痕明瞭	外:胎釉-淡、内:胎釉-薄(口縁と胴下部)、白 化粧-無。「く」の字の部分、釉剥げる。	淡橙色 やや粗	HB②ロQRS8.9 II 2003SZ 台3374	
	60			b	16.6 -	0.3 10.1	口:「く」字状に外反、幅1.9cm、口唇:膨らむ。胴下 部膨らみ強 内:浅い轆轤痕	外:胎釉-濃、内:無釉。白化粧-無	淡灰色 細粒	HB① O13.14・P13 II 台487	
	61			-	- -	0.45~ 0.75 24.3	丸底。脚径2.0cm 内:轆轤痕-弱。外:脚、周辺ナデ-弱	外:露胎。内:鉄軸-失透釉。白化粧-無	淡乳色	HB②イJ10・ KL10.11 II 1005SZ 台3081	
	第148 図・ 図版 118	62	蓋	I a 急須	口	鏝8.2 -	0.27 3.4	直口、脚欠損。 外縁近くに幅0.3cmの圏線、深い	外:胎釉-濃、内:露胎	灰白色 密	HB②ロS12.13 II 2004SX 台3161
63		鏝10.6 脚8.6				0.35 7.3	胴部に膨らむ、口断-尖。 白化粧後、6条の深い圏線、化粧土とのコントラスト の文様。	内外:胎釉-濃。白化粧-有 外:鏝縁から脚-露胎	灰白色 やや粗	HB②ロ南側 II 台3328	
64		胴撮み				脚4.5	0.6 8.5	口縁、脚-剥離、破損。蓋縁を規則的に剥離、円 盤状製品か 外面:線彫り(2条の圏線、斜線)、上に呉須と僅か に黄釉。	外:透明釉。内:無釉。白化粧-有。	淡乳色 やや密	HB②ロ QKS9.10 II 2002SZ 台3367
65		I a アンダ ガ-ミ		口~底	鏝10.0	0.48 31.6	口断-角、胴部は膨らむ。脚欠損-剥離。 急須の可能性も考えられる。	外:胎釉-濃。内:無釉	淡灰色 やや密	HB① L15 III 152P 台614	
66					鏝12.0 脚6.7	0.4 45.8	直状、口断-丸。 圏線-2条、やや浅。	外:胎釉-濃。内:無釉	灰色 やや密	HB① II (121SL) 台356	
67					鏝12.5 8.7	0.55 61.1	口:断-隅丸方形、脚:高0.8、外に膨らむ。内:丁寧 仕上げ。外:縁に2~3条の深い沈線文後、外と撮 み周りを黒釉、間に幅2.2cmの白化粧で塗布。	外:濃い胎釉と白化粧の組み合わせ。 内:露胎	赤褐色 やや粗	HB① K・L12 II 1SK 台377	
68					I b	口	11 -	0.4 6.4	口断-丸、胴部やや膨らむ。	外:胎釉-濃、内:胎釉-濃 (口-0.8cm)	茶褐色 粗、石英
69		II 鍋		底	- -	0.46 58.6	高台、幅0.6cm 内:轆轤痕。	外:胎釉-濃、内:無釉 外:畳付研磨露胎	赤褐色 粗	HB① P10 ¹⁵ .Q15 III 271SD 台491	
70		火取		碗型	口	13.0 -	0.51 33.4	内湾、口縁から窄まるように底部に細くなる。内:轆 轤痕、胴下部が強い。口縁~胴部までトビガンナ、 口唇に黒釉、胴部に透明釉、その間に斜めに黒 釉を流し掛け。	外:透明釉と部分黒釉、胴部露胎し赤褐色を 呈す。内:口唇のみ施釉、他露胎	濃乳色 やや密	HB① P・Q10 II 240SZ 台490
71					口	11.6 -	0.45 19.2	口:内彎-断-三角形、口縁部の平らな部分は凹み により、釉が濃い。口~胴部に7条の片切の深い 沈線文、胎釉により、濃淡を付ける。内:轆轤痕	外:胎釉-やや濃、内:内縁のみ	灰白色 やや密	HB① P10 ¹⁵ .Q15 III 271SD 台491
72	筒型		口		12.6 -	0.6 18.4	直状、断-やや内側に膨らむ 内:僅かに轆轤痕。 口縁部幅2.2cmに呉須(青釉)を施し、さみだれ状 にこじむ。	外:呉須+透明釉、内:口縁近くのみ透明釉。 白化粧-有 口縁のほぼ中央から内唇は研磨、内唇は化 粧土が厚い。	乳色 やや密	HB②ロ Q8 II 2054SX 台3369	
73	口		12.0 -		0.27 3.1	胴上部から開き、口唇で内側に折り曲げる。 中国か肥前の可能性?	外:黒釉、内:無釉。白化粧無。	白色 黒粒 細	HB②イ I 台3082		
74	底		- -		0.71 39.1	腰:折れる。底:畳付0.6cm、角。腰部中に呉須の 熔着。 内:僅かに轆轤痕。	外:透明釉、内:無釉。白化粧-有。 外:腰部~外底-露胎。熔着痕	灰色 やや粗	HB① P・Q8.9 II 358SK 台484 P8 ¹⁴ I 台239		
75	香炉		L字状		口~底	14.0 7.6 -	- 220.0	口:L字状、胴下部で膨らむ、底:脚。文様:線彫り (沈線で草花文)の上に淡い呉須を塗る。	内外:透明釉。白化粧-有。 外底と内面の胴部以下白化粧のみ	灰色	HB① I 台494
76		口		- -	- 24.2	口:L字状タイプ。文様:二彩(淡い黄釉を頸部と胴 部に淡い青釉をばかして塗る)。頸径10.2cm、胴 径11.4cm、	外:透明釉、内:透明釉。白化粧-有。 内:胴部以下白化粧のみ	乳色	HB②イJ10・ KL10.11 II 1005SZ 台3081		

第68表-4 沖縄産施釉陶器観察一覧

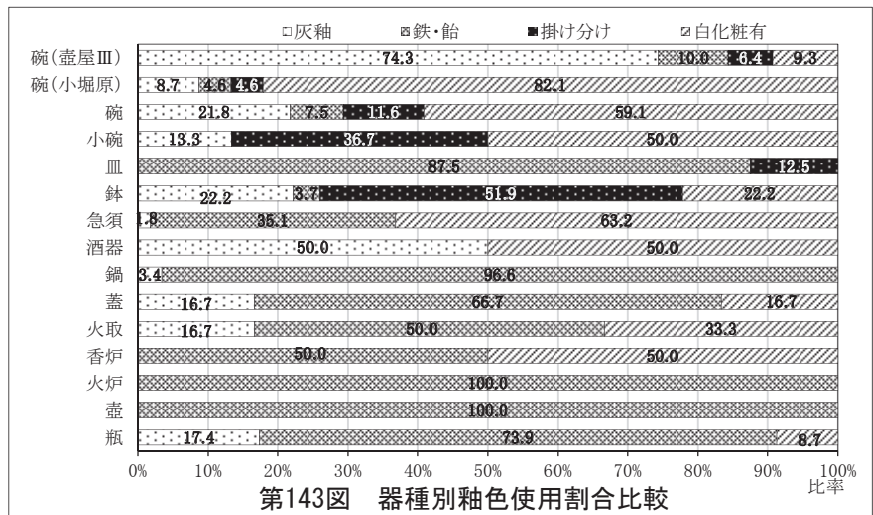
(法量単位: cm, g)

第図 図版	図番 号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	器厚 重量	形状(口・腰・底) 器面調整・文様	釉色 施釉範囲・貫入	素地 胎土	地区・クワッド・層位 遺構・台帳番号		
第148 図・ 図版 118	77	筒型	口	-	-	0.87	口唇で両面に膨らむ。「U」字状の袂り。	内外: 胎釉-濃。口唇に化粧土残る。白化粧-有。	橙色 やや粗	HB① I 台494		
	78			14.6	0.95	112.2	口唇-剥離、無釉。 内: 轆轤痕 外面全面に2条1組の圏線	外: 胎釉-濃。内: 胎釉-濃 内: 露胎	橙色 やや粗	HB②イ I 台3082		
	79			-	-	1.1	190.0	胴径13.5cm。腰折れ、畳付-方形、幅1.1cm。 内: 浅い轆轤痕 全面に幅0.4cmの深い圏線。	内外: 胎釉-濃 外: 腰部の途中〜底露胎	乳色 やや粗	HB① I 台494	
第149 図・ 図版 119	80	火炉	袋型	口 (突起)	-	0.8	内面に突起-大(4.2×0.9cm)、三角形を貼り付ける。 上面に幅1.6の削り有り。 内: 指で貼り付け 外: 飛びカンナ、無釉、口縁部は帯び状に施釉。	外: 口縁幅1.9cm帯び状に濃い胎釉、内: 無釉 内壁-赤褐色。	灰白色 やや密	HB① P8.9 II 305SD 台343		
	81			胴	-	1.3	29.3	内: 轆轤痕明瞭。 胴部の上下に圏線を配し、その間に幅0.1cmの沈 線を格子状に施す。左右に胎釉を塗布、文様に濃 淡を付ける	外: 胎釉-淡。内: 無釉	淡灰色 密	HB① O・P8`14 I 台241	
	82			底 (脚)	-	1.9	245.0	19.0	脚(13.2×h2.6cm)。脚底に砂付着。 内: 轆轤痕、指痕	外: 脚の一部まで濃い胎釉。 内: 無釉、内壁-赤褐色。	淡灰色 密 鉄分	HB②口 Q8 II 2054SX 台3369
	83	壺	小	胴〜底 (耳)	-	0.52	208.0	胴径13.0cm、縦耳(2.8×1.3cm、孔0.7cm)4個 内外: 轆轤痕明瞭、特に内面: 強。 外耳を中心に左右に幅0.2cmの圏線。	外: 濃胎釉、気泡、内: 淡胎釉、ほぼ全面 外: 腰〜畳付露胎、内底不規則に施釉 腰部周辺に胎釉で指痕。	淡灰色 やや粗	HB②口 QKS9.10 II 2002SZ 台3367	
	84			口 (耳)	10.8	0.5	53.0	胴径14.9cm、縦耳(3.0×1.3cm、孔0.85cm)4個、 口唇幅0.8cm 内面: 轆轤痕明瞭、外耳中位に圏線？	内外: 胎釉-濃、口唇部は無釉、研磨。 口縁部の内縁1.0cm弱、釉が厚い。	乳色 やや粗	HB① I 台494	
	85		中	-	0.7~1.0	330.5	11.2	胴径16.6cm、腰: 立ち上がり弱。底: 高台に幅 1.5cmのU字状の袂り。内面: 轆轤痕	内外: 黒釉。 外: 腰〜底-露胎。	灰色 やや粗 稀に石英粒	HB① P・Q10 II 240SZ台489 Q8.9 358SK 台484+台490	
	86		大	-	1.0	410.0	11.2	底部: 畳付けから逆「ハ」字状に立ち上がる。畳付- 方形、幅0.75cm、研磨。 内底に熔着、内: 轆轤痕明瞭	外: 胎釉-濃、内: 胎釉-淡、失透釉 外: 腰〜畳付、露胎、内底施釉、指痕有。	橙色 粗 もろい	HB① P13 III 取27	
	87		瓶	長頸	口	2.8	0.25	18.5	長頸。口: 玉縁、胴: なで肩、残存胴径7.1cm。 外: 頸部に轆轤痕。内: 轆轤痕明瞭 口唇から頸部の途中まで濃胎釉、下部を淡い胎釉	外: 胎釉(濃、淡2色)、内: 無釉	赤褐色 やや粗	HB②口 QKS9.10 II 2002SZ 台3367
	88				アサガ オ	口	5.0	0.4	2.8	外反(アサガオ)。口: 舌。 外: 轆轤痕。青磁に近い。	外: 透明釉、内: 透明釉、口唇: 銹釉? 白化粧-無。貫入細	淡灰色 細
	89			アサガ オ	口	8.8	0.4	6.6	外反(アサガオ)。口: 舌 外: 轆轤痕-弱	外: 胎釉-濃、内: 胎釉-濃、口縁のみ	淡灰 細	HB① K・L12 II 1SK 台377
	90				底	-	0.35	22.1	5.8	丸。底部: 高台から丸みを帯びて立ち上がる。畳 付-方形 内: 轆轤痕-強	外: 鉄釉、内: 無釉。 外: 腰〜底、露胎、内: 無釉	明灰色 やや粗
	91			●型	底	-	0.5	15.6	4.0	ソロン型 内: 轆轤痕明瞭	外: 透明釉、内: 無釉。白化粧-無。 外: 腰〜底、露胎	乳色 やや粗
	92	脚台		胴	-	0.5	27.2	胴: 丸(胴径8.7cm) 内: ロクロ痕明瞭。 外面の白化粧に濃淡あり、加飾?	外: 透明釉、内: 無釉。白化粧-有。	乳色 やや細	HB① P・Q10 II 240SZ 台490	
	93	角		胴	-	0.4~0.8	9.4	板状、角瓶かも 内: 稜線明瞭、 外: 濃淡のある胎釉で縦横に施釉し加飾する。	外: 透明釉内: 無釉。白化粧-無。 貫入-細。	灰白色	HB① O・P14`16 II 台486	

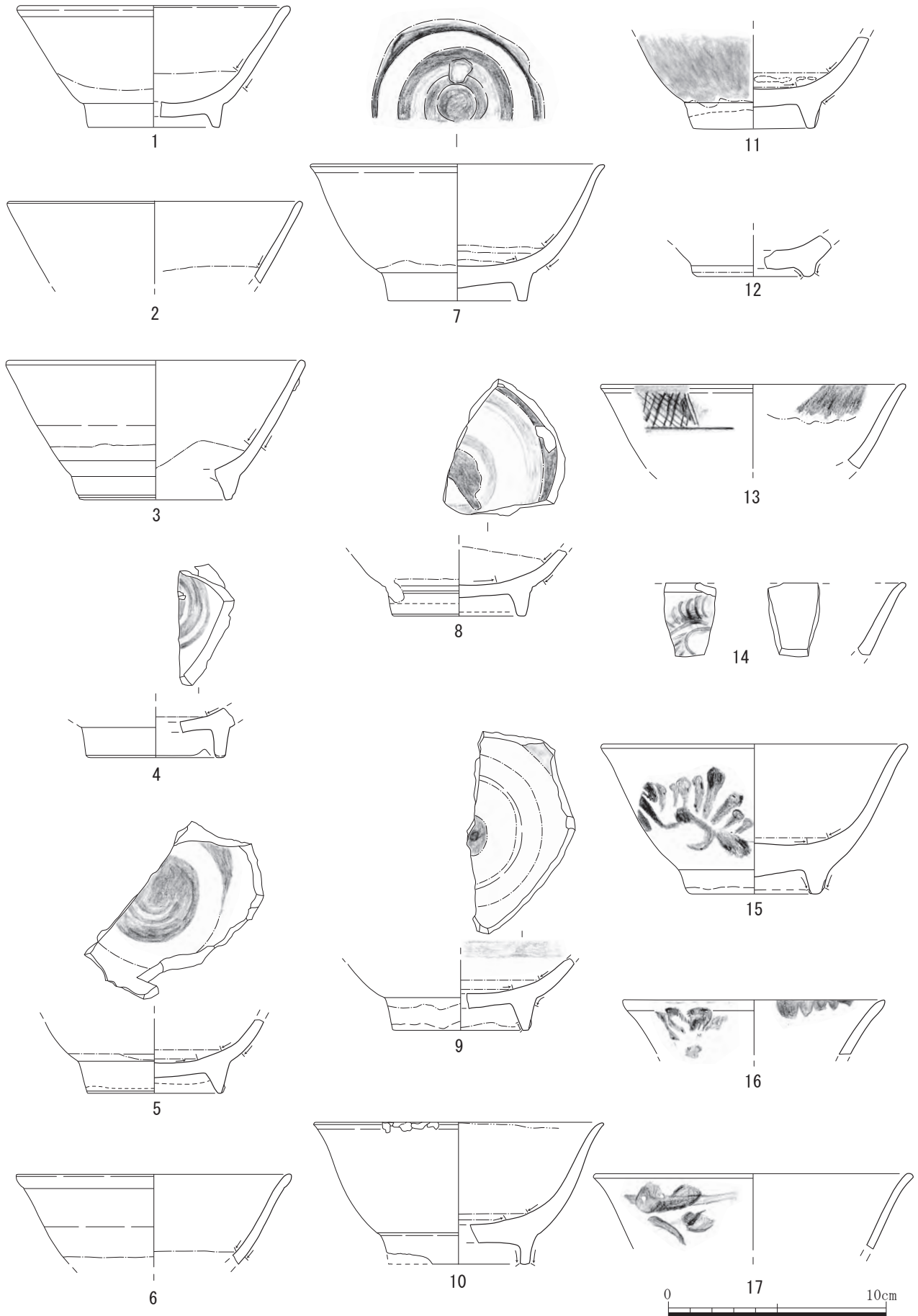
第69表 器種別釉色使用比較

器種	釉色	灰釉	鉄・胎	掛分け	白化粧有	合計
瓶		4	17		2	23
壺			21			21
火炉			6			6
香炉			1		1	2
火取	1	3			2	6
蓋	2	8			2	12
鍋	1	28				29
酒器	3				3	6
急須	1	20			36	57
鉢	6	1	14		6	27
皿			7	1		8
小碗	4		11	15		30
碗	90	31	48	244		413
碗(小堀原)	32	17	17	303		369
碗(壺屋Ⅲ)	313	42	27	39		421

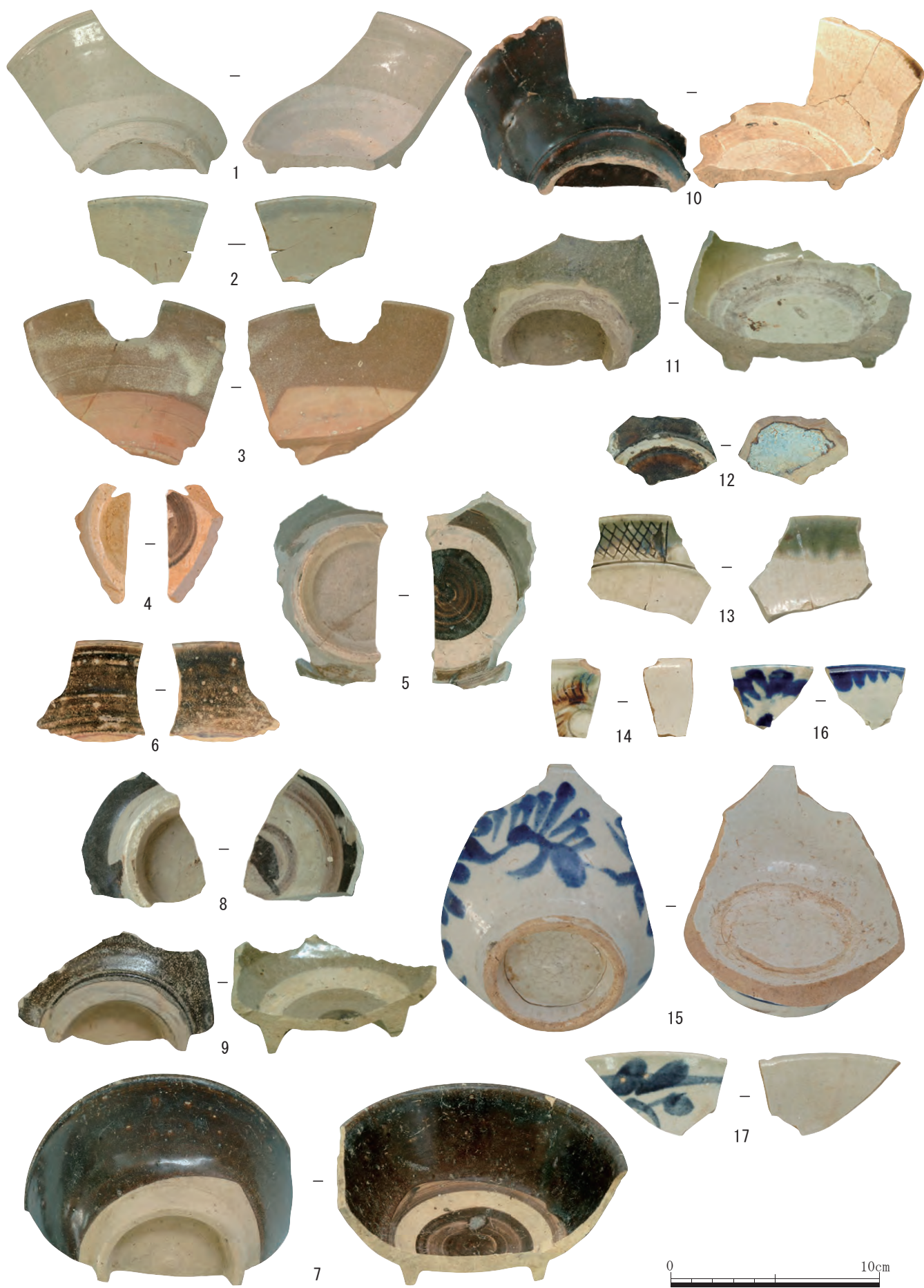
(本遺跡Ⅱ層出土のみ)



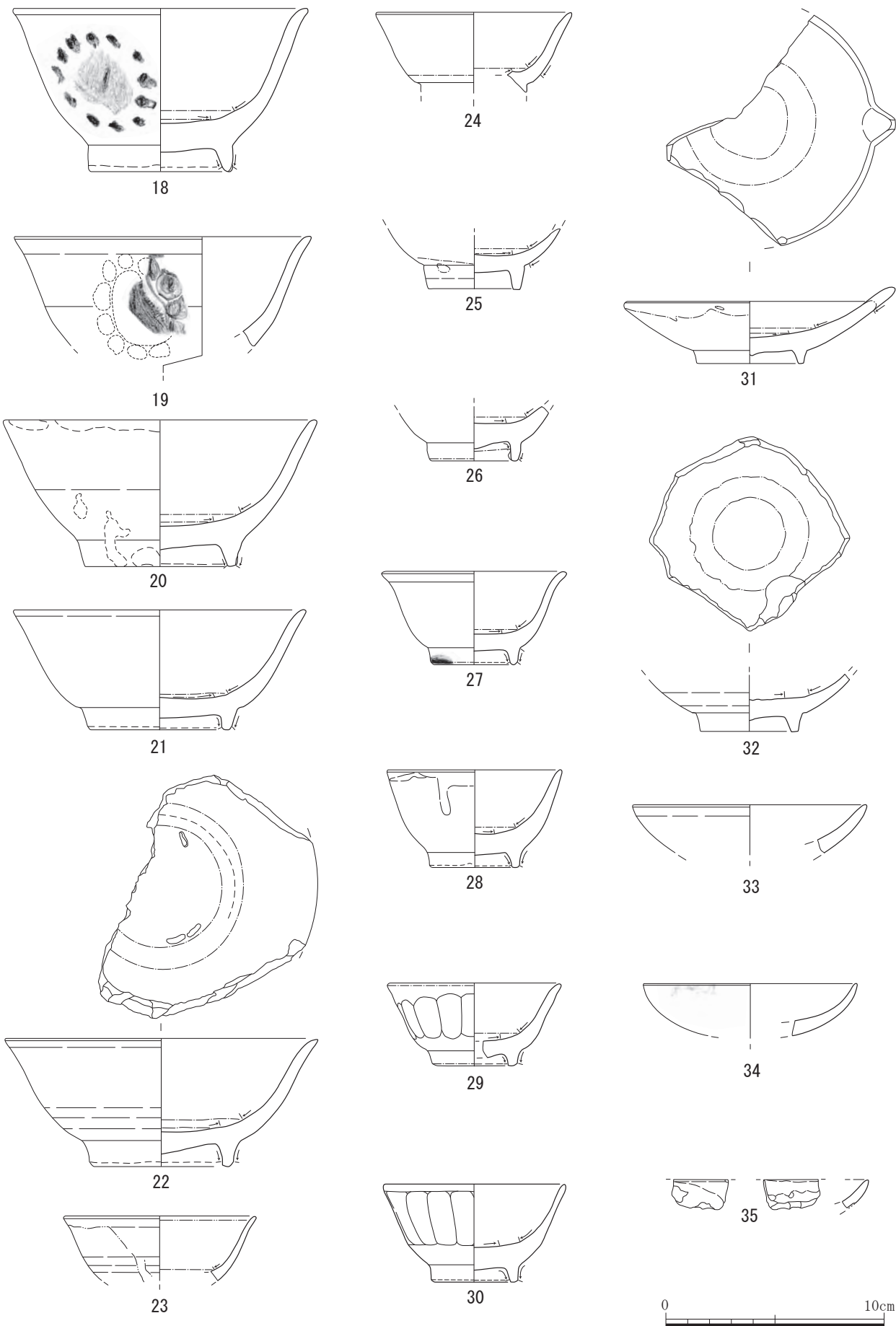
第143図 器種別釉色使用割合比較



第144図 沖縄産施釉陶器 1



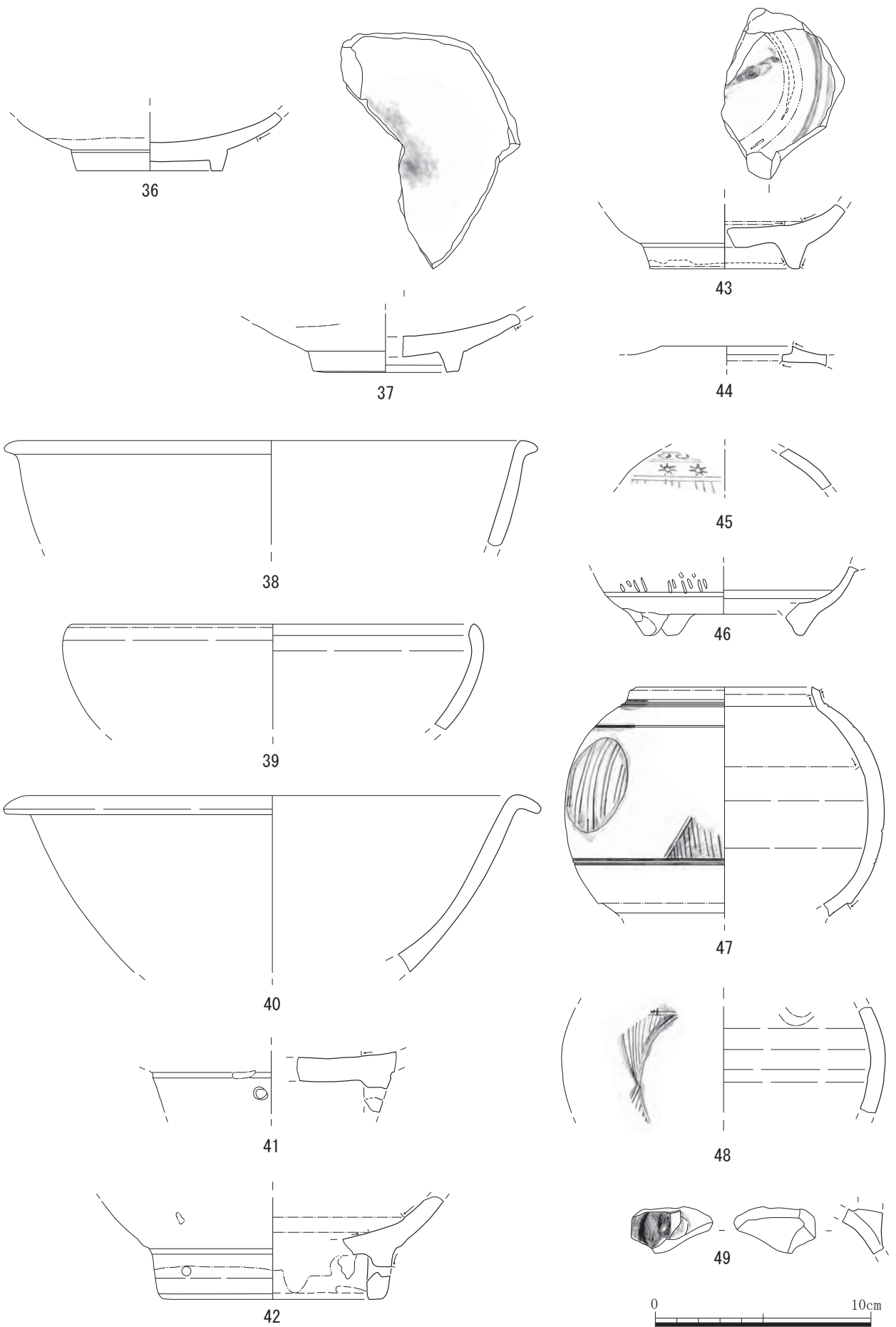
図版 114 沖縄産施釉陶器 1



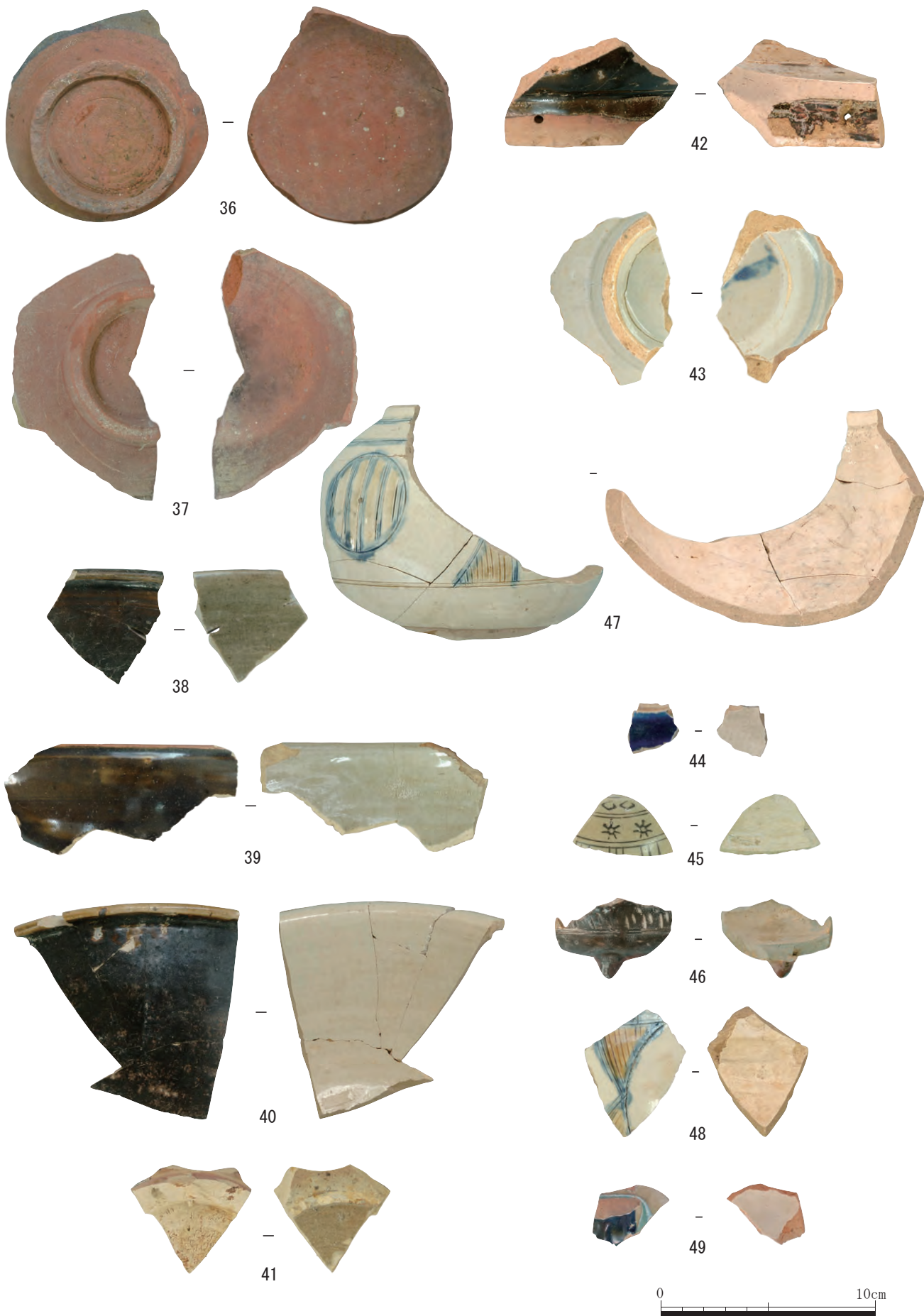
第 145 図 沖縄産施釉陶器 2



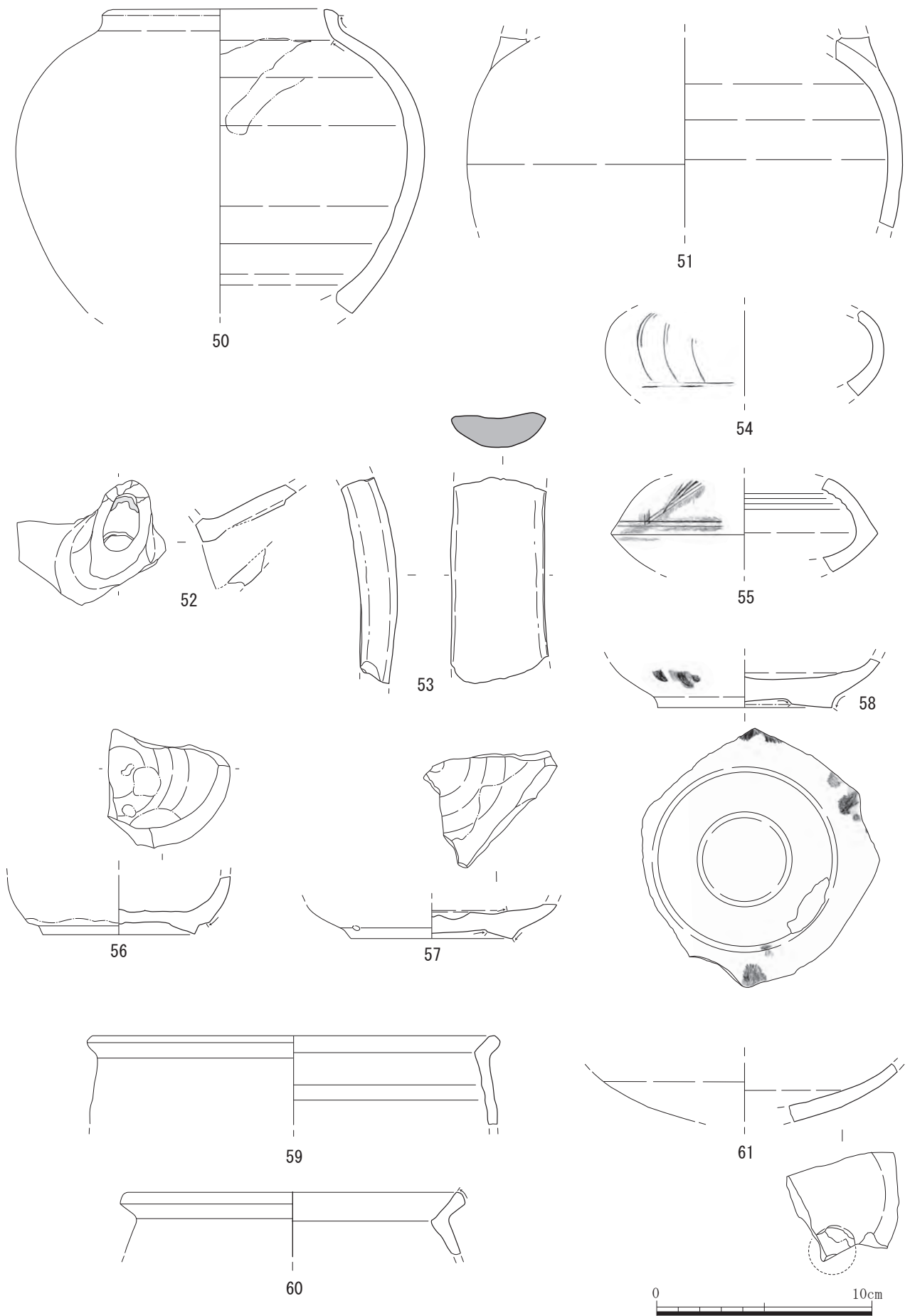
図版 115 沖縄産施釉陶器 2



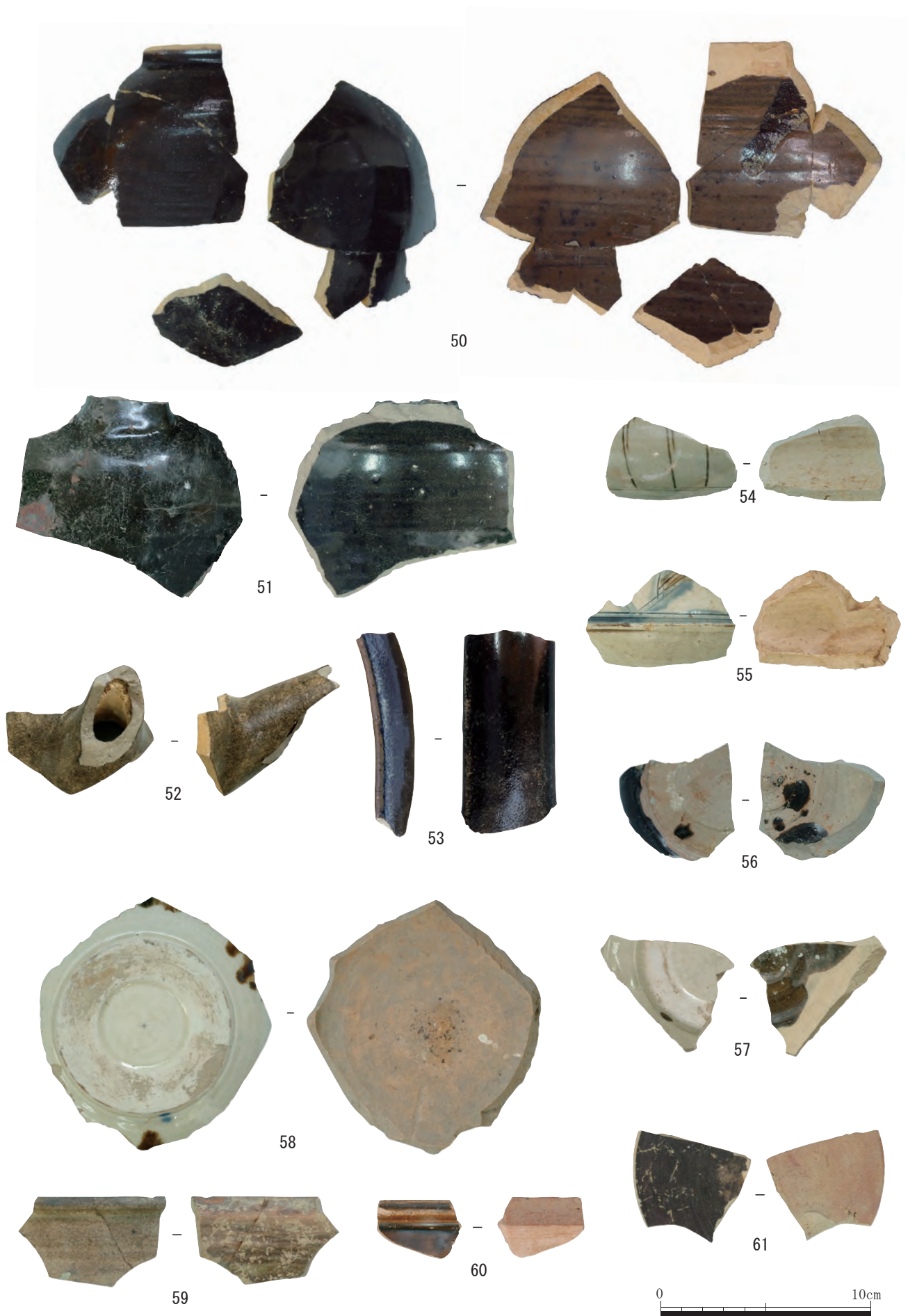
第 146 図 沖縄産施釉陶器 3



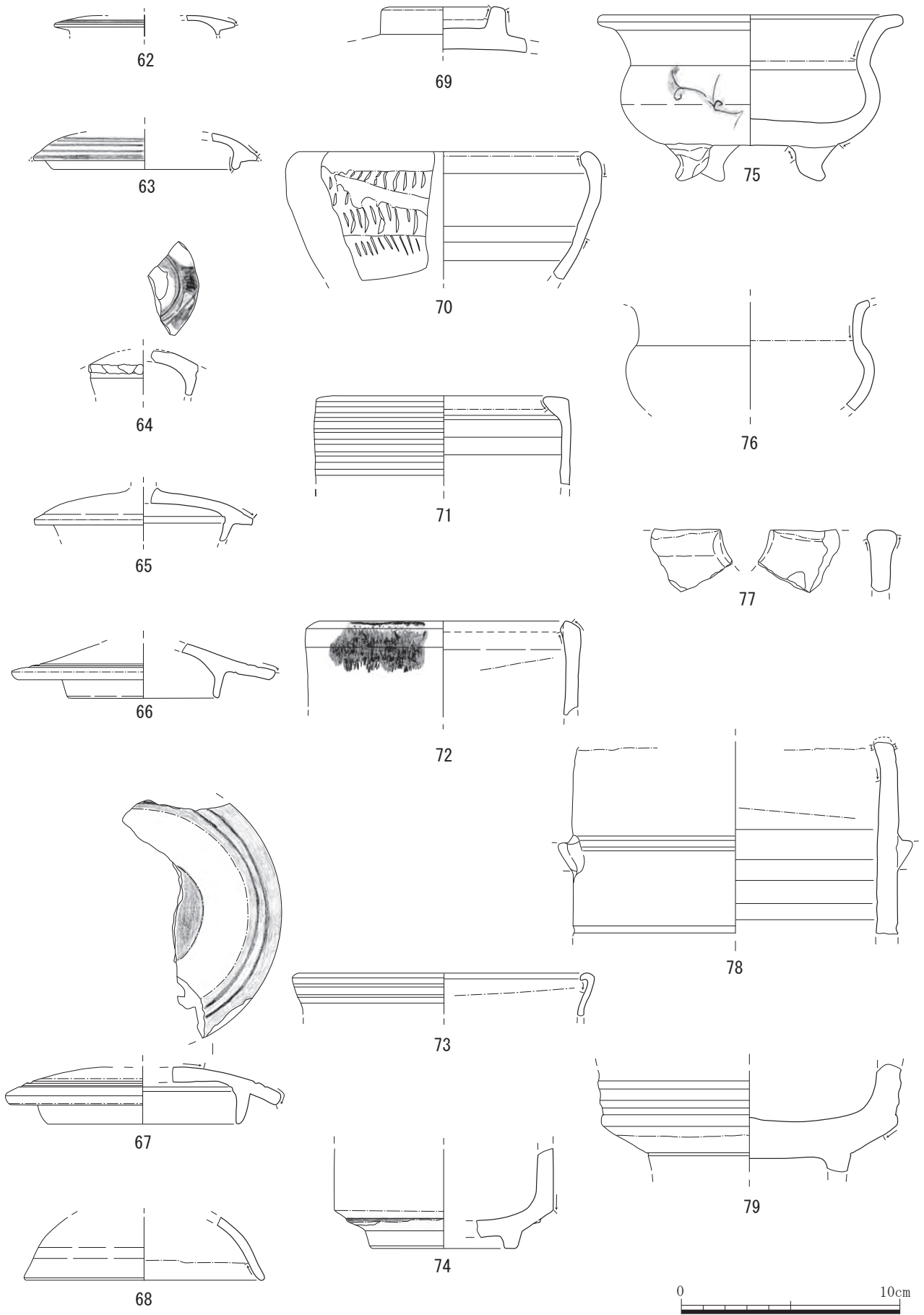
図版 116 沖縄産施釉陶器 3



第 147 図 沖縄産施釉陶器 4



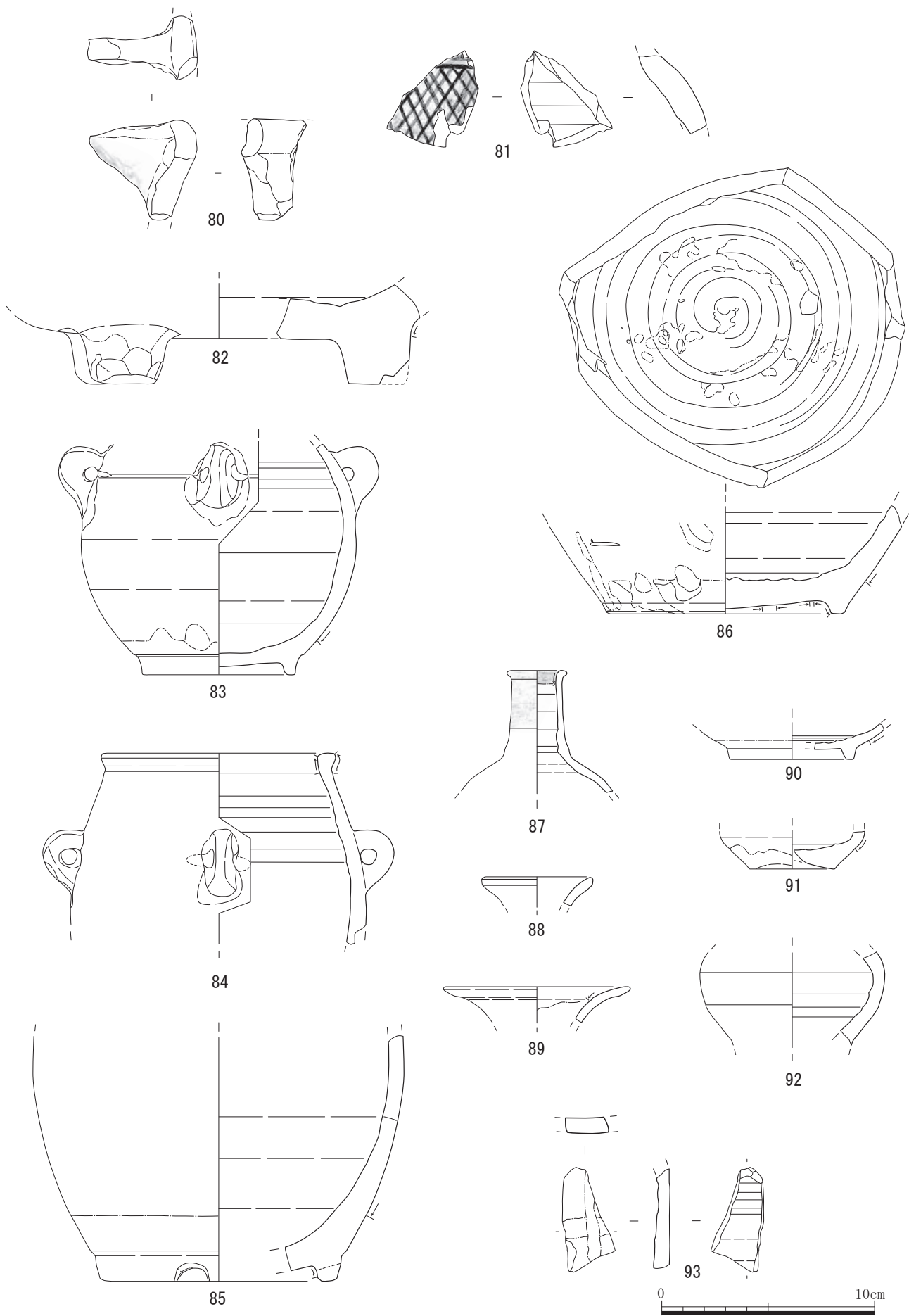
図版 117 沖縄産施釉陶器 4



第148図 沖縄産施釉陶器 5



図版 118 沖縄産施釉陶器 5



第149図 沖縄産施釉陶器 6



図版 119 沖縄産施釉陶器 6

(2) 沖縄産無釉陶器

一般に「荒焼(アラヤチ)」と称されるもので、沖縄産の無釉陶器である。素地がアラヤチに近いのでマンガン釉・泥釉を施すものもここに含めた。第72表に器種ごとの出土量、第151図に出土分布を示した。

碗3点、皿10点、播鉢98点、鉢48点、火炉9点、瓶24点、急須1点、壺135点、甕75点、厨子甕2点、器種不明525点の計930点の出土である。

地区別にはHB①地区で590点、HB②イ地区で136点、HB②ロ地区で194点、HB④イ地区で10点。層別にはⅠ層286点、Ⅱ層558点、Ⅲ層75点、Ⅳ層11点で、そのほとんどはⅠ・Ⅱ層で90.8%の出土である。主な器種については図(第152～157図・図版120～125)、観察一覧(第73表)に示した。以下、器種別に略述するがその器種に応じて分類集計を行った。

<碗> 3点が得られ、すべて図示した。急須・厨子甕に次いで少ない。図1と図2はいずれも直口口縁で断面はやや丸みを持つものである。図3の底部は腰部が丸み帯び、湾曲するもので、壺屋古窯群Ⅰ(第36図10)に酷似するが、図示した口縁部とは形状は異なる。出土地をみると図2がK15 155P(Ⅲ層)、他2点はⅠ層の出土である。

<皿> 口～底部1点、口縁部6点、底部3点の計10点である。図4と図5を図示した。図4はHB②ロ地区R12 2049SD(Ⅲ層)の出土で壺屋古窯群Ⅰの小皿b類に相当するもので灯明皿として用いたと考えられる。灯明皿は沖縄産施釉陶器(図31)にも見られる。図5は口縁部としたが、器厚や傾きから脚台の可能性も考えられる。

<播鉢> 口～底部2点、口縁部19点、胴部64点、底部13点の計98点で、壺に次いで多い。

層別にみるとⅠ層27点、Ⅱ層50点、Ⅲ層20点、Ⅳ層1点の出土であるが、Ⅳ層の1点はHB②ロ地区S9の出土で、Ⅲ層の紛れ込みの可能性が高い。

安里・他(1987)の分類を参考に器形や櫛目の状況から4種に分類し、破片のため分類できないのは中間タイプとした。下記に略述する。

Ⅰ類：口縁は「く」字状に屈曲し、その下部に1～2本の稜線を有するもので、口唇幅が1.3～1.7cmを測る。口縁部5点、胴部8点、底部2点の計15点得られた。図6・7とも破片であるが口縁形状で確認できたので示した。図6は口縁部がやや内傾し、図7は口縁部が若干丸みを帯びるものである。

Ⅱ類：口縁は幅が1.8cm前後の逆「L」字状を呈し、底部は直状に立ち上がる。櫛目は粗く、間は空白をなす。Ⅰ類に近く、外面の稜は明瞭である。口～底1点、口縁部6点、胴部6点の計13点の出土である。図8はほぼ完形で櫛目幅1.3cmを測り、櫛と櫛の間は間隔を空ける。口唇に0.9×3.0cmの楕円状の目痕が数個確認でき、その大きさは薩摩焼の貝目に近い。本品はHB①地区271SD(Ⅲ層)とHB②イ地区Ⅰ層、HB①地区Ⅱ層出土の資料が接合でき、Ⅲ層の時期に上限を求めることができる。同様な製品は「首里城跡-御内原北地区(2)」(2013)でいう「初期無釉器」^{註1}に類似するものと思われる。図9は胴部で、やや丸みを帯びるが櫛目が粗く、間隔が空くことからここに含めた。

I or Ⅱ類：Ⅰ類あるいはⅡ類に分類不可能なものをここで扱った。胴部23点、底部6点の計29点である。そのうち、底部(図10～12)を図示した。いずれも底部からの立ち上がりは直状で、播目は粗く、間隔が空くと思われる。図11は自然釉があり、胎土等は図8に類似する。

Ⅲ類：Ⅰ・Ⅱ類とⅣ類の間で、両方に属さないものをここに分類した。口縁部2点、胴部

10点、底部1点の計13点である。そのうち胴部（図13）と、底部（図14）を図示した。図13は胴部の形状がまっすぐ、櫛目も間隔が空く点でⅡ類に近いが、内唇で櫛目をナデ消す部分はⅣ類と共通する。砂質で陶質土器に近い。HB②ロ地区S9IV層の出土である。

図14は底部の立ち上がりが僅かに丸みを帯び、Ⅳ類に近いが、櫛目の間隔が空き、暗紫色で沖縄産無釉陶器でも古手の様相を呈する。HB②イ地区Ⅰ層の出土である。図8もこの地区で得られており、その可能性は高い。

Ⅳ類：口縁部が逆「L」字状、底部が丸みを帯び、櫛目が隙間無く施されるものである。口～底部1点、口縁部6点、胴部17点、底部4点の計28点の出土である。図15は口径31.8cm、底径12.4cmと出土した播鉢の中では最も大きい。口縁部の「L」字幅も3.5cmと最大で、口唇に1条の圈線を施すものである。

播鉢の櫛幅をみると1.3～2.4cmの間に0.1cm単位で見られ、櫛幅が大きいほど櫛目が細かい傾向が見られる。

分類別の出土量をみるとⅠ・Ⅱ類が58.1%、Ⅳ類が28.6%、Ⅲ類が13.3%で安里・他（1987）で古いとされるⅠ・Ⅱ類のタイプが優位を占めている。

第70表 播鉢分類別出土量

地区	層位	分類 遺構	Ⅰ類			Ⅰ or Ⅱ		Ⅱ類			Ⅲ類			Ⅳ類			合計		
			口	胴	底	胴	底	口～底	口	胴	口	胴	底	口～底	口	胴		底	
HB①	Ⅰ				1	8			1	1					2	3		17	
		062SK	1		1	5	3			1					1	4	1	16	
	Ⅱ	063P														1		1	
		240SZ				1	1			1					1			5	
		274SZ													1			1	
		358SK				2										1		3	
		359SK				1										1		2	
		271SD	1			2									2	1	1	7	
	Ⅲ	198SK				1												1	
		149SK				1												1	
304SD						2										2	4		
372SK															1		1		
	小計	2		2	23	4		2	2	1	3			5	14	4	62		
HB②イ	Ⅰ		1	3														6	
	Ⅱ	1018SX					1		1	1				2				5	
	小計	1	3				1	1	1	1			2	1				11	
HB②ロ	Ⅰ								1	1								2	
	Ⅱ	2002SZ			2					1				2		1		1	7
		2003SZ										1		1					2
		2004SX													1				1
		2054SX									1					2			4
Ⅳ													1				1		
	小計			2					1	3	1	5		1	1	3		17	
HB④イ	Ⅰ									2								2	
	Ⅲ		2	3			1											6	
	小計		2	3			1		2									8	
合計		5	8	2	23	6	1	6	6	2	10	1	1	6	17	4	98		

<鉢>口縁部28点、胴部5点、底部15点の計48点の出土である。層別にはⅠ層で16点、Ⅱ層で29点、Ⅲ層で3点である。第71表に分類別出土量を示した。

花鉢も口縁部12点、胴部1点得られたが集計は鉢に含めた。それ以外の鉢を大きさと口縁部の形態から5種に分類した。

a：器厚が0.5～0.6cmの薄手で胎土が泥質（図16）

口縁部1点で、HB①地区Ⅰ層の出土である。薄手で還元焰焼成で、外面に暗灰色の失透釉が塗布され、沖縄産無釉陶器の概念から若干外れるが、器形が酷似することからここに含めた。

b : 器厚が0.8cm前後、口径が14cm前後、砂質あるいは硬質のもの（図17～19）

小ぶりのタイプはいずれも暗茶褐色を呈し、図18は頸部に2条の圈線を圍繞し、口縁部のくびれを明瞭にする。壺屋古窯群Ⅰの第Ⅰ類aに相当するものである。

c : bと同じ厚さで口径が20～30cm大（図20・21）と大ぶりのタイプである。いずれも内彎するが、その断面は逆「L」字状（図21）、角（図20）を呈するものがある。

d : 内彎の口縁部で、口縁部が丸みを帯び、先端で膨らむもので、10点出土した。図22・23の口縁部と図24の底部を図示した。

e : 前述の大きさを超えるものである。図25は図21と類似するが、口径が31.2cmと大きいため

ここに含めた。破片で推定口径のためcに含まれる可能性もあるが、口縁部の太さなどから大きくなると判断した。図26は底径11.0cmを測るが、胴部がかなり張り、内面の調整も丁寧なことから鉢の底部とした。底厚は0.8cmと他の鉢の底部に比べても薄い。そのため、底部近くを粘土で補強し、安定させているようである。HB②イ地区1018SXⅡ層の出土である。

<火炉> 口縁部1点、胴部2（耳1）点、底部6点の計9点である。全体の1.0%で、器種としてはやや少ない方である。いずれも頸部で「く」字状に屈曲する筒状のタイプと考えられるもので、図27は耳を持ち、図28・29は三脚タイプの底部、図29はやや大きいサイズである。出土地をみると図27がHB①地区359SK、図28がHB②ロ地区2002SZ、いずれもⅡ層に属する遺構である。

<瓶> 口縁部5点、胴部15点、底部4点の計24点で、全体の2.6%を占め、やや多い方である。すべて破片で、口縁部、胴部、底部の特徴から以下の8種に分類される。

a : 口縁部がアサガオ状に外反する（図30）、**b** : 頸部がなで肩を呈する（図31）、**c** : 胴部全体が丸みを帯びる（図32）、**d** : やや肩の張る（図33）、**e** : 胴部が寸胴のタワカサー（図34）、**f** : 胴部が太鼓状に膨らむ（図35）、底部では**g** : 底径5.2cmで直状に立ち上がる（図36）、**h** : 底径9.6cmで直角に立ち上がる（図37）がある。

図34は壺屋古窯群Ⅰでは、徳利Ⅳ型に分類されている。図37は紫泥に白粘土で加飾するものである。

<急須> 1点のみの出土で、図38は口径10.4cmの立口の口縁で、肩が丸みを帯びることから急須（土瓶）の口縁部と考えられるものである。HB②イ地区（Ⅰ層）の出土である。

<壺> 口～底部1点、口縁部19点、胴部91点、底部24点の計135点で、14.5%を占め最も多い。出土地別にはHB①地区94点、HB②イ地区7点、HB②ロ地区で34点の出土で、HB①、HB②ロ地区などⅣ層以上の分布が確認されるところに多い。

壺は大きさと口縁部の形態で分類が可能である。大きさは小と大、形状で有頸、なで肩、口縁部断面が「L」字状などがあるが、破片が主なため分類は一貫しない。

小はなで肩（a）、有頸（b）に分けられる。

小**a** : 図39はなで肩で器厚が0.5cm前後で、肩部に6条の圈線が施され、口縁部方向に間隔は狭くなる。外面から内面の頸部にかけてはマンガン釉を掛ける。

第71表 鉢分類別出土量

地区	層位	分類 遺構	分類					花鉢	不明	合計
			a	b	c	d	e			
HB①	Ⅰ		1	4	4	3	1			13
		001SK 029P		2	1	1		4		6
	Ⅱ	062SK 063P		1				2		4
		240SZ 305SD			1	1		1		3
		358SK			1			1	1	3
		271SD 304SD		1					1	2
小計		1	8	8	6	1	8	2	34	
HB②イ	Ⅰ				1	1				2
		1003SZ 1005SZ						1		1
	Ⅱ	1016SZ 1018SX			1		1	1		3
		小計			2	1	1	3		7
HB②ロ	Ⅰ					1				1
		2002SZ 2004SX			1			2		3
	Ⅱ	2054SX 2049SD				2				2
		小計			2	3		2		7
合計		1	8	12	10	2	13	2	48	

小b：口縁部は「L」字状を呈し、断面が方形で有頸の壺になる図40・41がある。図40は「L」字幅が1.7cmで口径や口縁部の形状から穀物入れ^{註1}の可能性が想定される。図41は前者より若干大きく、窯印がある。スーチカーガーミ^{註2}に類似する。図42は胴部で最大胴径17.8cmを測る。胴上部に圈線を1条施すもので、ほぼ同位置に0.2×0.4cmの孔を外側→内側から穿孔するが用途は不明である。

底部の図44は底径が9.0cm、器厚0.9cm、底面は縁に粘土を貼り付け、上げ底状を呈する。図43は底径8.4cmを測るものである。

図45は口縁部の欠ける資料であるが、類例から小bとした。

大：図46・47は大型の壺でいずれも窯変のため、崩れたり、外面がふくれたり、剥がれが残るもので、図46はI層、図47はII層の遺構2054SXの出土である。これらの粗悪品を容器として用いたかは疑問が残る。

図48は完形で口縁部は幅2.0cmの蒲鉾状を呈し、なで肩で、肩部に3つの横耳を貼り付け、外底は篋で角を削り、やや丸みを帯びる。内底は幅4.0cmの篋で、縦位に調整した後、底縁に沿うようにナデられている。また、胴上部に「十一」の窯印が刻まれており、内間(2002)の調査によるとその窯印は壺屋の屋号「新屋敷」、家名をウフヤー島袋(四男)とのことである。
 <甕>口縁部14点、胴部50点、底部11点の計75点で全体の8.1%である。出土地別にはHB①地区で52点、HB②イ地区で11点、HB②ロ地区で12点である。

図49・50は胴部である。前者が肩部に粘土を貼り付け、指で押して縄目状を呈するものである。後者は胴部に波状文と沈線文を交互に施す。いずれも水甕の特徴的な文様である。このほかにIII層のHB①地区271SD、II層のHB②ロ地区2002・2054SZ、HB①地区229SZ・358SZで出土している。
 <厨子甕>HB②ロ地区で底部と胴部が各々1点の出土である。本器種は沖縄産施釉陶器でも1点得られ、戦前にかき集められた2002SZやII層から出土である。

<器種不明>主に胴部片で器種が特定できないものである。

全体の56.5%(525点)を占め、器厚別にみると4~6mmが61点、7~10mmが159点、11~13mmが270点、計測不可が35点で、後2者はその厚さから壺や甕の破片と考えられる。これら胴部片からも貯蔵用の壺や甕が沖縄産無釉陶器の主体であることがわかる。

<註・参考文献>

那覇市教育委員会 1992 『壺屋古窯群I』 那覇市文化財調査報告書第23集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2013 『首里城跡-御内原北地区(2)』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第69集

安里 進・他 1987 「播鉢編年からみた近年琉球窯業の展開」 『あじま』 第3号 名護市博物館

沖縄県教育委員会 2002 『沖縄の陶器類関係資料調査報告書』 沖縄県文化財調査報告書142集

内間 靖 2002 「壺屋の判と屋号・家名一覧表」 より

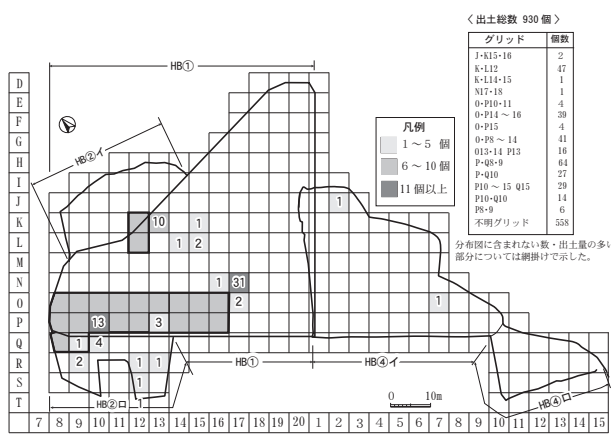
註1 沖縄県教育委員会 2002 「沖縄の陶器類関係資料調査報告書」 沖縄県史料調査シリーズ第三集 P49

註2 沖縄県教育委員会 2002 「沖縄の陶器類関係資料調査報告書」 沖縄県史料調査シリーズ第三集 P141

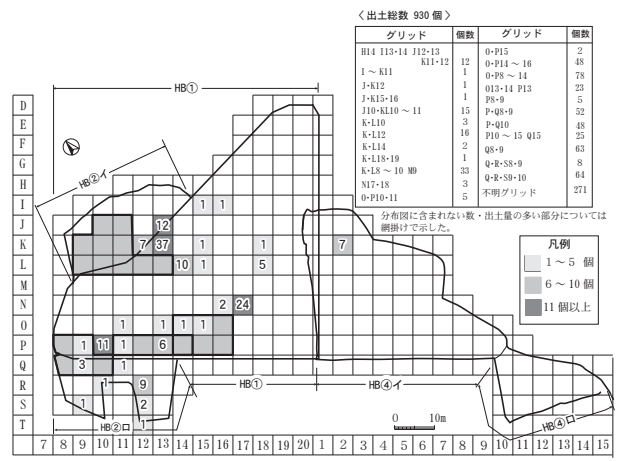
第72表 沖縄産無釉陶器出土量

地区	器種	碗		皿		播鉢			鉢			火炉			瓶			急須	壺			厨子甕		甕			不明			合計	地区別計				
		口	底	口	底	口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底	口	底	口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底							
HB①	I 047SZ		1		2	1		4	12	1	7	1	5		1	4		2			4	24	5			19	2	125	1	221					
	001SK								2	9	5	3	2	1	1		1		1		1	9			2	7	1	1	56						
	008SZ																					1	1					4	1						
	029P																					1								1					
	037P																						1							1					
	062SK								1			1											1		7	2			9	22					
	063P																													2					
	064P																													1					
	072P																													1					
	083SZ																	1		1			2			4	1	18	1	28					
	085P																													1					
	086P																								1	2				3					
	100SZ																												1	2					
	108P																													1					
	109P																													1					
	229SZ																													1					
	240SZ																													8					
	274SZ																													10					
	288SS																													5					
	305SD																													2					
	358SK																													52					
	359SK																													5					
	III 138P																													1					
	149SK																													1					
	155P																													1					
	189SK																													1					
	198SK																													1					
	208P																													1					
	225SZ																													3					
271SD																													10						
304SD																													5						
372SK																													1						
IV 小計																													8						
合計		1	1		4	1		10	42	10		19	5	10		1	2	4		2	5	2			12	71	11		3	42	7	2	317	6	590
HB②イ	I 1003SZ																													11	12				
	1004SZ																													5	5				
	1005SZ																													9	15				
	1006SK																													1	1				
	1016SZ																													9	12				
	1018SX																													21	33				
	1018SX-3																												3	3					
	III 小計																													6	6				
合計																														8	3	136			
HB②ロ	I 2002SZ																														3	1	12		
	2003SZ																													10	17				
	2004SX																													38	1	64			
	2054SX																													4	8				
	III 2007P																													4	10				
	2049SD																													1	1				
	2072P																													1	3				
IV 小計																														2	3				
合計																														102	2	194			
HB④イ	I																													1	3				
	III 小計																													2	7				
合計																															1	10			
器種別計																																	930		

第三章 5



第150図 沖縄産施釉陶器出土平面分布



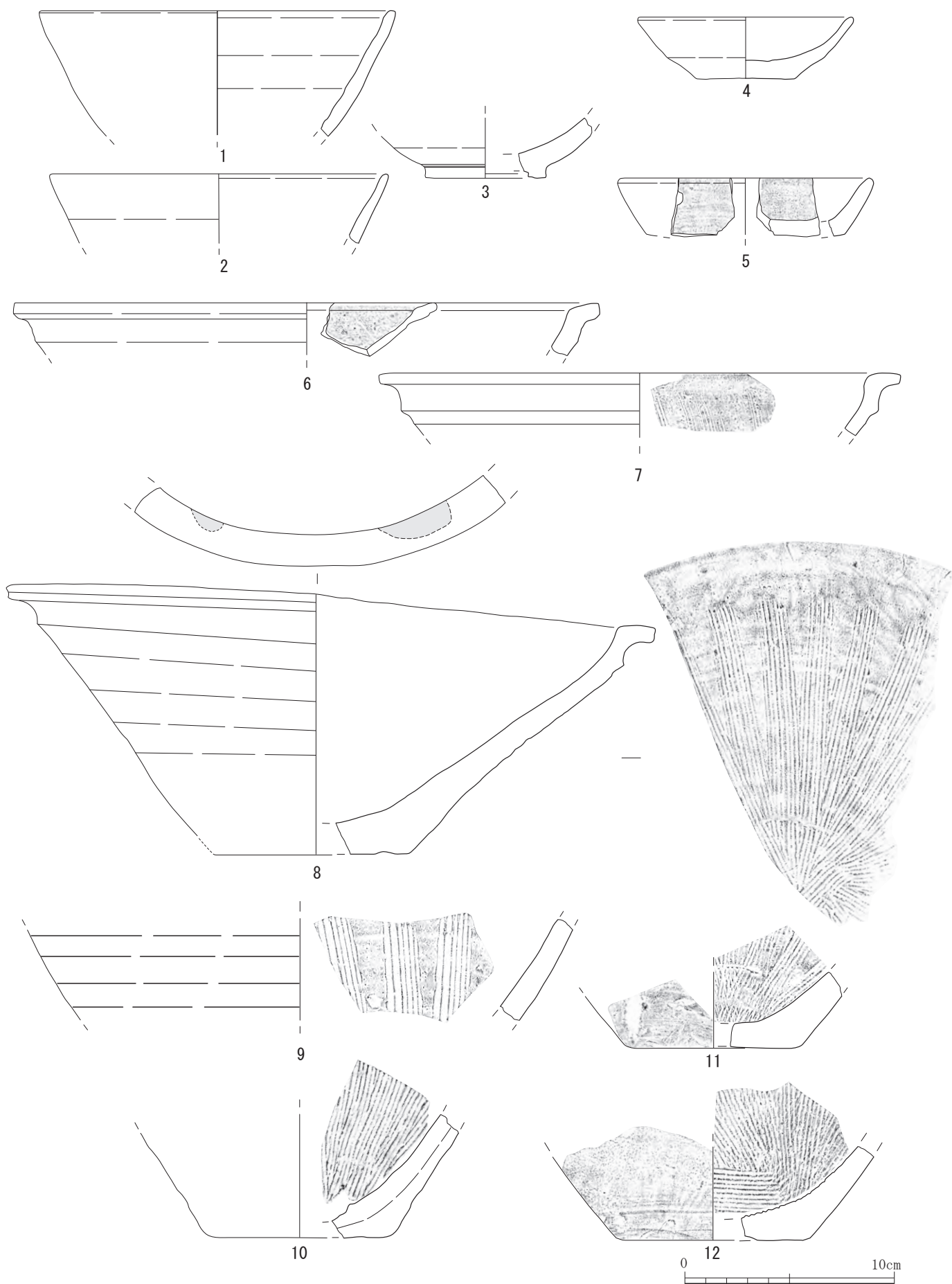
第151図 沖縄産無釉陶器出土平面分布

第73表-1 沖縄産無釉陶器観察一覧

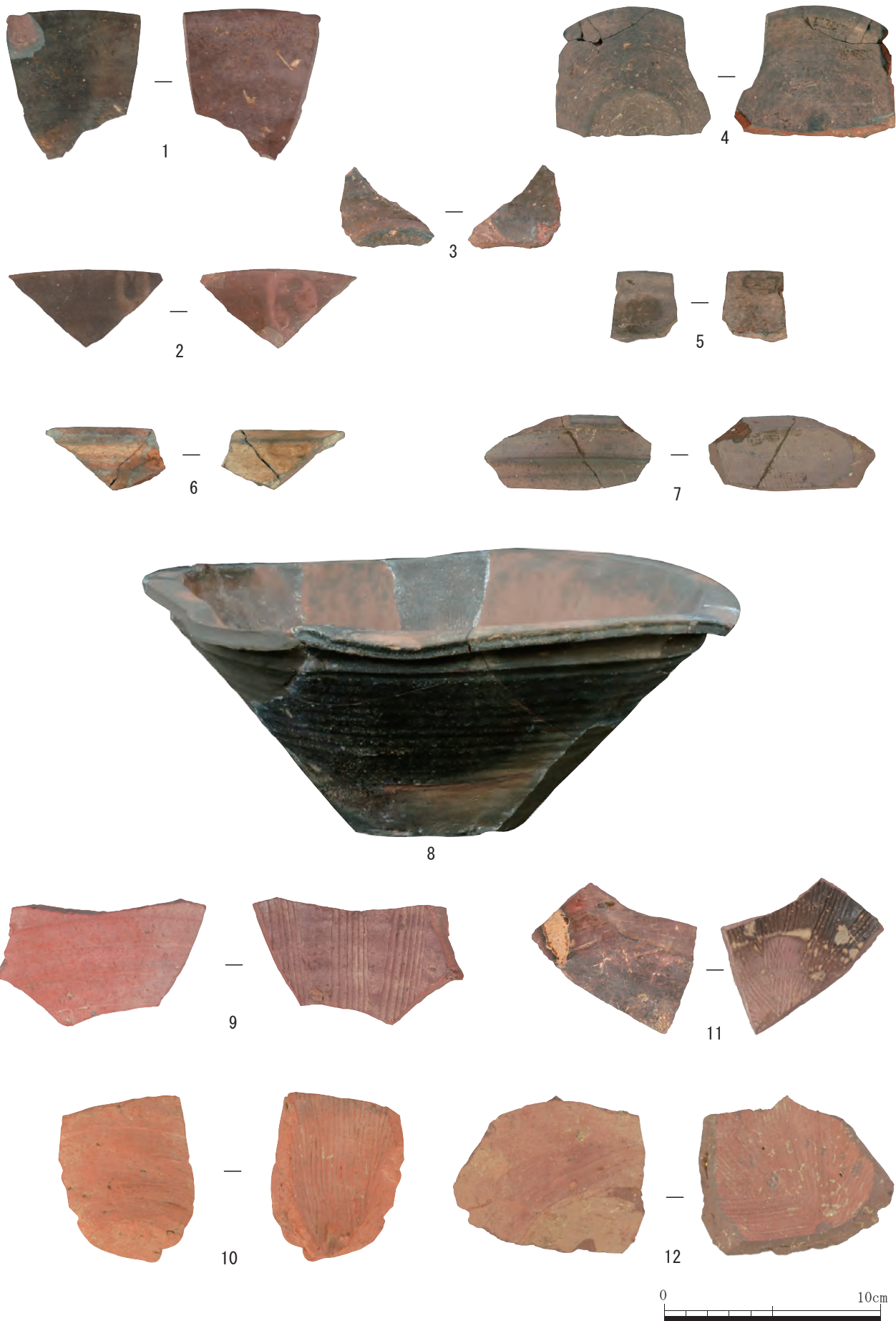
(法量単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	器種	分類	部位	口径器高 底径	器厚 重量	形状・文様・備考	色調	器面調整	混和材	焼成	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取上)番号	
第152 図・ 図版 120	1	碗		口	17.0 —	0.6 40.5	口:直口、断-内唇唇丸、外唇にやや高、僅かに外面に膨らむ。	外:暗灰～茶色 内:暗茶色、暗茶色	内外:轆轤痕	粗-石英、赤粒 細-白粒△	良+ 硬質	HB②ロ I 台3327	
	2			口	16.2 —	0.5 14.6	口:直口、断-舌、内面やや窪む	外:暗茶色 内:明茶色 中:紫褐色	外:轆轤痕△ 内:轆轤、指痕	細-石英△	良+ 硬質	HB① K15 III 155P 台616	
	3			底	— —	0.7～0.9 5.8	19.3	底:高台、量付幅0.8cm、方形、高台低い。壺屋 I -第36図10に類似。	内外:暗灰～茶色暗 茶色	外:削り	粗-石英○	良- やや硬質	HB① O-P8～14 I 台241
		4	皿		口～ 底	10.4 2.9 12.3 4.8	0.6～0.7 49.8	口:直口、断-丸。底:直底、やや上底。壺屋 I -小皿b類。	内外:暗灰色 中:茶色	外:底面立ち上がり、削る 内:轆轤痕△	砂粒△ 細黒粒△	良+	HB②ロ R12 III 2049SD 取2011
		5			口	12.2 — 8.6	0.6～0.8 13.7	口:直口、断-丸。器壁が厚く、脚台の可能性あり。	内外:暗茶色	内:轆轤痕△	粗-石英△ 細-黒粒△	良+	HB① I 台494
		6	播鉢	I	口	27.8 — —	0.9 19.4	口:外反「L」-1.5cm、断-角丸。やや内向。口縁部下の稜線は1本で緩い。(安 I)	内外:明灰色 中:暗茶色	内外:轆轤痕△ 口唇下削る。	粗-赤粒、石 英△	良-	HB① O-P14～16 II 台486
		7			口	24.8 — —	0.7 34.3	口:外反「L」-1.7cm、断-丸、口縁下の稜線、上位-強、下位-弱の2本。楡幅1.5cm、下から上方向、間-空白、内唇の楡消し無し。(安 I)	内外:暗紫色、口唇 に熔変有 中:暗茶色	外:ナデ 内:轆轤痕	細-石英○	良+	HB②イ I 台3082
		8			口～ 底	29.0 12.3 9.1	0.6 219.5	口:外反「L」-1.8cm、断-凹、口縁下の稜線、上位-強、下位-弱。底:直状、口唇に0.9cm×3.0cmの目痕(粘土)。楡幅1.3cmと細く、楡は7本1組、間-空白、内唇下3.0cmは指で楡目をかき消す。(安 II)	内外:暗黒(マンガ ン?)の自然(光沢) 釉と暗茶色 中:暗茶色	外:口縁部下部 から底部まで轆 轤痕○。内:口縁 3.0cmはヘラナデ	細-石灰粒○	良+	HB②イ I 台3082+HB ①OP14～16 II 台 486+PQ10～15 III 271SD 台491
		9		胴	— — —	1.0 81.9	楡幅1.7cm、6本1組、楡目-粗、間-空白。最大胴径26.0cm。	外:赤褐色 内:暗紫色 中:暗茶色	外:轆轤痕○ 内:轆轤痕+楡目 -粗	粗-赤粒○	良-	HB②ロ I 台3385	
		10		底	— — 9.0	1.2 100.8	底:直状。楡目幅1.7cm、7本1組、粗。無。	内外:橙褐色。	外:轆轤痕、底部 角は削り	砂質。粗茶 粒、△	良	HB②イ KL8～10、M9 II 1018SX 台3296	
		11		底	— — 8.4	1.2 94.5	底:直状。楡目幅1.0cm、5本1組、楡目-粗。間-空白。	内外:暗紫～黒色、 自然釉 中:暗紫色	内外:轆轤痕△ 底面:雑。	粗-石英、黒 粒△	良+	HB④イ K2 III 台139	
	12	底	— — 8.6	1.0 144.3	底:直状。楡目幅2.2cm、10本1組、粗。	内外:茶色 中:暗茶色	外:底立ち上がり 幅2.0cm及び底 面削り、角取。	粗-石英、△ 細-黒粒、△	良+	HB① O-P14～16 II 台486			
第153 図・ 図版 121	13	III		胴	— — —	0.9～1.0 59.4	最大胴径25.0cm。底部～胴部の形状はほぼ直状。楡幅1.6cm、8本1組、下から上へカーブを描く。楡目-粗、間-空白。	内外:橙褐色 中:橙褐色	外:轆轤痕◎ 内:口近く篋ナ デ、轆轤痕○	粗-黒粒、△	良	HB②ロ S9 IV 台3332	
	14			底	— — 11.2	0.8 234	底:立ち上がり丸み。楡幅2.1cm。18本1組、細、間-空白。	内外:暗紫色。自然 釉による白斑	内外:轆轤痕△、 叩き△	石英、△ 層状、膨れ	良+	HB②イ I 台3082	
	15			口～ 底	31.8 13.4 12.4	0.9 317.5	口:外反「L」-3.5cm丸味。断-方形下端やや膨らむ。口唇に圏線1本。底:丸み。楡目幅2.0cm、間-密(安IV)	内外:赤褐色	外:轆轤痕△、底 部角を篋削り 内:口縁から 3cm、ナデ	粗-赤・茶粒 △	良+ やや砂質	HB②ロ QSK9.10 II 2002SZ 台3367	
		16	a		口	19.2 — —	0.5～0.6 19.7	口:内彎、断-角、幅0.8cm。胴部張る。外:暗灰色を塗布。	内外:灰色	内外:轆轤痕	赤粒△	良+ やや泥質	HB① I 台494
		17			口	13.2 7.0 7.0	0.8 103	口:内彎、逆L-幅1.1cm、口唇平ら。底:直状。胴部張る(胴径14.6)3条1組の波状文(深)。壺屋(I)第I類b。	外:暗灰～茶色 内:暗灰色 中:暗茶褐色	内外:轆轤痕△ 内:底部付近で 凹線	赤粒△	良+	HB① I 台644
		18			口	14.0 — —	0.8 48.3	口:内彎、逆L-幅1.2cm。口唇内傾。胴部張る(胴径15.0cm)。文様:頸部に圏線(2条)。壺屋(I)-第I類a。	外:暗灰色～茶色 内:暗灰色 中:暗茶褐色	内:轆轤痕△	細-白粒△	良+	HB① I 台644
		19			底	— — 7.2	0.7～0.8 170	口:内彎。底:直状。胴部張る(胴径13.0cm)。	内外:暗灰色 中:暗茶褐色	外:熔着△ 内:轆轤痕△	白粒△	良+	HB① O-P8～14 I 台239
		20	c		口	— — —	1.0 32.4	口:内彎、断-角、幅1.32cm。口唇部分に粘土加える。胴部は張り、その上部に波状文施す。波状文(浅)2条。壺屋(I)第I類b。	内外:赤褐色	内外:ナデ消し	細-白粒△ 細-赤粒△	良+ 砂質	HB②ロ S12.13 II 2004SX 台3161
		21			口	27.0 — —	0.9 88.5	口:内彎、逆L-幅1.8cm。口唇平ら。胴部張る(胴径29.6cm)口唇に圏線(1条)頸部に5条1組の波状文。	内外:暗赤褐色 中:茶褐色	内外:轆轤痕△	白・赤粒△	良+ 硬質	HB① O-P8～14 I 台239
	第154 図・ 図版 122	22	d		口	— — 4.6	0.6～0.8 33	口:内彎、舌状、先端で膨らむ。文様:外面を深い沈線で区画、波文を圍繞する	内外:茶褐色中:茶 褐色	内外:轆轤痕△	細-石灰粒△ やや密	良+	HB① N17 II 063P 台360
		23			口	20.0 — —	0.6 59.6	口:内彎、丸、口唇近くで厚くなる。胴:張る(胴径22.3cm)。外:圏線1本+3条1組の波状文(深)。	内外:赤褐色	内外:轆轤痕△	細-茶粒△ やや密	良 やや砂質	HB②イ I 台3082
		24			底	— — 11.0	0.9～1.1 254	底:立ち上がり緩やかに張る。	外:赤褐色 内:灰～赤褐色	外:幅6cmの篋削 り 内:轆轤痕△	細-茶粒△ やや密	良+ やや砂質	HB① II 台485

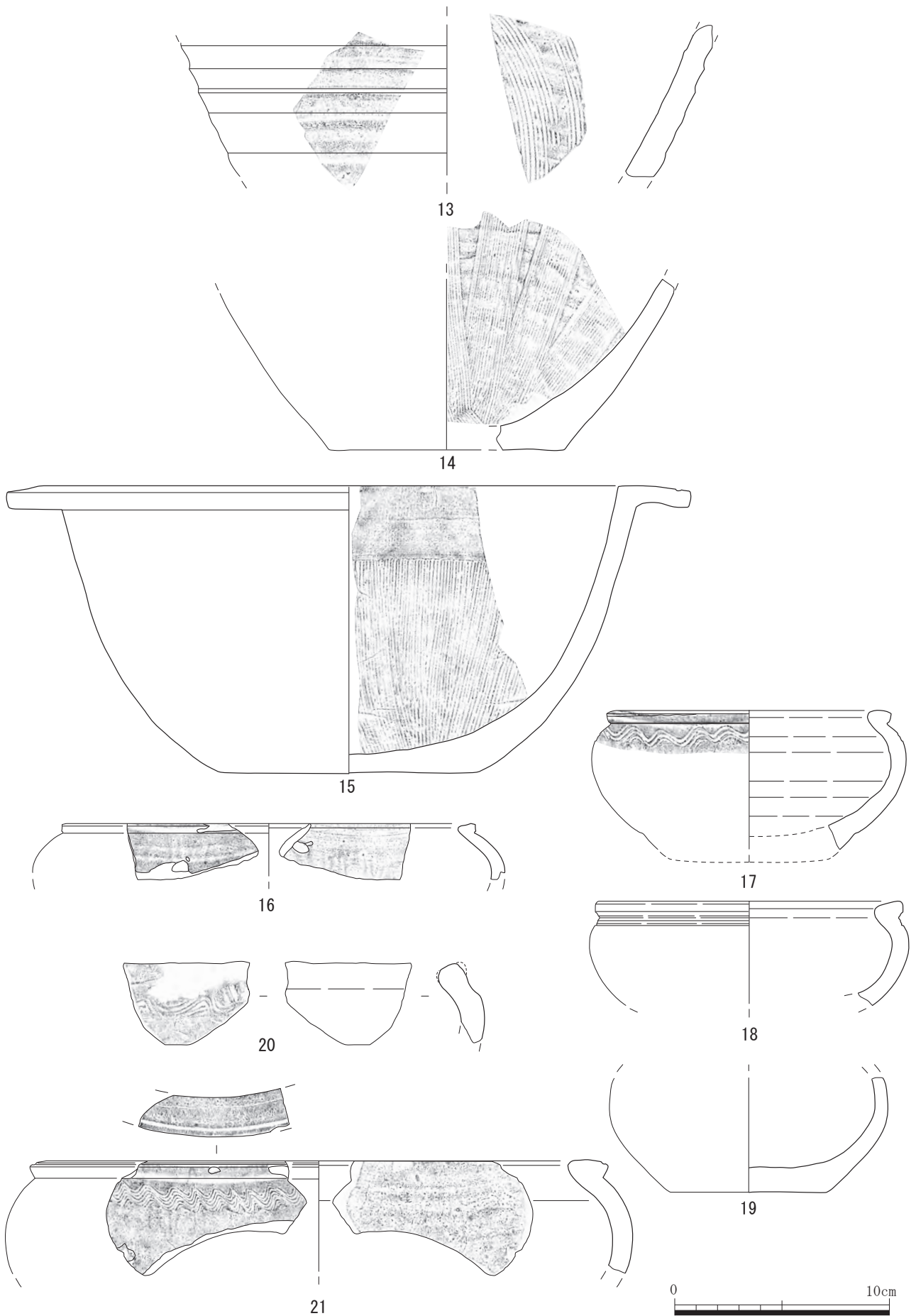
凡例 (◎=多 ○=風通 △=少 △=僅少 良+=非常に良い 良=良い 良-=やや良い)
(安):安里1987 壺屋(I):壺屋古窯群 I 1992の分類を示す



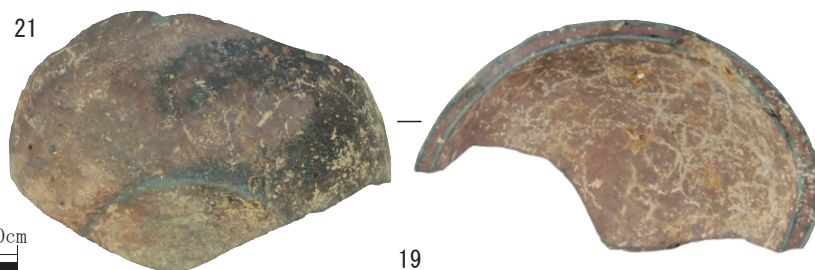
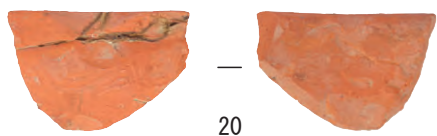
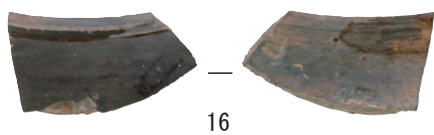
第 152 図 沖縄産無釉陶器 1



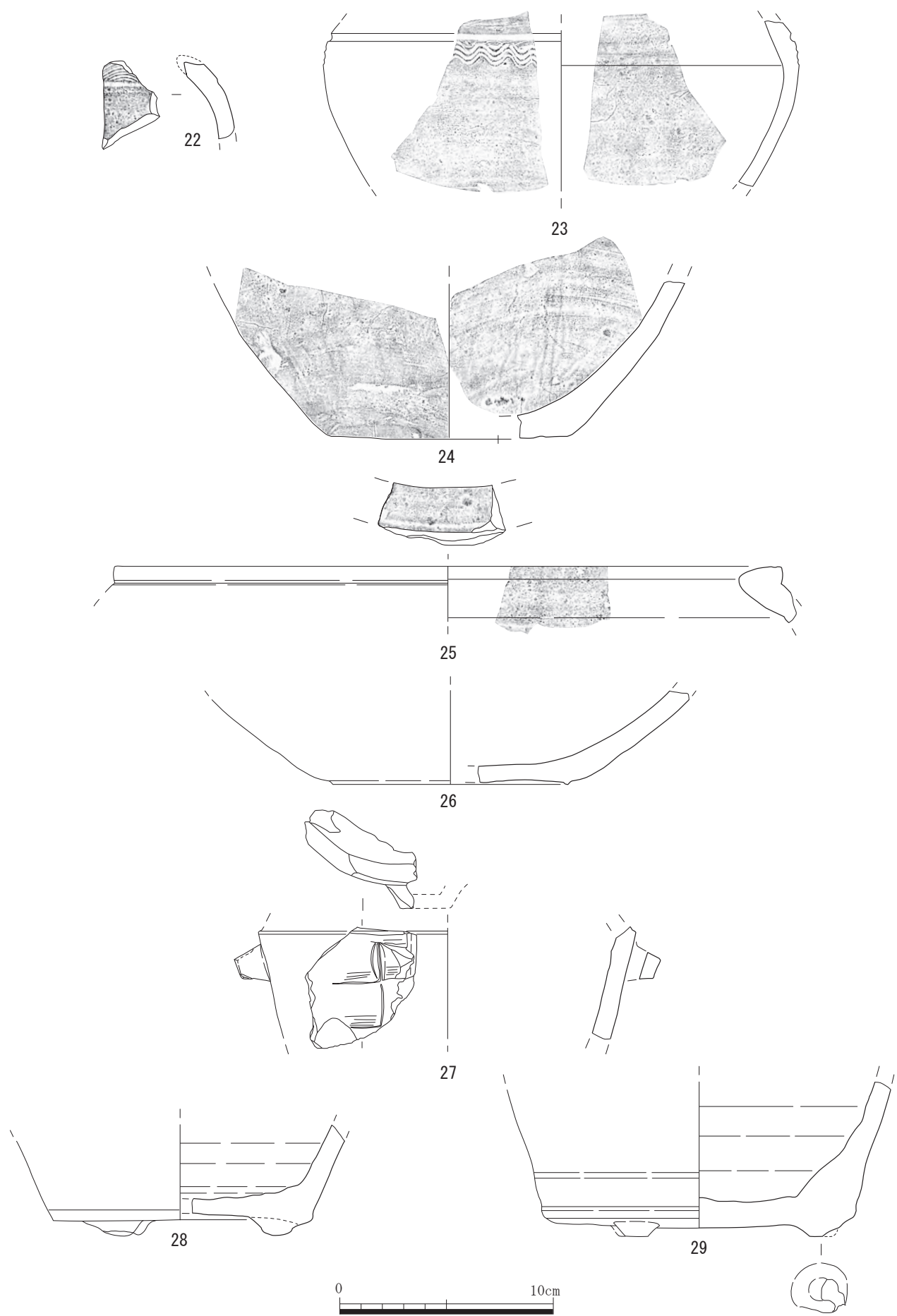
図版 120 沖縄産無釉陶器 1



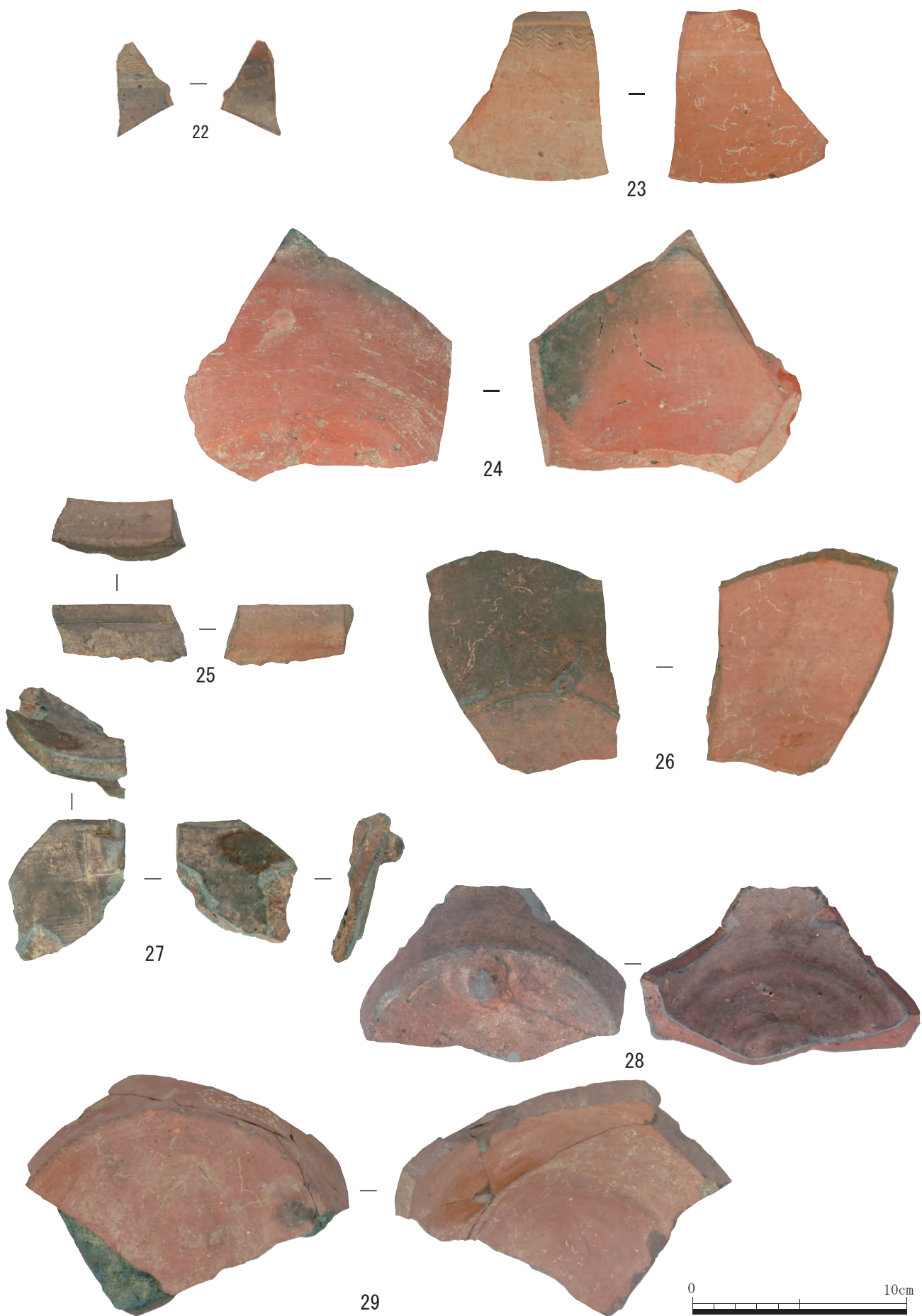
第 153 図 沖縄産無釉陶器 2



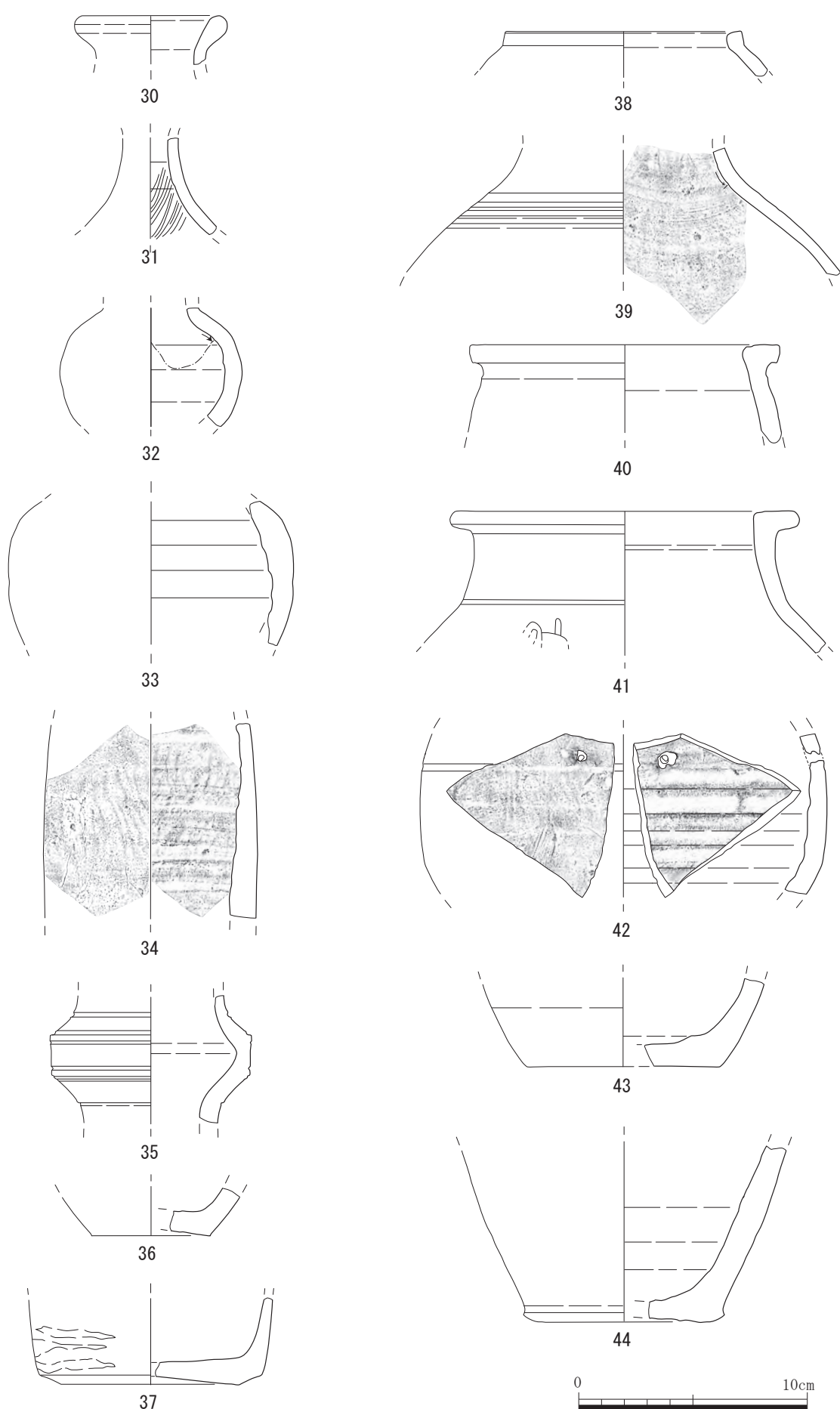
図版 121 沖縄産無釉陶器 2



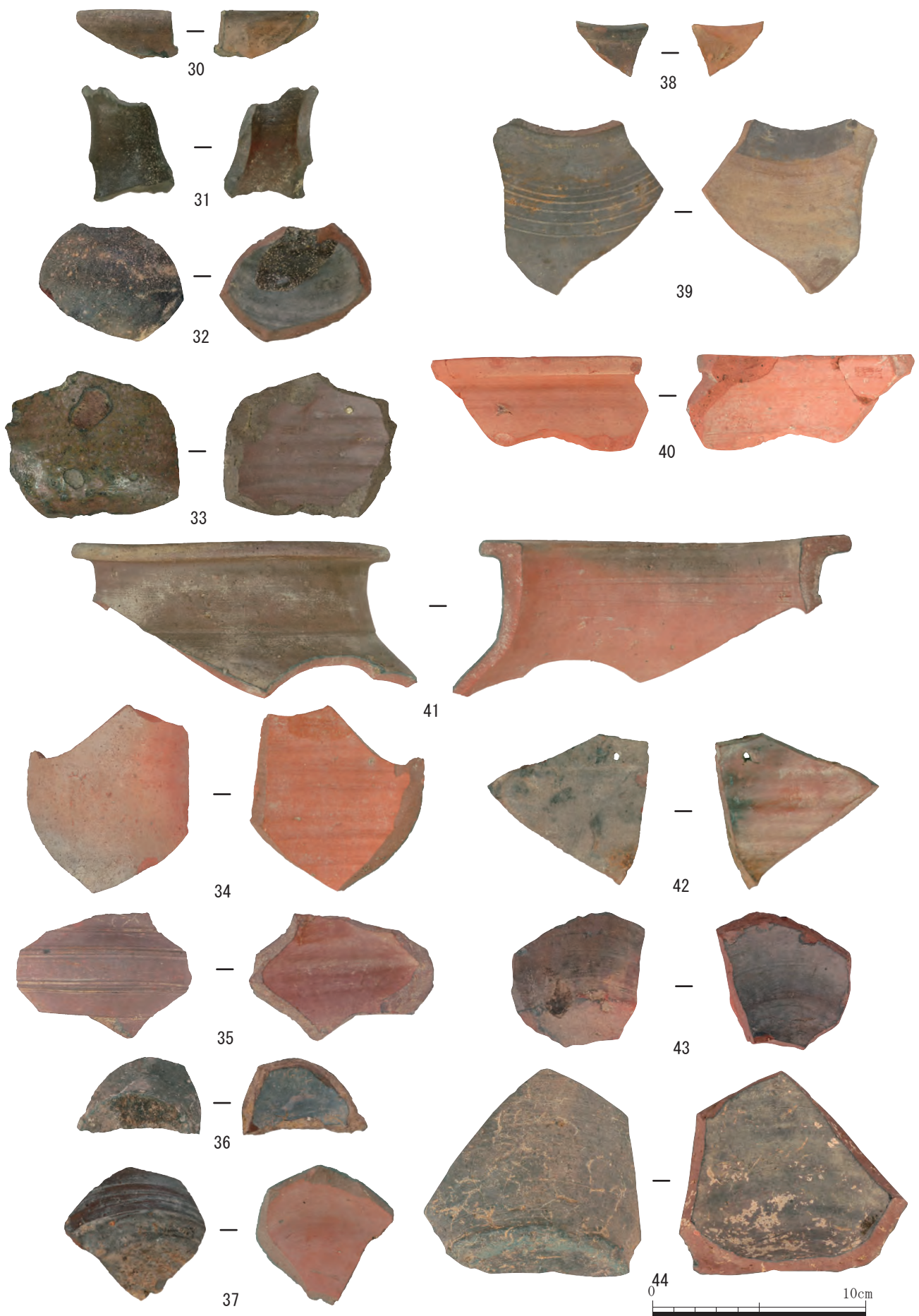
第154図 沖縄産無釉陶器 3



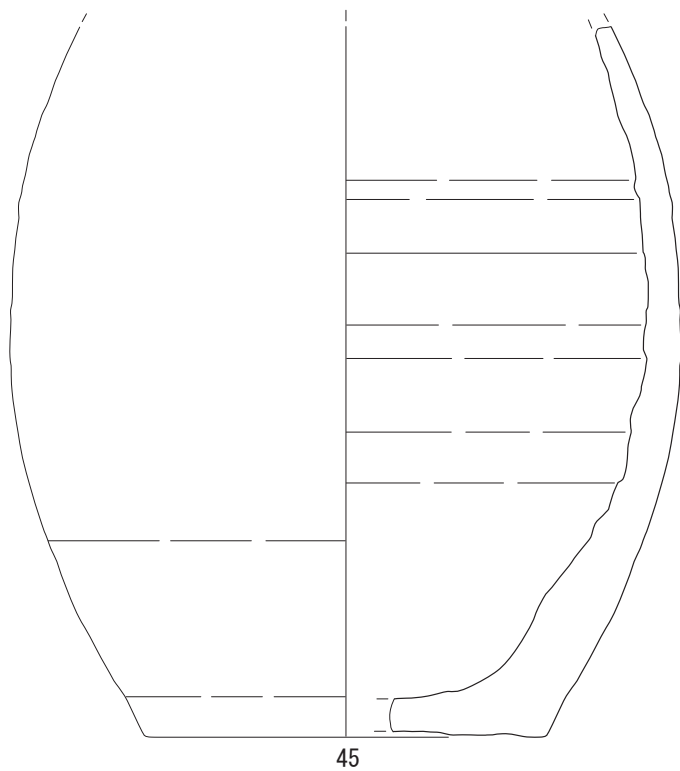
図版 122 沖縄産無釉陶器 3



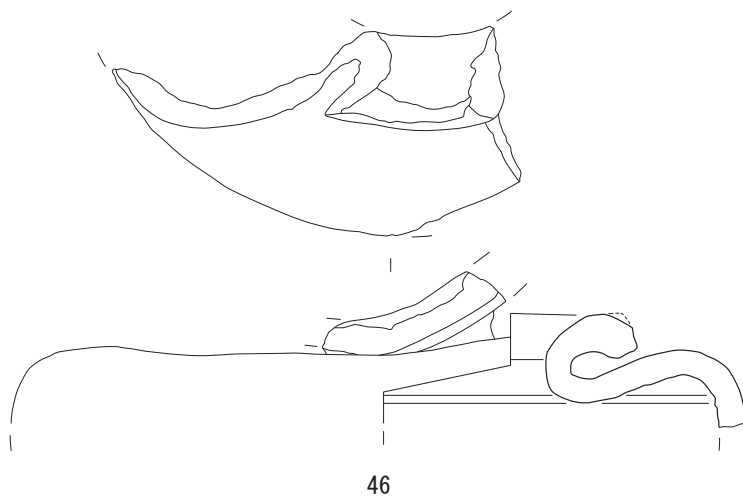
第 155 図 沖縄産無釉陶器 4



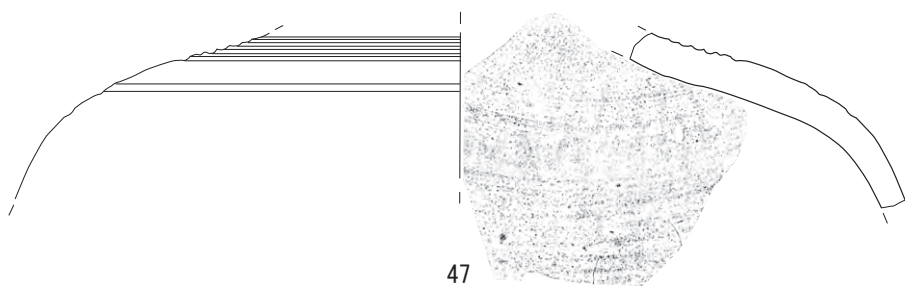
図版 123 沖縄産無釉陶器 4



45



46



47



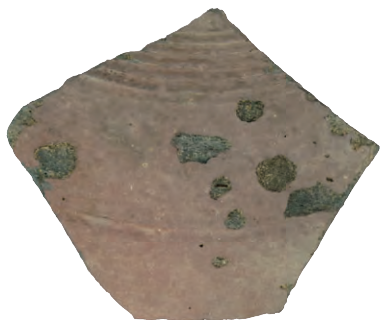
第 156 図 沖縄産無釉陶器 5



45



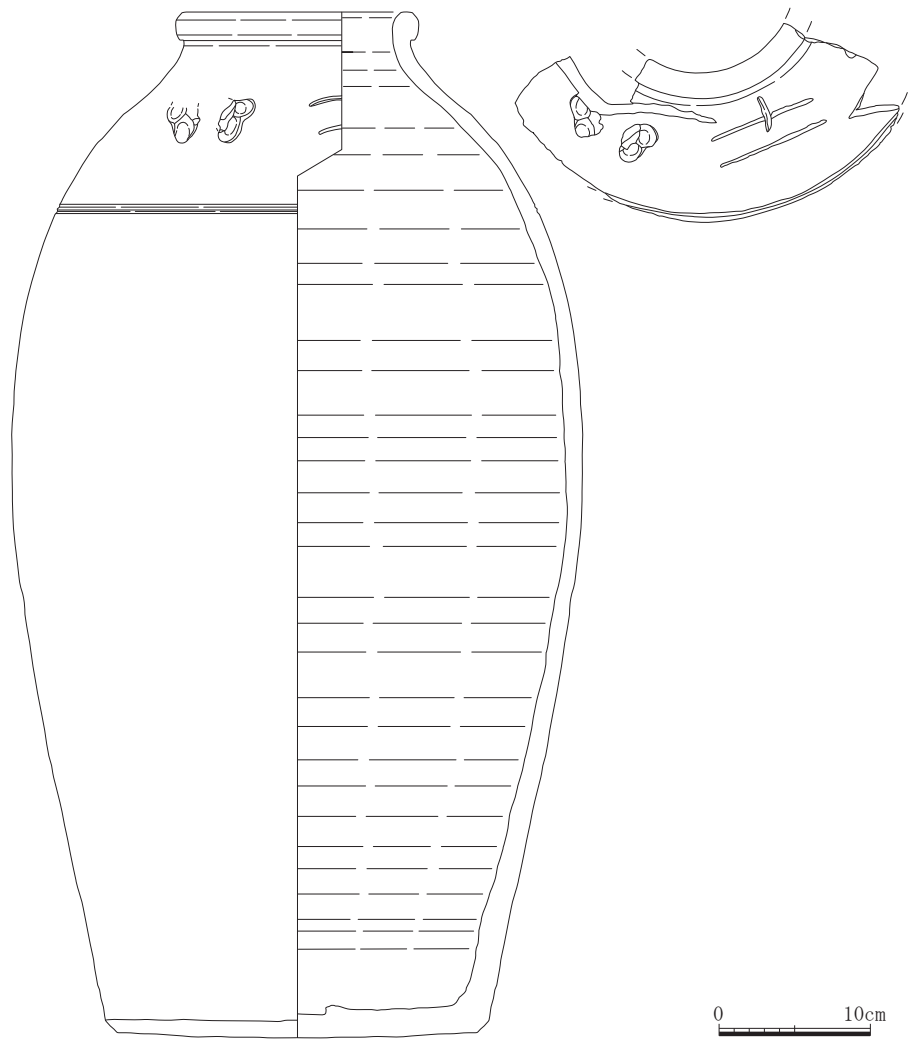
46



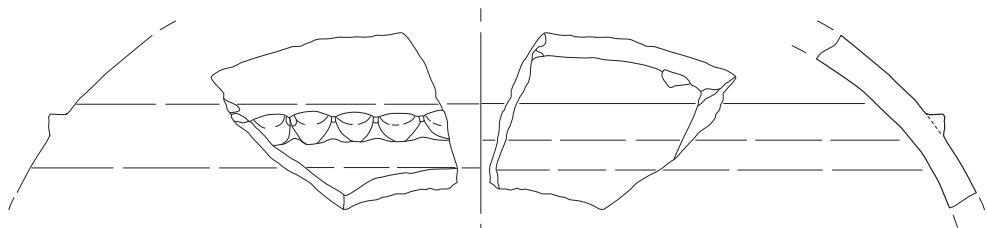
47



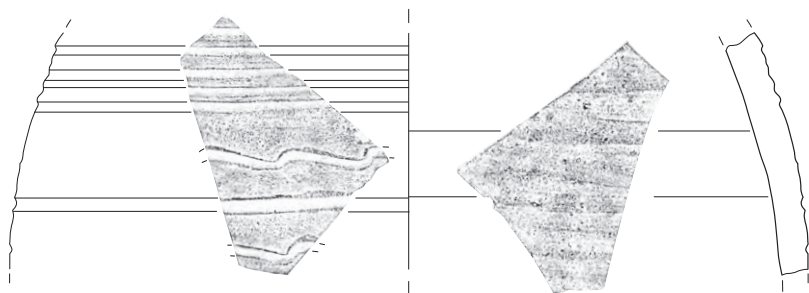
図版 124 沖縄産無釉陶器 5



48



49

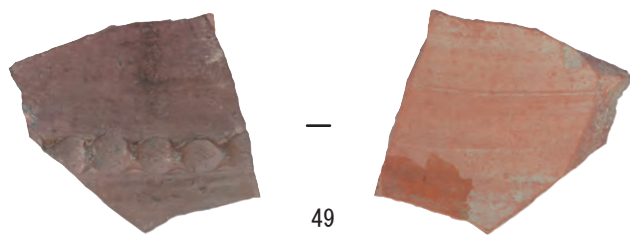


50

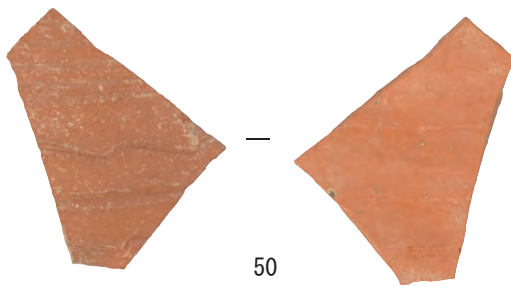
第 157 図 沖縄産無釉陶器 6



48



49



50



図版 125 沖縄産無釉陶器 6

第73表-2 沖縄産無釉陶器観察一覧

(法量単位:cm, g)

第図 図版	図 番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	器厚 重量	形状・文様・備考	色調	器面調整	混和材	焼成	地区・グロト・層位 遺構・台帳番号
第154 図・ 図版 122	25	鉢	e	口	31.2 — —	1.2~1.3 42.4	口:内彎。口:幅2.1cm、断:三角形。 文様:口唇に1本圈線。	外:暗灰褐色 内:暗茶褐色	内外:轆轤痕△	細-茶粒△	良+	HB① I 台494
	26			底	— — 11.0	0.8~1.1 149.7	底:膨らみながら立ち上がる。底 厚:0.7cmと薄手、立ち上がり部分に補 強のため、粘土を貼り付ける	外:暗灰~茶色 内:明茶色 中:暗茶褐色	外:ヘラ削り 内:轆轤痕	粗-赤粒△	良+	HB②イ K8~10L8~ 10 M9 II 1018SX 台3296
	27	火炉	筒型	胴	— — —	0.8~0.9 44	胴径18.0cm。横耳。上一下に穿孔。	内外:暗紫~灰色。 中:暗茶褐色	外:耳の周辺捲 ナデ 内:轆轤痕	粗-白粒△ 気泡△	良-	HB① O・P10.11 II 359SK 台340
	28			底	— — 12.2	0.8 193.3	底:直底(脚径0.8cm、断面-台形、底面 丸み)。文様:底部に近くに1条の圈 線。	内外:暗灰色 中:暗茶褐色	内外:轆轤痕	細-白粒△	良+	HB②ロ QSK9・10 II 2002SZ 台3368
	29			底	— — 14.4	0.7~0.8 367.5	底:直底(脚径1.2、断面-台形)底部は 厚め、やや大きめ。文様:底部との境に 沈線文。	内外:赤褐色 中:明灰色	外:幅0.8cmの粘 土紐か 内:轆轤痕	細-黒粒△	良+	HB① I 台494
第155 図・ 図版 123	30	瓶	a	口	6.0 — —	0.6 13.4	口:外反、断-蒲鉢。幅1.0cm頸部でく びれる。	内外:暗茶色 中:灰色。	外:轆轤痕、ナデ 内:轆轤痕	石英△	良+	HB① O13.14・P13 II 台487
	31			b	— — —	0.6~0.7 22.9	口:外反か 最小胴径2.4cm。	内外:自然釉 中:暗灰色	内:轆轤痕○	細-砂粒○	良+	HB②ロ T12 III 2072P 取2018
	32			c	— — —	0.5~0.7 40.8	最大胴径7.4cm。 有頸3.8cm。	内外:マンガン釉 中:暗茶色	内:轆轤痕○	細-砂粒△ 粗-赤粒△	良+	HB②ロ S12 III 台3339
	33			d	— — —	0.7~0.8 68.3	最大胴径12.4cm、粗製	外:暗茶褐色、光沢 内:暗紫色	内:轆轤痕○	細-砂粒△	良+	HB②ロ Q8.9 II 2054SX 台3369
	34			e	— — —	0.5~1.1 144.3	最大胴径7.5cm。 無。 壺屋(I)-徳利IV型。	外:明赤~茶色 内:赤褐色 中:茶褐色	外:轆轤痕、ナデ 内:轆轤痕	粗-石英△	良+	HB① P・Q10 II 2405X 台490
	35			f	— — —	0.6~0.8 65.1	胴部ソロバン玉状に膨らむ、最大胴径 8.7cm。文様:沈線文を胴部が膨らむ上 下に4ヶ所に施す。	外:暗紫色 内:暗茶色	内:轆轤痕○	粗-砂・赤粒 △	良+	HB① O・P8~14 I 台241
	36			g	— — —	0.8 28.1	底:直底。立ち上がりは緩い。 やや上げ底	外:暗茶色 内:灰色 中:茶褐色	内:轆轤痕△	粗-石英△	良+	HB① K・L12 II 001SK 台377
	37			h	— — —	0.5~0.6 48.1	底部:角を削る。直角に立ち上がり、胴 部に薄くなる。やや上げ底。 文様:素地に白釉を縞状に塗布。	外:暗紫色に白有 内:茶色	外:底部に削り 内:轆轤痕△	細-白・赤粒 △	良+	HB②ロ Q9.10K9.10 S9.10 II 2002SZ 台3368
	38	急須	口	10.4 — —	0.6~0.7 6.4	口:立ち口、断-角、立口は0.6cm程度 である。	外:暗茶色 内:橙色 中:茶色	外:轆轤痕△ 内:轆轤痕○	赤粒	良+	HB②イ I 台3082	
	39	壺	小a	— — —	0.6~0.7 49.9	なで肩、薄手。 文様:頸部に6条の圈線。口縁部に近 いほど間隔が狭い。	内外:マンガン釉 内:頸部まで 中:明茶色	内:轆轤痕○	砂粒△	良+	HB① I 台494	
	40		小b	口	— — —	13.6 0.8 67.4	口:幅逆L-1.7cm。 僅かに頸部で膨らむ。	内外:暗赤褐色	内外:轆轤痕△	鉄分 石英-粒	良+ やや砂 質	HB②ロ Q8.9 II 2054SX 台3369
	41				— — —	15.2 0.6~0.7 186.7	口:逆L-幅2.0cm。文様:頸と胴部の境 に浅い圈線。肩部に窯印。	外:茶褐色 内:赤褐色	内:轆轤痕△	砂粒△	良+ 硬質	HB②ロ Q9.10K9.10 S9.10 II 2002SZ 台3368
	42			底	— — —	0.6~0.8 47.3	最大胴径17.8cm。孔(外→内)粗孔0.2 ×0.4cm。浅い圈線か轆轤痕と思われ る。圍繞。胴下部に膨らむ。浅い圈線。	外:淡茶色 内:明赤褐色	内:轆轤痕○	粗-赤粒△	良+	HB① I 台494
43	— — —				0.8 72.4	底:立ち上がり若干膨らむ。 内底、中心に薄くなる。	外:暗茶色 内:暗灰色 中:暗茶色	外:刷毛○ 内:轆轤痕○	細-石英△ 粗-赤粒△	良+	HB②ロ Q9.10K9.10 S9.10 II 2002SZ 台3368	
44	— — —				0.9 188.8	底:直状、やや厚手。上げ底。 底縁に粘土(幅1.2cm)を重ねる	内外:暗灰褐色 中:暗茶色	外:篋△ 内:轆轤痕○	粗-石英△	良+	HB②イ K8~10L8~ 10 M9 II 1018SX 台3296	
45	— — —	0.9 1433			底:直状、底面から膨らむように立ち上 がる。底縁は轆轤が窄まるように狭くな る。内:漆喰付着。胴径22.2cm。	内外:橙褐色 中:灰褐色	外:轆轤痕○ 内:轆轤痕◎	空洞多し	良- やや砂 質	HB②イ J10・K10.11 L10.11 II 1005SZ 台3081		
第156 図・ 図版 124	46	大 有肩	口	— — —	17.2 0.9 149.9	口:方形、幅1.1cm、口縁部は窯変のため、 崩れる。頸部に浅い圈線2条。	外:暗茶褐色 内:明灰色 中:灰~暗茶色	内:轆轤痕○	砂粒△	良+	HB① I 台494	
	47			— — —	0.9~1.1 149	有肩。最小胴径13.0cm。最大胴径 30.5cm。頸部:7条の浅い圈線。肩部: 1条の浅い圈線。粗製	内外:暗茶色 +暗灰色	外:轆轤痕△	砂粒△	良+	HB②ロ Q8.9 II 2054SX 台3369	
	48			大 なで 肩	口~底	15.2 67.5 23.7	0.8~1.2 7000	口:蒲鉢-幅2.0cm。底:直状、厚 1.6cm。底縁は削り、角がない。耳-3 個、文様:肩部に2本の圈線(深)。窯印 「十一」。	口:~肩部に自然 釉 内外:茶褐色、赤褐 色、底部はサンド イッチ(黒褐色)	内外:轆轤痕 外:底部近くに三 角状の篋痕 底面は幅4.0cm の篋で縦位→円	赤・砂粒	良+
第157 図・ 図版 125	49	甕	胴	— — —	1.0~1.2 85.2	肩部:張る。 文様:縄目貼付文-幅1.2cm。	外:暗茶褐色 内:赤褐色 中:明茶褐色	内外:轆轤痕△	白粒-△	良+	HB① P・Q10 II 240SZ 台490	
	50			— — —	1.0~1.1 69.2	胴上部で小さくなり、口縁に至る。口縁 近く圈線4条。かぶは圈線と緩やかな波 状沈線の組み合わせ。	内外:明茶色 中:明茶褐色	外:轆轤痕△	白粒-△ 黒粒-△	良+	HB②ロ Q8.9 II 2054SX 台3369	

凡例 (◎)=多 ○=風通 △=少 △=僅少 良+=非常に良い 良=良い 良-=やや良い
(安):安里1987 壺屋(I):壺屋古窯群 I 1992の分類を示す

(3) 陶質土器

「アカムヌー」と称される沖縄産の陶質土器が7種260点出土した。器種により軟質と硬質が見られるが、厚みに関わらず触れると微粒子が付着し、水分付着後に擦ると色落ちする物を陶質土器と捉えている。いずれも素地は細かい微粒子で雲母・赤色粒・黒色粒を含み、轆轤成形後ナデ消しを行うものが多数である。第75表より出土破片数としては火炉と鍋が多く、鍋については急須と判別の難しい胴部片を含めると圧倒的多数を占めた。これらの破片について器厚を計測したところ(第74表)、器種により厚みに違いがあるのが窺えた。

第74表 器厚別出土量

器厚(mm)	器種												
	鍋	蓋	鉢	播鉢	水鉢	植木鉢	火炉	火取	急須	急須?	皿 or 蓋	鍋 or 急須	不明
2.0~2.9	5	1							3			41	3
3.0~3.9	8	1	6				6	5					
4.0~4.9		2			1		12	9			2	42	
5.0~5.9	25						8						
6.0~6.9			6		7		1	1		1			
7.0~7.9			6	1			10						
8.0	3					1							

2.0~4.9mmの薄手では蓋・急須、5.0~5.9mmの中手では鍋・火炉、6.0mm以上の厚手では鉢類と火炉が多かった。なお鉢類と火炉では3.0mm未満は得られなかったことから他器種より厚手に成形される事が窺えた。

出土地点ではHB①②地区ともに戦前の攪乱が多く沖縄産施・無釉陶器との伴出が69%にのぼった。なお、V層より出土の陶質土器は発掘調査の際の混ざり込みと考えられ、I(V)と表記している。

以下、主な遺物について第76表に詳細を記載し、第158・159図、図版126・127に示す。

A. 鍋 (図1~3)

壺屋で「サークー」と呼ばれる把手付きの土鍋で口縁部1点、胴部24点、底部20点が確認できた。口縁部を逆「く」字状に折り曲げ、そこから緩やかに膨らみながら丸底に成形される。図1は丸底の底部である。内面には使用による焦げ付き痕、外面には煤が付着し、内外面とも同心円状に轆轤痕が明瞭に残る。図2・3は鍋の蓋で、全体に皿を伏せた器形を呈するものと思われる。図2は底部で内外面共に轆轤痕が明瞭に残る。図3は全形の窺える資料で把手は三日月高台となる。

B. 鉢 (図4~7)

鉢・播鉢・水鉢・植木鉢が確認できた。胴・底部については判別が難しく区別はせず鉢の胴・底部片としている。口縁部については、鉢(直口)2点、播鉢1点、水鉢8点が確認できた。いずれも沖縄産無釉陶器と重複する器形であり、内容物による使い分けが考えられる。図4は鉢の口縁部で胴部から直口し硬質である。図5は播鉢の口縁部で逆「L」字状に外側に折り曲げ水平にした齔縁口縁を持つ。内面は所々に破損があり楯目の組み合わせ本数は不明だが、隙間無く楯目が入る。図6は水鉢で口縁部が内彎し、胴部上端に楯描きによる4本の波状沈線とその下に1本の沈線が入る。内面には轆轤痕に則して茶褐色が不規則に残り、鉄分を含む何らかの顔料が塗布されたと思われる。図7は植木鉢の底部で中央に外底面から孔を穿ち、内外面に赤色顔料が塗布されている。高台には逆「U」字状の袂が見られる。

C. 火炉 (図8~18)

方言で「ヒールー」と呼ばれる火鉢類である。口縁部11点、耳部2点、胴部25点、底部13点が確認できた。器形は『壺屋古窯群I』(1992)に準じて以下の3タイプに分けた。I群: 肩部を「く」字状に折り曲げ、底部へストレートに伸びる。II群: 口縁部を内彎状に立ち上げ緩やかにカーブを描きながら底部に至る。II群の中でも a: 口唇部は舌状に成形し半月状の火窓を1ヶ所設け、内面には三つ葉状の受け台作る。b: 口縁部を玉縁状に作り、口縁部内面下に突起を貼り付ける。が見られた。割合的にはII群が多いが、内面突起のあるものは1点のみであった。底部は高台のあるものとベタ底の2タイプ見られた。図8~15は口縁部である。図8・9はI群、図10~12はII群に該当するが、把手の有無や位置に違いが見られる。図13はII群bに該当し赤色の顔料が塗られて

いる。図 14・15 はⅡ群 a に該当し、ともに煤により薄黒くなっている。図 16・17 はⅡ群とⅠ群の肩部の破片である。図 18 は高台を削り出し、高台脇まで白化粧土で横線を巡らせる。

D. 火取 (図 19)

火取は 1 点のみの出土である。底面を篋削り後、粘土塊を 3ヶ所に貼り付け円盤状の脚とする。

E. 急須 (図 20～26)

急須（壺屋で「ヤックワン」と呼ばれる土瓶を含む）は、口縁部 4 点、耳部 5 点、胴部 4 点、注口 4 点が確認できた。器壁はいずれも 3～4 mm である。器形は『壺屋古窯群Ⅰ』（1992）に準ずると、「A. 口縁部を立ち上げ、胴部が球状のもの」が多かったが、「B. 胴部が屈曲するもの」も僅かに見られた。胴部や底部から A・B どちらの器形に属するかを識別するのは難しかった。図 20～22 は口縁部で口唇の立ち上がりに若干の違いが見られる。図 23 は胴部の屈曲部で、僅かに煤が付着する。図 24 は丸みを帯びた底部で内面には石灰が付着する。図 25 は耳部の破片である。上端部の孔は焼成前に外面より穿孔される。図 26 は蓋で撮みが付くかは不明である。上面に煤が付着する。

F. フライパン状製品 (図 27)

鉢よりも浅く口唇部を平坦に成形しているので、破片ではあるがフライパン状製品と判断した。

G. 器種不明 (図 28)

図 28 は器種不明の胴部である。鉢や壺もしくは火炉の可能性も考えられるが、特定できないため、

第 75 表 陶質土器出土量

器種	鍋		蓋		皿or蓋	鉢		播鉢	水鉢	植木鉢	火炉			火取	急須			鍋or急須	フライパン状製品	不明		合計							
	口	胴	底	口	底	底	口	胴	底	口	底	口	耳	胴	底	底	口	耳	注口	胴	底		胴	口	胴	底			
HB ①	I		4		1		2	2	2			3		2						2					36				
	I (V)		3														1								5				
	046SZ																								2				
	II	1	1	2				1		1		1		3			3	2		1					42				
	53P		1																						1				
	67P																				1				1				
	86P					1																			1				
	376P											1														1			
	305SD														2					1		2				5			
	1SK														1											1			
	62SK			2																		1				3			
	81SK																					1				1			
	358SK		6					2		1	1	1	1	1							19			1		33			
	359SK																					4				5			
	288SS																		1			2				3			
	229SZ																					1				1			
	240SZ		1					7	4		5		1	1								3			1	23			
	274SZ																					1			1	2			
	III			1	1																	3		1	1	7			
	271SD																									1			
304SD																									1				
275SL																									1				
IV																									1				
合計	1	19	5	2		2	2	12	4	1	8	1	7	7	4		4	3	1	4		76	1	11	1	176			
HB ②イ	I			2																						3			
	II 1003SZ				1																					1			
	1016SZ			2										1												3			
	1018SX			1											1	1										3			
合計			5	1										1	1	1						1				10			
HB ②ロ	I		1																							1			
	II		1	3		2						1	1	2					1		1	4				16			
	2002SZ		1	1								1	1	6	2							2			4	17			
	2003SZ													1	1											2			
	2054SX		1	6		1						2	1	7	5			2	2			6				33			
	III		1												1							1				2			
2049SD														1											1				
IV																					1				1				
合計		5	10		3							4	2	17	8			2	3		1	14		4		73			
HB ④イ	I																									1			
	合計																									1			
部位別合計	1	24	20	3	3		2	2	12	4	1	8	1	11	2	25	13	1	4	5	4	4	1		91	1	16	1	260
器種別合計			45		6		2							28			51	1				18		91	1	17			

器種不明として報告する。類例資料の出土が待たれる。

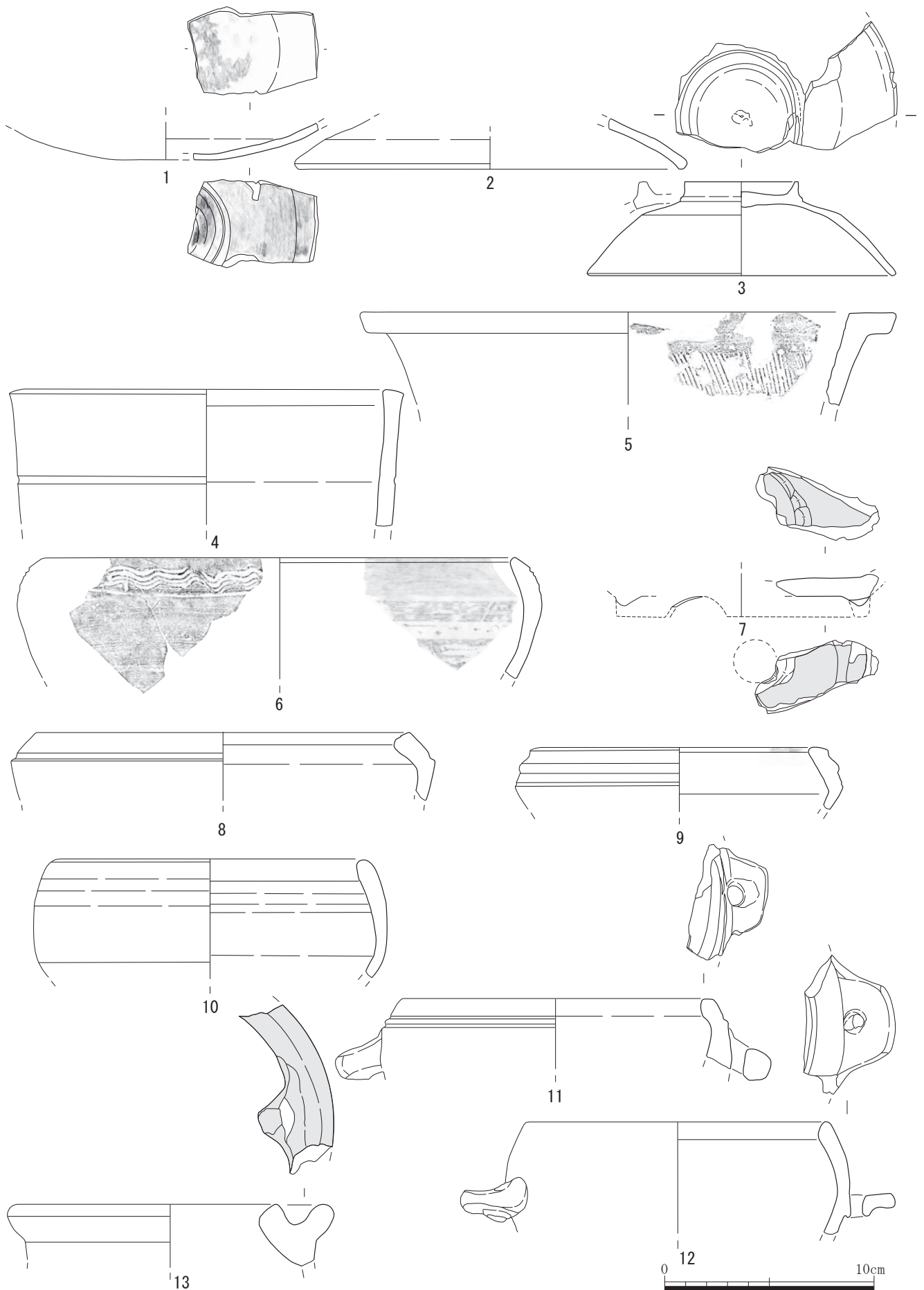
- <参考文献> 那覇市教育委員会 1992 『壺屋古窯群Ⅰ』 那覇市文化財調査報告書 第23集
 那覇市立壺屋焼物博物館企画展 2001 『掘り出された壺屋』
 沖縄県教育委員会 1995 『湧田古窯跡Ⅱ』 沖縄県文化財調査報告書 第121集
 浦添市教育委員会 1992 『城間遺跡』 浦添市文化財調査報告書 第19集

第76表 陶質土器観察一覧

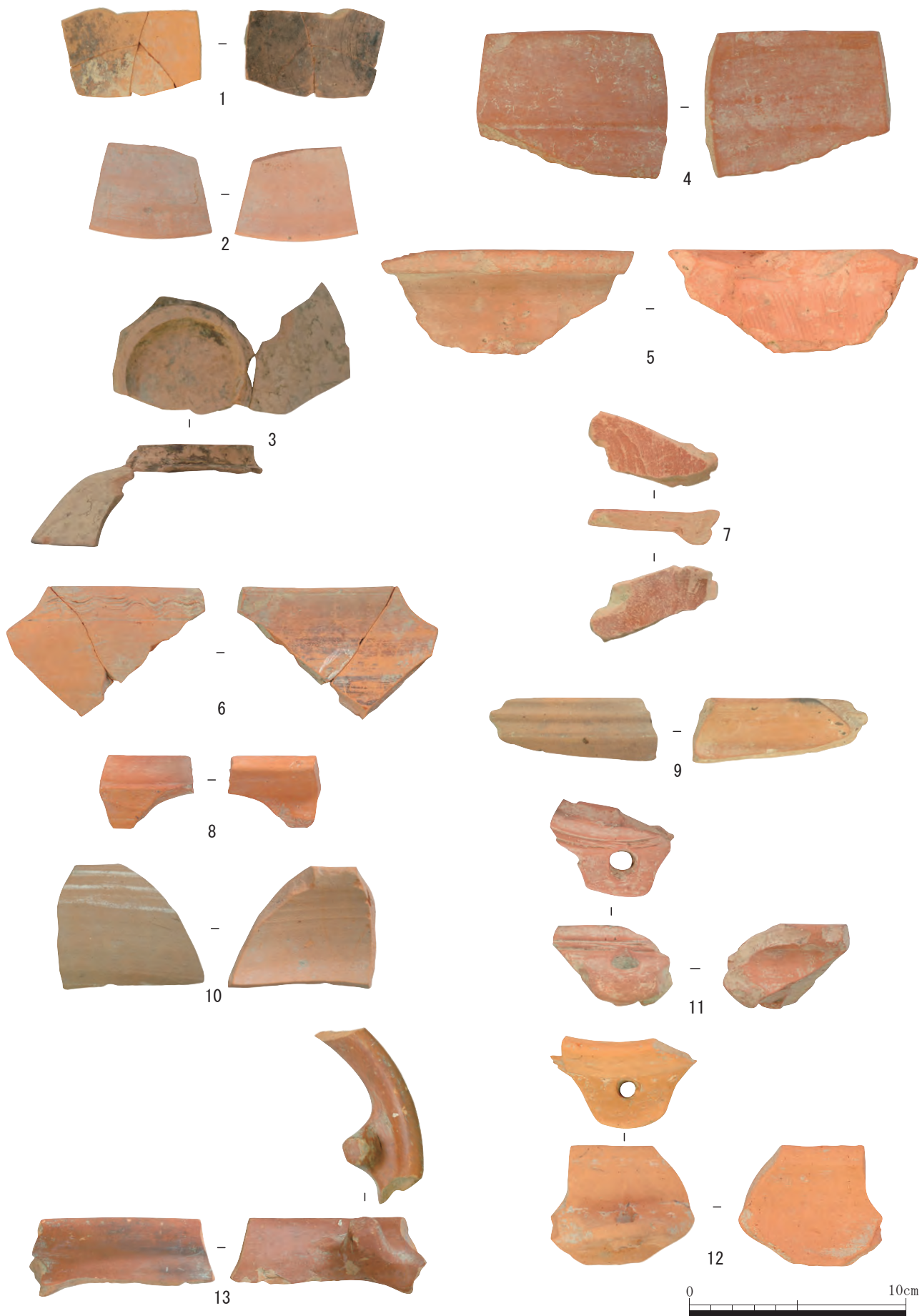
(法量単位: cm, g)

第図 図版	番号	器種	部位	口(縁)径・器高 ・底(袴)径	重量	器厚	形状	器色	陶質	混入物	所見	地区 グリッド 層位 遺構 台帳番号
第158 図・ 図版 126	1	鍋	底	- - -	12.6	0.3	丸底	内外面: 明橙色	軟質	雲母・赤色粒: 少	内面: 焦げ付き痕 外面: 煤付着	HB②イ I 台3082
	2		蓋	19.6 - -	18.7	0.5	皿を伏せた形状 縁: やや膨らむ	内外面: 淡橙色	硬質	砂粒: 少	内外面: 轆轤痕明瞭	HB②ロ II 台3328
	3			15.0 - 5.4	41.3	0.2~ 0.3	高台状の把手を持ち、皿を伏 せた形状	内外面: 淡橙色		赤色粒・黒色粒: 少 雲母: 多	三日月高台 内外面: 轆轤痕ナデ消す	HB②ロ II 台3328
	4	鉢	口	18.9 - -	80.9	0.7	胴部から口縁部に向けストレート に伸びる	内外面: 赤橙色	軟質	黒色粒: 極少	内外面: 調整痕明瞭	HB① I 台494
	5	播鉢	口	25.6 - -	80.8	0.9	口縁部: 逆「L」字状・鈔縁 胴部に向かってストレートに伸 びる	内外面: 明橙色		黒色粒・赤色粒: 大き め・少 雲母: 微細・少	櫛描きは全面に施される	HB① OQ8・9 II 358SK 台484
	6	水鉢	口	22.4 - -	41.6	0.9~ 0.6	口縁部: 内彎 いわゆるミジクブサー	内外面: 明橙色 内面: 不規則に茶褐色 (顔料塗布)	硬質	黒色粒: 極少 雲母: 微細・多	胴部上端に波状沈線(4本) と沈線(1本)	HB① PQ10 II 240SZ 台489
	7	植木鉢	底	- - 12.0	13	0.8	高台: 逆「U」字状の抉り	内外面: 赤色(顔料塗 布)		混入物: 無し ピンホール: 多	外底面から中央に穿孔(径 約2.0cm)	HB① I15 I 46SZ 台363
	8	火 炉	口	17.8 - -	15.6	0.6~ 1	肩部で「く」字状に屈曲し、口唇 部で火窓を作る(I群)	内外面: 橙色	軟質	黒色粒・白色粒・雲母: 微細・少	調整痕: 明瞭 内面: 一部押圧痕	HB②ロ Q8・9 II 2054SX 台3369
	9			13.0 - -	22.8	0.4~ 1.3	肩部で「く」字状に屈曲し、口唇 部で火窓を作る(I群)	内外面: 淡橙色		茶褐色粒: 大 雲母: 微細・多	調整痕: 明瞭 内面: 煤付着	HB②ロ Q8・9 II 2054SX 台3369
	10			15.0 - -	30.1	0.5~ 0.9	やや内彎(IIa群) 縁部は丸	内外面: 淡橙色	硬質	雲母: 少	轆轤痕・調整痕: 明瞭 外面: 白化粘土で横線を巡 らす	HB②ロ QRS9・10 II 2002SZ 台3367
	11			13.0 - -	33.4	0.7~ 0.9	やや内彎(IIa群) 縁部は角 下がり気味に方形把手が付く	内外面: 赤橙色		雲母: 微細・少 赤色粒: 大・少	把手は上部より穿孔	HB① PQ8・9 II 358SK 台484
	12			14.2 - -	52.6	0.6~ 0.8	口縁: 内彎(IIa群) 縁部: 舌状 ほぼ水平に半月状把手が付く	内外面: 淡橙色	軟質	雲母・赤色粒・黒色粒: 微細・少	把手は上部より穿孔	HB① PQ10 II 240SZ 台490
	13			15.6 - -	64.4	1~ 0.7	内面に突起状の受け台を貼り 付ける円筒形タイプ(IIb群)	内外面: 赤色(顔料塗 布)		黒色粒・石灰粒: 極少 ピンホール: 多	口唇: かまぼこ状 突起下面に貼り付け痕残る	HB① I 台494
14	14.2 - -			33.2	1~ 0.4	口唇とほぼ水平に受け台を貼り 付け胴部はやや内彎(IIb群) 縁部: 舌状	内外面: 淡橙色 上面: 煤付着	硬質	黒色粒・赤色粒・雲母: 微細・少	上面: 煤付着 受け台: 貼り付け痕残る	HB① I 台494	
15	13.7 - -			26.5	1	口唇とほぼ水平に受け台を貼り 付ける円筒形タイプ(IIb群)	内外面: 暗赤褐色		雲母・黒色粒: 少 茶褐色粒: 大・少	外面: 白化粘土による横線 文 煤による汚れ	HB① OP14 ¹⁶ II 台978	
16	胴			- - -	46.6	0.7	緩やかなカーブ(II群) 水平に把手が付く	内外面: 淡橙色 (煤付着)	軟質	雲母・黒色粒: 少	把手は上部より穿孔	HB① PQ8・9 II 358SK 台484
17				- - -	10.5	0.5~ 0.7	肩部で「く」字状に屈曲する (I群)	内外面: 暗赤褐色		黒色粒・赤色粒・雲母: 微細・少	全体にうっすらと轆轤痕残 る	HB① PQ10 II 240SZ 台490
18		底	- - 11.0	24.8	0.7	高台を削り出し(II群) 高台脇に圈線	内外面: 赤橙色	雲母・黒色粒(大・小): 少 ポーラス	外面: 白化粘土による横線 文	HB②ロ QRS9・10 II 2002SZ 台3367		
19	火取	底	- - 7.4	37.6	0.7	円筒形 三脚	内外面: 赤橙色	硬質	黒色粒・赤色粒: 微細・ 少	外面: 煤付着	HB②イ KL8 ^{10M9} II 1018SX 台3296	
20	急 須	口 縁	7.4 - -	7	0.4	口縁部: 僅かに立ち上がる	内外面: 淡橙褐色		軟質	雲母・黒色粒・砂粒 ピンホール: 多	轆轤痕: 明瞭 ナデ消し	HB① OP14 ¹⁶ II 台486
21			- - -	3.5	0.4	口縁部: 僅かに立ち上がる	内外面: 赤褐色	硬質	雲母(微細)・黒色粒: 少	肩部の張り出し弱い	HB① L14 I(V) 台553	
22		口 ~ 胴	10.9 - -	13.3	0.4	口縁部: 僅かに立ち上がる 胴部: 膨らむ	内面: 淡茶褐色 外面: 橙色	軟質	雲母・赤色粒: 微細・極 少	外面: ナデ消し	HB① OP14 ¹⁶ II 台486	
23		腰	最大胴径 18.0	4	0.4	腰部: 「く」字状に屈曲	内外面: 淡橙色		雲母・黒色粒: 微細・極 少	外面: 煤が付着	HB① I 台494	
24		底	- - -	6.3	0.3	底部: 膨らむ	内面: 橙色 外面: 橙褐色(煤付着)	軟質	雲母・砂粒: 微細・少	内面: 石灰付着	HB②ロ 2054SX 台3369	
25		耳	- - -	10.4	0.3~ 0.7	縦長の方形に成形	内外面: 橙色		若干の雲母・赤色粒・黒 色粒	轆轤痕・ナデ消し 焼成前に外面側から穿孔	HB① OP14 ¹⁶ II 台486	
26		蓋	8.0 - -	12.9	0.4	かかり有り 撮みは不明	内外面: 淡茶褐色	軟質	砂粒: 多 雲母: 少	還元焼成 上面: 煤付着	HB① KL12 II 086P 台386	
27		フライ パン状	口 縁	27.8 - -	33.2	0.5~ 1.2	口唇部: 扁平 浅い		内面: 淡茶褐色 外面: 橙色	雲母・黒色粒・白色粒: 微細・少	芯部: 淡灰色	HB① F10 ¹⁵ Q15 III 271SD 台491
28	不明	胴	- - -	15.2	0.5~ 0.6	胴部: 膨らむ	内外面: 赤褐色	硬質	雲母: 微細・少 黒色粒: 大きめ・少	外面: ナデ消し	HB① PQ10 II 240SZ 台490	

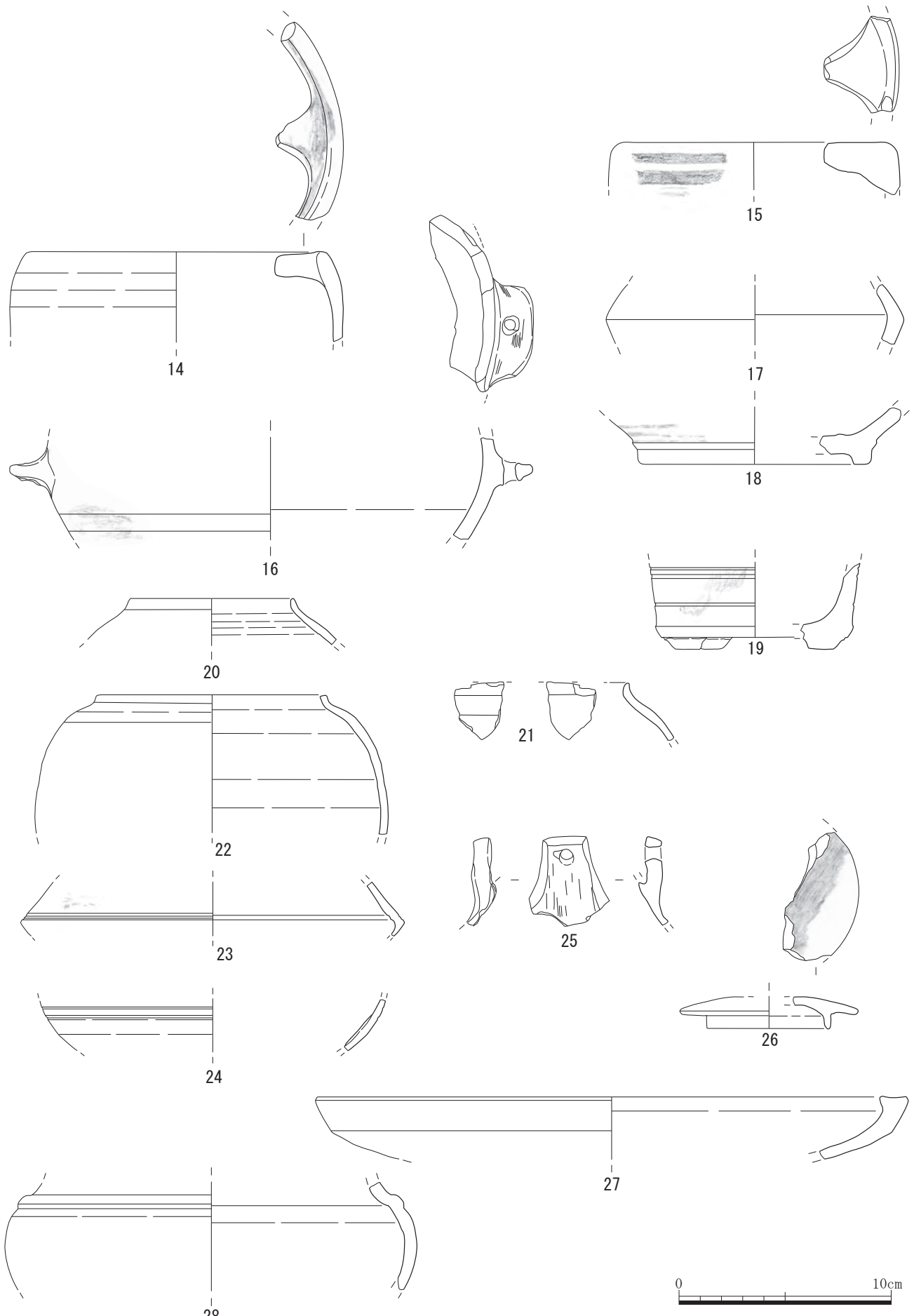
※分類は『壺屋古窯群Ⅰ』に準じる



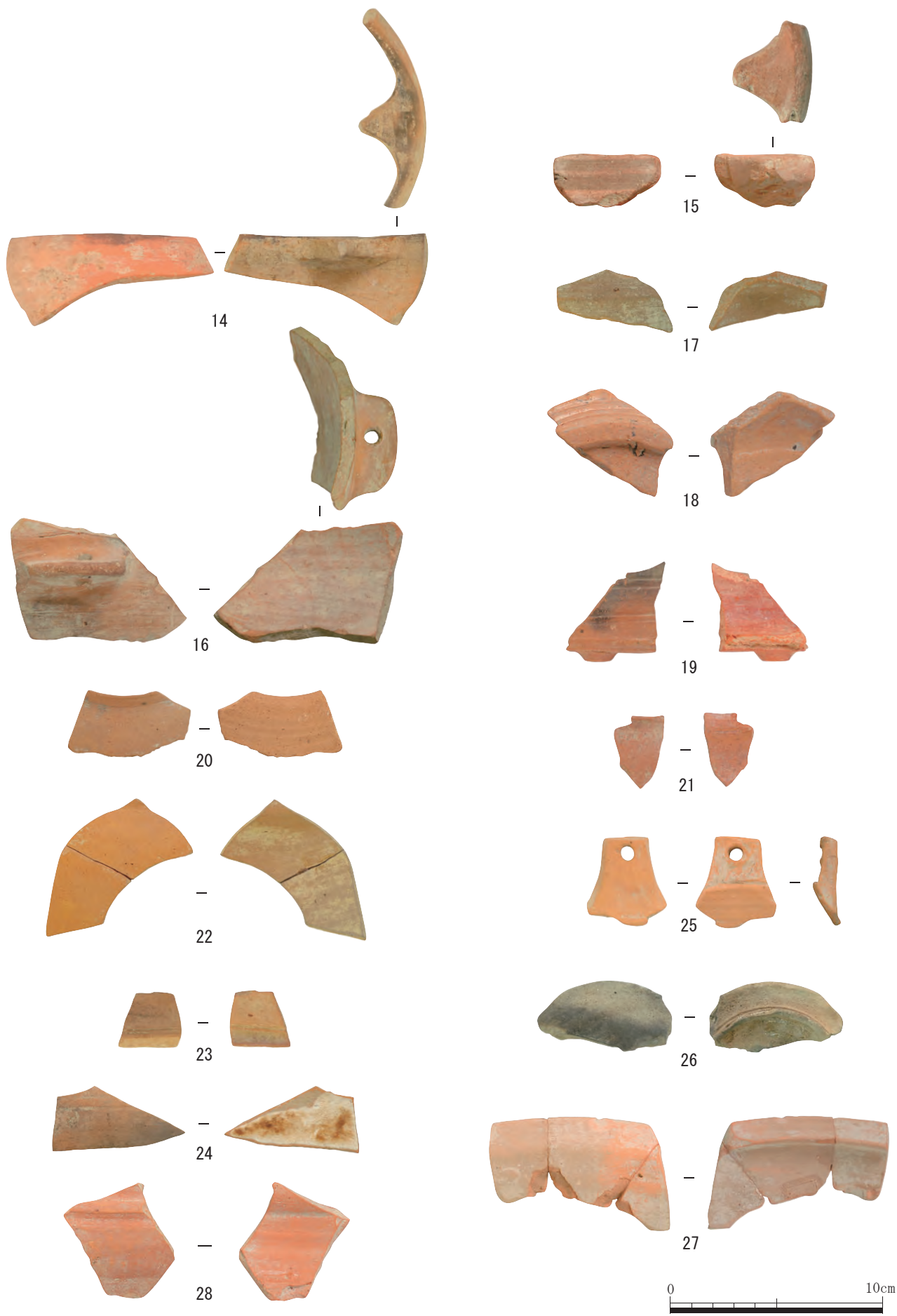
第158図 陶質土器 1



图版 126 陶質土器 1



第 159 図 陶質土器 2



圖版 127 陶質土器 2

(4) 本土産磁器・陶器 (近代)

明治時代以降大量生産を目的として製作された資料である。合計 281 点のうち小碗が最も多く 107 点、碗 89 点、皿類 38 点 (底部数と破片有りを最少個体数とすると碗 32 点、小碗 57 点、皿類 26 点)、他に小杯・火入れ・急須・瓶・鉢等が出土した (第79表)。施文技法は型紙刷り (27%)・銅版転写 (22%)・ゴム判 (15%)・クロム青磁・国民食器・色絵・吹き絵・盛り絵が確認でき、前三者で全体の約 64%を占めた。型紙刷りでは碗、銅版転写とゴム判では小碗が多かった (第77表)。また、クロム青磁・ゴム判・吹き絵で他技法との併用が確認できた。成形には轆轤 (動力含む) や鑄込が用いられ、全ての畳付けで釉薬が掻き落とされていた。生産地としては全体の約 70%を瀬戸・美濃が占め、30%が肥前系 (砥部産の 20%を含む) で、砥部産は型紙刷りの資料のみであった。出土地点としては HB①②地区ともⅡ層 (遺構含む) が主体でⅢ層からの出土は 2 点のみであった。以下、施文技法ごとに概略し、主な遺物については第78表に詳細と第160図～162図に示す。

A. 型紙刷り

破片数 77 点から最少個体数は碗類 23 点、皿類 3 点、火入れ 1 点であった。碗からは 5 パターンの型紙が確認でき、胴部では点描で菱形文窓を描いた中に模式化された梅花文を描く (図 5) が最も多く、次に地文に唐草 (図 4)、鶴丸や松竹梅の隙間を点描で埋める (図 3) 等が得られた。また、胴部は同じでも腰部の型紙文様に違いが見られるものもあり、蓮弁文 (図 4)、三角文 (図 5)、楡文 (図 6) が確認できた。なお三角文は模式化された蓮弁文とのことである (註¹⁾)。また、これまであまり報告されていない絵柄で、外面に青海波と花卉、内唇に輪宝文帯 (図 1) や四方襷と寿字 (図 2) は古い時期の可能性も考えられ、特に図 1 と同様の組み合わせが瀬戸の型紙摺絵資料に見られた (註²⁾)。なお、型紙刷り碗については全てに轆轤痕が確認できた。図 7 は蛇の目凹高台の皿である。型紙は同じでもハマ痕の有無や胎土の違い等から同種の皿が 3 枚確認できた。図 8 は肥前系 (瀬戸美濃以外) の小皿である。杜甫の『飲中八仙歌』より冒頭のくんだり型紙に使用されていた。

B. 銅版転写

60 点出土のうち最少個体数は小碗 15 点、皿類 15 点で多く、碗 3 点、急須 1 点であった。着色には酸化コバルト (青)・酸化クロム (緑)・酸化マンガン (黒)・酸化ウラニウム (黄)・正円子 (赤) 等の顔料が使用される。中には酸化クロムと他の顔料を重ねる二色刷りも見られた (図 9・10・12・13)。碗皿類とも花唐草・雪輪・鹿の子・分銅繫ぎ・渦文等の古典柄や文字・風景・動物など絵柄は様々で中には口銹を施すものもあった。小碗では腰折れの外反口縁 (図 9) と丸みを呈する直口口縁 (図 10～14) が確認できた。図 15・16 はいずれも酸化クロムで古典的な絵柄の皿類である。

C. ゴム判

42 点出土のうち最少個体数は小碗が 17 点と一番多く、小鉢 3 点・碗 1 点・皿 1 点等が確認できた。着色には銅版転写と同様の顔料が使用され、絵柄も同様で古典柄の他に菊花 (図 21) や梅花 (図 23) も多く見られた。また、ゴム判にゴム判を重ねる地に手描きや吹き絵・型紙刷り等との併用も確認できた。図 24 は外底面に統制番号の陽刻 (岐 451) があり、図 25 は皿で 1 点のみの出土であった。

D. クロム青磁

15 点出土のうち最少個体数は小碗が 7 点、その中でも飛び匏の小碗 (図 17) 5 点で、小皿 1 点、火入れ 1 点を確認できた。また、クロム青磁に銅版転写や印判・手描きを施す小碗や皿が確認できた。図 18 は鑄込み成形の火入れで窓絵四君子文と点刻文が見られる。

E. その他

細片のため今回は報告を控えたが、国民食器、色絵、盛り絵、戦後に製作されたプリント製品等

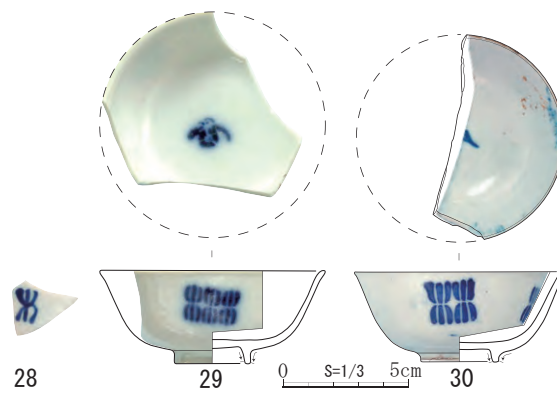
第78表 本土産磁器(近代) 観察一覽

(質量単位: cm, g)

第図 図版	番号	施文 技法	器種	部位	口縁部 形状	口径・器高・底径	重量	成形 技法	観察事項 (文様・見込み・口唇・内唇・高台等)	文様 色	生産 地	地区 小グリット 層位 遺構 台帳(取上) 番号						
第161 図・ 図版 129	1	型紙	碗	口	やや外反	10.8 - -	4.10	—	外面:青海波に草花、内唇:輪宝文帯	青	砥部	HB②ロ I 台3385						
	2				13.4 - -	8.30	外面:四方襷 内唇:四方襷に寿帯(18C半ば以降に流行)	HB① PQ8・9 II 358SK 台484										
	3				14.4 5.6 4.8	106.93	外面:点描に鶴・竹・梅 腰部:三角形(蓮弁文?) 見込み:松竹梅 内唇:松竹梅に点描帯	HB②イ I 台3082										
	4				13.0 5.7 4.3	109.80	外面:唐草 腰部:蓮弁文 見込み:松竹梅 内唇:菊花に点描帯 五足のハマ痕	HB②ロ Q8・9 II 2054SX 台3369										
	5				14.2 6.7 5.2	239.00	外面:点描菱形窓に梅 腰部:三角形(蓮弁文?) 見込み:松竹梅+枝 内唇:点描三角と梅花帯 五足のハマ痕	HB②イ J10K10・11 II 1005SZ 台3081										
	6				13.6 5.7 5.0	99.92	外面:花唐草 腰部:櫛文 見込み:昆虫文 内唇:梅花帯 五足のハマ痕	HB① PQ10 II 240SZ 台489										
	7				皿	直口	12.0 3.5 9.2	67.35	外面:菊唐草 内面:扇面に梅・桜、周囲に点描 見込み:松竹梅 +枝 蛇の目と周囲に籠目 五足のハマ痕、蛇の目凹高台(蛇の 目部分には轆轤痕が残る)			HB① I 台494						
	8						9.6 1.7 5.2	25.54	内面:芙蓉手にて漢詩(『飲中八仙歌』)と点描や七宝など			肥前系 HB②ロ QRS9・10 II 2002SZ 台3367						
第162 図・ 図版 130	9	銅版	小碗	口 底	外反	8.6 4.3 4.4	24.34	—	外面:福寿等の吉祥句	緑	瀬戸 美濃	HB① I 台494						
	10				7.3 4.3 3.7	44.30	外面:花草 口唇:コバルト吹き付け	緑・金	HB②ロ II 2002SZ 台3367									
	11				7.0 4.5 3.6	69.60	外面:ウサギに砥草	青	HB②ロ II 2002SZ 台3367									
	12				8.0 4.9 3.7	107.20	鑄込 外面:山水	青・緑	HB②ロ II 2002SZ 台3367									
	13				7.2 4.6 3.2	62.47	轆轤 外面:花唐草に鹿の子	緑・黄	HB②イ II 1005SZ 台3081									
	14				8.2 5.0 4.0	51.10	轆轤 外面:山水	—	HB②ロ II 2002SZ 台3367									
	15				11.4 2.3 6.6	45.69	型 外面:雪輪文に花、隙間は麻の葉で埋める	緑	肥前系 HB②イ II 1006SK 台3290									
	16				12.8 2.5 7.2	94.06	型 外面:鹿の子地に込銅繫ぎを重ね将棋の駒を浮かす	—	HB① I 台494									
	17				クロム 青磁	小碗	口~底	外反	7.0 3.9 3.6	32.03		—	飛び匏	—	—	HB②ロ II 2002SZ 台3367		
	18				火入	碗	胴~腰	—	胴径10.5	64.20		—	外面:窓絵四君子文と点刻文	—	—	HB②イ I 台3082		
	19				ゴム判	小碗	口 底	直口	11.0 6.2 4.0	87.03		鑄込	外面:楓と幾何学文	青	—	瀬戸 美濃	HB① PQ10 II 240SZ 台489	
	20								8.3 4.8 3.1	46.80			外面:鶴に濃み塗り				HB②ロ I 台3385	
	21								8.0 4.8 2.8	34.94			薄青の小菊を散らした上に濃青の菊花を重ねる				HB① II 台356	
	22								8.2 5.0 3.4	59.30			外面:波線と緋柄				HB②ロ Q8・9 II 2054SX 台3369	
	23								8.2 - -	31.20			不明 外面:梅花と梅木				赤・金	HB②ロ I 台3385
	24								8.4 4.8 3.0	89.60			鑄込 外面:砥草に梅花、雪輪文に山水 外底面に統制番号の陽刻(岐451)				青	HB②ロ II 2002SZ 台3367
25	皿	底	—	—	- - 6.4	13.44	—	外面:漢詩に灯籠を濃み塗り	—	—	HB②ロ II 2002SZ 台3367							
26	吹き絵	碗	口~底	直口	8.0 4.5 3.6	38.22	型	型造りによる菊花、口銚及び数カ所に半円(青)	—	—	HB① I 台494							
27	色絵	皿	口	直口	- - -	8.48	型	輪花皿 外面:色絵付による二条の圏線(剥落)	赤?	肥前系	HB① PQ10 II 240SZ 台489							
第160 図・ 図版 128	28	手描き	小碗	胴	—	- - -	1.86	—	外面:染色体文	青	砥部	HB②ロ II 2054SX 台3369						
	29	型紙	小碗	口 底	直口	8.9 3.7 3.0	31.66	轆轤	外面:染色体文 見込み:千鳥・口銚	青	—	HB②ロ II 2002SZ 台3367						
	30				外反	8.4 3.6 3.1	34.50	—	外面:染色体文 見込み:手描きで千鳥?・口銚			肥前系	HB②ロ II 2002SZ 台3367					

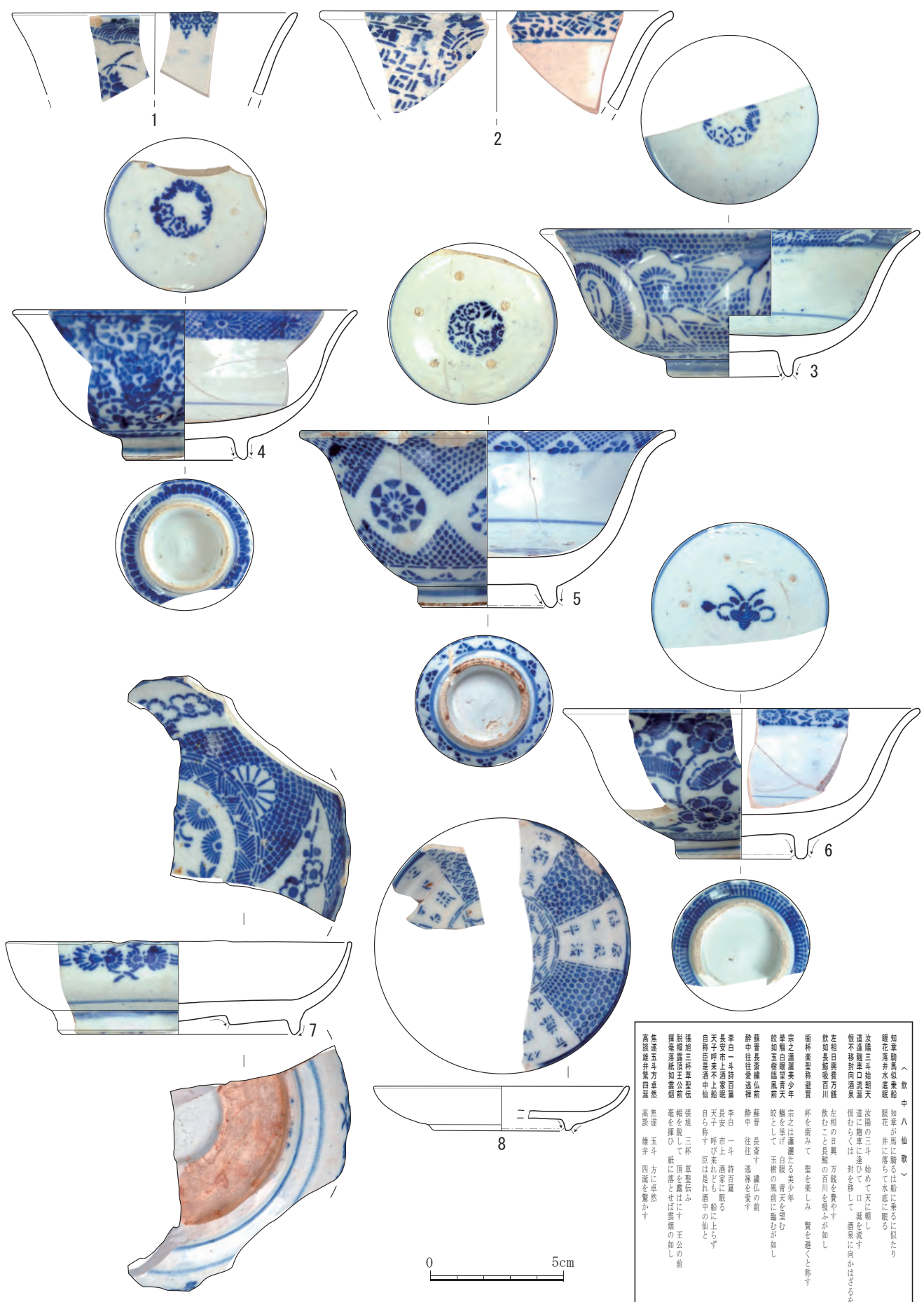
第79表 器種別出土量

技法	碗	大碗	小碗	蓋付碗	小杯	皿	大皿	中皿	小皿	火入	大鉢	小鉢	瓶	急須	蓋	不明	合計
型紙刷り	65	2	2			6	1	4	2	1							75
銅版転写	5		35			11		4	3					2			61
ゴム判	5		30			3						3				1	43
クロム青磁			12						2	1							15
国民食器	9		4														13
色絵			4	4	1	1						1				1	12
吹き絵			6	2							1						9
盛り絵			1											1	1		3
プリント			2	1	1												4
手描き			1														1
技法不明	5	2	10		7	2		1					1	10		7	45
器種合計	89	2	107	1	13	24	1	6	7	2	1	3	2	13	1	9	281



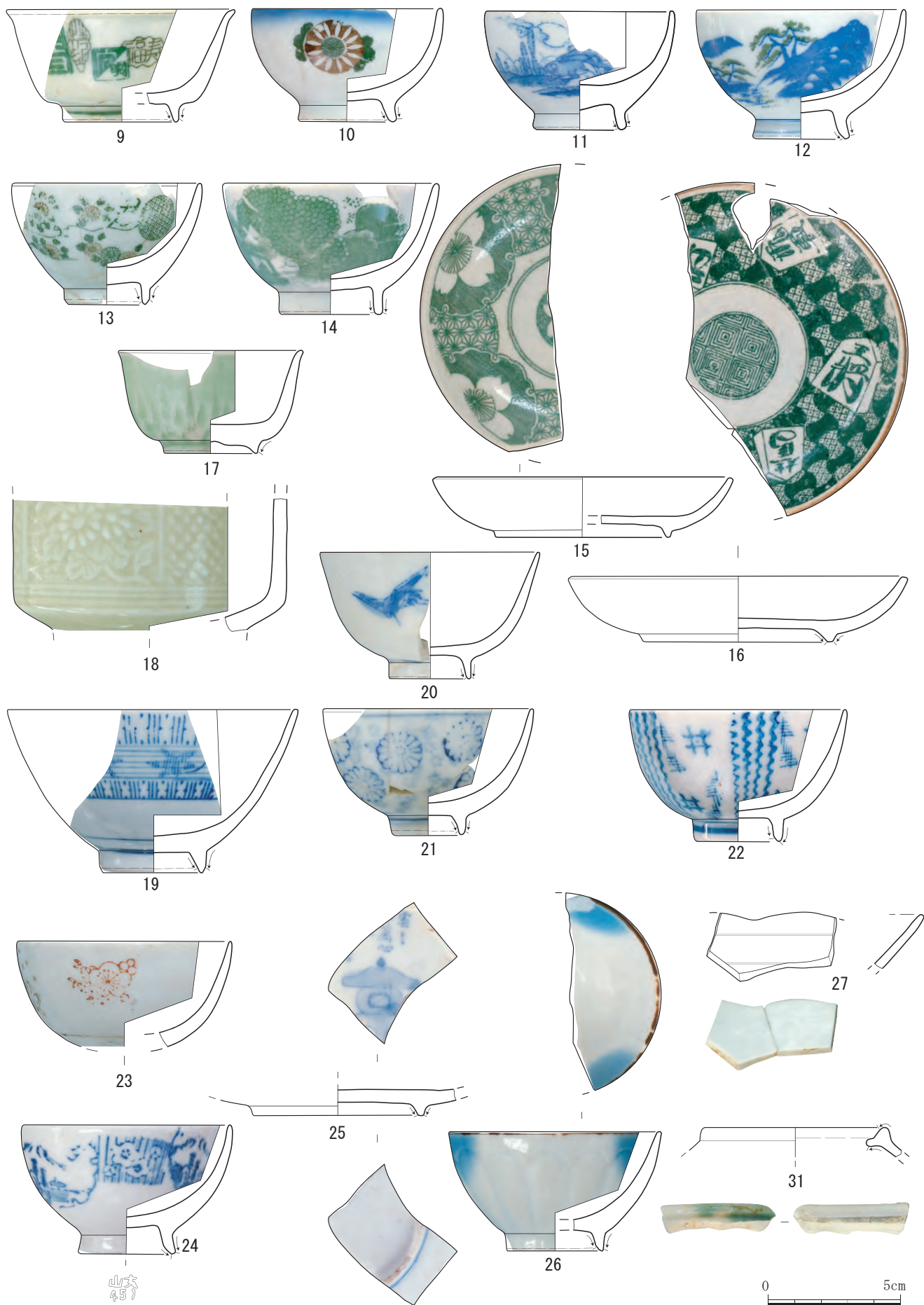
第160図・図版128 染色体文

第三章 5



（飲中八仙歌）
 知章騎馬似乘船。知章が馬に騎るは船に乗るに似たり
 眼花落井水底眠。眼花 井に落ちて水底に眠る
 汝輩三斗始朝天。汝輩の三斗 始めて天に朝し
 道逢逸客口流涎。道に逸客に逢ひて 口 涎を流す
 惟不持杯向酒壚。惟わらくは 杯を移して 酒壚に向かはざるを
 左担の日興 万能を貴やす
 飲如真飲蝦蟆川 飲むこと長樂の百川を飲ぶが如し
 街杯乘船遊京 杯を舐みて 聖を羨しみ 賢を避くと稱す
 宗之は瀟灑たる美少年 宗之は瀟灑たる美少年
 樂風白頭望青天 樂を享け 白頭 青天を望む
 飲知五湖臨風醉 飲として 五湖の風前に臨むが如し
 蘇晋長齋 蘇晋 長齋す 蘇晋の前
 醉中往往愛逢神 醉中 往往 逢神を受す
 李白一斗詩百篇 李白 一斗 詩百篇
 長安市上酒家眠 長安 市上 酒家に眠る
 天子呼來不上船 天子 呼び來れども 船に上らず
 自稱曰是酒中仙 自ら稱す 臣は是れ酒中の仙と
 張旭三杯草聖出 張旭 三杯 草聖出ふ
 醉後往往如雲龍 醉後 往往 如雲龍の如し
 王公前 王公の前
 羞將白髮拋 羞を擲ひ 髪を抛ひて 髪を棄るの如し
 高談雄辯 高談 雄辯
 五斗 方に卓然
 高談雄辯 高談 雄辯
 五斗 方に卓然
 高談雄辯 高談 雄辯
 五斗 方に卓然

第 161 図・図版 129 本土産磁器（近代）1



第 162 図・図版 130 本土産磁器（近代）2

(5) 円盤状製品

円盤状製品は29点得られた。HB①地区17点、HB②ロ地区8点、HB④イ地区で4点出土している。素材は青磁、白磁、染付、沖縄産無釉陶器、本土産陶器、本土産磁器、瓦を使用している。層序は第80表のとおりI層～IV層で、V層出土の資料は攪乱部分からの紛れ込みと考えられ、II層とした。遺構出土の資料が15点と半数を占めるが内容は溝、土抗、不明遺構、攪乱遺構で詳細な性格はわかっていない。遺構出土のうち358SKが6点と他の遺構より多い。状態の良い資料14点を図化、観察事項を第81表に示した。

第80表 円盤状製品出土量

地区	層位	遺構	青磁			白磁		染付		沖縄産無釉陶器		瓦		本土産陶器		本土産磁器			合計	
			碗	皿	不明	碗	—	碗	壺か選?	不明	丸瓦	皿	碗			小碗	不明			
			底部	底部	底部	胴部	底部	底部	胴部	胴部	—	底部	口縁部	胴部	底部	胴部	口縁部			
HB①	I								1	1									2	
	II(V)														1				1	
	II	62SK																	1	1
		240SZ					1	2	1											4
		305SD									1									1
358SK 359SK					1					2					1	1	1		6	
IV			1											1				1		
HB②	ロ	I						1											1	
		II																	1	
		II	2054SX												1				2	
		III																	1	
		IV		1															1	
HB④	イ	III		1															1	
		IV		1															3	
		合計		5		2		4		9		1		1		8			29	

素材

青磁、白磁、染付の中国産のほか、沖縄産無釉陶器、本土産陶器、本土産磁器のうつわものを用いるが、瓦を利用する場合もある。

使用部位（口縁部、胴部、底部）

青磁、染付は底部高台を使用するケースが多く、本土産磁器は胴部や底部を使用、胴部の場合は図柄のある部分を中心に打ち割りしたものが多い。口縁部を利用した資料が稀に確認され、既報告の伊礼原遺跡（国指定外）に1点、今回報告資料で2点出土した。又、素材の厚みも関係すると考えられ、本土産磁器等の薄手のうつわ物は打ち割りを細かく円形に仕上げ、瓦や沖縄産無釉陶器などの厚手素材は、打ち割りが荒く円形を意識するが雑な仕上がりとなる。

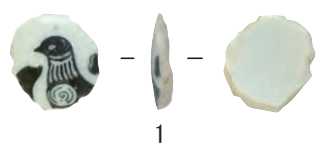
第81表 円盤状製品観察一覧

(法量単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	素材	器形	部位	完/破	計測値					観察事項	地区・グリッド・層位 遺構・台(取)番号
						最大長	最大幅	最大厚	底径	重量		
第163 図・ 図版 131	1	本土産磁器	—	口縁部	完形	3.1	3.1	0.7	—	6.6	鳥の図柄	HB② ロ.Q9.Ⅲ.台3340
	2	本土産磁器	碗	口縁部	完形	3.7	3.8	0.9	—	9.7	瀬戸・美濃系・型ぬき	HB① O.P10.11.Ⅱ.359SX.台340
	3	本土産磁器	碗	胴部	完形	1.5	1.6	0.6	—	1.5	型紙刷り	HB① L13.Ⅱ(V).台791
	4	本土産磁器	小碗	胴部	完形	2.4	2.4	0.8	—	5.2	ゴム判	HB① N17.Ⅱ.062SK.台359
	5	本土産磁器	碗	胴部	完形	2.8	3.2	0.8	—	6.9	図柄なし、素地、釉ともに近代資料	HB① P.Q8.9.Ⅱ.358SK.台484
	6	沖縄産無釉陶器	—	胴部	完形	3.8	3.6	1.8	—	28.1	大型、壺の胴部	HB② ロ.Ⅱ.2054SX.台3369
	7	瓦	—	丸瓦?	完形	5.2	5.1	1.9	—	44.7	丸瓦の縁の部分	HB② ロ.R12.Ⅲ.台3341
	8	沖縄産無釉陶器	—	胴部	完形	5.4	5.3	1.5	—	54.4	波状文と2条の沈線文	HB④ イ.K2.Ⅲ.台154
	9	本土産磁器	碗	底部	完形	3.3	3.4	1.5	3.0	13.6	時期は近代か?	HB① P.Q8.9.Ⅱ.358SK.台484
	10	本土産陶器	皿	底部	完形	6.1	6.3	1.6	5.2	50.6	白濁した藁灰釉、九州? 肥前系、17c後半	HB④ イ.L2.Ⅳ.台138
	11	染付	碗	底部	完形	6.6	6.4	1.7	5.8	56.9	外底、内底、高台に軸掛けなし 高台の特徴から染付と想定、 福建・広東系、16c~17c	HB② ロ.Ⅰ.台3327
	12	青磁	皿?	底部	完形	5.3	5.7	1.4	5.3	48.3	馬の印文、龍泉窯、15c頃	HB② ロ.S13.Ⅳ.取2029
	13	染付	碗	底部	完形	7.4	7.5	2.0	6.8	100.2	外底、内底、高台に軸掛け有り、 福建・広東系、17c~18c前期	HB① P.Q10.Ⅱ.240SZ.台490
	14	青磁	碗	底部	完形	7.2	7.5	1.8	6.8	92.3	見込み中心のみ軸あり、畳付けの幅歪む 高台中心ズレ有り、福建・広東系、明代	HB④ イ.K2.Ⅲ.台142



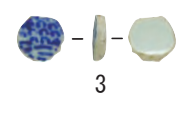
第 163 图 円盤状製品



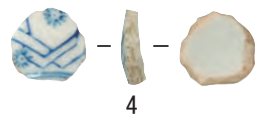
1



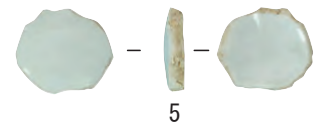
2



3



4



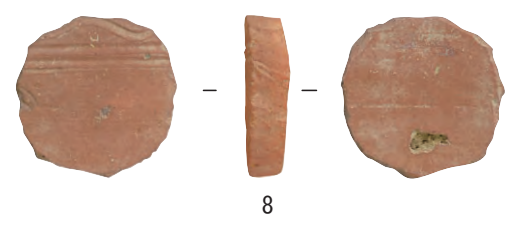
5



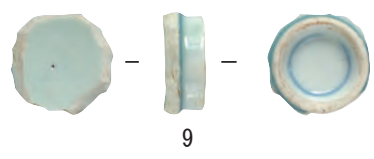
6



7



8



9



10



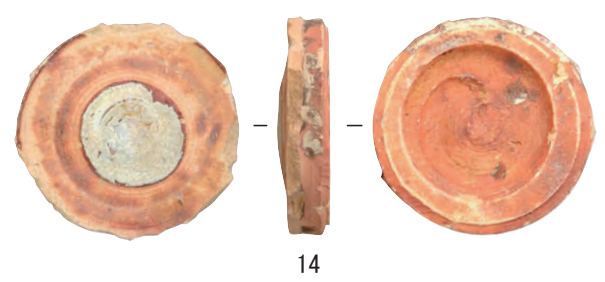
11



12



13



14



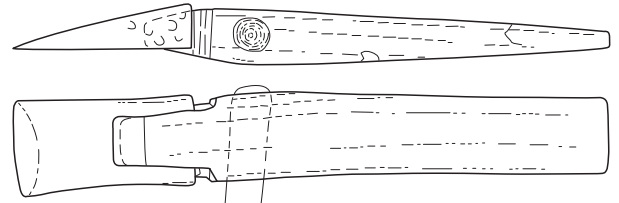
图版 131 円盤状製品

(6) 鉄製品

HB①地区で9点、HB②イ地区で2点、HB②ロ地区で8点、HB④イ地区で2点、HB④ロ地区で1点の計22点の出土でこれらは主に戦前戦後の攪乱遺構(SZ)で検出された。製品の種類は鉄斧1点、鉄釘1点、杭2点、板状5点、塊2点、管状1点、ヘルメット・空き缶などの近・現代遺物が11点である。以下、残存状況のよいものについては図化し、観察一覧を示した。

図1は鉄斧である。長さ12.7cm、刃幅6.5cm、基部幅7.0cm、厚さ3.0cm、重さ908gを測る。刃面の片側に幅1.8cmの剥離は使用痕と考えられ、縦斧が想定される。山崎(2010)の分類に準ずるとI類(ウーヌ型)の範疇に入る。

山崎によると「本品の用途は木材の伐採、加工に用いられるものである。基部の横断面は「コ」字状を呈するが、第164図に示したような使用が想定され、横断面の開放部は主に左側に位置したとされる。」



第164図 鉄斧装着例 (山崎 2010)

また、小堀原遺跡(2012)でも鉄斧(第166図2)が出土しており、山崎分類のⅢ類(イチ型)に相当する。戦前の遺構(旧ナルカー近く)からの出土で時期的にもほぼ同じである。山崎によると「本遺跡出土のウーヌ型が沖縄的で、石垣島カンドウ原遺跡(1983)でも出土例があり、そのほかに横斧としての使用例の記録ある(内原1987)」。HB①地区Ⅱ層の出土で、その北側には戦前の燃焼施設、1018SXが検出されている。

図2は鉄釘である。釘は頭部が角を呈するもので、全長13.7cmを測り長い方である。前述の鉄斧と共伴して出土している。

図3は直径0.5cmの鉄棒を頭部で楕円状に曲げたものである。形状からテント等を張り、固定する金具と考えられる。HB②イ地区1018SXで2点得られた。

図4は破損品で、形状から推定径3cmの管状(パイプ)状を呈すると思われる。両端は細くなる。使用のためか、若干湾曲する。HB②ロ地区Ⅱ層(戦前)の南側で出土した。

図5は8.2×2.0cmの方形を呈するもので、片側に径0.4cmの孔を有し、厚さ0.28cmと薄いことから札状の用途を有するものと思われる。HB②ロ地区2054SXの出土。

図版132-6は鉄製のヘルメットである。底は約3.0cmごとに亀裂が入り、頭部に叩きによる孔と「十」字状のヒビが認められる。大きさは縦27.8cm、横23.0cm、高さ15.8cm、833gを測るものである。形状から第二次大戦期に広く使われた米軍の「M1ヘルメット(外帽)」と思われる。HB①地区の表面採集である。

<引用文献>

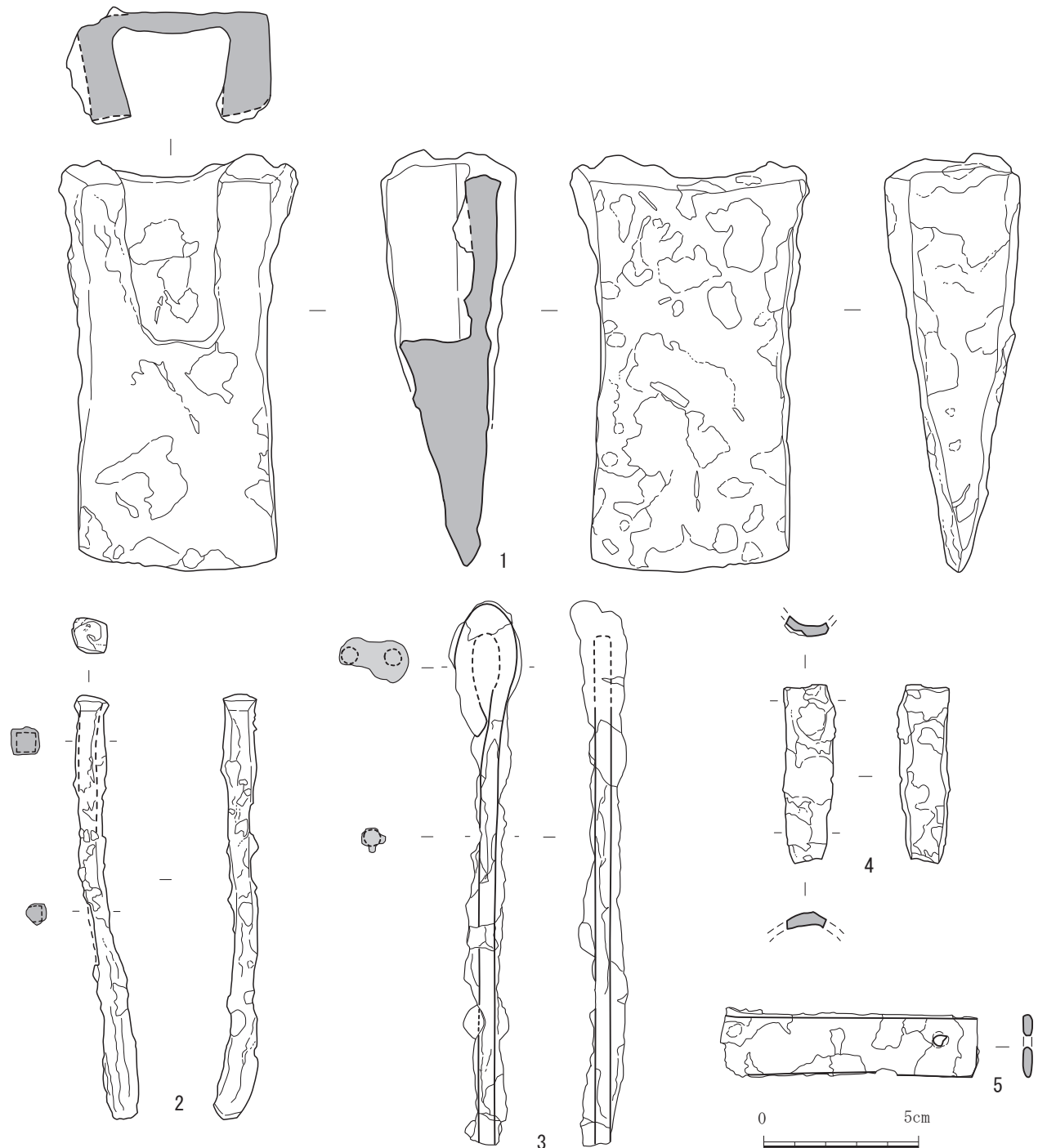
- 山崎真治 2010 「当博物館所蔵の斧について」『沖縄県立博物館・美術館, 博物館紀要』第3号
内原節子 1987 「西表島・網取村の刳り舟」『石垣市立八重山博物館紀要』第6号

第82表 鉄製品観察一覧

(法量単位:cm、g)

第図 図版	図 番号	器種	完・破	縦 横	厚さ	重量	観察	地区・グリッド・層位・遺構・台帳番号
第 165 図 ・ 図 版 132	1	鉄斧	完	12.7 6.5	3.0	908.0	上部に柄用の凹部刃こぼれ。1.8cm。	HB① II 台638
	2	鉄釘	完	13.7 1.1	0.9	36.0	頭部はほぼ正方形。 断面は方形。	HB① II 台637
	3	杭	完'	17.6 0.5	—	40.9	頭部は「U」状に曲がる。 テントを固定するもの。	HB②イ K・L10 II 1018SX-2 台3292
	4	管状	破損	5.7 1.7	0.4	16.4	両端は細くなる。 やや湾曲。	HB②ロ II 台3343
	5	板状	完'	8.2 2.0	0.3	9.3	方形。 側面はややゆがむ。	HB②ロ Q8.9 II 2054SX 台3369
	6	ヘルメット	完'	27.8 23.0	—	833.0	ヘルメットの縁は破損。 頭部ヒビ有(外帽)。MIヘルメット型	HB① 表採

凡例 (完'ほぼ完形)



第 165 図 鉄製品



図版 132 鉄製品

(7) 瓦・レンガ

瓦は丸瓦 42 点、平瓦 100 点、不明 74 点、の計 216 点の出土である。そのうちの 81.9%は HB①地区で得られた。(第166図) I・II層がほとんどであるが、6点がIII層の 271SD で得られている。

HB①地区 II層では主に遺構出土で 83SZ (9点)、358SK (9点)、229SZ (8点)、240SZ (8点)、305SD (5点)、62SK、81SK、100SZ、359SK ではそれぞれ 1点得られた。

HB②イ地区では9点得られているが、主に I・II層の出土である。不明2点がIII層の出土であるが、本地区はV層(貝塚時代後期)の遺物が主体であることから、I・II層の紛れ込みと思われる。また、II層の遺構 1003SZ、1004SZ、1016SZ、1006SK など出土している。

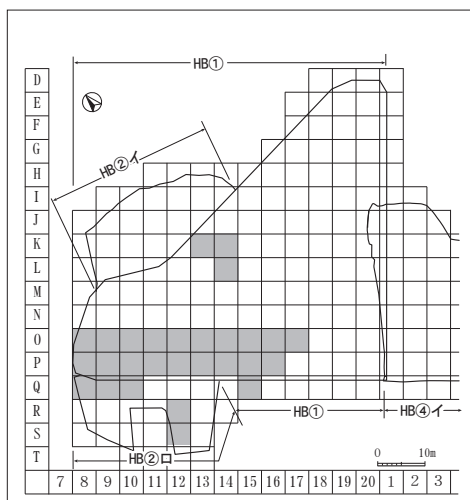
HB②ロ地区では29点得られ、II層の遺構の出土が多く、その中でも 2002SZ で17点、2004SX で6点と特に多い。本遺構は沖縄産施釉・無釉陶器や本土産磁器(近代)も多く出土することから、戦前集落において廃棄されたものと思われる。

第167図に残りの良い平瓦(図1・2)と丸瓦(図3)を掲載した。いずれも HB① II層の出土である。

図1は平瓦の上左角部分で、上端のためか、厚み(2.0cm)がある。上端のヘラ調整の幅が4.0cm 確認され、裏面は桶を繋ぐ連結紐が4ヶ所あり、その間隔は細かい。

図2は平瓦の下左角部分である。前者に比べて器厚は薄く、表面の調整は深くナデ調整し波状を呈する。残存部分から桶の大きさを復元すると直径27.4cmほどである。図3は丸瓦で瓦を葺くための漆喰(セメント?)を2.5cmで縁取るもので、その厚さは約1.0cmほどである。器面調整をみると表面が幅2.0~2.5cmのヘラで縦位、裏面は模骨の布の縫合部分と下位は覆うための皺が顕著に見られる。左右の縁は模骨で溝を作り、半裁している。模骨は瓦から推定すると直径10.4cmを測る。

レンガは破片が HB①地区の I・II層でそれぞれ1点の出土である。瓦の出土状況から戦前・戦後の遺物と判断される。



第166図 瓦出土平面分布

第83表 瓦・レンガ出土量

地区	層位	分類			丸瓦			平瓦			不明			合計	地区別計	レンガ
		橙	赤	-	橙	赤	-	橙	赤	-	橙	赤	-			
HB①	I	23	1	6	36		2	29					97	177	1	
	II	2			15	1	2	10	1				31			
	II(遺構)	4			19			19	1				43			
	III(遺構)	1			3		1	1					6			
HB②イ	I				1	1	1						3	9		
	II(遺構)							4					4			
	III									2			2			
HB②ロ	I	2	1										3	29		
	II(遺構)	1	1		2	3	9		7				23			
	III								3				3			
HB④イ	I											1	1	1		
合計		33	3	6	76	5	19	59	14	1			216		2	
分類別計		42			100			74						216	2	

遺構 HB①II:83.100.229.240(SZ)62.81.358.359(SK)305(SD)

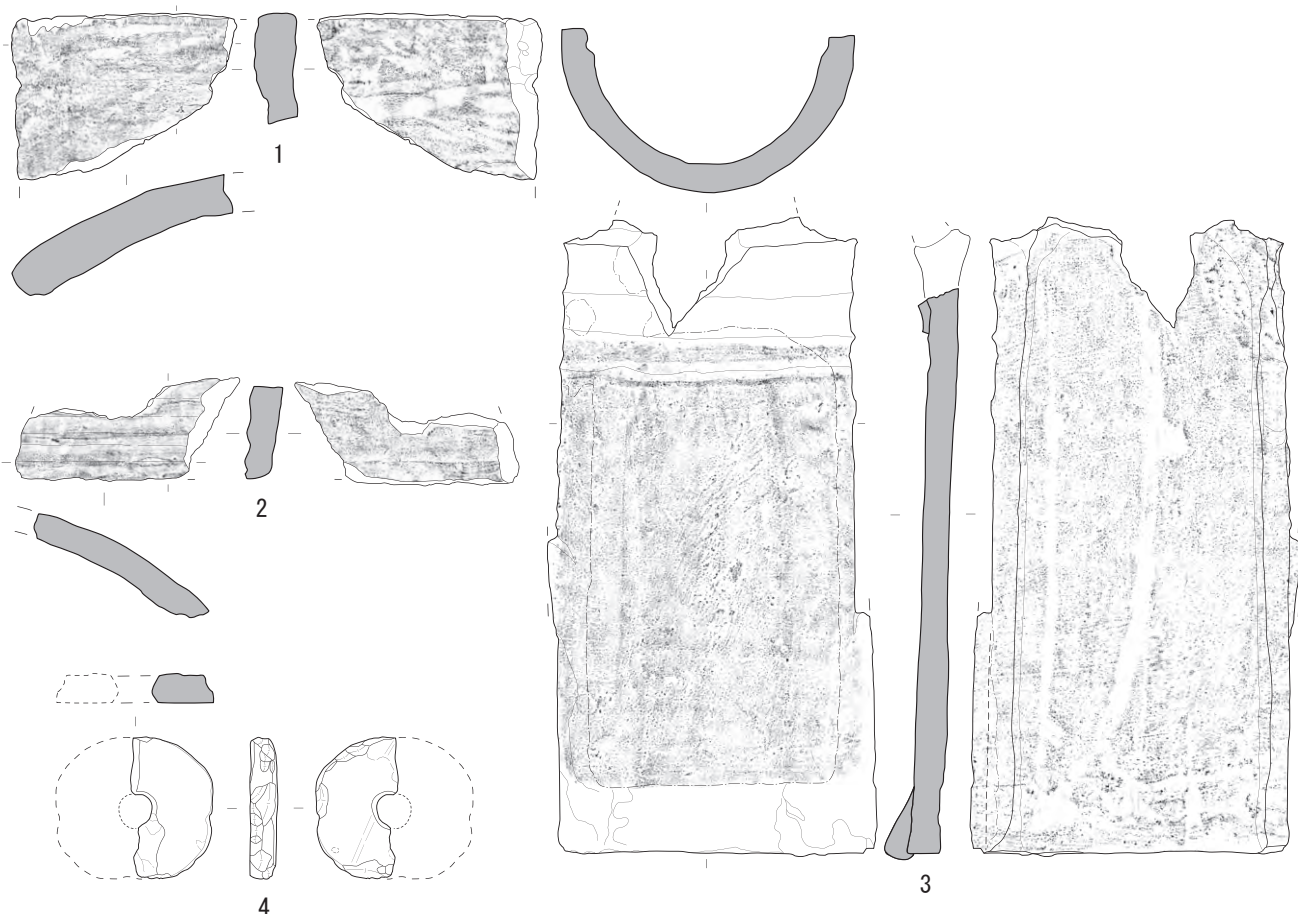
HB①III:271(SD)

HB②イII:1003.1004.1016(SZ)1006(SK)

HB②ロII:2002(SZ)2004(SX)

(8) 瓦二次製品

瓦を加工した二次製品が1点得られた。土製品とは異なる用途である。扁平で形状は円形を呈し、周縁は擦りで角を落としている。中央に孔が穿たれ貫通しているが、破損のため残存部は半欠している。孔は二次的に後から開けられたもので、独楽などの遊具として使用していた。計測値は最大長6.2cm、最大幅3.6cm、最大厚1.2cm、孔の大きさは縦1.5cm、横不明、重量28.1gを測る。出土地はHB①地区0・P8~14I層。



第167图·图版133 瓦·瓦二次製品

(9) 石製容器

図版134は民俗資料の石製容器である。石の周囲を適度な大きさに角を削り落とし、中央を彫り抜いている。外縁から内側に20cm程の幅をもたせ、平坦に仕上げた箇所もみられる。側面は口の部分から下へ15cm～17cm程度、縁のようなつくりを呈す。内側は鑿状の道具で削られた痕が残る。削りは粗く、内底部へいくにつれ徐々に狭くなり体積は大きさに比べ小さい。図版の資料は据わりが悪く片側に傾き、口の部分は水平ではない。法量は縦70cm×横64cm、高さ64cm、内径は縦31cm×横30cm、深さ36cm、砂質石灰岩製 出土地HB②イ地区 表採。

民俗事例での用途では屋敷内の勝手口などに置き、水を溜め手洗い、イモ洗いの容器として利用されていた。呼び方は地域によって多少異なり、容器として使う場合は、トウージ、トーニ、ドーニ、ンムアレートニなどと呼ばれる。又、漆喰を捏ねる際には漆喰と藁を入れて突くことから、つきうす（ムチチチャーウーシ、ウストウージ）とも呼ばれている。その語源はチョーズバチ（手水鉢）→チュージ→トウージと転化したのではないかとされている。

<参考文献>

上江洲均著 1982 『沖縄の暮らしと民具』 考古民俗叢書<19> 慶友社

上江洲均・神崎宣武・工藤員功 1983年 『琉球諸島の民具』 民俗文化双書2 未来社



俯瞰



右側面



上面



左側面

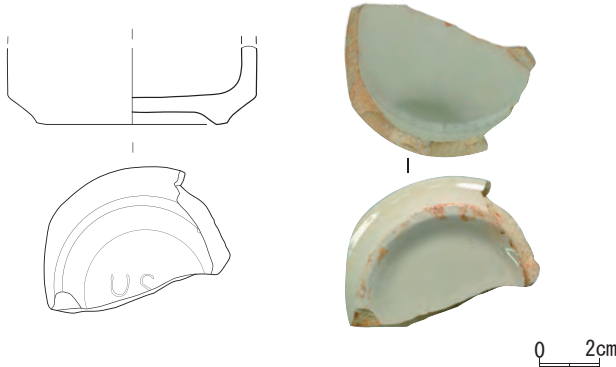
図版 134 石製容器

(10) 現代遺物

陶磁器類、ガラス製品、鉄製品、銅製品等、戦後に製作された物がⅠ層及びⅡ層の攪乱や性格不明土坑より出土した。鉄製品、銅製品については前節で記載済みのため、ここでは陶器、ガラス製品、その他の遺物について報告する(第84表)。当概地は米軍上陸時から平成15年3月に返還されるまで米軍基地として長期間使用されてきた。特徴的な遺物を図版136にて示す。

A. 外国産陶器

底部に「USA」の印刻があるので、米国産と考えられる陶器製のカップが出土している。底径6.2cm。



第168図・図版135 現代遺物

第84表 現代遺物出土量

地区層	遺構	種類		ガラス製品			サン グラス	PC タイル	アス ファルト	合計
		陶器 カップ	磁器 罍子	瓶	板状	ビー玉				
HB ①	I	1	1	1				1	2	6
	II	358SK		2	4	1				7
		083SZ	1							1
		274SZ		1						1
	合計	1	2	4	4	1		1	2	15
HB ②	I		1	2			1	1		5
	II	1018SX			1					1
	イ	合計	1	2	1		1	1		6
HB ② ロ	I			4						4
	II	2004SX		2						2
		2054SX		2	1					1
		2002SZ		1				1		2
	IV	合計						1		1
	合計			9	1			2		12
HB ④ イ	I			1						1
	合計			1						1
総合計		1	3	16	6	1	1	4	2	34

B. ガラス製品

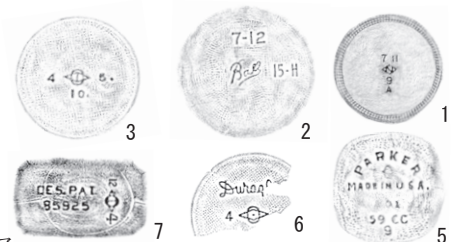
飲料用・クリーム用・インク用・薬品用の瓶類、薄いガラス板(白色・透明)、ビー玉の23点が出土した。コカ・コーラの瓶は3本出土しており、いずれも日本コカ・コーラ社が日本用として輸入したものであった。当時国内販売は許可されておらず、ほとんどが米軍関係者用であったそうである^註。ビール瓶も外国産ビールのみであったが、日本製の可能性のある酒瓶の破片も見られた。図版136-7の薬品瓶は伊礼原A遺跡(2014)に同種が出土しているが、一番違いの番号が付いている。また、沖縄市の森根竹之花原古墓群(2007)からも同種の薬品瓶の出土が報告されている。

<註>さわやか25年 沖縄コカ・コーラボトリング株式会社 社史 1996
<http://www.cosmos.ne.jp/~norioa/topmenu.htm> ビンの博物館

第85表 ガラス瓶観察一覧

(法量単位:cm, g)

図版 番号	用途	完 破	色	底 形	重量	高さ	幅	口	底	観察事項	地区 小グロット 層位 遺構 台帳番号	
図版 136	1	飲料	完	透明	丸	395.0	22.0	5.8	2.7	5.6	側面:うっすらとPEPSHCOLA 1940年以降使用されたロゴ・マーク	HB②イ I 台3082
	2	飲料	完	透明	丸	216.5	17.0	7.0	2.4	6.5	側面:NO DEPOSIT NO RETURN	HB②イ I 台3082
	3	飲料	完	茶	丸	208.0	15.2	6.9	2.6	6.8	側面:NOT TO BE REFILLED	HB②ロ I 台3370
	4	飲料	完	透明	丸	395.0	19.8	5.8	2.6	6.0	側面:Coca-Cola TRADE-MARK TRADE-MARKに「-」があるのは1944年製	HB②ロ I 台3370
	5	インク	完	透明	扁丸 方形	99.0	5.5	5.4	2.5	5.8	底面:PARKER MADE IN USA 39CC 9	HB②ロ I 台3370
	6	飲料	破片	茶	丸	22.0	-	-	-	-	底面:Duras □...	HB②ロ S12-13 I 2004SX 台3161
	7	薬品	完	透明	楕円	78.8	9.6	4.6	1.6	2.8	底面:OES PAT 85925 12 4	HB④イ O7 I 台489



C. その他

PCタイルやサングラスが出土した。図版136-8は薄茶のプラスチックレンズを幅広の鉄製枠で囲み、耳にかかる部分は細くなっている。図版136 ガラス製品・他

第1節 平安山原B遺跡から採集された脊椎動物遺体

樋泉岳二（早稲田大学）

沖縄県北谷町の海岸平野に立地する平安山原B遺跡では、2008～2009・2011年度に実施された発掘調査において、沖縄貝塚時代後期から近現代にいたる各時代の層準から多数の脊椎動物遺体（魚骨・獣骨など）が出土した。ここではその同定結果を記載し、その特徴について考察する。

1. 資料と分析方法

調査区は2008年度調査地区（HB①地区）、2009年度調査地区（HB②イ地区・ロ地区）、2011年度調査地区（HB④イ地区・ロ地区）に分かれる。骨類を出土した層準・年代は、下位からVI層（貝塚時代後期前半以前）、V層（貝塚時代後期前半：阿波連浦下層式～大当原式期）、IV層（グスク時代）、III層（グスク時代～近世）、II層（戦前）、I層（戦後）である。V層出土資料の年代については、今回は貝塚時代後期前半として一括して扱ったが、出土土器には地区により年代差がある傾向（陸側のHB①～HB②イ地区では阿波連浦下層式～浜屋原式、海側のHB④地区では大当原式が多い）が確認されていることから、骨類に関してもこれに対応したある程度の年代差がある可能性が高い。III層の出土遺物は近世（17世紀～19世紀）が主体だが、HB①・HB②ロ・HB④イの各地区を中心に下部からグスク時代（11～16世紀）の遺物も出土している。ただし、これらを層位的に明確に区分できなかつたことから、骨類についてはIII層全体を一括してグスク時代～近世としてとらえたが、その年代は近世を主体とし、グスク時代のものがある程度混じっていると推定される。

分析資料はすべて発掘現場において手で拾い上げられたもの（ピックアップ資料）である。分析方法は、基本的に樋泉（2007）の方法を踏襲した。なお哺乳類の四肢骨については、骨幹の全周を残さない破片は原則として同定対象から除外した。遺体の予備的な同定は島袋春美氏の指導のもとに整理作業員諸氏が行い、筆者（樋泉）が同定結果の確認と集計・図表作成を行った。

2. 分析結果

(1) 脊椎動物遺体の出土数

同定結果を第86～94表に、同定標本数（NISP）と最小個体数（MNI）による組成を第95表に示した。同定対象となった資料の総数（NISP）は1309点で（第95表）、このうちV層が1045点と大多数を占めており、とくにHB②イ地区が720点、HB①地区が303点と、遺跡北側の丘陵に隣接した範囲に集中している。V層以外ではII層が120点とやや多いが、その他はI層31点、III層37点、IV層28点、VI層20点と、いずれも少数である。

遺体群の内容はV層（貝塚時代後期前半）とIV層以上（グスク時代～戦後）で大きく異なるため、以下ではこれらに分けて、遺体群の詳細を記載する。

(2) V層（貝塚時代後期前半）

脊椎動物遺体の概要（第95表、第169・170図）

脊椎動物遺体全体の組成はイノシシと魚類が主体で、NISP比ではイノシシが圧倒的に多いが、MNI比では魚類とイノシシがともに約4割とほぼ同率である。資料の大半を占めるHB①地区とHB②イ地区の組成をNISP比で比較すると、いずれも上記の基本的傾向は同様だが、HB①地区ではイノシシの比率が特に高い。イノシシ・魚類以外ではオオコウモリ科（およびその可能性が高い

資料)も普通である。その他にリクガメ類、ウミガメ類、鳥類、ネズミ科、イヌ、イルカ・クジラ類も確認されているが、いずれも少数である。

魚類 (第 87 表・第 171 図)

硬骨魚綱 (真骨類) 16 分類群が確認された (第 86 表)。フェフキダイ科が最も多く、ブダイ科、ハリセンボン科、クロダイ属も普通であり、MNI ではベラ科、モンガラカワハギ科、NISP ではアジ科がこれに次ぐ。その他にハタ科、フェダイ科など多くの種類が確認されているが、いずれも少数である。フェフキダイ科の大半はフェフキダイ属で、前上顎骨はすべてハマフェフキに類するタイプ (ハマフェフキ型) であった。ブダイ科の咽頭骨・前上顎骨・歯骨はイロブダイ属が 6 点、アオブダイ属が 3 点で、前者が優勢である。ベラ科の咽頭骨はタキベラ型、ベラ科 A、ベラ科 B が各 1 点確認された。アジ科 4 点はいずれも大型の種である。

爬虫類・鳥類 (第 88 表)

爬虫類ではウミガメ類 8 点、リクガメ類 7 点が確認された。鳥類は小型種の尺骨の骨幹が 1 点確認されたが、詳細な分類群を特定することは困難であった。

陸生哺乳類

イノシシが圧倒的に多く、オオコウモリ科 (およびその可能性が高い資料) も普通である (第 95 表)。その他にネズミ科、イヌがわずかに確認されている。

イノシシ (第 90~92 表) : 多量の遺体が出土しており、NISP は 790 点、MNI は 33 個体に達する。現生リュウキュウイノシシに類する小型のイノシシである。詳細な形質学的検討を行っていないが、おそらく野生のイノシシとみて問題ないと思われる。顎骨と四肢骨の比率を MNI でみると、顎骨 33 個体、四肢骨 23 個体で、顎骨 (とくに下顎骨) が明らかに多い。四肢骨各部位の組成については、部位によってある程度の多寡はあるが、著しい偏りは認められないようである。顎骨によって年齢構成をみると、乳歯を伴う個体 (約 1.5 歳以下) と永久歯への交換を完了した個体の MNI 比は 7 : 26 で、M3 が萌出した個体 (約 3 歳以上) も多く、成獣が主体である。下顎犬歯にもとづく性比 (雄 : 雌) を MNI 比でみると、下顎骨では 5 : 7 で雌が優勢だが、下顎犬歯数 (顎骨に植立しているもの + 遊離歯) では 16 : 9 で雄が優勢となる。解体痕については、HB①地区出土の寛骨にカットマークが確認されたほか、スパイラル・フラクチャーが HB①地区出土の上腕骨 13 点、橈骨 8 点、大腿骨 4 点、脛骨 3 点、HB②イ地区出土の上腕骨 21 点、橈骨・尺骨各 4 点、大腿骨 7 点、脛骨 16 点に確認されている。

オオコウモリ科 (第 89 表) : NISP は 21 点、MNI は 5 個体で、イノシシに次いで多くの資料が得られている。確認された部位は、下顎骨・上腕骨・橈骨が各 6 点、遊離臼歯・鎖骨・指骨が各 1 点で、頭部と前肢に偏る。四肢骨の骨端は鎖骨と指骨を除きすべて欠損しており、人為的に切断された可能性が強い。その他に、形態と分布状況からみておそらくオオコウモリ科と思われる四肢骨の骨幹が 74 点と多数検出されているが、骨幹部のみの小破片で確定困難であったため、これらについては「オオコウモリ科?」とした。

その他の陸生哺乳類 (第 94 表) : イヌが 2 点、ネズミ科が 1 点確認されている。ネズミ科は自然遺骸の可能性が高い。その他にウマが 1 点採集されているが、Ⅲ層からの混入である可能性が高い。

海生哺乳類 (第 94 表)

イルカ類 2 点、クジラ類 1 点の確認されたのみである。今回の調査ではジュゴンの確認されなかったが、2002~2003 年度に行われた試掘調査 (東門ほか 2008) の C-17 区Ⅳ層 (黄白色粗砂層・弥生時代相当期) からジュゴンの頭骨が出土している。今回調査のグリッド・層序との正確な対応

関係を確認していないが、出土位置はおそらく L16～17 グリッド付近の V 層に相当すると思われる。

骨類の分布傾向

V 層の資料の大半は HB①地区と HB②イ地区から出土している。主要種であるイノシシ、魚類、オオコウモリ科（オオコウモリ科？を含む）について HB①地区と HB②イ地区の NISP 比をみると、イノシシ 269 (35%) : 506 (65%)、魚類 13 (11%) : 101 (89%)、オオコウモリ科 11 (12%) : 84 (88%) で、全体的に HB②イ地区に偏在しており、魚類とオオコウモリ科はその傾向が強い。

出土資料のより詳細な分布傾向をグリッド別の NISP によってみると、その多くが HB②イ地区の J～L10・K11・J～K12 グリッド付近に集中しているほか、HB①地区の L14～15 グリッド付近にもまとまりがある。この範囲は出土貝類の特徴に基づく区分けの A 区（以下「貝 A 区」・（第 172 図））に相当しており、出土土器は阿波連浦下層～浜屋原式期が主体である。

貝 A 区におけるグリッド別の組成をみると、イノシシは全域で主体的であり、部位別にみても頭骨とその他の部位がともに多産しており、分布傾向の違いは今のところ確認できない。ただし頭骨とその他の部位の NISP 比をみると、大半のグリッドでは頭骨以外の部位が多いが、HB①地区の L15 グリッドだけは頭骨 32 点 (MNI 5 個体)、その他 25 点 (同 3 個体) で頭骨が多く、他のグリッドとは傾向が異なる可能性がある。魚類は HB②イ地区 J～L10 グリッド付近、オオコウモリ科は同じく HB②イ地区の K～L10 グリッド付近にまとまる傾向があり、イノシシに比べて分布の偏在傾向が強い。さらに HB①地区では、魚類にブダイ科がみられない点、オオコウモリ科は顎骨がみられず L12～14 グリッドでそれと思しき四肢骨の骨幹のみが検出されている点など、HB②イ地区とはやや傾向を異としているようにも思われる。

貝 A 区以外からの出土数はごく少ないが、貝 B 区に相当する HB①地区の L18～19 グリッドではイノシシの椎骨・四肢骨 15 点がまとまって出土しており、頭骨がみられないことから貝 A 区とは様相が異なっている可能性がある。この点については、貝 B 区の出土土器は大当原式が多いとのことであり、年代的な違いの可能性も考えられる。

なお試掘調査時に検出されたジュゴン頭骨の出土位置は今回調査の貝 A 区と貝 B 区の間部付近に相当しており、上記の骨類の集中範囲からややはずれていること、また今回調査ではジュゴンの遺体がまったく確認されていないことから、他の骨類とは別に頭骨のみが単独で存在していたと考えられ、意図的に安置または埋納された可能性も考えられる。

(3) IV層～I層(グスク時代～戦後)

IV層以上では魚類が激減し、代わってIV層でウシ・ウマ、さらにIII層でヤギが出現する。イノシシ類にもブタと思われるものが増加して、V層とは組成が大きく変化する。

NISP 比によってIV層～I層の組成の層位的変化をみると、IV層・III層・I層ではイノシシ類が4割前後、ウシが約2～3割、ウマが約1～3割で、これら3種がともに高率を示す。これに対しII層ではイノシシ類が87%を占め、MNI比でも（第170図）イノシシ類が5個体、他種は各1個体でイノシシ類が圧倒的に多く、特異な様相である。

魚類・爬虫類・鳥類（第87・88表）

魚類はIII層でフエフキダイ属、II層でクロダイ属が各1点、爬虫類はII層でリクガメ類1点、鳥類はII層とIV層で詳細な同定困難な四肢骨の骨幹破片が各1点採集されているのみである。

イノシシ類（イノシシまたはブタ）（第90～92表）

形質：イノシシ類には形態的に野生種と変わらないものから、下顎骨・四肢骨の肥大・短縮など明確な家畜化（ブタ化）の特徴を示すものまで、多様な形質をもつものが混在している。現時点で

は詳細な形質学的検討が未了であるため、今回は「イノシシ類（イノシシまたはブタ）」として一括して取り扱ったが、Ⅱ層～Ⅰ層の資料は年代的にみてブタの可能性が高い。とくにⅡ層では、358SK、2002SZ、240SZ 出土資料は明らかにブタであり、HB②地区「南側」出土資料にもブタと判断される資料が多数含まれている。これに対してⅢ層・Ⅳ層では、ブタの可能性のある資料もみられるが、判断の難しいものが多い。

年齢構成：顎骨が少ないため正確な年齢構成の推定は困難だが、Ⅱ層では若齢個体が目立つ。とくに後述の 358SK 出土資料はすべて若い幼獣であった。また 2002SZ の下顎骨 3 点中 2 点は乳臼歯を残しており 1.5 歳以下の幼獣である。その他にも、橈骨・脛骨・腓骨・中手／中足骨の遠位端のほとんどは未癒合であり、全体的に未成獣が卓越する傾向が明らかである。Ⅱ層以外については資料数が少ないため傾向は明らかでない。

性比：犬歯の出土数による性比は、Ⅱ層では雄 4 点のみだが、すべて遊離歯のため実際の性比を正しく示しているかは明確でない。他の層では資料が少なく傾向は不明である。

部位組成：頭骨と四肢骨の MNI 比をみると、Ⅲ層 1 : 3、Ⅱ層 3 : 5、Ⅰ層 1 : 2 で、いずれも四肢骨が多い。

解体痕：Ⅱ層出土資料には解体痕が普通にみられ、1SK 出土の尺骨および HB②ロ地区南側出土の踵骨にカットマーク、358SK 出土の上腕骨・大腿骨と脛骨 3 点、81SK 出土の下顎骨・橈骨、1018SX 出土の上腕骨・橈骨、1SK 出土の上腕骨にスパイラル・フラクチャーが確認されている。他の層では、Ⅳ層 HB④イ地区出土の上腕骨、Ⅲ層 343SK 出土の上腕骨と HB①地区出土の上腕骨にスパイラル・フラクチャー、Ⅰ層 HB①地区出土の上腕骨にカットマーク、Ⅰ層 HB②ロ地区出土の上腕骨にスパイラル・フラクチャーが確認された。

358SK（Ⅱ層）におけるブタ遺体の産状：Ⅱ層で検出されたゴミ投棄穴と推定される土坑 358SK からブタと判断される資料 40 点がまとまって検出されている。すべて幼獣である。部位別の内訳は椎骨（環椎～仙椎）7 点、肩甲骨 4 点、上腕骨 2 点、橈骨 1 点、尺骨 2 点、寛骨 5 点、大腿骨 7 点、脛骨 5 点、腓骨 3 点、踵骨 4 点で、椎骨と手根・足根部より近位の四肢骨のみであり、頭骨と指骨（中手・中足骨より遠位）を欠く。MNI は 3 個体（大腿骨の同一個体左右各 1 + 別個体大小各 1 個体）。肩甲骨と踵骨は 2 個体の左右のペアが揃って出土している。他にヤギの脛骨およびヤギの可能性のある頸椎が各 1 点採集されている。

ウシ（第 93 表）

各層から顎骨・歯と四肢骨が出土している。部位の偏りはとくに認められない。Ⅱ層 2003SZ 出土の右下顎骨関節突起にカットマーク、Ⅱ層出土の上腕骨およびⅠ層出土の脛骨・中足骨・基節骨にスパイラル・フラクチャーが確認されている。

ウマ（第 93 表）

各層から顎骨・歯と四肢骨が出土しているが、Ⅲ層では 10 点中 9 点を顎骨と歯が占めており、とくに HB①地区の 372SK では同一個体の左右下顎骨（骨番号 407）が揃って出土している。左は吻端～M3、右は吻端～P3 の顎骨が残存する。犬歯はなく、雌である。解体痕については、上記の下顎骨およびⅡ層出土の左下顎骨関節突起にカットマーク、Ⅳ層出土の左中足骨およびⅠ層出土の中足骨にスパイラル・フラクチャーが確認されている。

その他の哺乳類（第 94 表）

ヤギがⅢ層で 1 点、Ⅱ層で 3 点、Ⅰ層で 2 点確認されたほか、Ⅱ層からヤギと思われる頸椎と中足骨？が出土している。またⅡ層でウサギ科、Ⅳ層でネコが各 1 点確認されている。

II層における骨類の分布傾向

出土数の多いII層の骨類の分布をみると、HB②イ地区と隣接するHB①地区北端のK~L・9~14グリッドおよびHB①地区西端~HB②ロ地区のP~S・8~10グリッド付近にまとまっている。すべて遺構からの出土資料で、遺構別の出土数は358SKが42点と最も多く、1SK(13点)、1018SX(10点)、81SK(7点)、2002SZ(4点)がこれに次ぐ。他の遺構は2~1点である。

出土資料の大半を占めるイノシシ類について遺構別の部位組成をみると、先述の358SKおよび1SKは椎骨・四肢骨のみで頭骨を欠くのに対して、2002SZでは4点中下顎骨が3点を占めていることから、頭骨または顎骨とその他の部位で解体後の取り扱いが異なっていた可能性がある。

イノシシ類以外は資料数が少ないため分布傾向は明確でない。

3. 考察—周辺遺跡との比較

資料数の多いV層(貝塚時代後期前半)とII層(戦前)について、周辺の遺跡と比較し、本遺跡の特徴について検討する。

(1) 貝塚時代後期前半

今回の調査地点の南東約800mに位置する小堀原遺跡(1999~2001年度試掘調査・2008~2009年度本調査VI層b区)と南東250m前後に位置する伊礼原遺跡国指定範囲外地区(以下「伊礼原遺跡」とする)V層・IV層でも貝塚時代後期前半の骨類が多数出土している(樋泉2009・2012・2014)。

小堀原遺跡および伊礼原遺跡V層・IV層と本遺跡V層の出土骨を比較すると、いずれも魚類とイノシシを主体としてウミガメ・イヌなどが伴う基本的パターンは共通している。ただし、小堀原遺跡ではMNI比でイノシシが5割、魚類3割程度とイノシシが優勢だが、伊礼原遺跡では魚類が優勢であり、とくにIV層では約6割とイノシシの倍近くを占める。これに対して本遺跡では、魚類・イノシシともに約4割とほぼ同率であり、小堀原遺跡と伊礼原遺跡の中間的な様相である。

またイノシシ類の顎骨と四肢骨のMNI比をみても、小堀原遺跡では1999~2001年度資料が26:10、2008~2009年度資料が10:3と、いずれも顎骨が圧倒的に多く、一部の地区では顎骨が集中する状況も確認されている。一方、伊礼原遺跡V層では10:8と僅差であり、IV層では逆転して16:46と四肢骨が圧倒的に卓越する。これに対して本遺跡では33:23で、顎骨が多い点では小堀原に近いが、その偏りは小堀原ほど極端ではなく、この点でも両遺跡の中間的な様相といえる。

一方、魚類については、フエフキダイ科・ブダイ科・ハリセンボン科・ベラ科・クロダイ属などが優占する点は各遺跡に共通の特色だが、小堀原遺跡ではフエフキダイ科とブダイ科・ハリセンボン科・ベラ科の比率の差が小さい(MNI比ではほぼ同率)のに対して、伊礼原遺跡ではフエフキダイ科が他種より明らかに卓越しており、本遺跡は後者に類似している。

その他に、伊礼原遺跡ではジュゴンが多産しているが、本遺跡では試掘時に頭骨1点(特殊な性格を持つ可能性もある)が出土したのみである。また本遺跡固有の特徴としてオオコウモリ科が多数出土した点が特筆される。琉球列島の遺跡におけるオオコウモリの出土は珍しく、少数が出土した例はいくつか知られているが、多数の遺体がまとまって出土したのは今回が初例である。

このように、本遺跡の貝塚時代後期前半における脊椎動物遺体の様相は、脊椎動物全体の組成やイノシシの部位組成に関しては、距離的に近い伊礼原遺跡よりも小堀原遺跡に近い様相を示す一方で、魚類組成は伊礼原遺跡に近く、オオコウモリ科やジュゴンに関しては本遺跡に固有の様相が認められた。近接する同時代遺跡間にみられるこうした脊椎動物資源利用パターンの相違は、一連の生活空間内における活動内容の空間差を反映している可能性が高い。今後はそうした差異の背景を

解明していくことが課題となろう。

(2) 近代（戦前）

旧キャンプ桑江北側地区（桑江・伊平地区）の遺跡群では、これまでも近代以降と思われる脊椎動物遺体が出土しているが、その多くは近世資料と混在しており、詳細な時代を特定することが困難であった。今回の調査で特筆されるのはⅡ層から近代（とくに戦前期）の年代が明確な資料が豊富に得られた点で、この時期の脊椎動物資源利用の実態を示す資料として重要である。

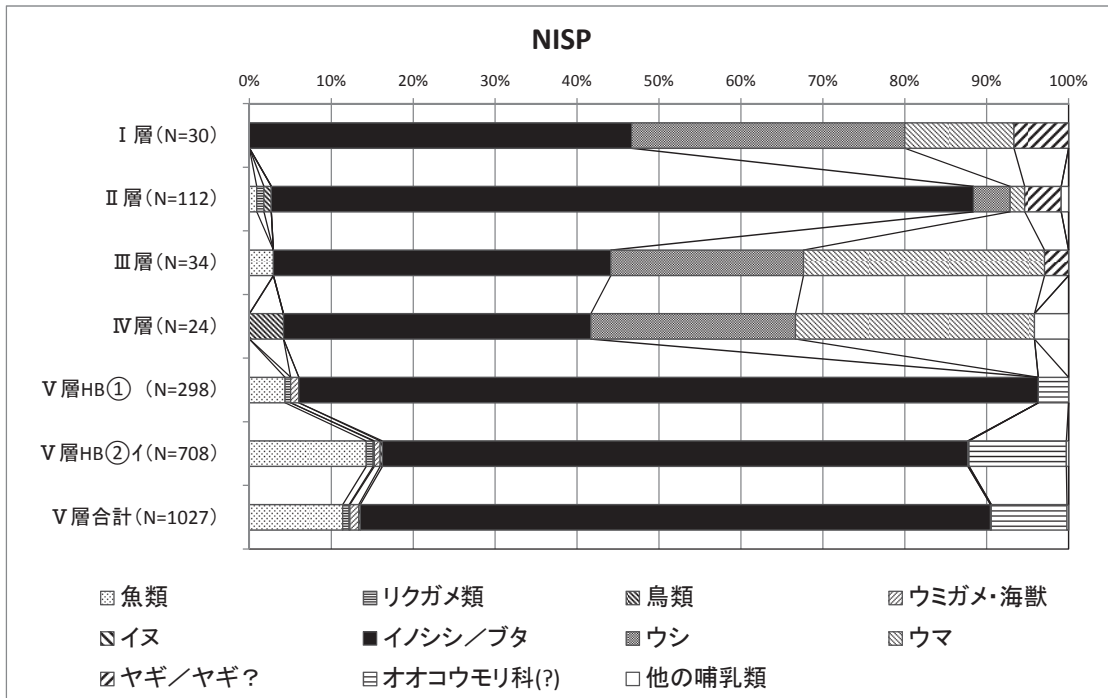
周辺遺跡の中でこれまでに近代のものを含むと思われる遺体を多産した遺跡としては、本遺跡の南方 200m 前後に位置する伊礼原 D 遺跡 4 トレンチ 7～10 グリッド（近世以降主体、樋泉 2008）および南東約 400～500m に位置する伊礼原 E 遺跡Ⅱ層（近世～近代、樋泉 2010）がある。これらの遺跡と本遺跡の出土資料を比較すると、各遺跡ともにイノシシ類を主体とし、これとウシ・ウマが大半を占め、魚骨がごく少ないという基本パターンは共通している。ただし伊礼原 D 遺跡ではウシ・ウマの比率がやや高いのに対して、伊礼原 E 遺跡ではイノシシ類の比率が高く、本遺跡は後者に類似している。いっぽうで、伊礼原 E 遺跡のイノシシ類は部位が顎骨に偏在しているのに対して、本遺跡では四肢骨が卓越する点で傾向が異なっている。また本遺跡では伊礼原 D・E 遺跡に比べてヤギがやや多い点も特徴である。

すでに伊礼原 D・E 両遺跡の近世以降の遺体群に明確な差異があり、これが活動内容の空間差を示す可能性を指摘したが（樋泉 2010・2014）、本遺跡の遺体群もまた両遺跡とは異なる独特のパターンを示すことが確認された。ただし伊礼原 D・E 遺跡の出土骨は近世～近代のものが混在していると推定されるのに対して、本遺跡Ⅱ層の資料は近代、とくに戦前の資料が主体と推定されることから、今後は近世から戦前期における資源利用の時代変化の観点から検討する必要がある。

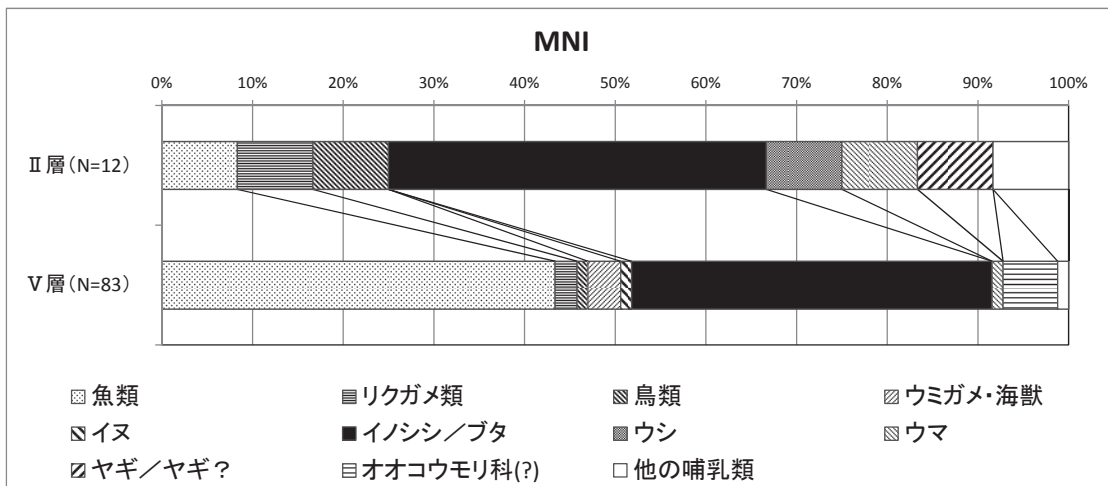
謝辞：分析作業に際しては、島袋春美氏・山城安生氏・東門研治氏・松原哲志氏ほか北谷町教育委員会の皆様より多大なるご教示・ご協力を賜った。黒住耐二氏（千葉中央博物館）には多くのご教示を賜ったほか、現生標本の参照に便宜を図っていただいた。記して厚く御礼申し上げる。

<参考文献>

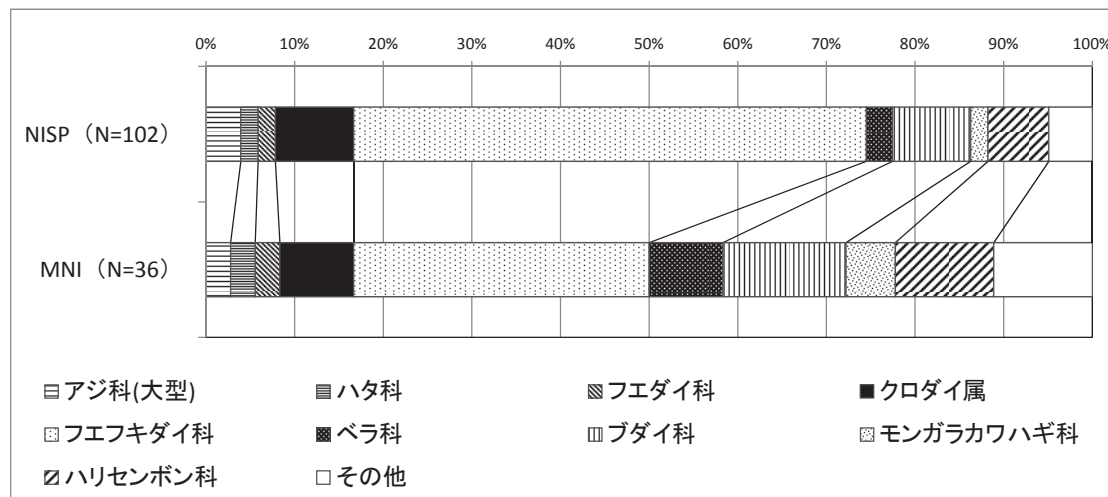
- ・樋泉岳二（2007）「伊礼原遺跡から出土した脊椎動物遺体群」、『伊礼原遺跡－伊礼原 B 遺跡ほか発掘調査事業－』（北谷町教育委員会編）、沖縄県北谷町教育委員会、pp480-534.
- ・樋泉岳二（2008）「伊礼原 D 遺跡第 3・第 4 トレンチ出土の脊椎動物遺体群」、『伊礼原 D 遺跡－キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業（平成 10～13 年度）－』（北谷町教育委員会編）、沖縄県北谷町教育委員会、pp. 184-196.
- ・樋泉岳二（2009）「小堀原遺跡出土の脊椎動物遺体群」、『小堀原遺跡－キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業（平成 11～13 年度）－』（北谷町教育委員会編）、沖縄県北谷町教育委員会、pp. 189-203.
- ・樋泉岳二（2010）「伊礼原 E 遺跡出土の脊椎動物遺体」『伊礼原 E 遺跡－桑江伊平土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査（平成 16・17 年度）』（山城安生・島袋春美編）、沖縄県北谷町教育委員会、pp57-79.
- ・樋泉岳二（2012）「小堀原遺跡 2008～2009 年度調査で採集された脊椎動物遺体」、『小堀原遺跡－桑江伊平土地区画整理事業に伴う試掘調査事業－』（山城安生・島袋春美編）、沖縄県北谷町教育委員会、pp. 322-334.
- ・樋泉岳二（2014）「伊礼原遺跡（国指定外）2007・2008・2012 年度調査で採集された脊椎動物遺体（付、伊礼原 A 遺跡 2008 年度調査で採集された脊椎動物遺体）」『伊礼原遺跡（国指定外）・伊礼原 A 遺跡－桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成 19・20・24 年度）』（島袋春美編）、沖縄県北谷町教育委員会、pp. 353-396.
- ・東門研治ほか（2008）『平安山原 B 遺跡－キャンプ桑江北側変換に伴う発掘調査事業（平成 14・15 年度）』、沖縄県北谷町教育委員会。



第169図. 平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集された脊椎動物遺体の組成(1): NISP比.



第170図. 平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集された脊椎動物遺体の組成(2): MNI比.
資料数の多いII層・V層のみを表示.



第171図 平安山原B遺跡HB①・②・④地区V層から採集された魚類遺体の組成.

第86表. 平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集された脊椎動物遺体の種名一覧

硬骨魚綱	OSTEICHTHYES	爬虫綱	RRPTILIA
ウツボ科	Muraenidae	ウミガメ科	Cheloniidae
アナゴ科	Congridae	リュウキュウヤマガメ?	<i>Geoemyda spengleri japonica</i> ?
ハタ科	Serranidae	鳥綱	AVES
アジ科(大型)	Carangidae (large)	目不明	Order indet.
フェダイ科	Lutjanidae	哺乳綱	MAMMALIA
クロダイ属	<i>Acanthopagrus</i> sp.	オオコウモリ科	Pteropodidae
フェブキダイ属(ハマフェブキ型)	<i>Lethrinus</i> cf. <i>L. nebulosus</i>	ウサギ科	Leporidae
ベラ科(タキベラ型)	Labridae cf. " <i>Bodianus perditio</i> "	ネズミ科	Muridae
ベラ科A	Labridae A	イヌ	<i>Canis familiaris</i>
ベラ科B	Labridae B	ネコ	<i>Felis catus</i>
イロブダイ属	<i>Balbometopon</i> sp.	ウマ	<i>Equus ferus</i>
アオブダイ属	<i>Scarus</i> sp.	イノシシ(またはブタ)	<i>Sus scrofa</i>
オニオコゼ科?	Synanceiidea ?	ヤギ	<i>Capra hircus</i>
コチ科	Platycephalidae	ウシ	<i>Bos taurus</i>
モンガラカワハギ科	Balistidae	イルカ類	Cetacea (small)
ハリセンボン科	Diodontidae	クジラ類	Cetacea (large)

第87表-1. 平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集された魚類遺体の同定結果

層準	年代	地区	地区 細分	グリッド/ 出土位置(遺構)	台帳 番号	骨 番号	種類	部位	左右	数	備考・計測値(mm)
II	戦前	HB①	-	K-L12(1SK)	377	354	クロダイ属	前上顎骨	L	1	
III	古新世時代~近世	HB①	-	O13・14・P13	575	363	フェブキダイ属(ハマフェブキ型)	前上顎骨	R	1	
V	貝塚時代 後期前半	HB①	-	K12	538	357	クロダイ属	主上顎骨	R	1	
				L16	533	353	クロダイ属	歯骨	L	1	
				L15	539	352	クロダイ属	歯骨	R	1	
				L14	303	360	フェブキダイ属(ハマフェブキ型)	前上顎骨	L	1	
				K15	304	364	フェブキダイ属(ハマフェブキ型)	前上顎骨	R	1	
				L14	558	361	フェブキダイ属(ハマフェブキ型)	前上顎骨	R	1	
				L13	296	362	フェブキダイ属(ハマフェブキ型)	前上顎骨	R	1	
				L15中央ベルト	401	358	フェブキダイ科	主上顎骨	L	1	
				J15	537	355	ベラ科(タキベラ型)	下咽頭骨	1	下咽頭骨幅44	
				K13	255	365	ベラ科A	下咽頭骨	1	下咽頭骨幅32	
				K13	255	356	モンガラカワハギ科	背鰭棘	1		
				L14	303	347	ハリセンボン科	歯骨	1	歯板面幅18	
				L15	539	359	ハリセンボン科	前上顎骨/歯骨	1	歯板面幅8	
				K10	3233	473	ウツボ科	歯骨	R	1	
				J12	3323	370	アナゴ科	主上顎骨	L	1	
				J12	3323	729	アナゴ科	角骨	L	1	
		L10	3235	623	ハタ科	主上顎骨	R	1			
		J-K12(1023SX)	3272	495	ハタ科	擬鎖骨	L	1			
		J10	3252	605	アジ科(大型)	稜鱗	1				
		J10	3248	332	アジ科	椎骨	3	大型			
		L10	3235	341	フェダイ科	前上顎骨	L	1			
		L10	3235	472	フェダイ科	前上顎骨	R	1			
		K11	3076	361	クロダイ属	前上顎骨	L	1			
		K10	3216	462	クロダイ属	前上顎骨	R	1			
		K11	3220	461	クロダイ属	前上顎骨	R	1			
		K11	3242	460	クロダイ属	前上顎骨	R	1			
		K11	3232	347	クロダイ属	歯骨	L	1			
		K10(1029SK)	3302	471	クロダイ属	歯骨	R	1			
		ベルト	3059	391	フェブキダイ属(ハマフェブキ型)	前上顎骨	L	1			
		K10	3216	382	フェブキダイ属(ハマフェブキ型)	前上顎骨	L	1			
		K10	3233	392	フェブキダイ属(ハマフェブキ型)	前上顎骨	L	1			
		下層重機掘削後	3238	384	フェブキダイ属(ハマフェブキ型)	前上顎骨	L	1			
		J12	3239	383	フェブキダイ属(ハマフェブキ型)	前上顎骨	L	1			
		K11	3242	380	フェブキダイ属(ハマフェブキ型)	前上顎骨	L	1			
		J10	3252	381	フェブキダイ属(ハマフェブキ型)	前上顎骨	L	1			
		L09	3215	424	フェブキダイ属(ハマフェブキ型)	前上顎骨	R	1			
		K10	3216	425	フェブキダイ属(ハマフェブキ型)	前上顎骨	R	1			
		K10	3216	420	フェブキダイ属(ハマフェブキ型)	前上顎骨	R	1			
		K11	3220	423	フェブキダイ属(ハマフェブキ型)	前上顎骨	R	1			
		J10	3227	432	フェブキダイ属(ハマフェブキ型)	前上顎骨	R	1			
J10	3227	487	フェブキダイ属(ハマフェブキ型)	前上顎骨	R	1					
K10	3229	405	フェブキダイ属(ハマフェブキ型)	前上顎骨	R	1					
I12	3230	426	フェブキダイ属(ハマフェブキ型)	前上顎骨	R	1					
L09	3255	421	フェブキダイ属(ハマフェブキ型)	前上顎骨	R	1					
K10	3254	458	フェブキダイ属	方骨	L	1					
K10	3233	738	フェブキダイ属	方骨	R	1					
J10	3252	456	フェブキダイ属	方骨	R	1					
K10	3254	457	フェブキダイ属	方骨	R	1					
L10	3235	490	フェブキダイ属	口蓋骨	L	1					
K10	3216	463	フェブキダイ属	口蓋骨	R	1					

第87表-2. 平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集された魚類遺体の同定結果

層準	年代	地区	地区 細分	グリッド/ 出土位置(遺構)	台帳 番号	骨 番号	種類	部位	左右	数	備考・計測値(mm)	
V	貝塚時代 後期前半	HB②	イ	L10	3231	464	フェフキダイ属	口蓋骨	R	1		
				K09	3263	346	フェフキダイ属	口蓋骨	R	1		
				L09	3215	435	フェフキダイ科	主上顎骨	L	1		
				K10	3216	442	フェフキダイ科	主上顎骨	L	1		
				K10	3216	441	フェフキダイ科	主上顎骨	L	1		
				K11	3220	440	フェフキダイ科	主上顎骨	L	1		
				J10	3227	443	フェフキダイ科	主上顎骨	L	1		
				K12	3237	450	フェフキダイ科	主上顎骨	L	1		
				下層重機掘削後	3238	374	フェフキダイ科	主上顎骨	L	1		
				K09	3263	445	フェフキダイ科	主上顎骨	L	1		
				K09	3263	446	フェフキダイ科	主上顎骨	L	1		
				K09(1043SX)	3266	447	フェフキダイ科	主上顎骨	L	1		
				K12	3056	453	フェフキダイ科	主上顎骨	R	1		
				K10	3216	449	フェフキダイ科	主上顎骨	R	1		
				K10	3229	448	フェフキダイ科	主上顎骨	R	1		
				L10	3235	451	フェフキダイ科	主上顎骨	R	1		
				L11	3262	452	フェフキダイ科	主上顎骨	R	1		
				L10	3235	342	フェフキダイ科	歯骨	L	1		
				K10	3254	410	フェフキダイ科	歯骨	L	1		
				L11	3262	412	フェフキダイ科	歯骨	L	1		
				L09	3215	418	フェフキダイ科	歯骨	R	1		
				K12	3244	416	フェフキダイ科	歯骨	R	1		
				K10	3254	415	フェフキダイ科	歯骨	R	1		
				L10	3218	488	フェフキダイ科	角骨	L	1		
				K12	3237	489	フェフキダイ科	角骨	L	1		
				L10	3231	349	フェフキダイ科	角骨	R	1		
				K09(1040SX)	3267	348	フェフキダイ科	角骨	R	1		
				K09	3263	486	フェフキダイ科	腹椎		1	焼	
				L10	3235	478	フェフキダイ科	腹椎		1		
				K11	3242	477	フェフキダイ科	腹椎		1		
				L09	3255	479	フェフキダイ科	腹椎		1		
				K09	3263	476	フェフキダイ科	腹椎		1		
				K11	3220	350	タイ型	椎骨		1		
				K10	3229	355	タイ型	椎骨		1		
				K10	3233	351	タイ型	椎骨		1		
				L10	3235	344	タイ型	椎骨		1		
				下層重機掘削後	3238	353	タイ型	椎骨		1		
				K12	3241	354	タイ型	椎骨		1		
				J10	3248	333	タイ型	椎骨		1		
				K10	3233	345	ペラ科B	下咽頭骨		1	下咽頭骨幅29	
				J10	3227	359	イロブダイ属	上咽頭骨	L	1		
				J10	3252	336	イロブダイ属	下咽頭骨		1	下咽頭骨幅13	
				K12	3056	331	イロブダイ属	前上顎骨	L	1		
				J10	3252	330	イロブダイ属	前上顎骨	L	1		
				J10	3252	337	イロブダイ属	前上顎骨	R	1		
				K12	3241	335	イロブダイ属	歯骨	L	1		
				K10	3216	339	アオブダイ属	下咽頭骨		1	下咽頭骨幅8	
				K11	3242	338	アオブダイ属	下咽頭骨		1	下咽頭骨幅14	
				J10	3252	340	アオブダイ属	下咽頭骨		1	下咽頭骨幅14	
				I12	3230	375	オニオコゼ科?	角骨	L	1		
J12	3226	356	コチ科	歯骨	L	1						
J13	3249	366	モンガラカワハギ科	背鰭棘		1						
K10	3071	358	ハリセンボン科	前上顎骨		1	歯板面幅8. 焼					
J-K10	3240	360	ハリセンボン科	前上顎骨		1	歯板面幅14					
K10	3071	357	ハリセンボン科	歯骨		1	歯板面幅8					
L10	3078	367	魚類(未同定)	腹椎		1						
K10	3233	364	魚類(保留)	椎骨		1						
L10	3235	363	魚類(保留)	椎骨		1						
K10	3236	362	魚類(保留)	椎骨		1						
K10	3386	365	魚類(保留)	椎骨		1						
K10	3233	369	魚類(同定不可)	椎骨		1						
L10	3428	334	魚類(同定不可)	椎骨		1						
			イ	L01	470	21	ハリセンボン科	前上顎骨/歯骨		1		
			ロ	R10	482	22	ハリセンボン科	前上顎骨/歯骨		1	歯板面幅14	
				R10	482	6	魚類(未同定)	椎骨		1		
不明	不明	HB②	-		3256	422	フェフキダイ属(ハマフェキ型)	前上顎骨	R	1		
					-	不明	444	フェフキダイ科	主上顎骨	L	1	
					-	不明	740	フェフキダイ科	主上顎骨	L	1	
					-	不明	740	フェフキダイ科	主上顎骨	L	1	
					-	不明	378	フェフキダイ科	歯骨	R	1	
					-	不明	352	タイ型	椎骨		1	

第88表. 平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集された爬虫類・鳥類遺体の同定結果

*1 年代凡例 貝後:貝塚時代後期前半 *2 残存位置の略号凡例は表5を参照 *3 数に<>を付けて示したものはNISPの算定対象外.

種類	層準	年代 *1	地区	地区 細分	グリッド/出土位置 (遺構名・取上番号)	台帳 番号	骨 番号	部位	残存 位置 *2	左右	数 *3	備考		
ウミガメ	V	貝塚時代 後期前半	HB①	-	L14中央ベルト	419	382	縁骨板				1		
					L15中央ベルト	401	383	腹甲板	fr		<1>			
					L18	580	406	甲板	fr		<1>			
			HB②	イ	K10	3233	491	四肢骨					2	
					K10(1274)	1274	437	肋骨板	p		1			
					L10	3235	429	縁骨板			1			
					下層重機掘削後	3246	622	部位不明	fr		<1>			
			HB④	イ	K01	465	23	上腕骨	d	?	1			
					L01	470	24	上腕骨	<p->	L	1	骨番号2と同一骨		
				ロ	R15	480	5	後眼窩		R	1			
Q10-12	476	3			肋骨板	fr		<1>						
				R10	99	4	甲板	fr		<1>				
リクガメ	II	戦前	HB①	-	K13(83SZ)	374	404	剣状腹板		R	1			
					L17中央ベルト	262	366	内腹板			1			
	V	貝塚時代 後期前半	HB①	-	L14中央ベルト	419	372	中腹板/下腹板				1		
					J13	3265	739	肋骨板	fr		<1>	焼		
			HB②	イ	J11	3073	428	縁骨板			1	焼		
					I12	3230	407	上腹板		L	1			
					L10	3235	431	内腹板			1			
					J13	3249	430	下腹板		L	1			
							K10	3233	427	腹甲板			1	
			不明	不明	HB②	-	-	不明	406	剣状腹板?		L?	?	1
-	不明	726					甲板	fr		<1>	焼			
鳥類 (同定不可)	II	戦前	HB②	ロ	南側	3328	703	四肢骨	m	?	1			
	IV	グスク	HB②	ロ	S12	3355	704	四肢骨	m	?	1			
	V	貝後	HB②	イ	L10	3235	493	尺骨	m	?	1	小型種		

第89表. 平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集されたコウモリ類遺体の同定結果

*1 残存位置の略号凡例は第90表・第92表を参照.

層準	年代	地区	地区 細分	グリッド(遺構名)	種類	台帳 番号	骨 番号	部位	残存位置 *1	左右	数	備考			
V	貝塚時代 後期前半	HB①	-	L12	オオコウモリ科?	561	371	四肢骨	m	?	1				
				L13	オオコウモリ科?	296	368	四肢骨	m	?	3				
				L14	オオコウモリ科?	303	370	四肢骨	m	?	6				
				L14中央ベルト	オオコウモリ科?	411	369	四肢骨	m	?	1				
				HB②	イ	J10	イ12	オオコウモリ科?	3230	399	四肢骨	m	?	3	
							オオコウモリ科?	3248	388	上腕骨	<p->	L	1		
						オオコウモリ科?	3253	387	四肢骨	m	?	1			
							3252	395	四肢骨	m	?	4			
						J12	オオコウモリ科?	3323	393	四肢骨	m	?	1		
						K10(1029SK)	オオコウモリ科?	3302	390	四肢骨	m	?	1		
						K10	オオコウモリ科	3254	728	下顎骨	[1x12xCxP1xP2xP3x]	R	1		
								3233	492	上腕骨	<p->	L	1		
								3233	492	橈骨	<p->	R	1		
								3216	396	四肢骨	m	?	8		
						オオコウモリ科?	3236	397	四肢骨	m	?	2			
							3254	403	四肢骨	m	?	2			
						K11	オオコウモリ科	3233	492	四肢骨	m	?	6		
								3242	653	鎖骨	w	L	1		
						オオコウモリ科?	3242	401	上腕骨	<p->	L	2			
							3220	398	橈骨	<p->	R	1			
				オオコウモリ科?	3220	398	四肢骨	m	?	4					
					3242	404	四肢骨	m	?	3	指骨の可能性あり				
				K12トレンチ	オオコウモリ科	1238	385	橈骨	<p->	L	1				
				K12	オオコウモリ科?	3241	389	四肢骨	m	?	1				
				L09	オオコウモリ科	3215	727	下顎骨	[P4xM1xM2xM3x]	R	1				
				L10	オオコウモリ科	3235	732	下顎骨	[P2xP3xP4x]	L	1				
						3235	732	下顎骨	[P4xM1xM2x]	R	1				
						3235	343	下顎骨	[P4xM1xM2xM3x]	R	1				
						3078	376	下顎骨	[P4xM1xM2xM3x]	R	1				
						3235	498	臼歯			1				
						3231	400	上腕骨	<p->	L	1				
						3235	500	上腕骨	<p->	R	1				
						3235	500	橈骨	<p->	L	2				
						3235	500	橈骨	<p->	R	1				
						3235	500	指骨	p	R	1				
						3235	500	上腕骨?	<d->?	L?	1				
						オオコウモリ科?	3231	400	四肢骨	m	?	1			
				L11	オオコウモリ科?	3262	386	四肢骨	m	?	1				
						トレンチ	オオコウモリ科?	3080	402	四肢骨	m	?	2		
				不明	不明	HB②	-	-	オオコウモリ科	不明	371	下顎骨	[P4xM1xM2xM3x]	L	1
オオコウモリ科?	不明	377	下顎骨						[M1xM2xM3x]	L	1				
オオコウモリ科?	不明	394	四肢骨						m	?	3				

第90表-3. 平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集されたイノシシ類(イノシシ/ブタ)遺体の同定結果

* 残存位置凡例: w完存, p近位端, m骨幹, d遠位端, fr 破片, (p)・(d)は未癒合の骨端のみ, (p)・(d-)は骨端未癒合脱落, <p>・<d>は骨端のみ欠損.

部位	残存位置	I		II						III				IV			V																						
		HB①		HB②		HB①				HB②		HB①		HB②		HB④		HB①		HB②		HB④		HB①															
		-	イ	ロ	イ	ロ	イ	ロ	合計	合計	合計	-	イ	ロ	イ	合計	-	ロ	イ	合計	合計	合計	合計	J・K17-19	J14-15	K12	K12-14・J13・14・14	K12-16	K13	K14	K15	L11	L12	L13	L14				
		合計	-	南側表土下精査	合計	J17 (106P)	K/L12・K13・L14	P・Q08-09 (358SK)	P・Q10 (240SZ)	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計			
脛骨	(p-)						1 /							1 / 0																									
脛骨	(p)-(d-)							1 /						1 / 0							1 /																		
脛骨	<p>						/ 1							0 / 1																									
脛骨	<p>-m																																						
脛骨	<p>-(d-)																																						
脛骨	<p>-d																																						
脛骨	m	1 /			1 /	1 /				/ 1	1 / 1			/ 1		/ 1										/ 1	/ 1												
脛骨	m-(d-)					/ 1					0 / 1																												
脛骨	m-(d)																																						
脛骨	m-d																																					/ 1	
脛骨	(d)						/ 1				0 / 1																												
脛骨	d																						/ 1													1 / 1		/ 1	
脛骨	(d)					/ 1					0 / 1																												
腓骨	p																																						/ 1
腓骨	<p>-(d-)																																						
腓骨	m						1				1																												1
腓骨	m-(d-)									1	1																												
腓骨	(d-)						2			1	3																												
腓骨	d																																						
距骨			1 / 1		1 / 1	/ 1					0 / 1													/ 1														1 /	
距骨						2 / 2		1 /	2 /	5 / 2		/ 1		/ 1	/ 1									/ 1														1 / 2	
足根骨																																							
第2中足骨	w																																						
第2中足骨	p																																						
第2中足骨	p<d>									1	1																												1 /
第2中足骨	p-(d-)																																						
第3中足骨	p																																						
第3中足骨	p<d>												1 /												/ 1	/ 1		1 /										1 /	
第3中足骨	p-(d-)									1 /	1 / 0																												
第4中足骨	w																																						
第4中足骨	p																																						1 /
第4中足骨	p-(d-)																																						1 /
第5中足骨	w																																						
第5中足骨	p																																						
第5中足骨	p-(d-)																																						
手/足根骨																																							
中手/中足骨	p									1	1																												
中手/中足骨	<p>																								1														
中手/中足骨	m																																						
中手/中足骨	d																																						1
中手/中足骨	(d)									1	1																												1
基節骨			1		1																																		1
中節骨						1																																	
末節骨																																							
四肢骨	m																																						
肋骨	p																																						
肋骨	m									6	6	1																											1
肋骨	d																																						2
肋骨	d																																						1
合計		8	5	1	14	1	16	40	1	9	29	96	9	3	1	1	14	2	3	4	9	5	5	18	6	23	13	4	16	3	26	14	61						

第90表-4. 平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集されたイノシシ類(イノシシ/ブタ)遺体の同定結果

* 残存位置凡例: w完存, p近位端, m骨幹, d遠位端, fr破片。(p)・(d)は未癒合の骨端のみ、(p-)・(d-)は骨端未癒合脱落、<p->・<d->は骨端のみ欠損。

部位	残存位置	V																							VI				不明				総計
		HB①					HB②													HB④		合計	HB①	HB①	HB②	合計	HB①	HB②	合計				
		-					イ													イ	ロ		合計	-	イ		-	合計					
		L15	L16-17	L18-19	M14	合計	I12	J/K09 J-L10	J-L12	J10	J10-11	J12	J13	K10	K11	K12	L09	L10	L11	トレンチ・ヘルト・他	合計	合計	合計	合計	L18	その他	下層トレンチ	合計	-	イ	-	合計	
前頭骨		1 /				1 / 1						1 /		1 /	1 /	/ 1			/ 1	3 / 2			4 / 3							/ 1		0 / 1	4 / 4
前頭骨+頭頂骨												/ 1		1 /						1 / 1			1 / 1									1 / 1	
前頭骨+頭頂骨+後頭骨		1				1																1										1	
頭頂骨								1 /												1 / 0			1 / 0									1 / 0	
頭頂骨+後頭骨										1										1			1									1	
後頭骨	後頭顆					0 / 1																0 / 1										0 / 1	
涙骨																																1	
頬骨						0 / 1								/ 1		2 /	/ 1			2 / 2			2 / 3	1 /		1 / 0						4 / 3	
側頭骨+頬骨	側頭骨・関節結節																			0 / 1			0 / 1									0 / 1	
側頭骨	頬骨突起																		/ 1	0 / 1			0 / 1									0 / 2	
側頭骨	関節結節+頬骨突起													/ 1						0 / 1			0 / 1									0 / 1	
側頭骨	関節結節							/ 2						1			/ 1			0 1 3	1 /		1 /	1 / 1	/ 1				0 / 1	1 1 5			
側頭骨	岩様部												1							1			1									1	
切歯骨	表6参照					4 / 1				/ 1	2 /							1 /	3 / 1			7 / 2										8 / 2	
上顎骨	表6参照	2 / 1				2 / 5	/ 1	/ 1	1 /	4 / 2		2 / 2	/ 1	/ 2	/ 1	3 / 2		1 / 3	11 / 15			13 / 20										13 / 21	
上顎遊離歯	表6参照	3				13			1	4		1	1	1	3		1	12			1	26									28		
下顎骨	表7参照	5 / 4				20 / 13	1 / 1	1 /	1 / 6	2 / 1	2 2 4	1 /	5 1 5	9 3 5	1 / 3	3 /	2 1 4	4 / 1	1 / 2	33 7 32	/ 1		53 7 46	/ 1		0 / 1		/ 1		0 / 1	57 7 52		
下顎遊離歯	表7参照	15				35	1		3	9	1	4	5	6	2	3		5	39	1		75		1	1	1			1	82			
頸椎						2													3			5	1								8		
軸椎		1				1				1		1							2			3									4		
頸椎		1				3													3			3									3		
頸椎	椎体																1		1			1									1		
頸椎	棘突起					1							1						1			2									2		
胸椎						1													1			1									1		
胸椎	棘突起			1		3						2	1		1	1		1	6			9									11		
腰椎			1	1		4		1				1			1	2			5			9					1		1		16		
腰椎	椎体							1								1			2			2									2		
腰椎	棘突起					1		1				1	1		1				4			5									6		
仙椎		1				1																1									2		
椎骨	椎体																														1		
椎骨	棘突起									1			2			2			5			5									5		
肩甲骨	d	1 / 1				4 1 3				1 / 1		/ 1	1 / 1		2 /	1 / 1			5 / 4	1 /		10 1 7	2 /		2 / 0						14 1 10		
肩甲骨	(d-)												/ 1						0 / 1			0 / 1									0 / 1		
肩甲骨	<d->					3 / 3	1 /	/ 1	/ 2	/ 1		2 /	1 / 2	1 / 1		/ 1			5 / 8			8 / 11				1 /		1 / 0		9 / 11			
上腕骨	(p-)																														1 / 0		
上腕骨	m																1		1			1									1 1 0		
上腕骨	m-<d->	1 /		/ 1		3 / 4							/ 1	/ 1			1 /	1 / 1	2 / 3			5 / 7								5 / 9			
上腕骨	m-d					0 / 1				1 /						/ 1			1 / 1			1 / 2									1 / 2		
上腕骨	<d->	2 /		/ 1	1 /	5 / 3	1 /	1 /		/ 2	/ 1	1 / 3	1 / 1	2 / 1	1 /	1 / 2		/ 1	8 / 11			13 / 14			1 /		1 / 0			19 / 18			
上腕骨	(d-)												/ 1						0 / 1			0 / 1									0 / 2		
上腕骨	d								/ 1			1 /	/ 1		1 /		/ 1		2 / 3			2 / 3									2 1 4		
上腕骨	(d)																														0 / 1		
橈骨	p		1 /			3 / 3						1 / 2		/ 1					1 / 3			4 / 6									4 / 6		
橈骨	p-m					0 / 1															1 /	1 / 1									2 / 1		
橈骨	p-(d-)													/ 1		1 /			1 / 1			1 / 1									1 / 1		
橈骨	(p-)-m					0 / 1							/ 1						0 / 1			0 / 2									0 / 2		

第90表-5. 平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集されたイノシシ類(イノシシノブタ)遺体の同定結果

* 残存位置凡例: w完存, p近位端, m骨幹, d遠位端, fr 破片. (p)・(d)は未癒合の骨端のみ, (p-)・(d-)は骨端未癒合脱落, <p->・<d->は骨端のみ欠損.

部位	残存位置	V																		VI			不明				総計						
		HB①					HB②													HB④		合計	HB①	HB①	HB②	合計		HB①	HB②		合計		
		-					イ													イ	ロ		合計	-	イ			-	合計				
		L15	L16-17	L18-19	M14	合計	I12	J/K09 ・J- L10	J-L12	J10	J10-11	J12	J13	K10	K11	K12	L09	L10	L11	トレンチ・ヘルト・他	合計	合計				合計				合計	L18	その他	下層トレンチ
橈骨	<p->-<d->																			0 / 1		0 / 1											0 / 1
橈骨	m		/ 1		2 / 2			1 /		1										1 1 0	/ 1	3 1 3										4 1 3	
橈骨	<d->																	/ 1		0 / 1		0 / 1										0 / 1	
橈骨	(d-)		/ 1		1 / 1																	1 / 1										1 / 4	
橈骨	d				0 / 2																	0 / 2										0 / 2	
尺骨	滑車切痕	1 /	/ 1	1 /	3 / 3		/ 1			1 / 3		1 / 1		/ 1	2 /	2 / 1		2 / 3	8 / 10	1 /	12 / 13			/ 1	0 / 1		1 /		1 / 0		15 / 15		
尺骨	滑車切痕-m	1 / 1			3 / 5			1 /					/ 2						1 / 2			4 / 7									4 / 8		
尺骨	滑車切痕-(d-)																		0 / 0													1 / 0	
尺骨	m		/ 1		1 / 3								3	1			1	6			1 6 3			1	1						2 8 3		
尺骨	d				0 / 1																0 / 1											0 / 1	
第2中手骨	w				1 / 0																1 / 0											1 / 0	
第2中手骨	p				0 / 1				/ 1										0 / 1			0 / 2										0 / 2	
第3中手骨	w				1 / 0		1 /						/ 1						1 / 1		2 / 1		1 /	1 / 0							3 / 1		
第3中手骨	p				0 / 1			/ 1		1 /						/ 1			1 / 2		1 / 3		/ 1	0 / 1							1 / 4		
第3中手骨	p-<d->				0 / 1														0 / 1		0 / 1											0 1 1	
第4中手骨	w				0 / 1											/ 1			0 / 1		0 / 2		1 /	1 / 0								2 / 2	
第4中手骨	p	2 /			4 / 0			/ 1					1 /						1 / 1		5 / 1											5 / 1	
第4中手骨	p-(d-)															/ 1			0 / 1		0 / 1											0 / 1	
第5中手骨	w									/ 1							/ 1		0 / 2		0 / 2												0 / 3
第5中手骨	p-(d-)				1 / 0														1 / 0														1 / 1
寛骨	白		1 /		2 / 2			/ 1		/ 1	/ 1		/ 1		1 /			1 / 4	2 /	5 / 6					/ 1		0 / 1		/ 1	0 / 1		5 / 7	
寛骨(腸骨)	白						/ 1	/ 1	/ 1				/ 1		1 /			2 / 5		2 / 5		/ 1		0 / 1								4 / 7	
寛骨(腸骨)	fr																						/ 1	0 / 1								0 / 2	
寛骨(腸骨+座骨)	白														/ 1				0 / 1		0 / 1											0 / 1	
寛骨(腸骨+恥骨)	白																1 /	1 / 0			1 / 0											1 / 0	
寛骨(恥骨)	白		/ 1		0 / 1							/ 1							0 / 1		0 / 2											0 / 2	
寛骨(座骨)	白		/ 1		0 / 2							1 /					2 / 1	3 / 1		3 / 3					/ 1		0 / 1					4 / 5	
寛骨(座骨)	fr																																1 / 0
大腿骨	(p)												1					1		1												0 1 1	
大腿骨	p							/ 1										0 / 1		0 / 1		0 / 1										0 / 1	
大腿骨	(p-)															/ 1			0 / 1		0 / 1											0 / 2	
大腿骨	(p-)-m											/ 1							0 / 1		0 / 1											1 / 1	
大腿骨	(p-)-<d->																1 /		1 / 0		1 / 0											1 / 0	
大腿骨	(p-)-<d->															1 /			1 / 0		1 / 0											1 / 1	
大腿骨	(p-)-d																																1 / 0
大腿骨	<p->							/ 1				1 /						/ 1	1 / 2		1 / 2											1 / 2	
大腿骨	<p->-<d->																			1 /	1 / 0											1 / 0	
大腿骨	<p->-<d->																			1 /	1 / 0											1 / 0	
大腿骨	m	/ 1			0 / 1												/ 1	0 / 1		0 / 2												0 / 2	
大腿骨	m-<d->								1 /			1 /				/ 1	/ 1	2 / 2		2 / 2		2 / 2										2 / 2	
大腿骨	<d->				2 / 1						/ 1							0 / 1		2 / 2		2 / 2										2 / 4	
大腿骨	(d-)												1 /					1 / 0		1 / 0												1 / 1	
大腿骨	d				0 / 1					1								1		0 1 1				/ 1	0 / 1							0 1 2	
大腿骨	(d)																																1
膝蓋骨					1														1														1
脛骨	(p)								/ 1									0 / 1		0 / 1													1 / 2
脛骨	p												/ 1					0 / 1		0 / 1													0 / 1

第92表-1. 平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集されたイノシシ類(イノシシ/ブタ)遺体の下顎骨・下顎遊離歯の詳細

[]:顎骨残存範囲, ():萌出中の歯, <>:未萌出歯, ×:脱落

層準	地区	地区 細分	グリッド/ 出土位置(遺構)	取上 番号	台帳 番号	骨 番号	部位	左右	数	連合部			C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	下顎 角	関節 突起	筋 突起	性別	備考	咬耗 段階*									
										i1	i2	i3															c	m1	m2	m3					
I	HB①	-	-		494	67	下顎骨	R	1																										
					3083	571	下顎骨	L	1																										
II	HB②	イ	-		384	171	下顎骨	L	1																										
					629	40	下顎遊離歯	R	1																										
	HB④	イ	-	K8-10/L8-10/M9 (1018SX)		3296	501	下顎遊離歯	R	1																									
						3367	685	下顎骨	L	1																									
						3367	674	下顎骨	L	1																									
						3367	685	下顎骨	R	1																									
3328	688	下顎遊離歯	R	1																															
III	HB①	-	P10-15・Q15(271SD)		491	228	下顎遊離歯	L	1																										
					578	172	下顎骨	R	1																										
IV	HB①	-	O・P14-16		585	111	下顎骨	R	1																										
					459	11	下顎遊離歯	R	1																										
V	HB①	-	L11		560	259	下顎骨	L	1																										
					396	170	下顎骨	R	1																										
					306	52	下顎骨	L	1																										
					306	48	下顎遊離歯	L	1																										
					277	258	下顎骨	L	1																										
					277	106	下顎骨	L	1																										
					277	205	下顎遊離歯	L	2																										
					277	211	下顎遊離歯	L	1																										
					236	79	下顎骨	L	1																										
					236	107	下顎骨	L	1																										
					236	38	下顎遊離歯	L	1																										
					236	59	下顎骨	L	1																										
					236	213	下顎遊離歯	L	1																										
					236	45	下顎遊離歯	L	1																										
					304	51	下顎骨	L	1																										
					302	208	下顎骨	L	1																										
					302	65	下顎骨	L	1																										
					302	227	下顎遊離歯	L	1																										
					417	53	下顎骨	L	1																										
					558	110	下顎骨	L	1																										
					303	206	下顎遊離歯	L	1																										
					396	57	下顎骨	L	1																										
					396	168	下顎骨	L	1																										
					419	212	下顎遊離歯	L	1																										
					411	46	下顎遊離歯	L	1																										
					419	229	下顎遊離歯	L	1																										
539	257	下顎骨	L	1																															
539	210	下顎骨	L	1																															
288	78	下顎骨	L	1																															
539	346	下顎骨	L	1																															
539	207	下顎遊離歯	L	2																															
539	214	下顎遊離歯	L	3																															

第92表-2. 平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集されたイノシシ類(イノシシ/ブタ)遺体の下顎骨・下顎遊離歯の詳細

[]:顎骨残存範囲、():萌出中の歯、<>:未萌出歯、×:脱落

層準	地区	地区 細分	グリッド/ 出土位置(遺構)	取上 番号	台帳 番号	骨 番号	部位	左右	数	連合部										下顎 角	関節 突起	筋 突起	性別	備考	咬耗 段階*				
										I1 i1	I2 i2	I3 i3	C c	P1 m1	P2 m2	P3 m3	P4 m3	M1	M2							M3			
V	HB①	-	L15	539	39		下顎遊離歯	L	1															♂					
			L15	288	262		下顎遊離歯	L	2																♂				
			L15	539	226		下顎遊離歯	L	1																♀				
			L15	291	49		下顎遊離歯	L	1																		c		
			L15	539	47		下顎遊離歯	L	1																		b		
			L15	539	47		下顎遊離歯	L	1																		e		
			L15中央ベルト	401	109		下顎骨	L	1																				
			J・K18・19	246	43		下顎遊離歯	R	1																	♂			
			J15	537	42		下顎遊離歯	R	1																	♂			
			K12	306	75		下顎骨	R	1																			b	
			K12	306	260		下顎骨	R	1																			b	
			K12-14・J13・14・I14	277	41		下顎遊離歯	R	1																	♂			
			K12-16トレンチ	236	217		下顎遊離歯	R	1																	♀			
			K13	255	77		下顎骨	R	1																	♀			
			K15	304	261		下顎骨	R	1																	♀			
			L13	302	209		下顎骨	R	1																			c	
			L14	558	4		下顎骨	R	1																			d/c	
			L14	558	74		下顎骨	R	1																			c/b	
			L14	558	216		下顎遊離歯	R	1																	♀			
			L14(364SS)	493	221		下顎遊離歯	R	1																				
			L15	539	37		下顎骨	R	1																				
			L15	539	64		下顎骨	R	1																			焼	
			L15	539	349		下顎骨	R	1																				
			L15	539	222		下顎遊離歯	R	1																				
			L15	539	215		下顎遊離歯	R	1																				
			L15	539	37		下顎遊離歯	R	1																			d	
			L15中央ベルト	401	55		下顎骨	R	1																				
			L12	561	202		下顎遊離歯	?	1																		♂		
			L14	674	108		下顎遊離歯	?	1																				
			V	HB②	イ	K10	1354	1354	485	下顎骨	L	1															♀	左右交連	f/e
K11	1100	1100				539	下顎骨	L	1																♂	左右交連			
K11	1283	1283				563	下顎骨	L	1																		c		
K12トレンチ	1246	1248				564	下顎骨	L	1																	♀	左右交連	d/c	
J11		3217				573	下顎骨	L	1																			d/c	
K10		3236				626	下顎骨	L	1																				
J10		3070				527	下顎骨	L	1																			c	
J10	1277	1277				465	下顎遊離歯	L	1																	♂			
J10	1358	1358				468	下顎遊離歯	L	1																	♂			
J11	1322	1322				574	下顎骨	L	1																	♂		d/c	
J12		3075				483	下顎骨	L	1																			e	
J12	1317	1317				481	下顎骨	L	1																			c	
J12		3075				641	下顎遊離歯	L	1																				
J12		3239				642	下顎遊離歯	L	1																				

第92表-3. 平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集されたイノシシ類(イノシシ/ブタ)遺体の下顎骨・下顎遊離歯の詳細

[]:顎骨残存範囲, ():萌出中の歯, <>:未萌出歯, ×:脱落

層準	地区	地区 細分	グリッド/ 出土位置(遺構)	取上 番号	台帳 番号	骨 番号	部位	左右	数	連合 部	I1 i1	I2 i2	I3 i3	C c	P1 p1	P2 p2	P3 p3	P4 p4	M1 m1	M2 m2	M3 m3	下顎 角	関節 突起	筋 突起	性別	備考	咬耗 段階*	
			J12		3075	506	下顎遊離歯	L	1			I2																
			J12		3226	507	下顎遊離歯	L	1			I2																
			J12		3075	646	下顎遊離歯	L	1					C											♂			
			J12	1084	1084	524	下顎遊離歯	L	1												M3						c	
			J12	1120	1120	523	下顎遊離歯	L	1												M3						c	
			J13		3249	546	下顎骨	L	1												[M3]						c	
			J-K12(1023SX)		3272	606	下顎骨	L	1						[m1	m2	m3	M1								焼	c	
			K09	1385	1385	560	下顎骨	L	1							[P3	P4	M1	M2	<M3>							e/d	
			K10	1346	1346	529	下顎骨	L	1		[x	x	x	x	P1	m1	m2	m3	<M1>								幼獣	
			K10		3216	540	下顎骨	L	1					[Cx	P1x	P2x	P3x								♂	焼		
			K10		3216	556	下顎骨	L	1												[(M3)						焼	b
			K11	1286	1286	510	下顎骨	L	1		[x	x	x	<C>	P1	m1	m2	m3	M1	<M2>			[+]				c	
			K11	1327	1327	559	下顎骨	L	1		[I1x	I2	I3x	Cx	欠	P2x	P3	P4x							♂			
			K11	1263	1263	601	下顎骨	L	1					[(C)	欠	P2x	P3	P4x								♀		
			K11	1338	1338	615	下顎骨	L	1						[P2	P3x												
			K11	1251	1251	586	下顎骨	L	1											[M1	M2	<M3>					d/c	
			K11	1338	1338	621	下顎骨	L	1											[M3	+]						c	
			K11		3242	503	下顎骨	L	1											[M3x	+]							
			K11	1295	1295	467	下顎遊離歯	L	1					C											♂			
			K11		3079	466	下顎遊離歯	L	1					C											♂			
			K12		3056	470	下顎遊離歯	L	1					C											♂			
			K12	1101	1101	521	下顎遊離歯	L	1												M3						d	
			K12トレンチ	1246	1248	583	下顎遊離歯	L	1												M3						b	
			L09	1364	1364	733	下顎骨	L	1						[P2	P3	P4	M1	M2	M3							g/t/e	
			L09	1361	1361	484	下顎骨	L	1							[P3	P4	M1	M2								g/f	
			L09		3215	513	下顎骨	L	1														[+]					
			L09	1364	1364	734	下顎遊離歯	L	1			I2																
			L09	1364	1364	735	下顎遊離歯	L	1					C											♂			
			L10	1343	1343	579	下顎骨	L	1											[M1	M2	M3	+]				g/t/d	
			L10		3235	504	下顎骨	L	1												[M3x							
			L10		3231	530	下顎遊離歯	L	1					C											♀			
			L11		3282	538	下顎骨	L	1							[P3x	P4	M1	M2							老獣	m/m	
			L11		3282	547	下顎骨	L	1								[m3x											
			L11		3282	531	下顎骨	L	1												[(M3)						c	
			L11		3282	514	下顎骨	L	1															[+]				
			トレンチ		3080	619	下顎骨	L	1												[M3x	+]						
			トレンチ		3080	638	下顎遊離歯	L	1			I1																
			トレンチ		3080	469	下顎遊離歯	L	1					C											♂			
			トレンチ		3080	522	下顎遊離歯	L	1												M3						f	
			I12		3250	627	下顎遊離歯	R	1			I1																
			J09	1396	1396	612	下顎骨	R	1						[Cx	欠	P2	P3	P4	M1	M2x	M3x			♂		g/t/d	
			J10		3227	542	下顎骨	R	1			[I1	I2	I3														
			J10	1276	1276	565	下顎骨	R	1			[I1x	I2	I3x	C	P1x	P2x	P3x	P4						♂			
			J10	1287	1287	551	下顎骨	R	1						[C	P1x	P2x	P3	P4	M1	M2	M3			♂		f/e/d	
			J10	1321	1321	548	下顎骨	R	1								[P3	P4	M1	M2	(M3)						e/d/c	
			J10		3225	611	下顎骨	R	1											[M1	M2	(M3)					f/e/b	
			J10	1291	1291	613	下顎骨	R	1												[M3						c	
			J10		3227	543	下顎遊離歯	R	1			I1																
			J12	1201	1201	578	下顎骨	R	1						[Cx	欠	P2x	P3x	P4x	M1	M2	M3	+]		♂		f/e/d	

第92表-4. 平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集されたイノシシ類(イノシシ/ブタ)遺体の下顎骨・下顎遊離歯の詳細

[]:顎骨残存範囲、():萌出中の歯、<>:未萌出歯、×:脱落。

層準	地区	地区 細分	グリッド/ 出土位置(遺構)	取上 番号	台帳 番号	骨 番号	部位	左右	数	連合 部	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	下顎 角	関節 突起	筋 突起	性別	備考	咬耗 段階*			
											i1	i2	i3	c	m1	m2	m3													
V	HB②	イ		1377	1377	575	下顎骨	R	1					[C	欠	P2x	P3	P4	M1						♀		d			
				1347	1347	557	下顎骨	R	1													[M3						e		
					3075	544	下顎骨	R	1																[+					
					3463	624	下顎遊離歯	R	1							C											♂			
					3323	610	下顎遊離歯	R	1														M3						c	
					1305	1305	625	下顎遊離歯	R	1						C											♂			
					1290	1290	614	下顎骨	R	1													[M2	M3					e/e	
						3236	511	下顎骨	R	1														[M3x						
						3229	505	下顎骨	R	1															[+	+				
						3071	629	下顎遊離歯	R	1					I1															
						3233	534	下顎遊離歯	R	1						I2														
						3233	537	下顎遊離歯	R	1						I2														
						3216	532	下顎遊離歯	R	1													M2						e	
					1285	1285	525	下顎骨	R	1				[x	x	x	x	P1	m1	m2										
					1284	1284	528	下顎骨	R	1													[m3	M1	<M2>				c	
						3242	502	下顎骨	R	1																[+				
						3242	535	下顎遊離歯	R	1						I2														
						3242	678	下顎遊離歯	R	1							C										♀			
						3220	608	下顎遊離歯	R	1														M3					k	
						3241	628	下顎遊離歯	R	1					I1															
						1087	1087	536	下顎遊離歯	R	1					I2														
						K12トレンチ	1246	1248	587	下顎骨	R	1			[I1	<I2>														
						K12トレンチ	1255	1255	208	下顎骨	R	1														[+				
						L10	1298	1298	526	下顎骨	R	1		[x	x	x	x		m1x	m2	m3	<M1>					+			
						L10	1309	1309	549	下顎骨	R	1											[M2	M3					f/e	
						L10		3235	512	下顎骨	R	1												[M3x						
						L10		3235	545	下顎骨	R	1														[+				
						L10		3235	609	下顎遊離歯	R	1												M3					c	
						L11		3282	558	下顎骨	R	1												[M3x	+					
						トレンチ		3080	550	下顎骨	R	1						[欠	P2x	P3x	P4	M1						老獣	m	
						トレンチ		3080	482	下顎骨	R	1									[P3x	P4	M1	M2					g/f	
						トレンチ		3080	617	下顎遊離歯	R	1					C										♀			
						トレンチ		3080	618	下顎遊離歯	R	1													M3					b
						J12		3239	518	下顎骨	?	1														[+				
						J12		3323	520	下顎骨	?	1														[+				
						K10		3216	517	下顎骨	?	1														[+				
						K11		3076	603	下顎骨	?	1														[+				
						K11		3242	516	下顎骨	?	1														[+				
						K11		3242	519	下顎骨	?	1														[+				
						K12トレンチ	1246	1248	580	下顎遊離歯	?	1							P2											
						L10		3235	730	下顎骨	?	1														[+				
						L10		3235	630	下顎遊離歯	?	1				i														
		HB④	イ			473	25	下顎遊離歯	R	1												M3				c				
						467	26	下顎骨	R	1											[M2	M3x					e			
VI	HB①	-	L14中央ベルト		264	204	下顎遊離歯	L	1			I1																		
			L18		580	203	下顎骨	R	1												[P3x	P4	M1	M2			e/d			
不明	HB①	-	-		不明	44	下顎遊離歯	R	1					C											♂					
	HB②	イ	-		3256	576	下顎骨	R	1					[<c>	(P1)															

第93表. 平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集されたウシ・ウマ遺体の同定結果

*1 残存位置略号凡例は第90表・第92表を参照。*2 備考略号凡例: CM カットマーク, SF スパイラルフラクチャー。

種類	層準	年代	地区	地区 細分	グリッド/出土位置 (遺構・取上番号)	台帳 番号	骨 番号	部位	残存位置 *1	左右	数	備考 *2		
ウシ	I	戦後	HB①	-	O・P8-14	238	386	上顎M3		R	1			
				-	O・P8-14	238	381	下顎骨	備考参照	R	1	[吻端P2×]		
				-	O・P8-14	238	384	下顎M	fr	?	1			
				-	O・P8-14	238	396	上腕骨	d	L	1			
				-	O・P8-14	238	391	脛骨	(p)	R	1			
				-	O・P8-14	238	393	中足骨	p	L	1	SF		
				-	O・P8-14	238	410	中手/中足骨	d	?	1			
				-	O・P8-14	238	398	基節骨		?	1	SF		
	-	-	494	385	下顎M	fr	?	1						
	HB④	イ	北東壁面付近(表土掘削時)	449	16	脛骨	m	R	1	SF, SD37mm				
	II	戦前	HB①	-	K・L18・19(37P)	375	390	上顎P2		L	1			
				-	O・P10・11(359SK)	340	392	上腕骨	<d->	L	1	SF		
				-	O・P10・11(359SK)	340	411	踵骨		R	1			
			HB②	イ	K8-10/L8-10/M9(1018SX)	3296	712	上顎M3		R	1			
			ロ	Q-S8-9(2003SZ)	3374	699	下顎骨	関節突起	R	1	CM			
			III	グスク時代～近世	HB①	-	O13・14・P13	575	387	中手骨	<p->-m	L	1	
	-	P10-15・Q15(271SD)				491	388	中手骨	p	R	1			
	-	-				574	414	末節骨		?	1	焼		
	ロ	Q12-13(2049SD)			3365	671	上腕骨	d	R	1				
	ロ	Q13(2038SK)			3388	694	上腕骨	<d->	R	1				
	ロ	R12(2049SD)			3366	709	上顎M		L	1				
	イ	K02			469	2	踵骨		L	1				
	イ	K04			454	37	踵骨		R	1				
	IV	グスク時代	HB①	-	O14	584	389	中手骨	d	L	1			
				-	O19	323	397	上顎/下顎M	fr	?	1			
				-	P09	585	377	下顎骨	備考参照	L	1	[吻端P2×P3×P4×]		
				-	P10	456	402	基節骨		?	1			
			ロ	R13	3363	701	大腿骨	(p)大腿骨頭	?	1				
			イ	M04	463	17	下顎M3		R	1				
	ウマ	I	戦後	HB①	-	O・P8-14	238	384	下顎P/M		L	1		
					-	O・P8-14	238	376	中足骨	m	?	1	SF	
				ロ	南側表土下精査	3327	713	上顎P/M		L	1			
				ロ	南側表土下精査	3327	696	下顎P/M		L	1			
II		戦前	HB②	イ	J・K10.11(1019SZ)	3291	718	橈骨	p	L	1			
				イ	K8-10/L8-10/M9(1018SX)	3296	708	下顎骨	備考参照	L	1	[<I1><I2><I3>]		
III		グスク時代～近世	HB①	-	L18(372SK)	202	407	下顎骨	備考参照	L	1	[I1I2I3×P2P3P4M1M2M3]♀. CM		
				-	O・P14-16	578	233	上顎P/M		R	1	[I1I2I3×P1P2P3]♀. Lと同一個体		
			ロ	R10(2007P)	3378	715	上顎P/M		L	1				
				R12(2049SD)	3366	697	上顎P2		L	1				
				R12	3341	698	上顎P2		L	1				
				R12	3341	714	上顎P/M		L	1				
				R12	3341	702	上顎P/M		R	1				
				イ	K02	458	19	下顎骨	関節突起	L	1	CM		
			IV	グスク時代	HB①	-	N13	586	395	手/足根骨		?	1	
						-	O・P14	448	401	基節骨		?	1	
ロ		ロ			P09	449	399	末節骨		?	1			
		ロ			Q09	3346	716	上顎P/M		L	1			
		ロ			Q12	3373	690	脛骨	d	R	1			
イ		イ			M04	455	18	上顎P/M		L	1			
		イ			N05	450	1	中足骨	p	L	1	SF		
V		備考参照	HB②	イ	J・K10	3063	710	下顎P/M		R	1	III層からの混入と考えるとよい		
ウシ/ウマ		戦前	HB①	-	K・L12(1SK)	377	379	椎骨	椎体			1		
	-			O13・14・P13	575	378	腰椎				1			
	ロ			R12	3341	692	椎骨				1			

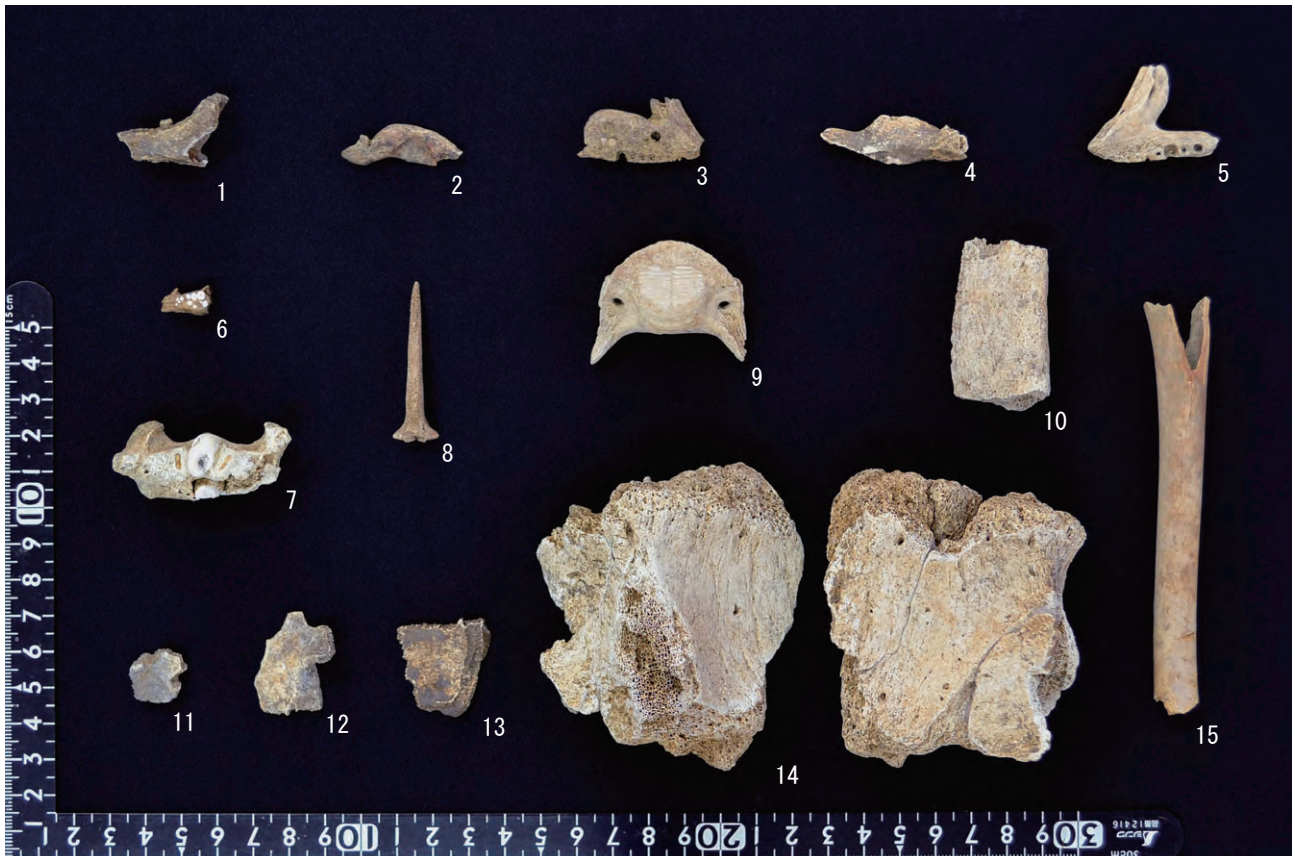
第94表. 平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集されたその他の哺乳類の同定結果および同定不可資料

*1 残存位置略号凡例は第90表・第91表を参照. *2 備考略号凡例: SF スパイラルフラクチャー.

種類	層準	年代	地区	地区 細分	グリッド/ 出土位置(遺構)	台帳 番号	骨 番号	部位	残存位置 *1	左右	数	備考 *2
ウサギ科	II	戦前	HB②	イ	J・K12(1006SK)	3289	368	踵骨		L	1	
ネズミ科	V	貝塚時代後期前半	HB②	イ	K12	3241	411	上腕骨	(p-)-d	L	1	大型. SD4mm
ネコ	IV	グスク時代	HB②	ロ	S12	3371	700	上腕骨	d	R	1	
イヌ	V	貝塚時代後期前半	HB②	イ	L09	3215	725	環椎			1	
					K10	3216	652	寛骨	臼	R	1	
小型獣(未同定)	V	貝塚時代後期前半	HB②	イ	K11	3220	654	寛骨	臼	R	1	大型のネズミ科の可能性あり
小型獣 (同定不可)	V	貝塚時代後期前半	HB②	イ	K10	3233	494	肋骨	m	?	1	
					K11	3220	398	四肢骨	骨端		1	
ヤギ	I	戦後	HB①	-	-	494	137	上腕骨	(d-)	R	1	
					-	494	412	橈骨	m	L	1	SF. SD18mm
	II	戦前	HB②	ロ	P・Q08・09(358SK)	484	332	脛骨	m	R	1	SD11mm
					南側	3328	686	上顎骨	[P2P3P4]	R	1	
III	グスク時代～近世	HB②	イ	-	3086	419	上顎	M	R	1		
ヤギ?	II	戦前	HB①	-	P・Q08・09(358SK)	484	333	頸椎			1	
					K・L12(1SK)	377	373	中足骨?	p?	?	1	
イルカ	V	貝塚時代後期前半	HB①	-	K12-14・J13・14・114	564	418	椎骨	椎頭板		1	
					HB②	イ	L10(1226)	1226	644	椎骨		
クジラ	V	貝塚時代後期前半	HB①	-	L15	539	375	椎骨			1	
哺乳類 (同定不可)	I	戦後	HB①	-	-	494	328	中足骨?	m	?	1	SF
					K・L12(1SK)	377	327	大腿骨	m	?	1	
	II	戦前	HB①	-	K・L12(1SK)	377	156	脛骨	(d-)	L	1	CM. SD10mm
					K・L12(1SK)	377	114	四肢骨	m	?	1	
			HB②	ロ	南側	3328	693	椎骨		3		
					南側	3328	707	四肢骨	m	?	1	
	III	グスク時代～近世	HB②	ロ	R10(2007P)	3378	664	四肢骨	m	?	1	製品
	IV	グスク時代	HB①	-	O20	587	326	四肢骨	m	?	1	
					HB②	ロ	R12	3364	680	椎骨	椎体	
	V	貝塚時代後期前半	HB①	-	J・K17・18	279	134	脛骨	m	?	1	SD12mm
					K12	538	230	上腕骨	<d->	R	1	
					L19	536	236	四肢骨	m	?	1	SD12mm
					L19	563	237	四肢骨	m	?	1	
			HB②	イ	I12	3230	417	四肢骨	m	?	1	
					J・K12(1023SX)	3272	719	肋骨	m	?	1	
					J12	3066	243	四肢骨	m	?	1	
					K10	3229	721	肋骨	m	?	1	
K11					3220	414	四肢骨	m	?	1		
K11					3242	242	四肢骨	m	?	1		
K11					3242	206	四肢骨	m	?	1		
K12					3241	723	肋骨	m	?	1		
L09			3215	722	肋骨	m	?	1				
下層重機掘削後	3243	720	肋骨	m	?	1						
HB④	イ	M04	463	38	四肢骨	m	?	1	ウシ/ウマ幼獣の可能性あり			
VI	～貝塚時代後期前半	HB①	-	L18	580	84	顎骨			1	焼	
鳥類/哺乳類 (同定不可)	IV	グスク時代	HB④	イ	O09	471	36	四肢骨	m	?	1	
同定不可	V	貝塚時代後期前半	HB①	-	K12	306	367	四肢骨	m		1	
					HB②	イ	K11	3220	480	四肢骨?		

第95表. 平安山原B遺跡HB①・②・④地区から採集された脊椎動物遺体の組成.

種類	同定標本数(NISP)																				最小個体数(MNI)																					
	I層				II層				III層				IV層				V層				VI層			不明			総計	I層	II層	III層	IV層	V層	VI層	合計								
	HB①	HB②	HB④	合計	HB①	HB②	合計	HB①	HB②	HB④	合計	HB①	HB②	HB④	合計	HB①	HB②	HB④	合計	HB①	HB②	合計	HB①	HB②	合計																	
ウツボ科				0				0				0				0				0				0				0	1				1				1				1	
アナゴ科				0				0				0				0				0				0				0	2				2				2				2	
ハタ科				0				0				0				0				0				0				0	2				2				2				2	
アジ科(大型)				0				0				0				0				0				0				0	4				4				4				4	
フェダイ科				0				0				0				0				0				0				0	2				2				2				2	
クロダイ属				0	1			1				0				0	3	6			9				0				0	10			1				3				4	
フェアキダイ属(ハマフェアキ型)				0				0	1			1				0	4	16			20				0		1		1	22				1		1		13				
フェアキダイ属				0				0				0				0		8			8				0				0	8								<3>				0
フェアキダイ科				0				0				0				0	1	30			31				0				4	4								<11>				0
タイ型				0				0				0				0		7			7				0				1	1								8				0
ベラ科(タキベラ型)				0				0				0				0	1			1				0					1								1				1	
ベラ科A				0				0				0				0	1			1				0					1								1				1	
ベラ科B				0				0				0				0		1		1				0					1								1				1	
イロブダイ属				0				0				0				0		6		6				0					6								2				2	
アオブダイ属				0				0				0				0		3		3				0					3								3				3	
オニオコゼ科?				0				0				0				0		1		1				0					1								1				1	
コチ科				0				0				0				0		1		1				0					1								1				1	
モンガラカワハギ科				0				0				0				0	1	1		2				0					2								2				2	
ハリセンボン科				0				0				0				0	2	3	1	1	7				0					7								4				4
真骨類(未同定)				0				0				0				0		1		1	2				0					2								-				0
真骨類(保留)				0				0				0				0		4		4				0					4								-				0	
真骨類(同定不可)				0				0				0				0		2		2				0					2								-				0	
魚類合計	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	13	101	1	2	117	0	0	0	0	0	1	5	6	125	0	1	1	0	36	0	38					
ウミガメ類				0				0				0				0	1	4	2	1	8				0					8								1				1
リクガメ類				0	1			1				0				0	2	5		7				0					9			1				2				3		
鳥類(同定不可)				0			1	1				0			1				1				0					3			1		1		1				3			
オオコウモリ科				0				0				0				0		21		21				0				2	2								5				5	
オオコウモリ科?				0				0				0				0	11	63		74				0				3	3	77	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ウサギ科				0			1	1				0				0				0				0					1			1								1		
ネズミ科				0				0				0				0		1		1				0					1								1				1	
ネコ				0				0				0			1				1				0					1								1				1		
イヌ				0				0				0				0		2		2				0					2								1				1	
小型哺乳類(未同定)				0				0				0				0		1		1				0					1								-				-	
小型哺乳類(同定不可)				0				0				0				0		2		2				0					2								-				-	
イノシシ /ブタ	上顎骨(幼獣)				0				0				0				0	1		1				0					1								<1>				-	
	上顎骨(成獣)	1			1				1				0				0	11	30		41				0					43	1	<1>				<11>				-		
	上顎歯(乳歯)				0				0				0				0				0				0					0								<1>				-
	上顎歯(永久歯)				0			2	2				0				0	13	12		1	26				0					28	<1>	<1>				<12>				-	
	下顎骨(幼獣)				0			1	1				0				0	4	9		13				0		1			15			<1>				7				-	
	下顎骨(成獣)	1	1		2	1		2	3	1			1	1	1		1	29	63	1	93	1			1					101	<1>	<1>	1	1	<17>	1			-			
	下顎歯(乳歯)				0				0				0				0		1		1				0					1								<6>				-
	下顎歯(永久歯)				0	1	1	1	3	1			1	1	1		1	35	38	1	74	1			1	1				81	<1>	2	<1>	<1>	26	<1>		-				
	顎歯合計	2	1		3	3	1	6	10	2			2	2	1		2	93	153	2	249	2			2	2	1	1		2	270	<1>	<3>	<1>	1	33	<1>	-				
その他	6	4	1		11	55	8	23	86	7	3	1	1	12	1	3	3	7	176	353	1	11	541	14	3	17	2	12	1	15	689	2	5	3	<1>	<23>	2	-				
総計	8	5	1	0	14	58	9	29	96	9	3	1	1	14	2	3	4	9	269	506	3	12	790	16	3	19	3	13	1	17	959	2	5	3	1	33	2	46				
ヤギ/ヤギ?	2				2	3		2	5			1								0				0					8	1	1	1				3				3		
ウシ	9			1	10	3	1	1	5	3			3	2	8	4	1	1	6				0					29	1	1	1	1				4				4		
ウマ	2			2	4			2	3			5	2	10	3	2	2	7		1				0					24	1	1	2	1	1				6				
ウシ/ウマ				0	1			1	1			1		2						0				0					3	-	-	-	-	-	-	-	-	-				
イルカ類				0				0				0				0	1	1		2				0					2								1				1	
クジラ類				0				0				0				0	1			1				0					1								1				1	
哺乳類(同定不可)	1				1	3		4	7			1	1	1	2		3	4	10	1	15	1					28	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
同定不可		</																																								



クロダイ属 1 歯骨 (L) 2 主上顎骨 (R) 3 前上顎骨 (L) フェフキダイ科 4 主上顎骨 (L) フェフキダイ属 (ハマフエフキ型) 5 前上顎骨 (R)
ベラ科 A 6 下咽頭骨 ベラ科 (タキベラ型) 7 下咽頭骨 モンガラカワハギ科 8 背鰭棘 ハリセンボン科 9 歯骨
ウミガメ 10 縁骨板 リクガメ 11 内腹板 12 中腹板 or 下腹板 13 剣状腹板 (R) クジラ 14 椎骨 ヤギ 15 脛骨 (R)



ウマ 16 下顎歯 (L) 17 中足骨 (L) 18 基節骨 19 上顎歯 (R) 20 下顎骨 (L)
ウシ 21 脛骨 (R) 22 上腕骨 (L) 23 踵骨 (L) 24 中手骨 (L) 25 中手骨 (R) 26 基節骨
図版 137 脊椎動物遺体 1 (上段：魚類、ウミガメ類、リクガメ類、クジラ、ヤギ・下段：ウマ、ウシ)



1 下顎C (L・マ) 2 上顎骨 (R) 3 下顎骨 4 下顎M3 (R・マ) 5 下顎骨 (R・L・マ) 6 下顎骨 (R) 7 下顎骨 (R) 8 下顎骨 (L)
9 下顎骨 (L) 10 下顎骨 (L) 11 下顎骨 (L) 12 環椎 13 肩甲骨 (L) 14 肩甲骨 (L・幼獣)



15 上腕骨 (R) 16 上腕骨 (L) 17 橈骨 (R) 18 橈骨 (R) 19 尺骨 (R) 20 寛骨 (R) 21 寛骨 (L) 22 脛骨 (R) 23 距骨 (R) 24 踵骨 (R)
25 第2中手骨 (L) 26 第3中手骨 (L) 27 第4中手骨 (L) 28 第5中手骨 (L) 29 第2中足骨 (R) 30 第3中足骨 (R) 31 第4中足骨 (L)
32 第5中足骨 (R) 33 基節骨 34 末節骨

図版 138 脊椎動物遺体 2 (イノシシ)



ブタ 1 環椎 2 上腕骨 (R) 3 肩甲骨 (R) 4 大腿骨 (L) 5 脛骨 (L) 6 脛骨 7 踵骨 (L)



オオコウモリ科 8・9 下顎骨 (R) 10 上腕骨 (L) 11 橈骨 (R) 12 鎖骨 (L) 13・14 四肢骨 (骨幹)

図版 139 脊椎動物遺体 3 (上段：ブタ・下段：オオコウモリ科)

第2節 平安山原B遺跡の調査で得られた貝類遺体

黒住耐二（千葉県立中央博物館）

平安山原B遺跡は沖縄島中部西岸・北谷町に位置する沖縄貝塚時代後期から戦後までの遺跡である。周辺では米軍基地返還に伴って大面積の多くの発掘調査が行われており、本遺跡もそのひとつである。今回、平安山原B遺跡の貝類遺体を検討する機会を与えて頂いたので、ここに結果を報告する。報告に先立ち、種々お世話になった北谷町教育委員会の島袋春美・山城安生・東門研治の各氏、大量の貝類遺体の同定・集計・入力を行って頂いた資料室の方々に御礼申し上げる。

対象サンプルと調査地点について

今回の報告対象サンプルは、平成20年度調査のHB①地区、平成21年度調査HB②イ地区・ロ地区および平成23年度のHB④イ地区・ロ地区からピックアップ法によって得られたもので、土壌サンプルから抽出された遺体は含まれていない。得られた貝類は種の同定・出土部位・生死等を記録して、各グリッドの包含層および遺構ごとに集計され、その基礎データはCDに収録されている。報告者は、大部分の種の同定を行い、一部の誤同定と考えられる種に関しては沖縄の類似種に修正した。この膨大なデータを、同定標本数(NISP)として処理した。同定標本数の場合、チョウセンサザエ等は殻とフタ・破片が、二枚貝では左右殻と破片が、それぞれ1として集計され、破片の多くなる大形種や二枚貝で、最少個体数よりも過大評価となってしまう。ただ、今回のデータ間での比較には大きな影響を与えないと考えられる。

報告に際し、各時代の土器や他の人工遺物等の集中域が認められ、特に自然流路とされたIV層ではグスク時代初期の遺物がまとまっていたことから、第96表・第172図に示したように、V層をA～Eの5地区に、IV層をF～Hの3地区に区分して検討を行った。

第96表 平安山原B遺跡の貝類遺体分析地区名

層位	時代	地区名	本章地区名	対象グリッド	備考
IV層	貝塚時代後期末～グスク時代初期?	HB①/HB②ロ	H区	O10-15, P8-15, Q8-14, R9-13, S9-13	
		HB①/HB④イ	G区	N16-20/1, O16-20/1, P16-20/1	
		HB④イ	F区	K3-5, L3-5, M1-5, N2-3	
V層	貝塚時代後I期	HB④ロ	E区	Q10-15, R10-15, S10-15, TQ10-11	大当原式土器中心
		HB①/HB②ロ	D区	O10-15, P8-15, Q8-14, R9-13, S9-13	
		HB①/HB④イ	C区	N16-20/1, O16-20/1, P16-20/1	大当原式土器中心?(流れ込み?)
		HB①/HB④イ	B区	J18-20/1・2, K18-20/1・2, L18-20/1・2	大当原式土器中心
		HB②イ地区/HB①	A区	I10-16, J9-16, K8-16, L8-16	阿波連浦下層式土器・浜屋原式土器中心

結果および考察

今回の調査で、少なくとも第98表に示した海産腹足類29科137種、海産二枚貝類20科66種、淡水産腹足類3科6種、陸産腹足類4科7種、その他4種の合計221分類群が確認された。第91表には層序・地区・遺構ごとにまとめた個体数(同定標本数)を示した。以下の解析は、この表をもとに行った。

1. 優占種および生息場所類型組成

先史時代のV・IV層のいずれかの地区で、5%以上を占める種を優占種として、貝塚時代後I期

前半から戦後までの変遷を第173図左に示した。本遺跡で最も古い貝塚時代後I期前半の阿波連浦下層式土器と浜屋原式土器を主体とするA地区では、イソハマグリが約1/3と多く、マガキガイ・シャコガイ類・カワラガイ等も5%程度であった。後I期後半の大当原式期のB・E地区では(C・D地区は比較的出土数が少なかったので図示しなかった)、イソハマグリが減少し、マガキガイ・シャコガイ類・サラサバテイラ等が多くなり、前の時代とは異なった組成を示していた。また、B・E両地区の組成は相違していた。

グスク時代初期の遺物を含むIV層では、F・G・Hの3地区で、多少の相違は存在するものの、マガキガイが20%以上で、シャコガイ類も多いという同様な傾向を示した。この組成は、マガキガイの割合が少し減少するが、III層のグスク時代～近世、II層の戦前およびI層の戦後まで、同様であった。

生息場所類型組成では、V層A地区で、イソハマグリが多かったことにより、潮間帯の割合が最も高く、イノー内と内湾域が25%程度と続いていた。後I期後半のB・E地区では組成は大きく異なり、B地区ではイノー内と内湾域が約1/3ずつを占めており、E地区ではイノー内が70%近くで、礁斜面も10%以上とサンゴ礁域の利用が顕著であった。

IV層になると、どの地区でもイノー内が2/3を占め、内湾域は10%程度という組成となっていた。優占種と同様に、III層・II層・I層とも生息場所類型でも、僅かに上部層で内湾域のものの割合が高くなる傾向が認められたものの、IV層と大きく変化することはなかった。

また出土個体数は、小形個体の採集効率の問題も存在していると思われるが、V層で約38000と極めて多く、IV層で7000であったが、グスク～近世のIII層や戦前のII層では1000を下回っていた。戦後のI層は攪乱ということもあり、極めて少なかった。

2. 平安山原B遺跡の周辺他遺跡との比較

今回は時間の都合上、伊礼原遺跡(国指定外)等(黒住, 2014)と同様に、同定標本数(NISP)で解析を行った。本地域の多くの遺跡では、最少個体数(MNI)で評価を行っているので、両者の関係を検討する必要がある。そこで、遺構を含むV層の2つのグリッドのサンプルで、両者の関係を示したものが第97表である。その結果、同定標本数では二枚貝の左右殻を別々にカウントするため、当然であるが、イソハマグリやシャコガイ類ではNISPがMNIよりかなり高くなっている。逆に、巻貝のマガキガイでは両者は逆になり、MNIがおおよそ2倍の割合であった。破片の多いサラサバテイラでは出土数が極めて多くないため、両者の差は顕著ではなかった。全体として、NISPは、MNIの1.38倍から1.68倍となっており、約1.5倍程度多くなると思われる。両者の関係は当然、優占種が二枚貝かどうか等で異なるが一つの目安にはなるであろう。

平安山原B遺跡の貝類遺体では、試掘調査時の結果が島袋(2008)によって報告されている。その結果は今回のV層からII層にかけての優占種や生息場所類型組成において、およそ同様であった。一方、島袋(2008)の⑤層では、リュウキュウシラトリが優占している。この層は、今回ほとんど貝類遺体が得られなかったVI層(第91表)とも考えられる。

本地域の貝類遺体の時期別変遷を暫定的にまとめたが(黒住, 2014)、今回の平安山原B遺跡の結果は、1)貝塚時代後I期前半ではイソハマグリが優占していること、2)小堀原遺跡で認められたような貝塚時代後期にアラスジケマンの増加が認められないこと、3)貝塚時代後期から戦前まで大きく出土貝類遺体の組成が変化しないこと、4)グスク時代から戦前には貝類の出土量は少ないこと等を、より明確に示していると考えられる。

これらのことから、本地域においては地点（“集落”）により貝類の組成が異なり、今後、詳細に検討することによって、興味深い結果が得られるものと期待される。特に、ゴホウラ等の集積遺構が認められる貝塚時代後Ⅰ期の“集落”ごとの特性や、戦前（Ⅱ層）の製糖小屋（サーターヤ）・（第130図）のような作業場が存在するにもかかわらず貝類遺体の廃棄は少なかったこと、今後報告される予定の平安山原A遺跡の戦前の貝類遺体ではサンゴ礁域のものは少ないという発掘調査時の観察との相違等に焦点が当たると思われる。

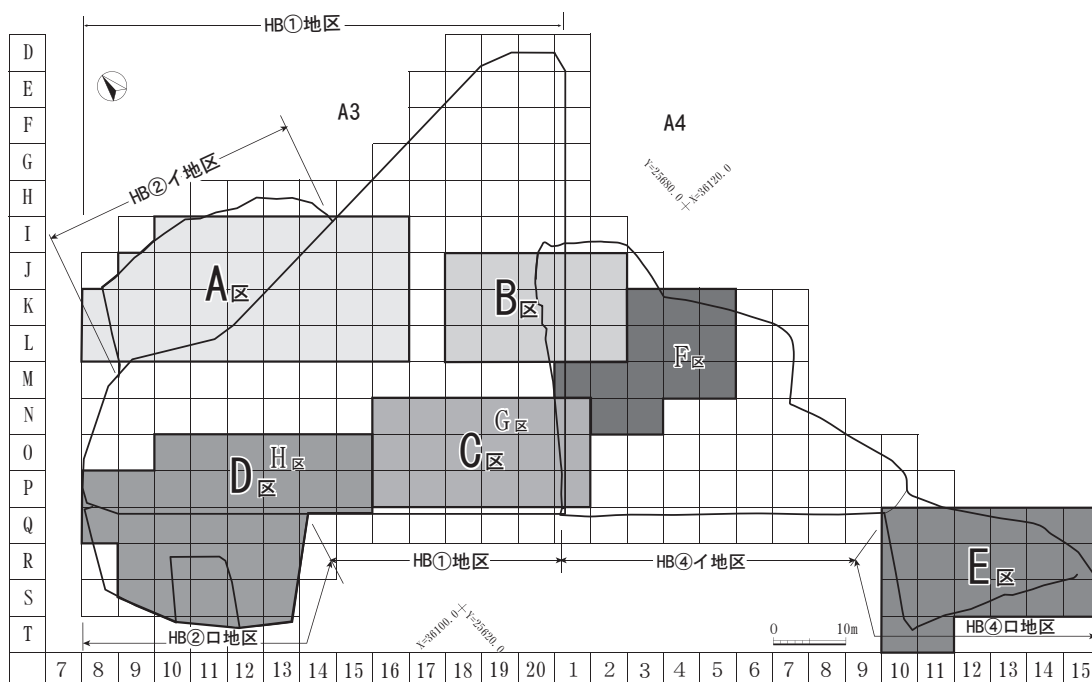
<引用文献>

- 黒住耐二. 2014. 伊礼原遺跡（国指定外）・伊礼原A遺跡の調査で得られた貝類遺体. 伊礼原遺跡（国指定外）・伊礼原A遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (36): 397-428.
- 島袋春美. 2008. 貝類遺体. 平安山原B遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (29): 104-114.

第97表 平安山原B遺跡における同定標本数（NISP）と最少個体数（MNI）の関係例.

	L14/V層/A地区					R12/V層/D地区					R13/V層/貝層群Ⅰ/D地区				
	NISP		MNI		備考*	NISP		MNI		備考	NISP		MNI		備考
		%		%			%		%			%			
イソハマグリ	1719	44.9	883	38.8	3d/1cv.7B	0	0.0	0	0.0		2	0.3	1	0.3	
マガキガイ	260	6.8	258	11.3	18d/3H	153	27.1	152	37.7	10/6H	120	19.4	120	30.1	14H
クモガイ	149	3.9	75	3.3	1d	31	5.5	17	4.2	1d/6H	25	4.0	9	2.3	
シャコガイ科全体	493	12.9	232	10.2	25d/8cv	148	26.2	73	18.1	5d	280	45.3	143	35.8	5d
チョウセンサザエ	58	1.5	31	1.4	15d/2H/1fB/18op	17	3.0	12	3.0		16	2.6	11	2.8	1d/2op
サラサバテイヤ	66	1.7	31	1.4	4/1H	68	12.0	49	12.2	3d	54	8.7	33	8.3	4d
カワラガイ	84	2.2	40	1.8	5d	15	2.7	8	2.0		6	1.0	3	0.8	
リュウキュウシラトリ	50	1.3	34	1.5	3/1B	0	0.0	0	0.0		0	0.0	0	0.0	
アラスジケマン	39	1.0	20	0.9		3	0.5	2	0.5		12	1.9	9	2.3	
その他	911	23.8	672	29.5	94d	130	23.0	90	22.3	15d	103	16.7	70	17.5	16d
合計	3829		2276			565		403			618		399		
NISP/MNI				1.68					1.38						1.55

* B:被熱, cv:合併, d:死殻, f:破片, H:人為的孔, op:フタ.



第172図 平安山原B遺跡貝類遺体分析地区名

第98表—1. 平安山原B遺跡出土貝類遺体の分類学的位置と生息場所類型.

和名	学名	生息場所 類計	図版 番号	和名	学名	生息場所 類計	図版 番号
軟体動物門 Mollusca				ヤクシマダカラ	Cypraea (Arabica) arabica	I-2-a	59
腹足綱 Gastropoda				ホソヤクシマダカラ	Cypraea (Arabica) eglantina	II-2-a	60
ツタノハ科 Patellidae				タルダカラ	Cypraea (Talparia) talpa	I-2-a	
ツタノハ	Scutellastra flexuosa	I-3-a		ホシダカラ	Cypraea (s.s.) tigris	I-2-c	62
ヨメガカサ科 Nacellidae				ヒメホシダカラ	Cypraea (Lyncina) lynx	I-2-b	63
オオベッコウガサ	Cellana testudinaria	I-1-a	2	ホシキヌタ	Cypraea (Mystaponda) vitellus	I-2-a	64
ユキノカサ科 Lottiidae				タマガイ科 Naticidae			
リュウキュウウノアシ	Patelloida saccharina	I-1-a	3	トミガイ	Polinices tumidus	I-2-c	66
ミミガイ科 Haliotidae				ヘソアキトミガイ	Polinices flemingianus	I-2-c	67
ミミガイ	Haliotis (Haliotis) asinina	I-3-a		ロウイロトミガイ	Polinices mellosus	I-2-c	68
リュウテン科 Turbinidae				ママミル	Mammilla melanostoma	I-2-c	69
チョウセンサザエ	Turbo (Marma) angrostomus	I-3-a	5,6	ハギノツユ	Notocochilis cernica	I-2-c	
ヤコウガイ	Turbo (Lunatia) marmoratus	I-4-a	7,8	ホウシュノタマ	Notocochilis gualtieriana	II-1-c	71
カンギク	Lunella moniliformis	II-1-b	9	ヤツシロガイ科 Tonnidae			
オオウラウズ	Astralum rhodostoma	I-2-a	10	ウズラガイ	Tonna perdax	I-2-c	73
ニシキウズ科 Trochidae				スクミウズラ	Tonna cepa	I-2-c	74
ニシキウズ	Trochus (Trochus) maculatus	I-2-a	12	イワカワトキワ	Malea (Quimalea) pomum	II-2-c	72
ムラサキウズ	Trochus (Trochus) stellatus	I-3-a	11	フジツガイ科 Ranellidae			
ギンタカハマ	Trochus (Tectus) pyramis	I-4-a	13	ミツカドボラ	Cymatium (Mon.) nicobaricum	I-2-a	75
コンダカギンタカハマ	Trochus (Tectus) triserialis	I-4-a	14	サツマボラ	Cymatium (Monoplex) aquatile	I-2-a	76
サラサバテイラ	Trochus (Rochia) niloticus	I-4-a	15	シノマキ	Cymatium (Monoplex) pileare	I-4-a	77
オキナワイシダタミ	Mondonta labio	II-1-b	16	ヒメツツカドボラ	Cymatium (Turritron) labiosum	I-4-a	
アマオブネ科 Neritidae				シオボラ	Cymatium (Gut.) muricinum	I-2-a	79
インダミアアマオブネ	Nerita (Ritena) helicinoidea	I-0-a	17	ボウシュウボラ	Charonia sauliae	I-4-a	80
コンダカアマガイ	Nerita (Ritena) striata	I-1-b	18	ホラガイ	Charonia tritonis	I-4-a	81
キバアマガイ	Nerita (Ritena) plicata	I-0-a	19	オキニシ科 Bursidae			
リュウキュウアマガイ	Nerita (Ritena) insculpta	I-0-a	20	イワカワウネボウ	Bursa (Colubrellina) granularis	I-2-a	83
アマオブネ	Nerita (Thelystyla) albicilla	I-1-b	21	オキニシ	Bursa (s.s.) bufonis dunkeri	I-3-a	84
マルアマオブネ	Nerita (Thelystyla) squamulata	II-1-b	22	シワクチナルトボラ	Tutufa rebeta	I-4-a	
オオマルアマオブネ	Nerita (Thelystyla) chamaeleon	I-1-b	23	オオナルトボラ	Tutufa bufo	I-4-a	86
ヒラマキアマオブネ	Nerita (Thelystyla) planospira	III-0-d		シロナルトボラ	Tutufa bufo	I-4-a	87
ニシキアマオブネ	Nerita (Amprinerita) polita	I-1-c	25	アツキガイ科 Muricidae			
ヌリツヤアマオブネ	Nerita (Amprinerita) rumphii	I-1-c	26	ガンゼキボラ	Chicoreus burunneus	I-2-a	88
カノコガイ	Clithon sowerbianus	III-0-e	27	テングガイ	Chicoreus ramosus	I-4-a	89
イガカノコ	Clithon corona	IV-5	28	テツレイシ	Thais (Stramonita) savignyi	I-1-a	90
カバクチカノコ	Neritina pulligera	IV-5	29	シラクモガイ	Thais (Stramonita) armigera	I-3-a	91
ドングリカノコ	Neritina plumbea	IV-5	30	ツノテツレイシ	Mancinella hippocastanum	I-1-a	92
シマ(ハコ)オカイシマキ	Neritodryas dubia	IV-6	31	ツノレイシ	Mancinella tuberosa	I-3-a	93
フネアマガイ	Septaria porcellana	IV-5	32	ハナノレイシ	Nassa vexillum	I-3-a	94
タニシ科 Viviparidae				キマダライガイレイシ	Drupa (s.s.) ricinus	I-3-a	95
マルタニシ	Chipangopaludina chinensis	IV-6	148	ムラサキガイレイシ	Drupa (s.s.) morum	I-3-a	96
ヤマタニシ科 Cyclophoridae				アカイガイレイシ	Drupa (Ricinella) rubusidaeus	I-3-a	97
オキナワヤマタニシ	Cyclophorus turgidus	V-8	149	オニコブシ科 Vasidea			
オニノツノガイ科 Cerithiidae				オニコブシ	Vasum ceramicum	I-3-a	98
オニノツノガイ	Cerithium (Cerithium) modulosum	I-2-c	34	オニコブシ	Vasum turbinellum	I-2-a	99
コオニノツノガイ	Cerithium (Cerithium) columnum	I-2-a	35	オリイレイヨフバイ科 Nassariidae			
トウガタカニモリ	Rhinoclavis sinensis	I-2-c	36	ヒメオリイレイムシロ	Nassarius sp. cf. nodifer	II-2-c	100
ヨコワカニモリ	Rhinoclavis aspera	I-2-c	37	イボフバイ	Nassarius coronatus	II-1-c	101
カヤノミカニモリ	Clypeomorom bifasciata	I-1-b	38	エゾバイ科 Buccinidae			
イフ(ウミナ)カニモリ	Clypeomorom batillariaeformis	II-1-b	39	ノシガイ	Engina (Pusiosstoma) mendicaria	I-1-a	102
ヘナタリ科 Cerithiidae				シマベッコウバイ	Japeuthria cingulata	II-1-b	103
カワアイ	Cerithidea (Cer.) djadjariensis	III-1-c	40	イトマキボラ科 Fasciolaridae			
ウミナ科 Batillariidae				イトマキボラ	Pleuroploca trapezium	I-2-b	105
リュウキュウウミナ	Batillaria flectosiphonata	II-1-c	41	ヒメイトマキボラ	Pleuroploca trapezium paeteli	I-2-b	106
イボウミナ	Batillaria zonalis	III-1-c	42	ナガイトマキボラ	Pleuroploca filamentosa	I-2-a	107
トウガタカワニナ科 Thiaridae				リュウキュウツノマタ	Latirus polygonus	I-3-a	108
トウガタカワニナ	Thiara scabra	IV-5,6	150	ツノマタモドキ	Latirus belcheri	I-3-a	109
ヌメカワニナ	Melanoides tuberculata	IV-6	151	チトセボラ	Fusinus nicobaricus	I-2-c	110
スグカワニナ	Stenomelania uniformis	IV-6	152	ミノムシガイ科 Costellariidae			
ヨシカワニナ	Stenomelania plicaria	IV-6	153	オオミノムシガイ	Vexillum plicarium	II-2-c	111
カワニナ科 Pleuroceridae				フデガイ科 Mitridea			
カワニナ	Semisulcospira bensoni	IV-5,6	154	イモフデガイ	Pterygia dactylus	I-1-b	112
スイショウガイ科 Strombidae				チョウセンフデ	Mitra mitra	I-2-c	113
ムカシタモト	Strombus (Canarium) mutabilis	I-2-c	43	イモガイ科 Conidae			
スイショウガイ	Strombus (Laevistrombus) turturella	II-2-c	47	マダライモ	Conus (Virroconus) ebraeus	I-1-a	114
ネジマガキガイ	Strombus (Gibberulus) g. gibbosus	II-1-c	44	サヤガタイモ	Conus (Virroconus) fulgetrum	I-1-a	115
マガキガイ	Strombus (Conomurex) luhuanus	I-2-c	45	ジュズガケサヤガタイモ	Conus (Virroconus) coronatus	I-1-a	116
イボソデガイ	Strombus (Lentigo) lentiginosus	I-2-c	46	イボシマイモ	Conus (Virgiconus) lividus	I-2-a	117
アツソデガイ	Strombus (Tricornis) thersites	I-4-c	48	ヤセイモ	Conus (Virgiconus) emaciatius	I-2-c	118
ゴホウラ	Strombus (Tricornis) latissimus	I-4-c	49	イボカバイモ	Conus (Virgiconus) distans	I-2-c	119
クモガイ	Lambis lambis	I-2-c	50	ヤナギシボリイモ	Conus (Rhizoconus) miles	I-3-a	120
ラクダガイ	Lambis truncata sebae	I-4-c	51	サラサミナシ	Conus (Rhizoconus) capitaneus	I-4-b	121
スイジガイ	Harpago chiragra	I-2-c	52	カバミナシ	Conus (Rhizoconus) vexillum	I-4-b	
ムカデガイ科 Vermetidae				ヤキイモ	Conus (Pinoconus) magus	I-2-c	123
ヘビガイ類	"Serplorbis" sp.	I-2-a	53	サラサモドキ	Conus (Dauciconus) vitulinus	I-2-c	124
タカラガイ科 Cypraeidae				アジロイモ	Conus (Darioconus) pennaceus	II-2-c	125
キイロダカラ	Cypraea (Monetaria) moneta	I-1-a	54	ニシキミナシ	Conus (Strioconus) striatus	I-2-c	126
ハナビラダカラ	Cypraea (Monetaria) annulus	I-1-a	55	アンボイナ	Conus (Gastriidum) geographus	I-2-c	127
ナツメモドキ	Cypraea (Eronea) erronea	I-2-b	56	ナンヨウクロミナシ	Conus (s.s.) marmoreus	II-2-c	128
コモンダカラ	Cypraea (Erosaria) erosa	I-2-b	57	ミカドミナシ	Conus (Rhombus) imperialis	I-2-c	129
ハナマルユキ	Cypraea (Rav.) caputserpentis	I-3-a	58	アカシマミナシ	Conus (Leptoconus) generalis	I-2-c	130

第98表-2. 平安山原B遺跡出土貝類遺体の分類学的位置と生息場所類型.

和名	学名	生息場所 類計	図版 番号	和名	学名	生息場所 類計	図版 番号
ゴマフイモ	<i>Conus (Puncticulis) pulicarius</i>	I-2-c	131	チドリマスオガイ科 Mesodesmatidea			
ダイミヨウイモ	<i>Conus (Cleobula) betulinus</i>	II-2-c	132	イソハマグリ	<i>Atactodea striata</i>	I-1-c	41
フデイモ	<i>Conus (Leporiconus) mitratus</i>	I-4-b		ナミノコマスオ	<i>Davila plana</i>	I-1-c	42
クロザメドキ	<i>Conus (Lithoconus) eburneus</i>	I-2-c	134	フジノハナガイ科 Donacidae			
アンボンクロザメ	<i>Conus (Lithoconus) litteratus</i>	I-2-c	135	リュウキュウナミノコ	<i>Latona faba</i>	I-1-c	43
クロフモドキ	<i>Conus (Lithoconus) leopardas</i>	I-2-c	136	ナミノコガイ	<i>Latona cuneata</i>	II-1-c	44
クダマキガイ科 Turridae				ニッコウガイ科 Tellinidae			
トラフクダマキ	<i>Lophiotoma acuta</i>	I-2-c		ニッコウガイ	<i>Tellinella virgata</i>	II-2-c	45
タケノコガイ科 Terebridae				ヒメニッコウガイ	<i>Tellinella staurella</i>	II-2-c	46
タケノコガイ	<i>Terebra subulata</i>	I-2-c	142	リュウキュウシラトリ	<i>Quidnipay palatum</i>	II-1-c	47
リュウキュウタケ	<i>Oxymeris maculatus</i>	I-2-c	144	ヌノメイチョウシラトリ	<i>Pistris capsoides</i>	III-1-c	48
ナツメガイ科 Bulliidae				サメザラ	<i>Scutarcopagia scobinata</i>	I-2-c	49
ナツメガイ	<i>Bulla vernicosa</i>	I-2-c	145	モチツギザラ	<i>Cyclotellina remies</i>	I-2-c	50
オカミガイ科 Ellobiidae				ハスメザクラ	<i>Loxoglypta transculpta</i>	II-1-c	51
ヒメヒラシイノミ	<i>Pythia nana</i>	V-10		アサジガイ科 Semelidae			
クロヒラシイノミ	<i>Pythia pachyodon</i>	III-0-a	146	サメザラモドキ	<i>Semele carnicolor</i>	II-1-c	52
キセルガイ科 Clausiliidae				イソシジミ科 Psammobiidae			
ツヤギセル	<i>Luchuphaedusa p. praeclara</i>	V-8	155	リュウキュウマスオ	<i>Asaphis violacens</i>	II-1-c	53
ナンバンマイマイ科 Camaenidae				マスオガイ	<i>Psammonaea elongata</i>	II-1-c	54
シュリマイマイ	<i>Satsuma (s.s.) m. mercatoria var.</i>	V-8	156	シジミ科 Cyreneidae			
カツレンマイマイ	<i>Satsuma (s.s.) m. katsurenensis</i>	V-7	158	シレナシジミ	<i>Geloina erosa</i>	III-0-c	55
ヤンバルマイマイ	<i>Satsuma (s.s.) atrata</i>	V-7		マルスダレガイ科 Veneridae			
ヒメユリ(シラキ)ヤマタカ	<i>Satsuma (Luc.) largillierti</i>	V-8	159	ヌノメガイ	<i>Periglypta puerpera</i>	II-2-c	56
アマノヤマタカマイマイ	<i>Satsuma (Luc.) amanoi</i>	V-8	160	アラヌメガイ	<i>Periglypta reticulata</i>	I-2-b	57
オナジマイマイ科 Bradybaenidae				カノコアサリ	<i>Glycydonta marica</i>	I-2-c	58
パンダナマイマイ	<i>Bradybaena circulus</i>	V-8	161	タイワンシラオガイ	<i>Circe tumefacta</i>	II-2-c	64
オキナウウスカワマイマイ	<i>Acusta d. despecta</i>	V-8	162	ホソスジイナミ	<i>Gafrarium pectinatum</i>	II-1-c	59
二枚貝綱 Bivalvia				アラスジケマン	<i>Gafrarium tumidum</i>	III-1-c	60
フネガイ科 Arcidae				ユウカゲハマグリ	<i>Pitar striatum</i>	II-2-c	61
オオタカノハ	<i>Arca ventricosa</i>	I-2-a	3	ウスハマグリ類	<i>Pitar sp.</i>	II-2-c	62
エガイ	<i>Barbatia (Abarbatia) trapezina</i>	I-1-a	1	ケショウオミナエシ	<i>Pitar(pitarina)obliquatum</i>	II-2-c	
ベニエガイ	<i>Barbatia (Ust.) amygdaloumstostum</i>	I-2-a	2	オイノカガミ	<i>Bonartemis histrio</i>	II-2-c	65
リュウキュウサルボオ	<i>Anadana (Anadana) antiquata</i>	II-2-b	5	リュウキュウアサリ	<i>Tapes literatus</i>	II-2-c	66
ハイガイ(セイウカ型)	<i>Tegillarca granosa f. obessa</i>	III-1-c	4	ヒメリュウキュウアサリ	<i>Tapes belcheri</i>	II-2-c	67
イガイ科 Mytilidae				ヒメアサリ	<i>Ruditapes variegata</i>	II-1-c	68
リュウキュウヒバリ	<i>Modiolus auriculatus</i>	I-1-a	8	スダレハマグリ	<i>Katelsia japonica</i>	II-1-c	69
ヒバリガイモドキ類	" <i>Brachidontes</i> " <i>variabilis</i>	III-1-a	6	トドムマリハマグリ	<i>Meretrix sp. cf. lamarcki</i>	II-2-c	70
ウグイスガイ科 Pteriidae				ハマグリ類似種	<i>Meretrix sp. cf. lusoria</i>	II-2-c	71
ミドリアオリ	<i>Pinctada panasesae</i>	I-1-a	11	ダテオキシジミ	<i>Cyclina orientalis</i>	III-1-c	72
アコヤガイ	<i>Pinctada fucata</i>	II-2-b	10				
クロチョウガイ	<i>Pinctada margaritifera</i>	I-4-a	9	頭足綱 Cephalopoda			
シュモクアオリ科 Isognomonidae				コウイカ科 Sepiidae			
カイシアオリの一種	<i>Isognomon sp.cf. perna</i>	I-1-a	12	コブシメ	<i>Sepia latimanus</i>	I-2	
シュモクガイ科 Malleidae				節足動物門 Arthropoda			
ニワトリガキ	<i>Malvufundus regula</i>	II-1-a		十脚類 Decapoda	crabs		
ウミギク科 Spondylidae				カニ類			
メンガイ類	<i>Spondylus sp.</i>	I-2-a	14	棘皮動物門 Echinodermata			
ベッコウガイ科 Picnodonteidae				ウニ綱 Echinoidea			
シャコガキ	<i>Hytissa hyotis</i>	I-2-c	15	パイプウニ(棘)	<i>Heterocentrotus mammillatus (spine)</i>	I-3-a	
イタボガキ科 Ostreidae				シラヒゲウニ?	<i>Tripneustes gratilla?</i>	I-2-c	
オハグロガキ	<i>Saccostrea mardox</i>	I-1-a	17				
ニセマガキ	<i>Saccostrea echinata</i>	II-1-b	16	生息場所類型 (Habitat)			
オハグロガキモドキ	<i>Saccostrea circumsuta</i>	II-1-b	18	I: 外洋-サンゴ礁域			
シロヒメガキ	<i>Ostrea fluctigera</i>	II-2-b	19	II: 内湾-転石域			
ツキガイ科 Lucinidae				III: 河口干潟-マングローブ域			
クチベニツキガイ	<i>Codakia punctata</i>	I-2-c	21	IV: 淡水域			
ウラツキガイ	<i>Codakia paytenorum</i>	II-2-c	22	V: 陸域			
ヒメツキガイ	<i>epicodakia bella</i>	I-2-c	23	VI: その他			
カブラツキガイ	<i>Anodontia edentula</i>	II-2-c	24	0: 潮間帯上部(Iではノッチ, IIIではマングローブ)			
キクザル科 Chamidae				1: 潮間帯中・下部			
シロザル	<i>Chama brassica</i>	I-4-a	26	2: 亜潮間帯上縁部(Iではイノー)			
キクザル類	<i>Chama spp.</i>		28	3: 干瀬(IIにのみ適用)			
ザルガイ科 Cardiidae				4: 礁斜面及びその下部			
リュウキュウザルガイ	<i>Vasticardium flavum</i>	II-2-c	29	5: 止水			
カワラガイ	<i>Fragum unedo</i>	II-2-c	30	6: 流水			
シャコガイ科 Tridacnidae				7: 林内			
オオシラナミ	<i>Tridacna maxima</i>	I-2-a	31	8: 林内・林縁部			
ナガジャコ(トカリシラナミ)	<i>Tridacna noae</i>	I-2-a	32	9: 林縁部			
シラナミ類	<i>Tridacna maxima & noae</i>	I-2-a		10: 海浜部			
ヒレジャコ	<i>Tridacna squamosa</i>	I-2-c	34	11: 打ち上げ物			
ヒメジャコ	<i>Tridacna crocea</i>	I-2-a	35	12: 化石			
シャゴウ	<i>Hippopus hippopus</i>	I-2-c	37	a: 岩礁/岩盤			
バカガイ科 Mactridae				b: 転石			
リュウキュウバカガイ	<i>Mactra maculata</i>	II-2-c	38	c: 礫/砂/泥底			
タママキ	<i>Mactra cuneata</i>	II-1-c	39	d: 植物上			
ユキガイ	<i>Meropesta nicobarica</i>	II-2-c	40	e: 淡水の流入する礫底			

第99表-1 平安山原B遺跡出土貝類遺体の地区別同定標本数 (NISP)

層序 地区名 遺構等	VI	V	V	V	V	V	V	V	V	IV	IV	IV	IV	IV	IV	III	III	III	III	III	II	II	II	II	I	I	I	表採
	合計	A	A遺構 SK・SS	B	C	D	E	E遺構 貝層群 I・III	一括	V 合計	F	G	H	H	一括	IV 合計	遺構 SK・P・ SD	遺構 SD	遺構 SZ	合計	遺構 SK・SD・P・ SX	遺構 SZ	合計	遺構 SZ	合計	合計	合計	
ツタノハ				1						1																		
オオベッコウガサ		26		7						33																		
リュウキュウウノアシ		1		1						2																		
ミミガイ		1								1																		
チョウセンサザエ		332	4	135	1	11	156	22	93	754	35	68	20	22	41	186	6	15	1	7	29	4	10	14	14	6	6	
チョウセンサザエ(蓋)		199	15	14			9	3	12	252	14	36	21	12	9	92	2				2		3	3	3			
ヤコウガイ		7		2					3	12		2	2		3	7				1	1							
ヤコウガイ(蓋)		13		2			5		1	21	3	3	1	1	2	10				1	1	2	2	2				
カンギク		57	8	8					2	75	2		1		2	5				1	1		1	1				
オオウラウズ		1					1			2												1	1	1				
ムラサキウズ		18					1			19				1	1	2							1	1	1			
ニシキウズ		196	2	22	1		9		8	238	3	5	5		3	16	3	5		1	9	1	3	4	5			
ギンタカハマ		144	2	18			8	2	5	179				2	1	6	1			1	2		4	4	4	2	2	
コシタカギンタカハマ		1								1																		
サラサバテイラ		462	9	185	10	6	410	109	98	1289	74	106	23	19	87	309	23	17	2	25	67	11	13	24	26	5	5	5
オキナワイシダタミ		12								12							1				1							
イシダミアマオブネ		1								1																		
コシダカアマガイ		1								1																		
キバアマガイ				1						1																		
リュウキュウアマガイ		3								3																		
アマオブネ		23	1	1						25							1				1		1	1	1			
マルアマオブネ		1								1				1	1													
オオマルアマオブネ		14		1						15																		
ヒラマキアマオブネ		2								2																		
ニシキアマオブネ		31	1	4					3	39		3		1	1	5		1			1		1	1	1			
ヌリツヤアマオブネ		1								1																		
カノコガイ		1								1																		
イガカノコ				1						1																		
カバグチカノコ		12		6					1	19		1				1		1			1							
ドンブリカノコ		9								9																		
シマオカイシマキ		2								2																		
フネアマガイ		1		2						3																		
アマオブネ科		2								2																		
オニノツノガイ		113	5	51		3	26	11	25	234	18	77	18	23	28	164	6	8	1	4	19	4	2	6	10			1
コオニノツノガイ		1								1																		
トウガタカニモリ																							1	1	1			
ヨコワカニモリ		1								1																		
カヤノミカニモリ		1								1																		
イワカニモリ		1	1							1																		
カワアイ		1								1																		
リュウキュウミニナ		4								4												1	1	2	2			
イボウミニナ		1								1																		
ムカシタモト		1								1																		
ネジマガキガイ		21		8			122	1	2	154	10	2	9	6	3	30	1	4			5	3	2	5	6	5	5	
マガキガイ		1800	19	705	3	7	661	271	197	3663	331	719	405	176	303	1934	49	66	2	32	149	65	52	117	122	21	21	
イボソデ		1		1			25	13		4	3	2	3		1	12								1				
スイショウガイ		1							1	2																		
アツソデガイ		2								2	1					1												
ゴホウラ		5		1					2	8		1				1												
クモガイ		600	14	203	2	2	191	79	80	1171	64	202	37	12	62	377	19	9	1	40	69	9	14	23	30	5	5	8

第99表-2 平安山原B遺跡出土貝類遺体の地区別同定標本数 (NISP)

層序 地区名	VI	V	V	V	V	V	V	V	V	IV	IV	IV	IV	IV	III	III	III	III	III	II	II	II	II	I	I	I	表採
	合計	A	A遺構	B	C	D	E	E遺構	一括	合計	F	G	H	H	一括	合計	遺構	遺構	遺構	合計	遺構	遺構	合計	遺構	合計		
ラクダガイ		3		1			5	2	1	12													1			1	
スイジガイ		18	2	11			11	6	3	51	3	2	4		1	10					1		1			1	
ヘビガイ類		2								2																	
キイロダカラ		27		6					1	33	1	1	1		3												
ハナヒラダカラ		31		3						35			5		2	7	1	1		2		2	2	2	1	1	
ナツメドキ		4								4																	
コモンダカラ		4								4																	
ハナマルユキ		2		1						3	3	1	3	3	5	15		1		1	2		2	2			
ヤクシマダカラ		30		15			6	1	2	54	5	3	2	3	4	17	1	1		2		2	2				
ホソヤクシマダカラ		13		2						15		1		1	2												
タルダカラ		1							1	2																	
ホンダカラ		164		117			43	21	27	372	37	36	12	2	27	114	6	4	2	1	13	4	3	7	8	1	1
ヒメホシダカラ		2		1						3					1	1					1		1	1			
ホシキヌタ		22					1		1	24	1	4	1		1	7		1		1	1		1				
タカラガイ類		3	1	1			1	1	1	8	1				5	6		1		1							
トミガイ		7							1	8				1		1											
ヘソアキトミガイ		3								3																	
ロウイロトミガイ		1		1						2					1	1		1		1							
リスガイ		16		5					1	22	1	2	2		5		1		1	2							
ハギノツユ		2								2																	
ホウシュノタマ		4							2	6			1		1							1	1	1			
イワカワトキワ		1								1																	
ウズラガイ		8		1					2	11																	
スクミウズラ		2								2																	
ミツカドボラ		6		2				2		10			1		1									1			
サツマボラ														1		1											
シノマキ		1								1																	
ヒメミツカドボラ													1			1											
シオボラ		6		3						9	1	1			1						1	1		1			
ボウシュウボラ		1								1		1				1											
ホラガイ		44		16			4	3	14	81	1	4		1	1	7							1				
フジツガイ科		1					1			2																	
イワカワウネボラ		1								1	1					1											
オキニシ		21		10			2	2	4	39	3	4	3	1	2	13											
シワクチナルトボラ				1				1		2																	
オオナルトボラ		1	1							2																	
シロナルトボラ							1			1																	
ガンゼキホラ		13		4			2	4	3	26	1	1		1	1	4											
テングガイ									1	1					1	1											
テツレイシ		1		1						3	1				1	1											
シラクモガイ		5		1		1	3	1	2	13	2	1			3						1	1	1				
ツノテツレイシ		1		3					1	5	1				1												
ツルレイシ		60		37		1	23	1	14	136	13	8	3	7	10	41	1	3		4		1	1	1			
ハナワレイシ		2								2																	
キマダライガレイシ				1						1																	
ムラサキイガレイシ		5					1			6	1	2			3												
アカイガレイシ		41		5			8		1	55		1	3	1	2	7		1		1	1	2	3	3			
オニコブシ		6							1	7		3		1	1	5											
コオニコブシ		35	1	1			43	6	2	97	5	24	7	8	2	46	1	1		1	3	2	2	4	4	1	1
ヒメオリレムシロ		4								4																	
イボヨウバイ													1		1												
フシガイ		1								1																	
シマベッコウバイ		8								8																	
エゾバイ科											2				2												
イトマキボラ		360	2	196	5	1	37	6	66	673	43	41	12	8	56	160	9	10		4	23	1	4	5	5	4	4

第99表-3 平安山原B遺跡出土貝類遺体の地区別同定標本数 (NISP) .

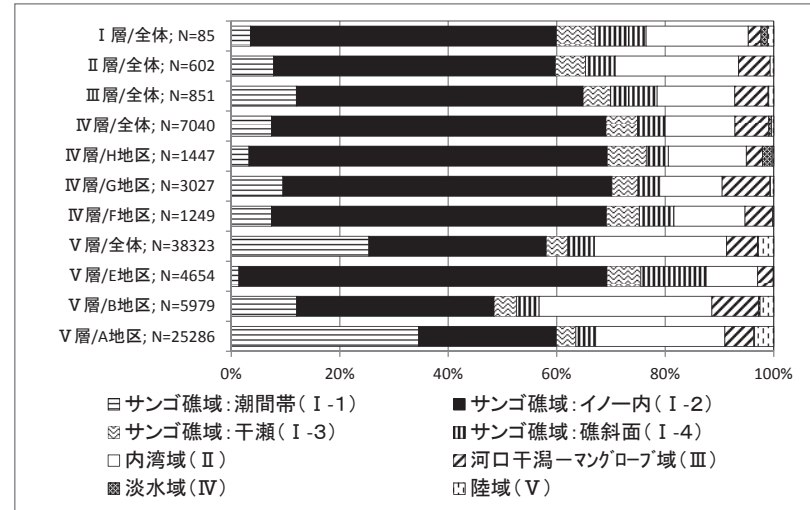
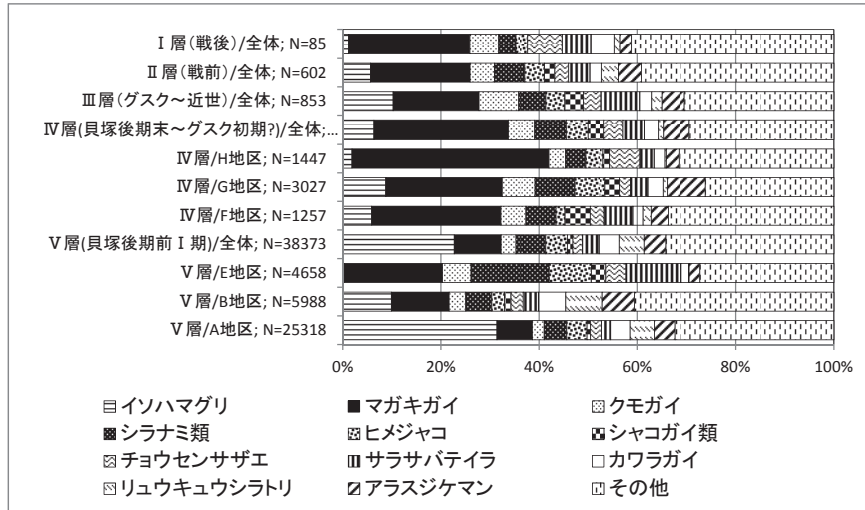
層序 地区名	VI	V	V	V	V	V	V	V	V	IV	IV	IV	IV	IV	III	III	III	III	III	II	II	II	II	I	I	I	表採
	合計	A	A遺構	B	C	D	E	E遺構	一括	合計	F	G	H	H	一括	合計	遺構	遺構	遺構	合計	遺構	遺構	合計	遺構	合計		
ヒメイトマキボラ		2								2																	
ナガイトマキボラ		6		10						16		2		1		3			1					1		1	
リュウキュウツノマタ																	1										
ツノマタモドキ		1								1			1														
チトセボラ		6		2				1	1	11	2	1	1	1	2	7			1		1						
オオミノムシ		1								1																	
イモフデ		2								3											1		1	1			
チョウセンフデ												1				1											
マダライモ		59	1	11				1	3	75	5	11	7	2	4	29		2		1	3					1	
サヤガタイモ																						1	1	1	1	1	
ジュズカケサヤガタイモ		9		3						12																	
イボシマイモ		4								5		1	1			2											
ヤセイモ		4		3						8						1											
イボカバイモ		1	1	1						3																	
ヤナギシボライモ		109	1	41			44	13	8	216	4	21	2		13	4		2		3	5	2	3	5	8		
サラサミナシ		16		7			6		4	33		5	3		1	9											
カバミナシ		3								3			1			1											
ヤキイモ		8		8					1	17			2			2											
サラサミナシモドキ																1											
アジロイモ		5		1						6			1			1								1		1	
ニシキミナシ		1								1		1	1			2											
アンボイナ		3								3																	
ナンヨウクロミナシ		17		1			6		1	25		1		1		2		2		2		1	1	1			
ミカドミナシ		2		2			1	2		7		1			2	3											
アカシマミナシ		5					6	2		13																1	
ゴマフイモ		4		2			4	1		11	1				1	2					2		2	2			
ダイミョウイモ				3						3		2	2			4											
フデイモ				1						1																	
クロザメモドキ		2		1			1			4		1		2	3												
アンボンクロザメ		89		31			34	21	15	190	11	36	8	3	37	95	2	1		9	12	1	4	5	7		
クロフモドキ		10		5			9	6	4	34	2	5			3	1											
小形イモガイ		21	2	5		1	36	8	3	76	8			1	3	12											
中形イモガイ		54		63		1	49	16	14	197	24	40	10	13	20	107	2	4		4	1		1	1	1	1	
大形イモガイ		5		6			1	9	7	28	12	4		2	2	20					1						
イモガイ科		2								2																	
トラフクダマキ		1								1																	
タケノコガイ											1					1		1			1						
ウシノツノガイ								1		1						1											
リュウキュウタケ													1														
ナツメガイ		3					1			4							1				1						
クロヒラシイノミガイ		1								1																	
ヒメヒラシイノミガイ		1								1																	
マルタニシ		1		1						2	3	1	8		3	15								1		1	
オキナワヤマタニシ		462	1	51					21	535		5	1	2	8			2		2		1	1	1			
トウガタカワニナ				1						1																	
ヌノメカワニナ												1	16			17											
スグカワニナ		1								1																	
ヨシカワニナ		1								1																	
カワニナ		11		4					1	16		1	2			3											
ツヤギセル		11								11																	
シュリマイマイ		104	2	38					8	152		4	1		2	7											
ヤンバルマイマイ			1							1																	
カツレンマイマイ		54	1	38		1	1	4	13	112		3	1		6				1		1	1	1	1	1		
ヒメユリヤマタカマイ		3								3					3												
アマノヤマタカマイ		2								2																	

第99表-4 平安山原B遺跡出土貝類遺体の地区別同定標本数 (NISP)

層序 地区名	VI	V	V	V	V	V	V	V	V	IV	IV	IV	IV	IV	IV	III	III	III	III	III	II	II	II	II	I	I	I	表採	
	合計	A	A遺構	B	C	D	E	E遺構	一括	合計	F	G	H	H	一括	合計	遺構	遺構	遺構	合計	遺構	遺構	合計	遺構	合計	遺構	合計		
パンダナマイマイ		231	1	24					7	264			4	1		5		5		5	1		1	2					
オキナウスカワマイマイ		14								14																			
オオタカノハ				1						1																			
リュウキュウサルボオ		147	2	100		1	63	29	49	391	38	69	31	22	44	204	7	3		1	11	4	6	1	11	3		3	2
エガイ		207	6	54			5		16	288	2	6	2	1	4	15	2	4			6	2		2					
ベニエガイ			1							1																			
ハイガイ		2		1			1		1	5																			
リュウキュウヒバリ		2							1	3																			
ヒバリガイモドキ類				1						1																			
イガイ科		6		3					1	10								1		1									
ミドリアオリ		228	12	11					12	263			3			3		1		1		3	1	4					
アコヤガイ		1		2						3																			
クロチョウガイ		210	2	15			4		8	239	1	1	1		2	5	2				2								
カイシアオリの一種		2								2																			
ニワトリガキ								1		1																			
ズンガイ類		123	2	57			27	18	27	254	13	33	11	3	20	80	1	1	2	2	6	3	25		28	8		8	2
シャコガキ							1			1																			
オハグロガキ				1						1																			
ニセマガキ		2								2																			
オハグロモドキ		1								1																			
シロヒメガキ		7								7																			
イタボガキ科		6		3						9																			
クチベニツキガイ													1			1													
ウラキツキガイ		155		89						280	1	5		1	3	10		2		1	3		3		3				
ヒメツキガイ		32		13						53						0						1		1		1			
カブラツキガイ		187	4	119						358						0		3		3		1		1		1			
ツキガイ科		2		2			1		17	22	5			3	8														
シロザル		1		1						2						0													
キクザル				2						2					0														
キクザル類		3		1			1	2	1	8			2	1	1	4													
リュウキュウザルガイ		323	2	153	1		1	2	76	558	7	15	3	4	9	38	1	3		1	5		3	1	4				
カワラガイ		990	16	334		4	59	18	155	1576	26	95	17	15	52	205	7	13		1	21	3	11		14	4		4	
オオシラナミ		5		3						8			2			2													
ナガジャコ		2								2				1		1		1		1									
シラナミ類		1160		317		2	463	278	108	2328	77	245	41	19	71	453	15	13	1	18	47	8	22	7	37	2	1	3	14
ヒレジャコ		66		19		1	26	27	12	151	2	5	2	1	3	13	3			3	3		6		6				10
ヒメジャコ		1041	8	155		2	241	160	82	1689	23	185	27	23	58	316	17	9		7	33	1	12	11	24	2		2	9
シャコガイ類		181	4	79		1	70	67	28	43	65	91	13	6	47	222	9	18		5	32	8	5		13			4	
シャゴウ		101	1	47	1		85	49	26	31	19	56	6	4	15	100	3	4		1	8	1			1	1		1	1
リュウキュウバカガイ		54		16	1				6	77		1			1	2	1	2			3		1		1				
タママキ		36	4	24					9	73								3			3								
ユキガイ		4		2						6																			
イノハマグリ		7758	187	591			13	2	159	8710	74	264	23	4	81	446	9	69		9	87	1	33		34	1		1	3
ナミノコマスオ		2		3					1	6							1				1								
リュウキュウナミノコ		64	3	13					1	81													1		1				
ナミノコガイ		1		2						3																			
ニッコウガイ		8		1					3	12					1	1		1		1									
ヒメニッコウガイ		7							1	8																			
リュウキュウシラトリ		1212	40	442	1	1	2		254	1952	21	27	4		22	74		15		3	18	4	15	2	21	1		1	
ヌノメイチョウシラトリ		2		1						3																			
サメザラ		12		1					1	14															1				
モチツキザラ				1			1	1		3	2	1				3		1			1		1		1				
ハスメザクラ																					1								
サメザラモドキ		32		21					6	59	1					1		2											
リュウキュウマスオ		378	21	40			23	9	38	509	4	44	3	8	6	65	1	1		1	3	2	17		19	1		1	1

第99表-5 平安山原B遺跡出土貝類遺体の地区別同定標本数 (NISP) .

層序 地区名	VI	V	V	V	V	V	V	V	V	V	IV	IV	IV	IV	IV	III	III	III	III	III	II	II	II	II	I	I	I	表採
	合計	A	A遺構	B	C	D	E	E遺構	一括	合計	F	G	H	H	一括	合計	遺構	遺構	遺構	合計	遺構	遺構	合計	遺構	遺構	合計	遺構	合計
マスオガイ		882	42	189	1	2	2	3	86	1207	12	13	3	2	20	50	2	4		6	2	21	1	24				
シレナシジミ	1	264	1	114			22	7	49	457	20	35	2	2	17	76	9	3		2	14	4	3		7			
ヌノメガイ		175	4	29			69	16	11	304	18	30	17	38	15	118	7	5	1	2	15	7	7		14			1
アラヌメガイ		1								1	1	2	2	6		11					1	1						
カノコアサリ		1								1																		
タイワンシラオ				1						1																		
ホソスジイナミ		299	17	85			4		37	442	13	19	7	1	3	43	1	4		1	6		2		2			1
アラスジケマン		1050	20	394		1	85	18	136	1704	44	231	31	7	48	361	11	21		6	38	2	26		28	2		3
ユウカゲハマグリ		175	3	88			1	1	54	322	3	5	1	2	2	13		3		3	1	3		4				
ウスハマグリ類		3		8					1	12																		
ケショウオミナエシ		1								1																		
オイノカガミ		79	3	43					25	150	3	2	1		1	7		1		1								
リュウキュウアサリ		12	2	2				1		17																		
ヒメリュウキュウアサリ		1								1																		
ヒメアサリ		23	1	2						26												1	1		2	1		1
スタレハマグリ		499	8	89			6	1	40	643	4	15	4		3	26	3	4		1	8		5	1	6	1		1
トウドユマリハマグリ		2					1			3		1				1												
ハマグリ類(似種)		1					1			2			1			1												
ダテオキシジミ		4		4					2	10				1		1												
コブシメ		8	4																									
頭足類?		1																										
カニ類/ツメ		1																										
パイプウニ/棘		70						1																				
シラヒゲウニ?		4																										
ウニ類		7																										



第173図 平安山原B遺跡における優占種 (左) と生息場所類型 (右) の変遷

〈巻貝〉

- ヨメガカサ科 2 オオベッコウガサ
ユキノカサ科 3 リュウキュウウノアシ
リュウテン科 5 チョウセンサザエ 6 チョウセンサザエの蓋 7 ヤコウガイ 8 ヤコウガイの蓋 9 カンギク
10 オオウラウズ
ニシキウズ科 11 ムラサキウズ 12 ニシキウズ 13 ギンタカハマ 14 コシタカギンタカハマ 15 サラサバティラ
16 オキナワイシダタミ
アマオブネ科 17 イシダミアマオブネ 18 コシダカアマガイ 19 キバアマガイ 20 リュウキュウアマガイ
21 アマオブネ 22 マルアマオブネ 23 オオマルアマオブネ 25 ニシキアマオブネ 26 ヌリツヤアマオブネ
27 カノコガイ 28 イガカノコ 29 カバグチカノコ 30 ドングリカノコ 31 シマ(ベニ)オカイシマキ 32 フネアマガイ
オニノツノガイ科 34 オニノツノガイ 35 コオニノツノガイ 36 トウガタカニモリ 37 ヨコワカニモリ
38 カヤノミカニモリ 39 イワ(ウミニナ)カニモリ
ヘナタリ科 40 カワアイ
ウミニナ科 41 リュウキュウウミニナ 42 イボウミニナ
スイショウガイ科 43 ムカシタモト 44 ネジマガキガイ 45 マガキガイ 46 イボソデ 47 スイショウガイ
48 アツソデガイ 49 ゴホウラ 50 クモガイ 51 ラクダガイ 52 スイジガイ
ムカデガイ科 53 ヘビガイ類
タカラガイ科 54 キイロダカラ 55 ハナビラダカラ 56 ナツメモドキ 57 コモンダカラ 58 ハナマルユキ
59 ヤクシマダカラ 60 ホソヤクシマダカラ 62 ホシダカラ 63 ヒメホシダカラ 64 ホシキヌタ
タマガイ科 66 トミガイ 67 ヘソアキトミガイ 68 ロウイロトミガイ 69 リスガイ 71 ホウシュノタマ
ヤツシロガイ科 72 イワカワトキワ 73 ウズラガイ 74 スクミウズラ
フジツガイ科 75 ミツカドボラ 76 サツマボラ 77 シノマキ 79 シオボラ 80 ホウシュウボラ 81 ホラガイ
オキニシ科 83 イワカワウネボラ 84 オキニシ 86 オオナルトボラ 87 シロナルトボラ
アッキガイ科 88 ガンゼキボラ 89 テングガイ 90 テツレイシ 91 シラクモガイ 92 ツノテツレイシ
93 ツノレイシ 94 ハナワレイシ 95 キマダライガレイシ 96 ムラサキイガレイシ 97 アカイガレイシ
オニコブシ科 98 オニコブシ 99 コオニコブシ
オリイレヨフバイ科 100 ヒメオリイレムシロ 101 イボヨフバイ
エゾバイ科 102 ノシガイ 103 シマベッコウバイ
イトマキボラ科 105 イトマキボラ 106 ヒメイトマキボラ 107 ナガイトマキボラ 108 リュウキュウツノマタ
109 ツノマタモドキ 110 チトセボラ
ミノムシガイ科 111 オオミノムシ
フデガイ科 112 イモフデガイ 113 チョウセンフデ
イモガイ科 114 マダライモ 115 サヤガタイモ 116 ジュズカケサヤガタイモ 117 イボシマイモ 118 ヤセイモ
119 イボカバイモ 120 ヤナギシボリイモ 121 サラサミナシ 123 ヤキイモ 124 サラサモドキ
125 アジロイモ 126 ニシキミナシ 127 アンボイナ 128 ナンヨウクロミナシ 129 ミカドミナシ
130 アカシマミナシ 131 ゴマフイモ 132 ダイミョウイモ 134 クロザメモドキ 135 アンボンクロザメ
136 クロフモドキ 137 小形イモガイ 138 中形イモガイ
タケノコガイ科 142 タケノコガイ 144 リュウキュウタケ
ナツメガイ科 145 ナツメガイ
オカミミガイ科 146 クロヒラシイノミガイ
タニシ科 148 マルタニシ
ヤマタニシ科 149 オキナワヤマタニシ
トウガタカワニナ科 150 トウガタカワニナ 151 ヌノメカワニナ 152 スグカワニナ 153 ヨシカワニナ
カワニナ科 154 カワニナ
キセルガイ科 155 ツヤギセル
ナンバンマイマイ科 156 シュリマイマイ 158 カツレンマイマイ 159 ヒメユリヤマタカマイマイ
160 アマノヤマタカマイマイ
オナジマイマイ科 161 パンダナマイマイ 162 オキナワウスカワマイマイ

巻貝・陸産貝名称 (図版 140 ~ 143 上)

(番号は第 98 表と一致)



図版 140 貝類遺体 1 (巻貝)

(番号は第 98 表と一致)



図版 141 貝類遺体 2 (巻貝)

(番号は第 98 表と一致)



図版 142 貝類遺体 3 (巻貝)

(番号は第 98 表と一致)



図版 143 貝類遺体 4 (上：陸産貝・下：二枚貝)

(番号は第98表と一致)



図版 144 貝類遺体 5 (二枚貝)

(番号は第 98 表と一致)



<二枚貝>

- フネガイ科 1 エガイ 2 ベニエガイ 3 オオタカノハ 4 ハイガイ 5 リュウキュウサルボオ
 イガイ科 6 ヒバリガイモドキ類 8 リュウキュウヒバリ
 ウグイスガイ科 9 クロチョウガイ 10 アコヤガイ 11 ミドリアオリ
 シュモクアオリ科 12 カイシアオリの一種
 ウミギク科 14 メンガイ類
 ベッコウガキ科 15 シャコガキ
 イタボガキ科 16 ニセマガキ 17 オハグログガキ 18 オハグログガキモドキ 19 シロヒメガキ 20 イタボガキ科
 ツキガイ科 21 クチベニツキガイ 22 ウラキツキガイ 23 ヒメツキガイ 24 カブラツキガイ
 キクザル科 26 シロザル 28 キクザル類
 ザルガイ科 29 リュウキュウザルガイ 30 カワラガイ
 シャコガイ科 31 オオシラナミ 32 ナガジャコ(トガリシラナミ) 34 ヒレジャコ 35 ヒメジャコ 37 シャゴウ
 パカガイ科 38 リュウキュウパカガイ 39 タママキ 40 ユキガイ
 チドリマスオ科 41 イソハマグリ 42 ナミノコマスオ
 ナミノコガイ科 43 リュウキュウナミノコ 44 ナミノコガイ
 ニッコウガイ科 45 ニッコウガイ 46 ヒメニッコウガイ 47 リュウキュウシラトリ
 48 スノメイチョウシラトリ 49 サメザラ 50 モチヅキザラ 51 ハスメザクラ
 アサジガイ科 52 サメザラモドキ
 イソシジミ科 53 リュウキュウマスオ 54 マスオガイ
 シジミ科 55 シレナシジミ
 マルスダレガイ科 56 スノメガイ 57 アラスノメガイ 58 カノコアサリ 59 ホソスジイナミ 60 アラスジケマン
 61 ユウカゲハマグリ 62 ウスハマグリ類 64 タイワンシラオ 65 オイノカガミ
 66 リュウキュウアサリ 67 ヒメリュウキュウアサリ 68 ヒメアサリ 69 スダレハマグリ
 70 トウドマリハマグリ 71 ハマグリ類似種 72 ダテオキシジミ

図版 145 貝類遺体 6 (二枚貝)

(番号は第 98 表と一致)

第3節 平安山原B遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告では、北谷町に所在する平安山原B遺跡から出土した土器片の付着物と炭化材の放射性炭素年代測定を行うことにより、土器と炭化材の年代資料を得ることを目的とする。また、土器の材質(胎土)の特性を明らかにすることにより、既知の地質情報等との比較などから、その生産と使用に係わる資料の作成を行う。また、土壌洗い出し済試料を対象として、炭化種実の同定を実施し、当時の植生や植物利用を検討する。

I. 放射性炭素年代測定

1. 試料

試料は、平安山原B遺跡から出土した土器付着炭化物3点、炭化材3点、樹木片1点の合計7点である。一覧を第100表に示す。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0.(Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正は、CALIB REV7.1.0.のマニュアルにしたがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68.2%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95.2%の確率で存

第100表. 試料一覧

試料番号	試料の質	型式など (土器分類)	分析		出土地			
			14C	胎土	地区	グリッド	層	
1	土器付着炭化物	在地VI類 第50図154	○	○	HB④	イ	P2	白砂層 下層トレンチ3
2	土器付着炭化物	在地IIc類 第41図86	○		HB②	イ	J10	白砂層
3	炭化材		○		HB②	イ	K11	貝層②
4	炭化材		○		HB②	ロ	R13	13層
5	土器付着炭化物	在地Id類 第36図56	○		HB②	イ	J12	黒砂層
6	炭化材		○		HB②	イ	J9	11層 1042SX-C
7	樹木片		○		HB④	ロ	R12	下層トレンチ4

在する範囲である。表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

(2) 胎土分析

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩石片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉砕による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。今回の試料のように比較的粗粒の砂粒を含み、低温焼成と考えられる土器の分析では、前者の方が、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。さらに前者の方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。

この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか(1999)の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、ここでは薄片観察法による胎土分析を行う。以下に手順を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径0.5mm以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

(3) 樹種同定

剃刀を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作成し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler 他(1998)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を第101表、暦年較正結果を第102表に示す。試料の測定年代(補正年代)は、試料番号1土器付着炭化物は $1,890 \pm 30\text{BP}$ 、試料番号2土器付着炭化物は $2,350 \pm 30\text{BP}$ 、試料番号3炭化材は $2,390 \pm 30\text{BP}$ 、試料番号4炭化材は $1,600 \pm 20\text{BP}$ 、試料番号5土器付着炭化物は $2,220 \pm 20\text{BP}$ 、試料番号6炭化材は $2,290 \pm 20\text{BP}$ 、試料番号7樹木片 $2,130 \pm 30\text{BP}$ の年代が得られた。測定誤差を σ として計算させた暦年較正年代の結果は、試料番号1はcalAD78-130、試料番

号2は calBC410-390、試料番号3は calBC483-402、試料番号4は calAD416-533、試料番号5は calBC360-210、試料番号6は calBC397-368、試料番号7は calBC202-112であった。炭化材試料および樹木片で残試料があるものの樹種を確認した結果、試料番号3はヤマグワ、試料番号4は広葉樹、試料番号6はマツ属複維管束亜属、試料番号7は広葉樹のアカテツに同定された。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

・アカテツ属 (*Pouteria*)

散孔材～放射孔材で、道管は2-10個が放射方向に複合して配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は、異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。軸方向柔細胞は短接線状～幅の狭い帯状となる。

第101表. 放射性炭素年代測定結果

試料番号	種類	出土地点など	補正年代 BP	δ 13C (‰)	測定年代 BP	Code No.
1	土器附着炭化物	HB④イ O2 白砂層 下層トレンチ3	1,890±30	-24.60±0.42	1,880±30	IAAA-122319
2	土器附着炭化物	HB②イ J10 白砂層	2,350±30	-23.90±0.63	2,330±20	IAAA-132708
3	炭化材(ヤマグワ)	HB②イ K11 貝層②	2,390±30	-25.70±0.70	2,400±20	IAAA-132709
4	炭化材(広葉樹)	HB②ロ R13 13層	1,600±20	-28.23±0.41	1,650±20	IAAA-140522
5	土器附着炭化物	HB②イ J12 黒砂層	2,220±20	-25.48±0.36	2,230±20	IAAA-140523
6	炭化材(マツ属複維管束亜属)	HB②イ J9 1042SX-C 11層	2,290±20	-23.24±0.39	2,260±20	IAAA-141176
7	樹木片(アカテツ)	HB④ロ R12 下層トレンチ4	2,130±30	-28.50±0.55	2,190±20	IAAA-143219

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第102表. 暦年較正結果

試料番号	補正年代 (BP)	暦年較正年代(cal)								相対比	Code No.					
		σ	cal	AD	78	-	cal	AD	130			cal	BP	1,872	-	1,820
1	1,889±25	σ	cal	AD	60	-	cal	AD	178	cal	BP	1,890	-	1,772	0.936	IAAA-122319
		2σ	cal	AD	187	-	cal	AD	213	cal	BP	1,763	-	1,737		
2	2,345±26	σ	cal	BC	410	-	cal	BC	390	cal	BP	2,359	-	2,339	1.000	IAAA-132708
		2σ	cal	BC	486	-	cal	BC	377	cal	BP	2,435	-	2,326		
3	2,386±26	σ	cal	BC	483	-	cal	BC	438	cal	BP	2,432	-	2,387	0.527	IAAA-132709
		2σ	cal	BC	435	-	cal	BC	402	cal	BP	2,384	-	2,351		
4	1,598±22	σ	cal	AD	416	-	cal	AD	433	cal	BP	1,534	-	1,517	0.257	IAAA-140522
		2σ	cal	AD	458	-	cal	AD	467	cal	BP	1,492	-	1,483		
5	2,220±23	σ	cal	AD	488	-	cal	AD	533	cal	BP	1,462	-	1,417	0.651	IAAA-140522
		2σ	cal	AD	407	-	cal	AD	536	cal	BP	1,543	-	1,414		
6	2,290±24	σ	cal	BC	360	-	cal	BC	351	cal	BP	2,309	-	2,300	0.098	IAAA-140523
		2σ	cal	BC	302	-	cal	BC	270	cal	BP	2,251	-	2,219		
7	2,133±25	σ	cal	BC	263	-	cal	BC	210	cal	BP	2,212	-	2,159	0.562	IAAA-140523
		2σ	cal	BC	371	-	cal	BC	337	cal	BP	2,320	-	2,286		
6	2,290±24	σ	cal	BC	329	-	cal	BC	204	cal	BP	2,278	-	2,153	0.842	IAAA-141176
		2σ	cal	BC	397	-	cal	BC	368	cal	BP	2,346	-	2,317		
7	2,133±25	σ	cal	BC	402	-	cal	BC	357	cal	BP	2,351	-	2,306	0.857	IAAA-141176
		2σ	cal	BC	284	-	cal	BC	253	cal	BP	2,233	-	2,202		
7	2,133±25	σ	cal	BC	246	-	cal	BC	236	cal	BP	2,195	-	2,185	0.023	IAAA-143219
		2σ	cal	BC	202	-	cal	BC	150	cal	BP	2,151	-	2,099		
7	2,133±25	σ	cal	BC	140	-	cal	BC	112	cal	BP	2,089	-	2,061	0.283	IAAA-143219
		2σ	cal	BC	348	-	cal	BC	315	cal	BP	2,297	-	2,264		
7	2,133±25	σ	cal	BC	208	-	cal	BC	88	cal	BP	2,157	-	2,037	0.868	IAAA-143219
		2σ	cal	BC	77	-	cal	BC	57	cal	BP	2,026	-	2,006		

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0(Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。

2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

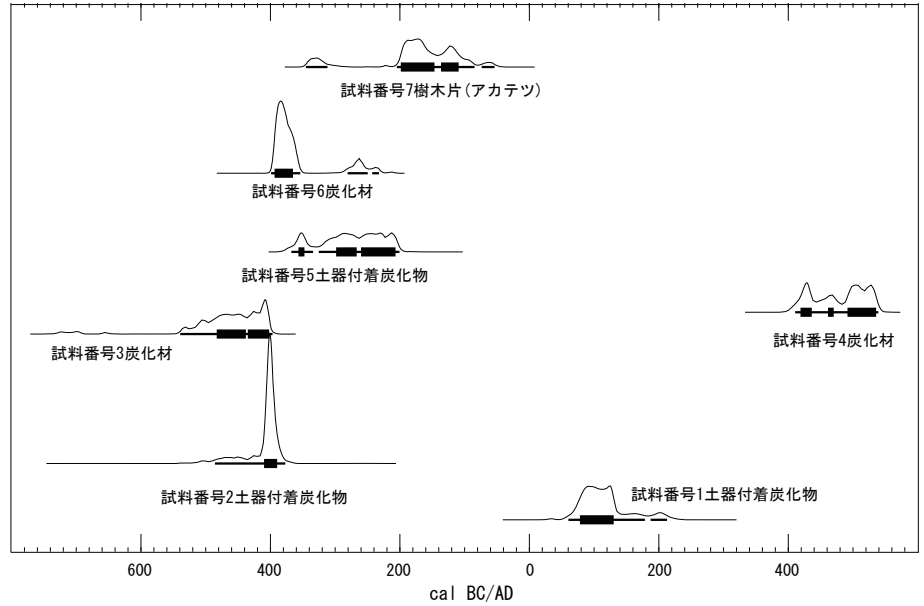
4)統計的に真の値が入る確率はσは68.2%、2σは95.4%である。

5)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

(2) 胎土分析

観察結果を第103・175表、第176図に示す。以下に試料の胎土の特徴を述べる。試料番号1の鉱物片では、石英と斜長石が同量程度で多く含まれ、他に少量の炭酸塩鉱物と微量のカリ長石、単斜輝石、角閃石が含まれる。斜長石の鉱物片は、清澄なものが多く認められる。岩石片は、全体的に微量しか含まれないが、その中では多結晶石英がやや多く、

他に凝灰岩や安山岩および風化岩と思われる変質岩などが認められる。粒径組成は中粒砂をモードとする。

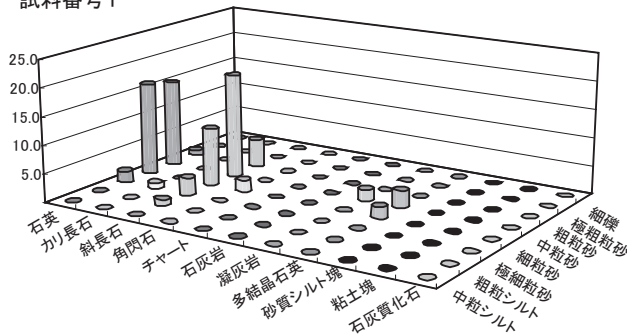


第174図. 暦年較正結果

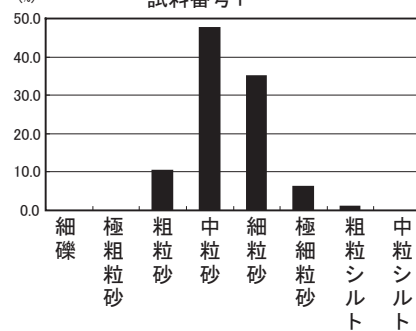
第103表. 薄片観察結果

試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成																合計									
		鉱物片								岩石片						その他											
		石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	緑簾石	白雲母	黒雲母	炭酸塩鉱物	不透明鉱物	チャート	頁岩	石灰岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩		多結晶石英	脈石英	変質岩	珪化岩	砂質シルト塊	粘土塊	石灰質化石	植物珪酸体	
1	細礫																									0	
	極粗粒砂																										0
	粗粒砂	1		5						4																	10
	中粒砂	15		18	1					4				2		1	3			2							46
	細粒砂	16		10	1	2				3							2										34
	極細粒砂	2	1	3																							6
	粗粒シルト			1																							1
中粒シルト																										0	
基質																										632	
孔隙																										28	
備考	基質は褐色粘土鉱物、雲母鉱物、酸化鉄などによって埋められ、褐色～赤褐色を示す。斜長石は清澄なものが多い。変質岩は、褐色化した風化岩など。																										

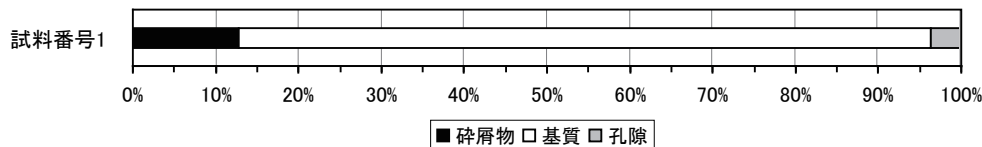
試料番号1



試料番号1



第175図. 胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成



第176図. 碎屑物・基質・孔隙の割合

7. 考察

(1) 年代について

試料番号1の土器付着炭化物の測定年代(補正年代)は $1,890 \pm 30BP$ であった。土器は器面に確認される明瞭な条痕から、当初、縄文時代前期の条痕文土器が想定された。測定された年代と同時期の浜屋原式土器や大当原式土器と比較しても器壁が厚く、底部の尖底の形状も異なる。一方、土器が出土した最下部の白砂層からは、共伴する遺物が確認されず、相対的な年代の検討ができなかった。したがって、付着物の由来は必ずしも土器使用時のものと一概には言えず、土器廃棄後の付着や汚染の影響なども考慮されるべきである。本試料の土器の年代については、現時点での検証は難しく、考古学からの検証も含めて今後の課題とすべきであろう。

試料番号2、3、5、6の4点はイ地区から検出された。そのうち試料番号6は、調査所見によると弥生面の燃焼遺構から検出されたものである。4点の測定年代(補正年代)をみると $2,220BP \sim 2,390BP$ の $2,200 \sim 2,400$ 年前頃のまとまった年代を示す。この年代は貝塚時代後期前半の年代で、本遺跡の主体土器である阿波連浦下層式土器から浜屋原式土器の年代と調和する。また、試料番号6の弥生面の燃焼遺構とする調査所見とも調和する結果が得られた。

試料番号4はロ地区のビーチロック上位の砂層から検出されたものである。測定年代(補正年代)は $1,600 \pm 20BP$ の貝塚時代後期中頃である。

(2) 胎土について

胎土中から検出された鉱物片や岩石片は、胎土の材料となった砂や粘土中に含まれていた碎屑物であるが、その由来は粘土や砂が採取された場所の背後に広がる地質、いわゆる地質学的背景に求めることができる。試料番号1の鉱物・岩石組成の特徴は、石英と同程度に多く含まれる斜長石と、岩石片では凝灰岩および安山岩しか認められないということである。斜長石の結晶は清澄であることから、斜長石は凝灰岩や安山岩に由来すると考えられる。したがって、胎土から推定される地質学的背景は、凝灰岩や安山岩が広く分布する山地や丘陵地を考えることができる。一方で、鉱物片には炭酸塩鉱物が少量ながらも含まれていることから、石灰岩の分布も混在すると考えられる。このような地質学的背景を有する地域を具体的に特定することはできないが、木崎編(1985)、日本の地質「九州地方」編集委員会(1992)、日本の地質増補版編集委員会(2005)等による記載からは、少なくとも沖縄本島内では認めることができない。したがって、試料番号1の土器は、沖縄本島内で作られた可能性は低く、沖縄本島以外の異なる地域から平安山原B遺跡に搬入された土器である可能性が高いと考えられる。

II. 種実同定

1. 試料

試料は、土壌水洗済36点(No. 1~36)で、乾燥した状態で水洗工程別に袋に入っている。内訳は、「LF」が36袋(No. 1~36)、「LF」内の17袋(No. 7, 8, 9, 13, 14(2袋), 15(3袋), 17(2袋), 18, 22, 28, 32, 36(2袋))と「2.8mm」が10袋(No. 1, 5, 8, 11, 16, 18, 20, 27, 30, 33)、「2.0mm」が8点(No. 5, 14, 15, 17, 21, 30, 34, 36)の合計71袋である。各試料の詳細は、結果とともに第104表に示す。

2. 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体を抽出する。同定は、現生標本および中山ほか(2000)等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて結果を一覧表で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで表示する。分析後は、

種実遺体を分類群別に容器に入れ、残渣は袋に戻して保管する。

3. 結果

結果を第104表に示す。全71試料を通じて、被子植物4分類群(オキナワジイ、コナラ属-シイ属、アカギ、イネ科)77個の種実遺体が同定された。2試料19個(No. 15, 36)は、炭化した破片で同定ができなかったが、オキナワジイの子葉の可能性がある。なお、59試料からは、種実遺体が検出されなかった。種実以外の分析残渣は、炭化材、植物片、虫類、骨片(椎骨、顎、歯など)、巻貝類、二枚貝類、ウニ類の棘、サンゴ片、有孔虫、岩片、砂礫、軽石(黄灰褐色)などが確認された。

種実遺体の保存状態は、オキナワジイ、コナラ属-シイ属は炭化している。一方、アカギ?の種子?1個(No. 8)と、イネ科の果実2個(No. 16, 30)は、炭化が認められず、イネ科の果皮表面には毛が残存している状況であった。半常緑高木のアカギと人里草本のイネ科は、調査区周辺に生育していたと考えられるが、後代の混入の可能性が高いと判断されるため、考察より除外している。

炭化種実は、オキナワジイの果皮片がNo. 14から20個、No. 15から28個、No. 18から1個、No. 26から1個、No. 36から3個の、計53個と、コナラ属-シイ属(おそらくオキナワジイ)の子葉の破片(疑問符含む)がNo. 15から14個、No. 26から7個の、計21個が同定された。果皮・子葉ともに、No. 15からの出土が最も多い(図版146)。炭化種実各分類群の写真を図版146に示し、形態的特徴等を以下に述べる。

・オキナワジイ(*Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatusima ex Yamazaki et Mashiba subsp. *lutchuensis* (Koidz.) H Ohba) ブナ科シイ属

果皮・子葉は炭化しており黒色を呈す。完形果実は、長さ1.5~2cm、径1~1.3cmの卵形で頂部は尖り、基部を占める着点は灰褐色、円状不定形で維管束の穴が不規則な輪状に並ぶ。出土果皮は破片で、頂部や基部を欠損し、最大片の残存長は5.3mmを測る(No. 15;図版146-2)。果皮は、厚さ約0.5~0.6mmで、横断面、縦断面ともに外面から厚さ0.3mm程度まで明瞭な柵状組織が確認される(図版146-2b, 3b, 3d)。果皮外面は粗面で、コナラ属やマテバシイよりも粗く深い溝が縦列する。果皮内面は、外面と別組織の薄層数枚(内果皮または種皮)が厚さ0.1~0.2mm残存する。

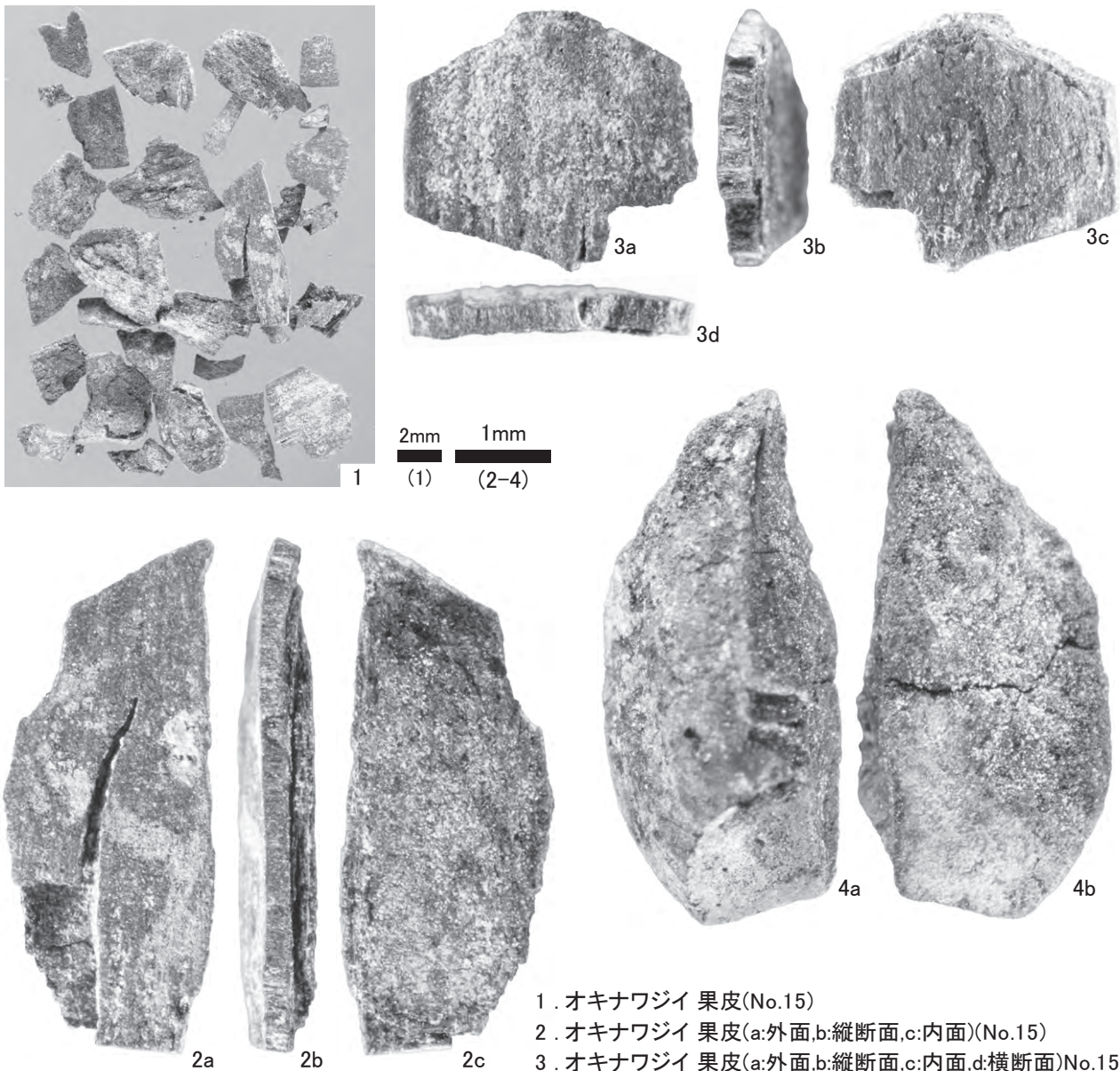
出土子葉は、2枚からなる子葉の合わせ目に沿って割れた半分未満の破片で、頂部や基部を欠損し、残存長は5.6mm、残存半分厚は2.2mmを測る(No. 15;図版146-4)。炭化子葉は硬く緻密で、表面には縦方向に走る維管束の圧痕がある。半割面は平滑で、頂部にある主根を欠損する。出土子葉の破片のみでは、コナラ属(アマミアラカシ、ウラジロガシ、ウバメガシ)とシイ属(オキナワジイ)、マテバシイの区別が困難であるが、オキナワジイの果皮片を共伴する出土状況を考え合わせると、オキナワジイの子葉である可能性が高い。

4. 考察

種実同定の結果、炭化したオキナワジイの果皮片と、オキナワジイと考えられる子葉の破片が確認され、No. 15でやや多産する傾向が得られた。オキナワジイは、高木になる常緑広葉樹で、現在の沖縄島北部の非石灰岩地域に分布する常緑広葉樹林(照葉樹林)の主要な構成種である。当時の平安山原B遺跡周辺にオキナワジイが生育していたと考えられ、沖縄島中部の石灰岩地域に位置する本遺跡周辺域にオキナワジイが分布していたことを示唆する貴重な考古資料である。当社が過去に分析調査を実施した伊礼原A遺跡でも、オキナワジイの果皮片がロ地区K-8(泥炭層)とL-7(腐植質層)から確認されている。堅果類のオキナワジイは、果実内部の子葉があく抜きせずに食用可能な有用植物である。出土炭化果皮片・子葉は、周辺から持ち込まれた植物質食料と示唆され、利用後の食料残渣が火を受けたとみなされる。

第104表. 平安山原B遺跡種実同定結果 (HB②イ地区 1042SX)

No.	試料内訳	分類群	部位	状態	個数	備考	種実以外で確認された遺物類		
No.1	LF	検出されず			-		炭化材,巻貝類,ウニ類の棘,砂礫		
No.1	2.8mm	検出されず			-		炭化材,骨片,砂礫		
No.2	LF	検出されず			-		炭化材,巻貝類,砂礫		
No.3	LF	検出されず			-		炭化材,植物片,巻貝類,サンゴ片,有孔虫,砂礫		
No.4	LF	検出されず			-		炭化材,砂礫		
No.5	LF	検出されず			-		炭化材,巻貝類,サンゴ片,有孔虫,砂礫		
No.5	2.8mm	検出されず			-		炭化材,サンゴ片,砂礫		
No.5	2.0mm	検出されず			-		炭化材,巻貝類,砂礫		
No.6	LF	検出されず			-		植物片,巻貝類,骨片,砂礫		
No.7	LF	検出されず			-		炭化材,植物片,巻貝類,虫類,サンゴ片,有孔虫,砂礫		
No.7	LF	中袋	検出されず		-		虫類,砂礫		
No.8	LF	検出されず			-		炭化材,植物片		
No.8	LF	中袋	アカギ?	種子?	完形	1	赤灰褐色,長さ4.75mm,幅3.16mm,厚さ2.31mm,正中線稜状	炭化材,植物片,巻貝類,砂礫	
No.8	2.8mm	検出されず			-		炭化材,サンゴ片,砂礫		
No.9	LF	検出されず			-		炭化材,植物片,巻貝類,サンゴ片,砂礫		
No.9	LF	中袋	検出されず		-		炭化材,植物片,砂礫		
No.10	LF	検出されず			-		炭化材,サンゴ片,砂礫		
No.11	LF	検出されず			-		炭化材,有孔虫,砂礫		
No.11	2.8mm	検出されず			-		炭化材,骨片(椎骨含む),サンゴ片,砂礫		
No.12	LF	検出されず			-		炭化材,巻貝類,骨片,有孔虫,砂礫		
No.13	LF	検出されず			-		炭化材,有孔虫,砂礫		
No.13	LF	中袋	検出されず		-		植物片,骨片(顎・歯),サンゴ片		
No.14	LF	検出されず			-		植物片,骨片		
No.14	LF	中袋1	検出されず		-		巻貝類		
No.14	LF	中袋2	オキナワジイ	果皮	破片	炭化	8	<0.001g,最大2.8mm	炭化材,植物片,巻貝類,サンゴ片,有孔虫,砂礫,軽石(黄灰褐色)
No.14	2.0mm	オキナワジイ	果皮	破片	炭化	12	最大4.3mm	炭化材,骨片,砂礫	
No.15	LF	検出されず			-			植物片	
No.15	LF	中袋1	コナラ属-シイ属(オキナワジイ)?	子葉	破片	炭化	10	最大2.6mm	炭化材
No.15	LF	中袋2	不明		破片	炭化	17	最大2.4mm	炭化材,植物片,巻貝類,骨片,有孔虫,砂礫,軽石(黄灰褐色)
No.15	LF	中袋3	検出されず		-			軽石(黄灰褐色)	
No.15	2.0mm	オキナワジイ	果皮	破片	炭化	28	0.04g,残存長5.3mm	炭化材,植物片,菌核,骨片,砂礫	
No.15	2.0mm	コナラ属-シイ属(オキナワジイ)	子葉	破片	炭化	4	0.023g,残存長5.6mm,残存半分厚2.2mm	炭化材,植物片,菌核,骨片,砂礫	
No.16	LF	イネ科	果実	完形		1	状態良好	炭化材,植物片,巻貝類,有孔虫,砂礫	
No.16	2.8mm	検出されず			-			炭化材,砂礫	
No.17	LF	検出されず			-			植物片	
No.17	LF	中袋1	検出されず		-			炭化材,骨片,砂礫	
No.17	LF	中袋2	検出されず		-			炭化材,植物片,巻貝類,有孔虫,砂礫	
No.17	2.0mm	検出されず			-			炭化材,貝類,サンゴ片,砂礫	
No.18	LF	オキナワジイ	果皮	破片	炭化	1	<0.001g,1.5mm	炭化材,植物片,巻貝類,有孔虫,砂礫,軽石(黄灰褐色)	
No.18	LF	中袋	検出されず		-			植物片,二枚貝類,軽石(黄灰褐色)	
No.18	2.8mm	検出されず			-			炭化材,骨片	
No.19	LF	検出されず			-			炭化材,植物片,骨片,巻貝類,有孔虫,砂礫	
No.20	LF	検出されず			-			炭化材,植物片,巻貝類,有孔虫,砂礫,軽石(黄灰褐色)	
No.20	2.8mm	検出されず			-			炭化材	
No.21	LF	検出されず			-			炭化材,植物片,巻貝類,サンゴ片,有孔虫,砂礫	
No.21	2.0mm	検出されず			-			炭化材,骨片	
No.22	LF	検出されず			-			巻貝類,岩片	
No.22	LF	中袋	検出されず		-			炭化材,植物片,巻貝類,有孔虫,砂礫	
No.23	LF	検出されず			-			炭化材,植物片,巻貝類,ウニ類の棘,有孔虫,砂礫	
No.24	LF	検出されず			-			炭化材,植物片,巻貝類,二枚貝類,有孔虫,砂礫	
No.25	LF	検出されず			-			炭化材,植物片,貝類,サンゴ片,有孔虫,砂礫	
No.26	LF	オキナワジイ	果皮	破片	炭化	1	<0.001g,1.4mm	炭化材,植物片,巻貝類,有孔虫,砂礫,軽石(黄灰褐色)	
No.26	LF	コナラ属-シイ属(オキナワジイ)?	子葉?	破片	炭化	7	最大3.0mm	炭化材,植物片,巻貝類,有孔虫,砂礫,軽石(黄灰褐色)	
No.27	LF	検出されず			-			炭化材,植物片,巻貝類,虫類,有孔虫,砂礫	
No.27	2.8mm	検出されず			-			炭化材	
No.28	LF	検出されず			-			炭化材,貝類,砂礫	
No.28	LF	中袋	検出されず		-			炭化材	
No.29	LF	検出されず			-			炭化材,植物片,巻貝類,骨片(顎含む),有孔虫,砂礫	
No.30	LF	イネ科	果実	完形		1	状態良好	炭化材,植物片,巻貝類,昆虫,有孔虫,砂礫	
No.30	2.8mm	検出されず			-			炭化材	
No.30	2.0mm	検出されず			-			炭化材	
No.31	LF	検出されず			-			炭化材,ウニ類の棘,サンゴ片,有孔虫,砂礫	
No.32	LF	検出されず			-			植物片,炭化材	
No.32	LF	中袋	検出されず		-			炭化材,植物片,巻貝類,虫類,サンゴ片,有孔虫,砂礫	
No.33	LF	検出されず			-			炭化材,植物片,巻貝類,二枚貝類,有孔虫,砂礫	
No.33	2.8mm	検出されず			-			炭化材,骨片,砂礫	
No.34	LF	検出されず			-			炭化材,植物片,貝類,サンゴ片,有孔虫,砂礫	
No.34	2.0mm	検出されず			-			炭化材,ウニ類の棘,砂礫	
No.35	LF	検出されず			-			炭化材,植物片,巻貝類,サンゴ片,有孔虫,砂礫	
No.36	LF	検出されず			-			軽石(黄灰褐色)	
No.36	LF	中袋1	オキナワジイ	果皮	破片	炭化	2	最大3.1mm	炭化材,植物片,巻貝類,有孔虫,砂礫,軽石(黄灰褐色)
No.36	LF	中袋2	不明		破片	炭化	2	最大4.3mm,粗面,オキナワジイの子葉の可能性	炭化材,植物片,巻貝類,有孔虫,砂礫,軽石(黄灰褐色)
No.36	LF	中袋2	検出されず		-			炭化材,植物片	
No.36	2.0mm	オキナワジイ	果皮	破片	炭化	1	残存径3.0mm	炭化材,巻貝類,岩片,砂礫	
		オキナワジイ	果皮	破片	炭化	53			
		コナラ属-シイ属(オキナワジイ)	子葉	破片	炭化	21			
		不明		破片	炭化	19			
		アカギ?	種子?	完形		1			
		イネ科	果実	完形		2			
		合計							



図版146 炭化種実

1. オキナワジイ 果皮(No.15)
2. オキナワジイ 果皮(a:外面,b:縦断面,c:内面)(No.15)
3. オキナワジイ 果皮(a:外面,b:縦断面,c:内面,d:横断面)No.15)
4. コナラ属-シイ属(オキナワジイ) 子葉(No.15)

<引用文献>

藤尾慎一郎, 2009, 弥生時代の実年代. 西本豊弘編 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代. 雄山閣, 9-54.

木崎甲子郎編著, 1985, 琉球弧の地質誌. 沖縄タイムス社, 278p.

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高, 1999, 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆積学的による—. 日本文化財科学会第16回大会発表要旨集, 120-121.

日本の地質「九州地方」編集委員会, 1992, 日本の地質9 九州地方, 共立出版, 371p.

日本の地質増補版編集委員会, 2005, 日本の地質 増補版, 共立出版, 374p.

林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料, 31 (1995, 81-181), II. 木材研究・資料, 32 (1996, 66-176), III. 木材研究・資料, 33 (1997, 83-201), IV. 木材研究・資料, 34 (1998, 30-166), V. 木材研究・資料, 35 (1999, 47-216)

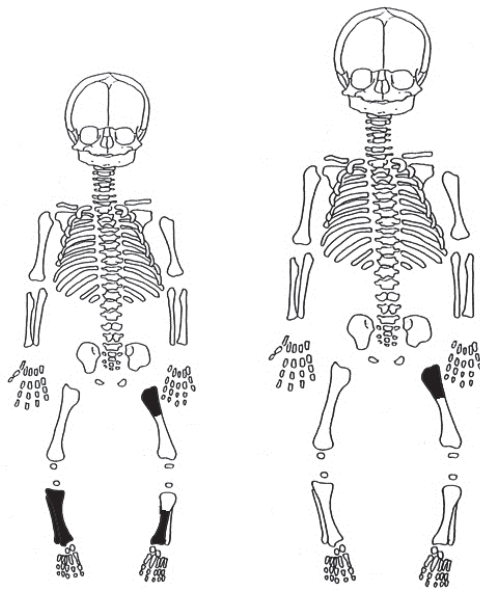
島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.

Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡の特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

第4節 平安山原B遺跡出土の人骨

土肥直美（琉球大学医学部）

平安山原B遺跡から出土した人骨はいずれも周産期と思われる未成人2体分である。1体目は左右の脛骨、右腓骨、左大腿骨片、肋骨片が残存する。これらのサイズは後者に比べると明らかに小さく、未熟な状態で生まれ亡くなってしまったか、あるいは死産だった可能性も考えられる。2体目は残存する大腿骨片が通常の新生児のサイズと同程度であることから、出産時あるいは出生後まもなくのトラブルで亡くなったものと思われる。出土地はいずれもHB②イ地区J12V層である。以下に出土部位を示す。



第177図 出土部位



図版147 人骨出土部位

第V章 総括

平安山原B遺跡は平成20・21・23年度の3回の緊急発掘調査が行われ、本報告書はその成果を記録したものである。調査の結果、層序及び遺構、出土遺物から貝塚時代後期、グスク時代・近世、近・現代の概ね3時期の生活跡が確認された。以下、時代順に遺構、出土遺物について略述する。

<貝塚時代後期>

遺構：山手側(HB②イ地区)の古い砂丘で検出された。岩盤(段丘)の袂の燃焼施設1042SXと1028SXを中心に扇状に広がるように被熱や炭の範囲が確認され、1039SXの直上で石皿(第70図67)が出土した。柱穴などは検出されなかったが、土器や石器、貝製品もこの地区に集中(第19図土器平面、第56図)し、生活の中心だったことが窺える。また、1042SXは複数の焼成面があり、C面で $2290 \pm 20BP$ の結果が得られ、その上面からはI類土器(図41阿波連浦下層式土器)とII類土器(図91浜屋原式土器)が出土している。両型式の明瞭な時期差の結果は得られなかった。また、自然流路を挟んでHB④ロ地区でも貝層が確認され、僅かに薄手の土器が出土したが、小規模でそれ以外の遺構は海側へ広がる平安山原C遺跡に続くものと思われる。

出土遺物：伊礼原遺跡と同じように人工遺物では土器、石器、貝製品、骨製品、土製品、自然遺物では脊椎動物遺体、貝類遺体、植物遺体が検出されている。

土器は重量平面分布(第22図)をみるとHB②イ地区に集中して出土し、第20図のように多数の土器が接合できる。土器は搬入土器と在地土器に分け、在地土器はさらにI～VII類、底部は平底、尖底、くびれ平底に分類した。平面及び垂直分布を検討し、調査時に細分した分層も含め検討したが、堆積層での明瞭な時期差は見られなかった。平面分布では搬入土器やI～III類はHB②イ地区で主体を示し、IV～VI類土器は少量ながらHB①地区・HB④イ地区、VII類はHB④イ・ロ地区で出土する。伊礼原遺跡(国指定外2014)と同じように、山手側から海岸側に新しくなるようである。

搬入土器は九州系と奄美諸島系で、伊礼原遺跡・小堀原遺跡に比べると多い。壺類が主体で、南九州系弥生土器の弥生中期前半、入来I・II式の甕の古・新段階がみられた。甕は小型が多く、弥生前期前半～中期初頭に相当する。新里貴之氏によると「九州系弥生土器及び奄美諸島系土器は弥生中期前半に収まるも、併行期にあたる在地土器(阿波連浦下層式)の出土量が少ない。むしろ浜屋原式土器が多いため、浜屋原期には搬入土器が入らなくなる可能性も考えられる」とのことであり、浜屋原式土器(II類)が67%を占める本遺跡は若干時期の齟齬がみられる。

石器の種類は石斧、敲石、敲石兼磨石、磨石、石皿、砥石などが出土している。そのうち、小形方柱状片刃石斧(第63図25)と扁平片刃石斧(第63図21)がセットで出土している。この石斧の素材は沖縄では産しない良質のシルト岩(宮崎産?)で、九州からの搬入品とされており、九州の弥生前期末～中期併行期の遺跡で出土するようである(川口2011)。また、中南部では産しない輝緑岩製の重さ31kgの砥石(図版27)があり、搬入品としては最大級である。本遺跡で出土する輝緑岩製石斧の総重量が3,119gを量ることから移動のための労力が想像される。また、石斧についてみると丁寧に仕上げられたものと従来の加工があり、前者の石斧は持ち込みの可能性が高いようである。また、チャート製のスクレイパーも得られており、帰属年代は貝塚時代前期の土器(第51図172～174)も出土していることから古く遡ると思われる。

貝製品は装飾品と実用品があり、装飾品は貝輪にオオツタノハ、オオベッコウガサ、イモガイ横型、ゴホウラ腹面型などが得られた。イモガイはダイミョウイモ製貝輪が沖縄では初めて確認され、クロフモドキの横型貝輪(図7)と切り取り残存部(図10)が接合できた。ゴホウラは腹面の諸岡

型で南海産貝輪交易で北九州の弥生中期前半の遺跡で出土するもので、伊礼原遺跡を含めると製品が10点、未製品が2点出土している。さらに供給地側の遺構である貝集積から出土するゴホウラやアツソデガイの有孔製品も出土する。これらはゴホウラやイモガイ製貝輪の在りでの製作を示す資料で、素材を供給するとされる南海産貝輪交易に新たな段階を提示するものである。実用品についてみるとイトマキボラ製ノミ状製品は形状が柱状片刃石斧に酷似する。ホシダカラの背面を利用した匙状製品も出土している。素材をみると沖縄では産しないオオツタノハ、ボウシュウボラの有孔製品、また、九州の弥生遺跡で出土するマガイキガイ製指輪（木下2014）がある。

骨製品は4点得られ、第87図4の有孔製品は大きさから人骨の可能性も考えられる。

土製品は土器片の角を落とし、円形に整えた二次加工品が2点出土している。

脊椎動物遺体は魚類やイノシシ骨が主で、その割合は伊礼原遺跡（国指定外 2014）と類似する。魚はフエフキダイ科が多く、新たにオオコウモリ科が得られた。しかし、伊礼原遺跡に比べてジュゴンの出土が少ないようである。

貝類遺体は阿波連浦下層式土器、浜屋原式土器の時期（貝A区）にはイソハマグリが多く、大当原式土器（貝B区）にはマガキガイ、シャコガイ類、サラサバティラが多くなることから、若干の時期差が見られるようである。

<グスク時代・近世>

グスク時代の包含層（Ⅳ層）は、カワニナを含む水成堆積の自然流路で上・下部に大別される。Ⅳ層下部は、HB④イ地区南側隅から同口地区に堆積し、貝塚時代後期の砂丘を覆っている。

近世の包含層（Ⅲ層）は調査区全体に堆積し、遺構はHB①・②口地区の標高約2.6～2.8mのⅣ層上面、丘陵麓の標高約3.5～4.5mのⅤ層上面で検出される。

遺構：Ⅳ層下部のHB④イ地区の溝状遺構（SD1）は、西側に延びる流路内の細い溝である。Ⅳ層上部では、石列1・2の性格は区画を意識したものと思われる。HB②口地区の土坑（2015・2071SK）は、東側に広がらないことから本遺跡西側の平安山原A遺跡に関連する可能性が考えられる。

Ⅲ層の建物址は、4本柱の間隔が建物址1は5.4m、建物址2は2.8mと後者が小さい。出土遺物を見ると、建物址1から17世紀～19世紀代の白磁や青磁染付、建物址2から14世紀～16世紀代の青磁や染付が出土しているので後者が古い。ピット群①・②は標高約3.5m以上で建物址周辺、ピット群③はHB②口地区の標高約2.6～2.8mで検出された。同群③は、穴の径が大きくて浅い傾向が見られることから、柱穴以外の可能性も考えられる。溝状遺構1（271SD）より東側で検出された。

溝状遺構1・2（275SL、352・2049SD）から14世紀～19世紀の陶磁器が出土し、概ね近世期に属しており、切り合い関係では後者が古い。

出土遺物：Ⅳ層で116点、Ⅲ層で97点得られた。Ⅳ層ではグスク土器は滑石を混入したものや塗布したものが得られた。カムイヤキは壺が大半を占める。白磁は玉縁口縁や口禿碗など11世紀～13世紀の古手、青磁は龍泉窯の13世紀～14世紀代の鎬蓮弁文碗が得られた。Ⅲ層では14世紀後半～16世紀代のへら描雷文帯や草花文碗、輪花、稜花の皿や盤などの青磁、中国産・タイ産の褐釉陶器、染付では明代は福建・広東省の碗が多く、清代では徳化窯産が多い。その内、（第112図45）は17世紀後～18世紀初の薬瓶で銘があり、遺構（1006SK）からの出土である。他に青磁染付、鉄釉染付、華南三彩など18世紀～19世紀代である。近世の本土産陶器では内野山産（肥前）の碗（第118図1）、信楽焼の茶壺の破片（第118図3）、薩摩焼の貝目の残る壺（第118図4）、土瓶（第118図6）などが出土している。磁器では肥前系の碗、皿、瓶などが多く17世紀～18世紀代のものが出土。銭貨では、北宋の「元豊通寶」、日本の「寛永通寶」が出土。他に携帯用の砥石、沖縄産無釉

陶器製・金属製の煙管、青銅・真鍮製の簪、タカラガイ製の漁網の錘など、グスク時代～近世にかけての生活の様子が窺われ、また、中国や九州との関連を持っていたと思われる。

<近・現代>

近・現代の包含層（Ⅱ層）は、沖縄戦における米軍上陸後の基地接收・整備の造成によって部分的に失われるが、遺構は『北谷町の地名』（2006）で調査された平安山集落を実証するものである。

遺構：石組、溝、土坑、燃焼施設、井戸、窯跡（製糖小屋）、ピットが検出され、集落東側に所在した4軒（祝女殿内小、東^{ヌンドゥルチグッ}門小^{アガリジョーグッ}、大和島小^{ヤマトシマグッ}、伊礼^{イリー}）と製糖小屋（サーターヤー）の位置にあたる（図版87）。

通路や建物に関連するもの（2004・2005SX、380SL）、屋敷囲いの可能性が考えられるもの（276・379SL）、堆肥を作るブタの肥溜めの可能性が考えられる（1006SX）、これらに関連すると思われるピット群1は柵、ピット群2は窯跡に関連する可能性が考えられる。窯跡は集落の共同製糖小屋で、地面を掘り窪めた窯跡2、試掘確認時の石組の窯跡1は、燃焼痕のみ検出された。これらは標高約4.0～4.6mにある。SK1・2は集落南東側の耕作地にあたる。

溝〔257（276SL）・281・305・355SD〕は北西－南東で斜面地を下る道路脇にあり、2002SZは北東－南東方向に掘られ、いずれも検出面は標高約2.5mである。屋敷内から道路に向かう2002SZは出土遺物が最も多く（第64表）、投棄穴と考えられる358SKが近い位置にある。

燃焼施設の1018SXは、段丘崖下の崩落礫を含む二次堆積斜面に煙道部、その前面の砂層面で焚口が検出され、周辺から現代遺物が出土し、比較的新しい掘削痕を伴う。

出土遺物：遺物の74.5%が遺構からで、前述したように戦前の屋敷跡に関連するものである。出土量の多いのは沖縄産施釉・無釉陶器、陶質土器、本土産陶磁器である。沖縄産施釉陶器の碗の出土量をみると灰釉碗が3分の1、白化粧碗が3分の2程度で、湧田焼とされていた灰釉碗が戦前まで長期に亘って使用していたことがわかる。また、白化粧のうち、加飾された「イッチン」の釉だれ（図18・19）の方向から伏せ焼きであることが判明、1920年代以前（壺屋2008）に焼かれていたことがわかった。沖縄産無釉陶器では播り鉢（第152図8）はHB①地区、HB②イ・ロ地区と広い範囲で接合され、上限が近世遺構（271SD）であることが判明、粘土の目痕も確認され、薩摩焼の影響を受けたものと思われる。播り鉢は底部がまっすぐ立ち上がるⅠ・Ⅱ類と底部がカーブをなすⅣ類が出土するが、前者の方が多いようである。また、壺はスーチカーガーミなどバリエーションがあり、貯蔵用に使用されたようである。中には窯印（第157図48）から壺屋の屋号が確認された。陶質土器は火を使う鍋や火炉、急須（土瓶）が多いようである。他にフライパン状製品があり本土産焙烙の形状に近い。本土産の近代磁器は主に瀬戸・美濃、砥部で大量生産された型紙刷り、銅版転写、ゴム判、クロム青磁、国民食器、色絵などがあり、器種は碗、皿、小杯、瓶、急須、鉢などが出土した。型紙刷りでは碗が最も多く、銅版転写、ゴム判、クロム青磁は小碗が多く出土する。その中で図版128は染色体文の小碗で、砥部産の手描きと型紙・肥前の型紙が確認できた。製作技法の変遷と産地の違いから技法の移入やそれに伴う時期差が窺える。碗についてみると沖縄産施釉陶器と型紙刷り（磁器）と素材の異なるものが多く出土する。これは時期差によるものか、あるいは用途差によるものか検討を要する。円盤状製品もⅡ層遺構の出土が多く、イチ型（山崎2010）と呼ばれている鉄斧、石灰岩製の石製容器も屋敷跡に関連するものと思われる。他に食料として脊椎動物遺体ではウシ・ウマも出土するが、ヤギも出土する。

現代遺物ではガラス瓶やヘルメットなどがあり、米軍基地接收時の遺物と考えられる。HB①地区の山手側の岩盤地帯に基地関連の埋設管の溝やフェンスの支柱痕が確認された（第130図）。

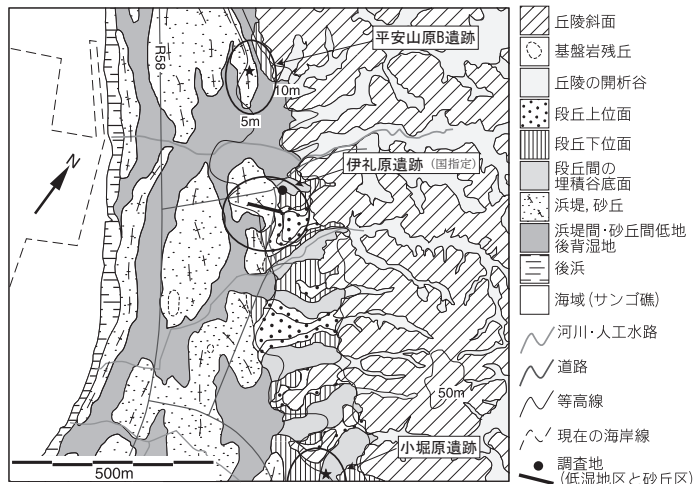
層	遺構 14C測定値	出土遺物									
近・現代 (戦前)	焼施設 (1018SX) 窯跡 (サターヤヤー) 井戸 (377SE) 石組 (276SL) (379SL) 溝 (305SD・281SD 257SD・355SD 2002SZ) 土坑 (1006SK) ビット群	沖縄産施釉陶器 第145図18 第145図29 第146図47 第149図83 第144図15 第148図70 第147図59 第147図50 第146図40 第144図7 第145図31 染付 第111図6 第111図7 第111図20 第112図40 第144図1	沖縄産無釉陶器 第153図15 第154図27 第155図34 第153図17	第156図46 第156図45 第157図48	陶質土器 第158図3 第159図22 第159図12 第158図6	本土産磁器 第161図3 第161図5	本土産陶器 第162図24 第162図9 第162図10 第162図31	本土産陶器 第168図	石器 第128図3 第128図2 第128図1	錢貨 第125図5 第125図4 第125図3 貝製品 第122図23 骨製品 第123図	図版136 ガラス製品・他
	建物址 溝状遺構 (271SD・304SD 2049SD・275SL 352SD・337SD 2073SD) 石列 ビット群	青磁 染付 第116図1 第112図32 第112図30 第112図45 第116図5 第116図4 白磁 青磁 第108図6 第109図6 第109図10 第109図4 第110図25 第111図4 第110図22 第111図1 鉄釉染付 第116図4	沖縄産無釉陶器 第152図8 褐釉陶器 (中国) 第115図3 第115図12 第115図11 褐釉陶器 (タイ) 第117図3	本土産陶器 (薩摩) 第118図4 瓦質土器 第117図2 第117図1	本土産陶器 第118図1 第119図8 第119図17 第119図7 第119図18	本土産磁器 第119図14 第119図1 第119図16	石器 第122図2 第123図				
近世・中世	石列 溝状遺構 (SD1) 炭化材 (広葉樹) 1600±20BP R13	土器 (グスク) 第103図4 第103図7 第103図13 第103図12 第103図14 土器 (搬入) 第33図25 第33図29 土器 (在地) 第47図130 第43図99 第45図106 第41図85 第42図93 第45図105 第49図137 第42図87 第41図84 第41図83 第40図79 第40図77 第46図119 第46図122 第46図117 第46図116 第46図118 第42図91 第42図87 第41図84 第34図38 第34図36 第34図37 第34図38 第34図39 第35図48 第36図55 第37図59 第36図56 第32図14 第31図5 第30図2 第32図13 第32図24 第32図22 第48図135 第34図36 第34図39 第34図41 第35図49 第36図56	カムイヤキ 第105図3 第105図8 褐釉陶器 (中国) 第115図1 白磁 第108図2 第108図1 青磁 第109図1	1890±30BP 第47図129 第50図150 第54図267 第54図269 第51図166 第50図149 第54図263 第51図162 第51図169 第53図212 第52図193 第52図191 第39図74 第36図57 第37図60	石器 第63図17 第63図18 第61図5 第63図19 第63図16 第61図2 第62図9 第62図8 第63図24 第63図21 第63図26 第63図25	貝製品 第85図41 第85図43 第84図36 第85図40 第83図28 第82図23 第77図5 第80図17 第80図16 第80図17 第82図22 第78図10+7 第81図20 第80図16 第87図4 第87図3 第87図2 第87図1	骨製品 第87図4 第87図3 第87図2 第87図1				
グスク	石列 溝状遺構 (SD1) 炭化材 (広葉樹) 1600±20BP R13	土器 (搬入) 第33図25 第33図29 土器 (在地) 第47図130 第43図99 第45図106 第41図85 第42図93 第45図105 第49図137 第42図87 第41図84 第41図83 第40図79 第40図77 第46図119 第46図122 第46図117 第46図116 第46図118 第42図91 第42図87 第41図84 第34図38 第34図36 第34図37 第34図38 第34図39 第35図48 第36図55 第37図59 第36図56	カムイヤキ 第105図3 第105図8 褐釉陶器 (中国) 第115図1 白磁 第108図2 第108図1 青磁 第109図1	1890±30BP 第47図129 第50図150 第54図267 第54図269 第51図166 第50図149 第54図263 第51図162 第51図169 第53図212 第52図193 第52図191 第39図74 第36図57 第37図60	石器 第63図17 第63図18 第61図5 第63図19 第63図16 第61図2 第62図9 第62図8 第63図24 第63図21 第63図26 第63図25	貝製品 第85図41 第85図43 第84図36 第85図40 第83図28 第82図23 第77図5 第80図17 第80図16 第80図17 第82図22 第78図10+7 第81図20 第80図16 第87図4 第87図3 第87図2 第87図1	骨製品 第87図4 第87図3 第87図2 第87図1				
貝塚時代後期	土器附着炭化物 1890±30BP 白砂層 O2 土坑 (366SK) K19-20 樹木片 (アカテツ) 2130±30BP R12 (下層トレンチ4) 土器附着炭化物 2220±20BP 黒砂層 J12 焼遺構 炭化材 (マツ属) 2290±20BP (1042SX-C) J9 土器附着炭化物 2350±30BP 白砂層 J10 炭化材 (ヤマグツ) 2390±30BP 貝層② K11	土器 (搬入) 第33図25 第33図29 土器 (在地) 第47図130 第43図99 第45図106 第41図85 第42図93 第45図105 第49図137 第42図87 第41図84 第41図83 第40図79 第40図77 第46図119 第46図122 第46図117 第46図116 第46図118 第42図91 第42図87 第41図84 第34図38 第34図36 第34図37 第34図38 第34図39 第35図48 第36図55 第37図59 第36図56	カムイヤキ 第105図3 第105図8 褐釉陶器 (中国) 第115図1 白磁 第108図2 第108図1 青磁 第109図1	1890±30BP 第47図129 第50図150 第54図267 第54図269 第51図166 第50図149 第54図263 第51図162 第51図169 第53図212 第52図193 第52図191 第39図74 第36図57 第37図60	石器 第63図17 第63図18 第61図5 第63図19 第63図16 第61図2 第62図9 第62図8 第63図24 第63図21 第63図26 第63図25	貝製品 第85図41 第85図43 第84図36 第85図40 第83図28 第82図23 第77図5 第80図17 第80図16 第80図17 第82図22 第78図10+7 第81図20 第80図16 第87図4 第87図3 第87図2 第87図1	骨製品 第87図4 第87図3 第87図2 第87図1				

第178図 時代別出土遺物変遷

< 今回の調査成果 >

今回の調査でも貝塚時代後期の砂丘形成後、自然流路ができ、その後、自然流路が埋まり、陸地化してグスク時代以降の集落が形成される過程が明らかになった。同変遷は小堀原遺跡（2012）の成果を補完するものである。

貝塚時代後期の包含層は海岸段丘の袂に形成された砂丘（HB②イ地区）とその南側に形成された砂丘（HB④地区ロ）があり、そこでは2枚の砂層が確認され（巻首図版9）、その間の泥炭層から 2130±30BP



第179図 伊礼原遺跡とその周辺の地形分類 (松田2007 一部改変)

（炭化材）の結果が得られた。また、HB②ロ地区では自然流路の下部で検出された炭化物から 1600±20BP の結果が得られた。これにより新旧二枚の砂丘が確認された。砂丘形成期に出現した自然流路（IV層）が 1600±20BP 以後に埋まり、陸地化し、その上にグスク時代の生活面が確認された。

貝塚時代後期において南九州の incoming II 式土器、小型柱状片刃石斧、定角式扁平片刃石斧、諸岡型の貝輪と製作途中の製品が同時に出土したことや、またイモガイ横型貝輪と切り取り残存部が接合できたこと、ダイミョウイモ製貝輪の出土等から九州島との往来が活発であったことが窺える。

1042 SX から採集した土を洗浄した結果、国指定伊礼原遺跡（低湿地区）出土の植物遺体と同じオキナワジイ等が検出された。これによりキャンプ桑江北側地区周辺で貝塚時代前期～後期まで継続的にオキナワジイ等が食料として利用されていたことがわかった。その中でも本遺跡での incoming II 式土器やダイミョウイモ製貝輪の出土はキャンプ桑江北側地区内の遺跡の中では弥生時代の搬入物の上限を示すものである。

平安山集落は史料（北谷町 2005）に嘉靖年間（1522～1566）の平安山集落の記録が残るが、11世紀以降の中国産磁器の出土により、16世紀以前から居住地であったことが窺える。

また、キャンプ桑江北側地区の基地接収以前（1945年以前）の遺物が検出され、当時の様子、特に、沖縄産の陶器や本土産陶磁器を使用した戦前の生活の様子が明らかになり、『北谷町の地名』の記録を裏付けるものと思われる。

< 註文献 >

北谷町教育委員会 2005 『北谷町史』第一巻附録
 北谷町教育委員会 2012 『小堀原遺跡』北谷町文化財調査報告書 第34集
 北谷町教育委員会 2014 『伊礼原遺跡（国指定外）・伊礼原A遺跡』北谷町文化財調査報告書第36集
 木下尚子 2014 「マガキガイの指輪—弥生時代の貝製指輪」『先史学・考古学論究』IV 龍田考古学会
 川口雅之 2011 「奄美・沖縄諸島の大陸系磨製石斧」『奄美考古』第6号 奄美考古学会
 壺屋焼物博物館 2008 壺屋焼近代百年のあゆみ、那覇市壺屋焼物博物館 10周年記念特別展
 山崎真治 2010 「当博物館所蔵の斧について」『沖縄県立博物館・美術館 博物館紀要』第3号

< 付記 > 伊礼原遺跡（国指定外）第36集で報告した陶磁器について後日、大橋康二先生に同定していただいた結果、下記のように追加・訂正します。

- 第105図14の白磁、碗→肥前磁器、碗、1650～70年生産、色絵の可能性もあり
- 第105図13の白磁、碗→中国、大皿、景德鎮？16世紀
- 第118図3、4は中国、黒釉陶器→日本、唐津、陶器

付篇 1 伊礼原D遺跡出土のタイ産鉄絵合子及び木製漆器

表題の遺物 2 点について平成 20 年度及び 25 年度に刊行した『伊礼原D遺跡』北谷町文化財報告書第 28・35 集に未記載のため、今回の報告書の付篇で記載することとする。

1. タイ産鉄絵合子

本資料は町区画整理事業に関わる発掘調査で出土したものである。図 1 は合子の口縁部から胴部にかけての資料である。口径は 8.3 cm である。口縁部内端は突出し、口唇部は窪む。文様は口縁下部に 3 本の縦位短線と草花文？、格子文が廻らされ、その直下に太目の横線が廻らされるが 2 本の線が重なっている。胴下部にも太い横線が廻る。腰部は褐色釉が施されている。内面は黒単色粒の斑点が全体的に見られる。すでに報告（2008）されている合子の蓋（第 35 図 1）は径が図 1 より大きいことから別個体の可能性が高い。

2. 木製漆器

本資料はキャンプ桑江北側返還の確認調査で出土した資料である。図 2 は木製漆器底部資料で保存処理を施した。漆は胴部の内面に朱色が若干残っている。外面は黒色で胴部に僅か見られ、腰部から高台内に比較的残りが良い。器種は底径が広く高台が低く、胴部が浅めで反る様相であることから皿と思われる。底部の器厚は 7 mm、胴部の器厚は 6 mm から 3 mm と薄くなる。本資料は近世期の川跡の縁から検出された。

第105表 タイ産鉄絵合子・木製漆器観察一覧

(法量単位:cm)

第図版	図番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径	素地・素材	釉色・漆色	その他特徴	出土地
第181 図・ 図版 148	1	タイ産 陶器	合子	身	8.3 — —	淡灰色細粒子 細かい白色粒 及び黒色粒を 含む	外面はくすんだ淡灰色で文様は淡 灰黒色。腰部は褐色釉である。口 唇部から内面口縁部下は露胎。内 面は部分的に淡灰色釉が掛る。	外面口縁下部に草花文？と縦線が三本、格 子状の文様が廻り、その直下に帯状の圈線 が3本施される。口唇部は蓋を受けるため窪 み口唇内端が突出する。器厚は4mm。	J17 第Ⅲ層
	2	木製 漆器	皿	底 部	— — 8.0	木製 樹種不明	内面は朱色、外面は黒色である。	幅広の外底で高台断面は三角形状を呈す る。腰部は丸みを帯びて立ち上がる。胴部で 反る様相を呈しているので皿と思われる。器 厚3~6mm。底厚7mm。	4-10 川跡 近世



第 180 図 伊礼原D遺跡の位置

第 181 図・図版 148 タイ産鉄絵合子・木製漆器

付篇 2 伊礼原遺跡の年代測定結果

表題について平成 18 年度刊行した『伊礼原遺跡』北谷町文化財報告書第 26 集（以下「報告書」と略図）に未記載のため、今回の報告書の付篇で記載することとする。

今回紹介する年代測定に掛けた資料データは 23 点である。低湿地区 3 点、砂丘区 20 点となっている。しかし、砂丘区の炭化物 No. 1 は E-20 グリッドの東壁に人骨が見られ、その下層部から資料を採取したが結果は得られなかった。人骨は未調査である。なお、低湿地区の第 14 層（曾畑層）以降の年代測定結果については報告書第 III 章 I 及び ^{14}C 年代測定結果を参照されたい。

< 試料 >

低湿地区は、北区南西側（中央区付近）第 15 層の細砂層上面で爪形文土器と炭集中部が検出された。その中から 3 点測定した（炭化物 No. 7・22・23）。

砂丘区は、E-20 グリッドは縄文時代中期から近世までの層が堆積している。上層部は黄色土（第 1～2 層）で近世以降、その下層は黒色土層（第 3 層～第 6 層）でグスク時代以前の堆積、その下層の白砂層（第 7～10 層）は縄文時代中期が確認されている。本グリッドの測定資料は主に第 5・6 層出土の炭化物である。

炭化物 No. 2 は石組の炉址 4 で遺構内より採取した資料である。土器や石器も伴う（報告書第 83 図 17 など）。

炭化物 No. 3 は炉址 4 の下層である。炭化物 No. 4 は年代測定結果表の資料産出層序では炉址 8 と記載しているが、報告書では土坑としている。土坑 3 又は 7 より採取した資料である。

炭化物 No. 5 は炉址 8（報告書第 60 図土坑 8）内出土資料である。

炭化物 No. 6 は炉址近辺の一括土器（報告書第 71 図 2）に伴うものである。

炭化物 No. 9・10 は貝集積土坑内出土資料である。

炭化物 No. 8 は D-19 グリッド北東角に集石遺構があり住居址を考慮し、近辺の北東壁面中央部の炭集中部資料を採取したものである。

炭化物 No. 11・12 は E-19 グリッド北西壁側の石集積遺構（報告書第 55 図第 1 号住居址）内出土資料で、遺物集中部（No. 11）と貝集中部（No. 12）がある。本遺構の時期と遺物の対応、第 2 号住居址や第 1～4 号集石遺構と時期差を比すため行った。

炭化物 No. 13 は E-17 グリッドの柱穴内出土資料である。E-18 グリッド中央部より E-13 グリッドに向かって（南西方向）縄文時代の堆積は見られない。この現象については報告書第 III 章 II 及び第 7 図に記載している。貝塚時代後期以降の堆積で柱穴が検出されている。柱穴の各時代と出土遺物に齟齬が無いかなどを確認するため採取した。

炭化物 No. 14 は E-15 グリッドの柱穴内出土資料である。

炭化物 No. 15 は E-14 グリッドの柱穴内出土資料である。

炭化物 No. 16 は産出層序 C-19・20 グリッド土器一括資料が伴う。第 3～6 層の黒色土層の下部で C-19 グリッドの南西側に礫が集中した部分で土器と共に採取した資料である。土器は報告書第 77 図 6 である。

炭化物 No. 17 は C-18 グリッド黒色土層下部の石集積遺構（報告書第 56 図第 2 号住居址）内出土資料である。

炭化物 No. 18 は C・D-18 グリッドの石集積遺構（報告書第 56 図第 2 号住居址）の南側の同層に炭

集中部が検出され、それを採取した資料である。

炭化物 No. 19 は D-19 グリッドの中央部東側に炭集中部が検出され、それを採取した資料である。第 1 号住居址と第 2 号住居址の間に位置している。

炭化物 No. 20 は HG-19 グリッドの黒色土層下部に集石遺構（報告書第 4 号集石）より採取したもので、集石遺構（現況保存）は住居址の可能性があるので行った。

炭化物 No. 21 は C-18 グリッドの中央部の黒色土層の遺構（報告書第 67 図の溝状遺構内出土の人骨）の上部から採取した資料である。人骨の詳細については報告書第 V 章 III に記載している。

<年代測定結果>

年代測定結果は次ページのとおりである。低湿地区の 3 点の爪形文土器は曾畑式土器付着資料結果よりは古いが曾畑期に近く、渡具知東原遺跡出土結果（東原式土器 6,600 年）よりは新しい年代結果となった。北区南西側は中央区の第 14 層（曾畑層）と北区の第 15 層が同レベル（本層北区北東側から南西側に斜位に堆積し中央区で第 14 層下に潜っている）で境に位置しているため、その影響も考慮したい。

砂丘区は黒色土層が明確に分層できず、遺物で遺構の時期を判断していた。砂丘区は丘陵より海岸に向かって時代が新しくなる地形変遷が確認された（砂丘形成については報告書第 III 章 II を参照）。E-18~20、C-18、D-19・20、HG-20 グリッドは縄文時代からグスク時代までの堆積で各時代の遺物や遺構が検出されている。E-17~13 グリッドは貝塚時代後期以降の堆積で柱穴が検出された。各々の炭化物資料の年代測定結果は遺物と対応し、遺構の年代判断にも差異がないと判断される。また砂丘形成の変遷に準じている結果を示すことにも繋がったことは大変貴重な成果といえる。



第 182 図 伊礼原遺跡年代測定資料採取場所

放射性炭素年代 報告書

(株) 地球科学研究所

報告内容の説明

未補正¹⁴C年代 (y BP) : (同位体分別未補正) ¹⁴C年代 “measured radiocarbon age”
試料の ¹⁴C / ¹²C 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前 (BP) かを計算した年代。

¹⁴C年代 (y BP) : (同位体分別補正) ¹⁴C年代 “conventional radiocarbon age”
試料の炭素安定同位体比 (¹³C / ¹²C) を測定して試料の炭素の同位体分別を知り ¹⁴C / ¹²C の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。
試料の δ ¹³C 値を -25 (‰) に基準化することによって得られる年代値である。
(Stuiver, M. and Polach, H.A. (1977) Discussion: Reporting of ¹⁴C data. Radiocarbon, 19 を参照のこと)
暦年代を得る際にはこの年代値をもちいる。

δ ¹³C (permil) : 試料の測定 ¹⁴C / ¹²C 比を補正するための ¹³C / ¹²C 比。
この安定同位体比は、下式のように標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表現する。

$$\delta^{13}\text{C} (\text{‰}) = \frac{(\text{ }^{13}\text{C} / \text{ }^{12}\text{C})[\text{試料}] - (\text{ }^{13}\text{C} / \text{ }^{12}\text{C})[\text{標準}]}{(\text{ }^{13}\text{C} / \text{ }^{12}\text{C})[\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、¹³C / ¹²C [標準] = 0.0112372 である。

暦年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの測定、サンゴのU-Th年代と¹⁴C年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース (“INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration” Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40 (3)) により約19000yBPまでの換算が可能となった。*

*但し、10000yBP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いため、補正前のデータの保管を推奨します。

“The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in Radiocarbon, Vol. 40, No. 3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Talma and Vogel, Radiocarbon, Vol. 35, No. 2, pg 317-322, 1993: A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal BP. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a “best fit” compilation of modeled data and, although an improvement on the accuracy of the radiocarbon date, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future. Because of this, it is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results.”

測定方法などに関するデータ

測定方法 AMS : 加速器質量分析

Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによるβ-線計数法

処理・調製・その他 : 試料の前処理、調製などの情報

前処理 acid-alkali-acid : 酸 - アルカリ - 酸洗浄
acid washes : 酸洗浄
acid etch : 酸によるエッチング
none : 未処理

調製、その他

Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理
Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出
Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出
Extended Counting : Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

分析機関 BETA ANALYTIC INC.
4985 SW 74 Court, Miami, FL, U.S.A 33155

14C年代測定結果

No.2121

試料データ	試料の 産出層序	未補正 ¹⁴ C年代 (yBP) (measured radiocarbon age)	δ 13C (permil)	¹⁴ C年代 (yBP) (Conventional radiocarbon age)	試料
Beta- 試料名 charcoal No.1 測定方法・期間 試料種・前処理など	E-20 人骨下Ⅷ層 No.051028				炭化物
Bate- 213985 試料名 (29136) charcoal No.2 測定方法・期間 AMS-Standard 試料種・前処理など charred material	E-20 炉址4 No.991 021112	2550±50	-27.0 asid/alkali/asid	2520±50	炭化物 0.19g
Bate- 213986 試料名 (29137) charcoal No.3 測定方法・期間 AMS-Standard 試料種・前処理など charred material	E-20 石列下 No.031935	3880±40	-28.6 asid/alkali/asid	3820±40	炭化物 0.19g
Beta- 213987 試料名 (29138) charcoal No.4 測定方法・期間 AMS-Standard 試料種・前処理など charred material	E-20 中央石集積 No.032095	3610±40	-26.4 asid/alkali/asid	3590±40	炭化物 0.12g
Beta- 213988 試料名 (29139) charcoal No.5 測定方法・期間 AMS-Standard 試料種・前処理など charred material	E-20 炉址8 黒色砂	3750±40	-26.9 asid/alkali/asid	3720±40	炭化物 0.05g
Beta- 213989 試料名 (29140) charcoal No.6 測定方法・期間 AMS-Standard 試料種・前処理など charred material	E-20 炉址8一括土 器近く石集積 赤褐色砂	3860±40	-27.7 asid/alkali/asid	3820±40	炭化物 0.12g
Beta- 213990 試料名 (29141) charcoal No.7 測定方法・期間 AMS-Standard 試料種・前処理など charred material	北区 爪形文土器 に伴う No.1	5500±40	-26.1 asid/alkali/asid	5480±40	炭化物
Beta- 213991 試料名 (29142) charcoal No.8 測定方法・期間 AMS-Standard 試料種・前処理など charred material	D-19 炭集中 No.04121717	3260±40	-27.7 asid/alkali/asid	3220±40	炭化物 2.10g
Beta- 213992 試料名 (29143) charcoal No.9 測定方法・期間 AMS-Standard 試料種・前処理など charred material	E-20 貝集石 No.04110535	3940±40	-27.3 asid/alkali/asid	3900±40	炭化物 0.35g
Beta- 213993 試料名 (29144) charcoal No.10 測定方法・期間 AMS-Standard 試料種・前処理など charred material	E-20 貝集石 No.04111131	3890±40	-26.2 asid/alkali/asid	3870±40	炭化物 0.05g
Beta- 213994 試料名 (29145) charcoal No.11 測定方法・期間 AMS-Standard 試料種・前処理など charred material	E-19 北西側石集積 No.1840	3600±40	-26.3 asid/alkali/asid	3580±40	炭化物 0.60g
Beta- 213995 試料名 (29146) charcoal No.12 測定方法・期間 AMS-Standard 試料種・前処理など charred material	E-19 石集積(貝集 中部分) No.2322	3620±40	-26.3 asid/alkali/asid	3600±40	炭化物 0.09g

14C年代測定結果

No.2121

試料データ	試料の 産出層序	未補正 ¹⁴ C年代 (yBP) (measured radiocarbon age)	δ 13C (permil)	¹⁴ C年代 (yBP) (Conventional radiocarbon age)	炭化物 重量
Beta- 213996 試料名 (29147) charcoal No.13 測定方法・期間 AMS-Standard 試料種・前処理など charred material	E-17 柱穴 No.2249	2500±40	-26.6	2470±40	炭化物 0.06g
Beta- 213997 試料名 (29148) charcoal No.14 測定方法・期間 AMS-Standard 試料種・前処理など charred material	E-15 柱穴 No.150018	1950±40	-27.1	1920±40	炭化物 1.00g
Beta- 213998 試料名 (29149) charcoal No.15 測定方法・期間 AMS-Standard 試料種・前処理など charred material	E-14 柱穴 No.140001	330±40	-25.6	320±40	炭化物 0.34g
Beta- 213999 試料名 (29150) charcoal No.16 測定方法・期間 AMS-Standard 試料種・前処理など charred material	C-19・20 一括土器取り 上げ No.050606	3500±40	-26.3	3480±40	炭化物 0.29g
Beta- 214000 試料名 (29151) charcoal No.17 測定方法・期間 AMS-Standard 試料種・前処理など charred material	C-18 石集積 No.04070816	3250±40	-27	3220±40	炭化物 0.22g
Beta- 214001 試料名 (29152) charcoal No.18 測定方法・期間 AMS-Standard 試料種・前処理など charred material	C・D-18 石集積南側炭 集中部 No.05071311	3330±40	-27.2	3290±40	炭化物 0.37g
Beta- 214002 試料名 (29153) charcoal No.19 測定方法・期間 AMS-Standard 試料種・前処理など charred material	D-19北 石集積 No.031190	3190±40	-26.1	3170±40	炭化物 0.20g
Beta- 214003 試料名 (29154) charcoal No.20 測定方法・期間 AMS-Standard 試料種・前処理など charred material	HG-19 石集積 No.05072637	3520±40	-28	3470±40	炭化物 0.45g
Beta- 214004 試料名 (29155) charcoal No.21 測定方法・期間 AMS-Standard 試料種・前処理など charred material	C-18 人骨上部	2390±40	-26	2370±40	炭化物 0.02g
Beta- 214005 試料名 (29156) charcoal No.22 測定方法・期間 AMS-Standard 試料種・前処理など charred material	北区 爪形文土器に 伴う No.2	5460±40	-25.3	5460±40	炭化物
Beta- 214006 試料名 (29157) charcoal No.23 測定方法・期間 AMS-Standard 試料種・前処理など charred material	北区 爪形文土器に 伴う No.3	5620±40	-25.6	5610±40	炭化物 0.10g

年代値はRCYBP(1950 A.D.を0年とする)で表記。モダン リファレンス スタンダードは国際的な慣例としてNBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。

付篇3 キャンプ桑江北側地区出土の貝集積

＜資料の経緯＞ 2013年収蔵庫の移転の際、土嚢袋から貝集積遺構の遺物と思われる白砂付着のゴホウラやイモガイが見つかった。平成13年3月にキャンプ桑江北側地区の返還に伴う試掘調査が平成7～9年にかけて行われた。その後、この地区の発掘調査が行われ、調査の成果が報告されている。その成果から小堀原遺跡（2012）で1基、伊礼原遺跡（2014）3基、伊礼原D遺跡（2013）で1基の貝集積遺構（第106表）が確認されている。本項で報告する遺物もこれらの調査成果から、

キャンプ桑江北側地区の可能性が高いと考えられるため、今回ここで報告する。遺物の観察一覧（第107表）と写真を掲載した。

第106表 貝集積遺構出土一覧

(法量単位:cm, g)

遺跡名	報告年	遺構名	標高	大きさ	深さ	断面形状	ゴホウラ	アソソデガイ	クロフモドキ	アンボンクロザメ	ダイミョウイモ	イボカバイモ	オトメイモ	マガキガイ	合計
キャンプ桑江北側	2015						1		5	1	1				8
小堀原遺跡	2012	87KSS	3.52	47	6		6								6
伊礼原遺跡	2014	SS01	3.8	35×37	10	鍋底	6		2	7		2	2	1	20
		SS02	3.8	40×45	20	5段			5	50					55
		SS03	3.7	21×11	5				2	3					5
伊礼原D遺跡	2013	4317SS	2.9	42.57	20	鍋底			20	15				35	
合計							13	0	34	76	1	2	2	1	129

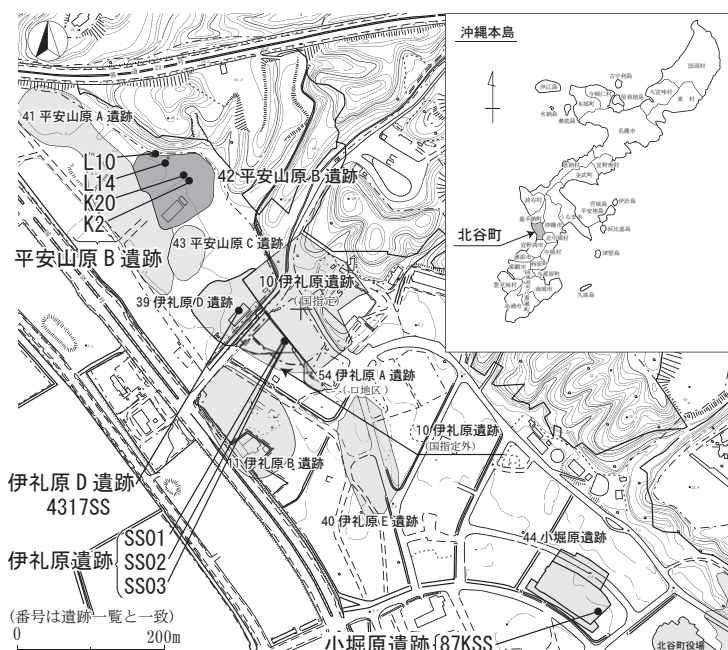
＜資料＞ これによると1はゴホウラで、背面に2.0×1.5cmの方形の粗孔、また背面のへびガイを丁寧に除去し、上袖部を殻頂から直線状に粗割するものである。腹面にはへびガイの跡の渦巻き痕が殻頂から袖部にかけて確認できる。背面はへびガイを除去したため、複数の面を呈する。

2はダイミョウイモである。これまで貝集積遺構での検出は無く、本資料が初めてである。自然貝では伊礼原遺跡（2014）でサンゴ礫が付着したものを報告した。

5はアンボンクロザメ、3・4・6～8はクロフモドキで、3は外唇上部が欠損している。本資料とキャンプ桑江北側地区の遺跡の貝集積遺構を比較すると、表に示した様に小堀原遺跡（2012）87KSSはゴホウラのみ、伊礼原遺跡（2014）SS01ではゴホウラとイモガイ、SS02・SS03ではイモガイのみ、伊礼原D遺跡（2013）4317SSではイモガイのみで、貝種の組み合わせからすると伊礼原遺跡（2014）に類似する。

各遺構の共伴遺物あるは主体土器を検討すると、小堀原遺跡（2012）、伊礼原遺跡（2014）では阿波連浦下層式土器・浜屋原式土器を主体とし、伊礼原D遺跡（2013）は大当原式土器を主体とする。ゴホウラの背面穿孔は平安山原B遺跡（今回報告）のHB④イ地区で出土している。

本資料は貝集積遺構の古い時期（島袋1989）に位置づけられるゴホウラの背面穿孔が出土したこと。また、九州の弥生時代中期前半の大友遺跡（1981）で出土するイモガイ縦型貝輪の素材（1981）であるダイミョウイモが素材供給地とされる沖縄で初めて確認されたことなど本資料は意義がある。



第183図 キャンプ桑江北側地区の貝集積遺構

<註文献>

島袋春美 1989 「南島からみた貝の交易－弥生時代を中心に」『考古学ジャーナル』 no311

呼子町教育委員会 1981 『大友遺跡』呼子町文化財調査報告書第1集

第107表 ゴホウラ・イモガイ観察一覧

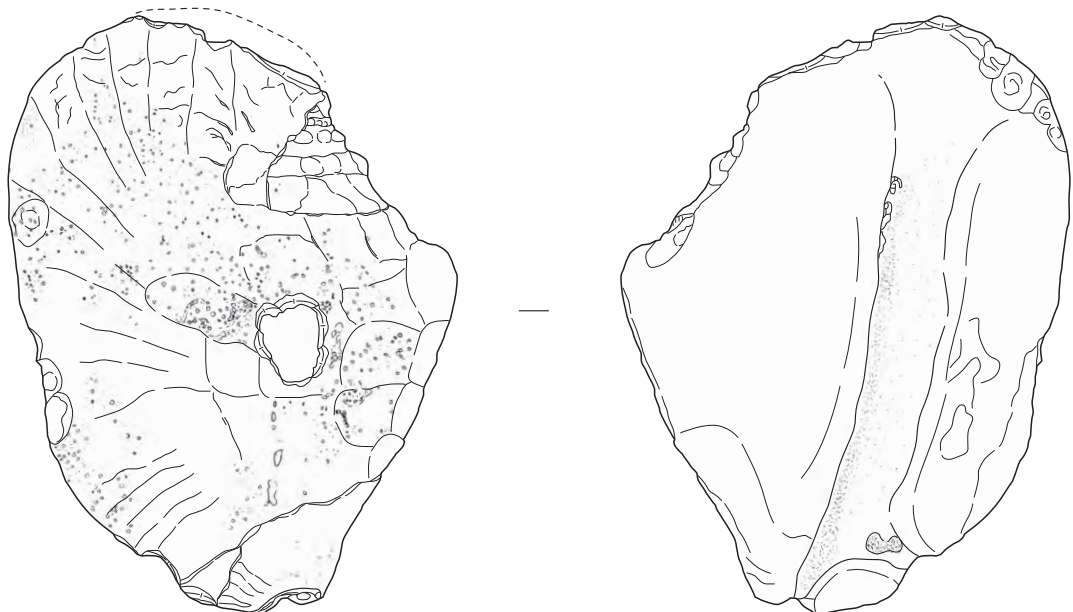
(法量単位:cm、g)

図版	図版番号	貝種	完破	殻高	殻径 a	殻径 b	重さ	アバタ	色残	摩耗	へビ	風化	観察事項
図版 149	1	ゴホウラ	完	13.3	11.1	—	588.0	◎	×	△	○	○	へビ除去、裾上部剥離、背面孔(2.0×1.5cm、外→内)
	2	ダイモウイモ	完	10.7	7.2	6.7	283.0	△	△	×	×	×	外唇:加工なし
	3	クロフモドキ	完	12.5	7.3	6.8	278.0	×	△	×	×	×	外唇:上破損
	4	クロフモドキ	完	12.2	7.1	6.7	272.0	△	△	×	×	×	外唇:加工なし
	5	アンボンクロザメ	完	10.8	6.4	6.0	233.5	△	△	×	×	×	外唇:上破損
	6	クロフモドキ	完	10.0	5.8	5.3	157.3	×	○	△	×	×	外唇:剥離5回
	7	クロフモドキ	完	10.4	6.8	5.3	164.0	△	○	×	×	×	外唇:上剥離2回
	8	クロフモドキ	完	9.7	5.7	5.3	154.9	×	○	×	×	×	外唇:自然剥離、数回

(凡例)◎:多・強、○:普通、△:少・弱、×:なし、—:計測不可



図版 149 ゴホウラ・イモガイ



第 184 図 ゴホウラ

報告書抄録

ふりがな	はんざんばる いせき							
書名	平安山原B遺跡							
副書名	桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成20・平成21・平成23年度）							
巻次	-							
シリーズ名	北谷町教育委員会文化財調査報告書							
シリーズ番号	第37集							
編著者名	山城安生・東門研治・松原哲志・島袋春美・上地千賀子・呉屋広江・比嘉優子 北條真子・黒住耐二・樋泉岳二・土肥直美・(株)パリオ・サーヴェイ							
編集機関	沖縄県北谷町教育委員会							
所在地	〒904-0192 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL 098-936-3159							
発行年月日	2015年（平成27年）3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ' / "	° / ' / "		m ²	
はんざんばる いせき 平安山原B遺跡	沖縄県 北谷町 字伊平 小字 平安山原	473260		26° 18' 58"	127° 45' 55"	20080901 ～ 20090220	2,460	区画整理事業に伴う発掘調査
20090828 ～ 20091218						730		
20110902 ～ 20111216						1,200		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
はんざんばる いせき 平安山原B遺跡		貝塚時代後期	燃焼遺構(1042SX-C) 土器集中・貝集中部 土坑(366SK)	土器・石器・貝製品 骨製品・土製品・オキナ ワジイ等		・土器付着炭化物 1890±30 2220±20・2350±30BP ・炭化材 (ヤマグワ) 2390±30BP (マツ属) 2290±20BP ・樹木片(アカテツ)2130±30BP		
		グスク時代・近世	建物址 (235SB・310SB) 溝状遺構 ピット・土坑	土器・カムイヤキ・白磁 青磁・染付・褐釉陶器 瓦質土器・本土産陶磁器 羽口・銭貨・簪・石製品 砥石・煙管		・炭化材(広葉樹) 1600±20BP		
		近・現代	石組(276SL・379SL) 溝・土坑 燃焼施設(1018SX) 井戸・窯跡・ピット	沖縄産施釉・無釉陶器 陶質土器・本土産陶磁器 円盤状製品・鉄製品・瓦 レンガ				
要約	<p>平安山原B遺跡は平成20・21・23年度の3回の調査が行われ、層序や遺構や出土遺物から貝塚時代後期、グスク時代・近世、近・現代のおおむね3時期の生活跡が確認された。貝塚時代後期では海岸段丘の袂に形成された砂丘で燃焼遺構の中からオキナワジイの果皮が検出され、また主体土器である阿波連浦下層式土器や浜屋原式土器の時期に南九州産の弥生土器や柱状扁平石斧、ゴホウラの諸岡型貝輪など九州との交易を示す資料が多く得られた。砂層も二枚が確認され、その間の泥炭層の年代が2130±3BPの結果が得られた。砂層の上層でも1600±20BPの年代が得られ、それ以後に自然流路が埋まり、グスク土器やカムイヤキ、玉縁白磁碗などの出土によりグスク時代の初期から住み始め、居住域を広げた。小堀原遺跡の自然流路上に居住していたことを証左するものである。近世はさらに居住地域を広げ、建物址なども検出され、中国の染付のほか、肥前磁器や薩摩焼など生活遺物も広がりを見せた。近・現代の時期は戦前の平安山集落と重なり、屋敷の石組や井戸、サーターヤーなどが検出され、沖縄産陶器や本土産磁器が大量に出土、戦前の生活の様子が具体的に窺える資料である。本遺跡の調査結果、海岸段丘の袂に形成された海岸低地は先史～現代まで地形が変化し、人々はそれに合わせて居住空間を広げながら継続的に居住していたことが明らかにされた。</p>							

〈表紙〉 平安山原B遺跡出土の弥生土器

北谷町文化財調査報告書 第37集

は ん ざん ぼる
平安山原B遺跡

— 桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成20・21・23年度） —

〈付篇1〉 伊礼原D遺跡出土のタイ産鉄絵合子及び木製漆器

〈付篇2〉 伊礼原遺跡の年代測定

〈付篇3〉 キャンプ桑江北側地区試掘調査出土の貝集積

編集： 北谷町教育委員会

発行年： 2015（平成27）年3月

〒904-0192 沖縄県北谷町字桑江226番地

TEL 098-936-3159

印刷： [合資] 精印堂印刷

〒902-0072 沖縄県那覇市字真399-3

TEL 098-832-1311



北 谷 町